

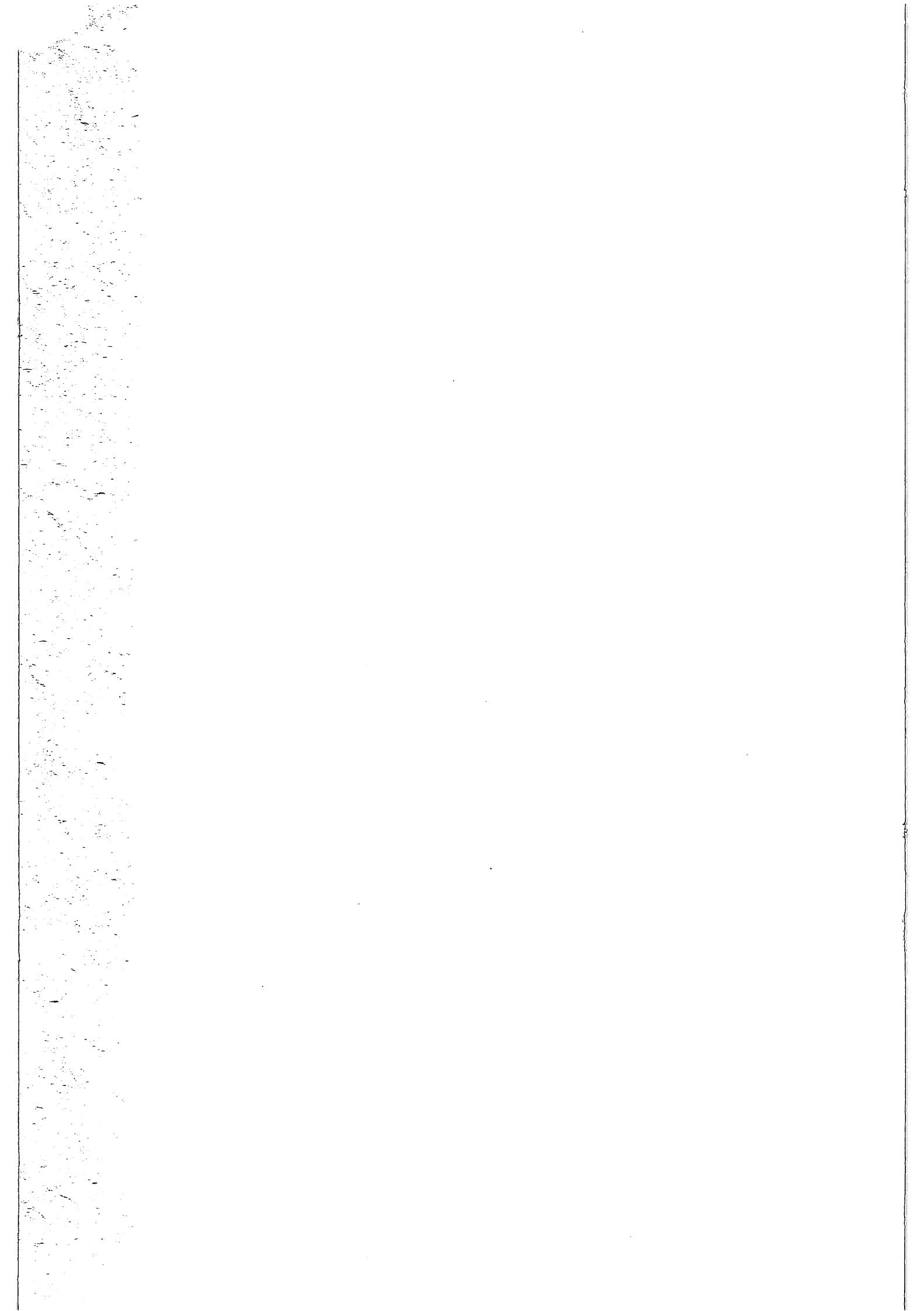
木古内町

新道 4 遺跡

—津軽海峡線(北海道方)建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書(5)—

昭和60・61年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



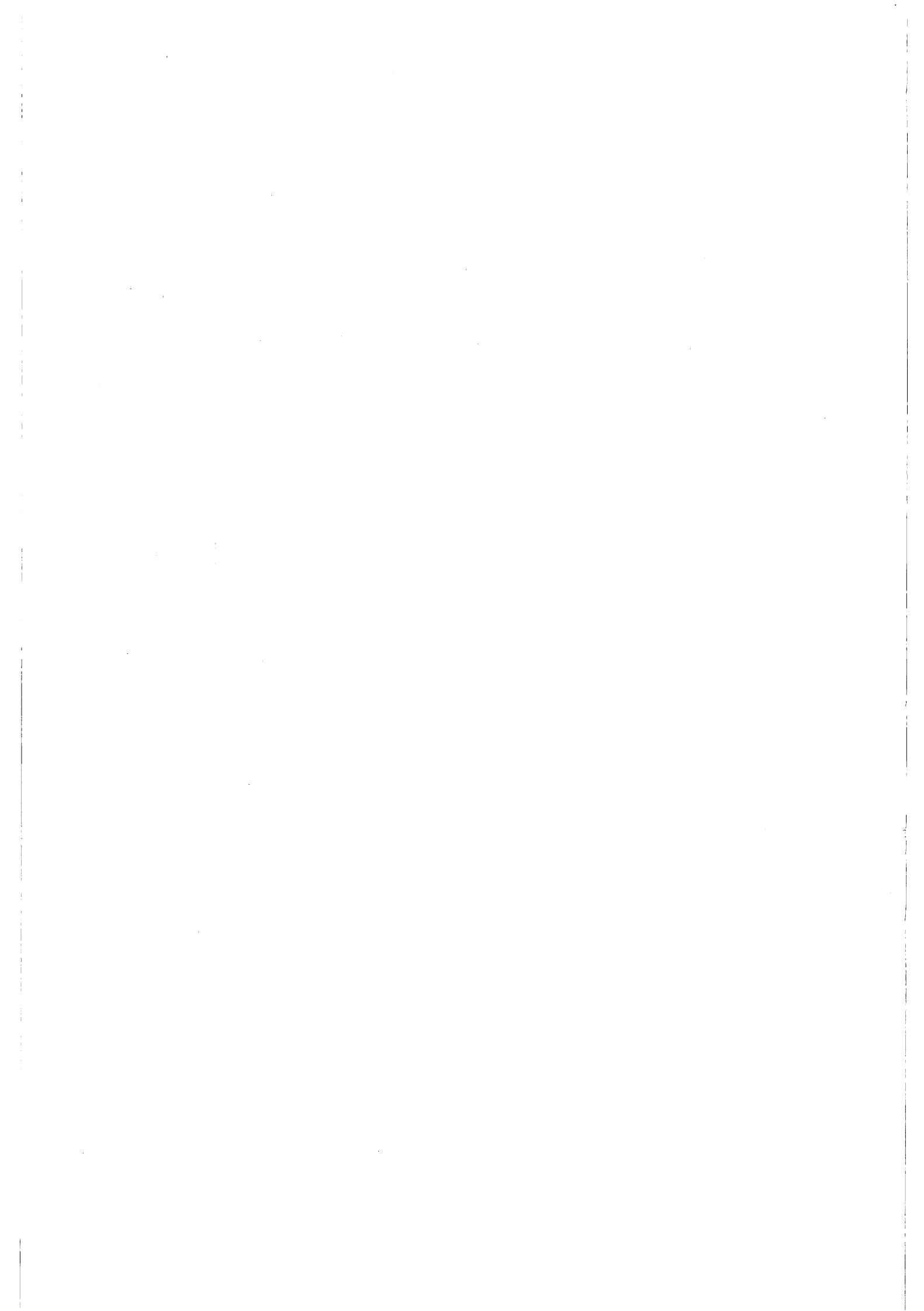
木古内町

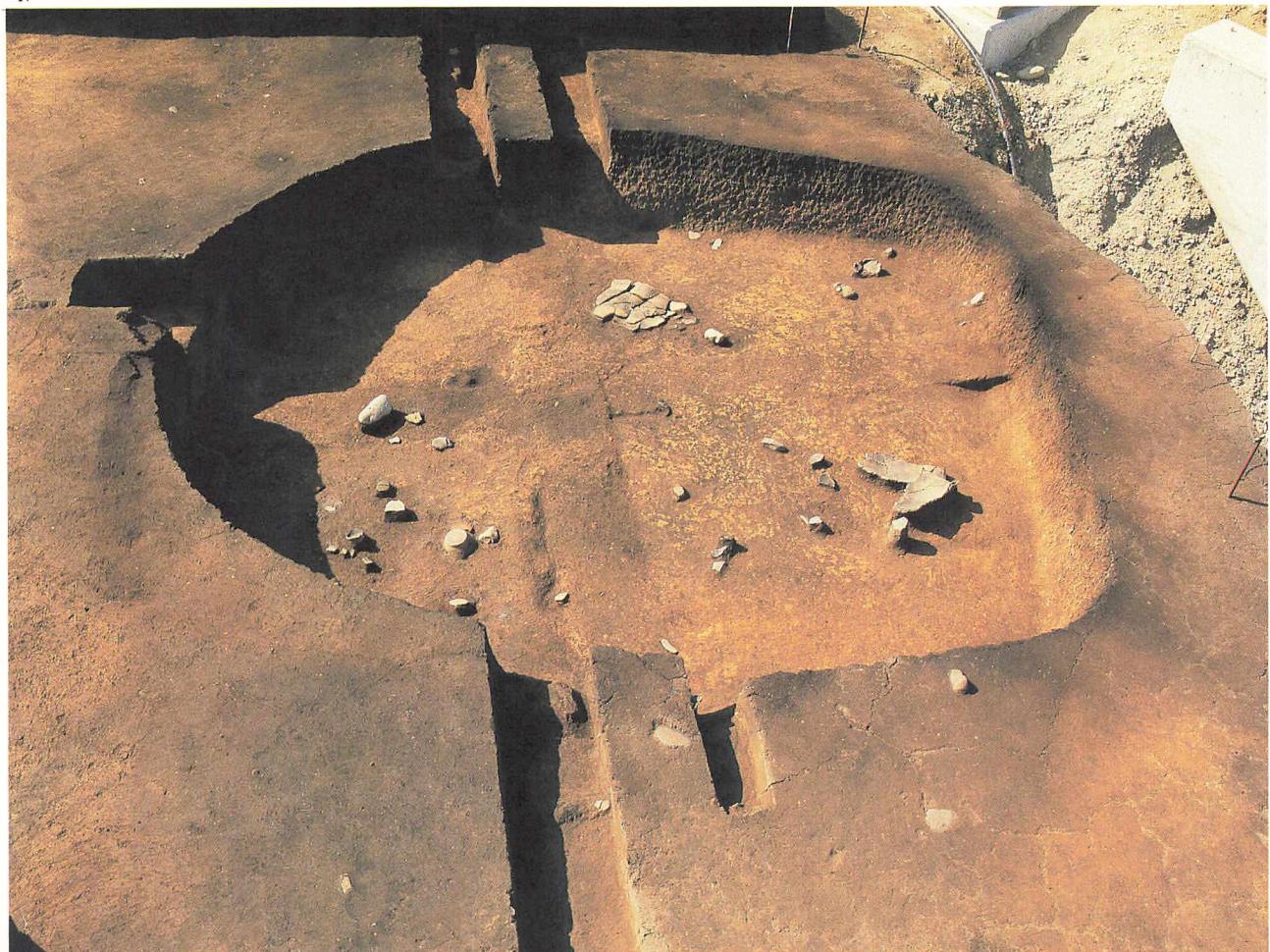
新道 4 遺跡

—津軽海峡線(北海道方)建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書(5)—

昭和60・61年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター





G H - 6 遺物出土状態



G H - 6 出土の土器



G P - 31 覆土 7 層の遺物出土状態



G P-31 覆土 7層出土の土器



0 5cm

胎土分析試料 (左上No.1, 右下No.30)



D H - 13調査状況

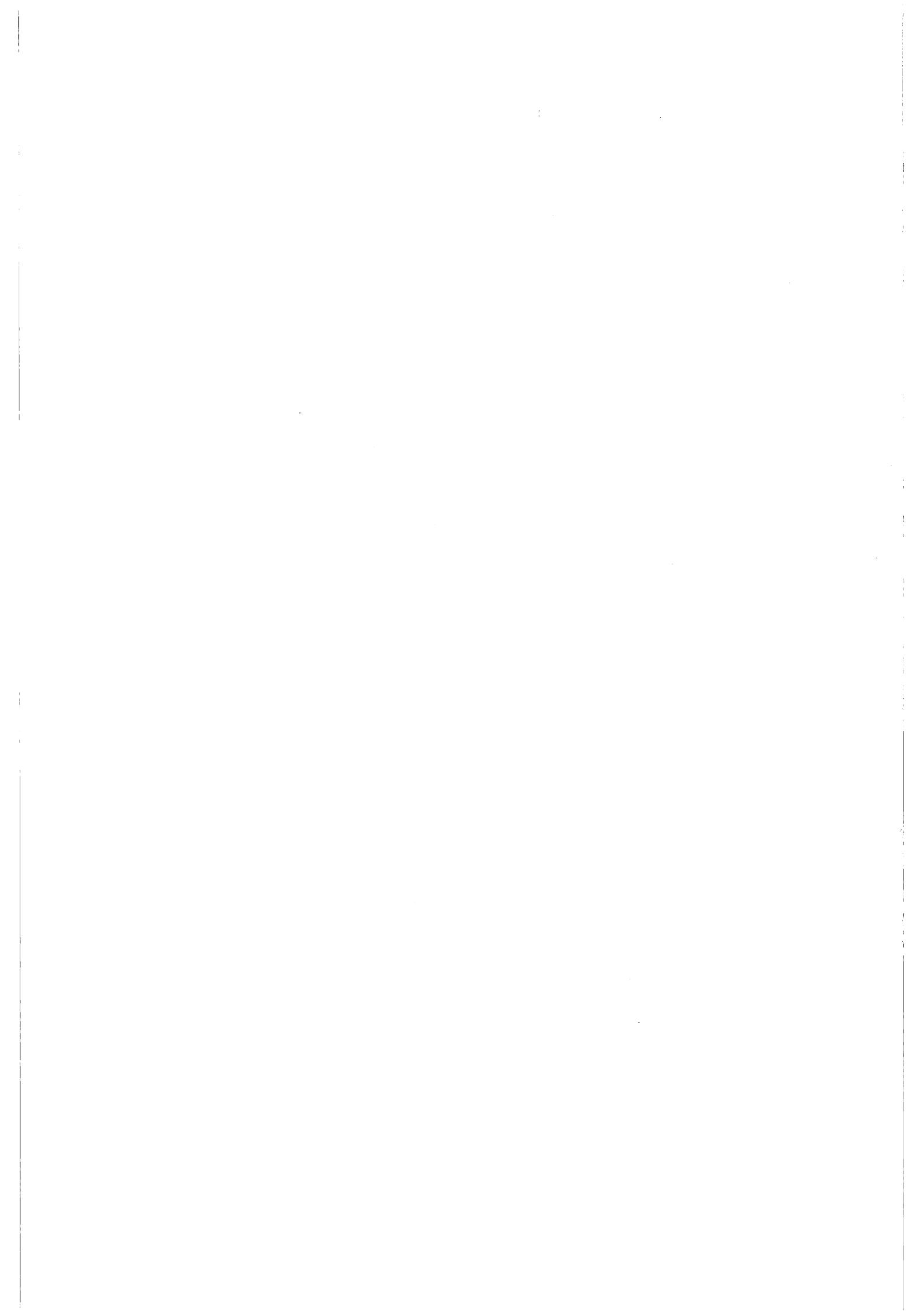


D H - 13出土の土器

例　　言

1. 本書は、日本鉄道建設公団が行う津軽海峡線（北海道方）建設工事に伴い、（財）北海道埋蔵文化財センターが昭和60年度と、61年度に実施した発掘調査の内、新道4遺跡のD、E、G地区に関する発掘調査報告書である。
2. 調査は、両年度とも調査第四班（昭和62年度から調査第四課に変更）が担当した。
3. 本書の作成にあたっては、主に土器を大沼忠春、石器等を千葉英一、G地区の資料を遠藤香澄、D地区の資料を立川トマス、E地区の資料を熊谷仁志、火山灰、土壤資料を花岡正光がそれぞれ分担して整理し、執筆した。
4. 黒曜石の産地分析は、京都大学藁科哲男・東村武信氏に依頼した。
5. 黒曜石石器の水和層年代の測定は帯広畜産大学近堂祐弘氏に依頼した。
6. 放射性炭素による年代測定は京都産業大学山田治氏に依頼した。
7. 動物遺存体の鑑定は早稲田大学金子浩昌氏に依頼した。
8. 出土種子の鑑定は北海道開拓記念館矢野牧夫氏に依頼した。
9. 出土木片の樹種鑑定は北海道開拓記念館三野紀雄氏に依頼した。
10. 出土資料は一括して木古内町教育委員会に保管する。
11. 調査にあたっては、文化庁、奈良国立文化財研究所及び北海道教育委員会の指導をいただいた。
また、次の機関、人々の協力を賜った。

木古内町教育委員会、木古内町、北海道開拓記念館野村崇・平川善祥・山田悟郎・小林幸雄、市立函館博物館千代筆・長谷部一弘、松前町教育委員会久保泰、上ノ国町教育委員会松崎水穂、七飯町教育委員会石本省三、南茅部町教育委員会小笠原忠久、八雲町教育委員会三浦孝一、知内町教育委員会高橋豊彦、森町教育委員会藤田登、乙部町教育委員会森宏樹・蛯子千代志、札幌市教育委員会加藤邦雄・上野秀一・羽賀憲二、帯広百年記念館佐藤訓敏、標茶町教育委員会豊原熙司、羅臼町教育委員会涌坂周一、標津町教育委員会相田光明、青森県立郷土館福田友之、青森県埋蔵文化財センター三浦圭介・三宅徹也・成田滋彦・坂本洋一・工藤大・山岸英夫、弘前市教育委員会今井二三夫、八戸市教育委員会工藤竹久、藤田亮一、八戸市立博物館高島芳広、岩手県立博物館熊谷常正、岩手県埋蔵文化財センター工藤利幸、大迫町教育委員会中村良幸、滝沢村教育委員会桐生正一、鹿角市教育委員会秋元信夫、福島県文化センター本間宏、弘前大学村越潔、国学院大学小林達雄、千葉大学加藤晋平、明治大学安蒜政雄、東海大学織笠昭、岡山大学稻田孝司、同志社大学松藤和人、国立歴史民俗博物館春成秀爾、宮城学院大学工藤雅樹、北海道大学吉崎昌一・林謙作・横山英介、札幌大学木村英明、札幌学院大学鶴丸俊明、札幌医科大学大島直行（順不同、敬称略）



目 次

- 口絵 i D地区出土の旧石器（右端の石刃の長さ 約 28 cm）
ii 旧石器 母岩別資料 No. 50
iii 旧石器 母岩別資料 No. 33、18、6、21、1
iv GH-6 遺物出土状態（上）、GH-6 出土の土器（下左）
GP-31 覆土 7 層の遺物出土状況（下右）
v GP-31 覆土 7 層出土の土器（上）、胎土分析試料（左上 No. 1、右下 No. 30）（下）
vi DH-13 調査状況（上）、DH-13 出土の土器（下）

例 言

第1章 調査の概要	1
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査の経緯	2
4 遺跡の位置と環境	2
5 地層	2
6 発掘区の設定	4
7 調査の概要	4
第2章 旧石器時代の遺跡	7
I 調査の概要	7
1 発見の経緯	7
2 遺物の出土層位と出土状況	7
3 遺物	9
4 測定年代と黒曜石原産地	9
II 出土遺物	12
1 遺物の内容	12
2 集中域Aの石器群	12
3 集中域Bの石器群	112
III 更新世の火山灰（ローム）について	115
1 ロームの産状と岩相	115
2 ロームの鉱物組成と粒度組成	116
3 旧石器出土層準	118
4 ローム層の年代	119
5 まとめ	119
IV 新道4遺跡出土の黒曜石遺物の石材産地分析	121
V 新道4遺跡出土の黒曜石石器の水和層年代	125
VI まとめ	127

第3章 繩文時代の遺跡	173
I 遺跡の概要	173
II 遺構・遺物の分類	173
1 遺構	173
2 土器	174
3 石器・石製品	175
4 土製品	176
5 その他	176
III G地区の調査	177
1 遺跡の概要	177
2 遺構	179
3 包含層出土の遺物	273
4 まとめ	335
IV D地区の調査	399
1 遺跡の概要	399
2 遺構	401
3 包含層出土の遺物	507
4 まとめ	540
V E地区の調査	579
1 遺跡の概要	579
2 遺構	579
3 包含層出土の遺物	588
4 まとめ	607
第4章 総括	629
I 新道4遺跡の特色と今後の課題	629
II 新道4遺跡における大湯系土器の編年について	635
III 新道4遺跡出土の土器にみられる文様の二・三について	643
IV 新道4遺跡出土の土器の胎土分析	653
V 新道4遺跡CH-2住居址から出土した木材の樹種同定	661
VI 新道4遺跡C地区沢底部出土の木製品・木材の保存処理について	665
付録	

第3章 繩文時代の遺跡

I 遺跡の概要

道南地方の多数の遺跡の中で、繩文時代の遺跡は最も多く、そこから出土する遺物の量も多い。しかし、その遺跡の形成過程や、そこでの遺物のありかたについて、未知の部分もまた多い。

新道4遺跡は、繩文時代のみの遺跡と思われていたが、旧石器時代の遺物包含層が発見されたことから、旧石器時代の遺跡と区分して繩文時代の遺跡をまとめて掲載することにした。

本書で報告する繩文時代の遺跡は、G・D・Eの3地区のものである。先に報告した各地区のものを合わせると、道南地方の典型的な繩文時代の遺跡の様相を見ることができる。遺構には住居跡、フラスコ状ピット、Tピット、ピット、小ピット、焼土、および盛土があり、他に土器捨場としたものなどがある。出土遺物には、土器、石器、土製品、石製品、骨製品、木製品、纖維製品などの人工遺物の他に、動、植物質の自然遺物が認められている。時期は早期から晩期に及んでいて、G・D・Eの各地区でも、遺構・遺物の時期や量、分布状態が微妙に異っていて、特色が認められる。

G地区には、昭和60年度に調査したB地区に関連する盛土や、C地区に関連する晩期の遺物が認められ、D地区のC地区寄りの部分は、C地区と一連の遺跡を形成していたものとみなされる。D地区の中央から、E地区に見出された住居跡がその後背地にのびている状態をみると、D・E地区の後背地には、中期中葉頃の一連の集落跡が残されているとみなされ、この時期の集落が、台地の縁辺から、少し内側に入ったあたりにまで広がっていたことが考えられる。G地区の遺構にもそれらと一と続きになるとみなされるものがある。

II 遺構・遺物の分類

1. 遺構

掲載した遺構には、住居跡、ピット、フラスコ状ピット、小ピット、焼土という名称を与えている。これらの区分は、おおむね以下の通りである。

住居跡：人がその中で生活しうる広さを持つ規模の竪穴で、人が生活を営んだ痕跡を見出せるものを指す。竪穴内部には、炉があり、周囲に柱穴の配置されているものが一般的である。

ピット：住居以外の竪穴で、人がその内部で生活を営んだ痕跡を持たないものを指す。墓やそれに類似するものは、これに入る。また、形態の特殊なフラスコ状ピット、Tピットは別記するものとする。小形のものを小ピットと称する。

フラスコ状ピット：ピットの内に入るものであるが、平面形では、擴口が擴底より小さく、形態的には袋状をなし、断面では台形状のものを指す。

焼土：住居跡内床面で確認されたもの以外で、多くは焚き火跡などの地床炉がこれに入る。

これらの構造の記述にさいしては、記号によって表示している。住居跡：H、ピット、フラスコ状ピット：P、小ピット：SP、焼土：F。なお住居跡に伴わないとみなされる石圍炉をFSとする。さらに、これに各調査区の頭文字G、D、Eを付している。例えばG地区で確認された1号ピットはGP-

1となる。また、本書中の遺構図・分布図等はすべて北を上側にしているが、Mラインに直交する数字を付したラインに対して、N-39°Eが磁北となる。遺構の規模は確認面における「壇口の長径×短径／壇底の長径×短径／深さ」を単位mで示した。

2. 土 器

本遺跡で出土した資料には、繩文早期から晩期までのものがある。便宜的にI群を早期、II群を前期、III群を中期、IV群を後期、V群を晩期相当のものにあて、それぞれに、二、三の類別を設けて記載する。道南地方の繩文時代の編年については、近年充実しつつあるが、その型式所属や、編年的位置について、理解の及ばない資料も認められる。既存の型式群を基礎としてそれを二、三合わせた範囲で、各類を設定し、極力資料の位置づけを行って記載を進めている^(註1)。

I群土器

本群に属する資料には前半期の貝殻文土器と、後半期の繩文の施された土器とがあり、前者をA類、後者をB類とする。本書で報告する資料はB類に属するもので、G、D、E地区から出土している。それらには、中茶路式と東釧路IV式に相当するものがある。

II群土器

本群に属する資料には、前半期の繩文の施された尖底土器の主体となるグループと、円筒土器下層式に相当する後半の時期のものとに大きく2分される。前者をA類、後者をB類とする。本書で報告する資料はB類に属するもので、さらに円筒下層c式相当のサイベ沢I式などをB₁類、円筒下層d式相当のサイベ沢II、III式など^(註2)をB₂類として区分する。

III群土器

本群に属する資料には円筒上層a、b式、サイベ沢VII式、見晴町式に相当する前半期と、榎林式の後半のもの、大安在B式、ノダップII式、煉瓦台式に相当する後半期のものとがある。前者をA類、後者をB類とし、A類については円筒上層a式に相当するものをA₁、同b式に相当するものをA₂、それ以降のサイベ沢VIIa、VIIb式及び見晴町式に相当するものをA₃として示すこととする^(註3)。またB類については、榎林式に相当するものをB₁類、大安在B式からノダップII式に相当するものをB₂類、煉瓦台式に相当するものをB₃類として区分する。これらに伴うとみなされる大木系の土器もこれに含めることとする。

IV群土器

本群に属する資料には天祐寺式、涌元式、トリサキ式、大津式、白坂3式に相当する前葉の土器群、ウサクマイC式、手稻式、鰐潤式に相当する中葉のもの、堂林式、三ツ谷式、湯の里3式に相当する後葉のものの3者がある。本書では前葉のものをA類、中葉のものをB類、後葉のものをC類として区分する。さらにA類については資料が多く、天祐寺式、涌元式に相当するものをA₁類、トリサキ式、大津式、白坂3式に相当するものをA₂類として区分する。

V群土器

本群に属する資料は、大洞各式に相当するものがあり、本書ではB、B-C式頃に相当するものをA類、C₁、C₂式に相当するものをB類、A、A'式に相当するものをC類として区分する^(註4)。

以上の大まかな区分によってなすことをするけれども、各地区の出土状態によっては、さらに細部の検討が行なわれている。

図示にあたっては、実測図は1:4、拓本は1:3を原則としているが、変則的なものもあり、それぞれにスケールを付している。

(大沼忠春)

註

(1) 北海道埋蔵文化財センター (1987) 「木古内町建川2・新道4遺跡」『北海道埋蔵文化財センター調査報告書』33
 (2) 円筒下層c式をめぐる認識について、従来ともすると、下層c式は存在しないのではないかと述べられたり、サイベ沢II式を下層c式にあてる考え方も行なわれてきた。サイベ沢I式については下層b式に対応するものとする見解、さらには下層a式以前とみる見方もなされていた(大沼 1986)。これが、本遺跡の調査などによって、サイベ沢I式が下層c式に相当するものであり、下層d式の前段階のものであることが明らかとなった。下層c式の段階からd式への移行過程については、更めて、サイベ沢II式のありかたや、青森県の女館貝塚(江坂 1955)の資料などを含めて検討する必要があるとみられる。また道内の森川式との関係などは今後の検討課題となるであろう。

江坂輝弥 1955 「青森県女館貝塚発掘調査報告」『石器時代』2号

大沼忠春 1986 「道南の繩文前期土器群の編年について(II)」『北海道考古学』22

(3) 従来、サイベ沢VIIa、VIIb、見晴町の各式の理解について、これとは別に森越式(峯山・大島 1975)としての認識が行なわれてきて、その内に見晴町式と榎林式との共存関係をどうとらえるかという問題を含んでいた。本遺跡の調査など、近年の資料の増加により、サイベ沢VIIa式、VIIb式、見晴町式はそれぞれ再検討される状況となっているが、ほぼ主体的な方を示していく、前者から後者への編年序列は変わらないとみられる。さらにその見晴町式の後、榎林式がやはり主体的な方を示して存在することが明らかとなってきた。榎林式は2段階の変遷をとげるようである。III群A₃類としたサイベ沢VIIa式、VIIb式、見晴町式は、ともに大木8a式の範囲内に納まるものとみなされる。榎林式は大木8b式から9式の特色をもつものであり、道南地方を広く覆うようであり、近年では恵庭市(恵庭市教委 1987)でも破片が出土している。この榎林式に小形化した見晴町式的な土器の伴うことがある。これは、本来の見晴町式と同一視できるものではなく、少し遅れるものとみなされる。

恵庭市教育委員会(1987)『カリンバ2遺跡』

峯山 嶽・大島直行(1975)『森越』(知内町教育委員会)

(4) V群の区分については、調査資料の検討の結果、A類に相当するとみなされた資料はいずれも別の時期のものと判断されるに至ったので、実質的にA類に相当するものは存在しない。また道南地方の大洞各式に相当する本遺跡の資料には、札苅II群の古い段階に属するもの、高丘町遺跡出土の資料に類似するもの(これには沈線の細いものと太いものの2種があり、仮りに細いものを古く考えてみた)、聖山I、II式に相当するもの、湯の里6遺跡出土資料や尾白内I群に相当するものなど、ほぼ大洞C₂~A式相当のものが認められる。

大沼忠春(1986)「北海道における繩文晩期から続繩文文化への変遷」『日本考古学協会昭和61年度大会 研究発表要旨』

大沼忠春(1986)「北海道地方の資料」『日本考古学協会 八戸大会シンポジウム資料 繩文晩期から弥生時代への移行期の諸問題』

田原良信・前田正憲(1982)『高丘町遺跡発掘調査報告書』

3. 石器・石製品

石器は器種別の大分類にとどめ、一器種における記号による細分はおこなっていない。今年度報告分について、剥片石器には石鏃、ドリル、ポイントもしくは両面加工のナイフ、つまみ付ナイフ、スクレイパー類、楔形石器、異形石器(三日月形石器)などがあり、礫石器には磨製石斧、たたき石、すり石、くぼみ石、石鋸、石錘、砥石、石皿、台石などがある。このほかに石核(コア)、剥片・石屑(フレイク・チップ)、擦切り痕ある礫、自然礫などがある。表のUフレイクはutilized flake、Rフレイクはretouched flakeのことであり、礫[△]としたものは礫石器の破損品・碎片の可能性のあるもの、原石・荒割礫(頁岩・めのう・チャート・緑色泥岩など剥片石器や石斧などの石材として用いられるもの)、軽石および明瞭な使用痕は認められないが有意と考えられるものなどである。

石製品には玉類、垂・装飾品、石刀、石棒などがある。

なお、表における石材の略号は次のとおりである。

Aga. (Agate)	めのう	And. (Andesite)	安山岩	Che. (Chert)	チャート
Gn. (Gneiss)	片麻岩	Gr. Mud. (Green Mudstone)	緑色泥岩	Jad. (Jade)	ひすい
Mud. (Mudstone)	泥岩	Ob. (Obsidian)	黒曜石	Pum. (Pumice)	軽石
Qz. (Quartz)	石英	Sa. (Sandstone)	砂岩	Schi. (Schist)	片岩
Ser. (Serpentinite)	蛇紋岩	Sh. (Shale)	頁岩	Sl. (Slate)	粘板岩
Tu. (Tuff)	凝灰岩				

4. 土製品

土製品には、土偶、土器片を利用した有孔・無孔の円盤、垂飾品、三角形土製品（土版）、鐸形土製品などがある。

5. その他

上記の他に、炭化材、アスファルト塊、動物および植物の遺存体が出土している。（千葉英一）

III 新道4遺跡 G地区の調査

1. 遺跡の概要

新道4遺跡G地区は昭和59年度調査したC地区の東南に隣接し、標高17~18mの段丘の平坦部に位置する。昭和60年度、61年度に調査を行い、60年度調査区については概報で“C地区アンダーパス部分”として報告したが、61年度調査区と一括してG地区として報告することとする。

調査にあたって昭和60年度B地区で発見された繩文時代後期前葉の盛土の続きを確認するため調査区南西部U~aライン間に3箇所トレンチを掘った。その結果盛土がUラインからXラインの間に広がっており、B地区から弧状に南東に広がる盛土の末端部であることがわかった(図III-132・133)。盛土の堆積層は薄く、耕作による攪乱もあり、層位的に明瞭な遺物の出土は確認できなかったがIV群A類土器が多量に出土した。G地区のIV群A類土器総点数の約3分の1を占める。

盛土の末端部

遺構は竪穴住居跡が9軒、繩文時代前期のフラスコ状ピット1個、土壙46個、晩期の埋設土器3個、小ピット80個、焼土跡19箇所が発見された。住居跡は繩文時代中期前葉III群A類期のもの3軒、中期後葉III群B類期のもの3軒、後期前葉IV群A類期のもの(GH-9)1軒、後期末葉IV群C類期のもの(GH-4)1軒、時期は確定できないが繩文時代後期前葉の時期と推定されるもの(GH-8)1軒が検出された。GH-4は火災住居跡であり、昭和59年度C地区で発見された同時期の2軒の火災住居跡との関連がうかがわれる。調査区南西部の盛土の外側から発見されたGH-9は、IV群A類期の出入口施設をもつ住居跡としては道内初めての検出例である。土壙には平面形が円形に近いもので覆土の堆積状態が人為的埋め戻しの可能性があるものの、平面形が円形あるいは楕円形で壁が比較的まっすぐに立ち上がる大型柱穴状のもの、浅い皿状のものなどがある。サメの下顎歯の入った土器が埋納されていた土壙(GP-9)は墓の可能性がある。小ピットは半数近くが調査区北東部に集中していた。墓

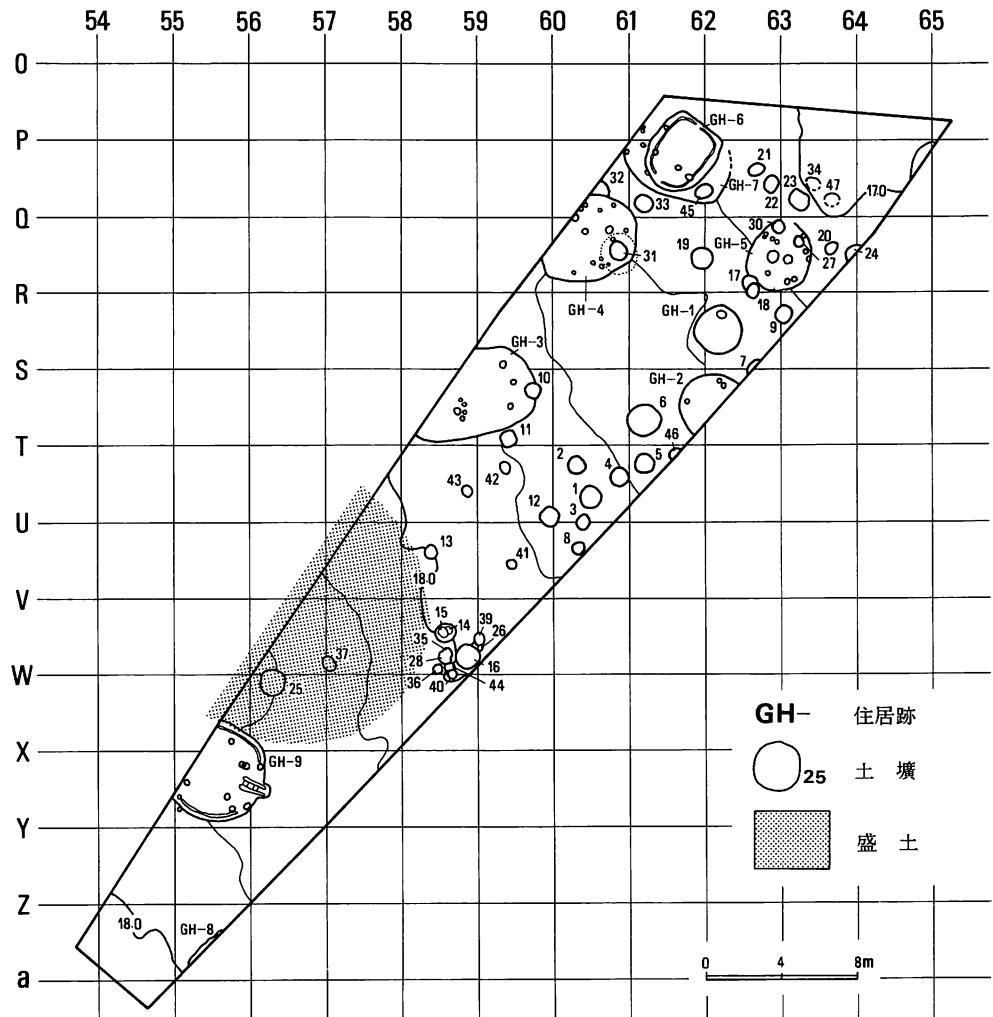
検出面の標高、出土する土器から判断すると繩文時代晩期のものが多い。焼土跡は調査区北東部のSラインより北側と調査区南東部の盛土末端部から散在的に発見された。前者は中期から晩期のもの、後者は後期前葉(IV群A類土器の時期)と思われる。晩期の埋設土器は同時期の小ピットや焼土跡が多数検出された地区から発見されている。

遺物は繩文時代早期から晩期の土器、石器、土・石製品、自然遺物をはじめ礫、フレイク、チップなどを含めて約17万7,000点出土している。このうち土器は約9万2,000点を占めその約40%近くがIV群A類土器である。次いでV群、II群B類、III群A・B類土器が多い。I群、IV群C類土器は少ない。土器の分布は時期により比較的まとまりをもっている。IV群A類土器は調査区南西部の盛土地区周辺(集中区II)と北東部のQ~S-61・62区周辺(集中区I)からまとまって出土しており、後者ではIV群A類の古い段階に相当する盛土1類土器が大部分を占める。V群土器は第II層赤褐色火山灰直下から出土し、分布は調査区北東部に集中している。小ピットが多数発見された地区をほぼ一致する。II群B類土器は盛土地区とRラインからUライン間の2箇所に比較的まとまっている。III群A類・B類、IV群C類土器の分布はそれぞれの住居跡の周辺地区からの出土が多い。

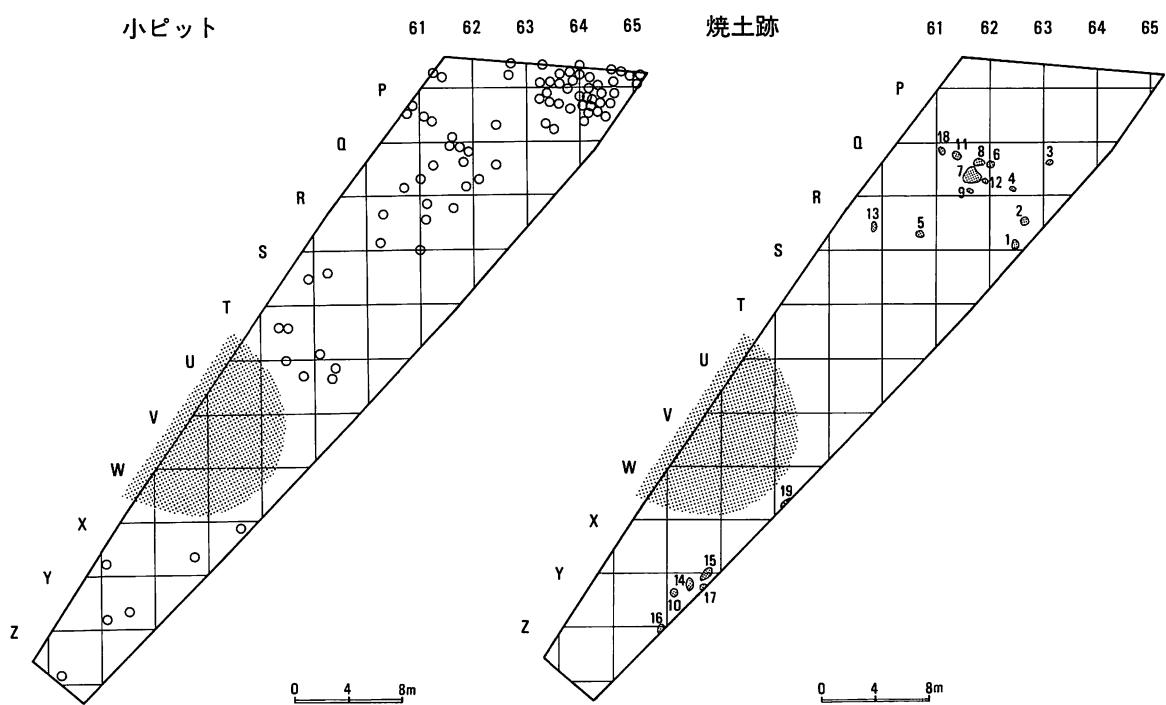
土器

剝片石器はスクレイパー、石鎌が半数以上を占め、ほかにつまみ付きナイフ、ドリルなどが出土している。大部分が頁岩製であるが黒曜石製のポイント・ナイフ、フレイクも出土している。礫石器ではたたき石、すり石、砥石片が多く、石錐、石鋸などもわずかではあるが出土している。鐸形土製品、土偶、円盤状土製品、石刀、黒曜石・頁岩製の三日月形石器、ひすい製の玉なども発見された。

石器



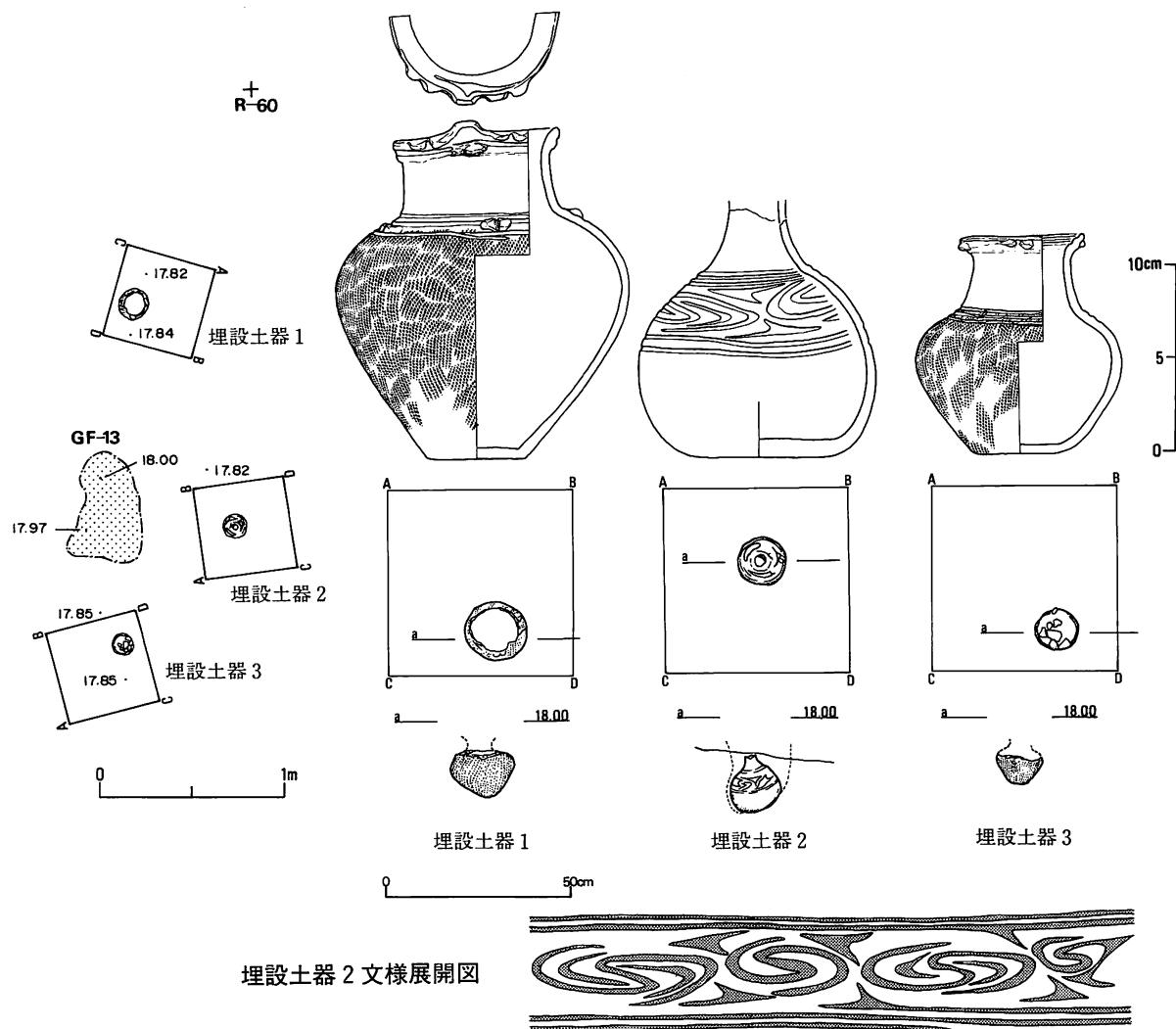
図III-1 G地区住居跡・土壤分布図



図III-2 G地区小ピット・焼土跡分布図

2. 遺構

(1) 埋設土器 (図III-3、図版2-1~6、3-1)



図III-3 埋設土器1~3出土状況

第III層上部で 150×30 cm 程の広がりのある焼土跡 (GF-13) が検出された。焼土の周辺を厚さ 5 cm 程掘り下げたところ、この焼土を取り囲むような位置からほぼ完形の壺形土器が三個いずれも正立の状態で出土した。口縁部は土圧で壊れていた。黒色土中に掘り込まれているため掘り込み面ははつきりしないが、焼土とほぼ同じレベルかやや下位かと思われる。埋設土器2には土器のまわりにわずかに色調の違う土がみとめられた。土器がすっぽりと埋まる程度の穴を掘り埋められたものであろう。3個の土器は、焼土跡を取り囲むように 1 m 程の間隔を置いて三角形を描くような位置にある。意識的に配されたものであろうか。土器はいずれも繩文時代晩期V群土器で包含層で分類した3群土器に相当するものである。

埋設土器1は中型のもの。肩部から胴部にかけて強く張り出し底部にむかって急に細くなる器形のもので、口縁部に較べて底部が小さい。頸部は比較的短くわずかに内傾する。口縁部には口外帶が設けられ、口外帶上には沈線をはさんで上下にB状突起がつけられている。口縁には口外帶の下位の突起

埋設土器1

B状突起

起に対応する位置に小さな山形突起がつけられている。突起の内側には沈線が三叉文的に入り組んでつけられている。肩部には深い沈線が3条めぐり、沈線間にはB状突起が4箇所に配されている。体部にはLR原体による細かい斜行気味の繩文が施されているが、底部付近は磨かれて無文になっている。口唇上から内面にかけて丁寧に磨かれている。頸部には縦方向にヘラ削りした痕跡が残る。焼成胎土は非常によく、胎土は橙色である。赤色顔料のようなものが混じっているのかもしれない。

埋設土器2 入組文 埋設土器2は底部が大きく胴部が球形に近い形のもので細首である。口縁部は欠損している。文様は彫刻的な沈線で肩部と胴部に2条ずつめぐらしている。胴部下位の沈線は途切れている。文様は区画された中に大柄なS字状の入組文を4箇所に配しているが、割りつけが均等でないためS字文が変形しているところもある。入組文の上下には三叉文が配されているが肩部、胴部にめぐる沈線と一緒にになっているところもある。器面には赤色顔料を塗布していたかと思われる痕跡がある。焼成は非常に良く胎土には砂粒が多い。

埋設土器3 埋設土器3は小型のもの。胴半ばで大きく張り出す。頸部はやや内傾する。口縁部にはB状突起が4箇所に配され、突起間には沈線がひかれている。口唇部内側にもやや幅広の沈線が2条施されている。体部にはLR原体による細かい縦行繩文が浅く施されている。肩部には深い沈線が3条めぐっている。器面は丁寧に磨かれ黒光りしている。焼成は良く胎土には小砂利が混じる。

(2) 住居跡

GH-1 (図III-4、図版3-2、4-1)

位置 R-61・62 規模 2.56×2.40/2.33×2.07/0.20 m

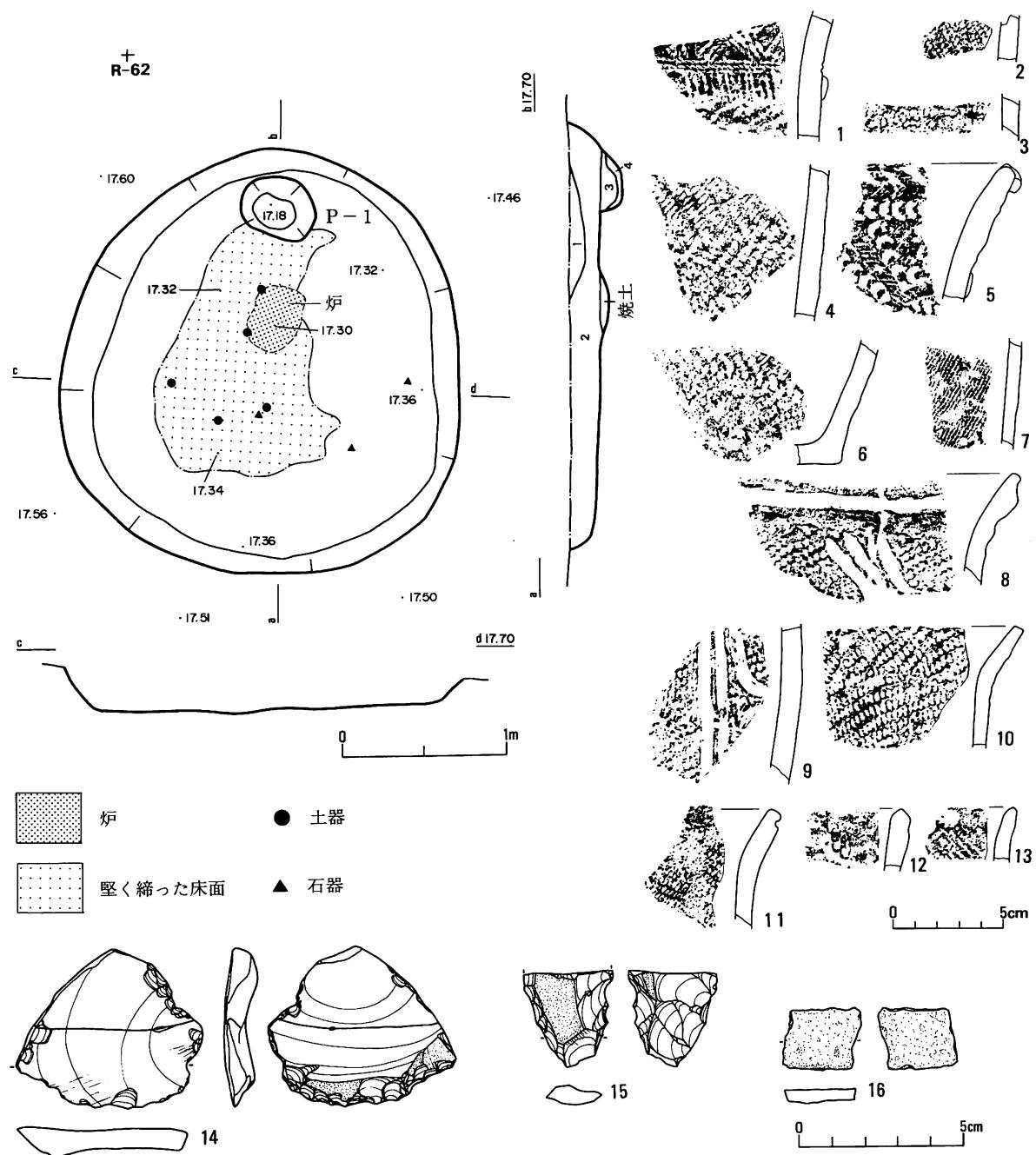
特徴 第III層下部を調査中に茶褐色土の落ち込みを確認した。平面形は丸みの強い卵形である。壁の立ち上がりは緩やかである。床面はほぼ平坦で堅い。床面中央やや北よりの位置に掘り込みの浅い炉がある。炉は径29~41cm、焼土の厚さは5cmほどで炭化物が混じる。炉の周辺は踏み固められた状態で非常に堅くなっていた(網の部分)。柱穴は検出されなかった。竪穴の長軸方向にあたる北側の先端部から楕円形のピットが検出された。住居に伴うものと考えられる。底面は凹凸があり断面形はすり鉢状である。床面直上の土壌をフローテーションした結果、炭化したミズキの種子が検出された。

覆土は、1：暗黄褐色土(粘性があり径5mm程のローム粒、炭化物が混りる)、2：茶褐色土(1よりも比較的大きなローム粒、炭化物が混じる)、3：黒褐色土(黒色土にローム粒、焼土が混じる)、4：暗黄褐色土(黄褐色ロームに黒色土がわずかに混じる)。

遺物 床面からII群B類、III群A類(1・4)、III群B類(2・3)、土器、スクレイパー、砥石片が出土した。覆土からはII群B類、III群A類(5・6)、III群B類(8~11)、IV群A類(12・13)、V群土器とスクレイパー(14・15)、砥石片(16)、Uフレイクなどが出土している。

3には横走気味の繩文がつけられている。4は結束第1種羽状繩文のもの。5は内面に炭化物が付着している。7は非常に細かいLR原体による斜行繩文が施されている。8は波状口縁をなすと思われる。肥厚させた口縁に太い沈線が引かれている。器面にはLRL原体による斜行繩文が施され、沈線により文様が描かれている。9は複節の繩文地に沈線で垂下する文様と弧状の文様が描かれている。11は頸部がくびれ口縁が外反するもので、器面にはLR原体による斜行繩文が粗く施されている。焼成が良く内面は磨かれ黒褐色を呈する。12は断面角形の工具で刺突文がつけられていて色調は橙色を呈する。

ピット・炉の規模 (長径×短径/深さ (厚さ) m)



図III-4 GH-1と出土の遺物

P-1 $0.47 \times 0.35 / 0.14$ 炉 $0.41 \times 0.29 / 0.05$

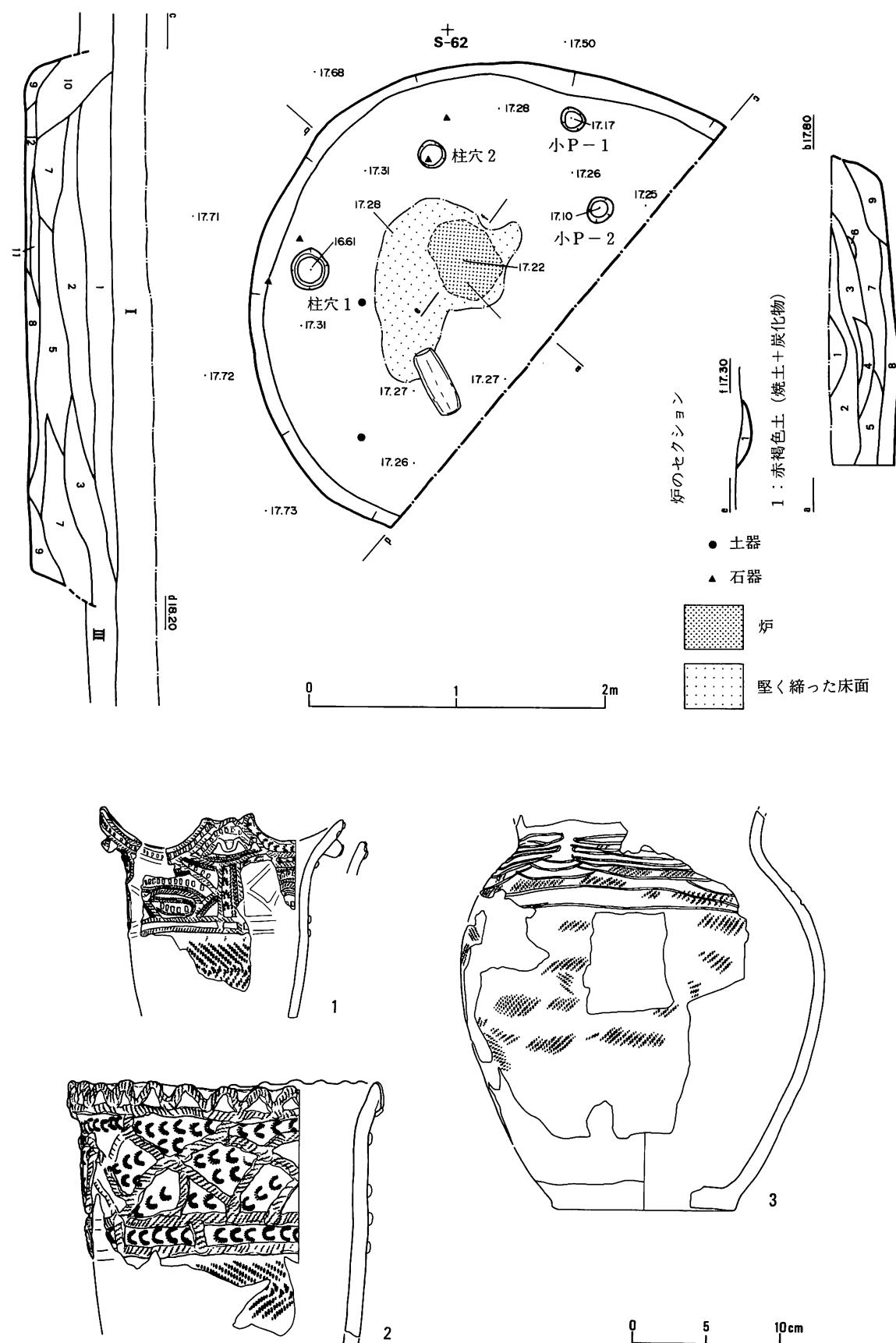
時 期 繩文時代中期後葉III群B類土器の時期

GH-2 (図III-5・6、図版4-2・3、5-1~4)

位 置 S-61・62

規 模 —————/————/0.50 m

特 徴 発掘調査区境界の土層断面で確認できた。掘込み面は第III層中部で遺構の東側半分ほどが調査区域外に及んでいる。平面形は円形あるいは楕円形と思われ、床面はわずかに凹凸があり堅い。壁の立ち上がりは急角度である。床面からは掘り込みの浅い炉が検出された。炉には厚さ6cmほど炉の炭化物が混じる赤褐色の焼土が堆積していた。炉の周囲は踏み固められたかのように非常に堅く



図III-5 GH-2 と出土の土器



図III-6 GH-2と出土の遺物

- 柱穴 なっていた（網の部分）。柱穴は西側の壁ぎわから1個（柱穴1）、壁のやや内側から1個（柱穴2）検出された。また径20cm、深さ15cmの浅い小ピットが2個検出された。床面直上の土壌をフローテーションした結果オニグルミの堅果、炭化したミズキ・イネ科の一種の種子が検出された。
- 炭化種子 覆土は、1：茶褐色土（径5cmほどのローム粒、炭化物、焼粘土が混じる）、2：黒褐色土（粘性があり、細かいローム粒、炭化物が混じる）、3：茶褐色土（軟らかく粘性があり、細かいローム粒が混じる）、4：黒褐色土（2よりも黒色土が少なく、炭化物、ローム粒が混じる）、5：暗黄褐色土（住居跡の中央部付近に堆積し、炭化物、ローム粒が混じる）、6：赤褐色土（焼土がブロック状に混じる）、7：暗黄褐色土（炭化物、焼土が混じり粘性がある）、8：暗褐色土（7よりもロームの量が少ない）、9：茶褐色土（壁ぎわに堆積する）。
- 遺物 床面からI群（4）、II群B類（5・6）、III群B類土器と石製品（35）が出土した。覆土からはI群（7～9）、II群B類（10）、III群A類（1・2・11～15）、III群B類（16～21）、IV群A類（22～25）、V群土器（26・27）と石鏸（1）、つまみ付きナイフ（30）、スクレイパー（29）、石斧（32）、くぼみ石（33・34）、土製品（31）、Uフレイクなどが出土している。
- 土器 1は4箇所に弁状突起部をもつ中型の深鉢形土器。口縁部と胴部との境い目は2本の貼付帯で区切られている。体部には結束羽状繩文が施されている。文様は比較的細い貼付帯を突起下に2条垂下させ、突起間も直線や弧状の貼付帯でつなげている。口縁直下にも2条施されている。貼付帯間に3本一組の繩線文、棒状工具による刺突文、馬蹄形圧痕文が施されている。貼付帯上には繩の圧痕がつけられている。焼成は良く赤褐色を呈する。2は平縁の大型深鉢形土器。胴部下半は欠損している。口縁はわずかに外反し、口唇の断面は切り出し形を呈する。体部には結束第1種羽状繩文が施され、口縁部文様帶との境目は2条貼付帯で区切られている。表面側の口唇外側角には貼付帯が1条、口縁には鋸歯状につけられている。口縁部の文様は無文地に太い貼付帯で上下をつなげ、その間を短い直線、弧線で連絡させる文様が描かれ、貼付帯間に馬蹄形圧痕文が施されている。器面には炭化物が付着し灰褐色を呈する。3は大型の壺形土器。頸部から上は欠損している。頸部から胴部半ばにかけてところどころR原体による斜行繩文が帯状に浅く施されている。頸部と底部付近は磨かれていて、文様は細い沈線で頸部から肩部にかけて施されている。肩部には2条平行する沈線が引かれているかと思われる。頸部の周囲には細長い区画文が縦に3段配されている。区画文間は3条単位の弧線でつながれている。胎土には小砂利が多く、鮮やかな赤褐色を呈する。赤色顔料が混じっているのかもしれない。胴部上半には炭化物が付着する。4は中茶路式に相当するもので、微隆起線がつけられたあと斜行繩文が施されている。器面には炭化物が付着する。5は撚糸文地に結束第1種羽状繩文と繩線がつけられている。6は底面のところどころに繩文が施されている。7・8は微隆起線がつけられたあと繩文が施されている。10は撚糸文のもの。12は断面が三角形の棒状工具で刺突文がつけられている。13は無文地の体部と口唇に細い貼付帯で文様を施し、その間には先の尖った細い棒状工具を2本一組にして施されたと思われる刺突文がつけられている。14は体部に結束第1種羽状繩文を施文後、貼付帯を付けている。貼付帯上には繩の刻み目がつけられていて、焼成は良く橙色を呈する。18は波状口縁をなすと思われるもので、口縁を断面三角形に肥厚させ磨いている。口縁の肥厚部には棒状工具で横に押し引きする刺突文が2列つけられている。20は焼成は良く、胎土には小砂利が混じる。20は複節の繩文が施されている。
- 石棒 28は木葉形の石鏸。30は縦形で周辺加工で刃部を作り出している。31は鐸形土製品の破片。無文地に沈線で文様が描かれている。35は炉の南西側の床面から出土した。安山岩製の石棒。中央部がわずかに膨らみ、両端は敲打により椀状に凹んでいる。敲打と磨きによって整形されている。

柱穴・小ピット・炉の規模 (長径×短径/深さ (厚さ) m)

柱穴 1	0.27×0.25/0.70	柱穴 2	0.19×0.18/0.58	小P-1	0.17×0.15/0.11
小P-2	0.19×0.17/0.16	炉	0.54×0.44/0.06		

時期 繩文時代中期前葉III群A類土器の時期

GH-3 (図III-7~13、図版7-1・2、8-1)

位置 R-58・59、S-58・59 規模 (6.60)×4.30/ (6.50)×4.03/0.67 m

特徴 第III層中位で確認できた。西側の4分の1ほどは発掘区域外に及んでいる。また南東壁で

GP-10と重複する。本竪穴のほうが古い。平面形は隅丸長方形。壁は全周でほぼ垂直に立ち上がる。重複床面は凹凸があり堅い。竪穴のほぼ中央と思われる位置から浅い炉が検出された。炉の周辺は皿状に窪んでおり赤褐色の焼土と炭化物が堆積していた。炉の周辺の床面は他の部分よりも堅く締っている(網の部分)。また床面から焼土が貼り付いた状態で検出された(網の部分)。柱穴は壁から60cm~70cmほど内側の位置から4個検出された。柱穴1、2、3、は短軸方向の壁に、柱穴2と4は長軸方向の壁にそれぞれ平行し、互いにほぼ等間隔である。このほか柱穴とは断定しがたいが径20cmほどの比較的深い小ピットが4個柱穴4の周辺から検出された。

覆土8層中に焼土と遺物が平面的に広がっているのが確認できた(図III-8)。この層中にも竪穴の窪みを利用した生活面があったと思われる。

窪みの利用

覆土は、1:茶褐色土(細かいローム粒と炭化物が混じる)、2:茶褐色土(GH-3の排土で北東壁ぎわに多く堆積する)、3:黄褐色土(ロームがブロック状に混入する)、4:黄褐色土(黄褐色ロームがブロック状に混じり硬く焼土も混じる)、5:暗黄褐色土(細かいローム粒が混じる)、6:暗赤褐色土(焼土と炭化物の層)、7:赤褐色土(焼土と炭化物がわずかに混じる)、8:茶褐色土(焼土、炭化物が非常に多く粘性があり、この層の上面に生活面がある)、9:灰褐色土(黄褐色ロームがブロックで混じり硬い)、10:暗黄褐色土(2よりもロームの量が多い)、11:暗黄褐色土(床面付近に堆積し、やや硬い)、12:茶褐色土(径2mmから3mmほどの細かいローム粒が混じる)、13:黒褐色土(細かいローム粒と炭化物、焼土が混じる)、14:茶褐色土(細かいローム粒と炭化物が混じる)、15:暗黄褐色土(ロームの量が多く粘性がある)、16:黒褐色土(細かいローム粒が混じり硬く締っている)、17:茶褐色土(11・14層よりも炭化物が少ない)。

遺物 床面からII群B類(8)、III群A₃類(3・7・9)土器と北海道式石冠(121)が出土した。覆土からI群、II群B類(12~46)、III群A類(1・2・4・5・47~77)、III群B類(78~95)、IV群A類(6・97~108)、V群土器と石鏃(108~110)、つまみ付きナイフ(114)、スクレイパー(111~113・115~118)、石斧(119)、たたき石(122~128)、石錘(129)、石製品(120)が出土した。

床面に貼られていた黄褐色ロームの下位からIII群A類土器(10、11)が出土した。炉-1の焼土中から炭化したオニグルミの堅果、鹿の尾椎骨、覆土19層中の焼土からオニグルミの堅果、魚骨(鰆棘骨)、カレイ類の尾椎骨、チョウザメのウロコ、覆土8層中に広がっていた焼土中からは炭化したミズキの種子、オニグルミの堅果が検出された。

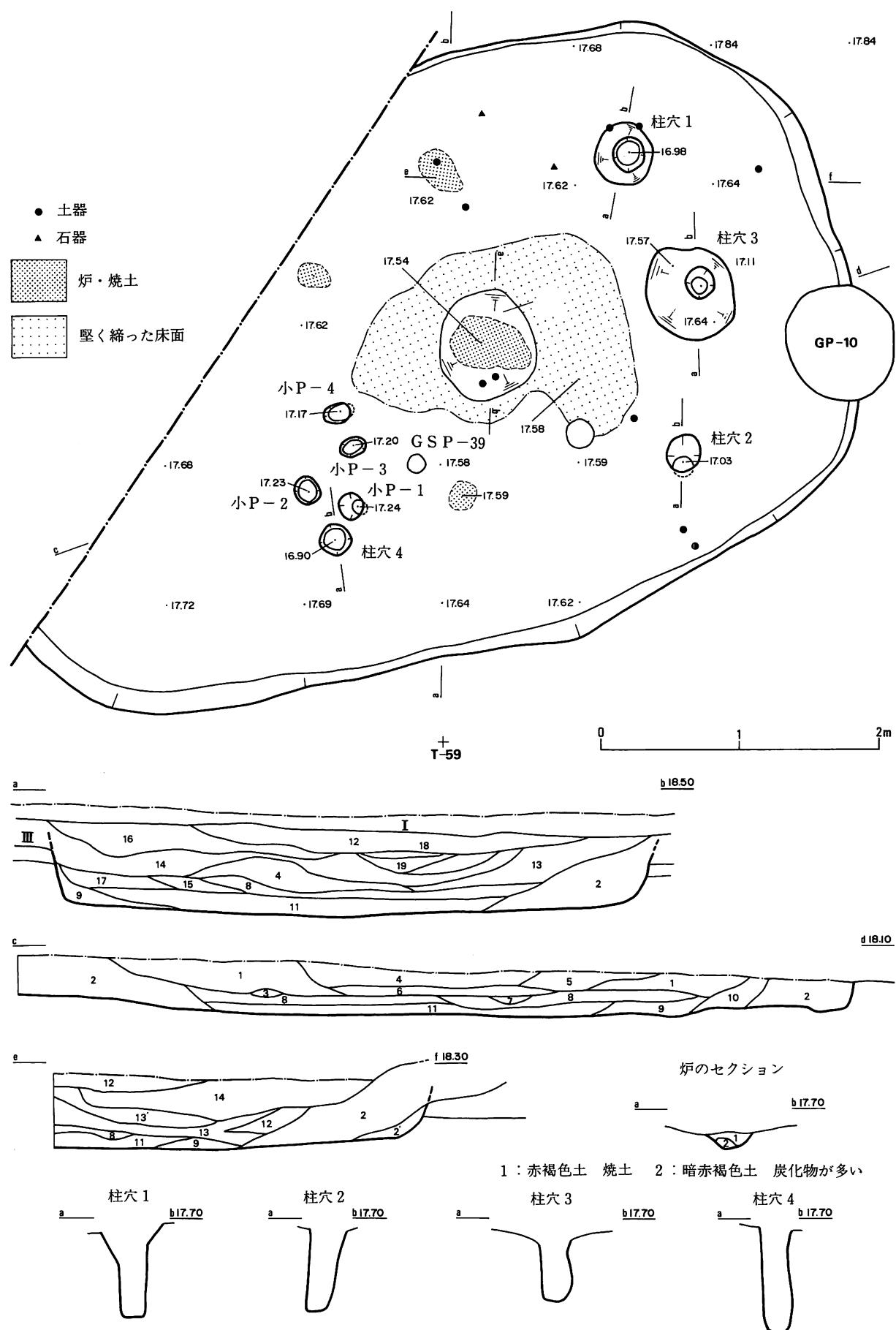
チョウザメのウロコ

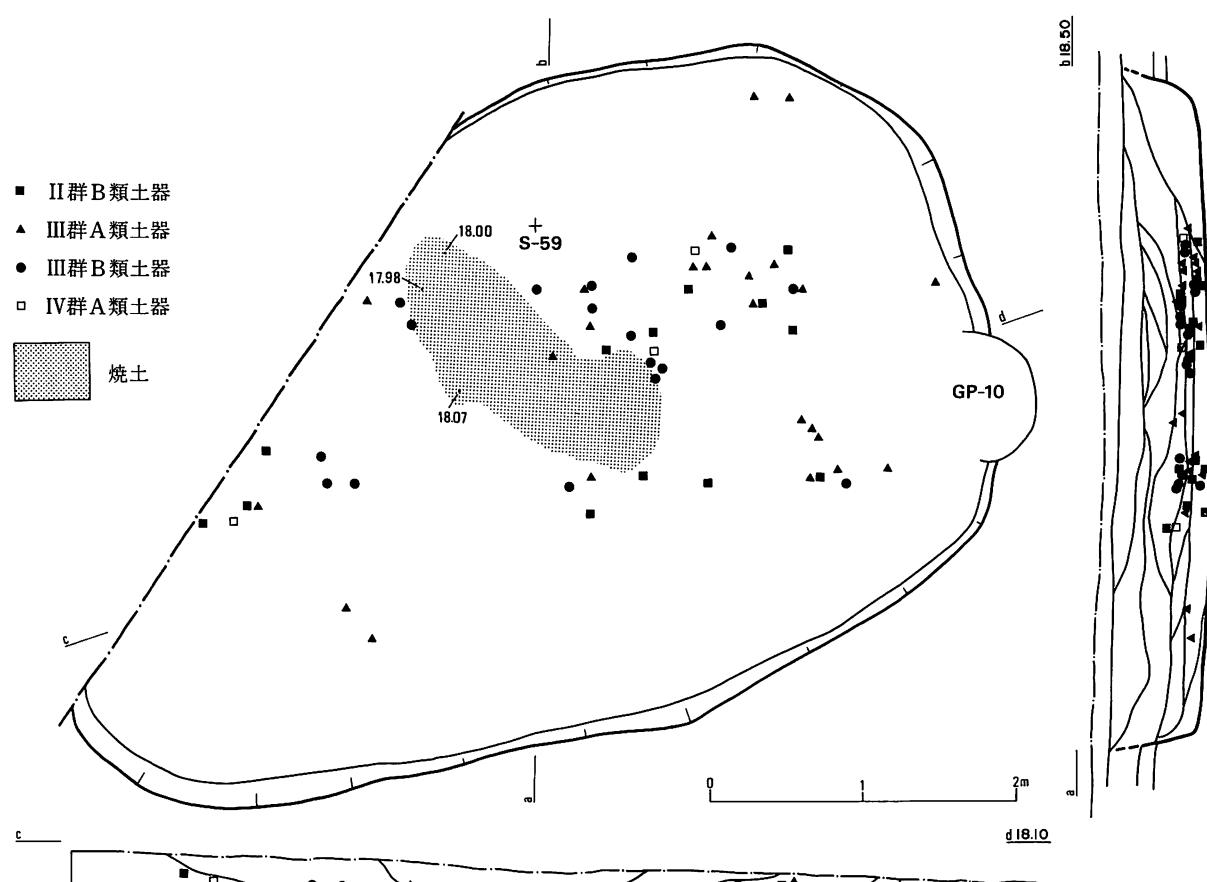
3はややあげ底気味のもの。RL原体による斜行繩文が施されている。7は弁状あるいは山形と思われる突起部の破片。細い粘土紐で文様がつけられている。器面にはRL原体による斜行繩文が不規則に施されている。焼成は非常に良く器面は磨かれて光沢がある。

土器

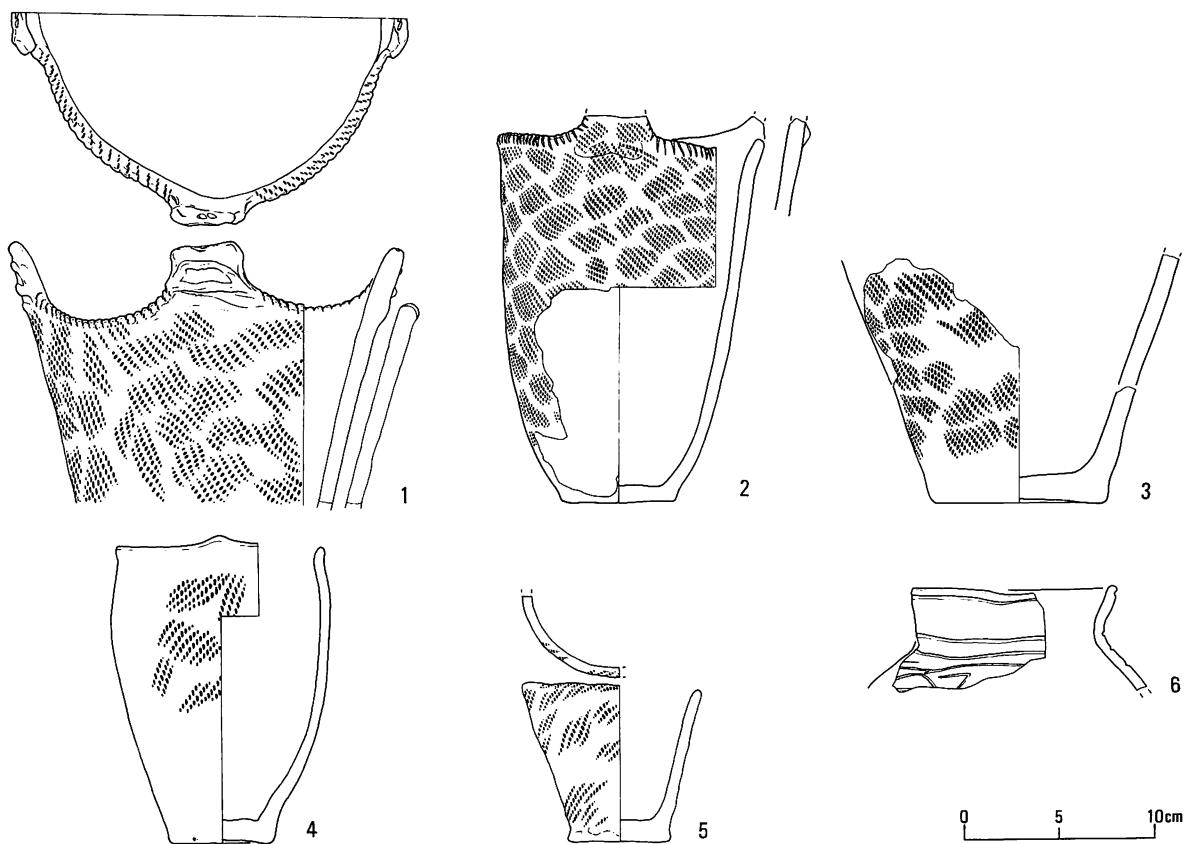
10・11は炉のやや南東よりの床面下から出土したものである。器面は磨滅している。RL原体による斜行繩文が施されている。炭化物が付着し胎土には小砂利が多い。同一個体かと思われる。

床面下出土の土器





図III-8 G H-3 覆土遺物出土状況



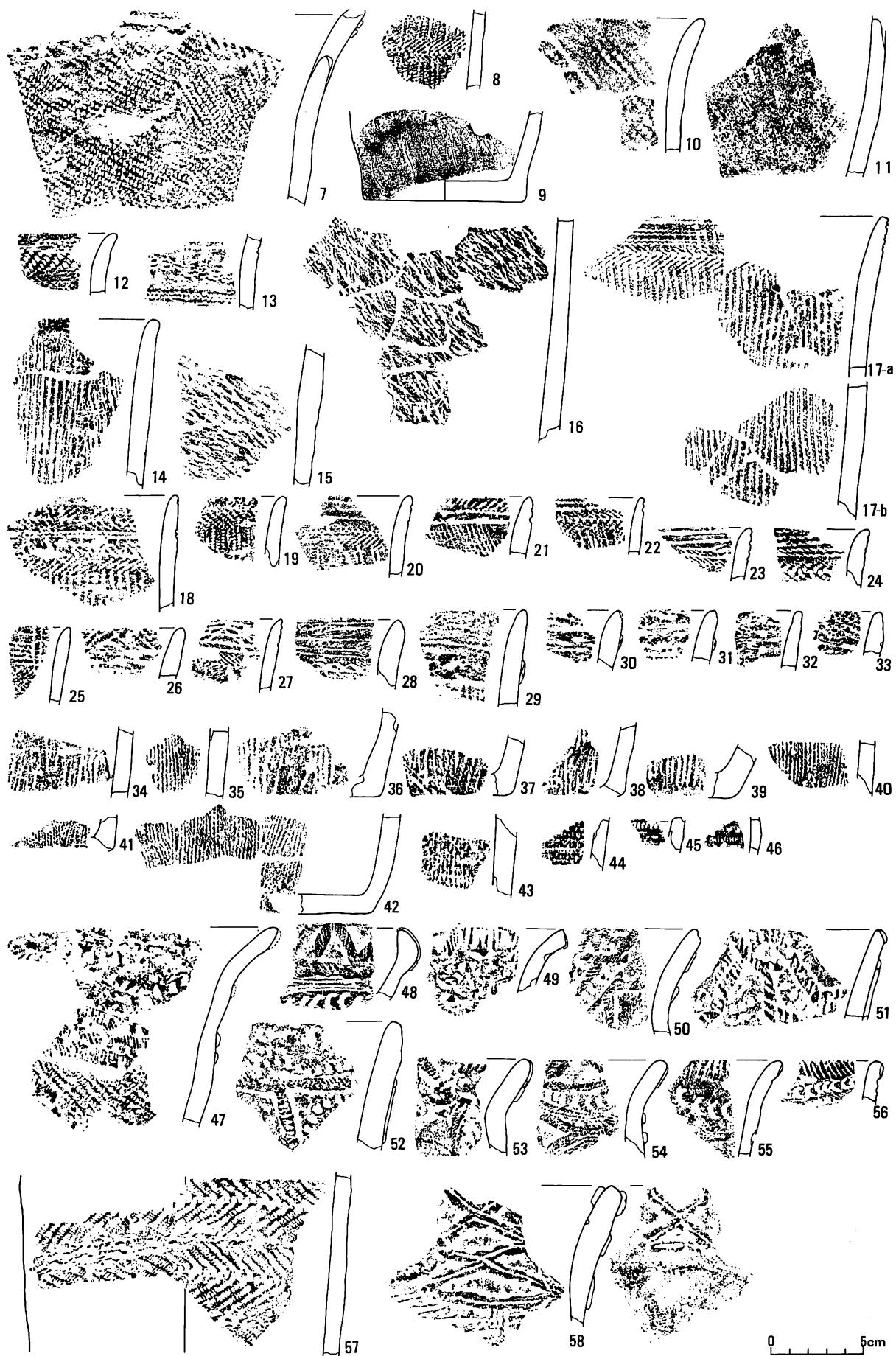
図III-9 G H-3 出土の土器 (1)

12~16は比較的古い時期のものと思われる。12には縄文のみが施されている。13は比較的幅の広い口縁部文様帯をもつものである。綾絡文が3条施されている。14は厚手のもので胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。口唇は丸味を帯びた角形で、器面には撚糸文が粗く施されている。15は無節のR原体の縄を2本用い一方を軸に右巻、他方を軸に左巻にした原体(単軸絡条体第5類)による網目状撚糸文が施されている。16は撚り戻しの原体による縄文が施されている。17-a・b~22は体部に撚糸文が施されている口縁部の破片。口唇断面は尖り気味で口縁部の文様帯は狭い。胴部文様との境目に結束第1種羽状縄文が施されている。口縁部には縄線による文様がつけられているものが多い。17-a・bは撚りの異なる原体を2本一組にした平行縄線が施されている。18は口縁部にも羽状縄文が施されている。21は撚糸文が斜めに施されている。口唇直下には縄文がつけられている。23~33は口縁部のみの破片。25は横走する平行縄線に縦方向にも2条加えている。26・27は縄線による鋸歯状文が施されている。28は口唇断面がやや丸味のあるもので、綾絡文が2条施されている。29~31は隆帯がつけられている。29は体部に撚糸文が施されているかと思われる。口縁部にはLR原体による縄線が施され、低い隆帯上には棒状工具で刺突がつけられている。30・31は同一個体かと思われるもの。隆帯上には先の尖った工具で押し引きした刺突文が施されている。32は縦方向に刺突文が施されている。34~42は単軸絡条体による撚糸文が施されている胴・底部の破片。40~42は撚りの異なる2本の縄を軸に並列に巻いた原体によるもの。43・44は多軸絡条体の回転文、45・46は絡条体圧痕文が施されている。

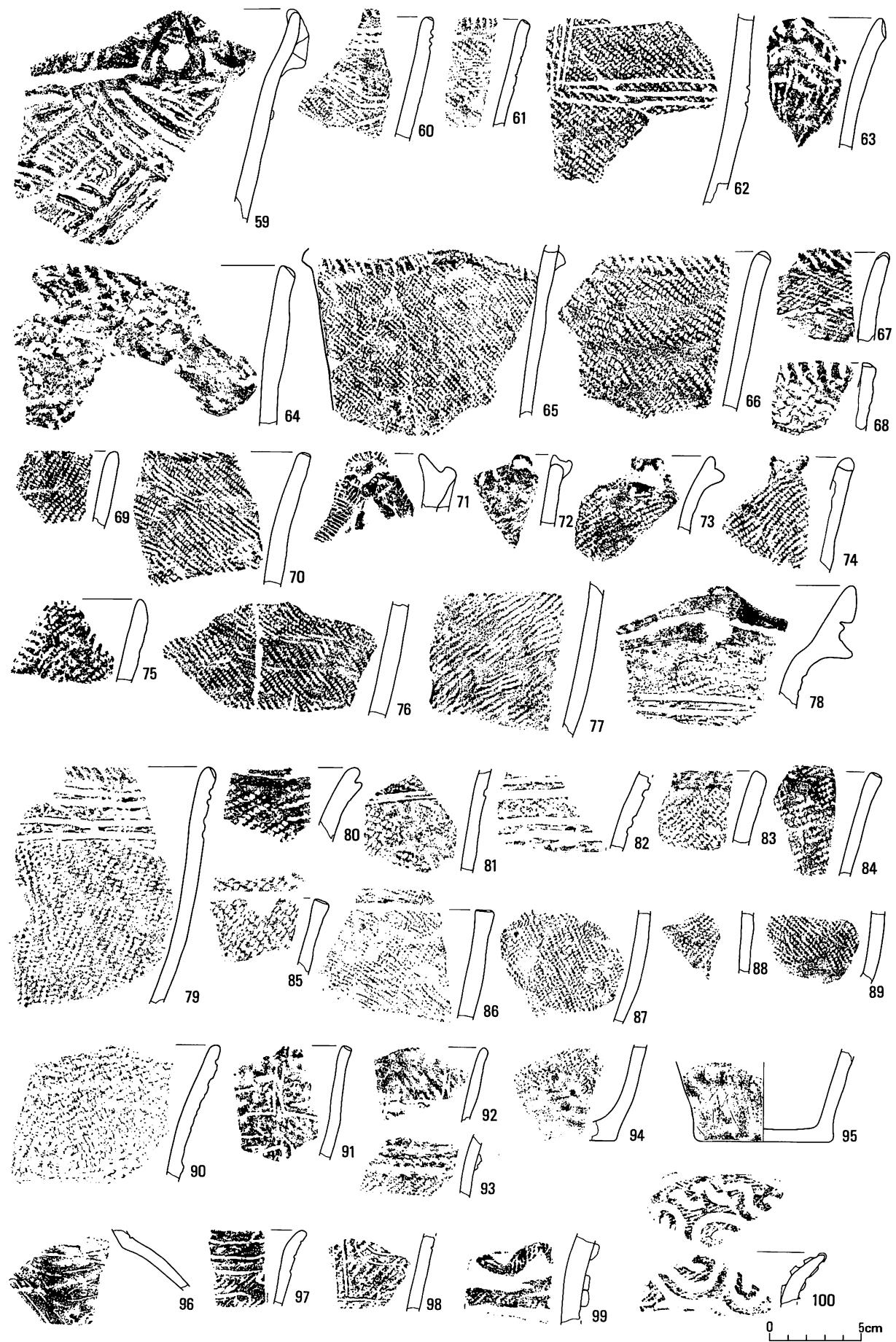
47~57はIII群A₂類相当のもの。47~54は無文地に比較的太い沈線で文様が施されている。貼付帯間には2本あるいは3本組の縄線、馬蹄形圧痕文、刺突文が施されている。47は体部に結束第1種羽状縄文が施されている。貼付帯間には断面が四角形の工具で刺突文がつけられている。口唇上には波状に貼付帯がつけられている。48は口縁が内傾するもの。50・51は突起部の破片。

1・2・4・5、58~77はIII群A₃類に相当するもの。器面に縄文のみ施されたもの、口縁には縄による刻みがつけられているものが多い。58・59は細い貼付帯で、60~62は沈線で文様が描かれている。1は4箇所に弁状突起をもつ大型の深鉢形土器。胴下半は欠損している。突起部には細い粘土紐で文様が描かれている。体部にはRL原体による斜行縄文が施されている。胎土に砂粒が多い。炭化物が付着し茶褐色を呈する。2は4箇所に弁状突起をもつ中型の深鉢形土器。突起部の下位は粘土を貼りつけ断面三角形に肥厚させている。口唇には縄による刻みが施されている。体部にはRL原体による斜行縄文が底部付近まで施されている。底部は磨かれている。炭化物が付着し体上半は黒褐色、下半は赤褐色を呈する。焼成が良く胎土は1と似ている。4は中型の深鉢形土器。口縁には山形隆起部がある。器面は凹凸があり体下半までLR原体による斜行縄文が粗く施されている。底部付近は磨かれている。胎土には小砂利が多い。体上半は炭化物が付着し黒褐色、下半は赤褐色を呈する。5は小型の鉢形土器。底部は2・4同様にやや張り出し気味である。器面には凹凸がありLR原体による斜行縄文が粗く施されている。底面と底部付近は磨かれている。胎土に砂粒が多く黄褐色を呈する。内面には炭化物が付着する。64は器面が磨滅してはっきりしないが、斜行あるいは羽状縄文の地に太い綾絡文が何条か施されている。65は突起部をもつもので突起下を断面三角形に肥厚させている。焼成が非常に良く内面も丁寧に磨かれている。66は帶状に数段施されたRL原体による斜行縄文に、同じ原体を縦方向に回転施文した縄文を重ねている。71~73は突起部の破片。77はL原体による無節の斜行縄文が施されている。

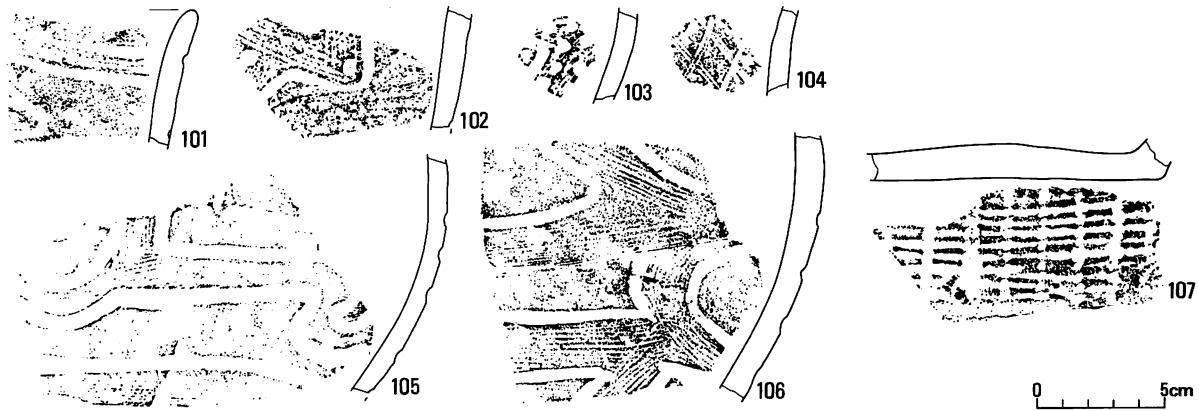
58は二叉の突起部をもつもの。無文地に細い貼付帯で「X」字状の文様を縦につなげる文様を突起部の表裏に施し、内面ではこの文様の下位に溝状の沈線で「一文字」を描いている。貼付帯上に



図III-10 G H-3 出土の土器 (2)



図III-11 G H-3 出土の土器 (3)



図III-12 G H-3 出土の土器 (4)

はR原体による繩文文が施されている。体部は沈線で文様が描かれていると思われる。59は繩文地に細い貼付帶で文様が描かれている。山形隆起部には粘土紐により円形の窪みをつけそのまわりに細い貼付帶を交叉させている。円形文の左右からは口縁にそって貼付帶が2条配されている。体部には弧線と弧線を斜めにつなぐ文様が描かれている。外面には炭化物が付着する。

60~62はいずれもRL原体による繩文地に平行沈線や曲線などを描いている。

78~89はIII群B₁類に相当するもの。78は断面を三角形に肥厚させた山形隆起部をもつ。肥厚部は磨かれ、太く明瞭な沈線を施し隆起部で渦巻を描いている。体部には繩文地に沈線で文様が施されている。79はRL原体を縦方向に回転施文した繩文が施されている。口縁部には横走する沈線が4条めぐっている。口唇は細い棒状工具で斜めに刻みがつけられている。80は複節の繩文が施されている。84・86は角形の口唇上に繩文が施されている。

90~93はIII群B₂類に相当するもの。90は山形隆起部をもつもので、口縁部にはLR原体による繩線が2条施されている。焼成が良い。91・92は同一の個体と思われる。山形隆起部の頂部に指頭によると思われる圧痕がつけられ小波状になっている。体部には無文地に沈線で縦・横に区画する文様が浅く施されている。93は隆帶上にLR原体による繩線がつけられている。

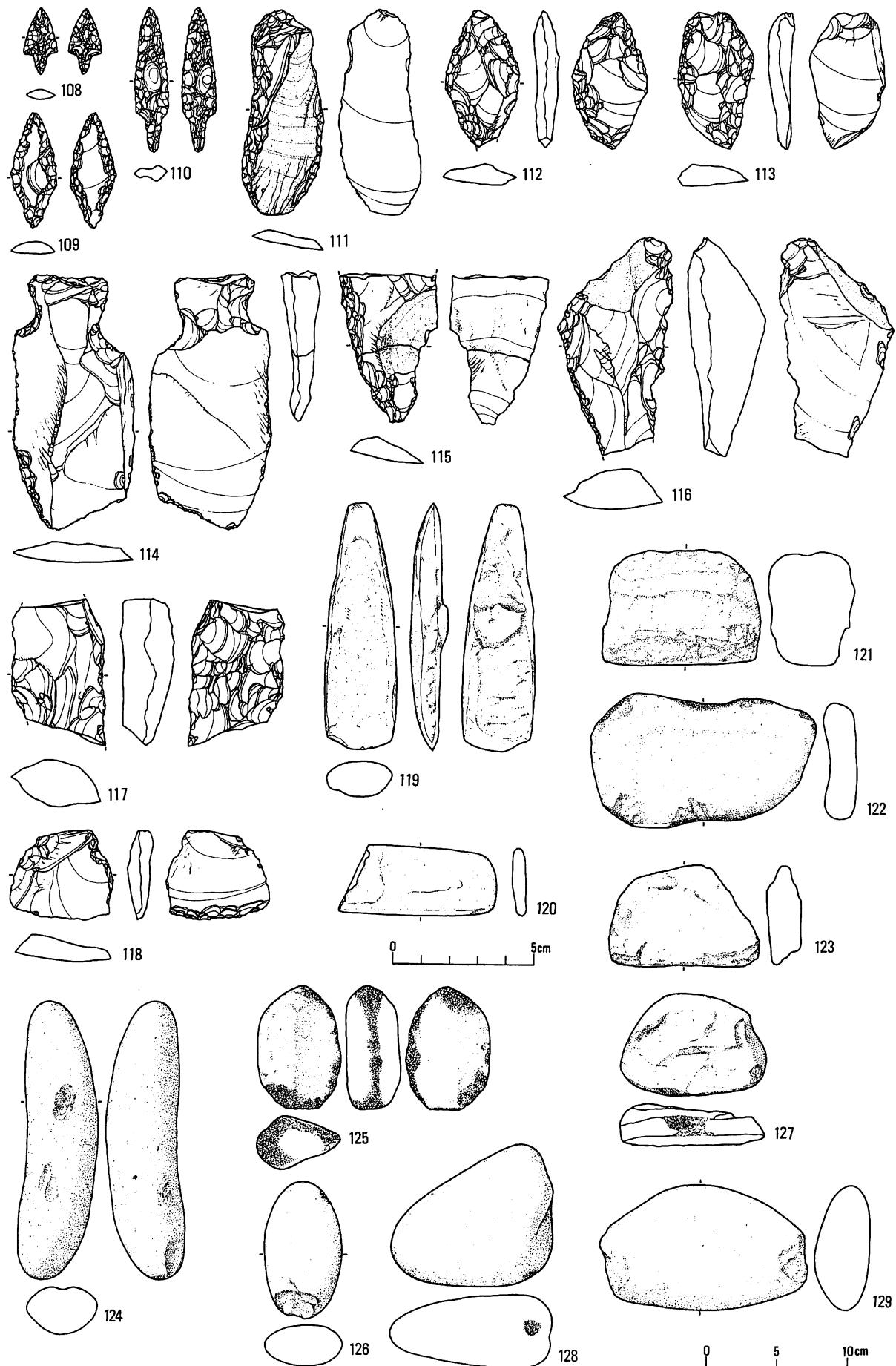
6・96~98は盛土1類に相当するもの。無文地あるいは繩文地に沈線で文様が描かれている。1・96は壺形土器。1は胎土が橙色である。99~107は盛土2類相当のもの。99・100は貼付帶で文様が描かれている。100は山形隆起部の外面に弧状の文様を描き太い沈線で縁取りしている。裏面には沈線で「乙」字文が施されている。102~104、106・107は櫛状工具で文様を描き太い沈線で縁取りするもの。103・104には円形の刺突文がつけられている。105は半截竹管状工具で斜格子目状の文様を描いている。108は底面に簾状の圧痕がある。

108・110は有茎凹基、109は菱形で尖基の石鏸。114はつまみ部の作り出し以外に、ほとんど二次加工がみられないものである。111~113、115~118は素材である剝片の形状をほとんど変えることなく周辺加工、両面・片面加工で刃部を作り出している。119は磨きによって整形されている。120石刀は石刀の破片。122は扁平礫の側縁のところどころに、125はほぼ全周に、126~128は側縁の一部に使用痕がある。124は2箇所にくぼみがある。129は長軸に打ち欠きがある。

柱穴・小ピットの規模 (長径×短径/深さm)

柱穴 1	0.24×0.23/0.57	柱穴 2	0.28×0.25/0.59	柱穴 3	0.23×0.20/0.45
柱穴 4	0.24×0.22/0.75	小P-1	0.20×0.18/0.34	小P-2	0.20×0.18/0.38

時期 繩文時代中期前葉III群A₃類土器の時期



図III-13 G H-3 出土の石器等

GH-4 (図III-14~19、図版8-2、9、10)

位置 P-60・61、Q-59・60・61

規模 $5.10 \times 4.10 / 4.78 \times 0.03 / 0.34 \text{ m}$

特徴 第I層を除去した段階で円形の黒褐色土の落ち込みとそれをとり囲むように黄褐色ローム、

多量の炭化物が混じる焼土が環状に堆積していることが確認できた。トレンチを掘り調査した結果
豊穴住居であることがわかった。大規模な風倒木により土層の逆転がおこり、住居跡の南西側3分
の1ほどが攪乱を受けている。また西側部分5分の1ほどが発掘区域外に及んでいる。東側壁ぎわ
でGP-31と北西壁でGP-32と重複する。いずれも豊穴の方が新しい。本遺構は焼失家屋で、第III
層上面に堆積していた焼土、炭化物、黄褐色ロームはその際のものである。平面形は橿円形と思わ
れる。壁の立ち上がりは南西壁が攪乱により明確にとらえることができなかったが、そのほかの部
分では急角度で立ち上がる。床面は全体的に堅くわずかに凹凸がある。中央部やや北よりの床(網
の部分)には黄褐色ロームが貼ってあり他のところよりわずかに高くなっている。掘り込みのある
炉は確認できなかったが、床面のところどころから焼土が検出された(網の部分)。

炭化材は風倒木による攪乱を受けたところ以外では、覆土中位から床面にかけて二重三重に重
なって出土している。特に南東側に多く、住居跡の中心付近では散在的に出土している。図III-15
のNo.1~4の炭化材は、壁ぎわから豊穴内部にむかって先を下にして斜めに倒れこむように、ある
いは「く」の字に折り重なるような状態で出土した。これらの炭化材は丸い棒状で比較的残りが良
く、No.1は径8cm、No.2は径10cm、No.3は径5cmあった。またNo.5、6、7のように径
5mmほどの細い蔓状のものも検出された。南西部では小片、小枝状あるいは床面に糊状に貼りつ
いている炭化物が多い。太めの丸い材は柱材、小枝状のものは茅材かと思われる。蔓状のものは材
をしばる際に用いたものかもしれない。また南壁ぎわの台石の下の床面からぴったりと貼りついた
状態で炭化物が検出された。敷物であろうか。また北側床面の炭化材の上には厚さ10cm程の焼土
が堆積していた。これらの焼土は上屋を覆っていた土が焼け落ちたものと思われる。

豊穴内から小ピットが15個検出された。いずれも径30cm内外で浅いものが多い。柱穴と断定で
きるものはなかった。小P-10は床面に貼った非常に硬い焼土を取り除いた段階で検出された。覆
土下部には軟らかい土、上部には堅い黄褐色ロームを主とする土が堆積していた。豊穴を構築する
際に埋め戻したものであろう。小P-12の上面にも炭化物混じりの黄褐色土が貼りついていた。覆
土中から炭化したオニグルミの堅果、クリ、床面からはオニグルミの堅果、ミズキの種子が検出さ
れた。

覆土は、1:暗黄褐色土(極細かいローム粒が混じり、ボロボロと崩れやすい)、2:茶褐色土(1
よりも黒色土が少なく、焼土がわずかに混じる)、3:褐色土(焼土、炭化物が不均一に混じる)、
4:茶褐色土(細かい炭化物、ローム粒、焼土が混じり硬くところによりロームの量が多く暗黄褐
色を呈する)、5:暗黄褐色土(径1cmほどの黄褐色ローム、炭化物、焼土が不均一に混じる)、6:
茶褐色土(この層の下部に焼土、炭化物が並ぶ)、7:赤褐色土(焼土)、8:茶褐色土(細かい炭
化物が混じり粘性がある)、9:黒褐色土(床面に堆積し、炭化物が層をなして並ぶ)、10:暗黄褐
色土(細かいローム粒、炭化物が混じり硬い)、11:暗黄褐色土(10よりもロームが少なく、炭化物
が混じる)、12:黒褐色土(粘性があり8に似ている炭化物がわずかに混じる)、13:茶褐色土(ロー
ムが混じる)、14:暗黄褐色土(硬く、細かいローム粒が混じる)、15:茶褐色土(ローム粒が不均
一に混じる)、16:灰褐色土(炭化物が混じる)、17:黄褐色土(ロームが混じる)、18:黒褐色土(炭
化物が非常に多い)、19:赤褐色土(焼土)、20:茶褐色土(径1~2cmほどのローム粒がまじる)、
21:茶褐色土。

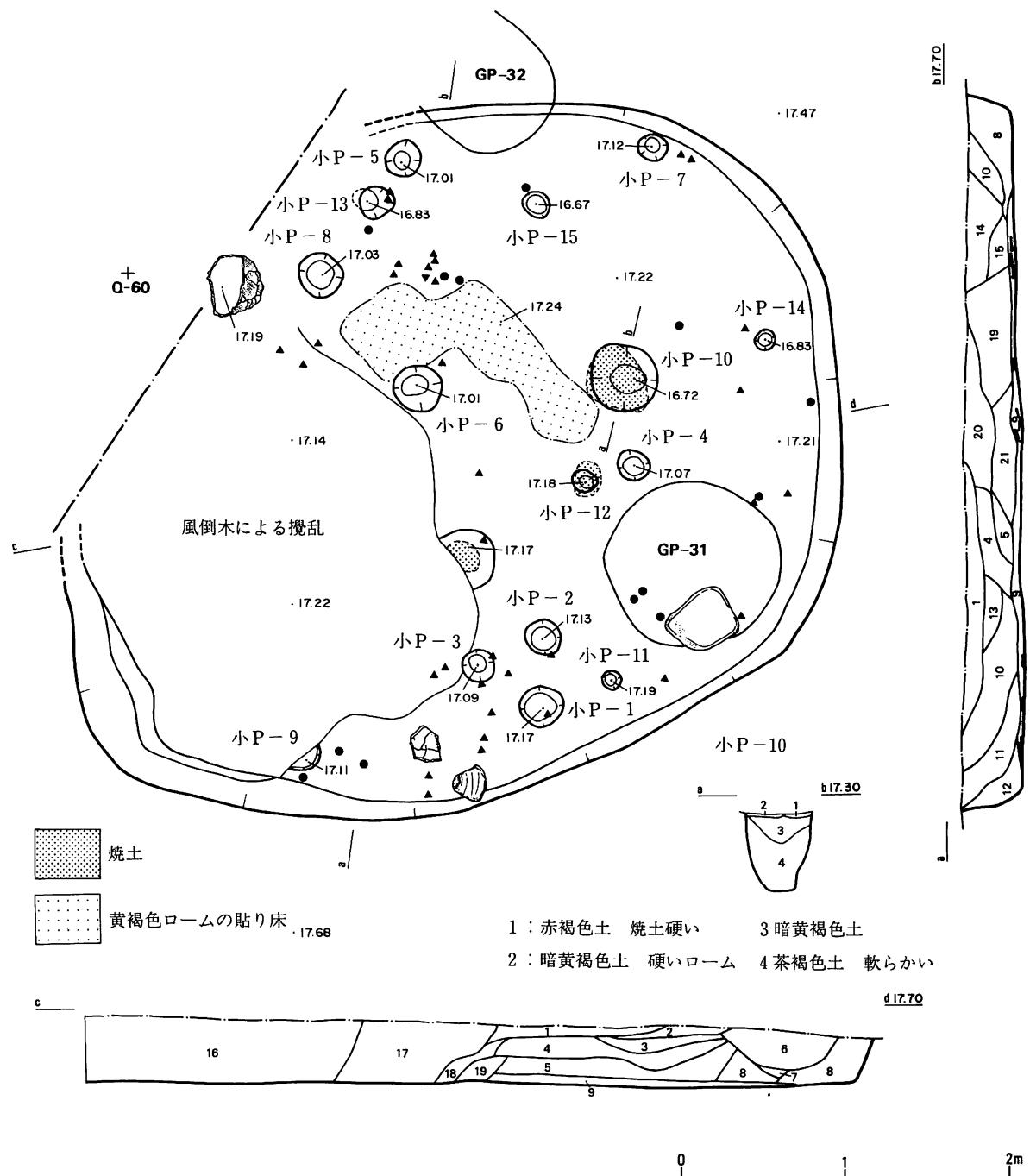
炭化材の出
土状況

柱・茅材

焼土

小ピット

炭化種子

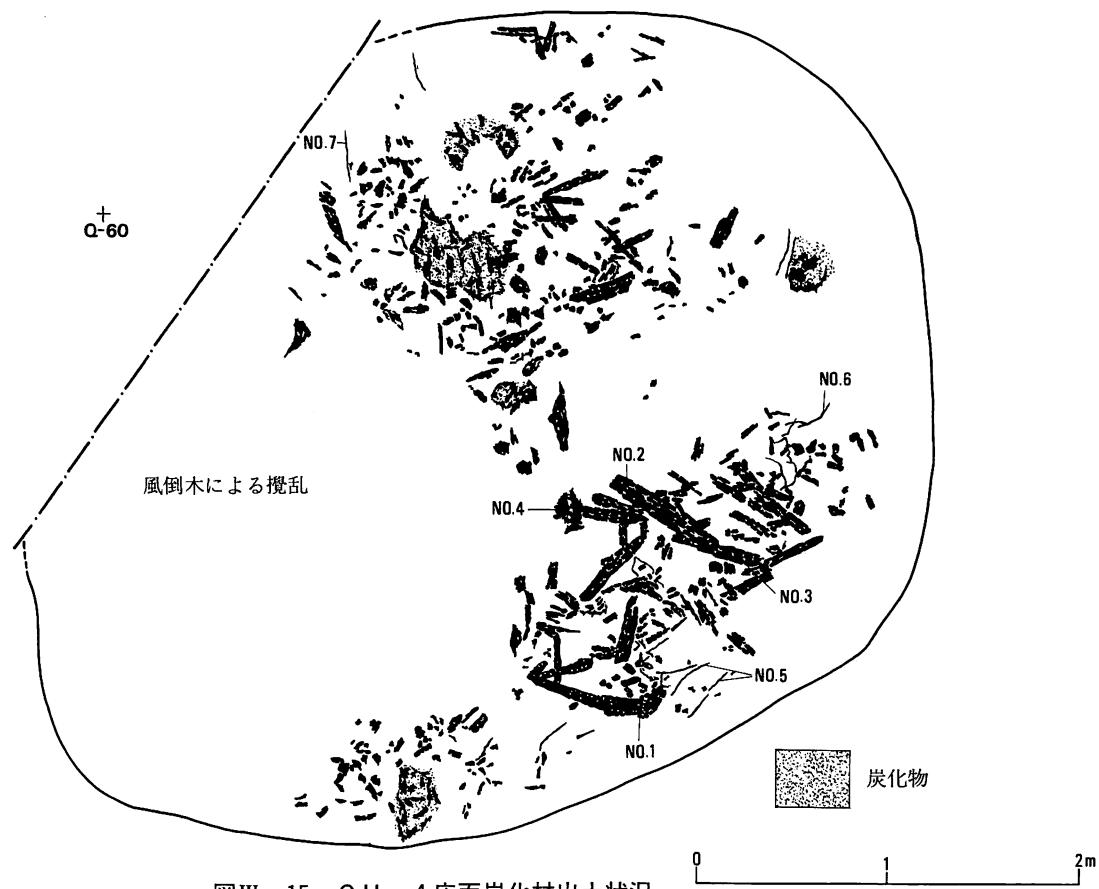


図III-14 GH-4

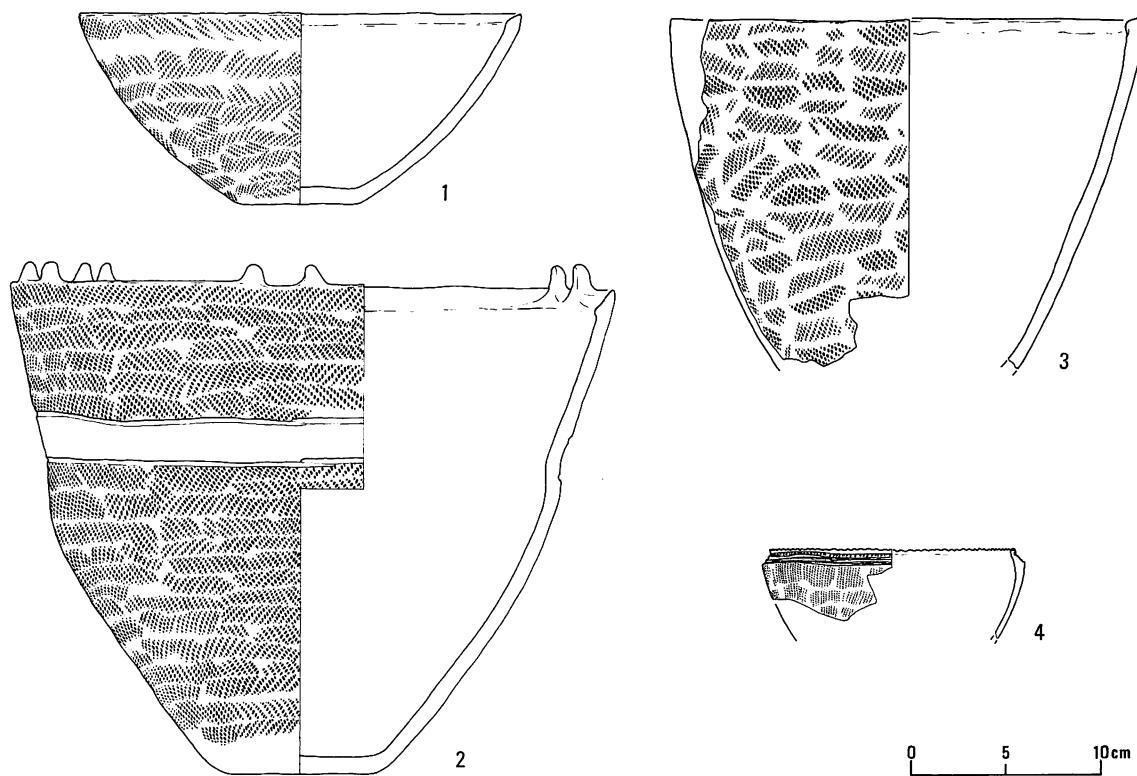
遺 物 床面からIV群C類（1～3）、II群B類（5）、III群A類（6）、III群B類（7・8）、IV群A類（9）、V群土器と、石鏃（47・48・50・51・54～58）、すり石（76）、たたき石（80）、ストーンリタッチャー（82）、台石（86）が出土した。覆土からはII群B類（10～15）、III群A類（16～28）、III群B類（29～33）、IV群A類（34～42）、V群（4・43～46）土器と石鏃（49・52・53）、スクレイパー（59～74）、すり石（75・77・78）、北海道式石冠（79）、たたき石（81・83・84）、砥石片（85）などが出土した。

土 器

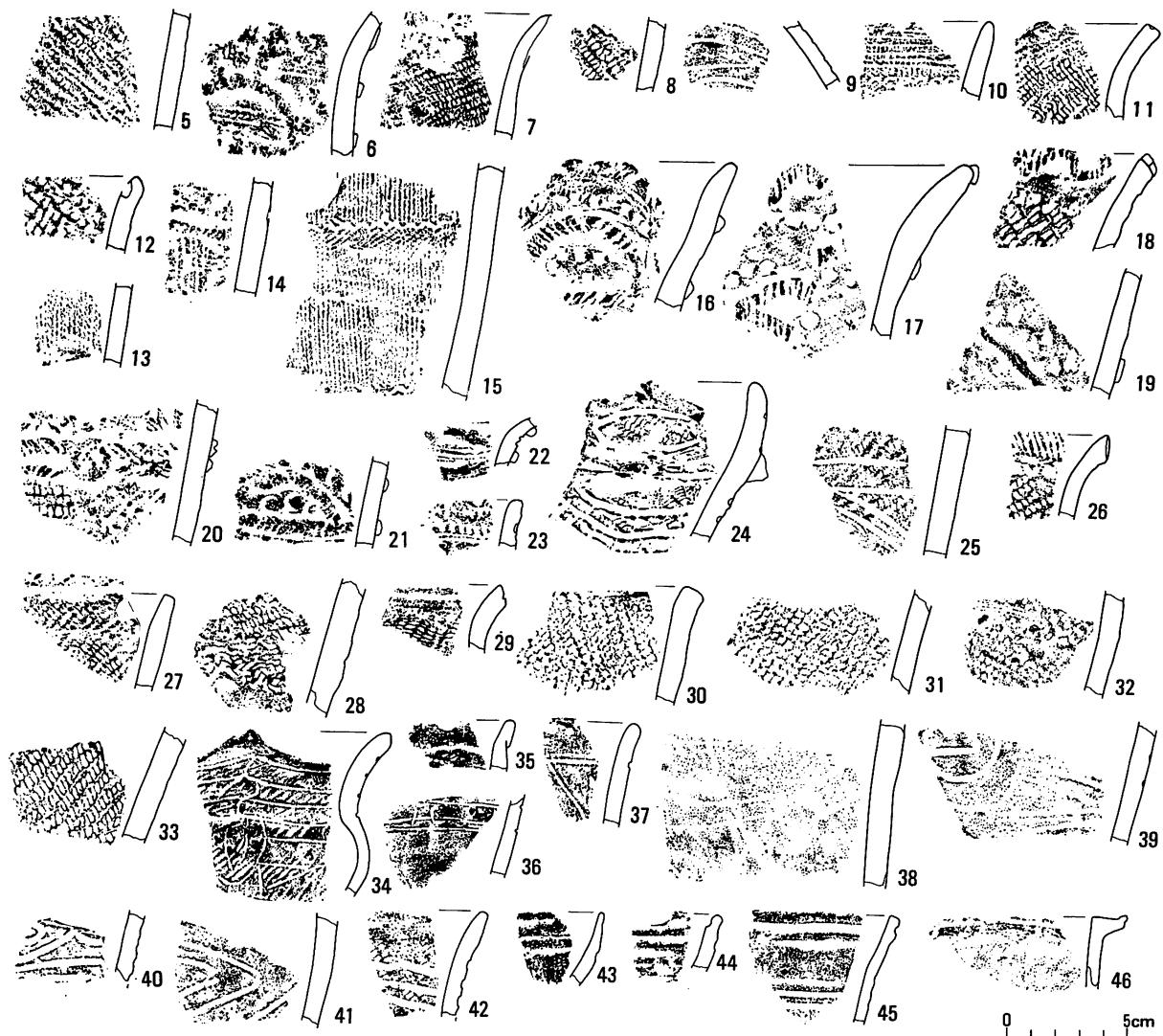
1は平縁の浅鉢形土器。口唇の断面は切り出し形を呈する。器面には羽状繩文が施されている。内面から口唇にかけて磨かれている。内面に炭化物が付着する。焼成は良く茶褐色を呈する。2は



図III-15 GH-4 床面炭化材出土状況



図III-16 GH-4 出土の土器（1）



図III-17 G H-4出土の土器 (2)

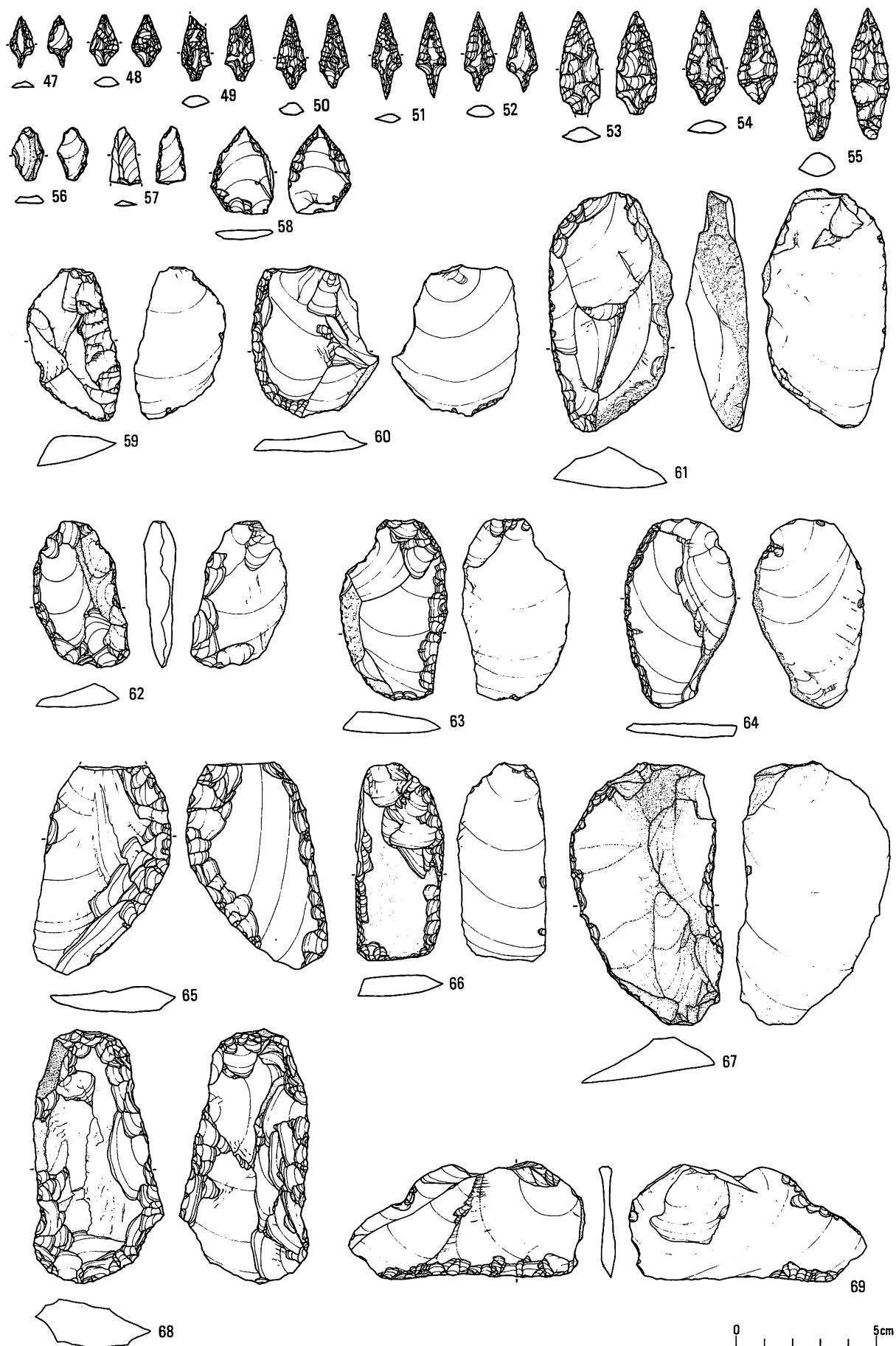
床面出土の
土器

西側の床面から出土した大型深鉢形土器。口唇断面は切り出し形で2個一対になる山形の小突起が6箇所に配されている。器面には底部付近まで0段多条の原体によるかと思われる羽状繩文が施されており、頸部には沈線で区画され磨消された幅2~3cmほどの無文帯が形成されている。胴部と内面に炭化物が付着する。内面にはヘラ削りの痕跡が残る。焼成は良く胎土に小砂利が混じる。茶褐色を呈する。3は平縁の大型深鉢形土器。底部は欠損している。器面には羽状繩文が施されている。内外面に炭化物が付着する。焼成、胎土は1に似ている。

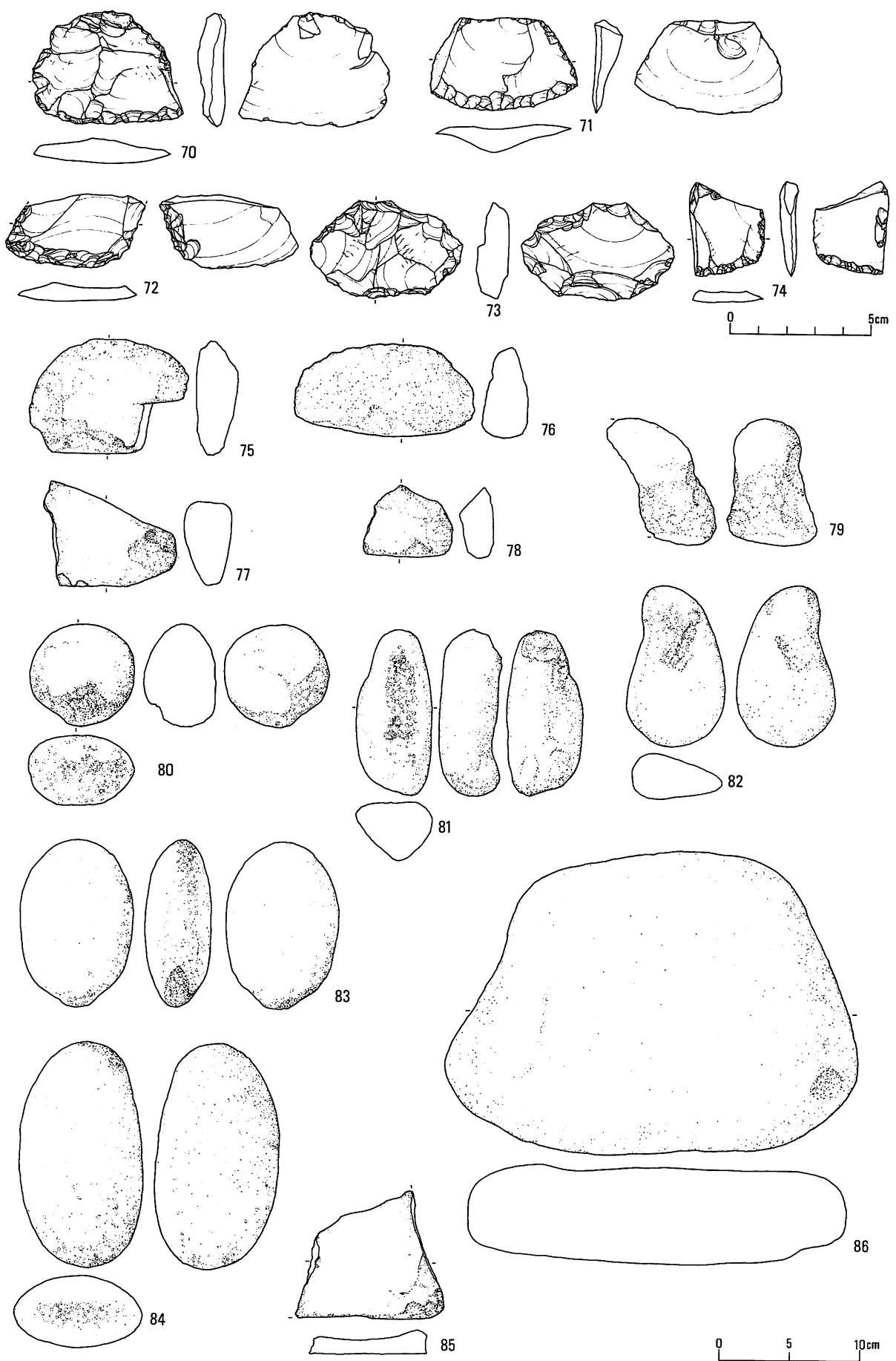
5には斜行繩文が施されている。9は壺形土器の破片で無文地に沈線で文様が描かれている。10の体部には撚糸文が施されている。口縁部には横走する5・6条の繩線と綾絡文が施されている。11は角形の口唇に繩文が施されている。15は撚りの異なる原体を2条並列させて軸に巻いた原体による撚糸文。結束第2種の回転文を重ねている。

16~23は貼付帶で文様が描かれているもの。16は角形の棒状工具による刺突文が施されている。17は爪形の刺突文がある。18は繩文地で口唇に波状につけられている。24・25は繩文地に沈線で文様が描かれている。24は突起部の下位に鍔状の貼りつけがある。29は口唇に細い沈線がひかれている。30・31には複節の繩文が施されている。30の口唇は角形で磨かれている。

34~42は盛土1類相当のもの。34は山形隆起部のあるもの。胴部が張り出し口縁が外反する器形。



図III-18 GH-4 出土の石器（1）



図III-19 G H-4 出土の石器（2）

繩文地の口縁部に横走する沈線を3条めぐらし、隆起部では弧線で縦につないでいる。胴部には沈線で橢円形の文様や縦横に区画する文様が施されている。炭化物が付着する。36~41は無文地に沈線で文様が描かれている。35は折り返し口縁のもの。45は肩の張らない深鉢形をなすと思われるものの。口縁部に幅の広い無文帯を設けている。口唇直下には浅い沈線が1条施されている。46は壺形土器の破片。口唇に沈線が施されている。

47~53は直茎凸基、54は菱形の尖基、55は木葉形を呈する円基のもの。47~52はIV群C類土器に伴う石鏃である。56~58は木葉形のもの。59~67は縦長の剥片を、69~73は横長の剥片を素材にして周辺加工、両面加工により直刃や外湾、内湾する刃部を作り出している。75は半円状扁平打製石器と称されているもの。77は断面が三角形の角柱礫の一側縁にすり面がある。80は球形礫の周囲の3分の2ほどに使用痕がある。81は断面が三角形礫の一面にくぼみがある。83~84は扁平礫の両端に使用痕がある。

小ピットの規模 (長径×短径/深さm)

小P-1	0.28×0.25/0.05	小P-2	0.23×0.20/0.08	小P-3	0.20×0.19/0.12
小P-4	0.20×0.18/0.13	小P-5	0.23×0.20/0.20	小P-6	0.31×0.28/0.18
小P-7	0.19×0.17/0.11	小P-8	0.28×0.26/0.18	小P-9	0.22×—/0.11
小P-10	0.44×0.41/0.48	小P-11	0.12×0.11/0.11	小P-12	0.16×0.13/0.18
小P-13	0.22×0.20/0.38	小P-14	0.13×0.12/0.38	小P-15	0.17×0.15/0.55

時期 繩文時代後期後葉IV群C類土器の時期

GH-5 (図III-20~22、図版11)

位 置 Q-62・63

規 模 (3.70)×3.28/ (3.50)×3.06/0.24 m

特 徴 第III層下位で茶褐色土の円形の落ち込みを確認した。平面形は南北にやや長く、丸味が強い卵形を呈する。壁の立ち上がりは北側壁と南東壁がそれぞれGP-30との重複、木の根による攪乱のため明瞭にとらえることはできなかったがその他の部分では急角度で立ち上がる。床面は非常に堅く、後述するように炉の周辺の高まりもあって凹凸がある。南西壁でGP-17、北側でGP-27、30と重複関係にある。GP-17の方が新しい。GP-27はGH-5の床面に貼ってあるロームの高まりを掘り抜いていることから、GH-5より新しいと判断できる。GP-30も同様に竪穴より新しい。27・30は覆土の堆積状態から判断すると竪穴の構築時期とあまり時間差はないように思われる。竪穴住居に伴うものかもしれないがはっきりとはしない。床面中央からやや北側よりに径50~60cm程の浅い炉(炉-1)がある。炉の周りには厚さ15cm程の表面に凹凸がある黄褐色ロームの高まりがあった(網の部分)。貼り付けられている黄褐色ロームはガサガサしており、長期間日に晒されて硬くなつたような状態である。このロームは炉を取り囲むように意識的に貼り付けられている。このロームを取り除くと堅い床面があった。炉-2は中央部やや南よりの位置から検出された。比較的浅く壁は非常に堅い。南壁周縁に6・7片の土器を配し炉を囲っている。これらの土器片(図III-20-1~5)は同一個体で壁を背にして黄褐色ローム中に埋め込まれていた。残りの破片は散らばっていた。周辺の包含層からも炉に配されたものと同一個体の土器片が出土している。廃棄されていた土器を利用したのであろう。炉-1と炉-2の前後関係はわからない。

竪穴のほぼ中央部から径60cm程のピットが2個(P-1、P-2)検出された。これらのピットは短軸方向にそって並んでいる。P-1・2はいずれも炉-1の周囲に貼ってある黄褐色ロームの高まりと炉-2の焼土をわずかに掘り抜いて作られている。平面形はいずれも不整円形で断面形は擂り鉢形である。壁はたたいて固めたかのように非常に堅いが火を受けてはいない。P-1の覆

重複

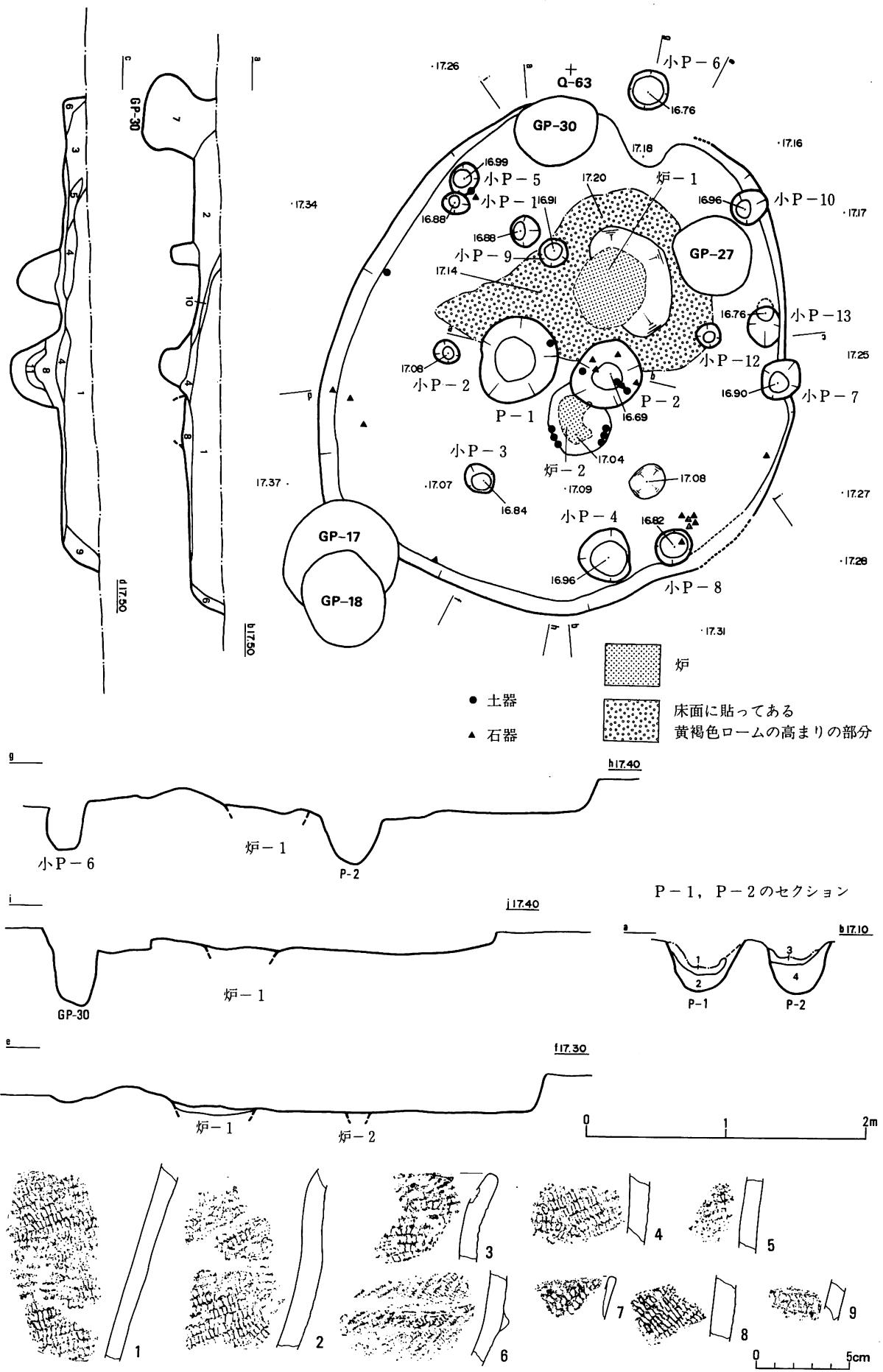
炉

黄褐色ローム

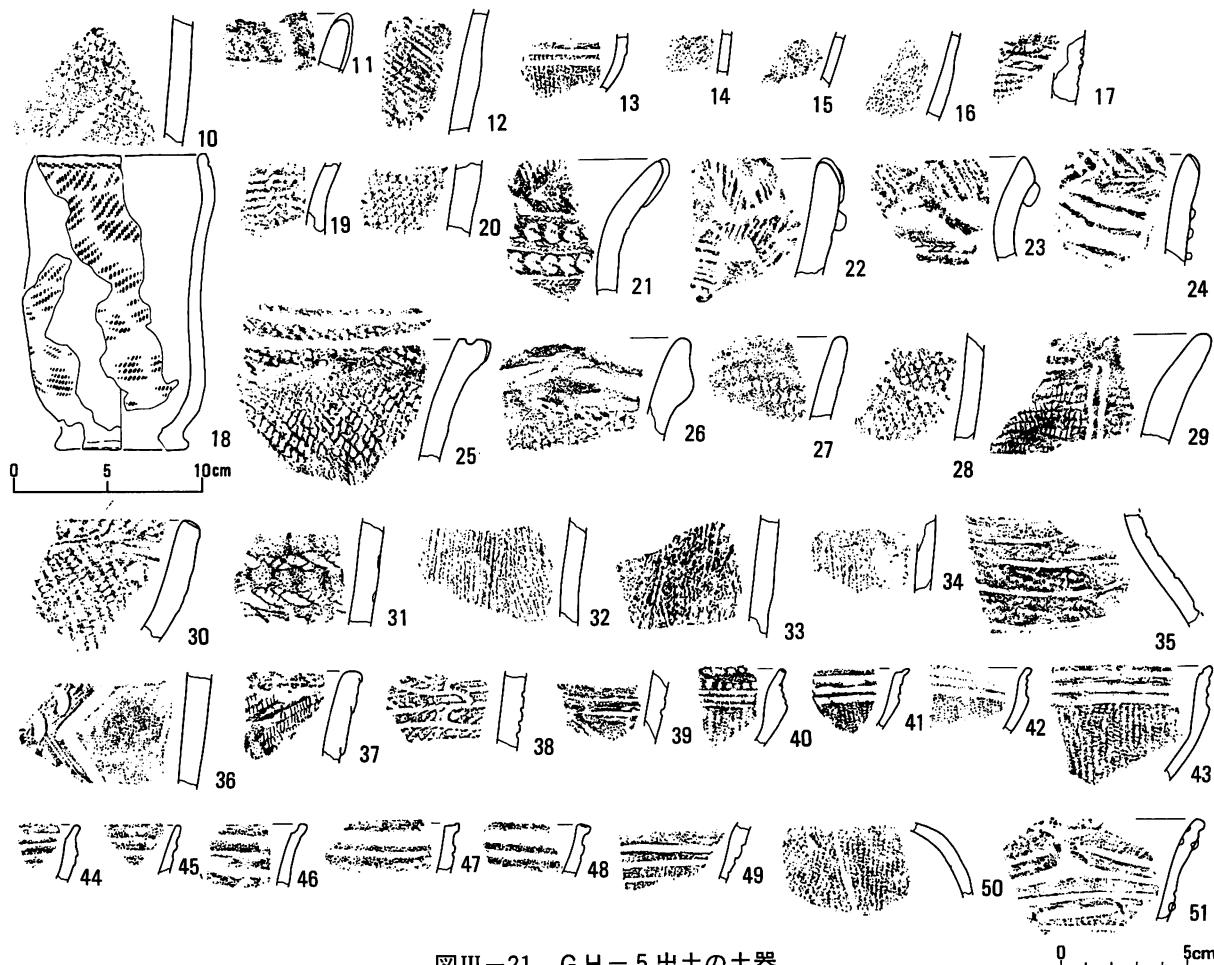
土器片炉

擂り鉢形の
ピット

堅い壁面



図III-20 GH-5 と炉-2 (1~5), P-1・2 (6~9)出土の土器



図III-21 GH-5 出土の土器

土上部（覆土1層）には非常に硬い黄褐色ロームが堆積し、その下部はわずかに空洞になっていた。

下部（覆土2層）には底面に沿うようにU字状に軟らかい茶褐色土が堆積していた。P-2の覆土

上部（覆土3層）には黄褐色ロームの塊、下部（覆土4層）には軟らかい土と非常に硬い黄褐色ロームの塊が堆積していた。P-2では覆土3層のロームの落ち込みに沿うように遺物が検出された（図III-20）。

P-1と2は覆土の堆積に違いがあることから、構築あるいは利用された期間にいくらか時間差があるのかもしれない。これらのピットがどのような性格のものかははっきりとはしない。

平面形が円形で壁がたたいて固めたかのように堅くしまっているピットは、昭和60年度BH-11、

類 例

昭和61年度FH-1・2からも検出されている。これらの竪穴住居はGH-5と同時期の中期後葉とされている。この時期の住居に特徴的なものかもしれない。小ピットは13個検出された。深さが

小ピット

20 cm内外のもので柱穴と断定できるものはなかった。このうち小P-3、7、8、9、12からは

晚期の小ピ

V群土器が出土していることから、周辺で多数検出されている晚期の小ピットと同様のものと考え

ト

られる。床面直上からは炭化したオニグルミの堅果、ミズキ、覆土からはクリが検出されている。

覆土は、1：暗黄褐色土（粘性があり、極細かいローム粒と炭化物、焼粘土が混じる）、2：暗黄

ト

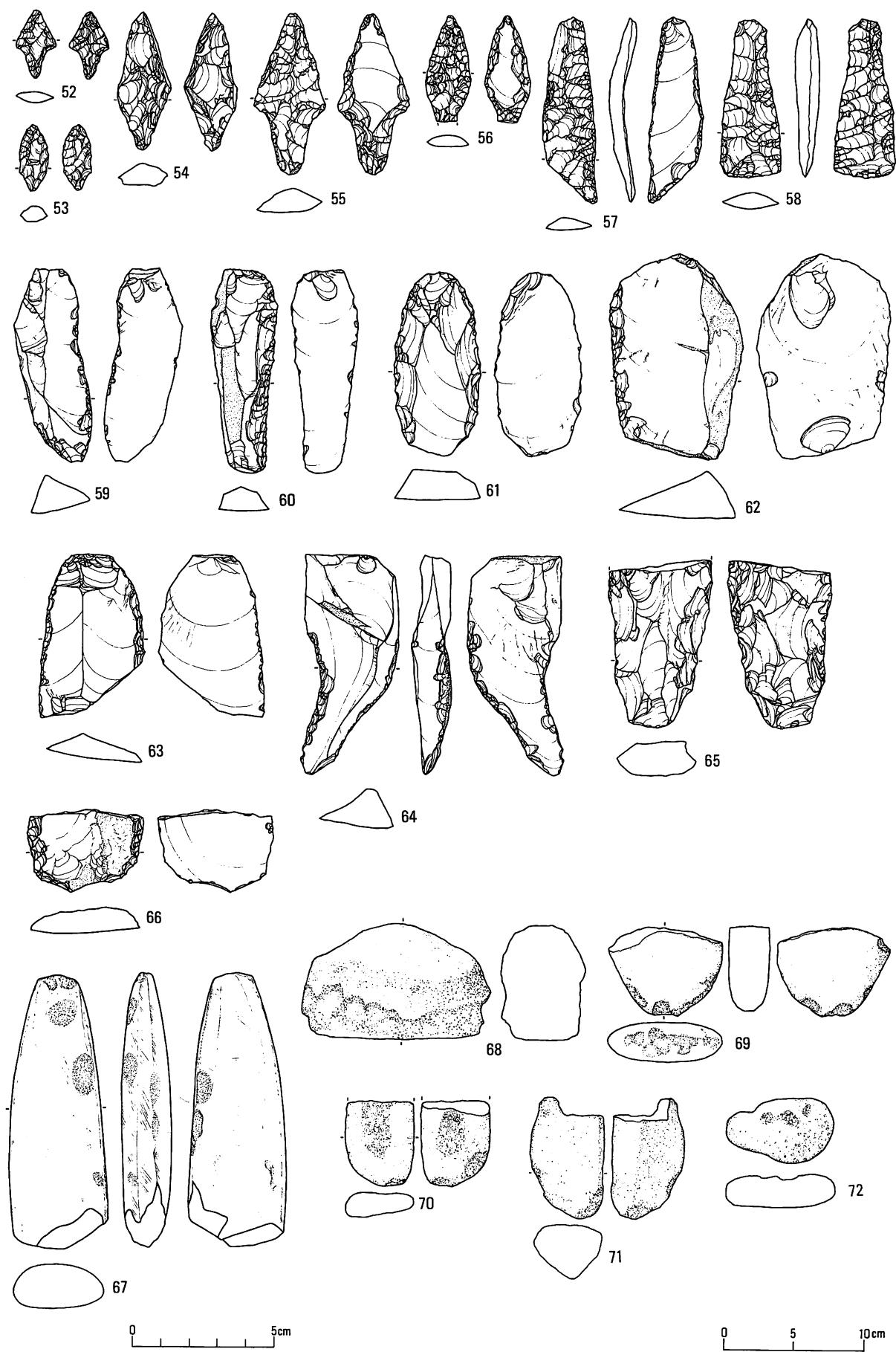
褐色土（1よりもわずかに黄褐色ロームが多い）、3：茶褐色土（細かいローム粒と炭化物が混じる）、

4：黒褐色土（炭化物が混じり、ピットに堆積する）、5：暗黄褐色土（ロームの量が非常に多い）、

6：暗黄褐色土（硬く、壁際に堆積する）、7：黒褐色土（細かいローム粒が混じる、GP-30の覆土）、

8：暗黄褐色土（大きなローム粒が混じり、床面に堆積する）、9：茶褐色土（大きなローム

粒が混じり、西側の壁際に堆積する）、10：黒褐色土（薄く帯状に堆積する）。



遺物 床面からIII群A類、III群B類（10）土器、石斧（67）、たたき石（69～71）が出土した。覆土からはI群、II群B類（19・20）、III群A類（8・21～24）、III群B類（25～34）、IV群A類（35～39）、IV群C類、V群（40～51）土器と石鏃（52～54）、ポイントまたはナイフ（55）、つまみ付きナイフ（56・57）、スクレイパー（58～66）、北海道式石冠（68）、たたき石（69～71）、くぼみ石（72）が出土した。

炉-2の周辺にはIII群B類（1～5）土器片が配されていた。またP-1からはIII群B類（6）、P-2からはIII群B類（7～9）土器が出土した。

1～5は炉-2周辺に配されていた土器片である。口唇は角形で磨かれている。口縁部がやや外反する器形のものかと思われる。体部にはLR原体による横走気味の繩文が施されている。黄褐色ロームの中に埋め込まれていたためか脆くなっている。胎土に小砂利が多く黒褐色を呈する。6はP-1出土のもの。器面に断面が三角形の隆帯がつけられた後、LR原体による斜行繩文が施されているが、隆帯の上位と下位では施文原体が異なっている。0段の条の数が異なるかと思われる。7～9はP-2出土のもの。7は薄手のもので斜行繩文が施されている。9にはアスファルト状の物質が付着している。8・9は同一個体かもしれない。10は床面出土のもの。単節の斜行繩文が施されている。11～16は小P-9出土のもの。17は小P-4出土のものである。19は口縁部に条痕が横位に施され、RL原体による繩線が縦に2条施されている。20には複節の斜行繩文が施されている。21～24は貼付帯による文様が施されている。23・24の口唇には繩による刻み目がつけられている。24は無文地に細い貼付帯で文様が描かれている。25は口縁を肥厚させ磨きをかけて沈線を施している。口唇上と口唇の表面側角には体部の繩文原体と同じと思われる繩による圧痕がつけられている。体部にはRLR原体による斜行繩文が粗く施されている。26は山形隆起部の破片。隆起部を瘤状に肥厚させその上位に浅い幅広の沈線を左右に配している。肥厚部は磨かれている。体部にはLRL原体による横走気味の繩文が粗くつけられている。焼成は非常に良く色調は黒褐色を呈する。27・28は複節の繩文が施されている。29は器面に横走気味の繩文が施され、沈線により縦・横に区画文を施している。30は口唇に繩による刻み目がつけられている。穿孔は焼成前になされている。31には太いLR原体による繩文が施されている。32～34は撚糸文が施されている胴部破片。35はIV群A類盛土1類に相当するものと思われる。細い沈線で文様を描いた後にまばらに繩文を施している。37は0段多条のLR原体による斜行繩文が施されている。40～49は体部に縦行繩文が施されている鉢形土器と思われるもの。40は肩部が張り出す器形のもので、幅の狭い頸部には細い沈線が4条めぐっている。上位の沈線には細い棒状工具で刺突文が施されている。口唇には指頭と思われる圧痕がつけられている。43は頸部に比較的幅広の沈線が浅く施されている。47・48は同一個体と思われる破片で、頸部には幅の狭い無文帯を設け肩部には段状に沈線が施されている。50は壺形土器の破片。51は体部には斜行繩文が施されている。口縁には2個一対になる小さな突起があり、その下位には低い小さな瘤状の突起がある。口縁にそってこの突起から左右に沈線が配されている。突起の上下からも三角形に入り組む形で沈線が施されている。内外面に多量の炭化物が付着する。

52は有茎凸基、53は木葉形の石鏃。54は菱形で尖基、55は有茎のもの。56・57は縦形で片面加工のもの。57はつまみ部が欠損している。58は両面加工のもの。バチ形を呈する。61は片面加工で楕円形を呈する。69は側縁に、70は側縁の一部と背・腹面、71は側縁のところどころに使用痕がある。72は軽石製。

ピット・小ピット・炉の規模と出土土器 (長径×短径/深さ (厚さ) m; 土器)

P-1 0.59×0.56/0.36; III群B類

P-2 0.52×0.45/0.34; III群A類

炉に配された土器

小P-1	0.22×0.21/0.21	小P-2	0.19×0.17/0.10
小P-3	0.22×0.20/0.23 ; V群土器	小P-4	0.38×0.37/0.13 ; II群、III群B類
小P-5	0.24×0.19/0.10	小P-6	0.30×0.27/0.41 ; IV群A類
小P-7	0.33×0.28/0.49 ; III群B類、V群	小P-8	0.27×0.25/0.26 ; III群A・B類、V群
小P-9	0.21×0.21/0.18 ; IV群A類	小P-10	0.27×0.24/0.21
小P-11	0.20×0.16/0.12	小P-12	0.17×0.17/ ; V群
炉-1	0.58×0.51/0.08	炉-2	0.35×0.17/0.05 ; III群B類

時期 繩文時代中期後葉III群B₂類土器の時期と思われる。

GH-6 (図III-23~29、図版12-1・2・13、14-1)

位置 O-61・62、P-60・61 規模 3.92×3.54/3.70×3.20/0.55 m

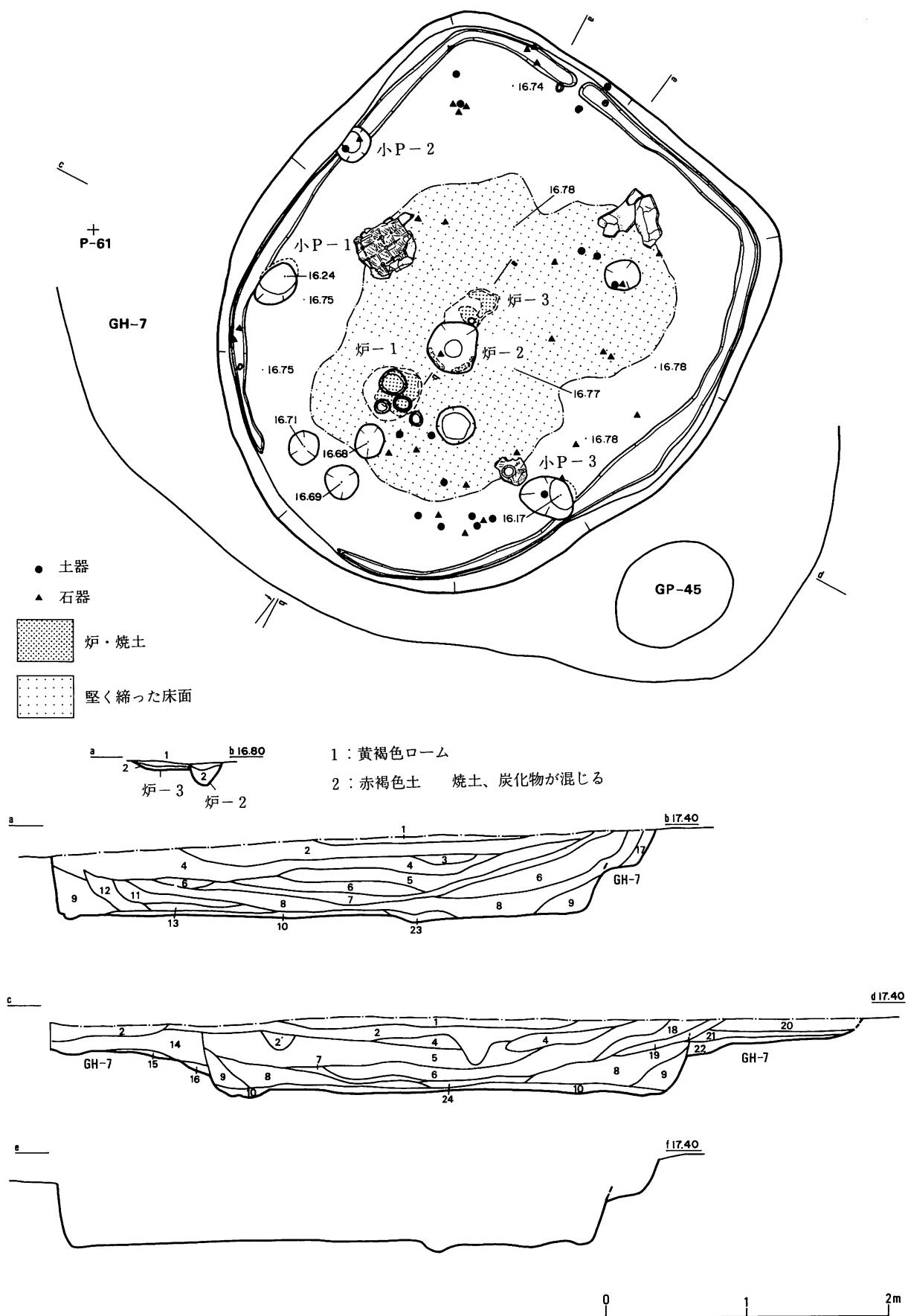
特徴 第III層中位で黒褐色土の落ち込みを確認した。GH-7と重複している。本遺構の方が新しい。平面形は楕円形の長軸方向の一端をまっすぐに断ち落したような形で、北側壁が直線的で南側壁が丸味を帶びている。周溝は南側の丸味のある部分と北側で一部途切れるほかはほぼ一周する。

重複 周溝は10~20 cm深さは5 cm程である。壁は全周でほぼ垂直に立ち上がる。床面は凹凸があり壁から50~60 cmほど内側の部分は黄褐色ロームが貼ってあり踏み固められたように堅くなっている(網の部分)。炉は3箇所検出された。炉-1は比較的深く掘り込まれ炭化物がまじる赤褐色焼土が堆積し3個の小さな杭穴状ピットが穿たれていた。炉-2と炉-3は床面に貼ってある黄褐色ロームを取り除いた段階で検出された。いずれも浅く炉-2は炉-3を掘り抜いて作かれている。炉-1が一番新しく、炉-3→炉-2の順で作り替えられている。径が20 m程、深さ10 cm内外の浅い皿状のピットが炉の周辺から4個、北側の壁から60 cmほど離れた位置から1個検出された。

周溝 炉の焼土中からは獸骨片、小P-1からはオニグルミの堅果が出土している。

小ピット 覆土は、1：黒褐色土(細かいローム粒が混じる)、2：黒褐色土(細かいローム粒と炭化物が混じる)、3：暗黄褐色土(4よりもロームが多い)、4：暗黄褐色土(3よりも黒色土が多く径2 mmから3 mmほどのローム粒と炭化物が混じる)、5：暗黄褐色土(やや大きなローム粒が不均一に混じりロームの量が多く炭化物も混じる)、6：暗黄褐色土(比較的大きな炭化物とローム粒が混じり8よりもロームが少ない)、7：茶褐色土(炭化物が多くやや黒味を帶びる)、8：灰褐色土(ロームの量が多く径1 cm前後のローム粒とごく少量の炭化物が混じる)、9：暗黄褐色土(壁ぎわに堆積する、大きなローム粒が多量に混じり、12層よりもロームが多い)、10：黒褐色土(床面に堆積し大きなローム粒が混じる)、11：灰褐色土(径2 mmほどの細かいローム粒が混じる)、12：暗黄褐色土(11・9層よりも黒みを帶びる)、13：茶褐色土(ロームの量が少ない)、14：暗黄褐色土(硬い)、15：暗黄褐色土(非常に硬い)、16：暗黄褐色土(ローム粒をわずかに含む)、17：暗黄褐色土、18：茶褐色土(細かいローム粒を含む)、19：暗茶褐色土(18よりも黒色土が多く黒味を帶びる)、20：暗黄褐色土(非常に細かいローム粒が混じり硬い)、21：茶褐色土(硬く炭化物が混じる)、22：黄褐色土(硬く大きなローム粒が混じる)、23：黒褐色土、24：茶褐色土(床面付近に堆積し黒色土に炭化物が混じる)。

遺物 床面からIII群B₁類(1)、II群B類、III群A類(4・5)、IV群A類土器と石鏃(77)、つまみ付きナイフ(84)、スクレイパー(102・106・112)、石斧(124)、たたき石(134・135・138)が出土した。覆土からはII群B類(6~9)、III群A類(10~29)、III群B類(2・3・30~58)、IV群



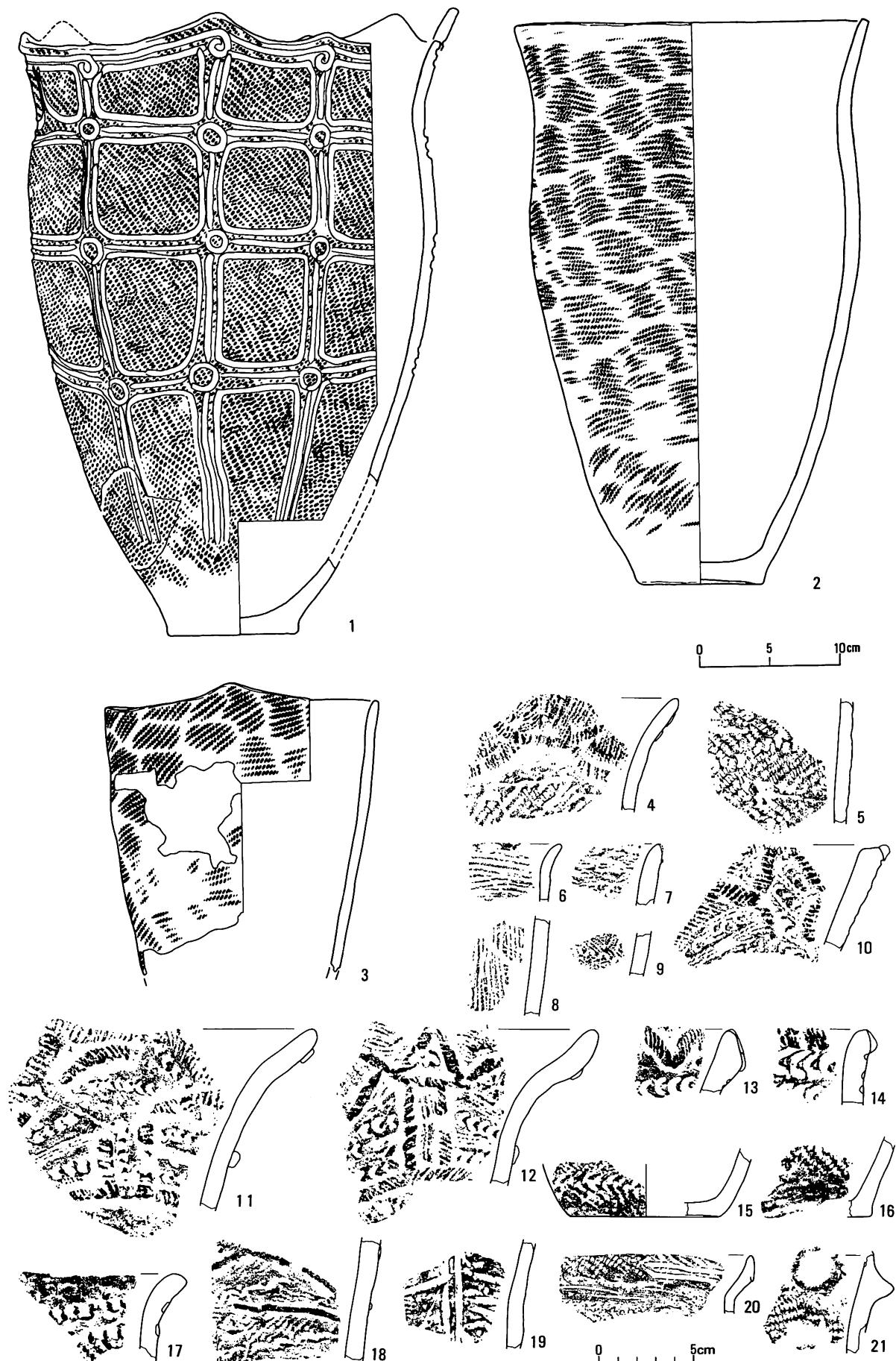
図III-23 GH-6

A類(59~65)、IV群B類(66)、IV群C類(67)、V群(68~72)土器と石鏃(73~76、78~81)、ドリル(83)、ポイントあるいはナイフ(82)、スクレイパー(85~101、103~105、107~111、113~123)、石鋸(125)、すり石(126~128、136)、北海道式石冠(129)、ストーンリタッチャー(130・131)、たたき石(132・133・137)、くぼみ石(139・140)、石錐(141)、有孔石(142・143)、などが出土している。

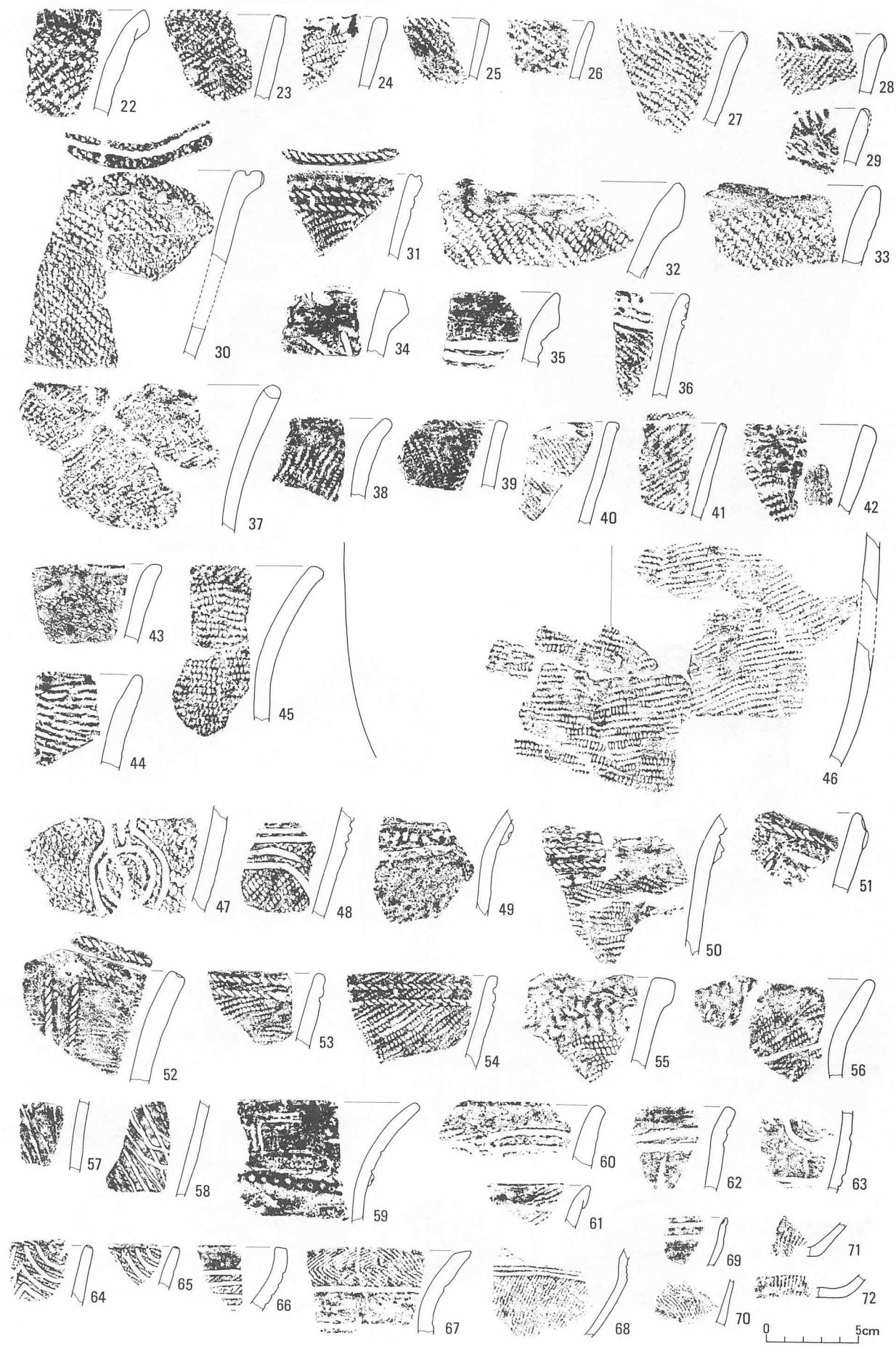
床面出土の土器

1は床面から出土した。胴部から上の部分と底部が離れた位置から出土したものである。大型の深鉢形土器。胴部が張り出し頸部がややくびれ口縁部が外反する。大きさに比べて底部が小さく不安定な土器である。口唇は角形で磨かれている。3箇所に山形隆起部をもちそのすぐ横には小さな隆起があり大小の隆起部で一対になっている。体部にはRL原体による斜行繩文がほぼ全面に施されている。底部付近は磨かれて無文となっている。文様は口唇直下に太い沈線を口縁にそってめぐらしそれぞれの隆起部に対応する位置と大きな隆起部と小さな隆起部の中間の位置で渦巻文を描いている。胴部には渦巻文に対応して縦に3個円形文が配され渦巻文と円形文の間には縦横を一列につなぐように沈線が施されている。一番下位の円形文から伸びる縦の沈線は途中でとまっている。四角形に区画された部分の内側は沈線でさらに枠取りされている。焼成が非常に胴上半部にはところどころに炭化物が付着し茶褐色から黄褐色、胴下半部は赤褐色を呈する。口唇から内面にかけては丁寧に磨かれており、内面は口縁部から胴半ばまでは赤褐色で底部付近は炭化物が付着し黒褐色を呈する。胎土には小砂利が多い。2は平縁の大型深鉢形土器。1の土器よりもわずか5cmほどの上位の覆土最下層から出土した。底部はややあげ底気味である。胴部がわずかに張り出し口縁が緩やかに外反する。胴部の張り出し、頸部のくびれは1ほど強くない。口唇は角形で磨かれている。器面にはLR原体による横走気味の繩文が施され、底部付近では斜行気味になっているところもある。底部は磨かれている。口縁部は繩文施文後磨かれ無文になっているところがある。焼成は非常に良く胴上半部は黒褐色、底部付近は赤褐色を呈する。内面は丁寧に磨かれている。胎土には小砂利が多い。3は2箇所に山形隆起部をもつ中型の深鉢形土器。胴下半部から下は欠損している。胴部から口縁にかけて直線的に立ちあがる。口唇は丸味を帯びた角形で磨かれている。器面にはLR原体による繩文が口縁部付近で斜行気味、胴部では横走気味に施されている。胎土には小砂利が多く胴上半部は黒褐色、下半部は赤褐色を呈する。器面には炭化物が付着する。6は条痕が横位に施されている。器壁は薄く焼成は良い。9は結束羽状繩文が施されている。10~17はIII群A₂類、18~29はIII群A₃類に相当するもの。10~14には貼付帶で文様が描かれている。17は無文地に角形の棒状工具で刺突文が施されている。18は繩文地に細い貼付帶で文様が描かれている。19は沈線で文様が施されている。23・27・29は口唇に繩による刻み目が、28には棒状工具による刻み目がつけられている。30~46はIII群B₁類相当のもの。30は波状口縁を呈する。口唇を肥厚させ器面と同じ繩文を施し、太い溝状の沈線を1条ひいている。器面にはLR原体による斜行繩文が施されている。31は体部にLR原体による斜行繩文が施されている。口縁部と口唇上には同じ原体で繩線がつけられている。32は口唇を肥厚させた後、磨きをかけて幅の狭い無文部を形成している。体部にはRL原体による斜行繩文が施されている。焼成は良い。34~36は沈線で文様が描かれている。34は肥厚させた口唇に渦巻文が描かれている。37~46は繩文のみが施されているもの。42~44~46には横走気味の繩文が施されている。44は無節。45は口縁が強く外反する。47~48は大木8b式相当のもの。太い沈線で円形の文様が描かれている。49~59はIII群B₂類相当のもの。49は隆帶上に竹管状工具で刺突文が施されている。50は体部に横走気味の繩文が施されている。隆帶上とその上位には繩線がつけられている。51~54は口縁部に繩線で文様が描かれている。51~52は山形隆起部をもつもので、

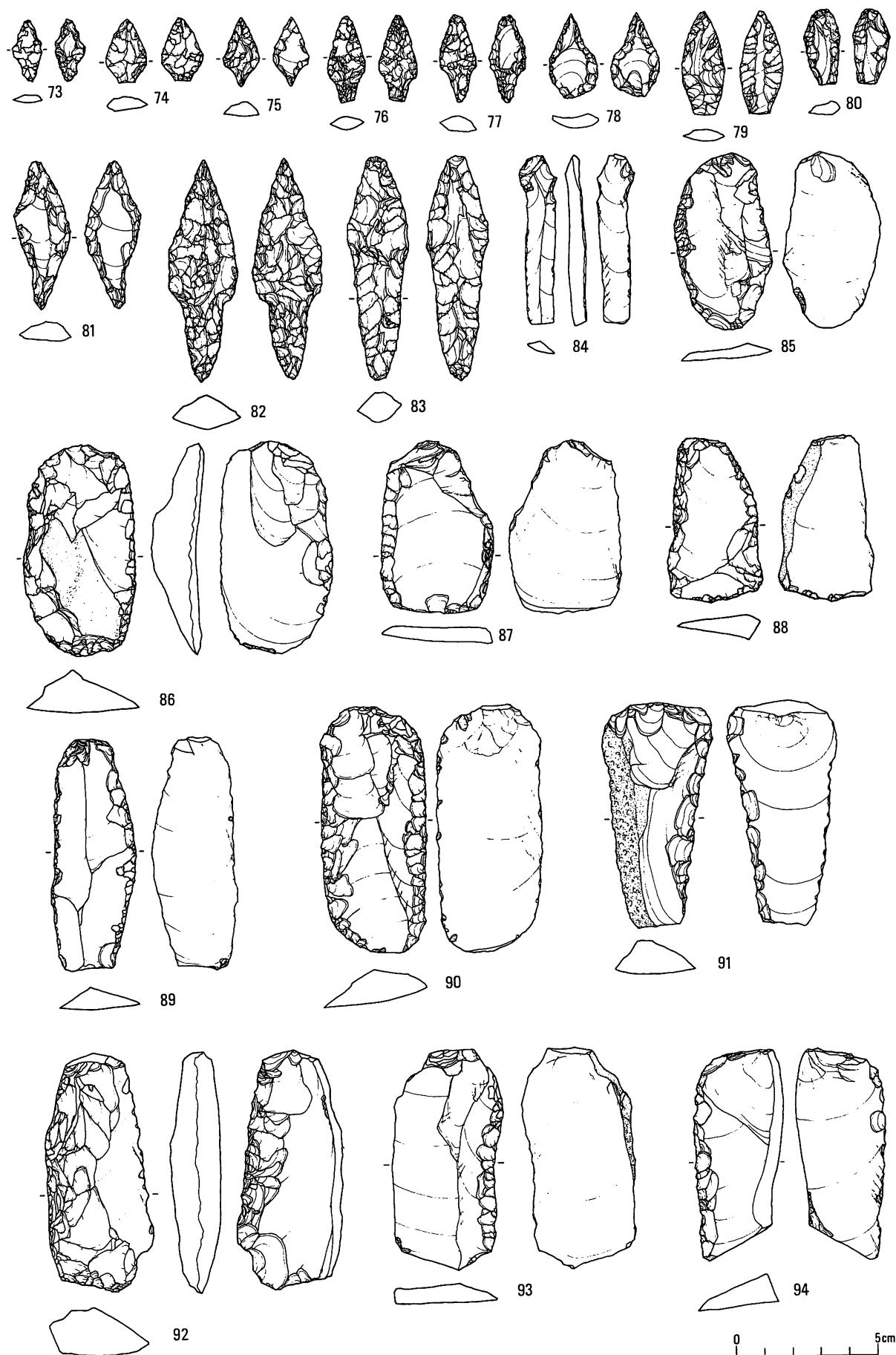
覆土最下層出土の土器



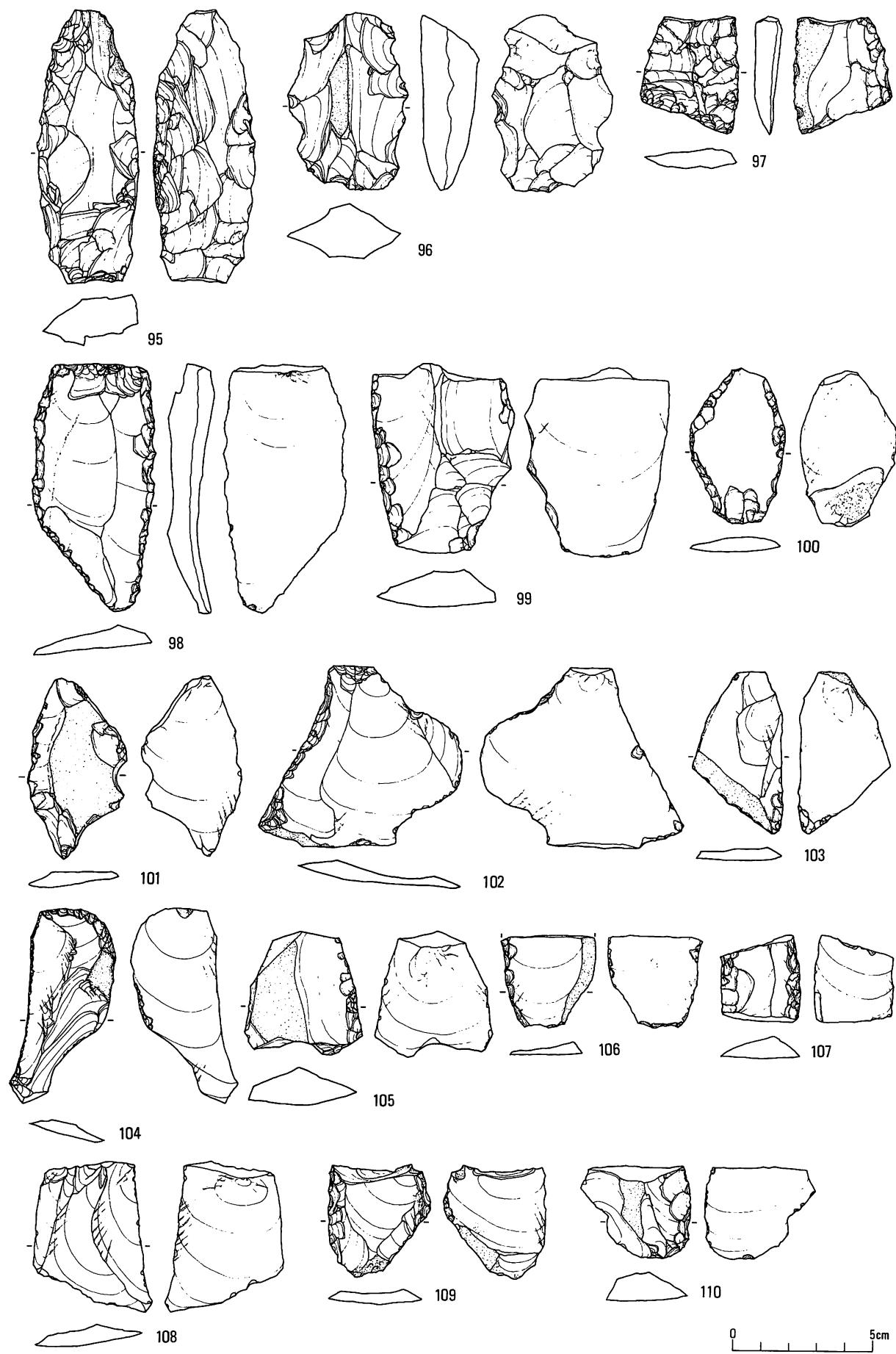
図III-24 G H-6 出土の土器 (1)



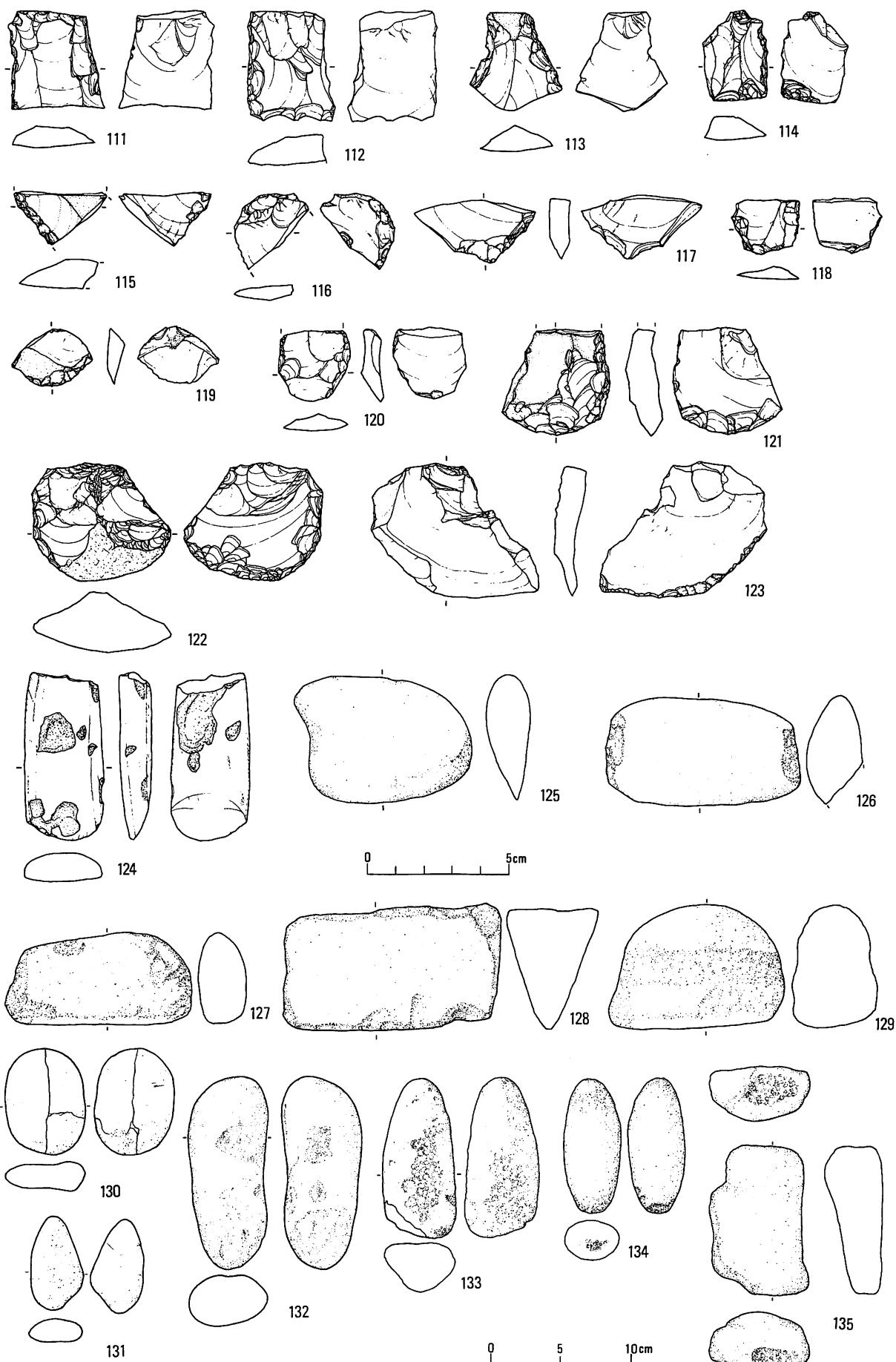
図III-25 GH-6 出土の土器 (2)



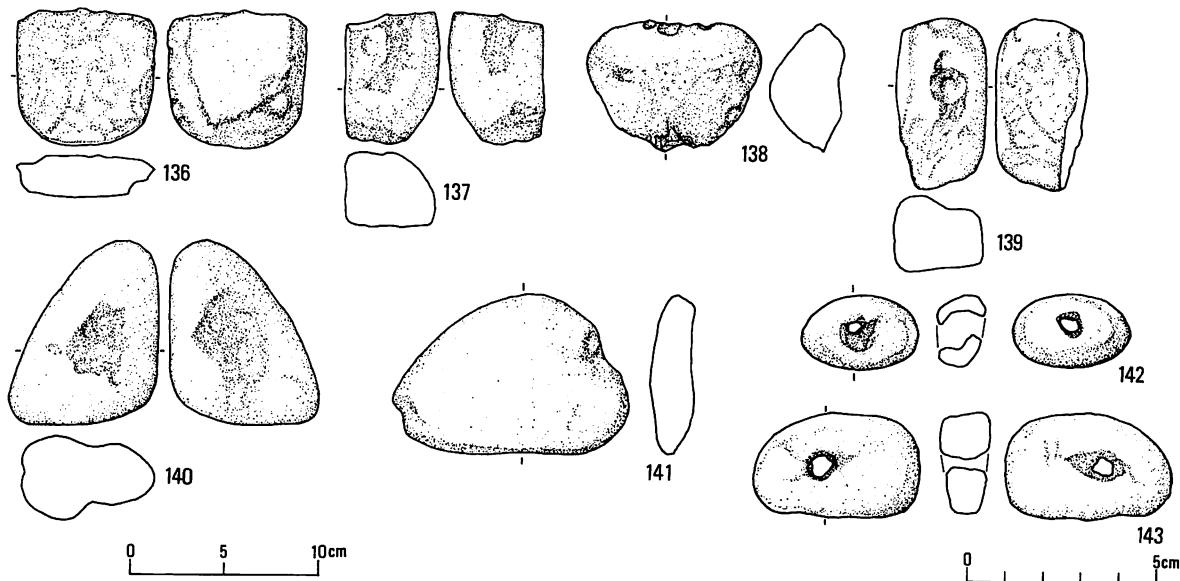
図III-26 GH-6 出土の石器 (1)



図III-27 GH-6 出土の石器 (2)



図III-28 G H-6 出土の石器（3）



図III-29 G H-6 出土の石器 (4)

口縁に沿ってつけられ、縦方向にもつけられている。52は横走気味の繩文のもので、口唇上にも繩線が施されている。55は緩やかな2個一対と思われる隆起部をもつ。口縁部は肥厚し磨かれている。器面には横走気味の繩文が施され肥厚部にそろそろ半截竹管状工具で刺突文を施している。57・58は撚糸文が施された胴部破片。59は口縁部が大きく外反する。頸部に隆帯をめぐらし隆帯上には、竹管状の工具で刺突文が施されている。口縁部には細い沈線で文様が描かれている。器面には炭化物が付着している。60~62は盛土1類相当のもの。61は折り返し口縁のもの。64・65は盛土4類に相当するもの。口縁は角形で繩文が施されている。67は壺形土器。口唇断面は切り出し形をしている。器面には羽状繩文が施され頸部には無文帯が設けられている。68は頸部に無文帯が形成されている鉢形土器。肩がやや張りだす器形のもの。体部には斜行繩文が施されている。

石 器 73~77は有茎凸基、78~80は木葉形あるいは柳葉形の円基、尖基のもの。81は菱形の尖基のもの。
黒曜石製 82は有茎のもので黒曜石製である。83は両端に機能部がある。84は細長の縦形剥片につまみ部をわずかに作り出している。85~94、97~123は周辺加工で刃部を作り出している。88は鋸歯状の刃部をもつ。95・96は両面加工のもの。これらは剥片の形状をあまり変えることなく刃部を作り出している。125は断面がV字形を呈するもの。127は半円状扁平打製石器と称されているもの。128は断面が三角の角柱礫に非常に幅の狭い使用面がある。132・133は両面に、134は一端に、135は両端に、136は側縁に、137は両面と一端に使用痕がある。139は一面に、140両面にくぼみがある。141は長軸に打ち欠きがある。142と143は泥岩の自然の有孔石。

炉の規模 (長径×短径/厚さm)

炉-1 0.32×0.12/0.05 炉-2 0.34×0.30/0.06

時 期 繩文時代中期後葉III群 B₁ 類土器の時期

GH-7 (図III-30・31、図版12-1・3、14-2)

位 置 O-61・62、P-60~62 規 模 —————/————/0.22 m

特 徴 GH-6 を調査中に確認できた。GH-6、GP-45 と重複する。いずれも本遺構のほうが古い。重複 GH-6 の構築により中央部が掘りぬかれ、北西部は発掘区域外におよんでいる。北側から西側にかけての部分は上部が削平されているためか明瞭にとらえられなかった。平面形は長円形あるいは橢円形かと思われる。床面は凹凸があり堅い。壁の立ち上がりは北西側ではとらえることができなかつたが、確認できた範囲ではやや急角度で立ち上がっている。柱穴は南側壁から 50 cm ほど離れた位置から 1 個検出された。小ピットは 5 個検出された。また浅い皿状のピットが 2 個検出されたが、いずれも GH-6 の構築により半分以上が失われている。覆土は GH-6 と一括して記載する。

遺 物 床面から II 群 B 類 (6)、III 群 A₂ 類 (1) 土器が出土した。覆土からは II 群 B 類 (2~5)、III 群 A 類 (7~9)、III 群 B 類 (10・11)、IV 群 A 類 (12~14)、V 群 (16~19) 土器と石鏃 (21)、ポイント (22)、スクレイバー (23~27)、石斧 (28)、たたき石 (29・30)、台石 (31)、コア、U フレイクなどが出土した。

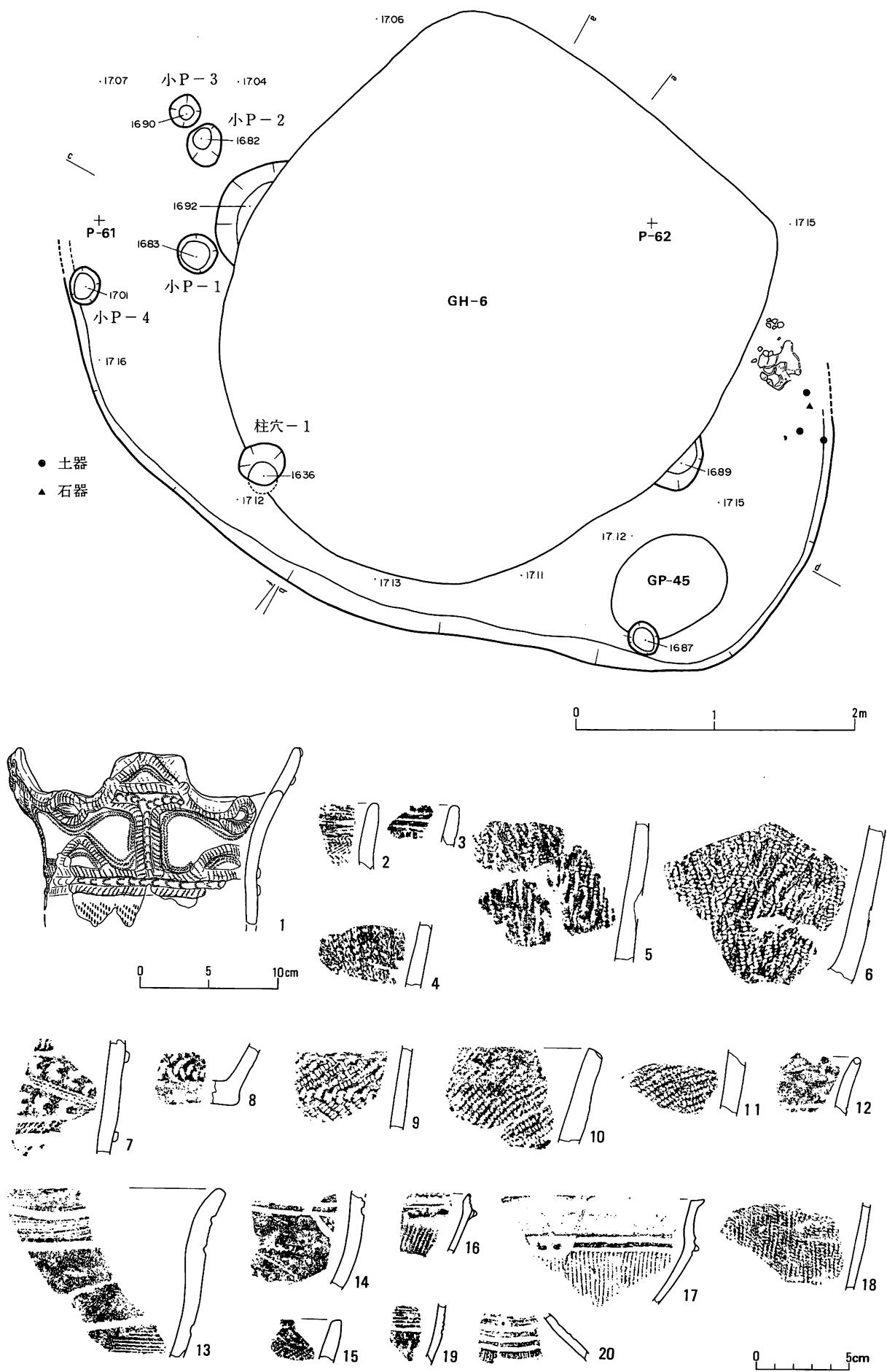
1 は南東側の床面から出土したものである。胴部から下は欠損している。口縁の四箇所に弁状突起をもうけている。文様帶は胴上半に限られるようで、胴部との境は 2 本の貼付帶により区切られている。体部には斜行繩文が施されている。文様は無文地に貼付帶で弁状突起下に 2 本垂下する文様を描き突起間は弧状の貼付帶で結ばれている。口縁直下にも貼付帶がつけられている。貼付帶間に 3 本組の繩線と馬蹄形圧痕文が加えられている。器面は磨滅し、茶褐色を呈する。2 は体部に結束第 1 種羽状繩文がつけられている。口縁には撫りの異なる原体を 2 本組にした繩線が平行あるいは斜めにつけられている。3 は体部に撫糸文が施されていると思われる。口縁には細い繩線が 3 条めぐる。4 は多軸絡条体の回転による撫糸文が施されている。5・6 は撫り戻しの原体による繩文がつけられている。10 は口唇にも繩文が施されている。12 は口唇に深い刻み目がある。13 は盛土 1 類に相当する。無文地に櫛状工具で文様を描き、太い沈線で縁取りするもの。16 は肩部が張り出す深鉢形土器と思われる。狭い頸部に沈線が 3 条引かれ、その下位に 2 個一対の突起がつけられている。体部は縦行繩文。口縁には炭化物が付着し、内面にはヘラ削りの痕跡が残る。

24~27 は剝片の形をほとんど変えることなく周辺加工により刃部を作り出しているスクレイバー。29 は一端と側縁に、30 は両端と側縁に使用痕があるたたき石。

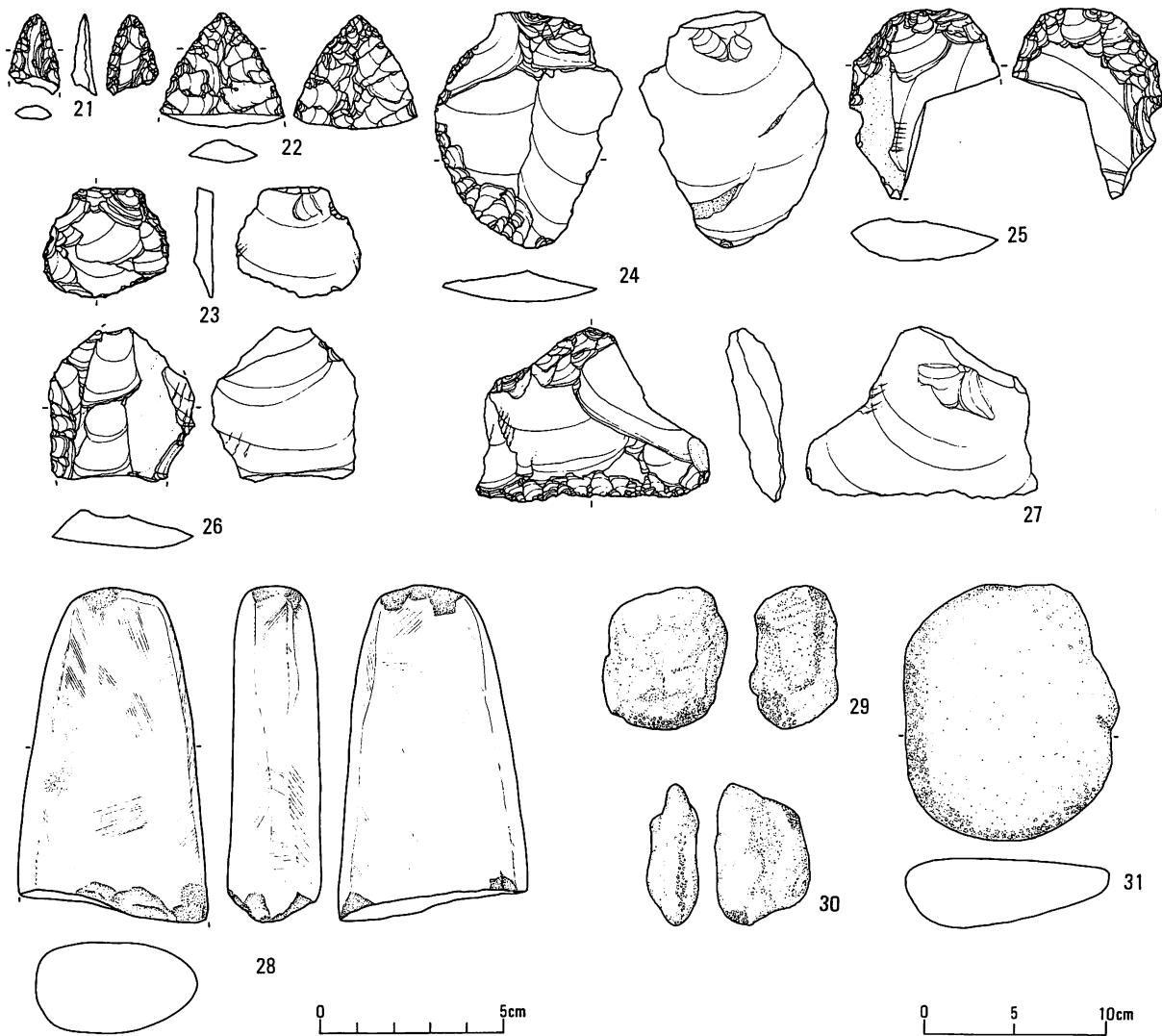
柱穴・小ピットの規模 (長径×短径/深さ m)

柱穴 1	0.34×0.30/0.76	小 P-1	0.29×0.28/0.28	小 P-2	0.29×0.25/0.22
小 P-3	0.23×0.22/0.14	小 P-4	0.27×0.21/0.15	小 P-5	0.26×0.21/0.25

時 期 繩文時代中期前葉III群 A₂ 類土器の時期柱穴
小ピット床面出土の
土器



図III-30 GH-7 と出土の土器



図III-31 G H-7 出土の石器

GH-8 (図III-32)

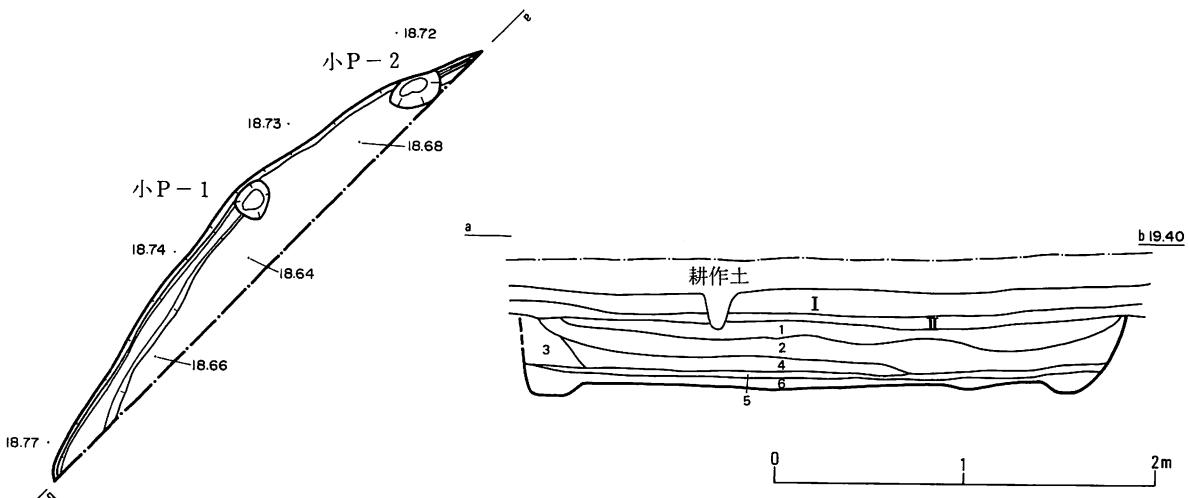
位 置 Z-55

規 模 —————/————/0.40 m

特 徴 発掘調査区境界の土層断面で確認できた。掘り込み面は第III層上部である。遺構の大部分は調査区域外におよんでおり壁ぎわの部分をわずかに検出したのみである。床面は凹凸があり軟らかい。壁にそって幅 10 cm 内外、深さ 5 cm 程の浅い溝がめぐっている。また溝を切断するかのように浅いピットが 2 個検出された。覆土は主に茶褐色土が混じる土である。砥石、礫、フレイクが出土している。掘り込み面が第III層上部であること、床面が黄褐色ロームをあまり掘り込んではいないこと、周溝の存在から判断すると GH-9 と同時期 (繩文時代後期前葉IV群A類土器の時期) である可能性が強い。

小ピットの規模 (長径×短径/深さ m)

小P-1 0.20×0.17/0.31 小P-2 0.24×0.14/0.28



図III-32 GH-8

GH-9 (図III-33~39、図版15~19)

位置 W-55・56、X-55・56

規模 5.24×——/0.05×——/0.32 m

特徴 昭和60年度B地区で発見された盛土の続きを確認するために、調査区南西部の発掘区域境界にそって幅50cm程のトレンチを入れた結果、盛土が確認されるとともに盛土の末端部を掘り込んで(図III-133)竪穴住居が発見された。掘り込み面は第III層上部の盛土(盛土4層)中である。南西部の5分の一程度が発掘区域外に及んでいる。本住居(下位の竪穴住居)は覆土13層中を床面とする上位の竪穴住居と重複している。上位の竪穴は下位の竪穴の形状をほとんど変えることなくその窪みを利用しているらしい。平面形は円形である。壁は耕作による攪乱で一部確認できないところもあったが、ほぼ全周で急角度に立ち上がる。下位の床面は平坦で堅く締っている。上位の床面はこの面のところどころに黄褐色ロームを貼って床面としている。下位の床面からはIV群A類・盛土4類土器(図III-34-2・3)、上位の床面からはIV群A類・盛土5類土器(図III-34-1)が出土している。

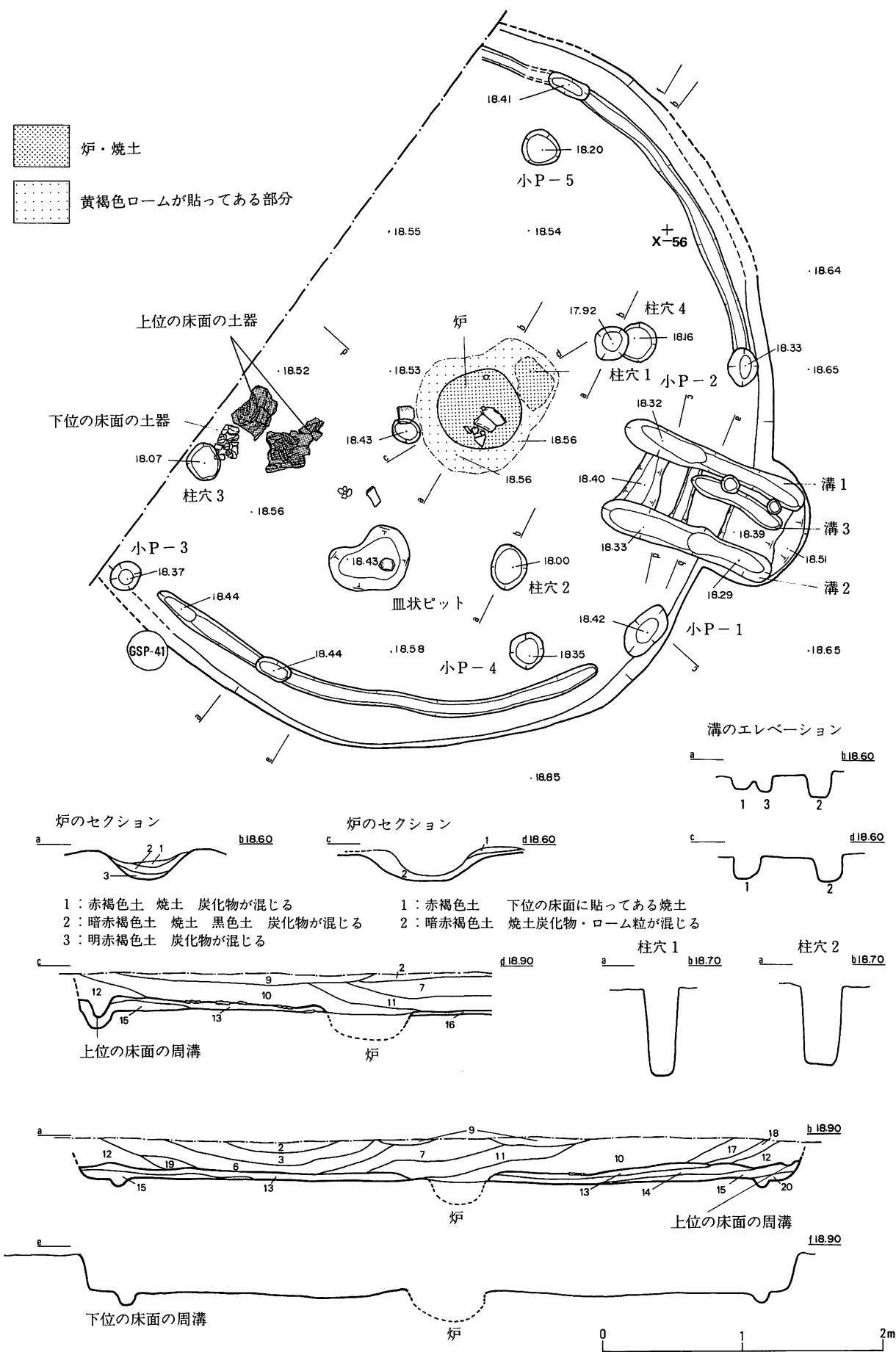
炉 炉は竪穴の中央からやや南東よりの後述する出入口施設に近い位置から検出された。径が60cm程で平面形は円形、断面形が鉢形である。炉の中には硬く締った赤褐色の焼土、炭化物混じりの焼土がびっしりと堆積していた。この炉の周りに貼り付けられている黄褐色ロームを剥ぐと、下位の堅い床面が検出された。このことから下位の炉の周辺に古い焼土や黄褐色ロームを貼り付け嵩あげし(網の部分)上位の竪穴の炉として使用していたことがわかった。炉の中にはIV群A類土器の大型破片(図III-35-9)が内面を表にした状態で出土した。長い間炉の中に置かれ熱が加えられていたらしく、土器の胎土内部まで真白になっており文様はほとんど消えていた。炉を使用する際の台のようなものであったろうか。

炉の中の土器片

出入口部施設

周溝

出入口部と思われる施設は炉の南東側から検出された(図版15-1)。長さ1.3m、幅20cm、深さ15~20cm程の2本の溝が竪穴内の炉の方向から外に向けて並列してつくられている。溝1の方が2よりもやや浅い。溝の先端は2本とも40~50cm程外側に張り出している。これらの並列する溝の間をつなぐように幅20cm、深さ5~8cm程の幅広の溝と幅10cm程の細い溝がつけられている。溝1の横には長さが3分の2程の短く浅い溝があるが、上位の竪穴を利用する際に新たに掘られたものかもしれない。小さな杭状のピットが2個2つの溝の間に穿たれている。周溝は出入口施設の両端から40~50cm離れた位置で途切れるほか壁から20cm程内側をめぐっている。溝は幅



図III-33 GH-9

柱穴 10 cm 内外、深さ 6 ~ 8 cm である。溝の何箇所かに小さな杭状のピットが穿たれている。図示した周溝は下位の竪穴住居のもので、上位の竪穴のものは平面的にはとらえることは出来なかつたが、土層断面（図III-33、セクション a - b、c - d）からその一部が確認できた。柱穴は 4 個検出された。炉と出入口施設を結んだ線の延長上に左右対称に配されているようである。このうち柱穴 1 と柱穴 4 は重複している。柱穴 1 は上位の竪穴のものであろう。このほか炉の両側から浅い皿状のピット、柱穴とは断定できないが、径が 20 cm 程、深さ 30 cm 程の小ピットから 5 個検出された。床面、覆土下部からオニグルミの堅果、ヤマブドウ、キハダ、覆土中からオニグルミの堅果、クリ、焼けたシカの II、V 末節骨が検出された。

覆土は、1：茶褐色土（径 1、2 mm 程のローム粒が混じる）、2：茶褐色土（3 よりもロームが少ない）、3：暗黄褐色土（硬く、比較的大きなローム粒と炭化物が不均一に混じる）、4：暗茶褐色土（細かいローム粒、黒色土が不均一に混じり、焼粘土と炭化物も混じる）、5：黒褐色土（ボロボロと崩れやすい）、6：暗茶褐色土（径 5 mm 程のローム粒、黒色土が不均一に混じり、炭化物と焼粘土も混じる）、7：暗茶褐色土（細かいローム粒と炭化物が混じり、8 よりもロームの量は少なく黒味を帯びる）、8：明茶褐色土（黄褐色ロームが比較的多く細かい炭化物が混じる）、9：黒褐色土（硬く、非常に細かいローム粒と炭化物がわずかに混じる）、10：茶褐色土（黒褐色土が不均一に混じり、竪穴の中心部に向うほど量が多くなり炭化物も混じる。ボロボロと崩れやすい）、11：茶褐色土（10 よりも炭化物の量が多く、焼土も少し混じる）、12：黒褐色土（黒味が強く、細かいローム粒と炭化物が混じる）、13：黒褐色土（炭化物が多く粘性があり、非常に細かいローム粒が少し混じる。この層中に上位の竪穴住居の床面がある）、14：暗黄褐色土（黄褐色ロームのブロックが多量に混じり、炭化物、焼土も混じる）、15：暗黄褐色土（下位の床面に貼ってある比較的硬いロームで汚れており、炭化物と径 5 mm 前後のローム粒が混じる）、16：黄褐色土（硬い黄褐色ロームを主とする土で汚れており 15 と似ている。下位の床面直上の土である）、17：茶褐色土（やや黒味を帯びて炭化物が混じる）、18：茶褐色土（炭化物と細かいローム粒が混じる）、19：暗黄褐色土（6 よりも黄褐色ロームが多い）、20：黒褐色土。

遺物 床面から IV 群 A 類（1 ~ 3、10 ~ 13）、II 群、III 群 A 類土器とすり石が出土した。覆土からは I 群、II 群（8、14 ~ 20）、III 群 A 類（21 ~ 33）、III 群 B 類（34）、IV 群 A 類（4 ~ 7、35 ~ 61）、V 群土器と石鏃（62 ~ 77）、ドリル（78）、つまみ付きナイフ（79 ~ 80）、スクレイパー（81 ~ 104）、すり石（105 ~ 106）、たたき石（107 ~ 116）、くぼみ石（117 ~ 118）、台石、砥石（119）、石製品（120 ~ 124）が出土している。炉からは IV 群 A 類（9）土器が出土している。

上位の床面出土の土器 1 は上位の床面から押し潰されたような状態で出土した。盛土 5 類相当のもの。緩やかな波状口縁の大型深鉢形土器。胴部がやや張り出し口縁部に直線的に開く、口唇は角形で磨かれている。頸部のくびれ部には沈線で区画された幅の狭い無文帯が形成されている。口縁部には 1 条沈線が施され、磨消繩文により横長の区画文が 8 箇所に配されている。胴下半部には 2 条沈線が施され、沈線で区画された中に磨消繩文で大柄な「J」字状の入組文が描かれている。肩部には沈線で波状文が施されている。繩文は RL 原体によるものである。焼成は非常に良く内面から口唇上にかけて磨かれている。胴部には炭化物が付着する。胴部下半は欠損している。2・3 は下位の床面から出土した。盛土 4 類相当のもの。2 は緩やかな波状口縁の中型鉢形土器。口唇は丸味のある角形で磨かれている。口縁部は無文で、胴部には沈線で区画されて文様帯が上下に 2 段ある。文様は沈線で「乙」字文を 2 条横位方向に展開させて、文様帯の部分にのみ LR 原体による繩文を不規則な方向に粗く施文している。焼成は良く灰白色を呈する。胎土には砂が多い。3 は平縁の中型深鉢形土器。底部は



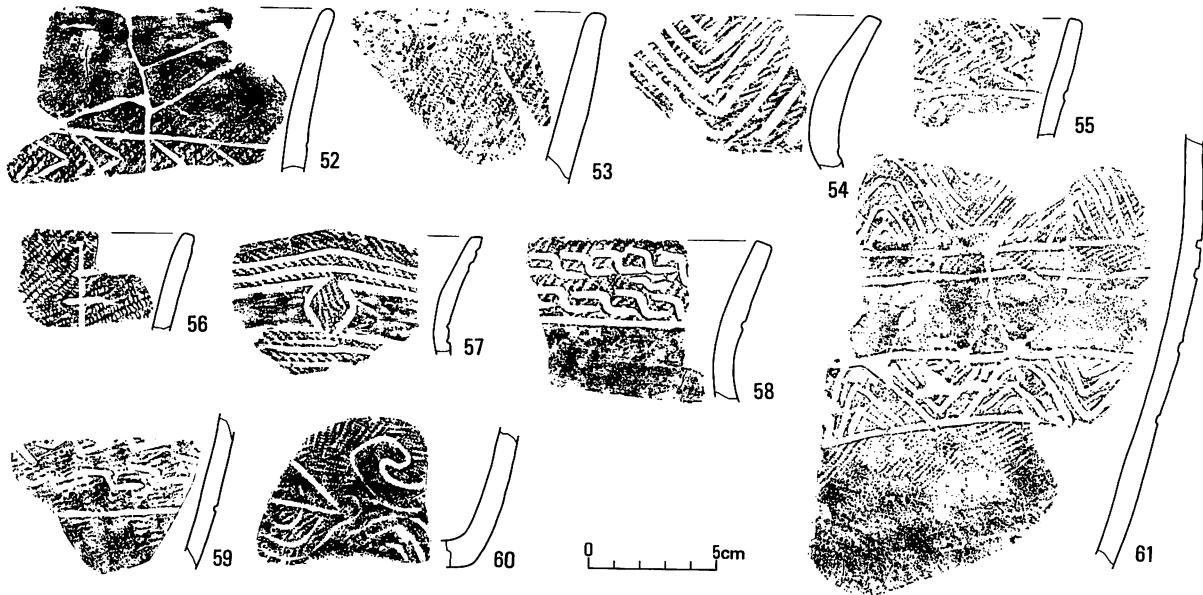
図III-34 GH-9 出土の土器 (1)



図III-35 GH-9炉出土の土器(9)と拓本展開図(図III-34-1)



図III-36 G H-9 出土の土器 (3)



図III-37 G H-9出土の土器 (4)

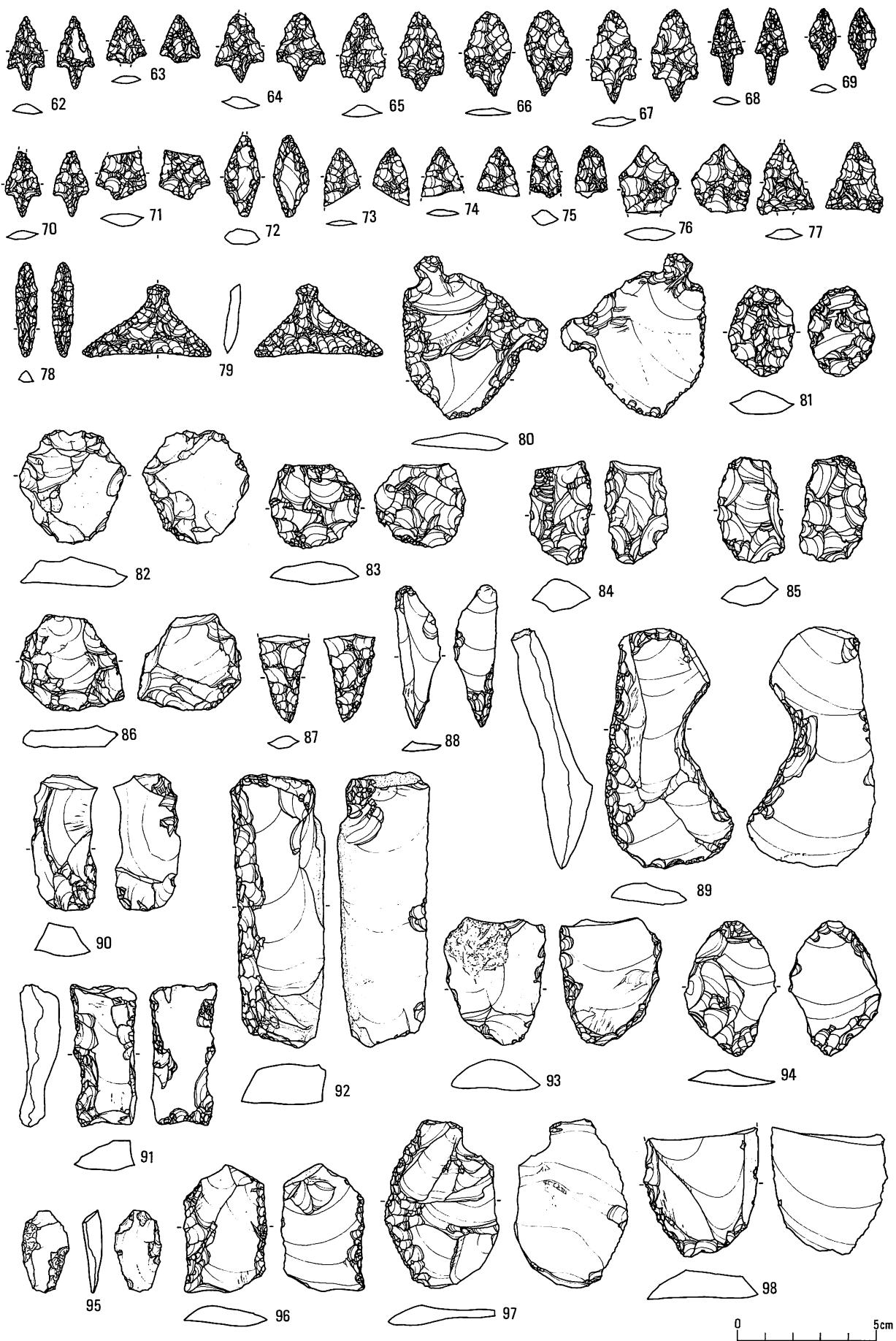
輪積みの位置で欠損している。文様帶は2と同様に沈線で区画され2段に構成されている。上段には縦に蛇行する沈線、下段には「乙」字文をそれぞれ横位方向に展開させて、その部分にのみLR原体による繩文を施している。焼成は良く灰黄色を呈する。内面には調整痕が残る。9は炉と住居跡の覆土中から出土したもので図の網の部分の土器片が炉の中央に内面を表にして置かれていた。口縁部は欠損している。胴部がわずかに張り出す円筒形の深鉢である。盛土4類かと思われる。二次焼成を受けて全体に灰白色を呈している。特に炉の中にあった部分は文様がほとんど磨滅している。頸部に1条沈線がめぐり体部には繩文地に沈線で縦に等間隔に平行線を施し、その間を山形の文様を充填させている。10は胴が張らず口縁が直線的に開く平縁の深鉢形土器。盛土5類相当のもの。口唇は角形、頸部には狭い無文帶が形成されている。口縁部には繩文地に沈線で鋸歯状文が描かれている。胴部には磨消繩文で「カニのハサミ」状の文様と沈線で硬化した渦巻文が描かれている。外面には炭化物が付着している。12は無文地に横走沈線と「乙」字文を横環させる文様が施されている。沈線上には竹管状工具で刺突文がつけられている。13は波状の口縁部に斜行繩文が施され3条単位の沈線をそわせている。頸部にも沈線がめぐり下位には刺突がつけられている。

8は円筒形深鉢形土器。口唇はやや尖り気味である。口縁にはL原体による繩線が3条施されている。体部には網目状撲糸文（単軸絡条体第6類）が施され、結束羽状繩文が5段重ねられているが羽状にならず斜行繩文の部分のみが施されているところもある。胴上半部は赤褐色を呈する。内面は磨かれ赤褐色を呈する。14は撲り戻しの原体による繩文のもの。15は無節の繩文が施されている。17は多軸絡条体の回転文。18は口縁部に2条一組の繩線が施されている。21~24はIII群A₂類相当のもので貼付帶により文様が施されている。25~32はIII群A₃類相当のもの。25・26は同一個体の破片と思われる。山形突起部をもつもの。口唇と突起部を肥厚させその上に繩文を施している。器面にはRL原体による斜行繩文を施した後綾絡文を重ねている。文様は突起部下に太い沈線を4・5条垂下させ、そこから左右に口縁に沿う沈線を配している。焼成は良く黄褐色を呈する。27は口唇に細い棒状工具で刻み目がつけられている。29は細い沈線で文様が描かれている。32はサケタイプの魚骨回転文が施されている。35~41は盛土1類相当のもの。35~40は無文地に沈線で文様が描かれている。35は山形隆起部をもつもの。隆起部とその両側に指頭によると思われる圧痕がつ

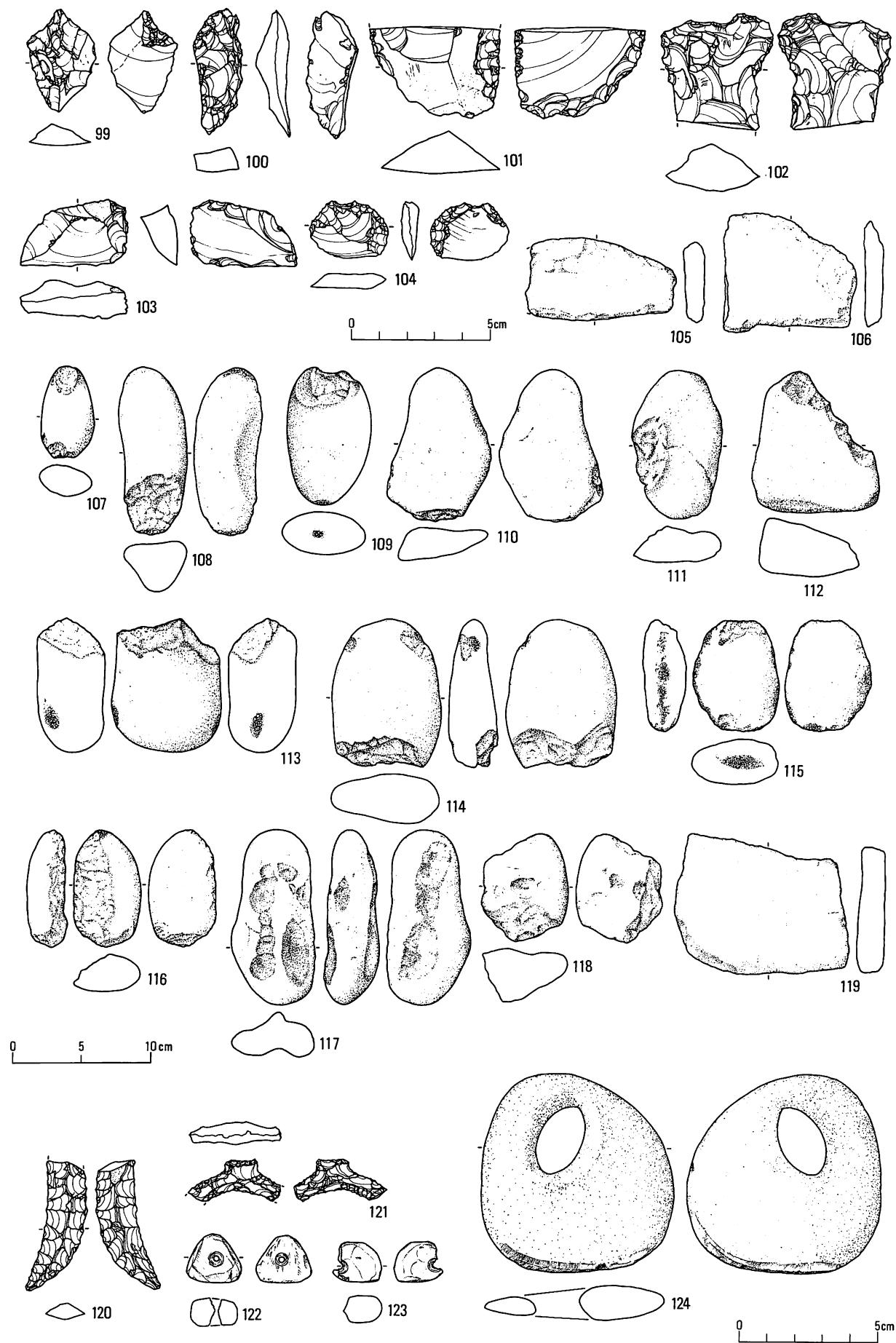
炉の中の土器

二次焼成

網目状撲糸文



図III-38 GH-9出土の石器（1）



けられている。体部は無文地に細い沈線で文様が描かれている。36にも同様の圧痕がある。37は口唇に細い棒状工具で斜めの刻み目がつけられている。41は山形隆起部をもつもの。口縁の無文部に3条の平行繩線がめぐっている。体部には沈線施文後にRL原体による斜行繩文が帶状に施されている。42~46は盛土2類相当と思われる。42は強く外反する口縁の内外面に粘土紐で弧状の文様が描かれ、その上にのみ繩文が施されている。43は内面にも横走する沈線が施されている。46は口唇の断面が切り出し形を呈する。47は無文のもの。4~51は盛土3類に相当するもの。4は平縁の大型深鉢形土器。胴部がやや張り出し口縁が外反する。口縁には幅の狭い無文帶が形成されており、指による整形の跡がある。文様は頸部と肩部にひかれた狭い範囲に限られ、その部分にのみ繩文を施し沈線による大柄な「乙」字文を横位に展開させている。灰黄色を呈しところどころに炭化物が付着する。5~7・49・50・52~55は盛土4類に相当のもの。5は大型の壺形土器。胴下半は欠損している。口縁は緩やかな波状である。頸部には1条沈線が横環する。胴部文様は器面が磨滅していくはっきりしないが、磨消繩文による文様と沈線による「乙」字文が描かれている。胎土に小砂利が多く灰白色を呈する。長い間地表に晒されていたような状態である。6は緩やかな波状の小型鉢形土器。胴部はあまり張らず口縁が外反し、頸部に1条沈線がひかれて幅の広い無文帶が形成されている。体部には磨消繩文で硬化した大柄な渦巻文が描かれている。胎土に小砂利が多く茶褐色を呈する。内外面に炭化物が付着する。7は口縁が緩やかな波状を呈する無文の中型深鉢形土器。頸部に途切れ途切れに沈線がめぐっている。口縁から胴上半部の器内外面には多量に炭化物が付着する。器面に縦方向に調整された痕跡が残り凹凸がある。胎土・焼成・色調は6と良く似ている。54は口縁部に沈線が鋸歯状文が施されている。口唇は角形で繩文が施されている。56~59は盛土5類相当のもの。56・57は非常に焼成が良い土器である。57は薄手で灰白色を呈する。波状口縁のもの。RL原体による繩文地の口唇直下と頸部に沈線が施され、区画された中に磨消繩文で文様を施している。58は頸部に無文帶を設けているもの。口唇は角形で繩文がつけられている。口縁の繩文地には沈線で「乙」字文が2条施されている。61は胴部文様帶が多帶化しているもの。盛土4類かもしれない。

RL原体による繩文

62~66は有茎凹基、67~71は有茎平基、27は菱形の尖基である。78は棒状のドリル。79は横形のもので両面加工がなされている。80はつまみ部を二箇所に設けるもので、片面周辺加工のものである。81~83は円形もしくは楕円形の両面加工のもの。87・88は尖頭部をもつもの。89は内湾する刃部を作り出している。105・106は半円状扁平打製石器と称されているものである。すり面の幅は狭い。107~112は両端もしくは側縁に使用痕がある。113・114は側縁のところどころに、115は両端と側縁のところどころに使用痕がある。117は両面に連続した複数のくぼみがある。120・121は三日月形石器。121は黒曜石製で両端が欠損している。琴柱に似た形をしている。120は頁岩製。断面は菱形で二次加工が両面に入念になされている。122・123はひすい製の玉。122は両方向から穿孔されたもの。孔壁には工具の回転痕が認められる。123は孔の部分から割れているが両方からの穿孔のもの。124は泥岩の自然の扁平な有孔石で、側縁の一部が磨がかれている。垂飾として利用したものかもしれない。

三日月形石器

ひすい製の玉

柱穴・小ピット・炉の規模と出土土器 (長径×短径/深さ (厚さ) m ; 土器)

柱穴 1	0.27×0.24/0.61 ; IV群A類	柱穴 2	0.33×0.25/0.53 ; II群・III群A類
柱穴 3	0.26×0.23/0.49 ; IV群A類	柱穴 4	0.27×0.26/0.37 ; II群
小P-1	0.37×0.22/0.11 ; IV群A類	小P-2	0.27×0.21/0.20 ; II群
小P-3	0.23×0.19/0.19	小P-4	0.25×0.24/0.18

小P-5 0.27×0.25/0.34

皿状ピット 0.58×0.38/0.15; II群

炉 0.58×0.56/0.13

時期 繩文時代後期前葉IV群A類土器の時期

(3) 土 壤

1) フラスコ状ピット

GP-31 (図III-40~44、図版 20~22)

位置 Q-60・61

規模 1.04×1.00/2.30×2.08/1.14 m

特徴 繩文時代後期後葉の住居跡GH-4の東側隅の床面で確認された。G地区で発見された唯一のフラスコ状ピットである。平面形は壠口部、底面ともに不整円形である。中央からやや北よりの底面から径 32×20 cm、深さ 10 cm 程の楕円形の浅いピットが検出された。断面は南西部に非常に

浅いピット

強く張り出す形であるが北側ではあまり張り出さない。壁は全体的にボロボロと崩れやすい。特に壠口部付近は調査中にも何度も崩落しており、本来壠口は相当小さいものであったと思われる。覆土は軟らかい焼土、炭化物、焼骨などが混じる茶褐色土と、壁の崩落土とみなされる黄褐色ロームを主とする硬い土が堆積していた。遺物は堆積が一応連続している3つの層、①覆土 1~4 層、②

崩 落

覆土 6・7・11・12 層、③覆土 13 層・床面、から比較的まとまって出土した。土器はすべて II群 B 類である。特に覆土 7 層からはほぼ完形に復元できた土器が 4 個体、土圧で押し潰され重なった状態で出土した。このような土器の出土状況は II群 B 類土器の比較的短い期間に、数度にわたって埋

II群B類土器

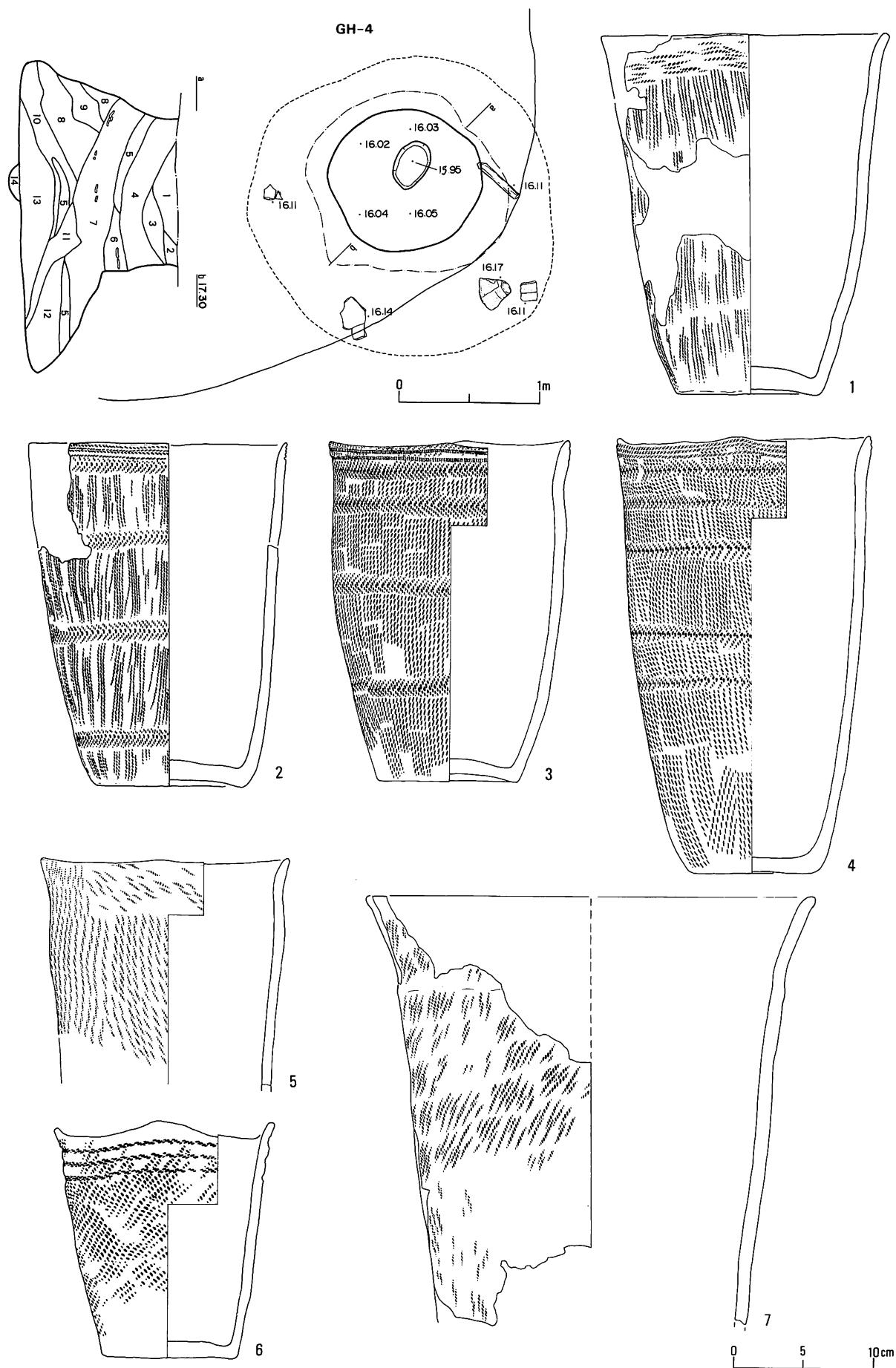
没土の堆積と土器の廃棄

覆土は、1: 暗黄褐色土(硬く、細かい炭化物が比較的多く混じり、黄褐色ローム粒も混じる)、2: 黄褐色土(硬く、ロームにわずかに黒色土が混じる)、3: 暗黄褐色土(軟らかく、非常に細かいローム粒と炭化物が混じり、1よりもロームの量は少ない)、4: 茶褐色土(軟らかく粘性があり、細かいローム粒と炭化物が混じり、1・3 層よりも黒色土が多い)、5: 黄褐色土(軟らかく、ロームが帶状に堆積し、わずかに黒褐色土が混じる)、6: 暗黄褐色土(ボロボロと崩れやすく、遺物が比較的多く出土した層で、焼土が混じり、黄褐色ローム粒、炭化物が多く混じる)、7: 茶褐色土(径 5 mm 程の炭火物とローム粒、焼粘土が多く混じり、軟らかくボロボロと崩れやすく、遺物がまとまって出土している層である)、8: 黄褐色土(硬いローム)、9: 茶褐色土(軟らかく、ロームと黒褐色土が不均一に混じり、ボロボロと崩れやすい)、10: 茶褐色土(ブロック状のロームが不均一に混じり、ボロボロと崩れやすく炭化物がわずかに混じる)、11: 暗黄褐色土(炭化物が多く黄褐色ロームがところどころに混じり、崩れやすい)、12: 茶褐色土(炭化物が非常に多く、黄褐色ロームが不均一に混じる、焼土も混じり、粘性がある)、13: 黄褐色土(硬いロームと軟らかいロームが不均一に混じり、比較的遺物が多い)、14: 暗黄褐色土。

遺物 床面、覆土から出土した土器はすべて II群 B 類土器である。覆土の堆積状態と遺物の出土状況から判断し、1) 覆土 1~4 層出土の土器 (1・8~18)、2) 覆土 6・7・11・12 層出土の土器 (2~5、19~43)、3) 覆土 13 層、床面出土の土器 (6・7・44~54) に分けて記載することとする。石器は床面から棍棒状石器(65)、覆土から石鏃(55)、スクレイパー(57~61)、たたき石(62・63)、黒曜石のフレイク、砥石片、くぼみ石が出土している。

1) 覆土 1~4 層出土の土器 (図III-40-1、-41)

1 は 3 層から出土した。口縁がわずかに外反する平縁の中型の筒形土器。口唇断面は丸味を帯び



図III-40 GP-31と出土の土器

撚り戻しの原体

る。体部にはRの繩を軸に右巻にした原体による撚糸文が底部まで施されている。口縁部には撚り戻しの原体による横走する繩文が施されている。あげ底気味の底面と内面は磨かれている。体上半にはところどころに炭化物が付着し茶褐色を呈する。胴下半は黄褐色である。8・9は同一個体の破片と思われるもの。体部にはやや斜めに撚糸文が施されている。口縁部にはLR原体による繩線が施されている。10は口縁部付近の破片と思われ、RL原体による斜行繩文地に同じ原体によると思われる繩線が施されている。11には撚糸文が、12~14には撚り戻しの原体による繩文が施されている。12の内面は黒光りする。13は繩文施文後へラ状の工具で器面を調整している。15は撚糸文が施されている破片。擦り切り痕が残る。16・17は同一個体と思われる。比較的幅広となると思われる口縁部に横方向に条痕文が施され、LR原体による繩線を縦方向につけている。体部にはLR原体を縦方向に回転させ、口縁部との境目に中空の棒状工具で下から斜めに突く刺突文がめぐっている。内面は丁寧に磨かれている。18は絡条体圧痕文が施されている。

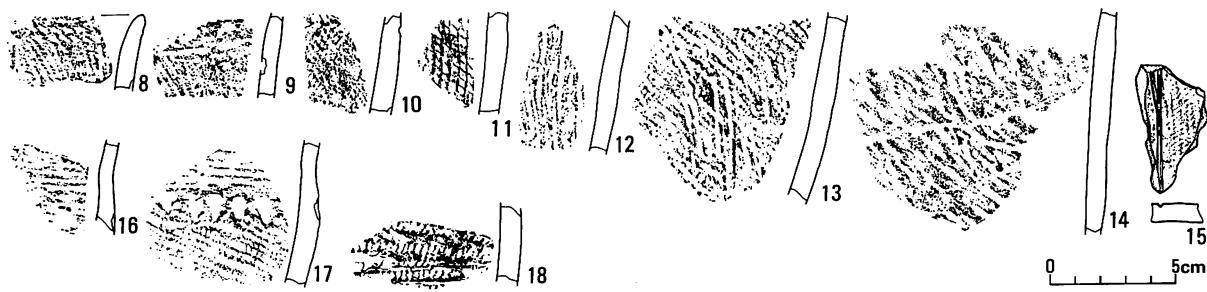
2) 覆土6・7・11・12層出土の土器 (図III-40-2~4、-42)

2~4は7層からまとめて出土したものである。2は平縁の中型筒形土器。口唇の断面は尖り気味である。体部にはRの繩を軸に右巻にした原体による撚糸文が不規則に浅く施文されている。軸に繩を巻く際の間隔が密なところと疎のところがあって不揃いになっているようである。撚糸文には結束第1種羽状繩文が3段重ねられている。口縁部には羽状繩文後に撚りの異なる2本一組の繩線が2条施されている。口唇から内面にかけてと、あげ底気味の底面は磨かれている。全体的に黄橙色を呈し体上半と内面下半部に炭化物が付着する。3は不規則に波打つ中型の筒形土器。口唇の断面は尖り気味である。体部には結束第1種羽状繩文とLの繩を軸に左巻にした原体による撚糸文とを上から順番に交互に施文している。口縁部には羽状繩文施文後軽く磨がかれ絡条体圧痕文が2条口縁に並列して施されている。内面から口唇にかけては丁寧に磨かれている。あげ底気味の底面も磨かれている。焼成は良く体上半は茶褐色、下半は黄橙色を呈し内外面のところどころに炭化物が付着する。4は4箇所に緩やかな山形隆起部をもつ大型の筒形土器。口唇は尖り気味でわずかに外反する。体部には3と同様の手法で結束第1種羽状繩文とRの繩を軸に右巻にした原体による撚糸文を上から順番に交互に施している。口縁部には羽状繩文施文後R原体による繩線を2条、RL原体による繩線を1条施している。R原体の繩線が不鮮明なところをRL原体の繩線で補っているところが部分的にある。内面から口唇にかけては磨かれている。焼成は良く体上半は茶褐色、体下半は黄橙色を呈する。ところどころに炭化物が付着する。5は平縁の中型の筒形土器。胴下半は欠損している。口縁はやや外反し、口唇断面は丸味を帯びている。体部には撚り戻し原体による縦行繩文が施され、部分的には磨きがかけられている。口縁部には体部と同じ原体を横位に回転させ重ねているところもある。器面は茶褐色を呈し多量に炭化物が付着する。19・20は同一個体のものと思われる。口唇断面は尖り気味である。器面には結束第1種羽状繩文とRの繩を軸に左巻にした原体による撚糸文を上から順に交互に施文している。21も同様の施文手法である。22は体部にLの繩を軸に左巻にした原体による撚糸文が施され、口縁の狭い無文の部分にL原体による2本一組の繩線が3条口縁に平行に施されている。黄橙色を呈する土器である。23は薄手のやや外反する口縁のもの。体部にはLR原体による斜行繩文が施されている。口縁部には比較的太いL原体による2本組の繩線が2条施されている。24は本遺構から出土した他の土器と異なり胎土に海綿の骨針とみなされる白色の針状のものが混入していないものである。内面は非常に良く磨かれ灰白色を呈する。口唇は丸味を帯び磨かれている。口縁部は比較的幅広かと思われ、無文地に撚りの方向の異なる2本一組の繩線とL原体による繩線を何条か施している。25は19と同じ文様構成をもつものかもしれ

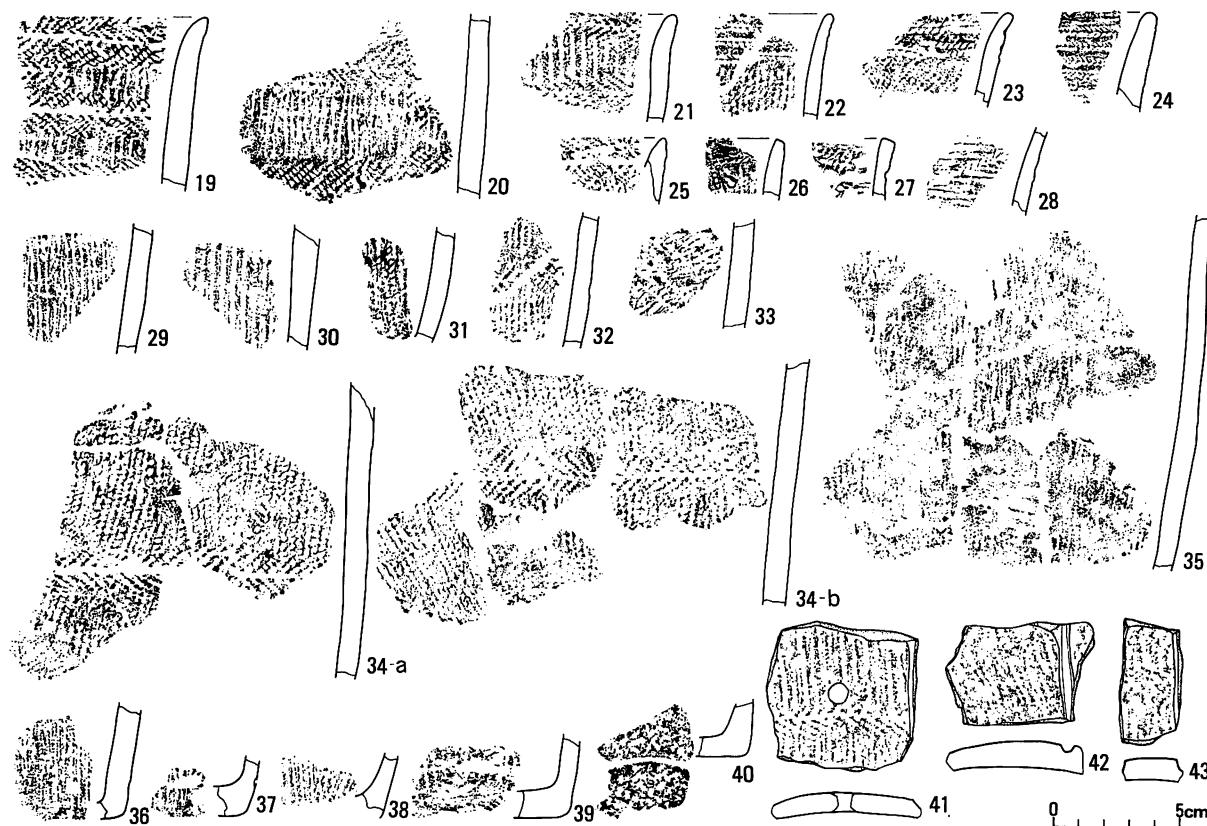
結束第1種羽状繩文

施文順序

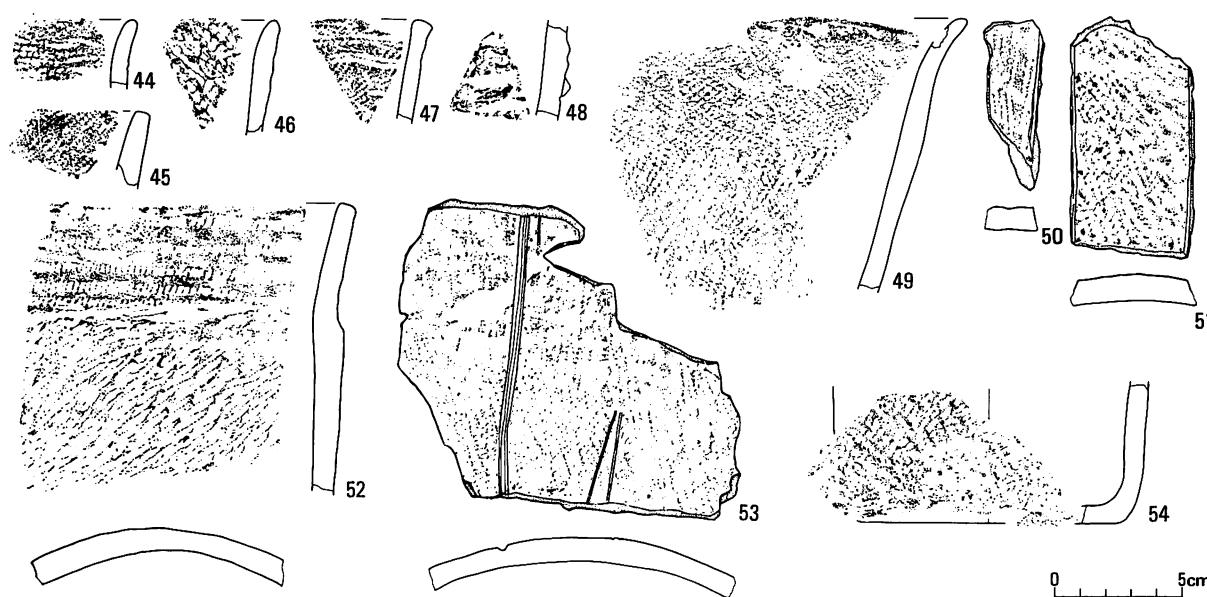
海綿骨針が混入しない土器



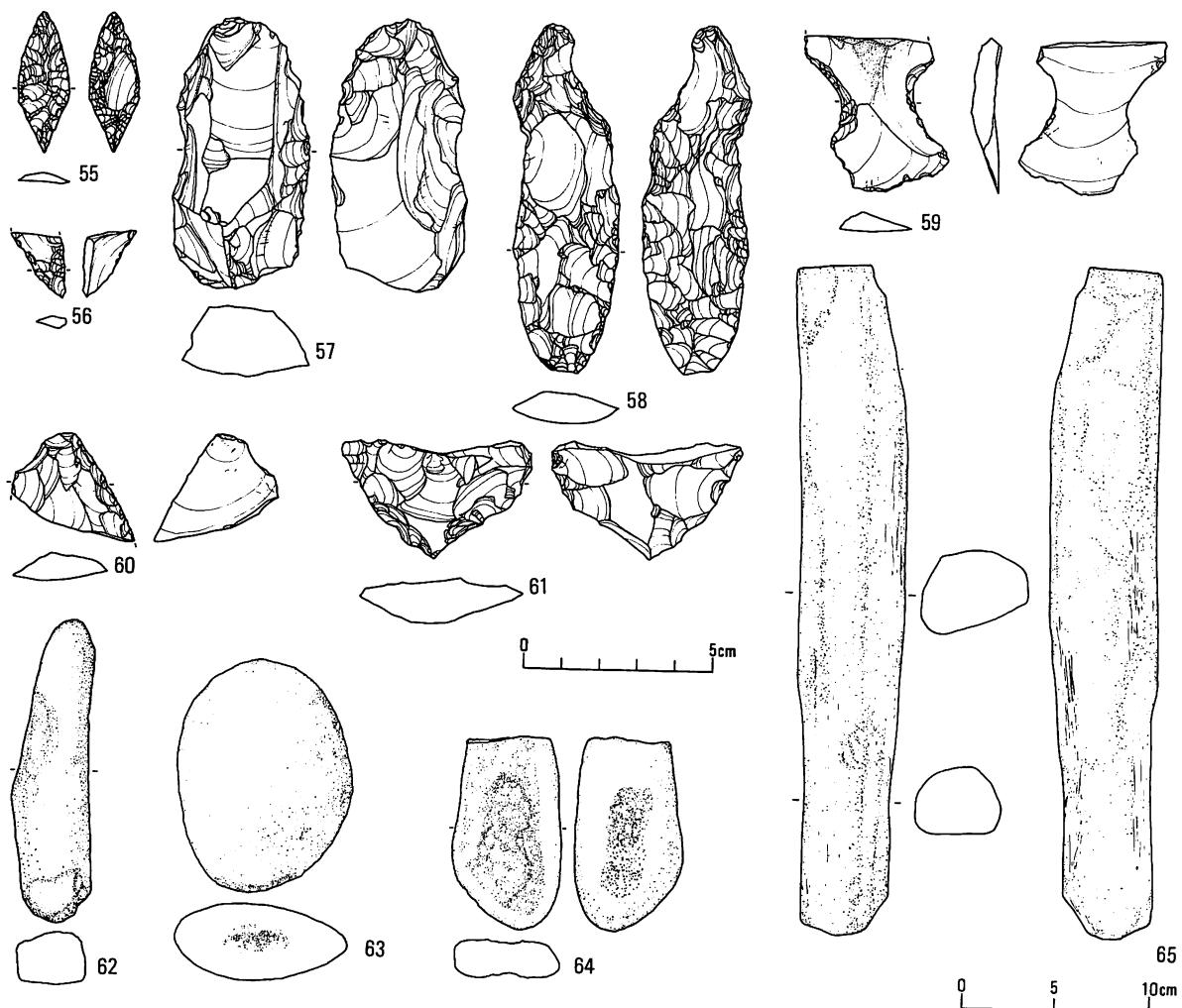
図III-41 GP-31覆土1～4層出土の土器



図III-42 GP-31覆土6・7・11・12層出土の土器



図III-43 GP-31覆土13層 床面出土の土器



図III-44 GP-31出土の石器

ない。26は撫りの方向の異なる2本一組の繩線が施されている。27の口唇は角形で磨かれている。L原体による2本一組の繩線が施されている。28は横方向に条痕文が施され、L原体による繩線が横、斜めにつけられている。29~32は撫糸文が施されている胴部の破片。33・35は撫り戻しの原体による繩文が施されている。34-a・bは同一個体の破片で、19と同様の手法で文様がつけられている。41~43は擦り切り痕のある土器片である。41は有孔土製円盤の未完成品であろう。表・裏面から穿孔がなされている。自繩自巻的繩文に結束第1種状繩文が重ねられている破片。内面は非常に丁寧に磨かれている。42には撫り戻しの原体による繩文、43は撫糸文に結束第1種羽状繩文が重ねられている破片である。

3) 覆土13層・床面出土の土器、石器 (図III-40-6・7、-43・44)

6は床面から出土した。4箇所に山形隆起部をもつ小型の筒形土器。口唇は尖り気味で口縁はわずかに外反する。器面には底部付近にまで太いLR原体による斜行繩文が施されている。口縁部には体部の繩文と同じ原体と思われる繩線を3条横環させている。内・外面ともにあまり磨きはかけられていない。内面の下半には炭化物が付着する。黄褐色を呈する。7は口縁部が大きく外反する大型筒形土器の破片。口唇断面はやや丸味を帯びている。頸部には粘土がわずかに盛り上げられ軽く磨かれて狭い無文帯が作り出され、口縁部と胴部を区画している。幅広の口縁部と体上半には撫り戻しの原体による斜行繩文が施されている。下半部には口縁部のものとは異なる撫り戻しの原体

擦り切り痕
のある土器
片

による縦行繩文が施文されていると思われる。内面は丁寧に磨かれ黄褐色を呈する。器面は上半が黄褐色、下半部は茶褐色を呈する。44は口唇が丸味を帯びる。口縁の無文地に撲糸文を横位に回転し施文している。45は口唇の角形で磨かれている。器面にはLR原体による斜行繩文が施されている。47は体部にはLR原体による細かい斜行繩文が施されている。口縁にはL原体の2本一組の繩線が2条施されている。内面は磨かれ黄橙色を呈する。48は貼付帯と2段の原体による太い綾絡文で文様が描かれている。貼付帯の上下には太い沈線がひかれている。49は緩やかな波状口縁をなすと思われる。口縁はやや外反する。口唇は尖り気味で磨かれている。LR原体を口縁部では幅広く縦方向に、体部では横方向に施文しているものである。焼成は良く黒褐色を呈する。50~53は擦り切り痕のある破片。50・52・53は撲り戻しの原体による繩文が施されている。51は図の両側縁に擦り切り痕がある。内面は丁寧に磨かれ黄橙色を呈する。焼成は良い。52は大型の筒形土器の破片かと思われるもので、口唇は角形で口唇上から内面にかけては丁寧に磨かれ光沢がある。擦り切り痕は図の両側縁にある。体部には撲り戻しの原体による斜行繩文が施されている。幅広の口縁部には絡条体圧痕文が5条口縁に並行に施されている。胴部との境目には中空の棒状工具による刺突文と細い先の尖った工具での刺突文が施されている。焼成は非常に良く内面には炭化物が付着する。53は数箇所に擦り切り痕がある。胎土、焼成内面の磨きは51と良く似ている。54はRL原体による斜行繩文が施されている。内面はあまり磨かれておらずザラザラする。

擦り切り痕
のある土器
片

55は菱形の尖基の石鎌、57・58は両面加工のもの。59はノッチのあるスクレイパー。62は棒状礫の一端、63は側縁にたたき痕がある。64は両面に複数のくぼみがある。65は泥岩製の棍棒状石器。表面には鉄分が付着し茶褐色を呈する。柄の部分には粗く削りが加えられ握り部を作り出している。側縁にもわずかに調整の跡があるが全体の形状を殆んど変えていない。

棍棒状石器

2) 墓の可能性があるピット

GP-6 (図III-45・46、図版26-1・2)

位 置 S-60・61

規 模 $1.54 \times 1.47 / 1.28 \times 1.13 / 0.66$ m

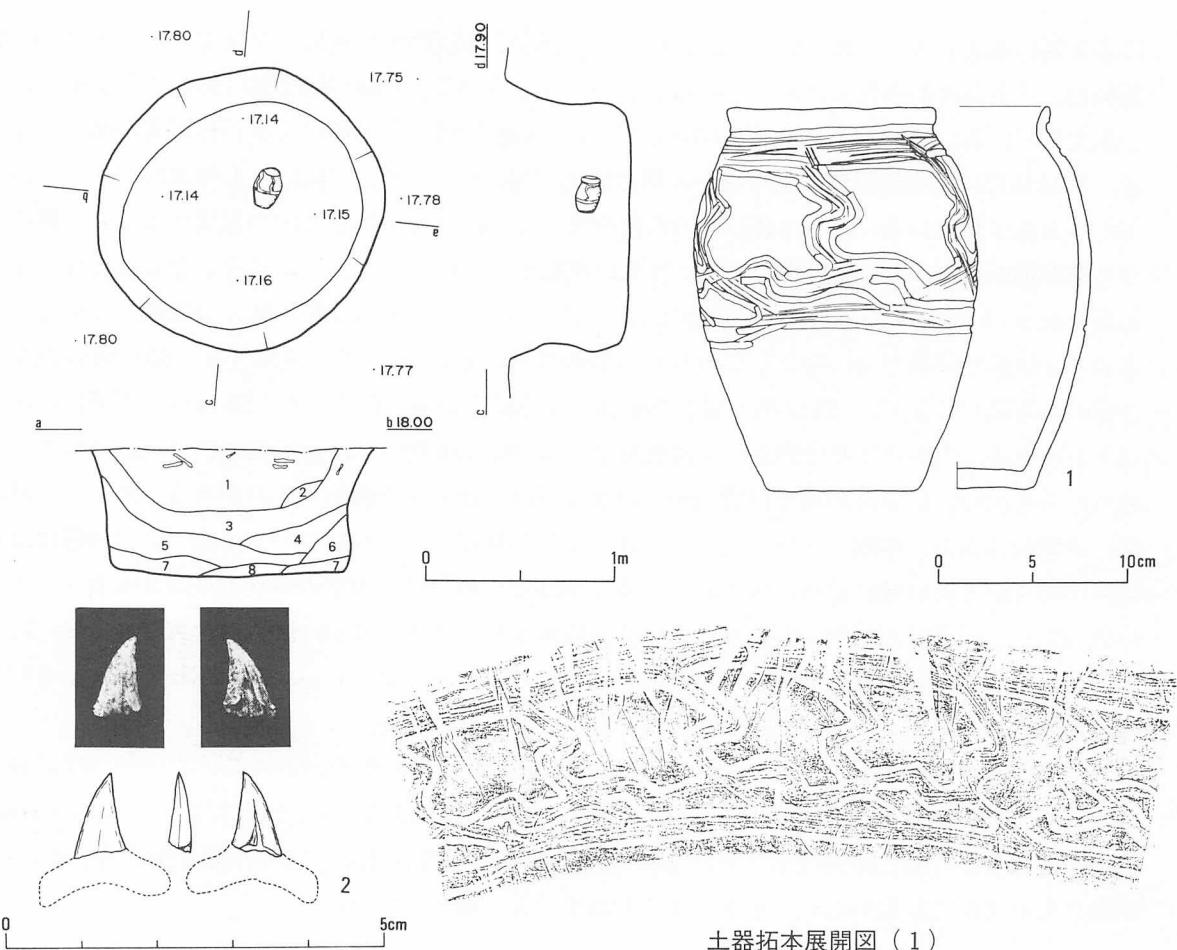
特 徴 第III層中部で黄褐色ロームが多量に混じる茶褐色土の円形の落ち込みを確認した。平面形は円形で底面は平坦で堅くしまっている。壁の立ち上がりは全周でほぼ垂直で廣口部でわずかに広がっている。廣底から15cm程上位、覆土3層からIV群A類の小型深鉢形土器(図III-45-3)が横倒しの状態で出土した、完形品で土圧で押し潰された状態でもないことから、土壙に埋納されたものと考えられる。土器の中には軟らかい茶褐色土が詰っており、その中からサメの下顎歯(図III-45-2)が検出された。土器に封入されていたものであろう。覆土の堆積状態は人為的埋め戻しの様相を呈しており、土器の出土状況、サメの歯の封入という点から判断し、本遺構は墓である可能性が強いと思われる。

土器の埋納
サメの下顎歯

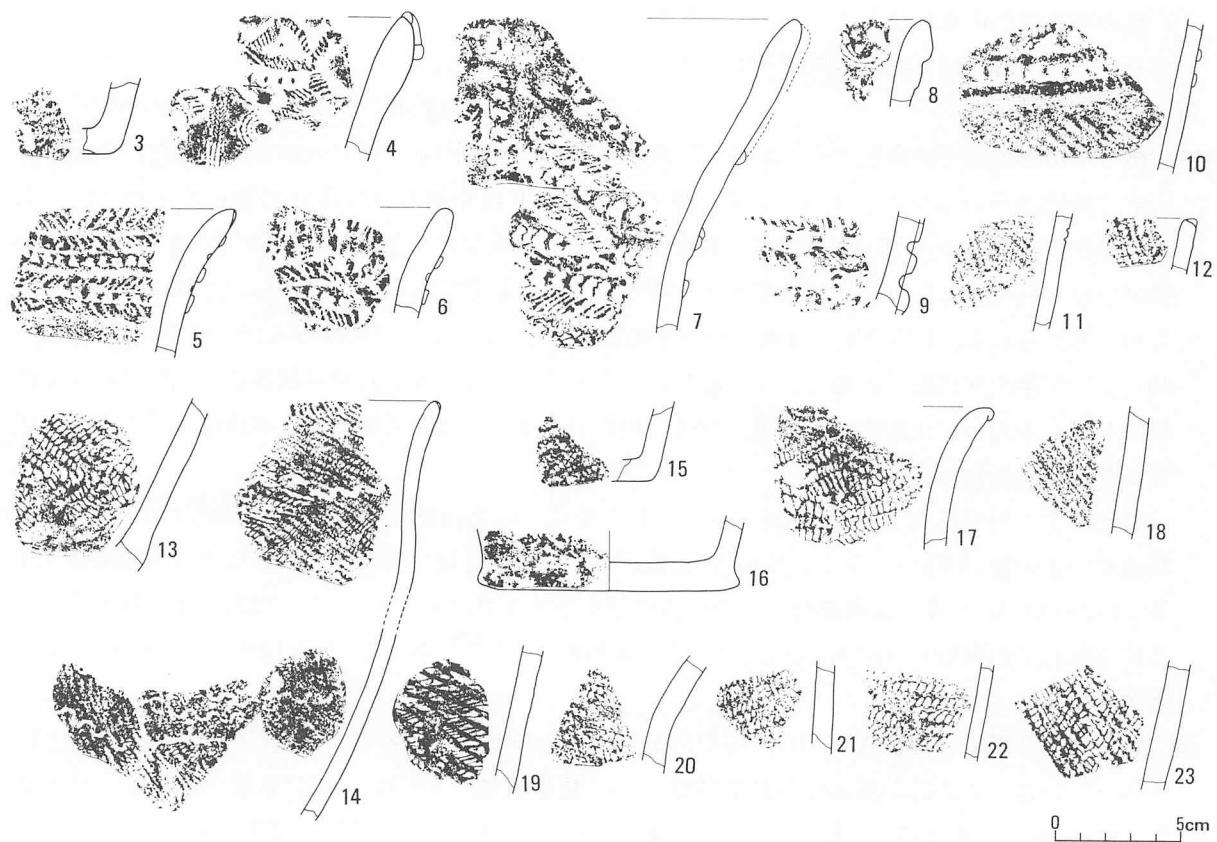
墓の可能性

覆土は1:茶褐色土(粘性があり、ローム粒と焼土と炭化物を含む)、2:茶褐色土(1よりも黄褐色ロームの量が多い)、3:暗茶褐色土(細かいローム粒と炭化物が混じり、1よりも黒褐色土が多く粘性がある)、4:暗黄褐色土(ロームの量が多くボロボロする)、5:黒褐色土(細かいローム粒を極わずか含む)、6:暗黄褐色土、7:黒褐色土(ボロボロして、床面に堆積している)、8:暗黄褐色土。

遺 物 覆土3層からIV群A類(1)土器が出土した。この土器にはメジロザメ属の一種の下顎歯(2)が入っていた。このほか覆土からII群B類(3)、III群A類(4~16)、III群B類(17~23)、IV群A類(24~44)、V群(45)土器と、ドリル(46)、スクレイパー(47~51)、石斧、すり石(52)など



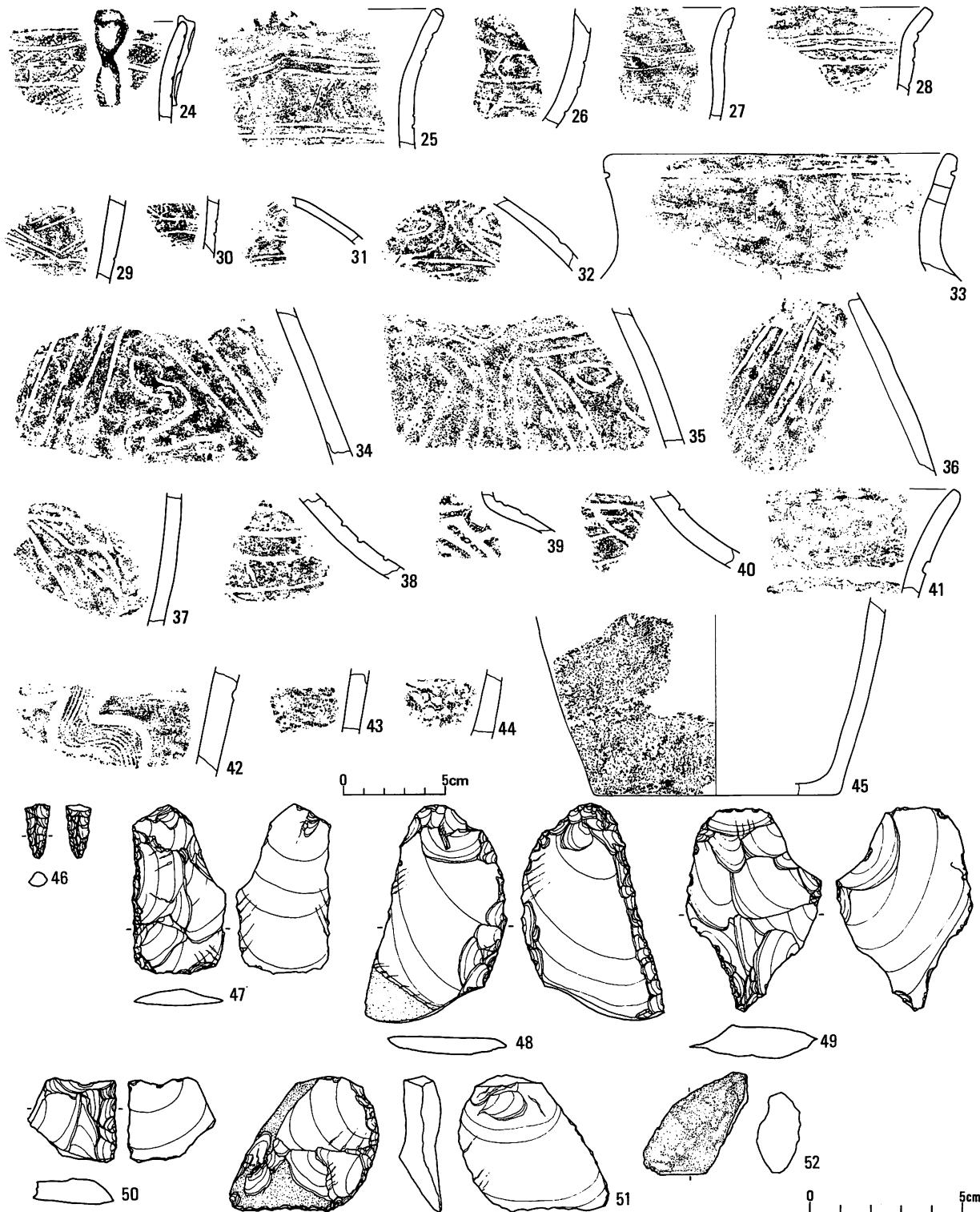
土器拓本展開図 (1)



図III-45 GP-6と出土の遺物

が出土した。

1は盛土2類相当のもの。平縁で胴が張る小型の深鉢形土器。口縁部は無文で幅が狭くわずかに外反する。櫛状工具により頸部から肩部にかけて施された幅の広い条線と、胴部中程に施された条線で区画された中に縦方向に蛇行する文様を6箇所に配している。縦の条線による文様は、間延びした「乙」字文で横方向にもつなげられている。条線は太い沈線で縁取りがされているが、条線の文様に沿わずに不規則に施されているところも部分的にある。焼成は良く黒褐色を呈する。器面全



図III-46 GP-6 出土の遺物

メジロザメ
属の一種

体に炭化物が付着している。2はメジロザメ属の一種の下顎歯と思われる。1の土器に充填された土の中から検出された。歯冠部のエナメル質のみが残る。4~10は貼付帯により文様が描かれている。いずれも貼付帯上には縄による刻み目がある。5、6は断面が角形の工具で刺突文が施されている。10は貼付帯間に円形の刺突文が施されている。11は細い沈線で文様が描かれている。12~16は縄文が施されているもの。14-a・bは薄手で口唇は尖り気味である。口唇上には縄の刻み目がある。器面にはR L原体による縄文地に綾絡文が重ねられている。焼成が良く茶褐色を呈する。17は山形隆起部をもつもので、器面にはL R原体を横位と縦位に回転させて重ねている。19には無節の縄文、23には複節の縄文が施されている。24~41は盛土1類相当のもの。24は器面にはまばらに縄文が施されており、横走する沈線を口縁にそって何条かめぐらしている。口縁部には細い貼付帯で「8」の字の文様を描き沈線で縁取りしている。貼付帯上には指頭の圧痕がつけられている。25~41は無文地に沈線で文様が描かれているものである。25は無文地に口縁部では隆起部にそって3条の沈線をめぐらし、下位にめぐらされている沈線と2本組の弧線でつないでいる。口縁部の隆起部には指頭の圧痕が複数施されている。胎土は砂っぽく灰黄色を呈する。31~40は壺形土器の破片。31には鮮やかな朱が塗られている。34~37は同一個体と思われる壺形土器の破片。波線で山形を重ねる文様、円形、蛇行する区画文を描いている。胎土には小砂利が多く灰黄色を呈する。焼成は良い。41は指でつけられたかのような沈線がある。42は文様を描き沈線で縁取りしている。43には中空の工具での刺突文、44には爪形の刺突文が施されている。

時期 縄文時代後期前葉IV群A類土器の時期。

GP-19 (図III-47, 図版26-3, 4)

位置 Q-61・62

規模 1.18×1.08/1.06×1.05/0.68 m

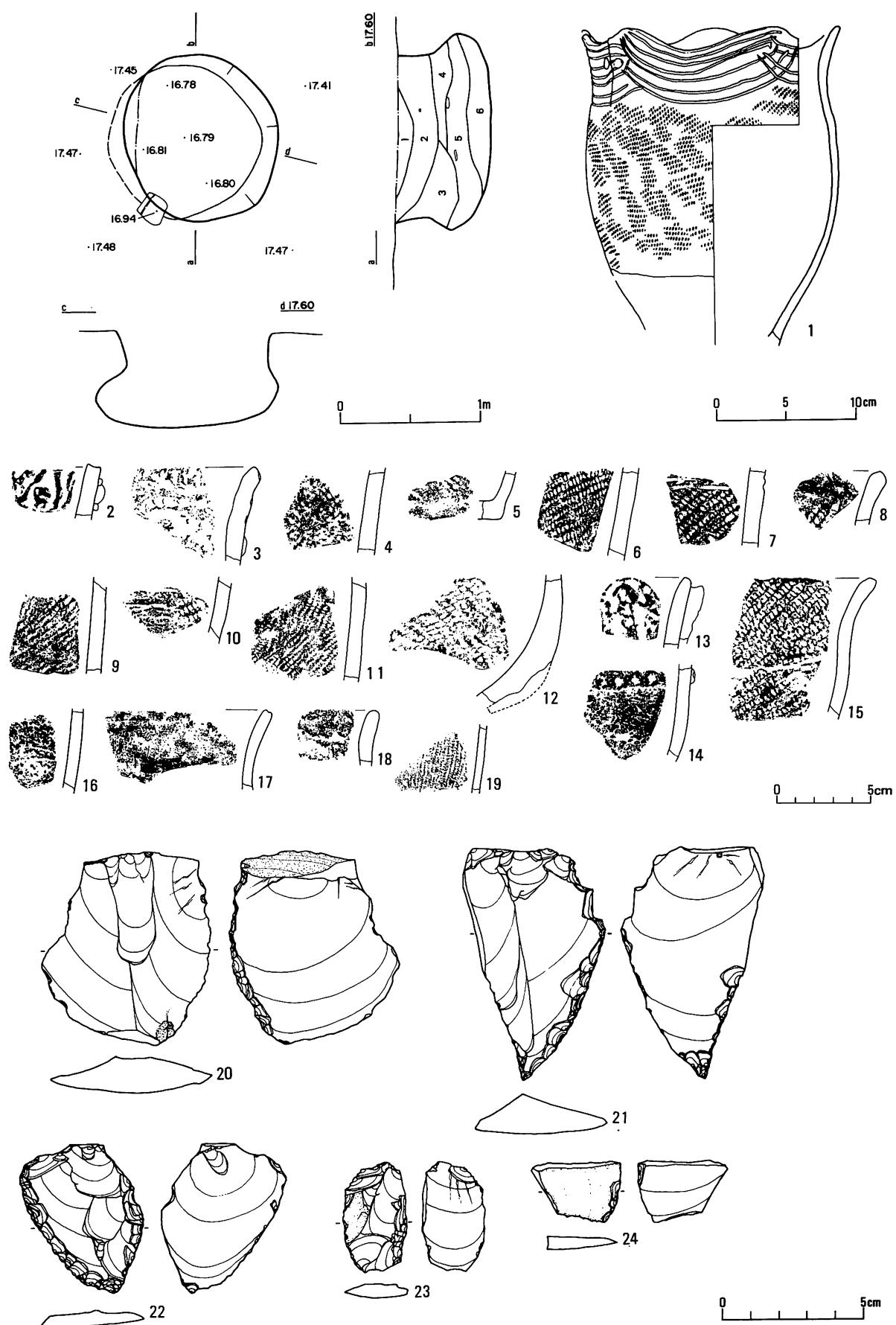
特徴 第III層中部で茶褐色土の落ち込みを確認した。平面形は不整円形、西側壁がオーバーハングし断面形は袋状である。底面は皿状である。床直上からIV群A類土器が出土した。覆土には炭化物、焼土、焼粘土が多量に混じる土、上部には黒褐色土を主とする土が堆積しており埋め戻しの様相を呈している。覆土の状態はGP-2と非常に良く似ている。

覆土は、1:茶褐色土(細かいローム粒と焼粘土を含み、軟らかい)、2:茶褐色土(1よりもロームの量が多く、軟らかく炭化物も多い)、3:黒褐色土(細かいローム粒と炭化物を含む)、4:暗黄褐色土(径1~2 cm程のローム粒と焼粘土が混じる)、5:暗黄褐色土(炭化物、焼土、焼粘土が混じり、4よりも黄色味を帯びる)、6:暗黄色土(黄褐色ロームの量が非常に多く、径1~3 cm前後の比較的大きなローム粒、炭化物、焼土、焼粘土が多量に混じる。ボロボロと崩れやすい)。

遺物 床直上からIV群A類土器(1)が出土した。覆土からII群B類、III群A類(2~6)、III群B類(7~15)、IV群A類(16~18)、V群(19)土器スクリイバー(20~25)、台石等が出土した。

床面出土の
土器

1は盛土1類に相当する深鉢形土器、底部は欠損している。胴部が張り口縁が外反する。器壁は薄い。5箇所に山形隆起部をもつ。胴部にL R原体による斜行縄文が帶状に施されている。口縁部には隣り合う隆起部あるいは3つの隆起部をつなぐように2条一組の細い沈線が口縁に沿って弧状にひかれ、その下位にも上位の弧状の沈線をつなぐように細い2条一組の沈線が施されている。口縁部から胴部にかけて炭化物が多量に付着し黒褐色を呈している。内面は横なでて成形した刷毛目状の痕跡が残る。焼成は非常に良い、3は無文地に貼付帯で文様が描かれ、その間には断面が角形の棒状工具で刺突がつけられている。口唇には棒状工具で浅く刻み目がつけられている。8は口縁をわずかに肥厚させて磨きをかけている。13は山形隆起部に対応して縦方向と、口縁にそって隆起部がつけられている。隆起部と口唇上にはそれぞれ異なった工具で刺突がつけられている。14は隆起部



図III-47 GP-19と出土の遺物

上に刺突が施されている。15はL R原体による斜行縄文がつけられている。16は先の尖った工具で沈線を描いている。21・22は尖頭部をもつスクレイパー。

時期 繩文時代後期前葉IV群A類土器の時期

3) 埋め戻しの可能性のあるピット

GP-25 (図III-48~51、図版23~25)

位置 V-56、W-56 規模 1.40×1.38/1.08×1.04/0.64 m

特徴 盛土の4層中を調査中に土圧で押潰された数個体のIV群A類土器が窪みに落ち込むような状態で検出された。遺構の存在を予想して半截した結果、平面形が円形の土壙であることがわかった。

掘り込み面

底面は凹凸がある。壁は全周ではほぼ垂直に立ち上がり開口部でわずかに広がる。掘り込み面はIII層上部の盛土中である。覆土は全体的に軟らかく炭化物、焼土が混じる茶褐色土が主である。土器は覆土1層中から4個体が一度に投げ込まれたような状態で出土している。覆土の状態がこの周辺に堆積している盛土の二次堆積土とほぼ同じであることから、この土壙は盛土がある程度形成されていた時期に掘り込まれ、IV群A類（盛土4類）土器が投げ込まれる頃は半ば埋没していたものと思われる。

覆土は1：茶褐色土（細かいローム粒と炭化物がわずかに混じる）、2：黒褐色土（炭化物と焼土が多く混じる）、3：黒褐色土（細かいローム粒が混じり、焼土のブロックがレンズ状に堆積する）、4：赤褐色土（焼土）、5：黒褐色土、6：暗黄褐色土（黄褐色ロームに黒色土が混じる）。

遺物 覆土からIV群A類（1~4、19~45、49）、II群B類（5~13）、III群A類（14~16）、III群B類（17、18）、IV群土器と石鏃、スクレイパー（46）、たたき石（47、48）、くぼみ石、すり石、コア等が出土した。

一括土器1

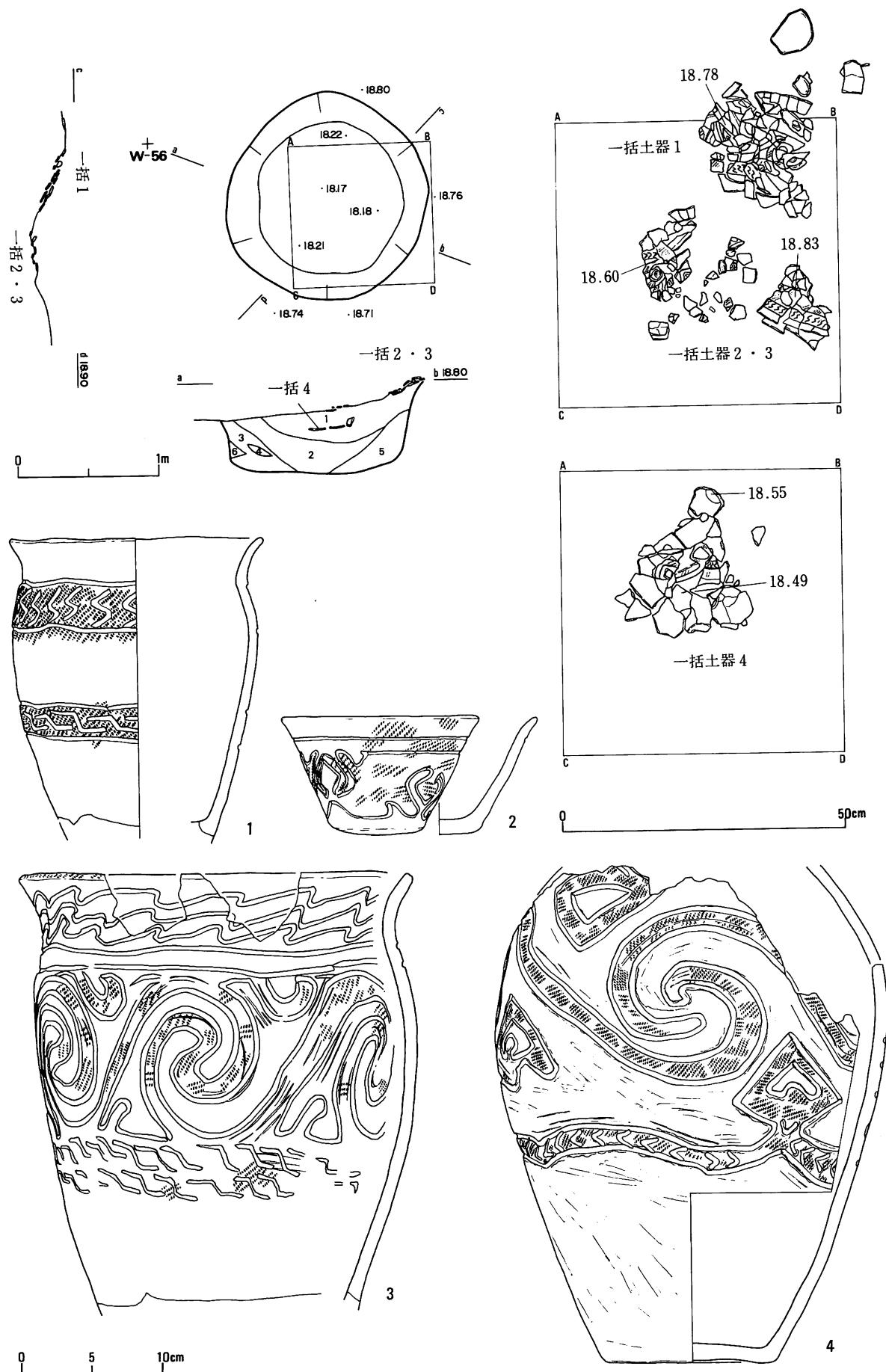
1~4は覆土1層の上部から下部にかけて土壙に投げ込まれた後土圧で潰れたような状態で重なり合って出土したものである。3（一括土器1）は輪積みの位置で底部より下位が欠損している。わずかに口縁が波打つ大型鉢形土器。胴部はあまり張らず口縁が外反する。頸部には幅の広い無文帶が形成されている。口唇は角形で縄文が施されている口縁部には無文地に沈線で大柄な波状文を3条横環させている。胴部文様は上下部に限られ、磨消縄文による入組文が描かれているが、櫛状工具で文様を描き太い沈線で縁取りし、その部分にのみ縄文を施す手法のものである。文様帶の下部には沈線により「乙」文字を2条横環させている。器面は全体的に灰白色でところどころに黒色の顔料のようなものが付着している。

一括土器2

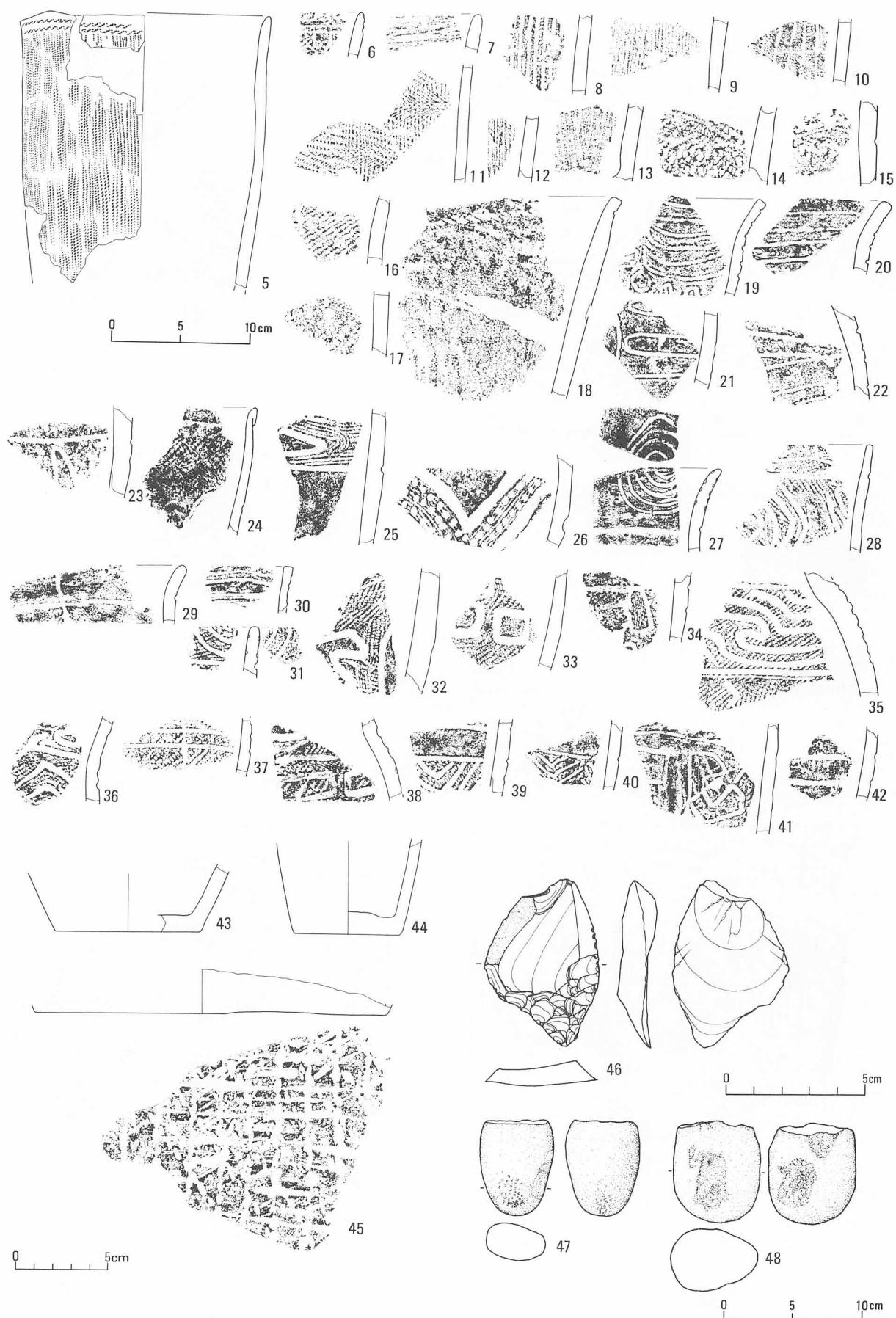
1（一括土器2）は頸部がややくびれ口縁が外反する平縁の中型の深鉢形土器。底部は欠損している。文様は頸部下位と胴部の中程に沈線で区画された縄文帶が2段あり、上段には縦に蛇行する沈線、下段には「乙」字文様をそれぞれ横環させている。器面は口縁部付近が黒褐色、胴部から底部にかけては赤褐色を呈する。口縁部と内壁に炭化物が付着する。

一括土器3

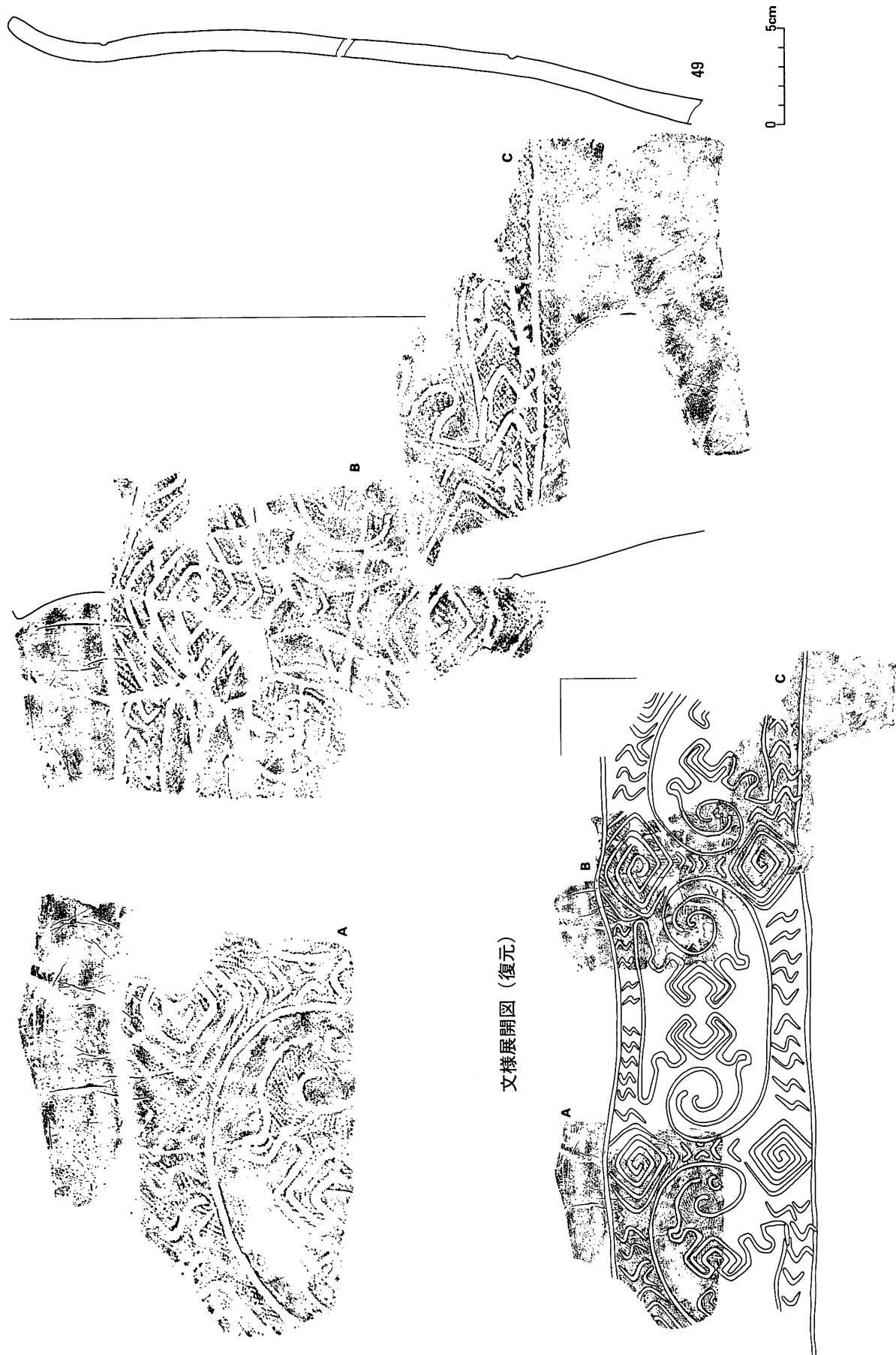
2（一括土器3）は小型の浅鉢形土器、底面は丸味を帯びて不安定である。器面にはL R原体による縄文がまばらに施され、底部付近は無文で磨かれている。口縁に2条横走する沈線がひかれ、その下位には「カニのハサミ」状文様を上下で向きを変えて交互に配している。口縁部から底部まで炭化物が付着している。内面にはヘラ状工具の調整痕が残る。胎土には小砂利が多く海綿骨針が混入する。4（一括土器4）は胴部が強く張り出す大型の深鉢形土器。胴部上半部は欠損している。文様は胴部中程までに限られ、磨消縄文により大柄な入組文が描かれている。この入組文をはさむように胴下半部には磨消縄文による上向きの弁状文が胴上半部には下向きの弁状文が配されている。縄文帶には沈線で「く」の字の文様が加えられているところがある。器面には炭化物が付着し、



図III-48 GP-25と出土の土器



図III-49 GP-25出土の遺物





図III-51 GP-25出土の土器拓本展開図 (a : 図III-48-3, b : 図III-48-4)

底部付近は赤褐色を呈する。内面にはヘラ状工具による調整痕がある。5は平縁の筒形土器、口唇は薄く尖り気味である。体部には自縄自巻的縄文が施されている。口縁の狭い無文帶に2条並列する綾絡文がつけられている。器面にはところどころに炭化物が付着する。6は口縁にLR原体による縄線が3条施されている。7は撲りの方向の異なる2本の原体を並列した縄線文が施されている。8~10、12は自縄自巻的縄文の施された胴部破片。14には単節と無節の縄の原体による結束第1種羽状縄文が施されている。18は無文地の口縁に太いLR原体による縄線が1条施されている。口縁の隆起部は磨かれて平坦になっている。胎土に小砂利が多く器面に凹凸がある。19~24は盛土1類に相当するもの。24は縄文地に細い沈線で文様が描かれている。その他は無文地に沈線で文様が描かれている。25、26は盛土2類相当のもの。櫛状工具で文様を描き沈線で縁取りしている。26には円形の刺突文がつけられている。27~31は盛土3類と思われる。27は口縁の表裏に沈線で文様が描かれている。32~38は縄文地に太い沈線で文様が施されている。39、40は盛土4類かと思われる。41には「カニのハサミ」状文様が描かれている。45は底部に簾状の圧痕がついている。49はGH-9の覆土、周辺の包含層からも破片が出土したものでA~Cの大きな破片は同一個体である。接合しなかったので文様の展開を図上で復元した(図III-50)。盛土4類に相当する大型深鉢形土器。波状口縁をなす、口縁部はやや外反し無文帶を設けている。口唇は角形、頭部と胴下半に波線を施し区画した中に磨消縄文で「カニのハサミ」状文様と入組文を組み合わせた文様が描かれている。縄文地には口縁の隆起部に対応する位置に上下に沈線で大柄な渦巻文を描き、縁飾り的に蛇行する沈線文、「く」の字の文様が施されている。器面は灰白色で胎土には小砂利が多い。内面は磨かれている。47、48は扁平礫の両面に使用痕がある。

文様の復元

時期 縄文時代後期前葉IV群A類土器の時期

GP-1 (図III-52)

位置 T-60

規模 1.18×1.12/0.94×0.93/0.65 m

特徴 第III層下部で中央に黄褐色ローム土、それを取り囲むように黒褐色土が環状に堆積する円形の落ち込みを確認した。同様の落ち込みはGP-1の周辺で3個確認された(GP-2、3、4)。平面形は円形、底面は平坦で硬い。壁の立ち上がりは全周でほぼ垂直である。覆土は上部に黄褐色ローム層が多く混じる土、下部には軟らかい褐色土を主とする土が堆積していた。人為的な埋め戻しの可能性がある。

覆土の状態

人為的埋め戻し

覆土は、1:暗黄褐色土(硬く、ロームの量が非常に多く、ピットの中央部にのみ薄く皿状に堆積する)、2:灰黄褐色土(1よりも黒色土が多い)、3:褐色土、4:黒褐色土(軟らかく、粘性があり細かいローム粒が混じる)、5:茶褐色土(4よりも黄褐色ロームの量が多い)、6:黄褐色土(壁際に堆積し、軟らかい茶褐色土も混じる)、7:黒黄褐色土(硬い暗黄褐色ロームがブロック状に堆積する)。

遺物 覆土からII群B類、III群A類(1~4)土器が出土した。1~4は覆土4層から出土した。

1は棒状工具による半円形状の刺突文が付けられている。4は突起部分である。

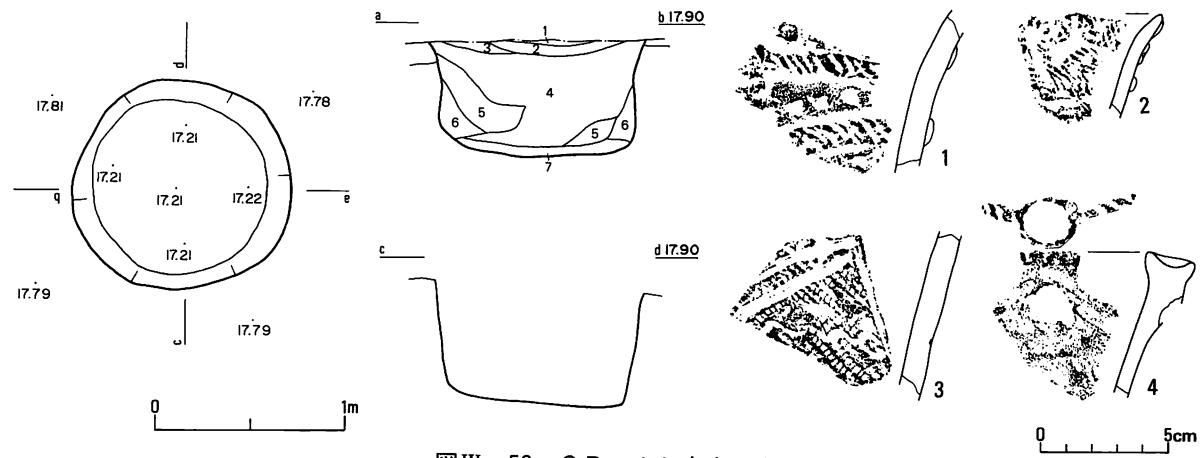
GP-2 (図III-53、図版27-1・2)

位置 T-60

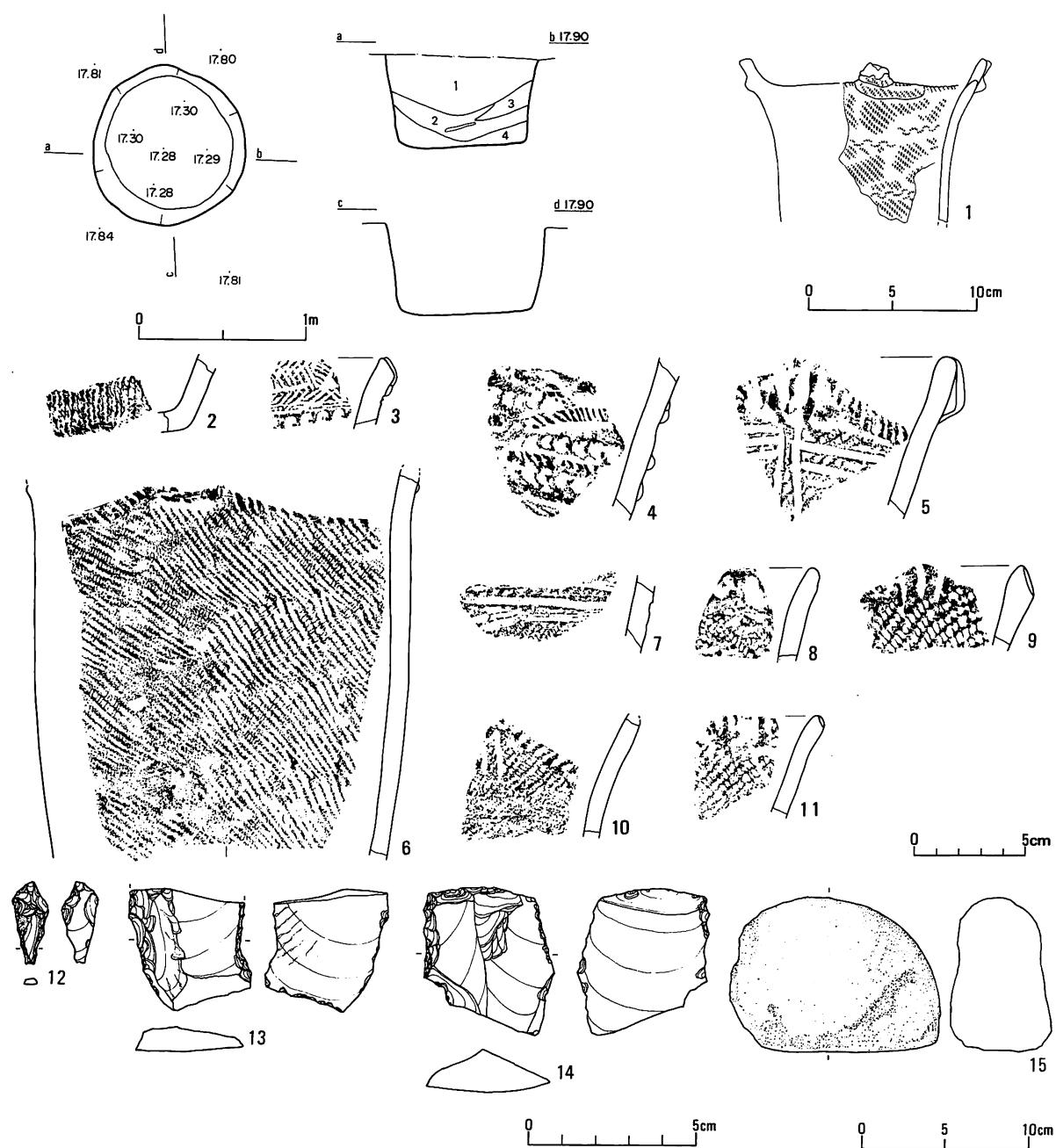
規模 0.95×0.92/0.80×0.72/0.55 m

特徴 第III層中部で確認された。平面形は円形で底面は硬く平坦である。壁の立ち上がりは全周でほぼ垂直である。覆土は全体的に軟らかく、下部には炭化物が多く混じる土が堆積する。覆土5層から獸骨片が検出された。

覆土は、1:黒褐色土(軟らかく、粘性があり細かいロームが混じる)、2:茶褐色土、3:黒褐



図III-52 GP-1と出土の土器



図III-53 GP-2と出土の遺物

色土（1との分層は明瞭ではないが、1よりも炭化物が多く軟らかい）、4：茶褐色土（炭化物、焼土がわずかに混じる）、5：赤褐色土（炭化物、焼土、骨片が多量に混じり、黄褐色ロームがブロック状に混じる）、6：灰褐色土（壁際から床面にかけて堆積し、軟らかく、わずかに炭化物が混じる）。

遺物 覆土からII群B類（2）、III群A類（1・3～11）、IV群A類土器とドリル（12）、スクレイバー（13・14）、北海道式石冠（15）、炭化したクルミ等が出土した。

2はR撲糸文が底部まで施されている。5は口縁の隆起部に粘土を貼り付け、さらに細い粘土紐を縦に貼り付けている。体部には縄文地に沈線で文様が描かれている。10は口縁から垂下すると思われる2段LR原体の縄の圧痕がある。9は山形隆起部に短い沈線が3条うけられている。6は0段多条のRL原体による斜行縄文が施されている。1は覆土2層から出土した。体部には結束のある斜行縄文が施されている。弁状突起に細い粘土紐で文様が描かれ、突起下にも細長く粘土を貼り付けているものと、わずかに肥厚させその上を爪状のもので刻み突起の下に断面が三角形の隆帯が付けられているものがある。向い合わせで文様が対になるのかもしれない。口唇上には縄の圧痕がある。12は剥片の一部に機能部が作りだされたもの。

GP-3（図III-54、図版27-3）

位置 T-60、U-60 規模 $0.79 \times 0.76 / 0.63 \times 0.57 / 0.86$ m

特徴 第III層中位で黄褐色ローム層が多量に混じる土の落ち込みを確認した。平面形は円形で、開墳部西側は攪乱を受けている。底面は平坦で壁は全周で急角度に立ち上がる。覆土は人為的な埋め戻しの可能性がある。上～中部は黄褐色ロームが多量に混じる土、下部には黒褐色土を主とする土が堆積していた。

覆土は、1：暗黄褐色土（硬く、径1～2cmの黄褐色ローム粒が混じる）、2：灰黄褐色土（粘性があり1よりも黒味を帯び、ローム粒が不均一に混じる）、3：灰黄褐色土（2よりも茶褐色土が多い）、4：茶褐色土（細かいローム粒と炭化物が混じり、粘性があって軟らかい）、5：暗黄褐色土（4よりも黄褐色ローム粒が多い）、6：暗黄褐色土、7：黒褐色土（軟らかく、黒色土が多く細かいローム粒が混じる）、8：暗黄褐色土（炭化物が混じる）。

遺物 覆土1層からII群B類（1）土器が出土した。

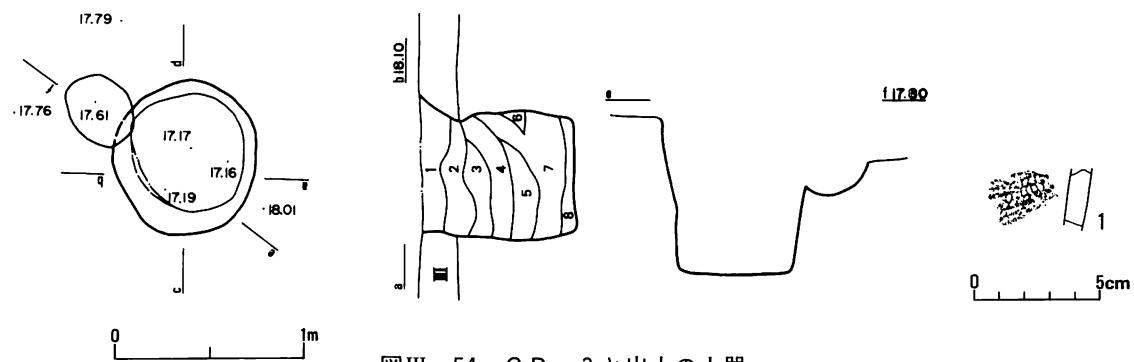
GP-4（図III-55）

位置 T-60 規模 $0.99 \times 0.86 / 0.74 \times 0.68 / 0.70$ m

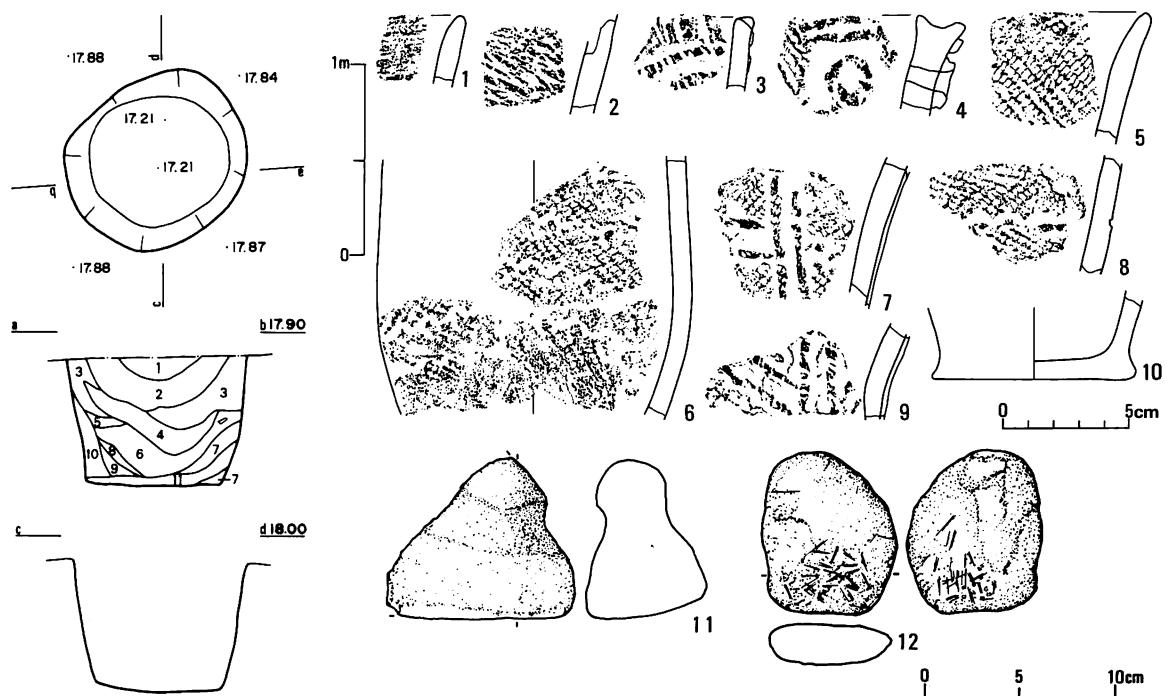
特徴 第III層下部で確認した。平面形は橢円形。底面は平坦で壁の立ち上がりは、全周で急角度である。覆土は黄褐色ロームが多く混じる土と焼土、骨片、炭化物が多く混じる黒褐色土が交互に堆積している。人為的埋め戻しの可能性がある。

覆土は、1：茶褐色土（粘性がある、土壌の中央に皿状に堆積し、わずかにローム粒も混じる）、2：暗黄褐色土（径2～3cm程のローム粒とロームのブロックが不均一に混じる）、3：茶褐色土（粘性があり、細かいローム粒と炭化物がわずかに混じる）、4：暗黄褐色土（ロームのブロックが非常に多く、炭化物、焼土、骨片、焼粘土が混じる）、5：茶褐色土、6：暗黄褐色土（細かいローム粒と炭化物、焼土が混じる）、7：黄褐色土、8：暗黄褐色土（9よりもロームの量が少ない）、9：暗黄褐色土（7に似るがやや黒味を帯びる）、10：黄褐色土（壁の崩落土と思われる）、11：黒褐色土（底面に堆積し、粘性がある）。

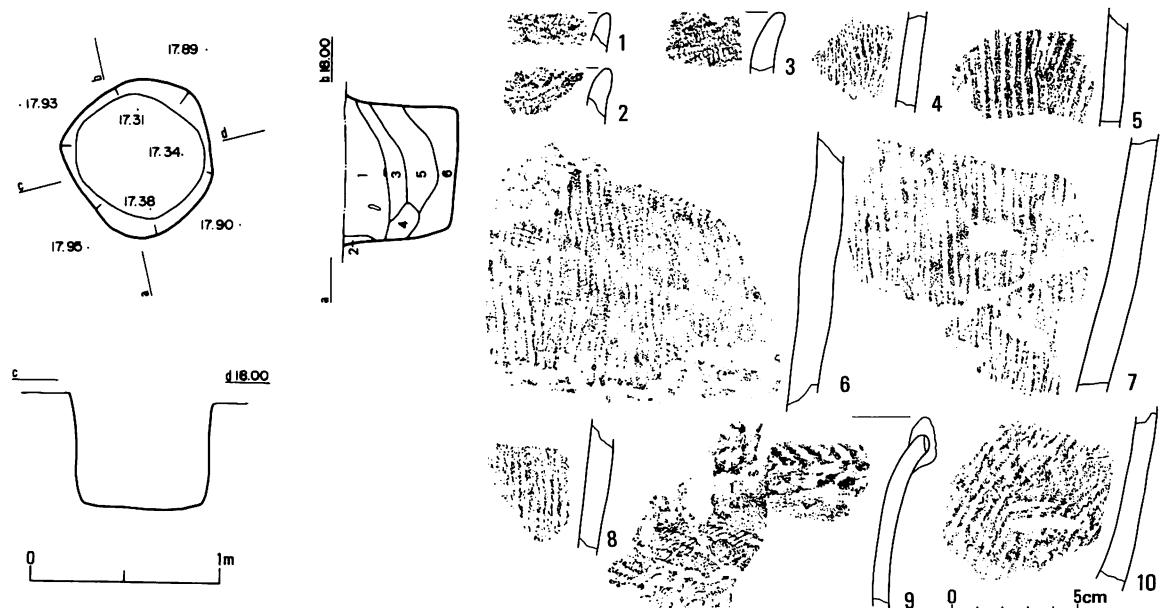
遺物 覆土1・2層からI群、II群B類（1・2）、III群A類（3・10）、III群B類、IV群A類土器と北海道式石冠（12）が出土した。2は撲糸文の原体による斜行縄文が施されている。5に結束羽状縄文が付けられている。



図III-54 GP-3と出土の土器



図III-55 GP-4と出土の遺物



図III-56 GP-11と出土の土器

G P-11 (図III-56)

位 置 S-59、T-59

規 模 $0.82 \times 0.80 / 0.69 \times 0.61 / 0.62$ m

特 徴 第III層中部で確認された。平面形は壙口部、底面とともに不整円形である。底面は平坦で、壁の立ち上がりはほぼ垂直で、開口部がやや広がる。覆土は硬い土と軟らかい土が交互に堆積しており、埋め戻しの様相を呈している。近接するG P-10と覆土、遺物の出土状態が似ている。

覆土は、1：茶褐色土(細かいローム粒や炭化物が混じり、硬い)、2：暗黄褐色土(硬い)、3：黒褐色土(ロームと炭化物が混じり、軟らかい)、4：黒褐色ロームがブロック状に混じる)、5：暗黄褐色土(細かいローム粒を多量に含み、軟らかく、炭化物が混じる)、6：暗茶褐色土(ロームの量が非常に多く、黒色土を極くわずかに含む)。

遺 物 覆土1層からII群B類(1～8)、III群(9・10)土器が出土している。

2・3は撫り戻し原体により繩文が施されている。6・7は胴部の破片。自縄自巻的繩文が施されている。6は包含層出土の図III-95-56-a～cと同一個体かもしれない。4・5・8には撫糸文が施されている。9は結束のある斜行繩文がつけられており、口縁部には表裏とも、粘土紐による文様がつけられている。また一部剥離している口縁にそって貼付帶がつけられている。口唇上と貼付帶上は繩の圧痕で刻まれている。10は無節の斜行繩文のもの。

G P-16 (図III-57)

位 置 V-58・59

規 模 $1.27 \times 1.17 / 0.88 \times 0.85 / 1.01$ m

特 徴 G P-26と重複する。本遺構が新しい。第III層中部で確認された。平面形は不整円形。底面重複はやや凹凸がある。壁は東側底部付近でやや張出し壙口部に向って広がっている。覆土上部には硬い土、中～下部には比較的軟らかい土が堆積しており、人為的埋め戻しの可能性がある。

覆土は、1：茶褐色土(硬く、細かいローム粒が混じる)、2：茶褐色土(1よりも黄褐色ローム量が多い)、3：明茶褐色土(軟らかく、炭化物が混じる)、4：暗黄褐色土、5：黄褐色土(黒色土がわずかに混じる)、6：暗黄褐色土(黄褐色ロームと黒色土が不均一に混じる)、7：暗黄褐色土(6よりも黒色土が多くボロボロと崩れやすい)、8：黒褐色土(軟らかく、底面に堆積する)。

遺 物 覆土からII群B類(3～7)、III群A類(1・2、8～13)、III群B類、IV群A類、V群(14)土器が出土した。1は覆土と周辺の包含層から出土した破片である。円筒形の深鉢形土器、4個の弁状突起をもつ、文様帶は体上半に限られ、胴部との境は2条の貼付帶で区切られる。体部には結束第1種羽状繩文が施される。貼付帶による曲線、ジグザグ文様が施され、貼付帶上には繩の圧痕が付けられている。貼付帶間は3本一組の繩線と馬蹄形圧痕文が施されている。内面には炭化物が付着する。2は口縁部が外反するいびつな小型鉢形土器、器面は凹凸があり、結束羽状繩文が粗く施されている。胎土には小砂利が多い。3は撫りの異なる2本の繩を並列させて軸に巻いた原体による撫糸文が施されている。

4は複節、5・6は自縄自巻的繩文が施されている。9・10は同一体と思われる。体部には結束第2種羽状繩文が施されている。口唇には不規則な間隔で刻み目がつけられている。

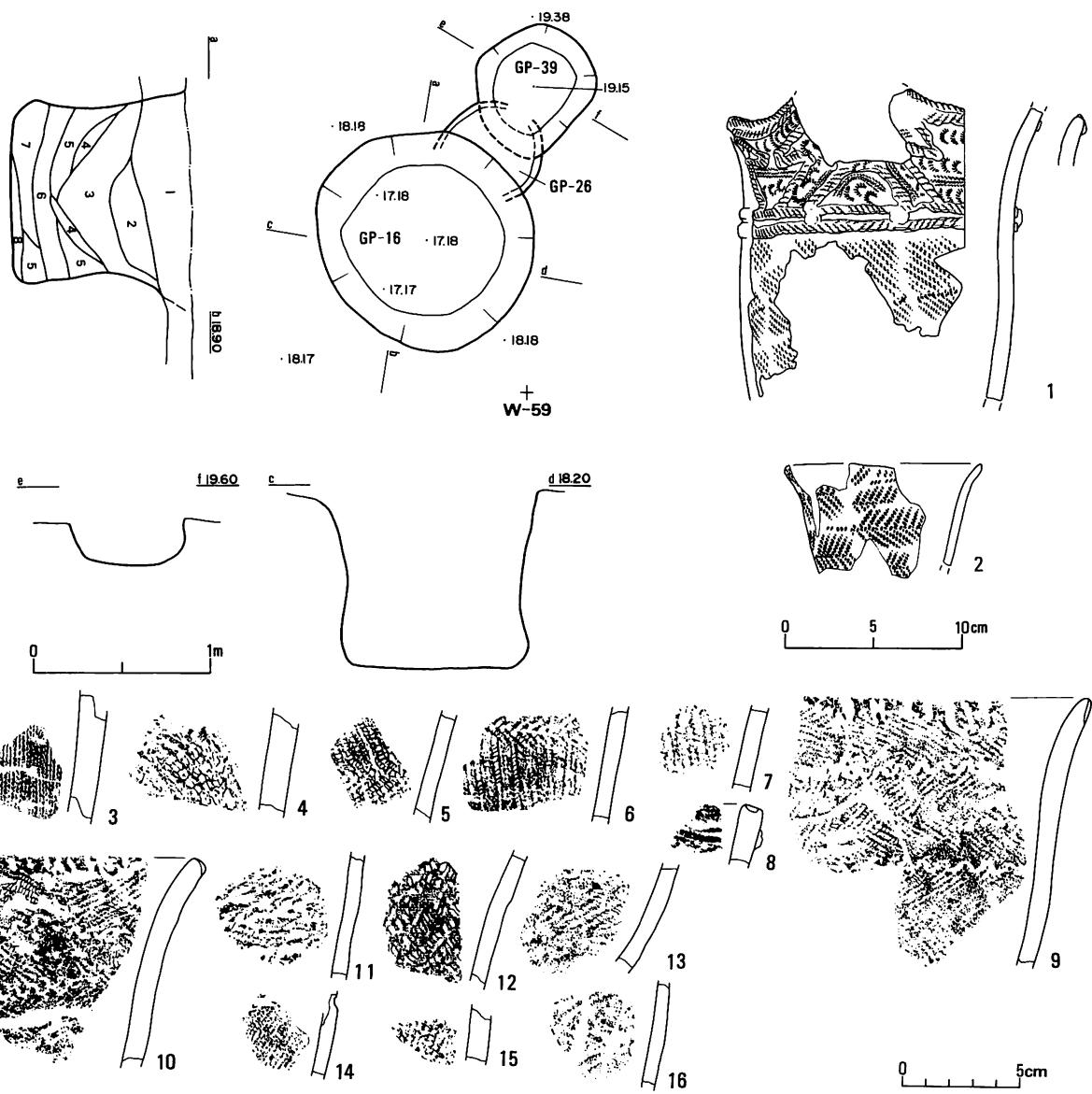
14は土壙の上部から出土したものである。

G P-26 (図III-57)

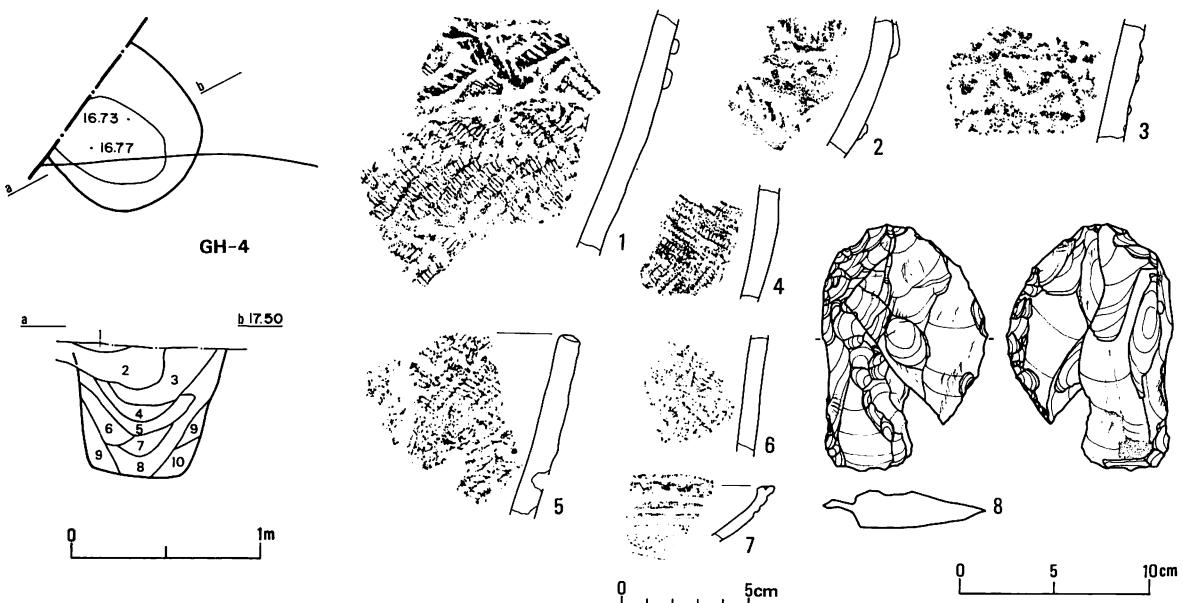
位 置 V-58・59

規 模 $\text{—} \times \text{—} / \text{—} \times \text{—} / 0.20$ m

特 徴 G P-16・39を完掘後第VI層上部まで掘り下げた段階で黒褐色土の落ち込みを確認した。上部を削平してしまった為非常に浅く、皿状である。G P-16よりも古いが、39との新旧関係はわからず、土層断面図は作成できなかった。



図III-57 GP-16・26・39と出土の土器



図III-58 GP-32と出土の遺物

遺物 覆土からII群B類(15) 土器、黒曜石のフレイクが出土した。

GP-39(図III-57)

位置 V-58・59

規模 (0.73)×0.65／(0.50)×0.43／0.27 m

特徴 第VI層上面と精査中に確認出来た。GP-26と重複する。新旧関係はわからなかった。平面重複形は不整円形で底面は平坦である。壁の立ち上がりは比較的緩やかで断面形は皿状である。土層断面図は作成できなかった。

遺物 覆土からI群(16) 土器が出土した。

GP-32(図III-58)

位置 P-60

規模 (0.93)×0.79／(0.62)×0.41／0.72 m

特徴 繩文時代後期後葉の竪穴住居GH-4を調査中に確認できた。GH-4と北西壁で重複し重複遺構の方が古い。また遺構の一部は発掘調査区域外に及んでいる。平面形は楕円形と思われる。底面は平坦で堅く、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は焼土、炭化物の多く混じる茶褐色土と、黄褐色ロームを主とする土が交互に堆積しており、人為的な埋め戻しが行なわれたと思われる。

覆土は、1：黒褐色土(焼土が混じる)、2：暗黄褐色土(炭化物と径5 mm程のローム粒が不均一に混じる)、3：黄褐色土(硬く、炭化物が極わずか混じる)、4：黄褐色土(軟らかく、3よりも焼土、炭化物が多い)、5：茶褐色土(炭化物、焼土が混じり軟らかい)、6：茶褐色土(5よりも炭化物が少なく、硬い黄褐色ロームが不均一に混じる)、7：赤褐色土(黄褐色ロームと炭化物が混じる焼土)、8：暗黄褐色土(ボロボロと崩れやすく、炭化物と黄褐色ロームが不均一に混じる)、9：暗黄褐色土(硬い)、10：黄褐色土(硬い)。

遺物 覆土からI群、II群B類、III群A類(1～6)、IV群A類、V群(7)土器とスクレイパー(8)が出土している。1は体部に結束第1種羽状縄文が施されている。文様は貼付帯により描かれ、貼付帯上には縄の圧痕が付けられている。2は無文地に貼付帯で文様が描かれ、断面が四角の工具で刺突文が加えられている。5は結束第2種羽状縄文が施されている。口唇には縄の圧痕がつけられている。胎土には小砂利が多くもろい。7は皿形土器と思われる。器内外面に赤色の顔料が塗られている。口縁には浅い沈線が3条ひかれ、肥厚させた口唇上と表側の口唇角に刺突文が施されている。体部は細かい磨消し縄文により雲形文が施されている。この土器は土壙の上部から出土したもので、埋め戻されたと考えられる土層からの出土ではない。

GP-33(図III-59)

位置 P-61

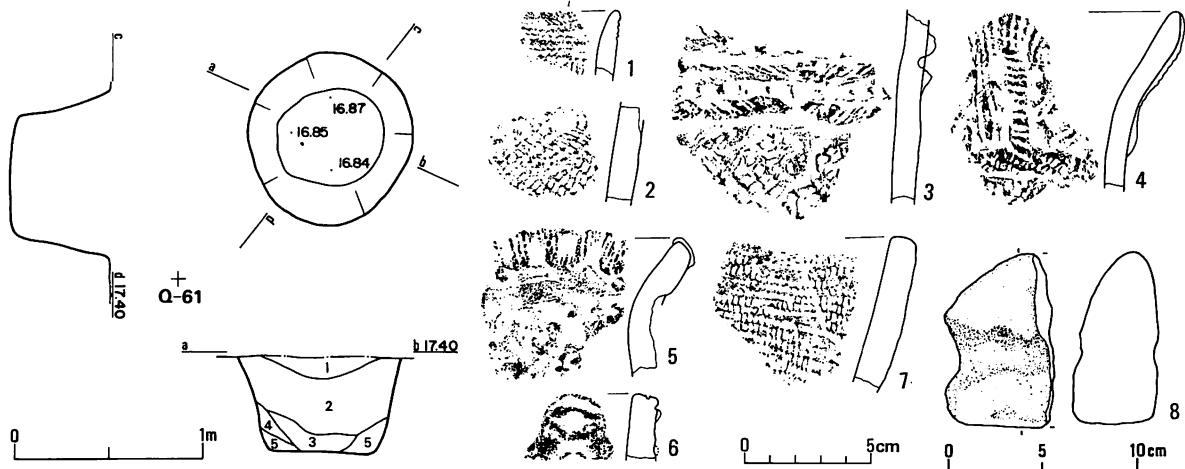
規模 0.91×0.87／0.57×0.51／0.53 m

特徴 第III層中部で黄褐色ロームが多く混じる円形の落ち込みを確認した。平面は平坦で堅い。壁の立ち上がりはほぼ垂直で開口部でやや広がっている。焼土の混じる硬い土が覆土上部に、軟らかい土が覆土下部に堆積している。覆土の状態、形状はGP-16、3と似ている。遺物は覆土2層からまとめて出土している。

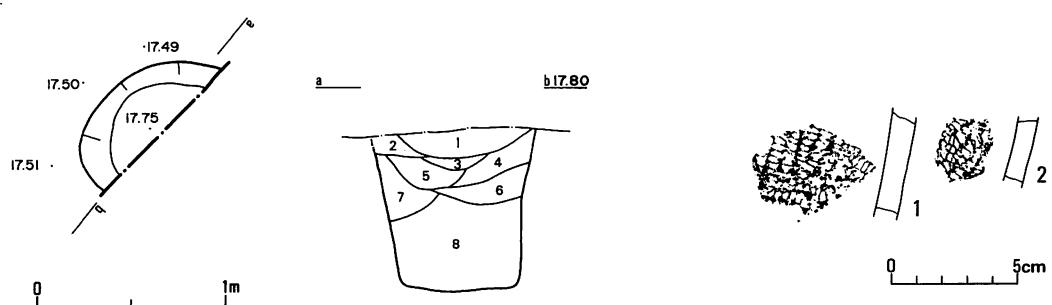
覆土は、1：暗黄褐色土(堅いロームと径5 mm程のローム粒、焼土が混じる)、2：茶褐色土(径2～3 cm程のローム粒と炭化物が混じり硬く、この層から遺物が多く出土している)、3：茶褐色土(2よりも黄褐色土が多く軟らかい)、4：暗黄褐色土(ロームに茶褐色土が混じり、軟らかく粘性がある)、5：暗黄褐色土。

遺物 覆土からII群B類(1)、III群A類(3～6)、III群B類(7)、IV群A類土器とたたき石、北海道式石冠(8)が出土した。

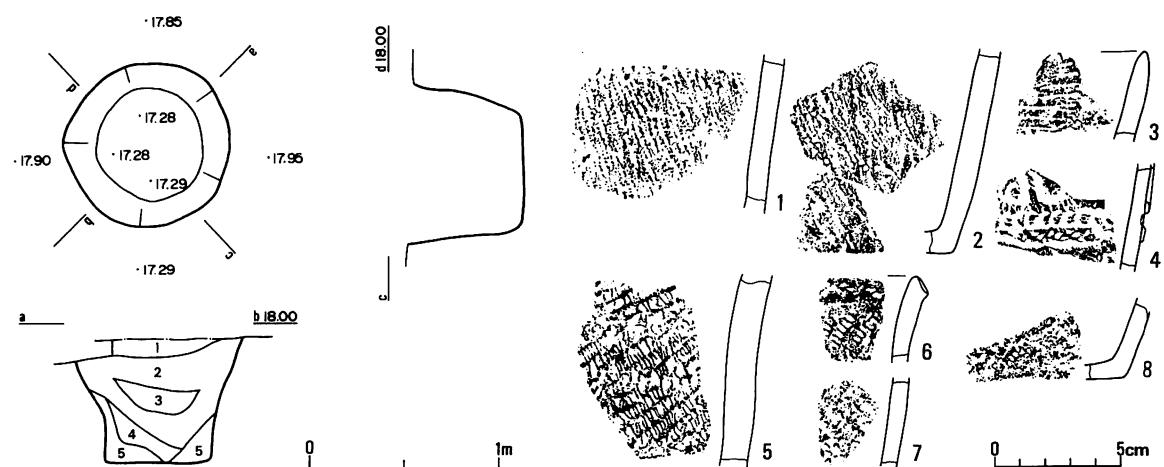
1は口縁に撲りの方向の異なる2本一組の縄の圧痕が3条つけられている。2はRL原体を縦位、



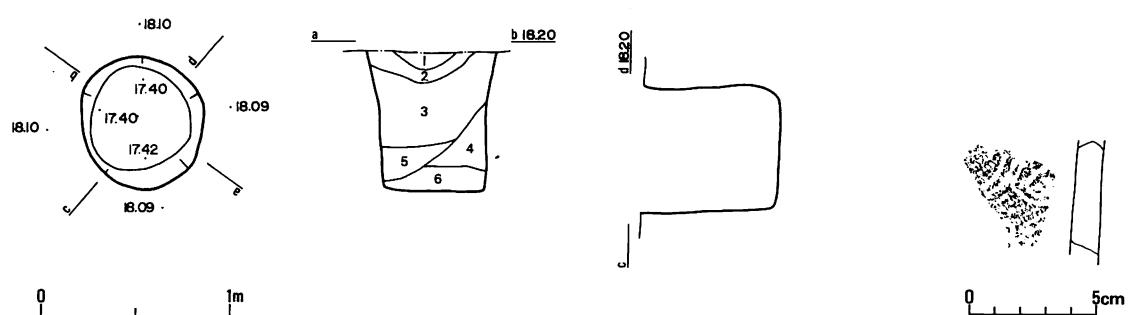
図III-59 GP-33と出土の遺物



図III-60 GP-7と出土の土器



図III-61 GP-12と出土の土器



図III-62 GP-13と出土の土器

横位に施して羽状縄文を表現しているかと思われるもの。3は体部には太いR L原体による縄文が粗く施されている。貼付帯間には断面が角形の棒状工具で刺突文が斜め方向から施されている。4は突起部の破片。縄の刻み目がつけられた貼付帯、2本一組の縄線、棒状工具による刺突文で文様が描かれている。7は波状口縁をなすかと思われるもので、横走気味の縄文が施されている。

4) 大型の円形柱穴状ピット

GP-7 (図III-60)

位置 R-62、S-62

規模 ——×——／0.90×0.63／0.86 m

特徴 遺構のほぼ半分程が発掘区域外に及んでいる。土層断面から判断すると、掘り込み面は第III層中部と思われる。底面は凹凸があり硬く、壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

覆土は、1：暗黄褐色土（黄褐色ローム粒と炭化物が不均一に混じる）、2：茶褐色土（粘性があり、炭化物が混じる）、3：暗黄褐色土（炭化物と黄褐色ローム粒が少し混じる）、4：黒褐色土、5：灰褐色土、6：暗黄褐色土（7よりも黄褐色ロームの量が多い）、7：暗黄褐色土（硬い）、8：茶褐色土（軟らかくボロボロと崩れやすい）。

遺物 覆土上位からIII群A類（1・2）土器が出土している。1は結束羽状縄文が施されている。

GP-12 (図III-61)

位置 T-59・60、U-59・60

規模 0.89×0.85／0.58×0.57／0.62 m

特徴 第III層下部で確認された。平面形は円形で底面は平坦で硬い。壁の立ち上がりは全周でほぼ垂直であるが、壙口部でやや広がる。

覆土は、1：黒黄褐色土（硬い）、2：茶褐色土（細かいローム粒と焼土が混じる）、3：暗黄褐色土（黄褐色ロームの量が多く、ロームがブロック状に混じる）、4：暗黄褐色土（細かいローム粒が混じる）、5：黄褐色土（ボロボロと崩れやすく、黒色土がわずかに混じる）。

遺物 覆土1・2層からII群B類（1・2）、III群A類（3～5）、III群B類（6～8）土器が出土した。1・2は撫り戻しの原体による縄文が施されたもの。3は突起部の破片。ニシンタイプの魚骨回転文がつけられている。6は口唇に縄による刻み目がある。

GP-13 (図III-62)

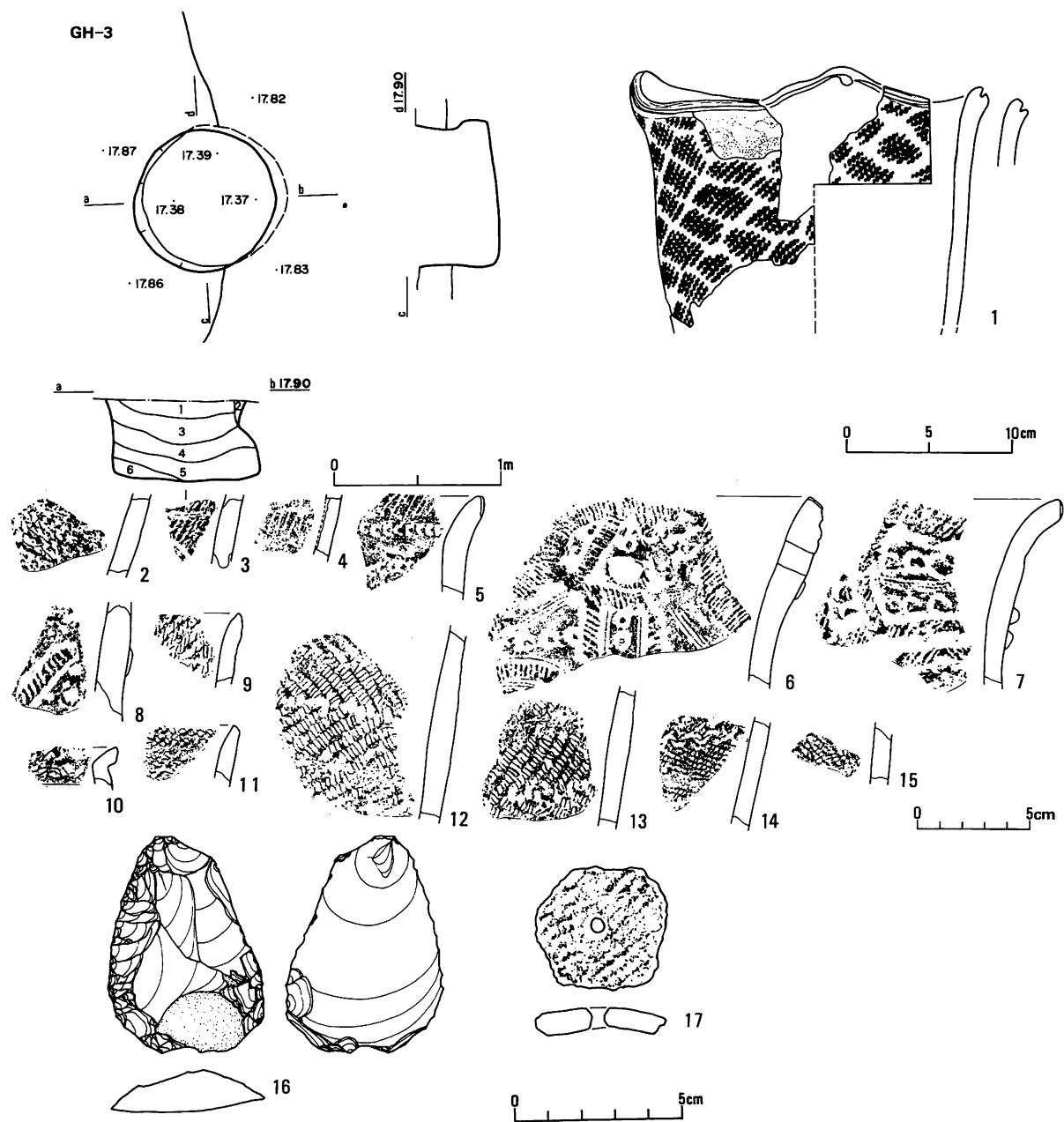
位置 U-58

規模 0.70×0.65／0.55×0.52／0.74 m

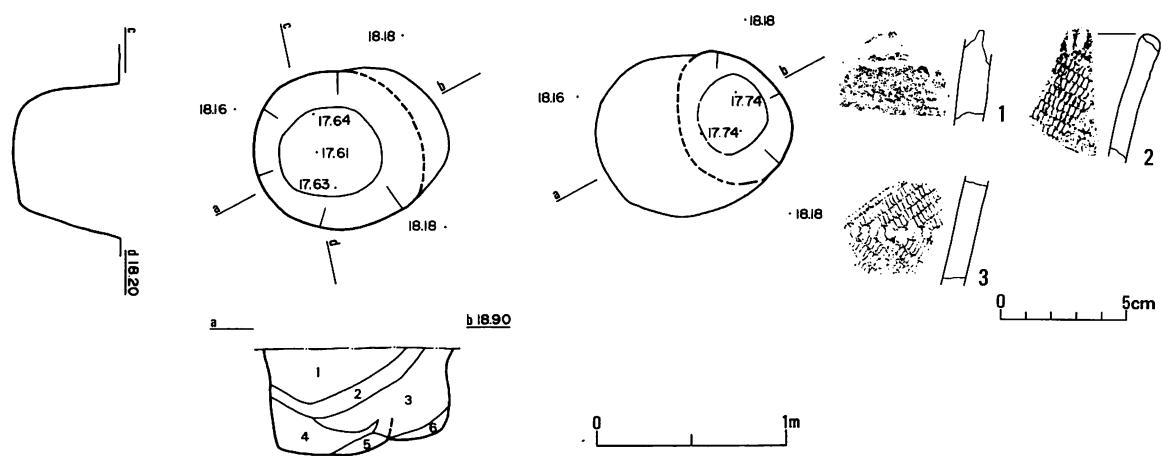
特徴 第III層下部で確認された。平面形は不整円形。底面は平坦で壁は全周で壙口部まではほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は、1：茶褐色土、2：黒褐色土（細かいローム粒、炭化物が混じる）、3：暗黄褐色土（非常に細かいローム粒と炭化物が混じり、軟らかい）、4：黒褐色土（極わずかにローム粒が混じり、軟らかい）、5：暗黄褐色土（大きなローム粒と黄褐色ロームが混じる）、6：茶褐色土（黒色土に黄褐色が混じる）。

遺物 覆土からII群、III群B類（1）、IV群A類土器が出土した。1は沈線により円形の文様が描かれている。



図III-63 GP-10と出土の遺物



図III-64 GP-14・15と出土の土器

GP-10 (図III-63、図版26-5・6)

位置 S-59

規模 $0.87 \times 0.82 / 0.85 \times 0.82 / 0.50$ m

特徴 第III層中部で確認された。西側で縄文時代中期中葉の住居跡GH-3と重複する。本遺構の方が新しい。平面形は円形で、壁は住居跡の覆土を掘り込んでいるために軟らかく東側でややオーバーハングする。底面は平坦で硬い。覆土は全般的に軟らかく炭化物や焼土が多く混じる。

覆土は、1：茶褐色土（細かい炭化物が混じり粘性がある）、2：暗黄褐色土、3：茶褐色土（炭化物が一番多く細かいローム粒と焼土が混じる）、4：灰褐色土（炭化物が混じり、黄褐色ロームの量が3よりも多い）、5：暗黄褐色土（ロームの量が多い）、6：暗黄褐色土（ロームの量が非常に多い）。

遺物 覆土1・3層からI群B類、II群B類（2～5）、III群A類（6～15）、III群B類（1）、IV群A類土器、スクレイパー（16）、石斧の破片、土製品（17）が出土している。

1は胴部が張らず口縁が外反する深鉢形土器。口縁部に3箇所大きな山形隆起部があり、欠損していくはっきりしないが、大きな隆起部の横には小さな隆起部がありそうである。口唇を肥厚させて溝状の凹線を施している。隆起部には断面が円錐形の刺突文が付けられている。体部にはLRによる斜行縄文が施されている。器面には炭化物が付着する。2は撫り戻しの原体による縄文が付けられている。9には無節の斜行縄文が施されている。12・13は結束第1種羽状縄文が施されている。17はII群B類土器を利用した有孔土製円盤である。

有孔土製円盤

GP-14 (図III-64)

位置 V-58

規模 $0.75 \times (0.57) / 0.38 \times (0.37) / 0.48$ m

特徴 GP-15と重複する。本遺構の方が新しい。平面形は卵形と思われる。底面は浅い皿状である。遺物、覆土は14・15一括して記載する。

GP-15 (図III-64)

位置 V-58

規模 $0.92 \times (0.86) / 0.53 \times 0.45 / 0.57$ m

特徴 平面形は楕円形と思われる。底面は凹凸がある。壁は急角度で立ち上がり開擴部でわずかに広がる。

覆土は、1：茶褐色土（径2～3cmのローム粒が混じる）、2：褐色土（細かいローム粒が混じる）、3：（茶褐色ロームが不均一に混じる）、4：暗黄褐色土（黒色土と黄褐色ロームが不均一に混じる）、5：黒褐色土（軟らかい）、6：暗黄褐色土（黄褐色ロームの量が多い）。

遺物 GP-14・15の遺物は区別が困難であったため、まとめて記載する。

覆土からII群B類（1）、III群A類（2・3）、IV群A類土器、コアが出土している。1は多軸の原体による撫糸文が施されたもの。2は口唇に縄による刻み目がある。

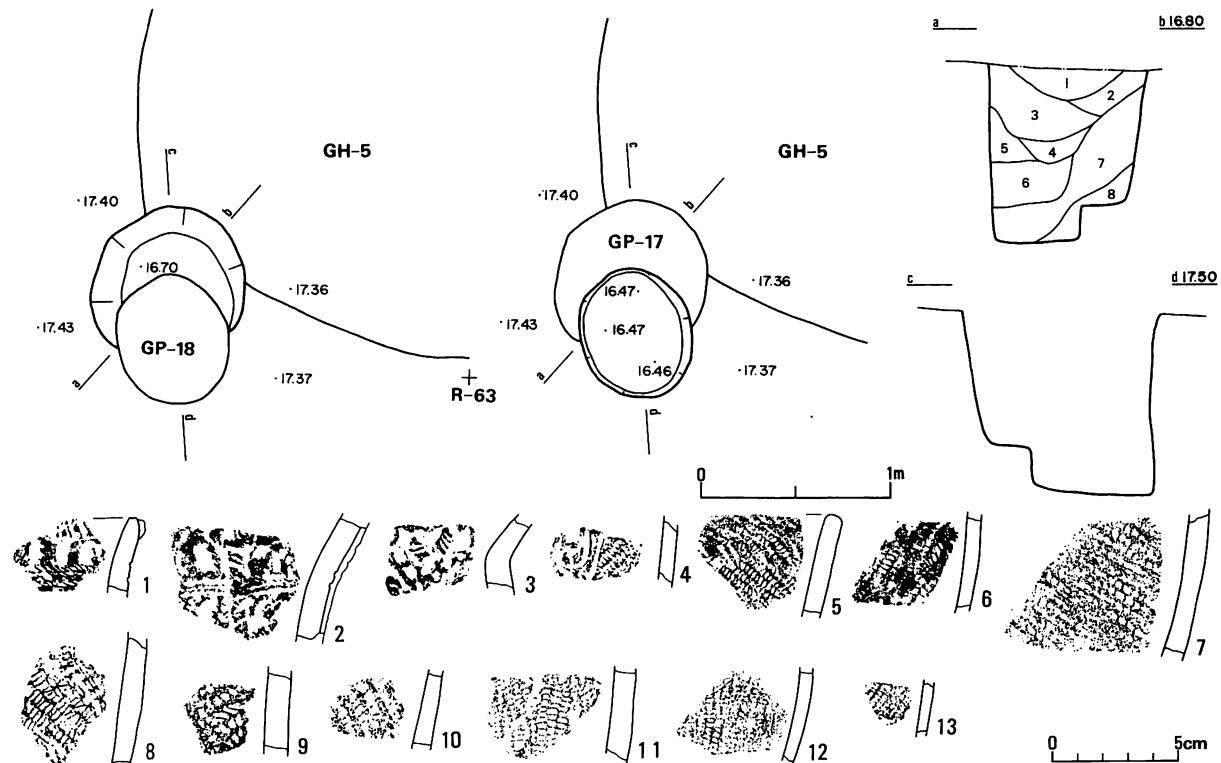
GP-17 (図III-65)

位置 Q-62、R-62

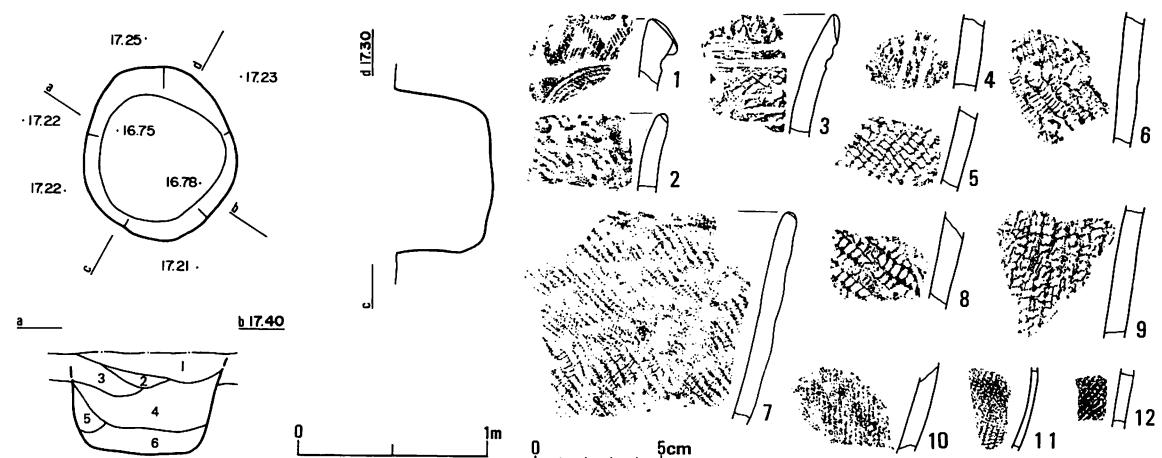
規模 $0.83 \times (0.79) / (0.57) \times 0.56 / 0.95$ m

特徴 縄文時代中期中葉の竪穴住居GH-5、GP-18と重複する。GH-5より新しく、GP-18よりも古い。平面形は不整円形と思われる。底面は平坦で壁の立ち上がりは擴口部までほぼ垂直である。

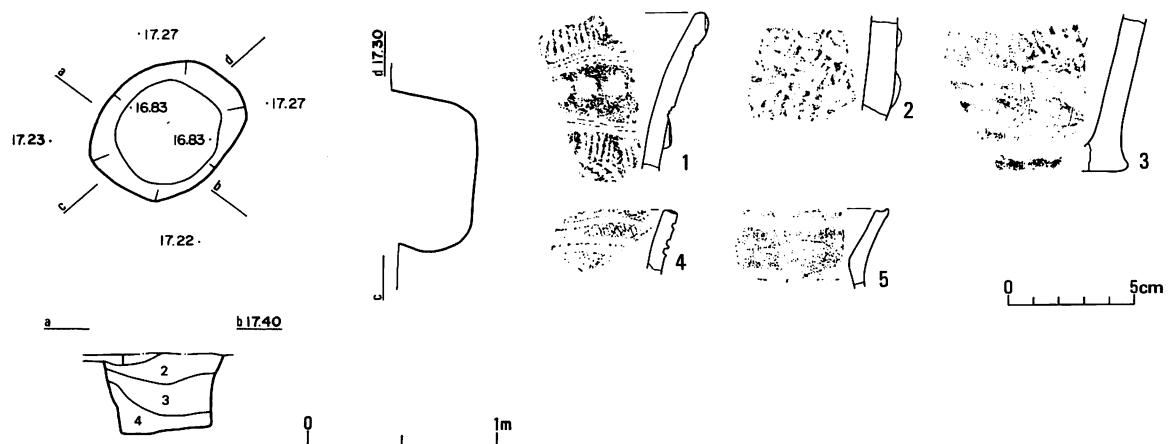
覆土は、1：茶褐色土（硬く、細かいローム粒と炭化物が混じる）、2：暗黄褐色土（黄褐色ロームを多量に含む）、3：茶褐色土（ローム粒が不均一に混じり、焼土と炭化物も混じる）、4：暗黄褐色土（軟らかく3よりもロームの量が多い）、5：暗黄褐色土（ボロボロと崩れやすい）、6：黄褐色土（ボロボロと崩れやすくロームの量が非常に多い）、7：茶褐色土（硬く、細かいローム粒が



図III-65 GP-17・18と出土の土器



図III-66 GP-22と出土の土器



図III-67 GP-21と出土の土器

混じる)、8: 暗黄褐色土(黒色土とロームが不均一に混じる)。

遺物 覆土からII群B類、III群A類(1~3・8)、III群B類(4~7、9~11)、IV群A類(V群12・13) 土器と炭化したクルミ等が出土した。

3は貼付帯による文様と棒状工具による刺突文が施されている。4は沈線で文様が描かれている。

5は口唇上に縄文が施されている。10は複節の縄文のもの。

GP-18(図III-65)

位置 Q-62、R-62

規模 0.68×0.58/0.63×0.50/0.71 m

特徴 GP-17と重複している。本遺構の方が新しい。平面形は楕円形。底面は平坦で硬い。壁の重複立ち上がりは全周で廣口部付近まではほぼ垂直である。覆土はGP-17と一括して記載する。遺物は出土していない。

5) 円形あるいは楕円形のピット

GP-22(図III-66)

位置 P-62

規模 0.93×0.82/0.68×0.64/0.51 m

特徴 第III層中部で確認された。平面形は廣口部、底面とも不整円形。底面は凹凸があり壁の立ち上がりは全周ではほぼ垂直である。

覆土は、1:茶褐色土(硬い)、2:茶褐色土(1よりも黄色味を帯びる)、3:暗茶褐色土(細かいローム粒と炭化物が混じる)、4:暗茶褐色土(径1 cm前後のローム粒が多く混じる)、5:黒褐色土(わずかにローム粒が混じる)、6:黒褐色土。

遺物 覆土からII群B類、III群A類(1~5)、III群B類、IV群A類、V群(7) 土器が出土した。

2は口唇にも縄文が施されている。3はIII群A類で細い貼付帯と沈線で文様が描かれ、口唇上には縄による刻み目が付けられている。7は器面には0段の条数が異なる二種類のRL原体で斜行縄文が施されている。口唇上にも縄の圧痕が付けられている。焼成が非常によい。

GP-21(図III-67)

位置 P-62

規模 0.87×0.66/0.57×0.52/0.46 m

特徴 第III層下部で確認された。平面形は廣口部では楕円形、底面は不整円形である。底面は凹凸がある。覆土は全体的に黄褐色ロームが多く混じる土である。

覆土は、2:黒褐色土(ローム粒をわずかに含む)、2:茶褐色土(細かいローム粒が混じる)、3:暗黄褐色土、4:黒茶褐色土(ロームが少し混じりボロボロと崩れやすい)。

遺物 覆土からII群B類、III群A類(1~3)、IV群A類(4)、V群(5) 土器が出土した。

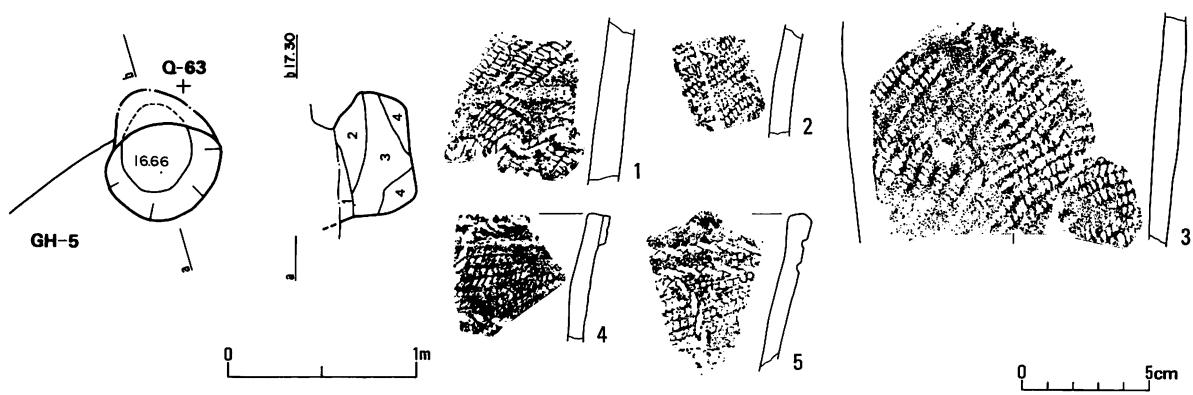
4は縄文地に沈線で文様が施されるもので、口唇にも縄文がつけられている。5は口縁部に無文帶を持つ鉢形土器と思われる。

GP-30(図III-68)

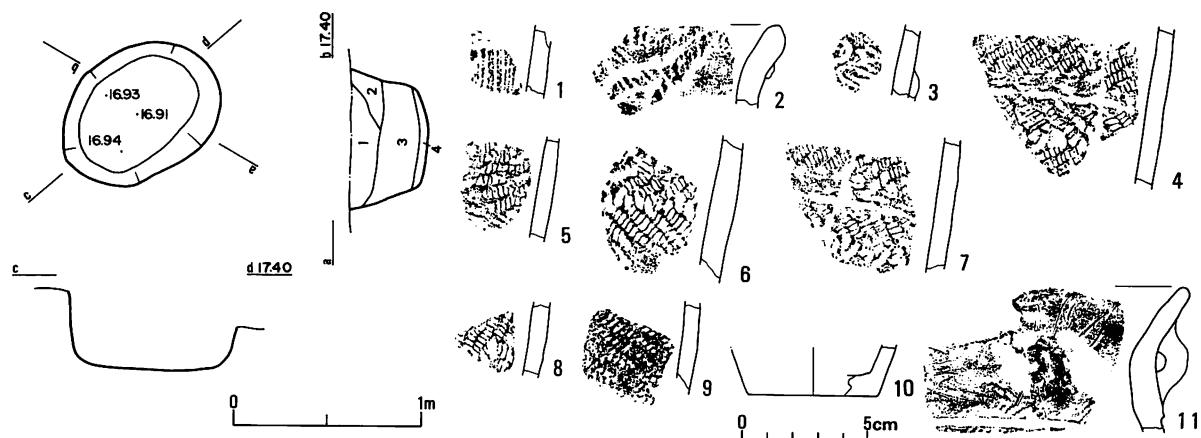
位置 Q-62・63

規模 0.63×0.50/0.45×0.37/0.40 m

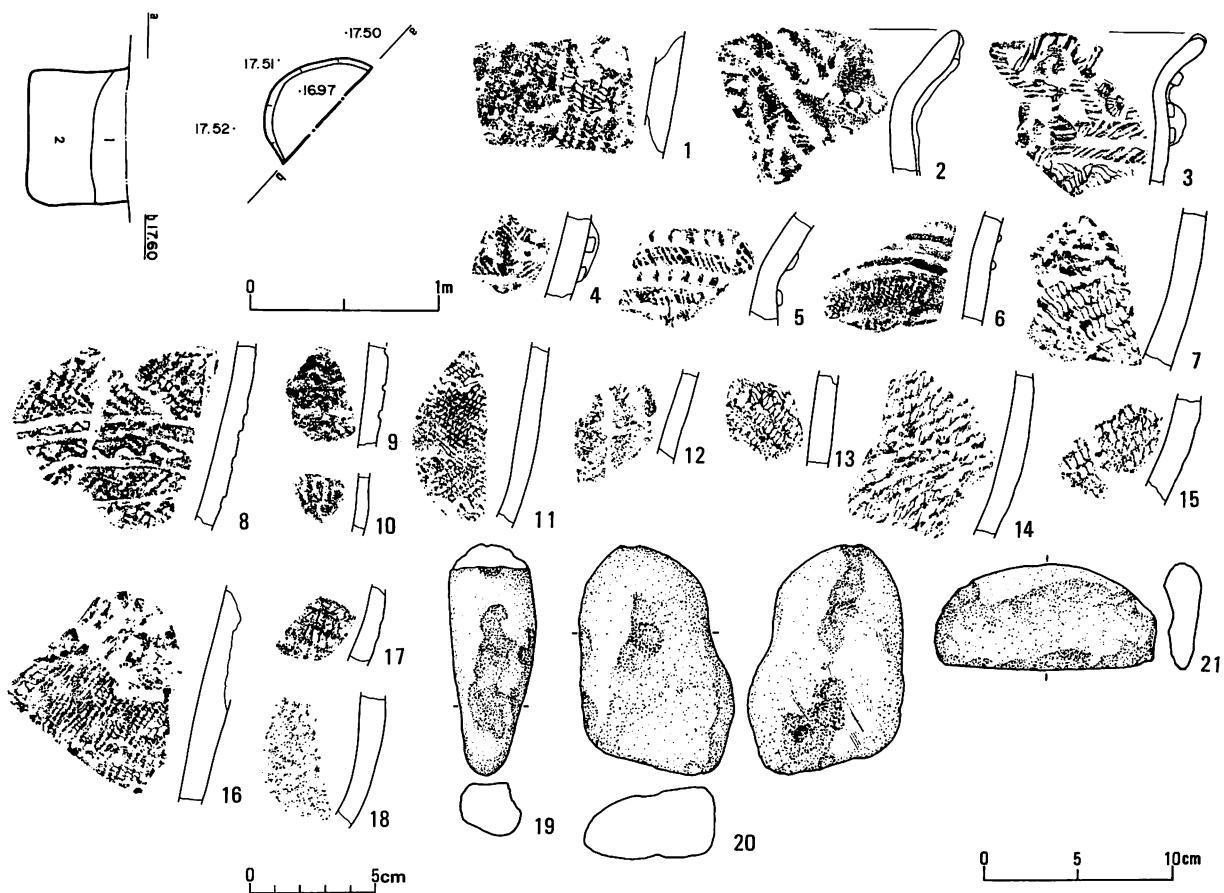
特徴 GH-5(縄文時代中期後葉III群B₂類土器の時期)を調査中に確認出来た。住居跡の長軸線重複上の先端部に位置し、住居跡の床面を掘り抜いている。平面形は不整円形。底面、壁いずれも凹凸がある。北西側が袋状でその他では鋭角に立ち上がる。住居跡の壁と重複するため、北西側の壁が明瞭ではない。覆土の状態から判断すると、住居との構築時期にあまり時間差はないものと思われる。構築時期は、1:茶褐色土(硬く、黄褐色ロームが不均一に混じる)、2:茶褐色土(硬く、炭化物が



図III-68 GP-30と出土の土器



図III-69 GP-45と出土の土器



図III-70 GP-46と出土の遺物

混じる)、3: 暗茶褐色土(軟らかく、黄褐色ロームが不均一に混じる)、4: 黄褐色土(軟らかい)。

遺物 覆土下部からII群B類、III群A類(1~3)、III群B類(4~5)土器等が出土した。

1は結束第2種羽状縄文が施されている。2はLR原体による斜行縄文が浅く施されている。3は複節の縄文が施されたもの。4の器面にはLR原体による横走気味の縄文が施されている。口縁部には隆帯がつけられ、隆帶上と下端にはLR原体による縄線がつけられている。隆帶からは縦方向にも縄線が施されている。頸部にも1条めぐらされている。5はやや肥厚させた山形隆起部をもつもの。器面にはLR原体による横走気味の縄文が施されている。口縁部にはLR原体による縄線が2条めぐり、縦方向にもつけられている。頸部にも横走する縄線がつけられていることが痕跡からわかる。

GP-45(図III-69)

位置 P-61・62

規模 $0.90 \times 0.67 / 0.70 \times 0.47 / 0.42$ m

特徴 縄文時代中期前葉の竪穴住居GH-7を調査中に確認出来た。竪穴の覆土から掘り込まれて重複している。平面形は橢円形で底面は平坦である。壁は全周でほぼ垂直に立ち上がり、比較的崩れやすい。

覆土は、1:茶褐色土(粘性があり細かいロームが混じる)、2:茶褐色土(1よりもロームより量が多い)、3:茶褐色土(硬い)、4:暗黄褐色土(ロームに黒色土が混じる)。

遺物 覆土からII群B類(1)、III群A類(2~7・10)、III群B類(8・9)、IV群A類(11)土器とすり石が出土した。1は撫系文が施されている。11は把手がついた壺形土器。口縁部は縄文地に沈線で文様が描かれていると思われる。

GP-46(図III-70)

位置 T-61

規模 $— \times — / 0.70 \times 0.64 / 0.53$ m

特徴 発掘調査区境界の土層断面で確認出来た。掘り込み面は第III層中部である。遺構の半分程は調査区域外に及んでいる。平面形は円形かと思われる。底面は平坦で壁は開口部までほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は、1:茶褐色土(2よりも黒味を帯び、炭化物と焼土が混じる)、2:茶褐色土(軟らかく、炭化物が混じる)。

遺物 覆土上部からI群、II群B類(1)、III群A類(2~14・16)、III群B類(15・17・18)、IV群A類土器とくぼみ石(19・20)、すり石(21)等が出土した。

1は撫り戻し原体による縄文が施されている。2は無文地に貼付帶と棒状工具による刺突文で文様が描かれている。6は細かい貼付帶で弧状の文様を描いている。8・9は縄文地に沈線で文様が施されている。10は小型の土器。無文地に非常に細かい撫紐による馬蹄形圧痕文が施されている。14は無節の斜行縄文が施されている。器面は非常に丁寧に磨かれ黒褐色を呈する。20は扁平な礫の両面にくぼみがある。21は半円状扁平打製石器と称されるもの。

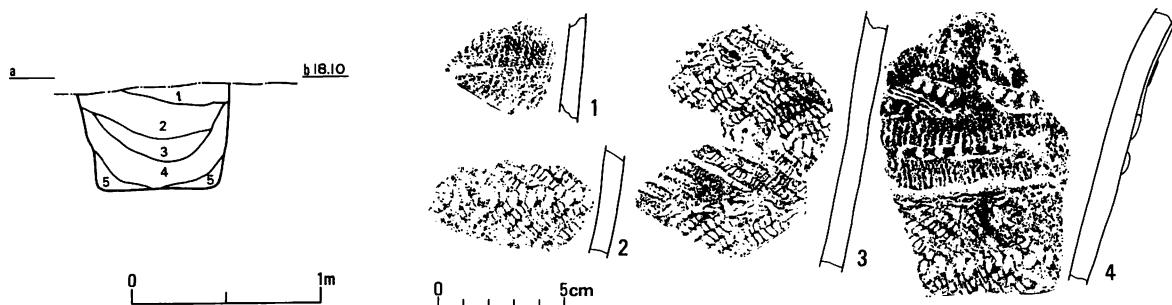
GP-29(図III-71、図版27-5)

位置 U-59、V-59

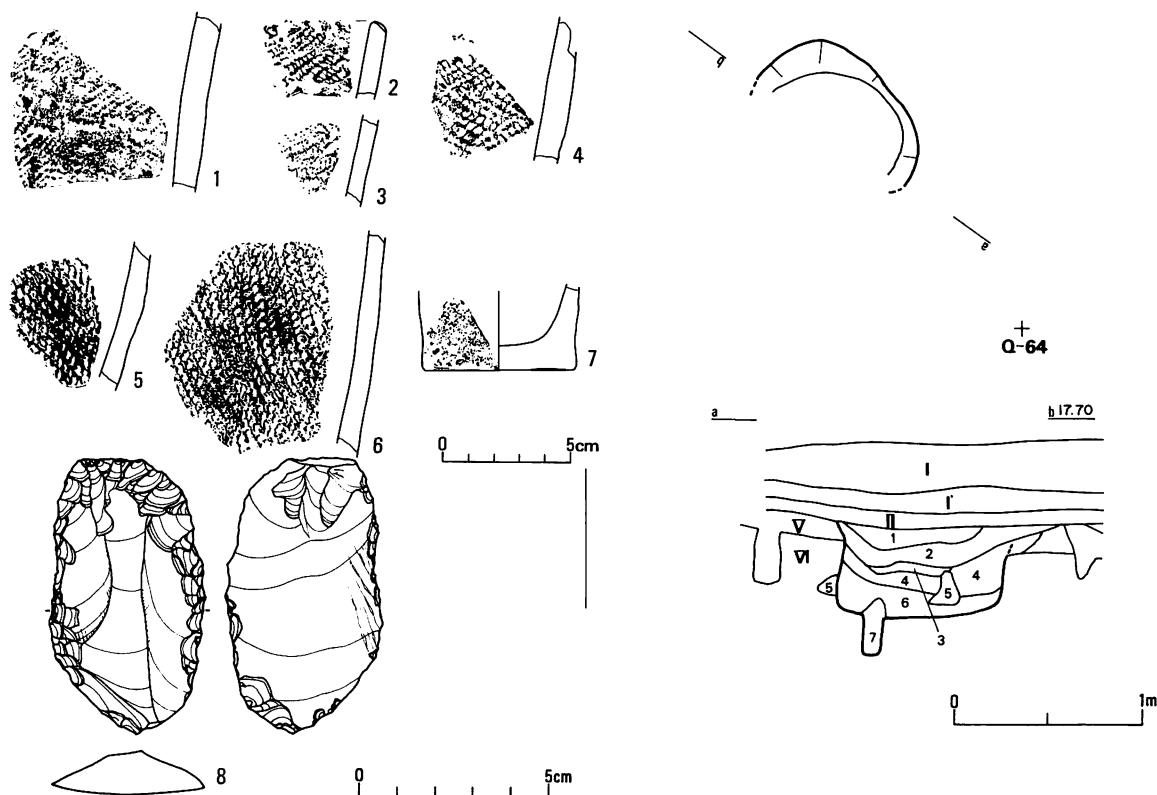
規模 $— \times — / — \times — / 0.52$ m

特徴 第III層中部で黄褐色ロームが多量に混じる土の円形の落ち込みを確認した。平面図は橢円形。覆土上部から中部に黄褐色ロームを主とする土、下部には軟らかい黒褐色土が主として混じる土が堆積していた。調査の不手際で平面図を作成することが出来なかった。

覆土は、1:明茶褐色土(径5mm程のローム粒が多量に混じる)、2:黄褐色土(わずかに黒色土が混じる)、3:黄褐色土(硬い)、4:黒褐色土、5:暗黄褐色土(壁際から底面にかけて堆積し、大きなローム粒が混じる)。



図III-71 GP-29と出土の土器



図III-72 GP-34出土の遺物

図III-73 GP-47

遺物 覆土からI群、II群B類（1）、III群A類（2～4）、IV群A類土器が出土した。

2～4は体部に結束羽状縄文が施されている。4は縄線と貼付帶とで文様が描かれている。

GP-34（図III-72、図版27-4、28-2）

位置 P-63

規模 —————/————/————

特徴 昭和60年調査地区との境界で検出された。GSP-2と重複する。本遺構のほうが古い。遺構

重複 の半分以上が過年度発掘した区域におよんでいるため遺構の全体をとらえることはできなかった。

平面図、土層断面図は作成できなかった。覆土から身の中ほどで折れた、石刀が出土した。GSP-

石刀 2から出土したものと接合はしないが、同一個体である。

遺物 覆土からII群B類、III群A類（1・2）、III群B類（3～7）、V群土器とスクレイパー（8）、

台石片、コア、石製品（図III-83-21）が出土した。

2には口唇に縄による刻み目が施されている。8はほぼ橢円形を呈する周辺加工のスクレイパー。石刀はGSP-2出土のものと同一であるが接合しなかった。

GP-47 (図III-73)

位 置 P-63

規 模 $1.00 \times \text{—} / 0.70 \times \text{—} / 0.49 \text{ m}$

特 徴 昭和60年調査でアンダーパス部分として報告した地区から検出された。掘り込み面は第III層中部である。境界にあるため60年度の調査では全体の形がとらえられなかった。平面形は橢円形と推定される。

覆土は、1：黒色土、2：黒褐色土、3：黒色土、4：黒褐色土（黄褐色ロームがブロック状に混じる）、5：黒褐色土（軟らかい）、6：暗褐色土（黄褐色ロームがブロックで混じる）、7：攪乱。

遺 物 IV群A類、V群土器が出土している。

6) 皿状のピット

GP-9 (図III-74、図版28-3・4)

位 置 R-62・63

規 模 $1.30 \times 0.98 / 0.82 \times 0.59 / 0.21 \text{ m}$

特 徴 第III層下部で茶褐色土の円形の落ち込みを確認した。壙口部の平面形は円形で、断面形は浅い皿状である。底面の北西部からIII群B₂類土器が押し潰された状態で出土した。

覆土は、1：茶褐色土（硬く、炭化物とローム粒が混じる）、2：暗黄褐色土（ロームの量が多い）。

遺 物 底面からIII群B類（1）土器が出土した。覆土からはI群（2）、III群A類（3・4）、III群B類、IV群A類、V群（5・6）土器とスクレイパー（7）が出土した。

1はIII群B₂類相当のもの。北西側底面から壁際にかけて押し潰されたような状態で出土したものである。半分以上は失なわれている。胴部が張り頸部がくびれる大型の深鉢形土器。口縁部には山形隆起部を4箇所に設けている。器面全体に太いLR原体による横走気味の縄文が施されている。縄文施文後、頸部に幅1cm程の隆帯を貼付し、口縁の山形隆起部から縦に施した隆帯とつなげている。隆帯上には地文と同じ2段LRの原体で縄線文が施されている。山形隆起部と隆起部の中間に対応する位置に上下に2個ずつ沈線で渦巻文を配し、頸部の隆帯から縦に2条施された沈線でつなげている。上段の渦巻文は更に横走する2条の沈線につながれている。下段の渦巻文は左右に弧線を施している。2は細い隆起線が施され、その上から縄文が施されている。3は0段の条数が異なる原体による結束羽状縄文が施されている。

底面出土の
土器

時 期 縄文時代中期末葉III群B₂類土器の時期

GP-23 (図III-75)

位 置 P-63

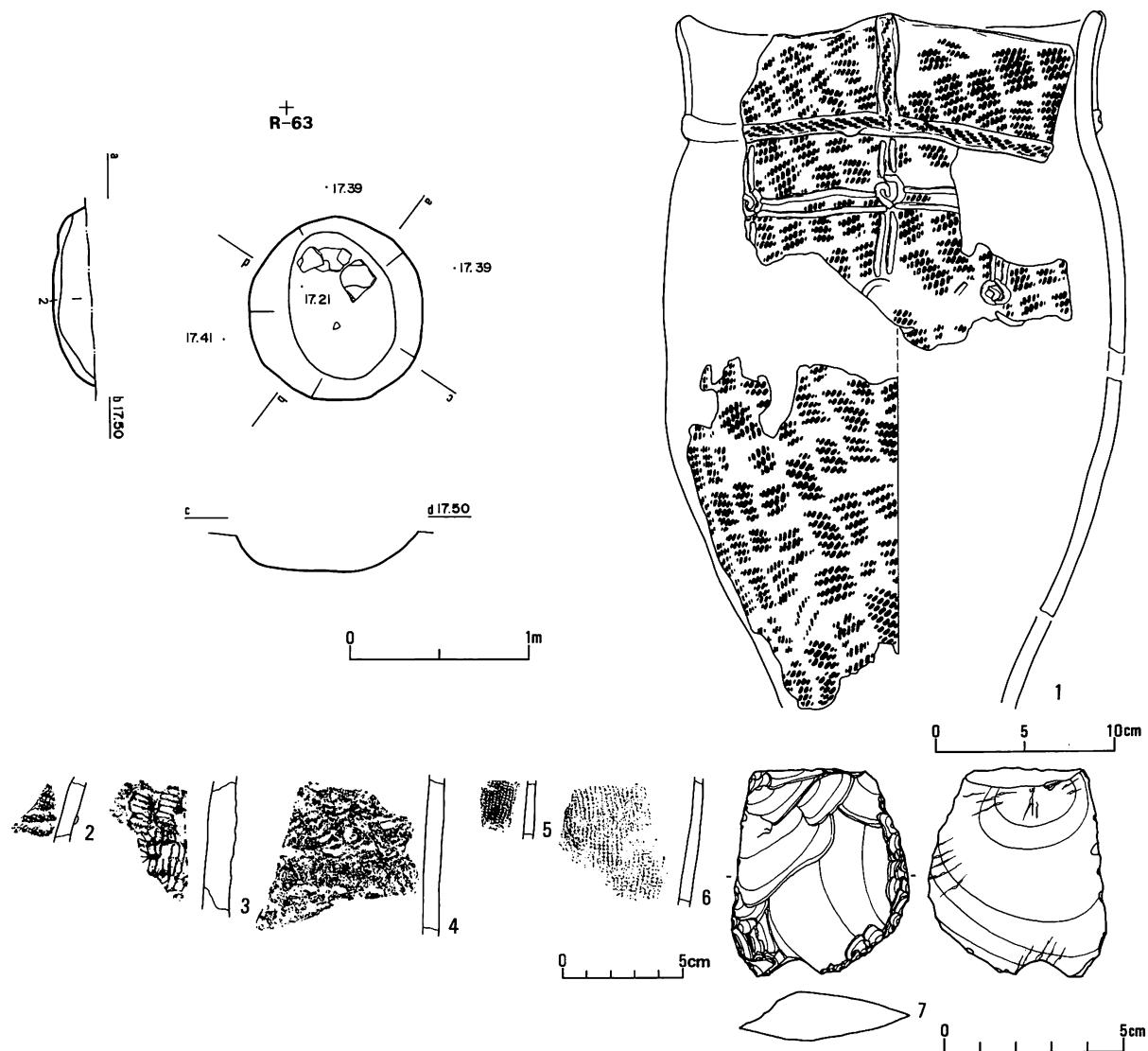
規 模 $1.23 \times 1.03 / 1.02 \times 0.77 / 0.36 \text{ m}$

特 徴 第III層下部で確認された。平面形は長軸方向でわずかに張り出す隅丸方形。底面は凹凸があり壁の立ち上がりは北西側で急角度である。

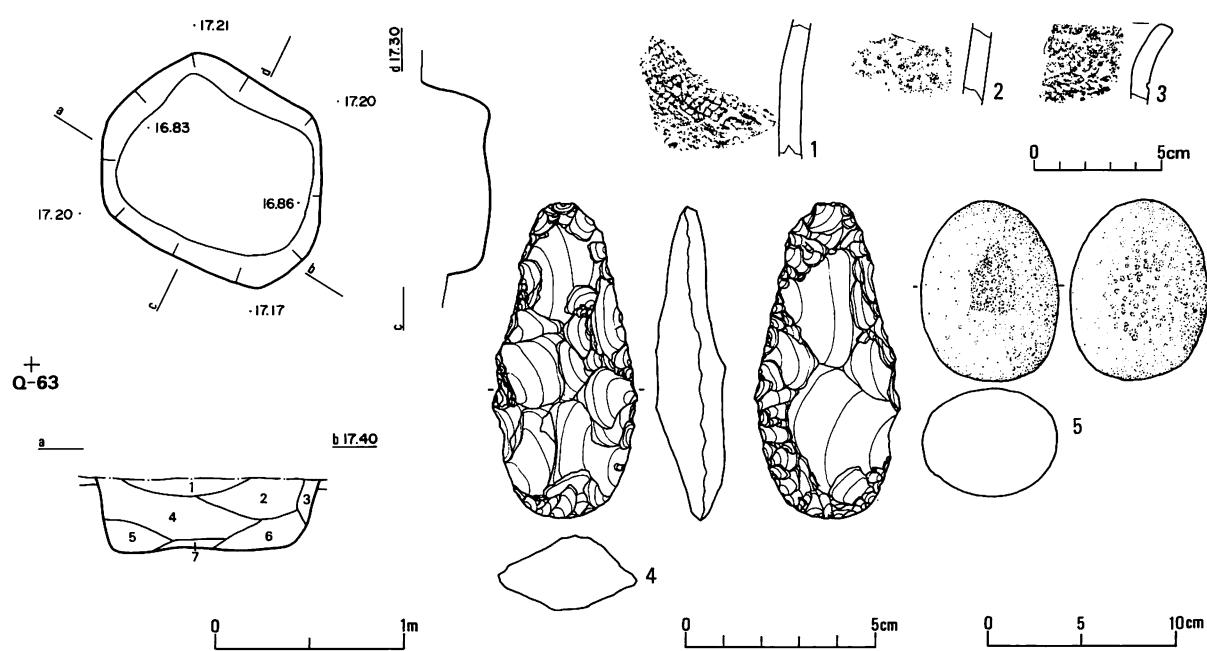
覆土は、1：茶褐色土（ボロボロと崩れやすく炭化物が混じる）、2：暗黄褐色土（径5~10mm程度のローム粒が不均一に混じる）、3：暗黄褐色土（粘性がある）、4：暗黄褐色土（径1cm程のロームが混じる）、5：黄褐色土（4よりもロームの量が多い）、6：暗茶褐色土（黒色土と炭化物が混じる）、7：黄褐色土。

遺 物 覆土からII群B類、III群A類（1・2）、III群B類（3）、IV群A類、V類土器とスクレイパー（4）、たたき石（5）が出土している。

1には結束羽状縄文が施されている。3は口唇が磨かれて角形になっている。頸部にはLR原体による縄線がつけられている。4は橢円形を呈する両面加工のスクレイパー、5は円形礫の腹・背



図III-74 GP-9と出土の遺物



図III-75 GP-23と出土の遺物

面に使用痕がある。

GP-5 (図III-76)

位置 T-61

規模 $1.08 \times 0.98 / 0.92 \times 0.80 / 0.36$ m

特徴 第VI層上部を精査中に確認した。平面形はほぼ円形で上部を削平してしまったため浅い。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

覆土は、1：暗黄褐色土（硬く、大きなローム粒が混じりボロボロする）、2：茶褐色土（わずかにローム粒が混じる）、3：茶褐色土、4：暗黄褐色土（2よりもロームの量が多い）、5：茶褐色土（黄褐色ロームの量が少ない）、6：黒褐色土（軟らかく粘性があり、所々にロームのブロックが混じる）。

遺物 覆土からII群B類（1～7）、III群A類（8～18）、III群B類（19）、IV群A類（20・21）土器と、スクレイパー、Rフレイク等が出土した。

1は体部には撚糸文が施されている。口縁にはLR原体による縄の圧痕が数条施されている。その下位には低い隆帯が付けられ、隆帯上には押ししきの刺突文が施されている。隆帯下位の体部文様との境目には綾絡文が2条施されている。2には低い隆帯が付けられその上には細い先の尖った工具で横から刺突を加えている。隆帯の上位には縄線がそえられている。穿孔は焼成後のものである。3は複節の縄文、4は撚糸文、5は自縄自巻的縄文が施されている。7は多軸の撚糸文が施された底部の破片。8は磨滅しているが、貼付帶と棒状工具による刺突文で文様が描かれている。12・13は突起部の破片で突起中央に孔を穿ち粘土紐を孔の周りに貼り付けている。突起上には縄文、口唇上には縄の刻み目が施されている。同一個体かもしれない。16は0段の条数の異なる縄で結束羽状縄文が施されている。19は胴部がやや張り出し口縁が外反する器形のもの。器面には凹凸があり内面に炭化物が付着する。体部にはLR原体による斜行縄文が施されている。15は結束第2種羽状縄文が、17には縄文がまばらに施されている。

GP-20 (図III-77)

位置 Q-63

規模 $0.73 \times 0.62 / 0.57 \times 0.39 / 0.24$ m

特徴 第III層下部で茶褐色土の落ち込みを確認した。平面形は廣口部では橢円形、底面は隈丸方形である。底面は凹凸があり断面形は皿状である。覆土は非常に硬い。

覆土は、1：茶褐色土（硬く細かいローム粒と炭化物が混じる）、2：黒茶褐色土（硬くしまっていいる）、3：暗黄褐色土（黄褐色ロームの量が多い）。

遺物 覆土からII群B類（1）、V群（2～11）土器が出土している。

2・3は肩部が張り出す器形の鉢形土器と思われる。2には頸部に3条細い沈線が施されている。口唇には細い棒状工具で刻み目が付けられている。

GP-8 (図III-78)

位置 U-60

規模 $0.71 \times 0.65 / 0.58 \times 0.52 / 0.37$ m

特徴 第III層下部で茶褐色土の落ち込みを確認した。平面形はほぼ円形。底面は中央部でやや凹んでいる。覆土は全体的に硬い。遺物は出土していない。

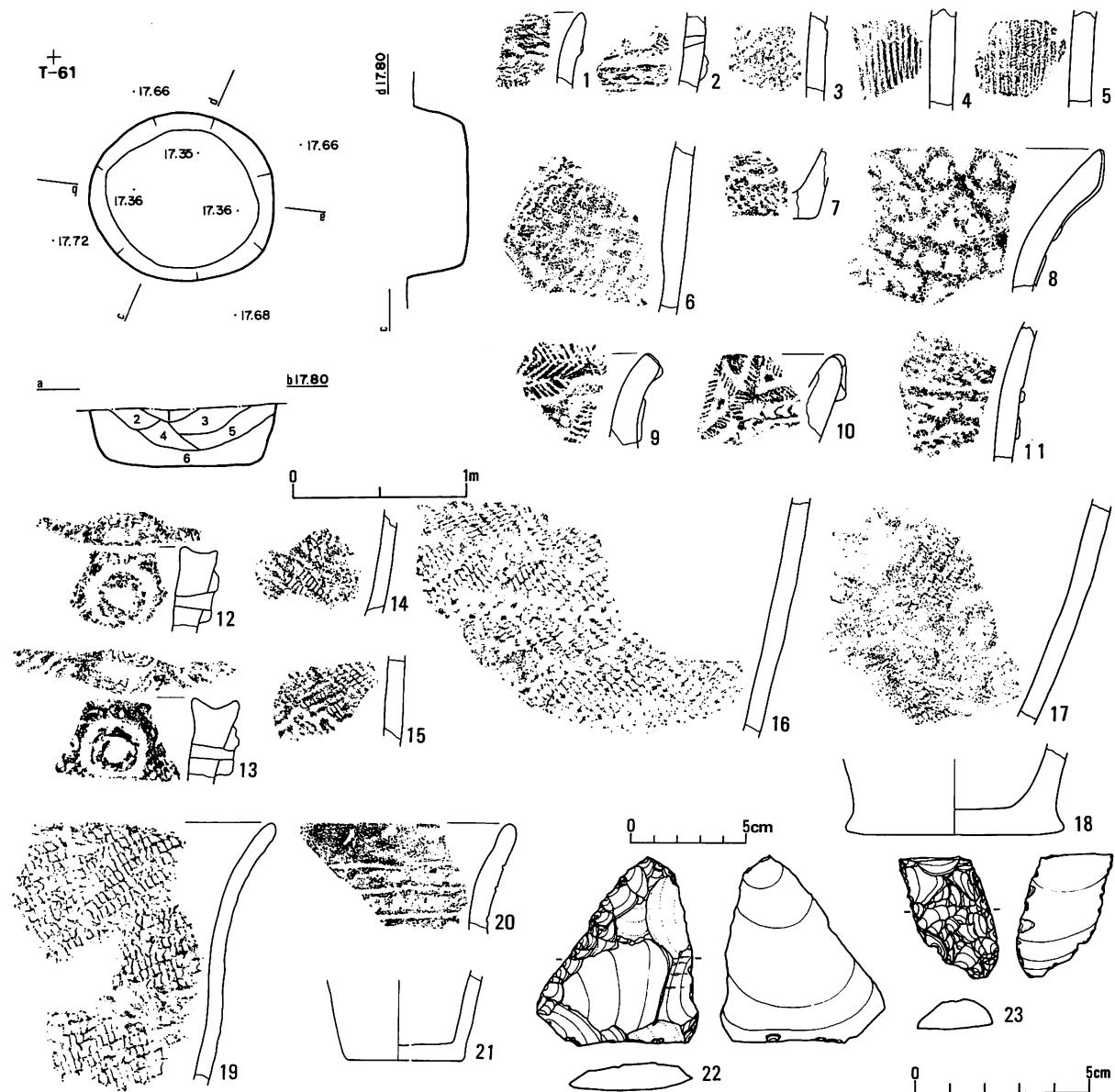
覆土は、1：茶褐色土（硬く、炭化物とローム粒がわずかに混じる）、2：茶褐色土（1よりもロームの量が多く、硬い）、3：暗黄褐色土（硬いロームにわずかに黒色土が混じる）。

GP-24 (図III-78)

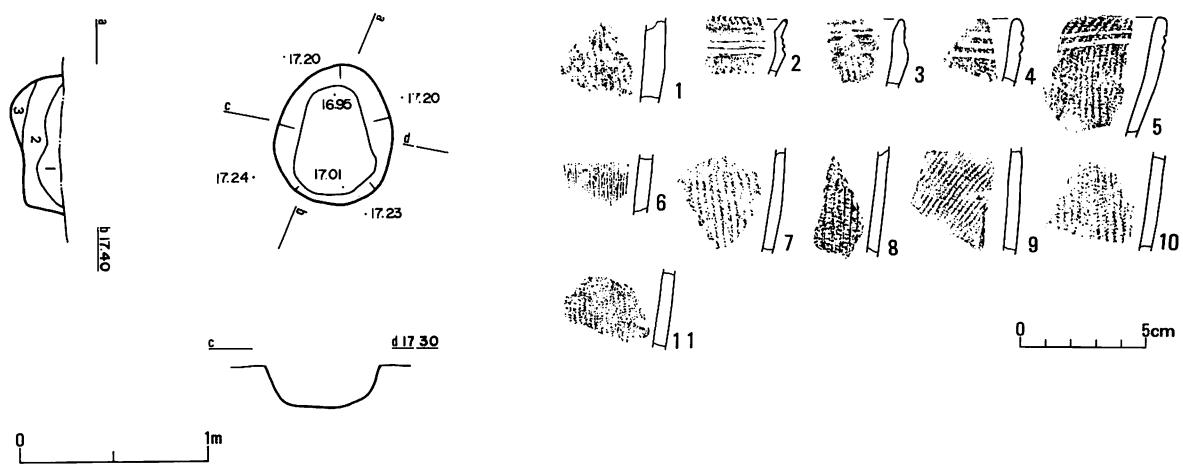
位置 Q-63・64

規模 $— \times — / 0.82 \times 0.70 / 0.20$ m

特徴 遺構の半分以上が発掘区域外に及んでいる。底面は浅く凹凸がある。硬い面と中央の柱穴状



図III-76 GP-5と出土の遺物



図III-77 GP-20と出土の土器

の部分との2段になっている。土層断面を観察すると中央の柱穴状ピットは浅い底面を掘り抜いているように見えることから、周辺で検出されている同様のピットである可能性が強い。遺物は出土していない。

覆土は、1：茶褐色土（焼土が多く混じる）、2：茶褐色土、3：暗黄褐色土（1よりもロームの量が多く細かいローム粒も混じる）、4：黒褐色土（焼土、炭化物、ローム粒が多く混じり硬い）、5：暗黄褐色土（ロームが多い）。

GP-36（図III-78）

位置 V-58 規模 $0.61 \times 0.51 / 0.38 \times 0.35 / 0.30$ m
特徴 第VI層上部で確認された。平面形は不整円形、断面形は椀状である。遺構の上部を削平したため浅い。土層断面図は作成できなかった。遺物は出土していない。

GP-37（図III-78）

位置 V-56・57 規模 $0.81 \times 0.68 / 0.47 \times 0.33 / 0.33$ m
特徴 第VI層上面で確認した。GP-36同様上部を削平したため浅い。平面形は南東壁がやや張り出す橈円形である。底面は平坦で堅い。土層断面図は作成できなかった。遺物は出土していない。

GP-41（図III-78）

位置 U-59 規模 $0.56 \times 0.46 / 0.42 \times 0.42 / 0.38$ m
特徴 第VI層上面で確認した。平面形は開口部が卵形で底面は不整円形である。壁は南側底部付近でやや張り出し擴口部東側は大きく開いている。底面東側から壁際にかけて炭化物が貼り付いた状態で検出された。土層断面図は作成できなかった。遺物は出土していない。

GP-42（図III-78）

位置 T-59 規模 $0.62 \times 0.61 / 0.35 \times 0.28 / 0.29$ m
特徴 第VI層上部を精査中に確認出来た。平面形は擴口部が不整円形、底面は橈円形で平坦である。断面形は椀状である。土層断面図は作成できなかった。遺物は出土していない。

GP-43（図III-78）

位置 T-58 規模 $0.55 \times 0.49 / 0.34 \times 0.28 / 0.28$ m
特徴 第VI層上部を精査中に確認出来た。平面形は橈円形、底面は平坦で壁の立ち上がりは比較的緩やかである。土層断面図は作成できなかった。遺物は出土していない。

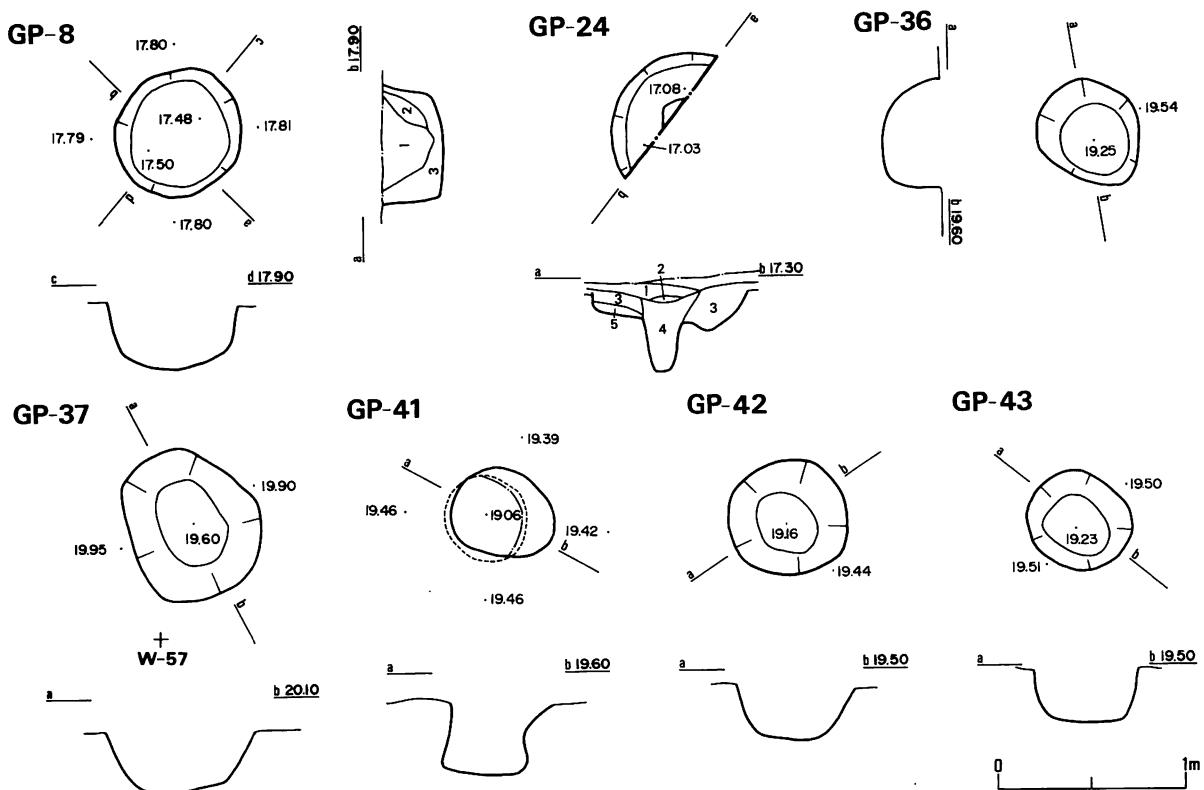
GP-27（図III-79）

位置 Q-63 規模 $0.57 \times 0.55 / 0.44 \times 0.40 / 0.17$ m
特徴 GH-5を調査中に確認出来た。竪穴住居の床面を10cm程掘り込んで作られている。また重複住居の炉-1を取り囲む硬い黄褐色ロームの高まりも掘り抜いている。覆土は軟らかい黒褐色土で充填されており、長さが0.5~2cm程の小砂利が多量に（約6000個、総重量970g）混じっていた。壁の立ち上がりは明瞭にとらえることは出来なかったが、小砂利の混じる土のみを取り除くと平面形が不整円形の浅い土壙であることがわかった。底面は凹凸がある。

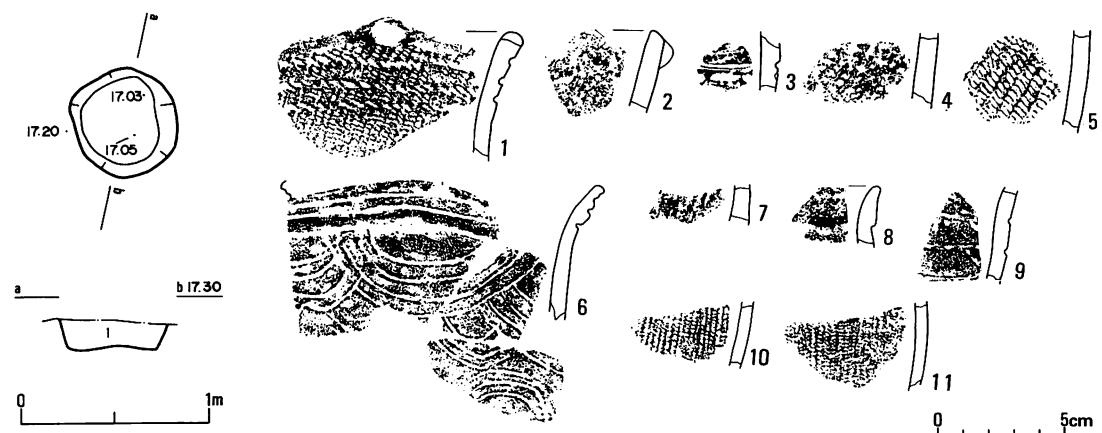
覆土は、1：黒褐色土（小砂利が多量に混じる）。

遺物 覆土下部からII群B類、III群A類・B類（1~5）、IV群A類（6~9）、V群（10・11）土器が出土した。

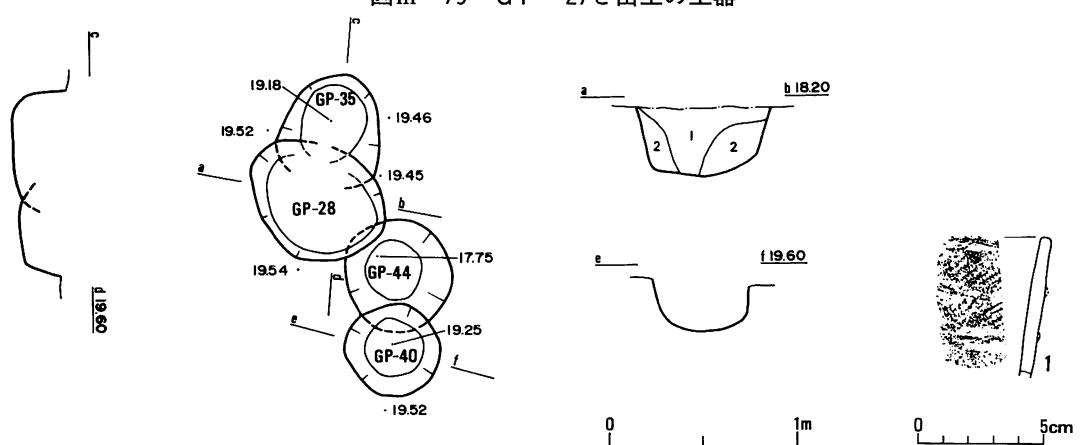
1は口縁に2個一対になると思われる小さな山形隆起部をもつもの。器面にはLR原体による斜行縄文が施され、口縁には同じ原体と思われる縄線が3条引かれている。焼成が非常に良い。2は口縁部を断面三角形に肥厚させている。体部には斜行縄文が施されている。4は複節の縄文が施さ



図III-78 GP-8・24・36・37・41・42・43



図III-79 GP-27と出土の土器



図III-80 GP-28・35・40・44と出土の土器

れている。6は緩やかな波状口縁のもので粘土を貼りつけ、わずかに厚みを持たせて沈線を3条めぐらせている。体部は無文地に細い沈線で弧線をつなげる文様が複数の沈線で描かれている。内外面には炭化物が多量に付着している。

GP-28 (図III-80)

位置 V-58

規模 $0.77 \times (0.60) / 0.63 \times (0.45) / 0.21$ m

特徴 GP-35・44と重複する。GP-44よりも新しいが、35との新旧関係はわからなかった。平面形は楕円形と思われる。底面は凹凸があり壁の立ち上がりは東側で緩やかである。覆土は全体的に硬い。

覆土は、1：茶褐色土(硬く、極細かいローム粒が混じる)、2：黄褐色土(硬く、ロームが多い)。

遺物 覆土からI群(1)土器と炭化したクルミが出土した。

1は細い隆起線が貼り付けられ、その間にはLR原体による斜行縄文が施されている。内外面に炭化物が付着している。

GP-35 (図III-80)

位置 V-58

規模 $(0.61) \times 0.52 / (0.40) \times 0.33 / 0.30$ m

特徴 GP-28と重複する。新旧に関係はわからなかった。平面形は不整円形、断面形は浅い皿状重複である。土層断面図は作成できなかった。遺物は出土していない。

GP-40 (図III-80)

位置 V-58、W-58

規模 $0.49 \times 0.47 / 0.31 \times 0.30 / 0.29$ m

特徴 第VI層上面で確認した。GP-44と重複し、本遺構の方が新しい。平面形は円形で、断面形は重複碗状である。土層断面図は作成できなかった。

遺物 覆土からIV層A類土器が出土している。

GP-44 (図III-80)

位置 V-58

規模 $(0.59) \times 0.56 / 0.32 \times 0.30 / (0.16)$ m

特徴 第VI層上部を精査中に確認出来た。GP-28・40と重複する。いずれも本遺構の方が新しい。重複平面形は不整円形と思われる。覆土は硬い茶褐色土が堆積していた。土層断面図は作成できなかった。遺物は出土していない。

(4) 小ピット (図III-81~85、表III-1・2)

分 布 80個検出された。これらのピットの大部分は第V層、VI層を精査中に検出された。分布は次の1) ~4) のほぼ4箇所に集中している。1) O・P-62~65区周辺、2) P~R-60~62区周辺、3) S~U-58・59区周辺、4) X~Z-54~57区の盛土末端部。

1) の地区からは総ピット数のほぼ半数にあたる38個が検出された。断面図を作成しなかったが、比較的大きなピット (GSP-68・77) 以外は大部分が深さ30cm内外のものであった。この地区の小ピットから出土した土器がすべてV群土器であることから、縄文時代晚期のものが大多数を占めると思われる。

2) の地区からは25個検出された。径は30cm~40cmで深さは70cmをこえるもの (GSP-24・29) があるほかは30cm程のものが多い。石刀が出土したGSP-2、V群土器が出土したGSP-5・30は晚期のものであろう。この地区の竪穴住居跡 (GH-4・5) から検出され、小ピットとして報告したものの中にも晚期のものがありそうである。

3) の地区からは散在的に9個検出された。時期が明確なものはない。

4) の地区では盛土の外側部分から6個検出された。GSP-41は縄文時代後期前葉の竪穴住居跡を掘り抜いていることから後期以降のものである。

次に小ピット出土の遺物について地区ごとに記載する。

1) O・P-62~65区周辺の小ピット出土遺物 (図III-81-1~49)

V群土器 1~49はすべてV群土器である。ほとんどのものは縦行・斜行縄文が施されている胴部破片である。1は小型の鉢形土器。頸部に無文帯を設けている。口縁部には山形の突起と剥落していくはっきりはないがB状突起もつけられていたようである。口唇にはやや厚みをもった溝状の沈線を1条施している。口唇直下に1条と口縁の内側にも2条沈線が施されている。山形突起の表裏には沈線が三叉的に入り組んでいる。肩部には棒状工具で不規則な間隔で刺突がつけられている。肩部、上位の沈線間には2個一対の突起がつけられている。体部には工字文が施されている。作りが雑であまり磨かれていない。内外面に炭化物が付着する。2・3は同一個体と思われる。体部にはLR原体による斜行縄文が浅く施されている。口縁部は指頭の押捺により波状を呈している。4・5にはLR原体による斜行縄文が施されている。同一個体かもしれない。10の体部には縦行縄文が施されている。深鉢形土器の破片と思われるものである。胎土に小砂利が多く、焼成は良い。11は口縁部に間隔をあけて沈線が施されている。19は口縁部内側に1条沈線が施されている。29は鉢形土器であろう。頸部にやや幅広の沈線が数条施されている。30は体部にLR原体による縦行縄文が粗く施されている。31は口唇の断面が丸味を帯びるもので、口縁部に浅く雑な沈線が3条施されている。口唇の内外面は磨かれている。内面にはヘラ削りの痕跡が残る。32は大型の深鉢形土器かと思われる。薄手で口唇が角形を呈する無文のもの。34は頸部に無文帯が設けられているもので、口唇の内面に浅い沈線が1条施されている。40は体部にLR原体による斜行縄文が施されている。41は大型の深鉢形土器と思われるものである。器壁は薄く口唇は尖り気味で、内側に1条沈線が施されている。肩部はわずかに張り出す。口縁部には比較的幅広の沈線が3条施されている。体部にはLR原体による縦行縄文が施されている焼成は良く内外面は磨かれている。

2) P~R-60~62区周辺の小ピット出土遺物 (図III-83-1~21)

1は口縁部が大きく外反する器形のもの。体部は無文で炭化物が付着している。口唇の断面形は切り出し形を呈し、太いLR原体による縄文が施されている。角形の口唇には先の尖った工具で刺突がつけられている。4はLR原体による斜行縄文が帶状に施されている。5は0段の条数が異なる縄による

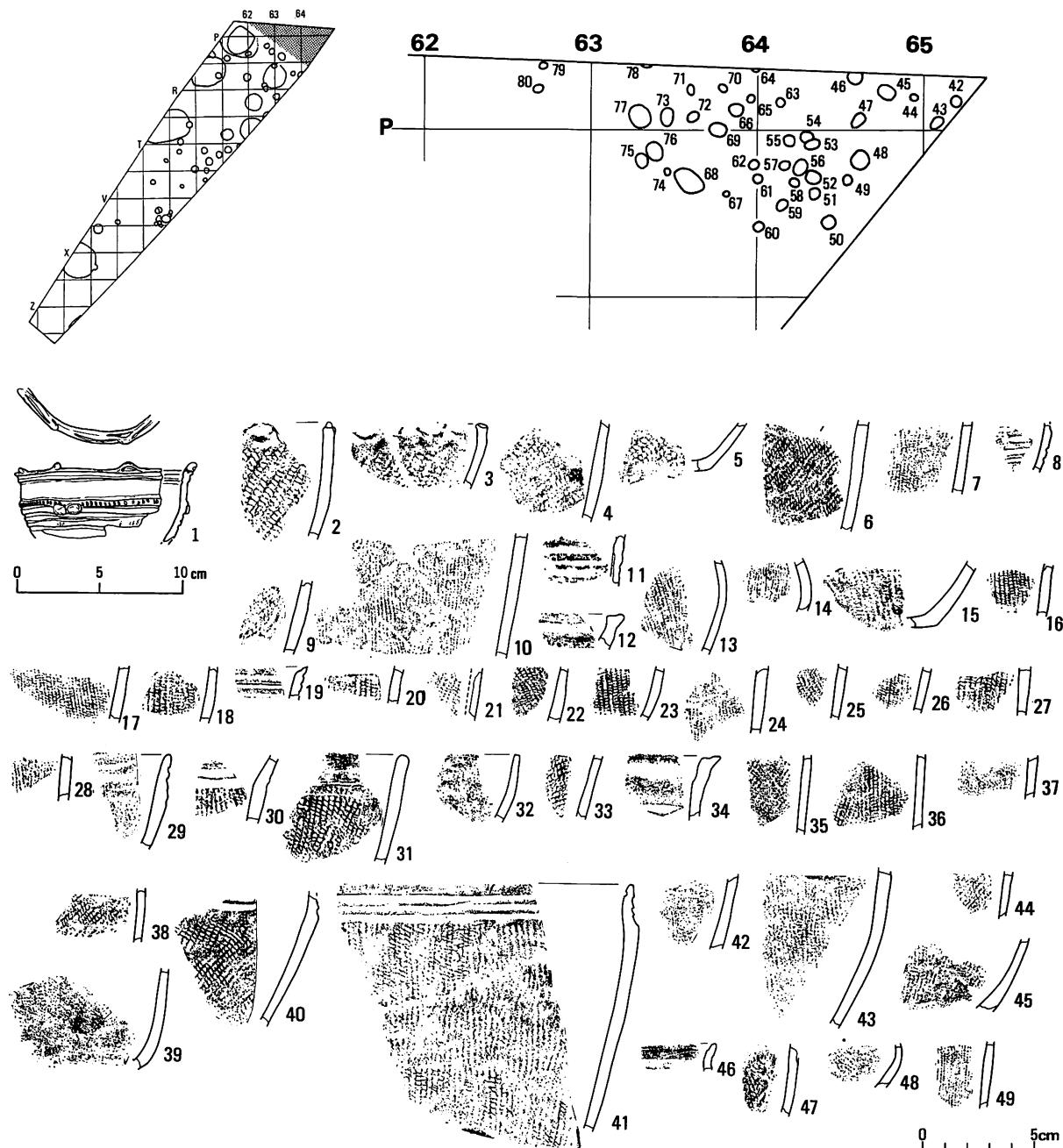
結束第1種羽縄文が施されている。6は縄文地に沈線が施されている。9は撲糸文が施されている。14は貼付帶がつけられた突起部の破片。17は有茎凸基のもの。21は粘板岩製の細身の石刀。身はほぼ半分から折れている。G P-34から身の中央部に相当する部分が出土したが接合しない。直刀状で身の断面は中央部では楕円形、尖頭部では卵形をなす。19は扁平礫の一面と側縁の一部に使用痕がある。20は扁平礫の一面に使用痕がある。

3) S~U-58・59区周辺の小ピット出土遺物 (図III-84-1・2)

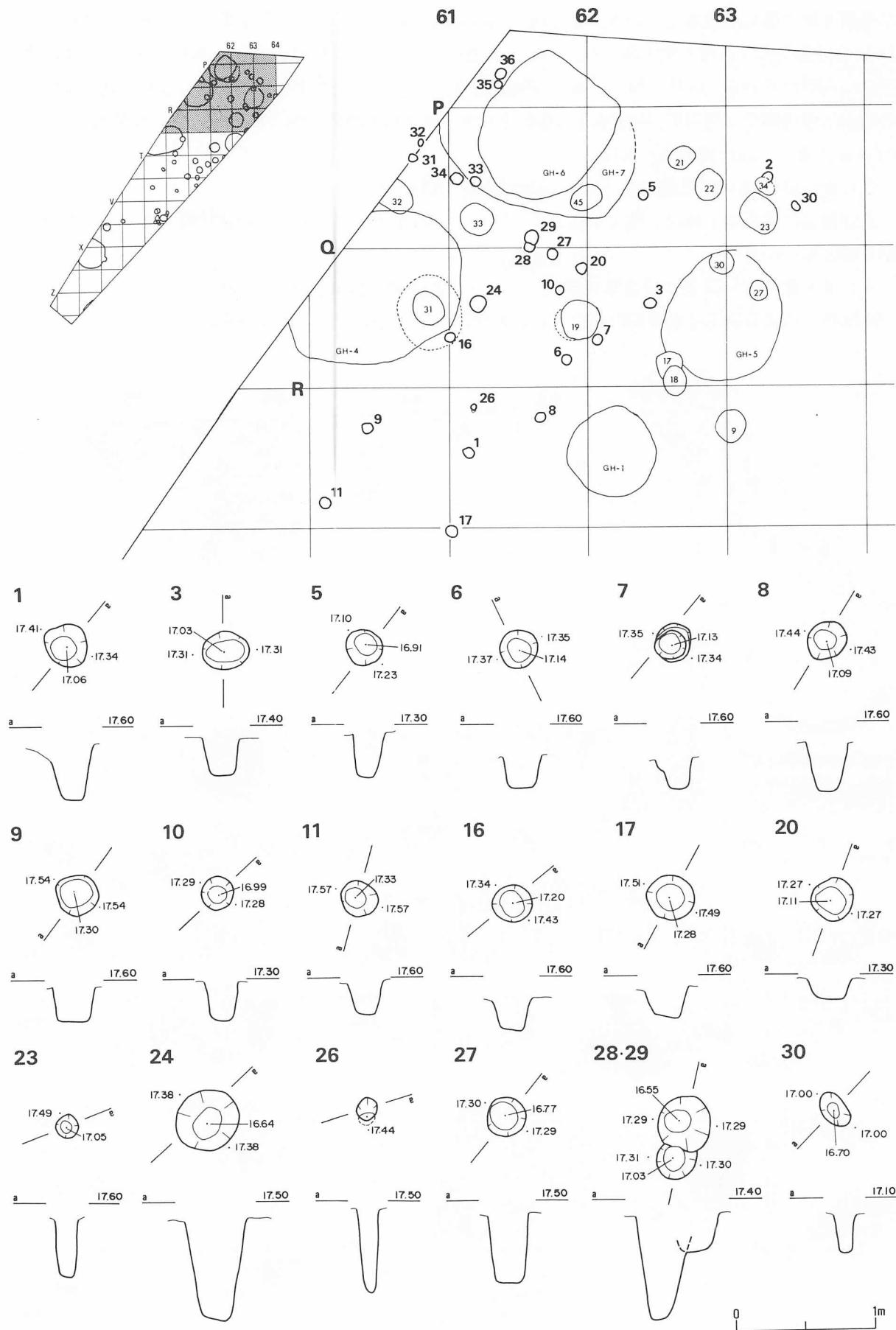
1は体部に結束第1種羽状縄文が施されている。口縁部との境目に2本の貼付帶をめぐらし円形の貼り付けをつけている。

4) X~Z-54~57区の盛土末端部の小ピット出土遺物 (図III-85-1・2)

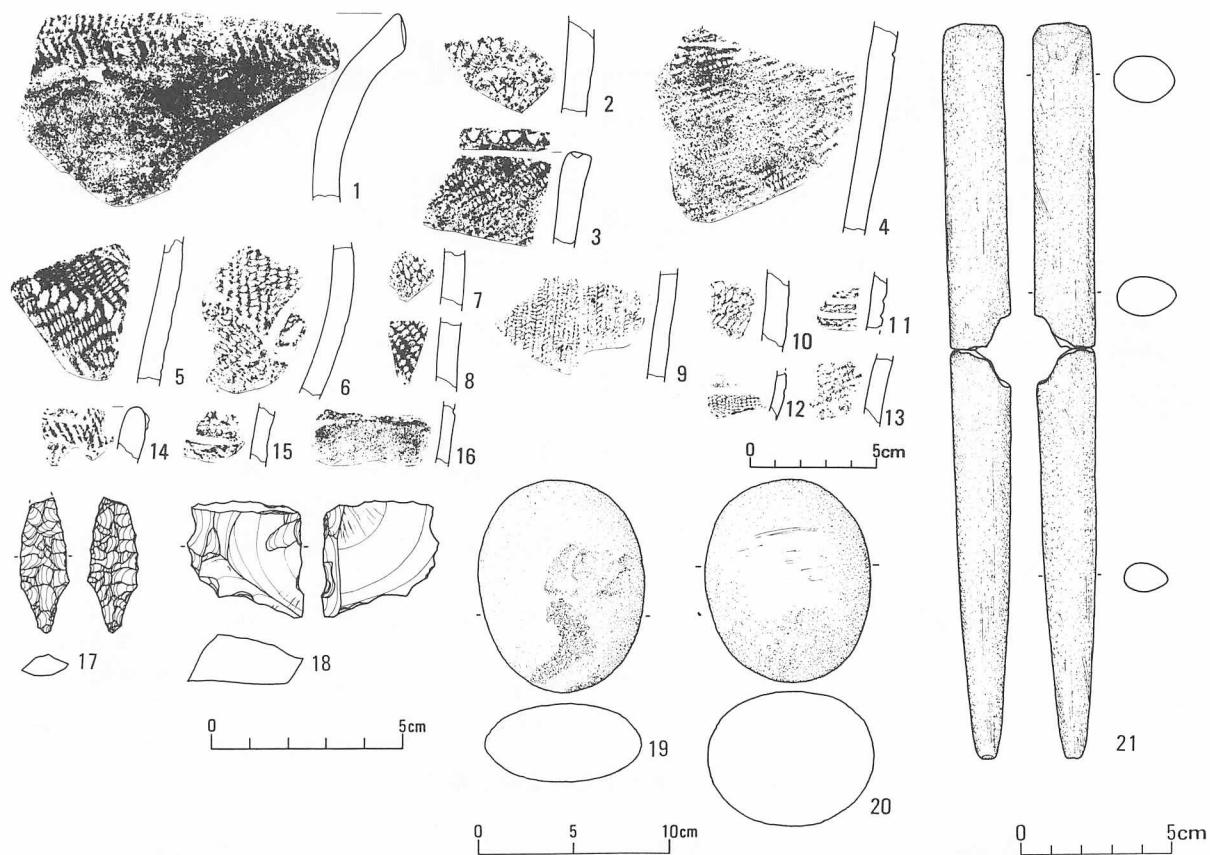
1は撲りの異なる縄を2本並列に軸に巻いた原体による撲糸文が施されている。



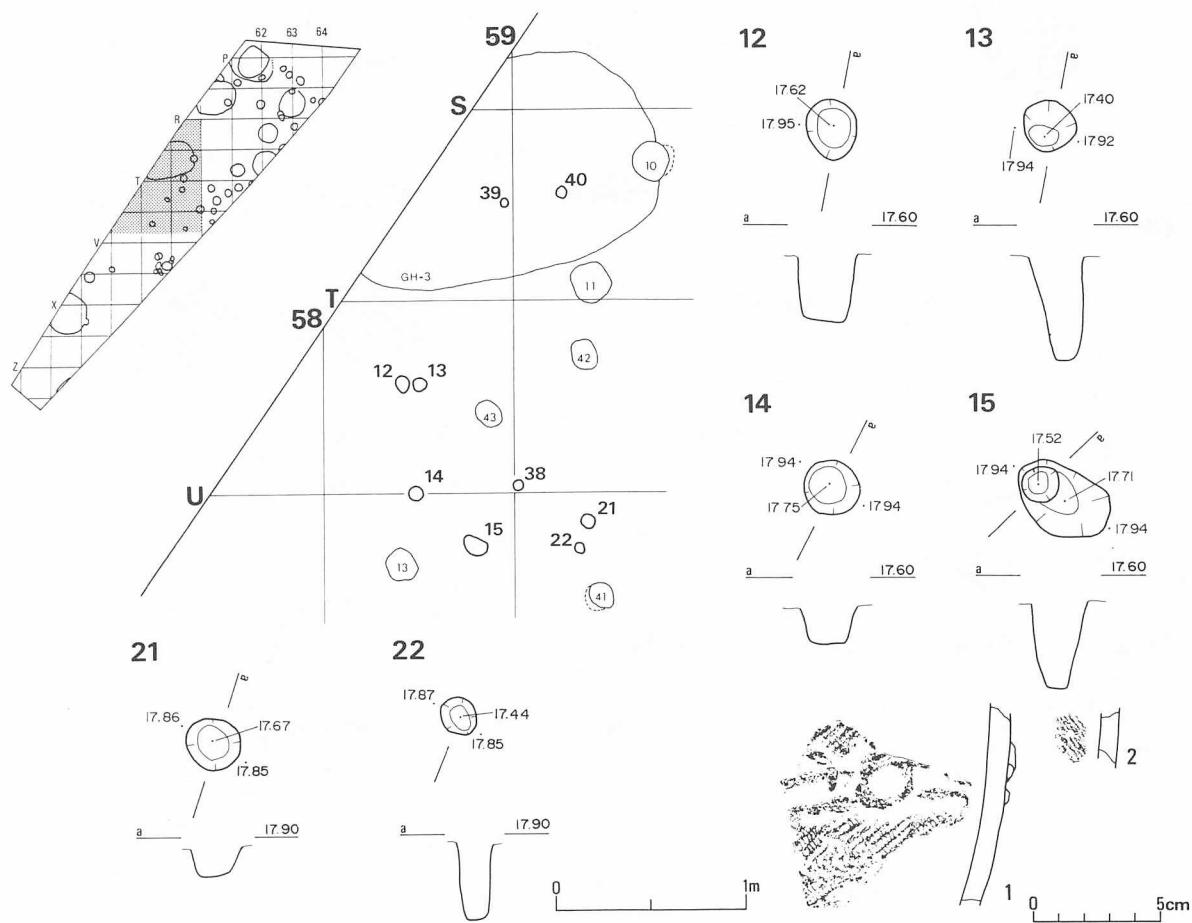
図III-81 小ピットと出土の土器 (1)

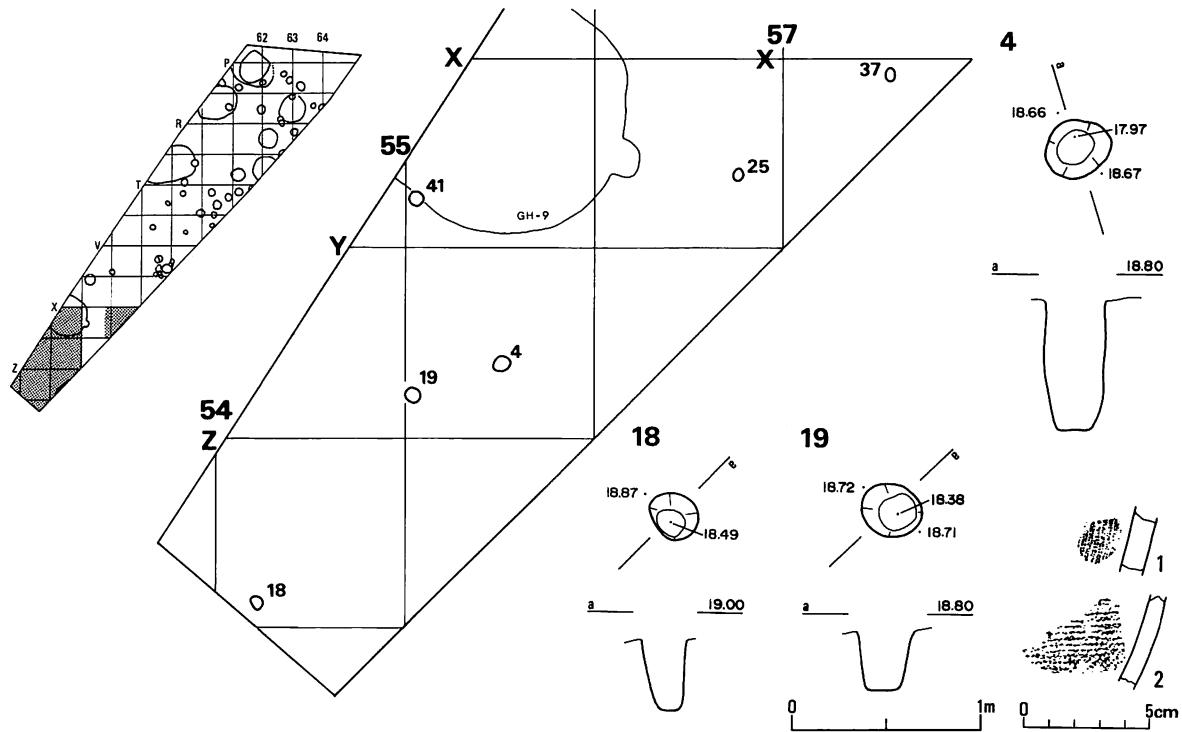


図III-82 小ピット (2)

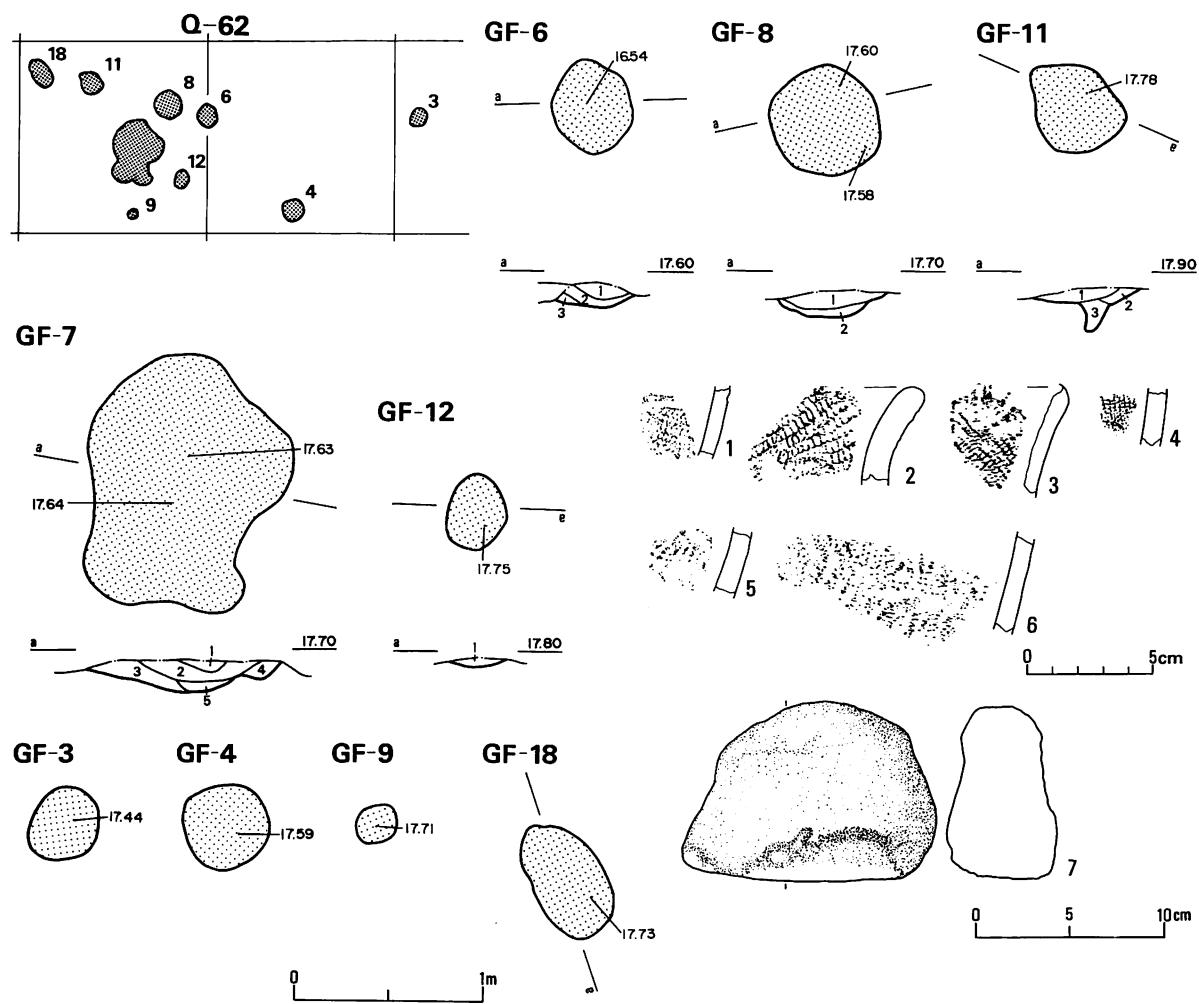


図III-83 小ピット（2）の出土の遺物





図III-85 小ピットと出土の土器 (4)



図III-86 焼土跡と出土の土器 (1)

(5) 焼土跡 (図III-86~90)

19箇所検出された。分布はほぼ2箇所に集中している。1) QラインとSライン間の地区と、2) 南西部の盛土の末端部である。検出面は第III層上部から中部でいずれも規模は小さく、焼土の厚さは10cm~30cmほどである。焼土中からは焼けた魚・獸骨が検出された。

1) QラインからSライン間の地区の焼土跡について (図III-86~88)

G F-1~9、11~13、18は検出面のレベルが第III層上部であることから縄文時代晚期のものである可能性が強い。G F-13は晚期の埋設土器が検出された面に広がっていた。

検出面
晚期の焼土
跡
埋設土器

G F-6 (図III-86) 位置 Q-61・62 規模 49×42/13cm

層序は1: 橙色土(焼土に茶褐色が混じる)、2: 暗橙色土(1より焼土の量が少ない)、3: 虫褐色土(焼土がわずかに混じる)。遺物はIII群B類(2)、V群土器と北海道式石冠(7)が出土している。

G F-8 (図III-86) 位置 Q-61 規模 61×57/14cm

層序は1: 橙色土(焼土に焼成粘土塊、細かいローム粒と炭化物が混じる)、2: 茶褐色土(黒褐色土中に赤褐色焼土が混じる)。遺物はIII群B類土器(6)が出土している。

G F-11 (図III-86) 位置 Q-61 規模 53×43/26cm

層序は1: 暗橙色土(焼土中に炭化物と黒色土が混じる)、2: 暗黄褐色土(黄褐色ロームに部分的に焼土が混じる)、3: 暗黄褐色土。遺物はII群B類、III群B類土器が出土している。

G F-7 (図III-86) 位置 Q-61 規模 130×100/17cm

層序は1: 茶褐色土(黒色土中にわずかに焼土を混じる)、2: 橙色土(焼土に黒色土と黄褐色ローム粒が混じる、軟らかい)、3: 茶褐色土(焼土と黄褐色ローム粒が混じる)、4: 暗黄褐色土(焼土と細かいローム粒が混じる)、5: 暗褐色土(2よりも焼土が少ない)。遺物はII群B類(4)、III群A類(3・5)、III群B類、IV群A類土器とスクレイバーが出土している。4には撲糸文が施されている。3には口縁部に粘土紐がつけられていた痕跡がある。

G F-12 (図III-86) 位置 Q-61 規模 40×31/5cm

層序は1: 暗橙色土(焼土に炭化物が混じる)。

G F-3 (図III-86) 位置 Q-62 規模 38×35/4cm

遺物はIV群A類、IV群C類(1)、V群土器が出土している。

G F-4 (図III-86) 位置 Q-62 規模 48×45/10cm

遺物はIII群B類土器が出土している。

G F-9 (図III-86) 位置 Q-61 規模 22×20/6cm

G F-18 (図III-86) 位置 Q-61 規模 68×31/—

G F-1 (図III-87) 位置 R-62 規模 79×47/9cm

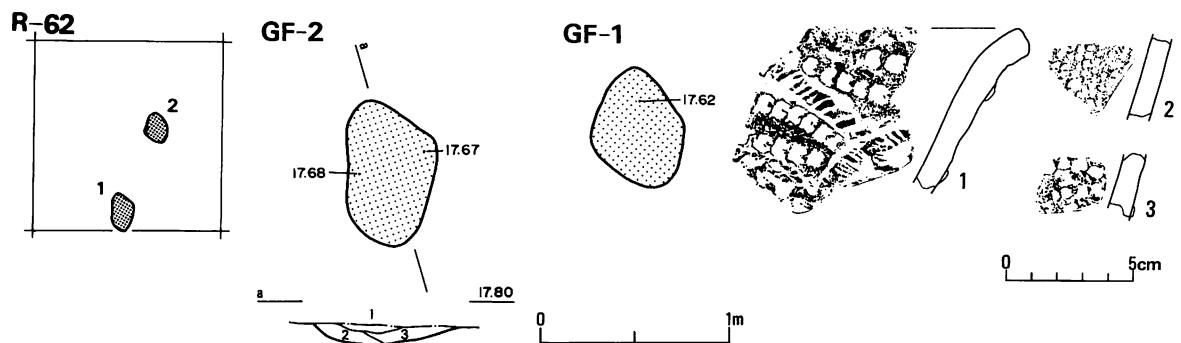
層序は1: 茶褐色土(黒色土中に不均一に焼土と炭化物が混じる)、2: 橙色土(焼土中に多量に炭化物が混じる)、3: 暗橙色土(焼土中に黒色土と炭化物が混じる)。遺物はIII群A類(1・2)土器が出土した。1は無文地に貼付帶と刺突文が施されている。

G F-2 (図III-87) 位置 R-62 規模 64×48/7cm

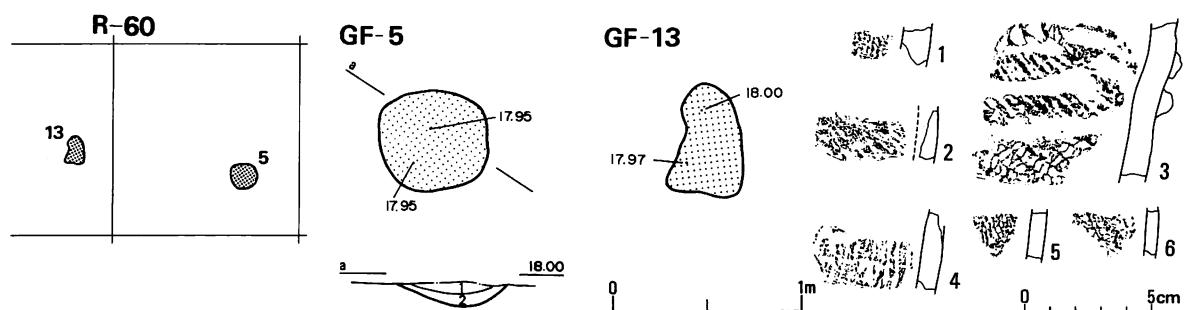
遺物はIII群A類土器(3)が出土している。3は細かい貼付帶がつけられているもので、貼付帶間には棒状工具による刺突文が施されている。

G F-5 (図III-88) 位置 R-60 規模 61×53/12cm

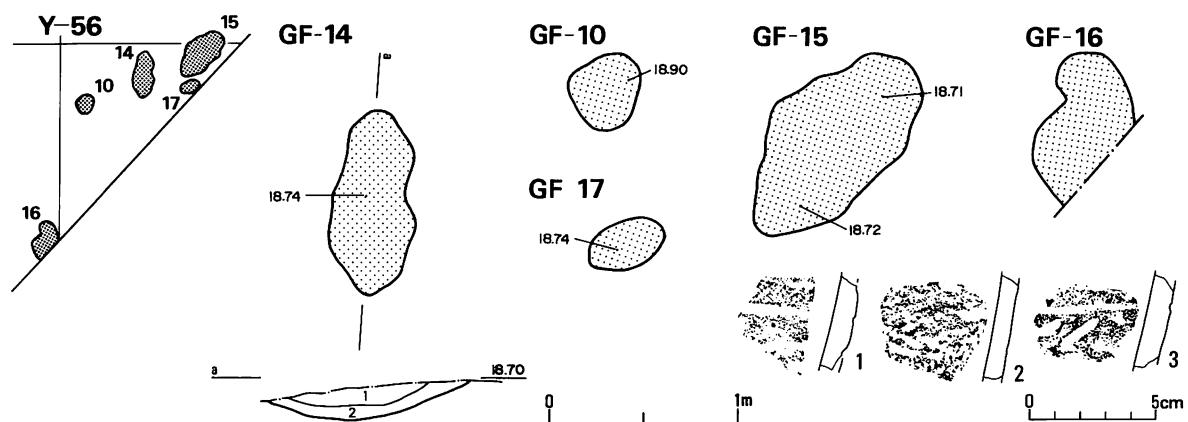
層序は1: 橙色土(焼土)、2: 暗赤褐色土(焼土に茶褐色土が混じる)。遺物はII群B類(1・



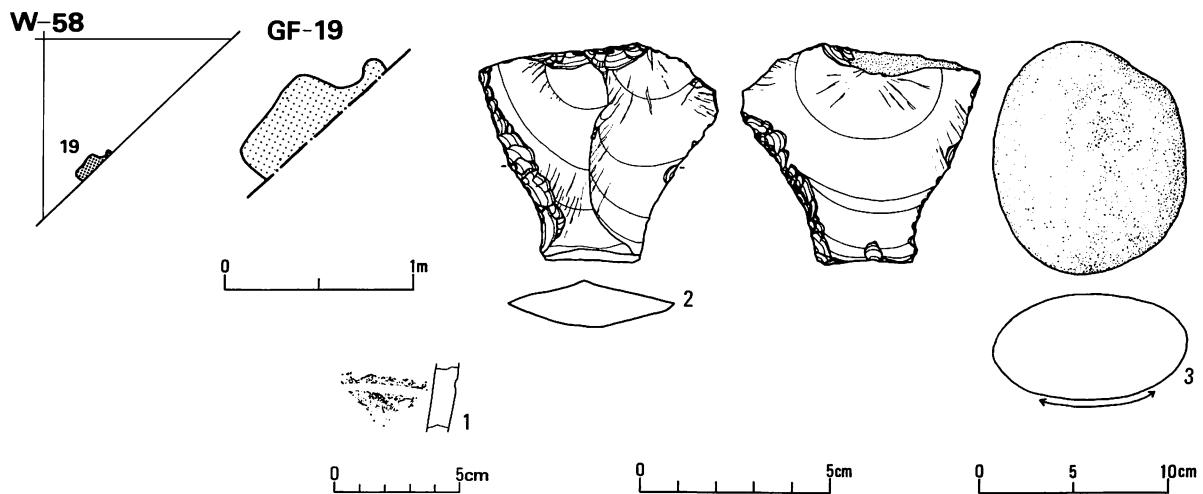
図III-87 焼土跡と出土の土器（2）



図III-88 焼土跡と出土の土器（3）



図III-89 焼土跡と出土の土器（4）



図III-90 焼土跡と出土の遺物（5）

2・4・5)、III群A類(3)、III群B類土器が出土している。2には撲り戻しの原体による縄文、1・4には撲糸文が施されている。5には複節の縄文が施されている。

G F-13 (図III-88) 位置 R-59 規模 60×32/6 cm

遺物はII群B類土器が出土している。

2) 盛土末端部の焼土跡について (図III-89・90)

G F-10、14~17はIV群A類土器が集中して出土する層から検出された。縄文時代後期前葉のものであろう。

後期前葉の
焼土跡

G F-10 (図III-89) 位置 Y-56 規模 40×35/9 cm

遺物はIV群A類(1)土器が出土している。焼土はほとんど検出されなかつたが、炭化物混じりの黒褐色土中に径2~5 mmほどの米粒大の細かい小砂利が多量に混っていた。G P-27の覆土中から検出された小砂利と良く似ている。

多量の小砂利

G F-14 (図III-89) 位置 Y-56 規模 98×38/20 cm

層序は1:赤褐色土(焼土)、2:茶褐色土(焼土に黒褐色土が混じる)。

G F-15 (図III-89) 位置 Y-56 規模 120×60/20 cm

遺物はIII群A類(2)、IV群A類(3)土器が出土している。3は沈線で文様で描かれている。

G F-16 (図III-89) 位置 Y-55 規模 43×25/16 cm

G F-17 (図III-89) 位置 Y-56 規模 40×23/—

G F-19 (図III-90) 位置 W-58 規模 (90)×(23)/16 cm

遺物はIV群A類土器(1)とスクレイパー(2)、すり石(3)が出土している。3は扁平礫の一面に使用面がある。

小ピット出土掲載土器一覧

表III-1

図-番号	遺構番号	分類	図-番号	遺構番号	分類	図-番号	遺構番号	分類	図-番号	遺構番号	分類
81-1	GSP-47	V	81-19	GSP-56	V	81-37	GSP-73	V	83-6	GSP-2	III B
-2	"	"	-20	"	"	-38	"	"	-7	GSP-5	"
-3	"	"	-21	GSP-57	"	-39	"	"	-8	"	III A
-4	"	"	-22	"	"	-40	GSP-75	"	-9	GSP-11	II B
-5	"	"	-23	"	"	-41	"	"	-10	GSP-30	III B
-6	"	"	-24	"	"	-42	GSP-76	"	-11	GSP-31	IV A
-7	"	"	-25	"	"	-43	"	"	-12	GSP-30	V
-8	"	"	-26	GSP-58	"	-44	GSP-77	"	-13	GSP-34	II B
-9	GSP-50	"	-27	GSP-60	"	-45	"	"	-14	"	III A
-10	GSP-52	"	-28	"	"	-46	GSP-78	"	-15	GSP-35	IV A
-11	GSP-54	"	-29	GSP-61	"	-47	GSP-79	"	-16	GSP-36	"
-12	"	"	-30	GSP-62	"	-48	GSP-78	"	84-1	GSP-39	III A
-13	"	"	-31	GSP-64	"	-49	"	"	-2	GSP-15	II B
-14	"	"	-32	"	"	83-1	GSP-1	III A	85-1	GSP-25	II B
-15	"	"	-33	"	"	-2	"	"	-2	GSP-18	II B
-16	GSP-55	"	-34	GSP-72	"	-3	"	"	-5	GSP-2	III A
-17	"	"	-35	GSP-73	"	-4	"	"			
-18	"	"	-36	"	"						

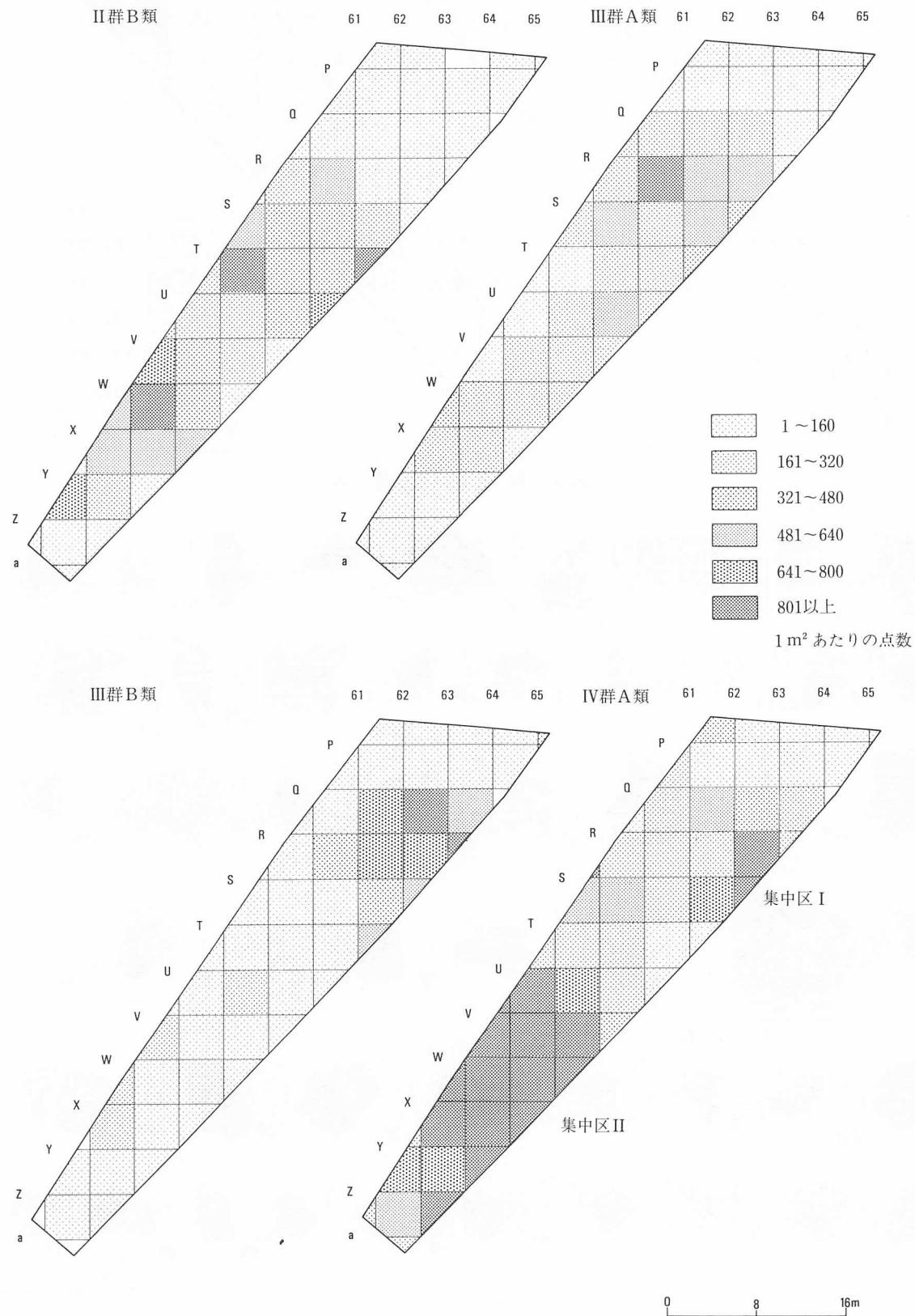
小ピットの位置と規模

表III-2

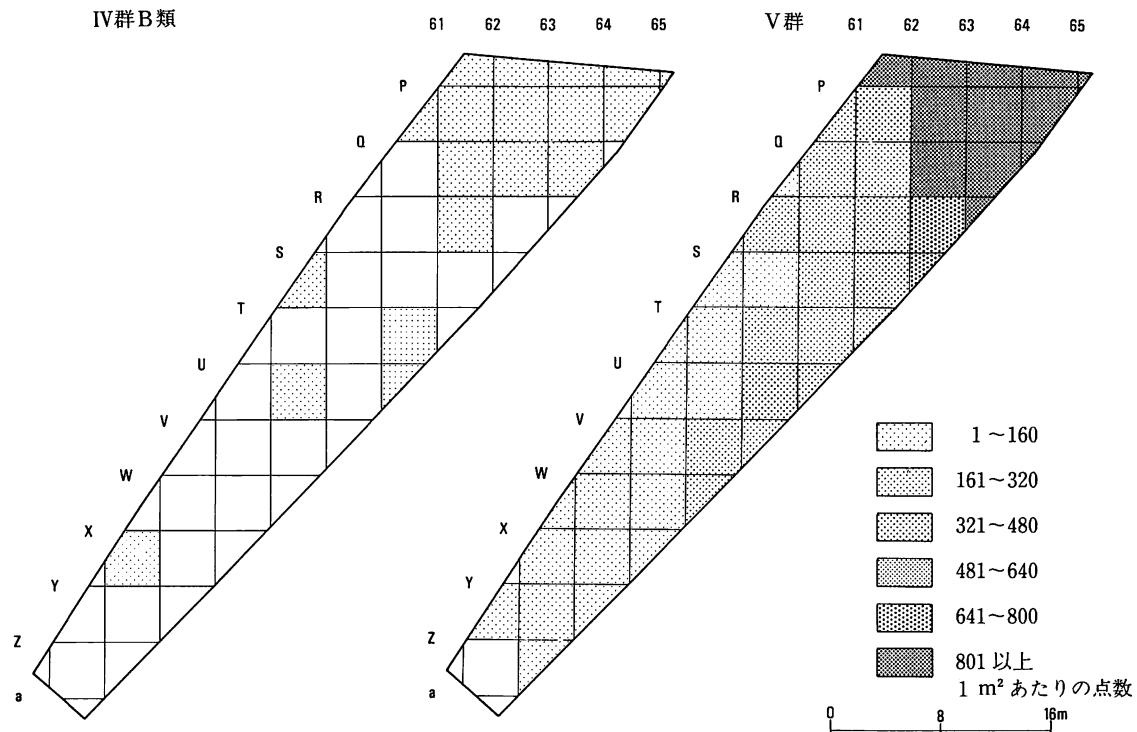
遺構番号	位 置	遺構の規模	遺構番号	位 置	遺構の規模
		長径×短径／深さ(m)			長径×短径／深さ(m)
GSP- 1	R-61	0.34×0.29／0.40	GSP-42	O-65	0.24×0.24／0.24
- 2	P-63	0.58×0.38／-	-43	O-65	0.35×0.21／0.25
- 3	Q-62	0.34×0.27／0.28	-44	O-64	0.20×0.18／0.37
- 4	Y-55	0.36×0.30／0.68	-45	O-64	0.47×0.29／0.25
- 5	P-62	0.27×0.25／0.33	-46	O-64	0.30×0.27／-
- 6	Q-61	0.28×0.26／0.24	-47	O-64	0.34×0.21／0.77
- 7	Q-62	0.28×0.25／0.24	-48	P-64	0.47×0.35／0.31
- 8	R-61	0.29×0.26／0.35	-49	P-64	0.23×0.22／0.31
- 9	R-60	0.31×0.28／0.25	-50	P-64	0.30×0.28／0.12
-10	Q-61	0.25×0.22／0.28	-51	P-64	0.30×0.25／0.70
-11	R-60	0.28×0.25／0.25	-52	P-64	0.36×0.29／0.45
-12	T-58	0.33×0.27／0.36	-53	P-64	0.41×0.22／0.52
-13	T-58	0.29×0.26／0.54	-54	P-64	0.39×0.28／0.29
-14	T・U-58	0.30×0.28／0.20	-55	P-64	0.28×0.23／0.27
-15	U-58	0.53×0.34／0.46	-56	P-64	0.38×0.28／0.37
-16	Q-60・61	0.29×0.25／0.24	-57	P-64	0.24×0.22／0.24
-17	R・S-60・61	0.35×0.31／0.23	-58	P-64	0.24×0.22／0.14
-18	Z-54	0.27×0.22／0.35	-59	P-64	0.35×0.22／0.15
-19	Y-55	0.33×0.28／0.30	-60	P-63・64	0.15×0.15／0.16
-20	Q-61	0.31×0.28／0.15	-61	P-63・64	0.24×0.20／0.22
-21	U-59	0.30×0.28／0.17	-62	P-63・64	0.23×0.21／0.30
-22	U-59	0.21×0.18／0.41	-63	O-64	0.18×0.18／-
-23	Q-60	0.18×0.16／0.43	-64	O-63	- × - / -
-24	Q-61	0.47×0.43／0.73	-65	O-63	0.22×0.20／0.20
-25	X-56	0.24×0.18／-	-66	O-63	0.30×0.25／0.17
-26	R-61	0.16×0.13／0.60	-67	P-63	0.13×0.12／0.40
-27	Q-61	0.29×0.25／0.50	-68	P-63	0.85×0.47／0.11
-28	P・Q-61	0.29×0.26／0.28	-69	O・P-63	0.34×0.28／0.37
-29	P-61	0.40×0.38／0.75	-70	O-63	0.28×0.20／-
-30	P-63	0.27×0.16／0.18	-71	O-63	0.33×0.19／0.36
-31	P-60	0.22×0.18／-	-72	O-63	0.27×0.26／0.35
-32	P-60	0.19×0.13／-	-73	O-63	0.46×0.30／0.26
-33	P-61	0.29×0.24／-	-74	P-63	0.23×0.12／0.38
-34	P-61	0.36×0.31／-	-75	P-63	0.40×0.31／0.24
-35	O-61	0.21×0.16／-	-76	P-63	0.47×0.30／0.17
-36	O-61	0.33×0.28／-	-77	O-63	0.60×0.55／0.32
-37	X-57	0.26×0.19／-	-78	O-63	- × - / -
-38	T-59	0.19×0.17／-	-79	O-62	0.19×0.17／-
-39	S-58	0.14×0.13／-	-80	O-62	0.26×0.23／-
-40	S-59	0.22×0.20／-			

3. 包含層出土の遺物

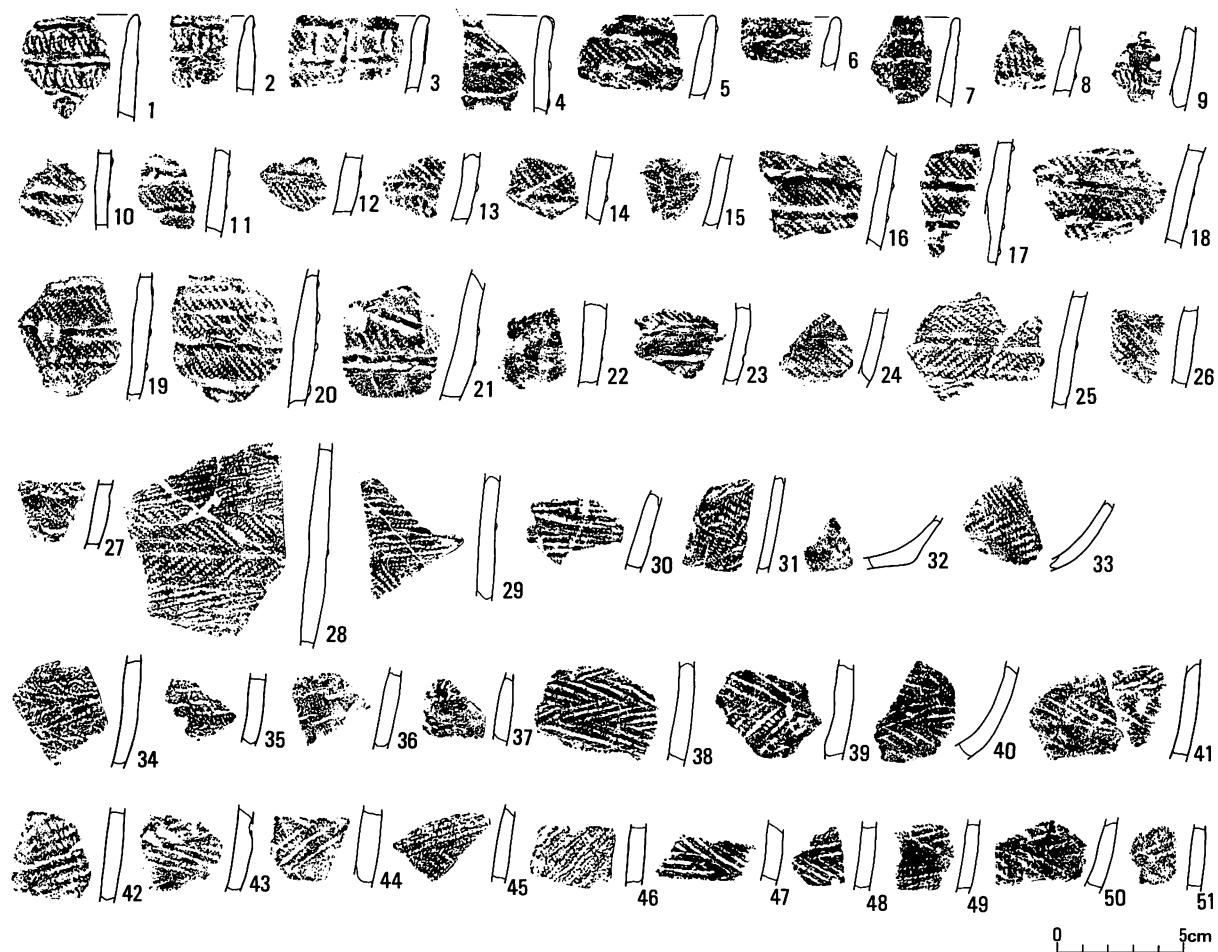
(1) 土器



図III-91 土器分布密度 (1)



図III-92 土器分布密度 (2)



図III-93 包含層出土のI群B類土器

I群B類土器 (図III-95-1~51)

1~33は中茶路式に相当するもの。微隆起線による文様が施されている。隆起の上から隆起線の間にかけて斜行縄文、羽状縄文、綾絡文が施されている。1・2・8・9は短縄文、3~5、10~22、32・33にはR L原体による斜行縄文が施されている。6・7、26・27は綾絡文、23・24は羽状縄文が施されている。28~31は同一個体と思われる破片である。羽状縄文と横走する撚糸文が施されている。

34~51は東釧路IV式に相当するもの。34~36には綾絡文、37には絡条体圧痕文が施されている。38~51には自縄自巻的原体による羽状縄文が施されている。

中茶路式

東釧路IV式
自縄自巻的
原体II群B₁類土器 (図III-94~96-1~128、図版29-1、32-3、33-1・2)

B₁類はさらに1~3群に細分される。

1群 (図III-94-1~23)：円筒土器下層C式の古い段階に相当すると思われるもの。

器形は口縁が外反する筒形のものが多い。器壁は比較的厚手で口唇は丸味を帯びる。口縁部文様帶は幅広で太い原体による不整綾絡文の施されるものがある。胴部との境目に低い隆帶をつけるもの、文様帶を設げず全面に縄文だけ施されるものもみられる。体部には単節、複節の縄文、多軸絡条体の回転文、網目状撚糸文が施されている。

a類 (1~10)

体部あるいは口縁部に縄文が施されているもの。

1は厚手の土器。口唇は丸味を帯びやや外反する。体部による斜行縄文が施されている。口縁部文様帶は幅広く、太い原体による不整綾絡文が4条施されている。その下位の体部との境目には、L R原体による縄の圧痕が2条施されている。器面には凹凸がある。2は口縁が外反する器形のもので、1同様太い綾絡文がつけられている。3・4は同一個体と思われるもの。L R原体による斜行縄文が施され、口縁部と胴部の境目には低い隆帶がつけられている。隆帶上には太いL R原体による縄の圧痕が斜めに施されている。口縁部には同じ原体で縄線を数条口縁に平行に施している。内面はあまり磨かれていません。6・7は口縁部のみのもの。6はやや外反する。7はL R L原体による斜行縄文が施されている。口唇は角形で磨かれている。8・9は複節の縄文が施されている。

不整綾絡文

隆帶

b類 (11~17)

体部に多軸絡条体回転文が施されている。

11は厚手で口縁がわずかに外反する大型の深鉢形土器である。口唇は角形で磨かれている。口縁部文様帶は幅広で、太い原体による不整綾絡文が8・9条密に施されている。綾絡文はa類の1・2のものと非常に良く似ている。胴部との境目には断面が三角形の隆帶がつけられ、隆帶上にはL R原体の縄で斜めに深く刻み目をつけ、隆帶上の上下端には同じ原体で1条ずつ縄線を施している。体部には多軸絡条体を斜めに回転させ浅く施している。焼成は良く器面は灰褐色、内面は赤褐色を呈し丁寧に磨かれている。12・13も斜めに浅く施されているものである。

多軸絡条体
回転文

隆帶

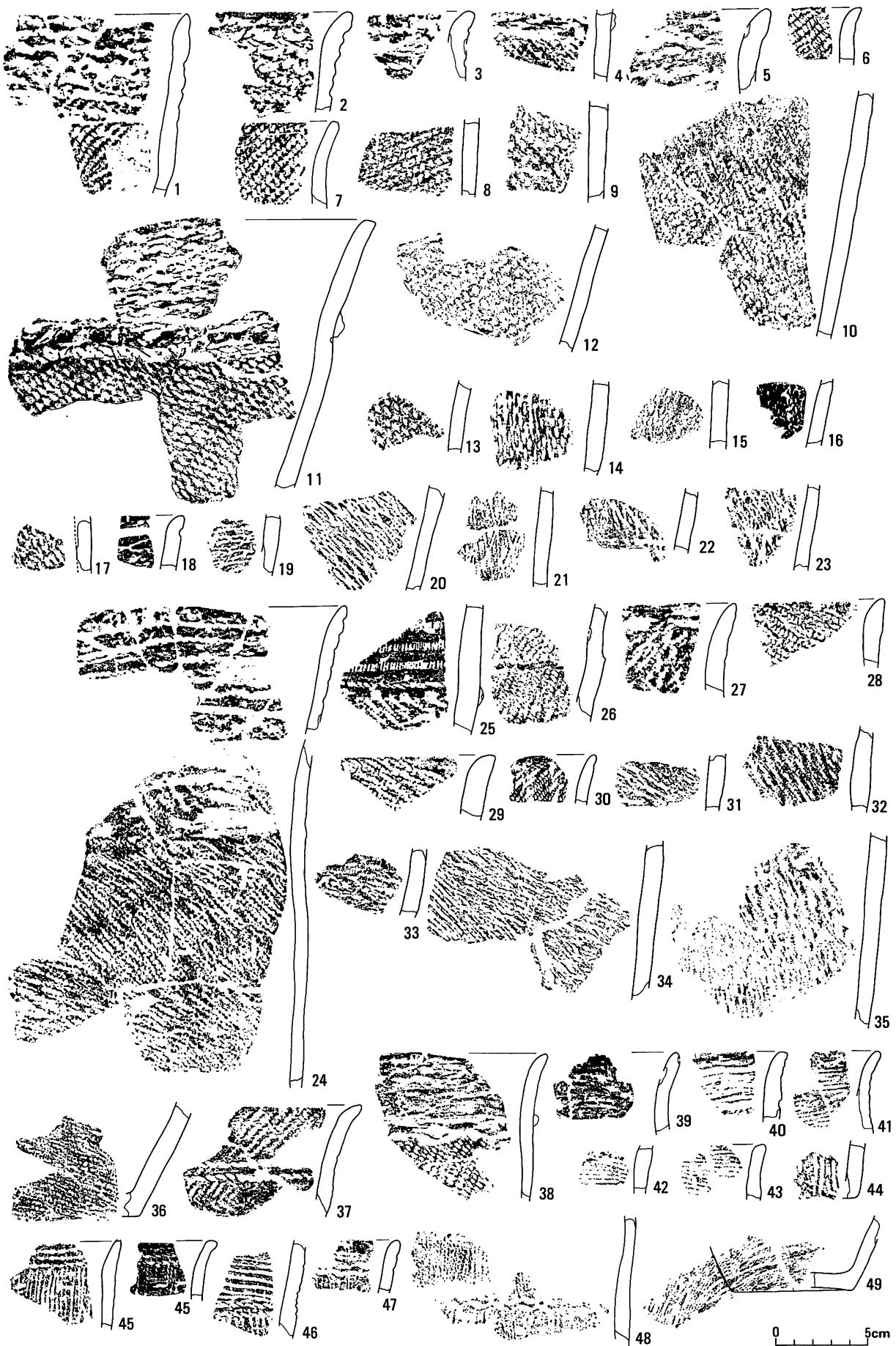
c類 (18~23)

網目状撚糸文が施されているもの。

18は口唇が丸味を帯びた角形。口縁部に1条太い沈線が施されている。器面には扁平な網目状撚糸文(単軸絡条体第6類)が施されている。19も同様な原体の回転文である。20は原体を斜めの方向に回転施したもの。21・22・23は2本の縄を用い一方を右巻、他方を軸に左巻にした原体(単軸絡条体第5類)によるものである。

単軸絡条体
第5類

2群 (図III-94・95-24~67)：円筒下層C式相当のもののうち、新道4遺跡B P-157出土のもの、^{註1)}本年度G P-31の床面・覆土13層出土のものに類似のもの。サイベ沢I式に属する。



図III-94 包含層出土のII群B類土器 (1)

口縁部文様帶は比較的幅が広く口縁が外反する器形を呈する。口唇の断面はやや尖り気味になるものがある。体部には撲り戻しの原体による縄文、単節の斜行縄文、撲糸文、自縄自卷的縄文が施されている。口縁部には縄線による文様が施されるもの、条痕文が施されるもの、絡条体圧痕文が施されるもの、体部と同じ縄文が施されるものもある。文様構成が明らかな資料は少ない。

a類 (24~36)

体部に撲り戻しの原体による縄文が施されているもの。

24は口縁が外反する大型の筒形土器。器壁は薄く口唇は尖り気味である。口縁部文様帶は幅広でところどころに条痕文が残る。比較的太いLR原体による縄線が口縁に平行に6・7条施されている。体部には斜行縄文が粗く施され部分的に磨かれている。内面から口唇上にかけては丁寧に磨かれている。25は厚手のもの。胴部との境目に低い隆帯がつけられ、その上には円形の刺突文が施されている。体部の縄文は隆帯がつけられた後に施文されている。隆帯の上端には細いLR原体による縄の圧痕がつけられている。口縁部は幅広で絡条体圧痕文が数条施されている。炭化物が付着している。26は口縁が大きく外反する器形と思われる。胴部との境目をやや膨らませ軽く磨きをかけている。口縁部には体部と同じ原体による縄文が粗く施されている。28・29は口縁部に太い原体で粗く斜行縄文が施されている。いずれも厚手で内面は磨かれている。30はLR原体による縄線を縦に2条施している。35は縄文を施文後撲糸文を重ねている。焼成が良く黒褐色を呈する。36は底部に浅く施されている。

撲り戻しの原体

絡条体圧痕文

b類 (37~44)

体部に単節の斜行縄文が施されているもの。

37・38は口縁が外反する器形のもの。いずれも口唇は尖り気味で、体部にはLR原体による斜行縄文が施されている。37は口縁部と胴部の境目には太いLR原体による縄線が2条施されている。口縁部には体部の縄文と同じ原体で斜行縄文が浅く施されている。胴部は羽状縄文かもしれない。38は器壁が比較的薄く、やや幅広の口縁部に条痕文が横位に施されている。胴部との境目には低い隆帯がつけられている。隆帯上には刺突文がめぐっている。39~44は条痕文が施されている口縁部、底部の破片である。体部文様はわからないが、一応ここに入れておくこととする。39は口唇が尖り気味で外反するもの。1段の原体による縄線が縦に2条施されている。40には綾絡文が施されている。44は縄文地に縦方向に施された条痕文が重ねられている。

太い縄線

条痕文

c類 (45~55)

体部に撲糸文が施されているもの、口縁部に縄線文だけで文様を施すもの、撲糸文を施すもの、縄線と綾絡文を施すものがある。

45-a・bは同一個体の破片。口縁部にはL原体による縄線で文様が描かれている。46は口縁部と胴部の境目にLR原体による縄線が2条施されている。幅広と思われる口縁部には撲糸文が横位に施されている。47・48は綾絡文が施されているものである。47はR原体による縄線の下位に比較的太い綾絡文が施されている。49~52は底部破片。49~51はあげ底気味である。53は胴部破片である。撲糸文に斜行縄文を重ねている。54は撲糸文(単軸絡条体回転文)に多軸絡条体回転文を重ねている。55は多軸絡条体回転文が施されている胴部破片。

太い綾絡文

d類 (56~67)

自縄自卷的縄文が施されているもの。全体の器形が明らかではないが施文の状態、器面、胎土が2群の他の土器と類似することから本群に含めた。自縄自卷的縄文が不規則な方向に回転施文されている。

自縄自卷的縄文

57~67は2群に相当する口縁部、胴部の破片。57~59は比較的太い2段の原体による縄線で文様が



図III-95 包含層出土のII群B類土器（2）

描かれているもの。57はL R原体による縄線が4・5条施されており、その下位に爪状の圧痕がつけられている。61～64は撫りの異なる2本一組の縄線で文様が施されている。65は縄線文を縦、横、斜めに施している。66は縄線による文様に太い綾絡文が加えられている。67は合撫の原体によるもの。

爪状の圧痕

3群(図III-95・96-68～130)：円筒下層c式相当のもののうち、GP-31の覆土7・8・9・11・12層出土のものに類似するもの。

合撫

胴部から直線的に立ち上がり口縁部がやや外反する器形のものが多い。口唇は尖り気味である。体部には自縄自巻的縄文、撫糸文が施されている。自縄自巻的縄文は2群のものと比べて比較的整っている。口縁部文様帶は幅が狭く、縄線・綾絡文などが施されている。口縁部文様帶との境目に結束第1種羽状縄文、結束第2種羽状縄文、結束第2種羽状縄文の結束部分の回転文が施されるもの、隆帯がつけられるものがある。口唇の極狭い範囲に縄文が施されるものもある。

尖り気味の口唇

a類(68～81)

体部に自縄自巻的縄文が施されるもの。

a類-1(68～72) 口縁部文様が縄線文と綾絡文で描かれるもの。

68-a～cは同一個体の破片。胴部から口縁にかけて直線的に立ち上がり口縁が外反する大型の筒形土器。口唇は尖り気味である。体部には比較的整った縄文が施され、胴下半では斜行する撫糸文が重ねられている。口縁部と胴部の境目には結束第1種羽状縄文が重ねられその下位に綾絡文が3条施されている。内面から口唇上にかけては丁寧に磨かれている。焼成は良く茶褐色を呈する。69～72は胴部破片。68-a～cと似て比較的細く整った縄文が施されている。一応ここに入れておくこととする。

a類-2(73～78) 口縁部文様が縄線のみで描かれるもの。体部との境目には結束第1種羽状縄文が重ねられているものがある。

73は口唇は尖り気味である。L原体による平行縄線を密に施しその間を斜めにつなぐ文様が描かれている。体部との境目には羽状縄文が重ねられている。口唇上には縄文が施されている。74はL R原体による縄線のもの。75は器面が磨滅している。撫りの方向の異なる2本一組の縄線を3条施している。76はR原体を2本一組にした縄線が3条施されている。

a類-3(79～81) 綾絡文が施されるもの。

79・80は細い綾絡文を2条並列させている。79は内面が非常に丁寧に磨かれている。81は結束第1種羽状縄文が施されている。

細い綾絡文

b類(82～128)

体部に撫糸文が施されているもの。

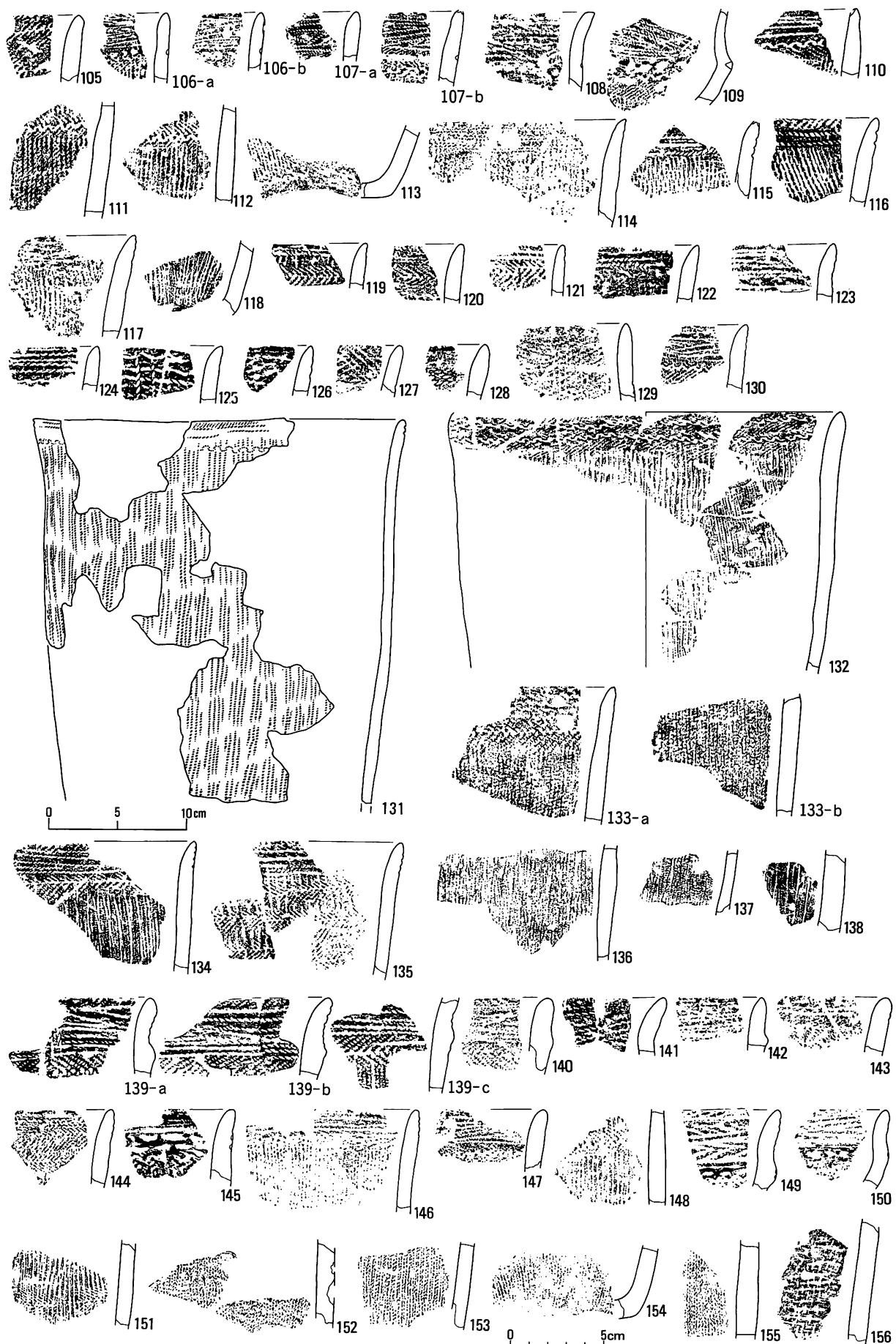
b類-1(82～87) 隆帯がつけられているもの。

82は口縁がわずかに外反する。低い隆带上には刺突文がつけられている。隆帯の上位にはL R原体による縄線が3条、下位には綾絡文が2条施されている。胎土には小砂利が多い。83は低い隆帯を貼付後にR原体による縄線を2本あるいは3本単位で口縁に平行にめぐらしている。84・86は口唇上に縄文が施されている。87は口縁部付近の破片と思われる。R原体による縄線の下位に細い綾絡文が2条施されている。

刺突文

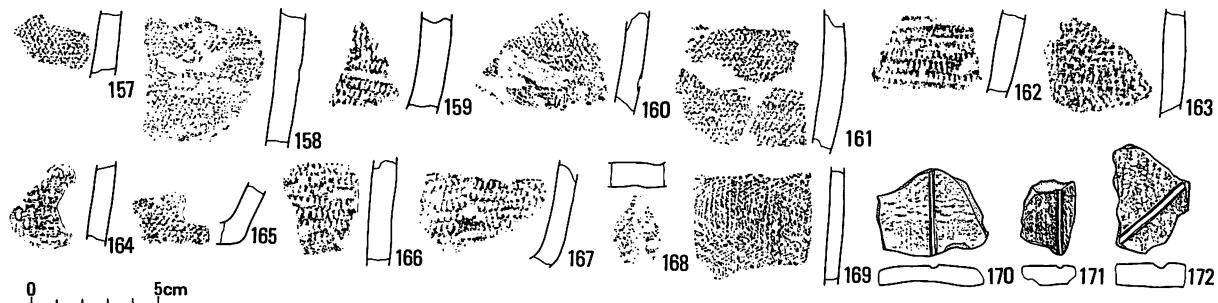
b類-2(88～95) 綾絡文と縄線で文様が施されているもの。

88は比較的太い原体による綾絡文がつけられている。92はR L原体による縄線と綾絡文がやや間隔をあけて施されている。93・94は口唇に縄文が施されている。95は細い綾絡文が体部に2条施されている。



図III-96 包含層出土のII群B類土器（3）

b類-3 (96)	綾絡文と絡条体圧痕文が施されている。	絡条体圧痕文
口唇は尖り気味で口唇上には縄文が施されている。口縁部に絡条体圧痕文が4条施され、その下位には2段の原体による比較的太い綾絡文がつけられている。		
b類-4 (97~105)	縄線文が施されるもので、体部との境目に結束第1種羽状縄文が重ねられているもの。	結束第1種羽状縄文
97・98は体部にも結束羽状縄文が重ねられている。97は黄褐色を呈するもので内面から口唇上にかけて丁寧に磨かれている。100・101は撫りの異なる2本1組の縄線が施されている。103は非常に細いLR原体による縄線がつけられている。104は撫糸文を施す前に底部周辺を磨いている。105は口縁部のみの破片。口唇に縄文が施されている。羽状縄文を施す際に斜行縄文の部分だけを重ねて施したものであろう。一応ここに入れておく。		口唇に縄文
b類-5 (106~109)	縄線による文様に加えて刺突文が施されている。	
106-a・bは同一個体の破片。細いL原体による縄線を7・8本平行あるいは斜めに密に施している。その下位に、半截竹管状工具で横から刺突文を施している。107-a・bは106と同様に細い縄線と刺突文が施されており、その下位には2段の原体による綾絡文が1条施されている。108は器面が磨滅している。胎土に砂粒が多い。細いLR原体による縄線が施されている。その下位に棒状工具で円形の刺突文がつけられている。109は口縁部と胴部の境が強くくびれる器形のもの。くびれ部には先の尖った工具で刺突文が施されている。口縁部には非常に細いL原体による縄線が密に施されている。	半截竹管状工具	結束第2種羽状縄文
b類-6 (110~113)	結束第2種羽状縄文が口縁部との境、あるいは体部に施されているもの。	
110はLR原体による縄線が密に施され、その下位に綾絡文を施すかのように結束第2種羽状縄文を施している。111~113は体部に重ねている。いずれも羽状縄文の方はあまり意識されず、結束部分の回転文を強調しているように見える。		
b類-7 (114~130)	縄線文のみで文様が描かれるもの。	
114は撫りの異なる原体を2本1組にした縄線が3条施されている。内面はあまり磨かれていない。116は撫糸文が斜めに回転施文しているもので、太いLR原体による縄線が2条施されている。119~130はいずれも3群に相当すると思われる口縁部の破片である。119~122・130は口縁部と胴部の境に結束第1種羽状縄文が施されている。120・127には綾絡文が施されている。130はL原体による縄線が横・斜め方向に密に施されている。結束第2種羽状縄文も施されている。125~128は縄線で山形の文様、縦・横に区切る文様が描かれている。	縄線文	
II群B ₂ 類土器 (図III-96・97-131~172)		
B ₂ 類はさらに1・2群に細分される。		
1群 (図III-96-131~148) : 円筒土器下層d式の古い段階に相当するもの。		
口唇の断面はB ₁ 類3群よりも丸味を帯びる。やや膨らみがあり厚みのあるものもある。口縁はあまり外反せず胴部から直線的に立ち上がるものが多い。口縁部文様帶は幅が狭く、縄線・綾絡文、結束第2種羽状縄文の結束部分の回転文が施されている。胴部との境目には結束第1種羽状縄文が施されているものがある。体部には自縄自卷的縄文、撫糸文が施されている。	幅の狭い文様帶	
a類 (131~138)		
体部に自縄自卷的縄文が施されているもの。		
a類-1 (131)	口縁部に縄線と綾絡文が施される。	自縄自卷的縄文
131は胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる平縁の大型筒形土器。口縁の狭い範囲が磨かれ無文帶になっており、R原体による縄線が2条不規則に施されている。体部との境目には綾絡文が1		



図III-97 包含層出土のII群B類土器(4)

条施されている。口唇直下には縄文が施されている。口唇上から内面にかけては非常に丁寧に磨かれ赤褐色を呈する。器面には炭化物が付着する。

a類-2 (132) 結束第2種羽状縄文が施されるもの。

132は口縁部が膨らみをもつ。胴部から口縁にかけて直線的に立ち上がる大型筒形土器。体部には自縄自卷的縄文が浅く施されている。口縁部は縄文施後軽く磨かれ、結束第2種羽状縄文が2条施されているが結束部分の回転文を意識したものであろう。口唇直下には59同様縄文がつけられている。内面から口唇上にかけては丁寧に磨かれ黒褐色を呈し光沢がある。

a類-3 (133~138) 縄線による文様が描かれるもので、胴部との境目あるいは体部に結束羽状縄文が重ねられるもの。

133-a・b、134は口縁部と胴部の境目に羽状縄文を施している。いずれも口唇直下には縄文がつけられている。133-a・bは細い原体により自縄自卷的縄文が施されている。135は口縁部にR原体による縄線が4条施され、体部には何段かにわたり羽状縄文を重ねている。136~138は胴部破片。細かい自縄自卷的縄文が施されている。一応ここに入れておく。

b類 (139~148)

撚糸文 体部に撚糸文が施されたもの。

b類-1 (139~144) 縄線による文様が描かれるもの。胴部との境目に結束第1種羽状縄文を重ねている。

139-a~cは同一個体の破片。口縁部と胴部の境目に粘土を貼り膨らみをもたせている。口縁部にはL原体による縄線が横位に7・8条施され、縦方向にも何条か施されている。口唇直下には縄文が施されている。内面から口唇上にかけては丁寧に磨かれている。焼成が非常に良く茶褐色を呈する。140は細いL R縄線により平行・斜めの文様がつけられている。口唇上には縄文が施されている。内面は磨かれている。144は撚りの異なる2本一組の縄線で文様が描かれている。141~143の体部の文様はわからないが一応ここに入れておく。

刺突文 **b類-2 (145) 縄線による文様に加えて刺突文がつけられているもの。**

145は口縁部にわずかに膨みをもたせL原体による細い縄線を数条施している。その下位に、上下に互い違いに押しひきした刺突文をめぐらしている。胴部との境目の結束第1種羽状縄文に重ねて綾絡文を1条重ねている。

b類-3 (146~148) 結束第2種羽状縄文が施されているもの。

146・147は132と同様に結束部分の回転文を意識したものと思われる。

円筒下層d式 2群(図III-96-149・150):円筒土器下層d式のうち新道4遺跡B地区土器捨場出土の資料¹¹²⁾に類似するもの。

149は口縁がやや外反し内面がくびれる器形のもの。口縁部は比較的幅が広い。くびれる部分に押し

びきの刺突文が施されている。口縁部にはR原体により平行線が引かれ、その間を斜めにつなぐ文様が施されている。体部の文様はわからないが、口縁部との境目に結束第2種羽状縄文が施されている。内面は非常に丁寧に磨かれ橙色を呈する。150は磨滅していくはっきりはしないが、体部には多軸絡条体の回転文が施されているようである。149同様に内面がくびれる器形のもので、くびれる部分には爪形の刺突文が施されている。口縁部には細いR原体による縄線が密に施されている。内面は丁寧に磨かれ灰黄色を呈する。

151～172はII群B₂類に相当すると思われる胴・底部の破片、151には細かい撚糸文に結束第1種羽状縄文が重ねられている。152～155は撚りの異なる繩を2本並列に軸に巻いた原体のもの。156～167は多軸絡条体の回転文。158は内面が非常に丁寧に磨かれている。157・158・160は条が細いもの。161には多量に炭化物が付着する。168は底面に絡条体圧痕文が施されている。169は撚糸文を施文後細い沈線を斜めに重ねている。170～172は擦り切り痕のある土器片。170には綾絡文が施されている。

擦り切り痕
のある土器
片

註

- 1) 北海道埋蔵文化財センター (1986) 『北埋調報33 建川1・新道4遺跡』
- 2) 前掲書

III群A類 (図III-98～103-1～130)

本群はA₁～A₃の3類に細分される。

III群A₁類 (図III-100-14・15)：円筒上層A式に相当するもの。

3本組の繩
線文

14は口縁に沿って横走する貼付帶があり口唇とその間に貼付帶が波状に施されている。波状の貼付帶上には撚りの異なる2本の並列する縄線がつけられている。器面には無文地に3本組の縄線が鋸歯状につけられている。15は口縁部に比較的長めの繩による刻み目を施している。器面には3本組の縄線で鋸歯状文を描いている。

III群A₂類 (図III-98-1～5・-100～102-16～68)：円筒上層B式に相当するもの。

口縁部から体上半部にかけて無文地に貼付帶で文様を施するもの。縄文地に貼付帶で文様を施すもの、縄文だけのものなどがある。4箇所に弁状突起部をもつものと平縁のものがある。

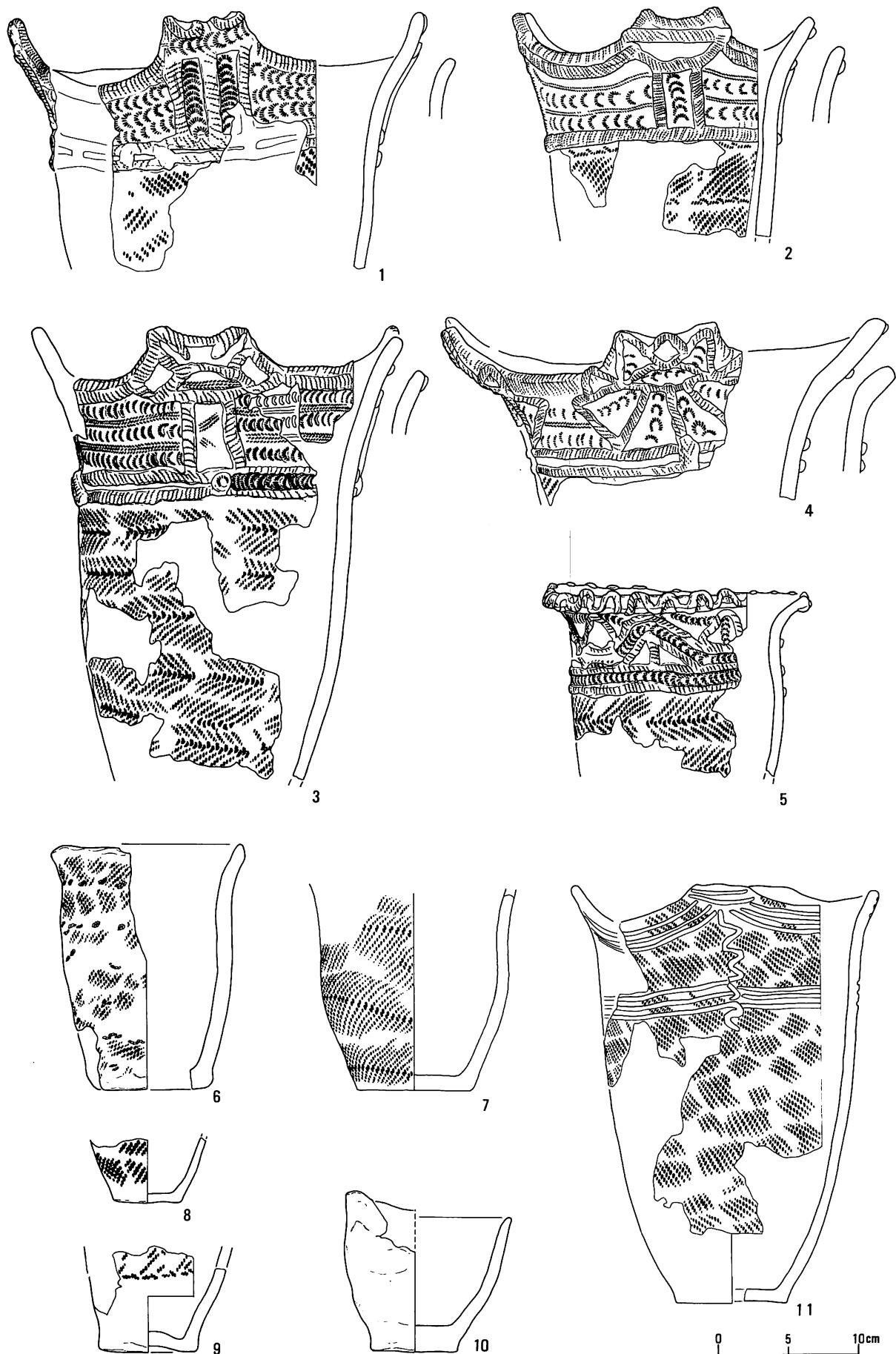
a類 (1～5・16～45)

無文地に貼付帶で文様を施すもの、貼付帶間には2本あるいは3本組の縄線文が施されているものが多く、馬蹄形圧痕文、様々な施文具による刺突文が組み合わされている。縄線のみのもの、刺突文のみのものもある。貼付帶は比較的太いものと細いもの2種がある。繩による刻み目がつけられているものが大部分で刻み目は比較的等間隔で整っているものが多い。撚糸文を施したものかと思われる圧痕も認められた。体部には結束第1種羽状縄文、斜行縄文を施すものが多く、斜行縄文に綾絡文が加えられているものもある。

太い貼付帶

a類-1 (1～5・16～32) 比較的太い貼付帶で文様が描かれるもの。1～4・16～22・25～32は4箇所に突起部をもつもの。5は平縁。1～3・16・17・21・25は貼付帶による文様が突起部に限られるものである。2・16・25は口唇直下にも突起間をつなぐように貼付帶がつけられている。いずれも突起下に2条垂下させる文様を描き、胴部上半にめぐらされた2条あるいは1条の横走する貼付帶につなげている。1は文様帶の幅が大きさに比べて狭いものである。胴部下半は欠損している。貼付帶に沿うように馬蹄形圧痕文が施されている。貼付帶は突起部では波状になっている。体部には結束羽状縄文が施されている。胎土に小砂利が多くもろい。2は馬蹄形圧痕文と撚りの同じ2本組の縄線が施されている。胴下半部にめぐらされた貼付帶の下位と体部の斜行縄文地には、結節の変形かと思われる文様が加えられている。3の底部は欠損している。胴上半部にめぐらされた2条の貼付帶には、突起下に対応する位置にボタン状の貼り付けと「ハ」の字状の貼り付けがある。向い合う一対の

馬蹄形圧痕
文



図III-98 包含層出土のIII群A類土器（1）

突起下に同じ貼り付けがつけられている。体部には結束第1種羽状縄文が施されている。縄線は撚りの異なる3本組の原体によるものである。胎土には小砂利が多く黒褐色を呈する。16は体部に0段の条数の異なる原体による結束第1種羽状縄文が施されている。

4・18・19・22・27・30は口縁部の貼付帯による文様が突起部を中心として波状・弧状・直線的に施されているものである。文様が突起部間の中ほどまで及んでいるものもある。4は口縁部が強く外反する器形のもの。胴上半から下位は欠損している。貼付帯は突起部では口縁にそって波状につけられ、その下位には「扇」状に施されて突起間の中程にまで及んでいる。貼付帯間は馬蹄形圧痕文が主として施され、撚りの異なる2本組の縄線も部分的につけられている。胎土に非常に小砂利が多くボロボロと崩れやすい土器である。茶褐色を呈する。19には爪状の刺突文が施されている。22・23には体部の斜行縄文に綾絡文が加えられている。27は4と類似した文様構成をとるものであるが、やや複雑につけられている。焼成は良い。30には円形の刺突文が施されている。

馬蹄形圧痕文

20は貼付帯上に縄の圧痕に加えて細い棒状工具で刻み目を施し、矢羽根状の文様を施している。26は馬蹄形圧痕文と撚紐による円形の圧痕文が施されている。31・32は突起部に楕円形の孔が穿たれている。31には円形、32は角形の棒状工具による刺突文が施されている。

棒状工具での刻み目

5は胴下半部が欠損している。口縁部は強く外反し、断面が角形の口唇部には貼付帯が波状につけられている。体部には結束羽状縄文が施されている。2条の貼付帯で区切られた口縁部には大柄な波状の文様とその頂部から垂下させる文様、弧線でつなぐ文様が描かれている。貼付帯に沿って馬蹄形圧痕文が施されている。茶褐色を呈する。

細い貼付帯

a類-2(33~45) 比較的細い貼付帯で文様が描かれるもの。33~39は山形突起部をもつもの。40~45は平縁のもの。口縁部の文様構成がはっきりわかるものは少ない。33・35・37・39には貼付帯間に刺突文がつけられている。33には突起部に円形の孔が穿たれている。34には体部に0段の条数が異なる原体による結束羽状縄文が施されている。38は口唇の断面が切り出し形を呈するもの。

刺突文

40~43は平縁の口縁に波状に文様がつけられている。40は半截竹管状工具による刺突文が施されている。41は口縁部のみの破片で全体の文様ははっきりしないが、口縁に平行に貼付帯が施されその間には馬蹄形圧痕文が施されている。焼成が良く赤褐色を呈する。42は口縁が内傾する。貼付帯上につけられる縄の圧痕は等間隔で整っている。撚糸文が施文されているかのように見える。このような縄の圧痕はしばしば認められる。44は棒状工具による刺突文が施されている。貼付帯上に文様が施されていない。胎土に小砂利が多く茶褐色を呈する。

縄の圧痕

b類(46~49・52-a・b)

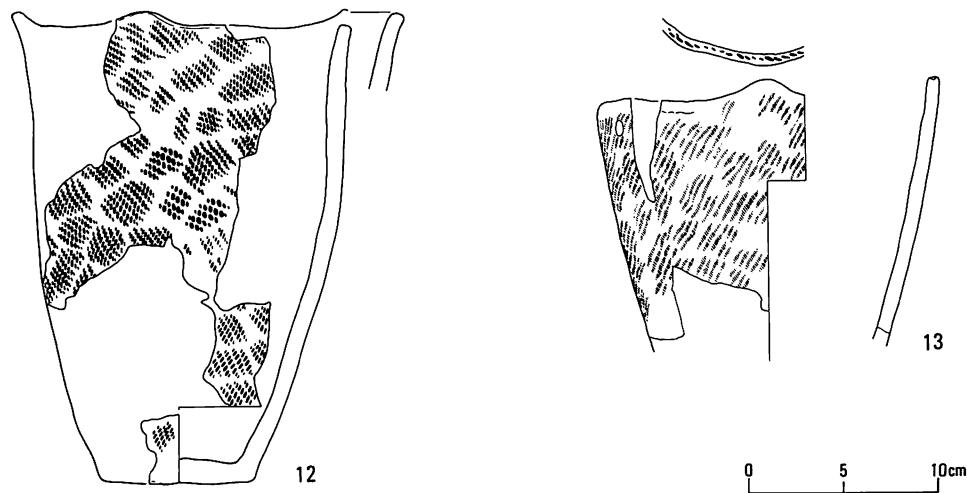
縄文地に貼付帯で文様を描くもの。46~48は平縁のもの。比較的細い貼付帯で文様が描かれている。いずれも口縁にそって波状に貼付帯が施されている。体部には結束第1種羽状縄文が施されている。47にはR L原体による斜行縄文が施されている。49は把手についたもの。把手部にも貼付帯が施されている。52-a・bは同一個体の破片。口唇は角形で磨かれている。器面には0段の条数が異なる2・3種類のL R原体を器面に粗く施している。貼付帯はほとんどが剥れているが、その痕跡から判断すると比較的細いもので縦・横に文様を描いていると思われる。口唇には縄の刻み目が不規則に施されている。焼成が良く黄褐色を呈する。

把手部

c類(50・51-a・b)

縄文・無文地に馬蹄形圧痕文が施されているもの。50は体部に結束羽状縄文が施されている波状の小型深鉢形土器である。口唇には縄の刻み目があり、口縁にそって馬蹄形圧痕文が施されている。胎土に小砂利が多い。51-a・bは同一個体の破片。突起部をもつ小型の土器である。ミニチュア土器

ミニチュア土器



図III-99 包含層出土のIII群A類土器（2）

かもしれない。無文地に非常に細い撲紐での馬蹄形圧痕文を縦方向に連続させて、並列に配する文様が施されている。突起部にも施されている。口唇にはL原体による縄の刻み目がつけられている。

d類 (53~68)

縄文だけが施されているもの。53・54は結束羽状縄文が施されている突起部の破片。53には橢円形の孔が穿たれている。55-a・bは同一個体の破片。胴部が直線的に立ち上がり口縁が外反する平縁の筒形土器。口縁部にはR原体による無節の斜行縄文を施文後、L R原体による斜行縄文を重ねている。単節の原体は先に施文されている無節のものを撲り合せたものかもしれない。口唇直下にはR原体による縄の圧痕をとろどろに施している。体部には破片がなくてはっきりとはしないが、L R原体による斜行縄文が施されているようである。口縁部に施文されている原体とは異なるものかもしれない。焼成は非常に良く、内面から口唇にかけては磨かれ光沢がある。茶褐色を呈する。56は原体の異なる斜行縄文が重ねられている。57は無節。58には単節の斜行縄文が施されている。58は口唇にも縄文が施されている。59~68は胴・底部の破片。59・63は無節と単節の原体による、61は0段の条数が異なる原体による結束羽状縄文が施されている。62は0段の条数が異なる原体による結束斜行縄文である。64は結束のある原体を縦方向に回転させている。

サイベ沢VII式

III群A₃類 (図III-98・99-6~13・-102・103-69~130) : サイベ沢VII式に相当するもの。

縄文地に細い貼付帶で文様が描かれるもの、沈線文が施されるもの、縄文のみのもの、魚骨回転文が施されるものなどがある。

a類 (69~77)

細い貼付帶

縄文地の細い貼付帶で文様が描かれるもの。69は胴部がやや張り出す器形のもの。器面にはR原体による縄文が不規則な方向に粗く施文されており、羽状をなすところもある。とろどろに綾絡文も重ねている。口縁にそって細い貼付帶を1条めぐらし、短い貼付帶で小突起を形成している。口唇と貼付帶上には方向を違えて縄による斜めの刻み目がつけられている。内面には炭化物が付着し茶褐色を呈する。70は口唇断面が角形のもので縄文が施されている。71~76は突起部分の破片。71は突起部の中程にボタン状の貼り付けがあり、それに対応して裏側から孔が穿たれている。口唇には縄による刻み目がある。

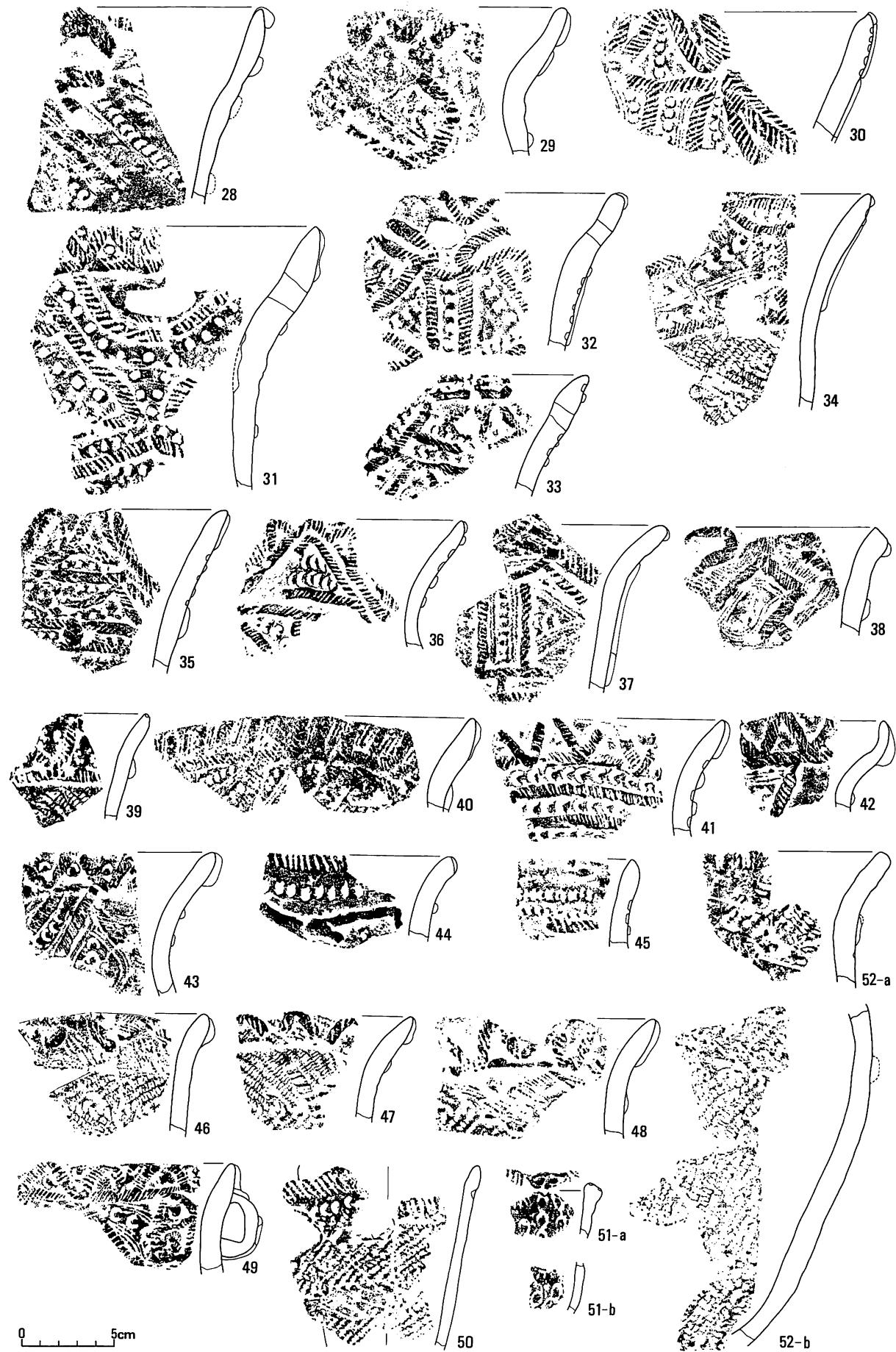
b類 (11・78~85)

沈線文

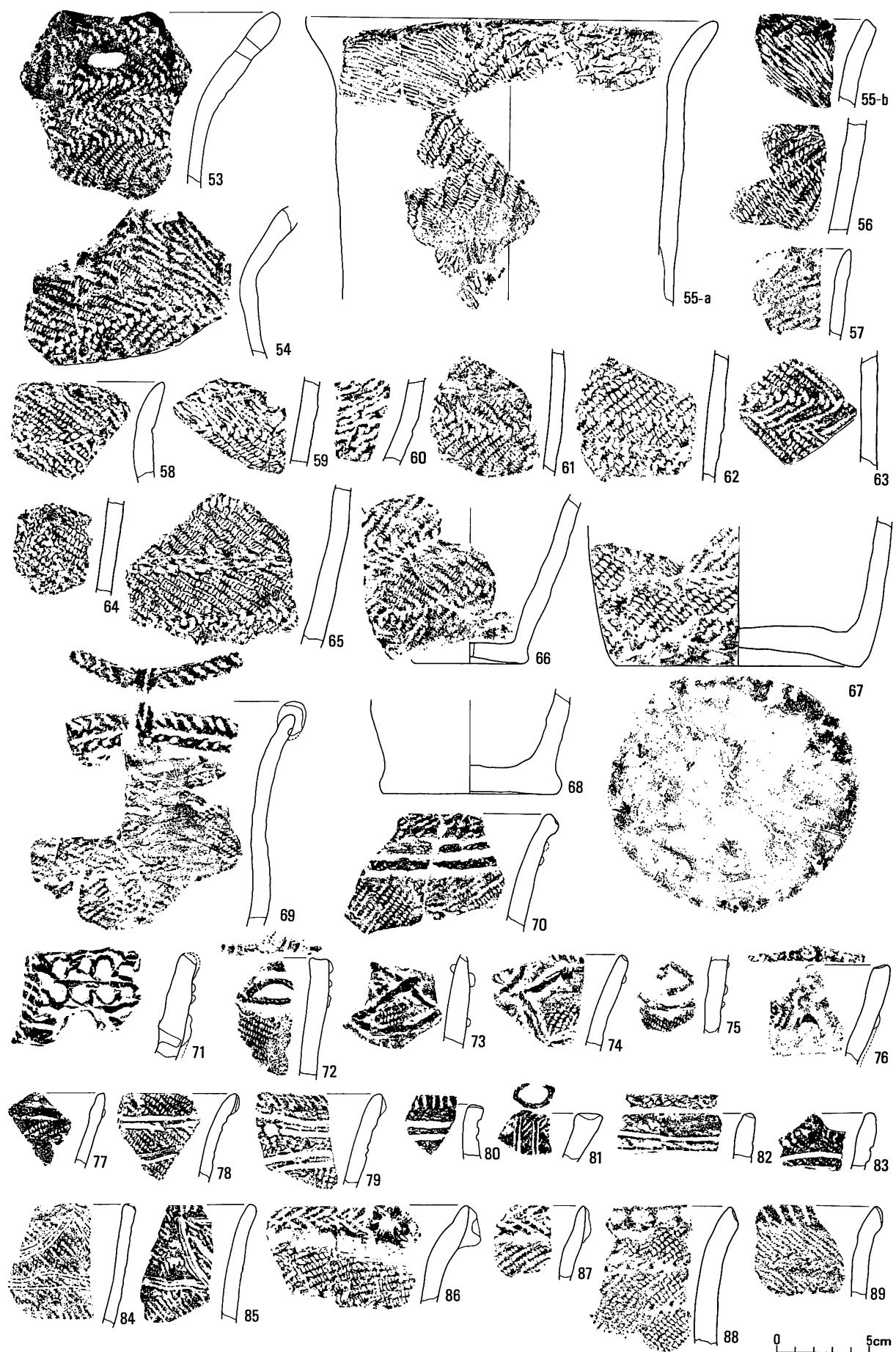
沈線による文様が描かれているもの。11は4個の山形突起部をもつもの。胴部はあまり張り出さない。口唇は角形で縄による斜めの刻み目がつけられている。器面にはR L原体による斜行縄文が施され底部は磨かれている。口縁部に沿って胴部上半に3条平行する沈線が施され、これらの沈線をつな



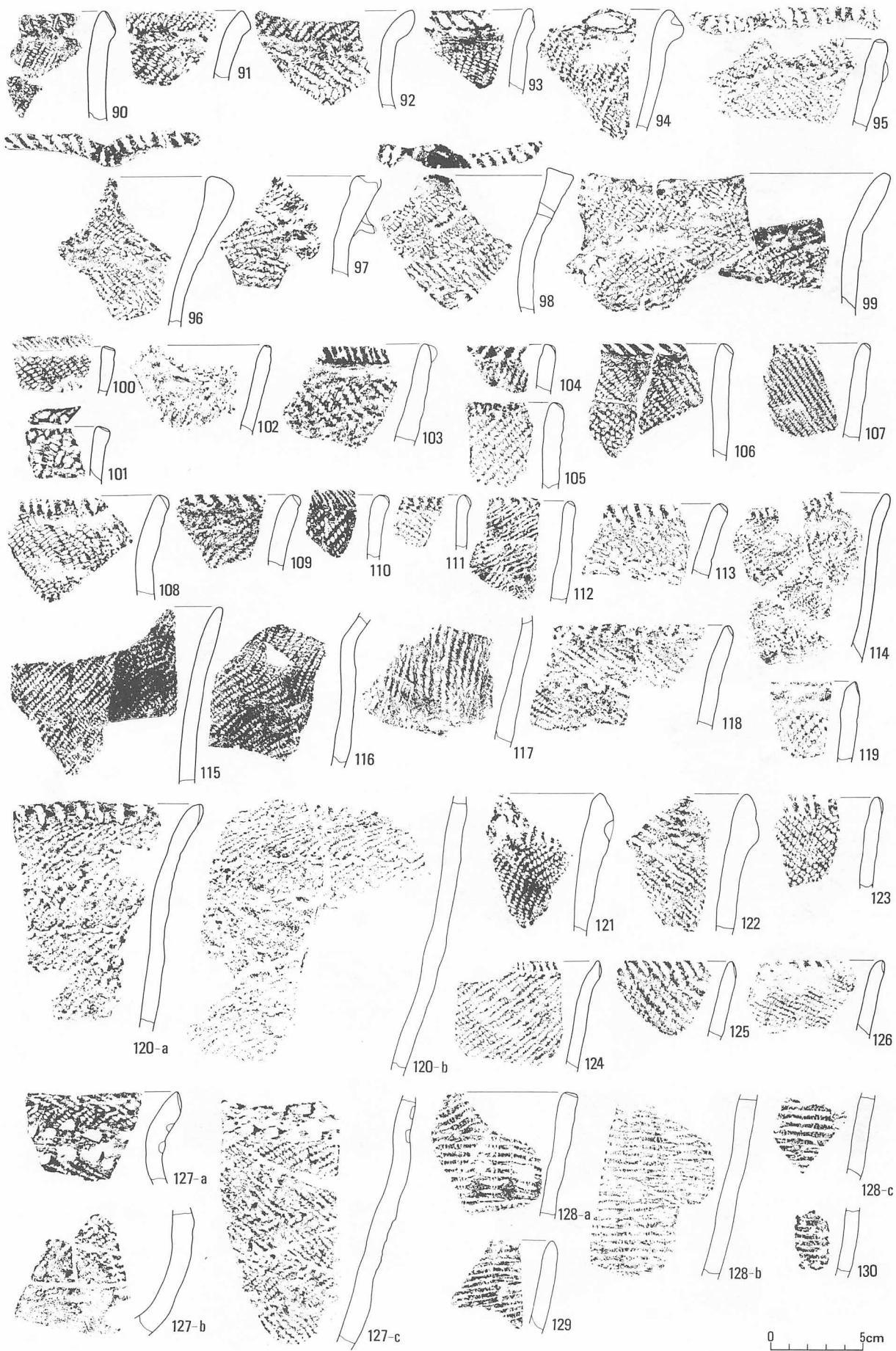
図III-100 包含層出土のIII群A類土器（3）



図III-101 包含層出土のIII群A類土器 (4)



図III-102 包含層出土のIII群A類土器（5）



図III-103 包含層出土のIII群A類土器（6）

ぐように突起に対応して縦に蛇行する沈線が施されている。胎土には小砂利が多くボロボロと崩れやすい。口縁部から胴上半にかけては黒褐色、下半部は赤褐色を呈する。

c類 (6~9・12・13・86~127)

縄文のみが施されているもの、口唇には縄・棒状工具による刻み目があるものがある。体部には結束第1羽状縄文、結束第2種斜行縄文、単節・無節の斜行縄文が施されている。

c類-1 (6・86~95・127-a~c) 口唇の断面が切り出し形のもの。6は平縁の中型深鉢形土器。比較的厚手で胴がわずかに張り外反する。器面には2段と1段の原体を結束させたかと思われる原体が粗く施文されており、単節と無節の部分が観察出来る。結束は通常のものとは異なるようであるがはっきりしない。底部付近には綾絡文が加えられている。器内外面は凹凸があり胎土には小砂利が非常に多い。口縁部付近は茶褐色、底部は黄褐色を呈する。86・87は同一個体と思われる。口縁に円形の貼り付けがあり、細い棒状工具で矢羽根状の沈線が施されている。88・89には結束のある斜行縄文が施されている。口唇には指頭によると思われる圧痕がある。93は口唇に棒状工具で粗く刻み目がつけられる。91は口唇に縄文がつけられている。95は2個一对になると思われる小突起のあるものである。口唇には縄による刻み目が深くつけられている。127-a~cは同一個体の破片。刺突文がつけられているが一応ここに入れておく。口縁が外反する器形のもの。口唇には縄の圧痕がつけられている。体部には結束第1種羽状縄文が施されているが、底部付近は磨かれて無文になっている。口縁部の狭い範囲が無文になっており、角形の工具で押しひきした刺突文が不規則に2列横環されている。胴上半部にも刺突がめぐっているようである。器内外面は凹凸があり焼成は良く黄褐色を呈する。

切り出し形の口唇

綾絡文

c類-2 (12・13・96~106) 口唇の断面が角形に近いもの。12は4箇所に緩やかな山形隆起部をもつもの。胴部がわずかに張り出す。口唇には縄文が施されている。器面には底部付近にまでR L原体による斜行縄文が施され、底部は磨かれている。胎土には砂が多く器面はザラザラし、炭化物が付着している。口縁部から胴部にかけては黒褐色を、胴下半部は橙色を呈し炭化物が付着している。13は2箇所に緩やかな山形隆起部を設けていると思われる。口唇には縄の圧痕がつけられている。胴部から口縁にかけては直線的に立ち上がる。器面にはL R原体による斜行縄文が浅く施されている。胎土は12と非常に良く似ている。96~98は突起部の破片。97には器面に横走気味の縄文が施されている。ツバ状の貼り付けがある。100・102・103・106には棒状工具による斜めの刻み目、他のものには縄による刻み目がつけられている。102は無節の縄文が施されている。口唇には棒状工具で不揃いな刻み目がつけられている。

角形の口唇

c類-3 (10・107~113) 口唇の断面が丸味を帯びるもの。いずれも口唇には縄による刻み目がつけられている。10は無文の小型深鉢形土器。底部から直すぐに立ち上がり胴部でわずかに張り出す。器面には凹凸があり作りが雑である。底面付近と内面のところどころは磨かれている。胎土に小砂利が多い。111は複節の縄文。

縄の刻み目

c類-4 (114~126) 口唇の断面が尖り気味のもの。口唇には縄の刻み目がつけられている。114は斜行縄文地に綾絡文が施されている。117には縦行気味の無節の縄文が施されている。118・120-a・bには結束のある斜行縄文が施されている。120-a・bは胎土に小砂利が非常に多く器面には凹凸がある。縄文は浅く施されている。121・122は肥厚させた突起部。121はR L原体を縦位と横位に回転施文し羽状縄文的になっている。

c類-5 (128-a~c・130) 魚骨回転文が施されたもの。128-a~cは同一個体の破片。サケタイプの回転文のもの。口唇は角形で縄による刻み目が施されているもの。129・130はニシンタイプの回転文。129は口唇は尖り気味である。

魚骨回転文



図III-104 包含層出土のIII群B類土器（1）

III群B類土器 (図III-104~106-1~117)

III群B₁類 (図III-104・105-1~78) : 榎林式に相当するもの。

榎林式

本群は器形、口縁の形からa~e類に細分される。

a類 (1~30)

口縁が肥厚しそこに沈線が施されているもの。体部の文様は地文だけのもの、沈線で文様が描かれるものがある。

肥厚した口縁

a類-1 (2~6・18~26) 脊が張らず直線的で口縁部が外反しない器形のものである。

2は山形口縁のもので筒形になると思われるもの。口唇をわずかに肥厚させ円形刺突文をはさんで左右に沈線がひかれている。口縁部と胴部にそれぞれ浅い3条の横走する沈線をめぐらし、沈線の下位には3本一組の沈線で弧線文が連続して描かれている。弧線文からは垂下する沈線が胴部の沈線に下ろされている。地文はLR原体による斜行縄文。全体が茶褐色ないしは黒褐色を呈し焼成が非常に良い。3は口唇をほんのわずかに肥厚させ、口唇直下に幅1~2cm程の無文帯が形成されている。4は平縁の小型鉢形土器。体部にはRL原体による斜行縄文が粗く施されている。内面に炭化物が付着する。5は山形隆起部に円形の窪みを配している。6は地文にLR原体を縦方向に回転施文し、細い棒状工具で沈線文を施している。18~26は口縁部のみの破片であるが、口縁の外反の度合は比較的弱いものと思われる。

弧線文

円形の窪み

a類-2 (1・7~17・27) 頸部がくびれ、口縁部が比較的強く外反する器形になるかと思われるもの。9~13、15は沈線で文様が描かれている。1は4個の山形隆起部をもつ大型の深鉢形土器と思われる。肥厚部は沈線がひかれた後磨きがかけられている。器面にはRL原体による斜行縄文が施され、太く浅い沈線が口縁に平行に2条めぐらされている。胎土には小砂利が多く茶褐色を呈する。7は緩やかな波状口縁をなすかと思われる。内外面に炭化物が付着する。8は複節の縄文が粗く施されている。10~13は山形隆起部で沈線が渦巻状となり断面が円錐状となっている。16はワラビ状の沈線文が描かれている。17は山形隆起部に円形の窪みがつけられている。27は沈線で垂下する文様が描かれているもの。一応ここで扱っておく。

沈線文

ワラビ状沈線

a類-3 (28-a~c・29・30) 大木8bに相当するもの。

大木8b

28-a~cは同一個体の破片。口縁は外反しわざかに肥厚させている。体部にはRLR原体を縦方向に施文している。口縁部から胴部にかけて文様は2条あるいは3条一組の太い沈線で円形文、弧線文、垂下する直線を描いている。焼成は非常に良く黄褐色を呈する。

b類 (31~37)

口縁を肥厚させるもの。肥厚部は磨きがかけられているものが多い。

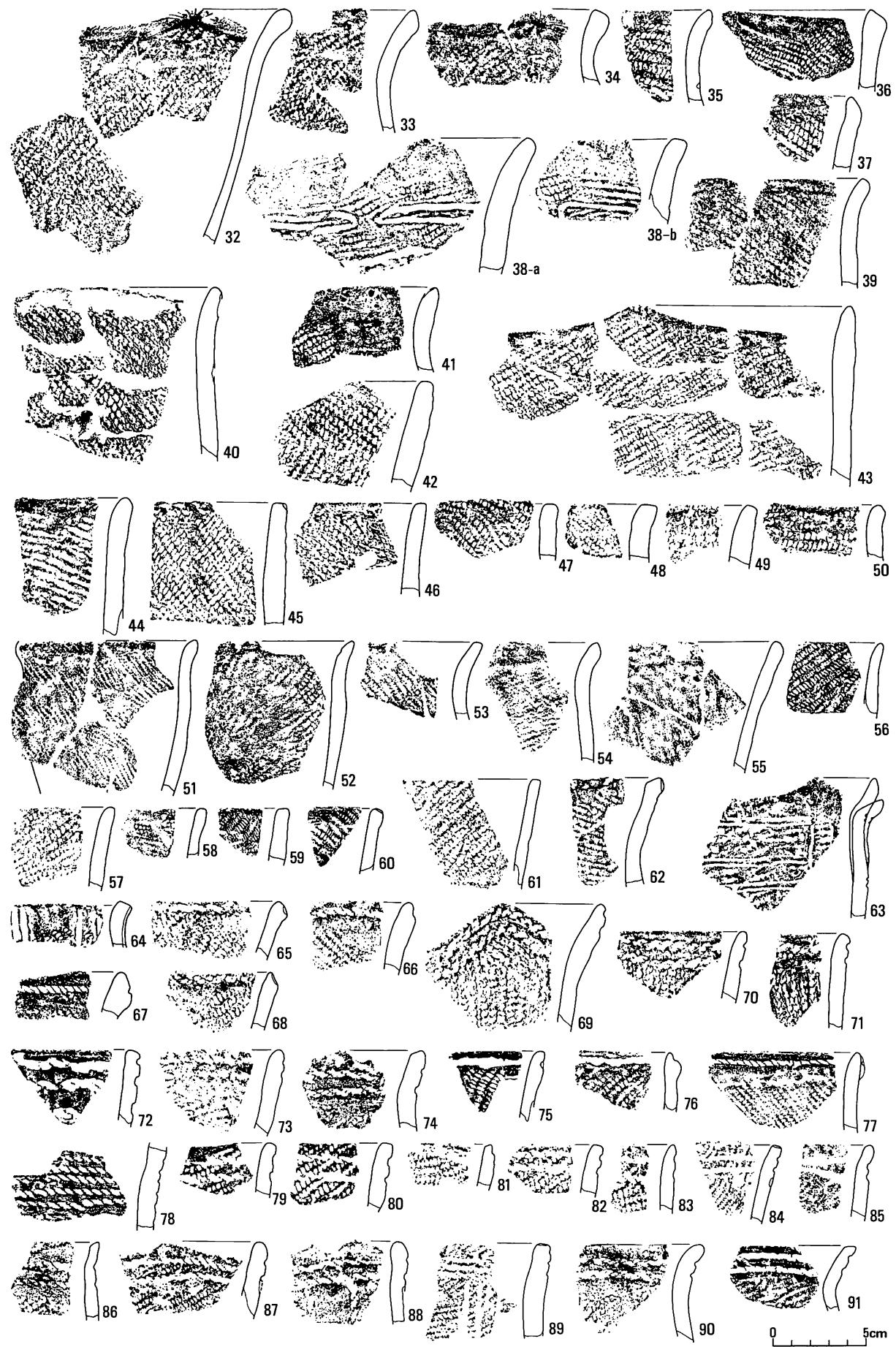
31は体部にRLR原体による斜行縄文が施されている。肥厚部は磨かれている。沈線が引かれていないが、口縁の肥厚の状態がa類と非常に良く似ている。32~35は口縁が外反するもの。32は胴部が張らず口縁が外反する器形のもの。体部にはLR原体による斜行縄文が施されている。肥厚部には磨きがかけられている。器面には炭化物が付着する。胎土に小砂利が多い。33~34には複節の縄文が36には横走気味の縄文が施されている。

c類 (38~50)

口縁部を肥厚させないもの。口縁部を磨いて幅の狭い無文帯を形成するとのがある。体部は縄文だけのもの、縄文地に沈線で文様を描くものがある。

c類-1 (38~44) 比較的厚手で口唇がやや丸味を帯びるもの。

38-a・b~41は口縁がやや外反するもの。38-a・bは体部には横走気味の縄文が施されている。



図III-105 包含層出土のIII群B類土器（2）

口縁部は磨かれ無文帯が形成されている。ややくびれる頸部には沈線による区画文の一部が認められる。胎土には小砂利が多く、茶褐色を呈する。39~41は波状口縁のもの。体部には複節の縩文が施される。42・43は口縁が直立するもの。42は口縁部に LRL 原体を縦位と横位方向に施文し、羽状縩文を構成しているかにみえるもの。口唇から内面にかけては磨かれている。胎土には小砂利が多く茶褐色を呈する。焼成は非常に良い。43は胴部から口縁部が直立する山形隆起部をもつ大型の鉢形土器。体部には LR 原体による斜行縩文が施され口縁部の狭い範囲が軽く磨かれている。胎土に小砂利が多く黒褐色を呈する。44は無節の縩文が施されたもの。

複節の縩文

c 類-2 (45~50) 比較的厚手で口唇が角形のもの。

45~48は斜行縩文のもの。46は RLR 原体による複節の縩文のもので口縁部が磨かれている。49は複節の縦行縩文、50は横走気味の縩文のもの。

d 類 (51~64)

口縁部を肥厚させないもので比較的薄手のものを本類とした。縩文だけのもの、無文のもの、縩文地に沈線で文様を描くものがある。

d 類-1 (51・52・63) 口唇が尖り気味のもの。

51は頸部がややくびれ口縁が外反する小型の深鉢形土器。体部には RL 原体による斜行縩文が浅く施されている。口唇の内側は磨かれている。胎土は砂が多くザラザラとする。63は山形隆起部をもつもので、胴部は張らず口縁が強く外反するものである。隆起部は2個一対になるかもしれない。器面には無節の縩文が浅く施されている。文様は半截竹管状工具の腹面で縦・横に区画する沈線文が施されている。器面には凹凸があり、胎土には小砂利が非常に多い。茶褐色を呈する。

d 類-2 (53~57) 口唇はやや丸味を帯びるもの。

53・54は口縁が外反する。54は口縁をやや肥厚させ磨きがかけられている。b 類に相当するかもしれない。55は口縁が直線的に立ち上がる器形で、無文である。56・57は斜行縩文が施されている。

d 類-3 (58~62・64) 口唇が角形のもの。

58には横走気味の縩文が、59~61には斜行縩文が施されている。62は口唇の形状が他のものと違うが便宜的にここに入れておく。口縁部を肥厚させるためにわずかに粘土を貼り付けているようにもみえる。64は縦位に施文された縩文地に沈線が縦にひかれている。口唇は磨かれている。

e 類 (65~78)

口縁部に縩線がつけられるもの。

縩線文

65~67は口縁部をやや肥厚させ縩線をついている。67の口唇は磨かれている。68は短い縩の圧痕を連続して施している。69~71は S-59、U-59、X-55と離れた位置から出土しているが、同一個体かと思われる。体部には RLR 原体による縦行縩文が施されており、山形隆起部では横位方向に施文し地文に重ねている。口縁にそって地文と同じと思われる原体による縩線が2条施されている。72~74は太い縩線が施されたもの。74の口縁は指頭を押しつけたかのように小波状になっている。75・76は縩線を施した後磨かれているため縩線がつぶれている。72~78はIV群A類涌元式に相当するものかもしれない。

縦行縩文

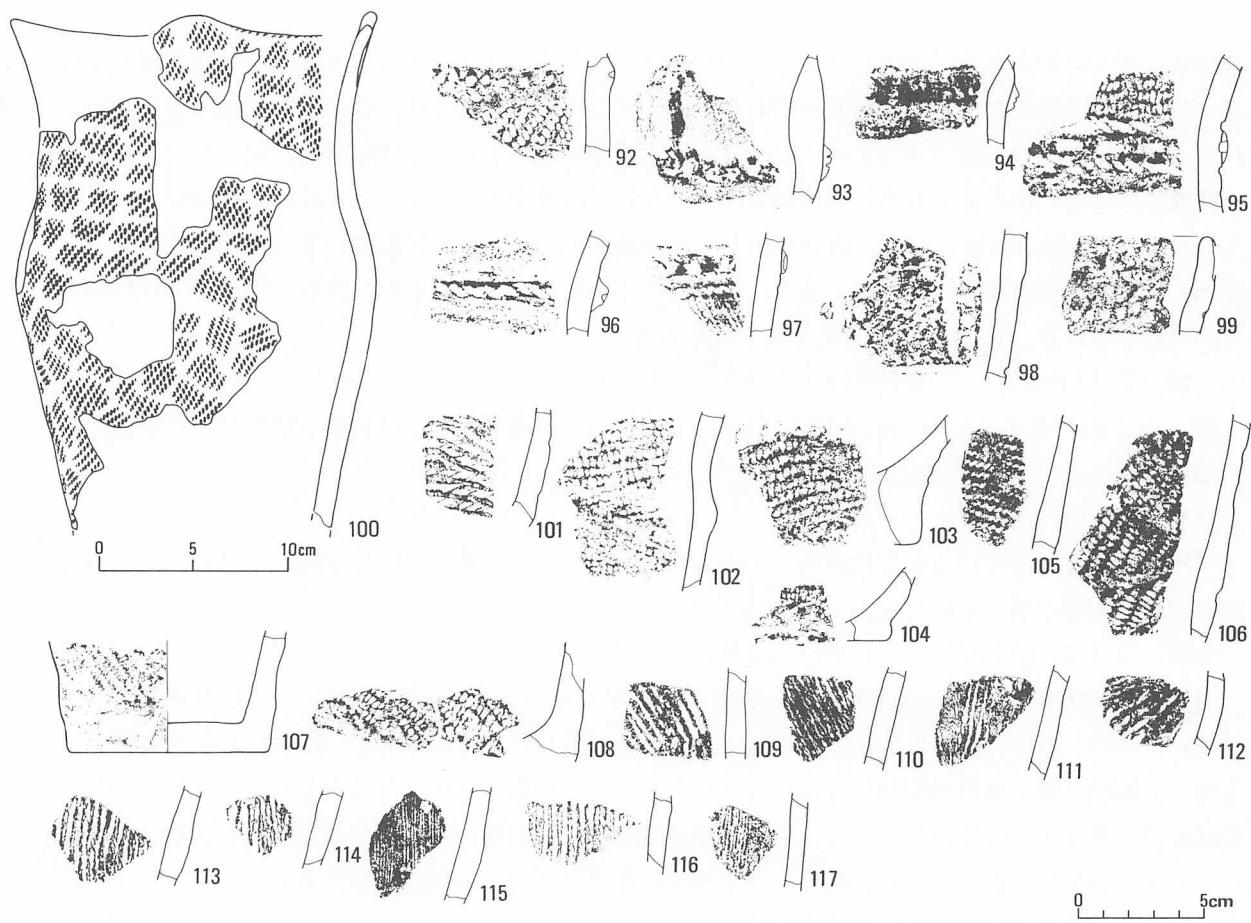
III群B₂類 (図III-105・106-79~117) : 大安在B式に相当するもの。

大安在B式

本群は a ~ c 類に細分される。

a 類 (79~94) 口縁部の縩文地あるいは無文地に縩線で文様が描かれるもの。口縁にそって2・3条めぐらすものが多く、縩線は2段の縩が用いられることが多い。

81は地文が横走気味の縩文である。84は口縁に2条縩線がめぐり、口唇と縩線の下位に棒状工具に



図III-106 包含層出土のIII群B類土器（3）

による刺突文が施されている。86・90は口縁の狭い無文帶に縄線が施されている。87は山形隆起部をもつもの。88は無文地の口縁に横走する縄線が2条施され、その下位には2個一对になるかと思われる口縁の山形隆起部に対応して、垂下する縄線が施されている。89は横走気味の縄文地にLR原体による縄線が口縁に平行して2条めぐり、下位の縄線からは垂下する縄線が施されている。口唇は角形で縄文がつけられている。内外面ともに磨かれて光沢がある。

隆 帯 **b類 (92~99)** 隆帯がつけられているもの。隆帯上には刺突文が加えられるもの。縄の圧痕が施されるものなどがある。

刺突文 92は体部にLR原体による斜行縄文が施されている。隆帯上には断面が円形の工具で刺突文がつけられている。93は無文の器面に縦と横に隆帯を設けている。縦の隆帯は粘土を指でつまみ上げて作り出したと思われる。横位の低い隆帯上には竹管状工具で刺突文がつけられている。胎土に小砂利が多い。94はこれと同一個体かもしれない。95は器面には横走気味の縄文が施され、隆起上に断面が角形の工具で横方向へ押しひきした刺突文がつけられている。低い隆帯の上・下にはLR原体による縄線がそえられている。97は隆帯上に短い縄の圧痕がつけられている。98は太い沈線と竹管状工具による刺突文で文様が描かれている。99は無文地に半截竹管状工具で刺突文が施される。便宜的にここに入れることとする。

c類 (100~117) 縄文だけのもの。全体的な文様構成、器形のわかるものが少ないが、III群B₂類に特徴的と思えるものである。

100は山形隆起部をもつもの。胴部の張り出しが強く頸部がくびれ口縁が外反する器形のもの。体部にはLR原体による斜行縄文が底部付近まで施されていると思われる。口唇は角形で縄文が施されて

いる。器面には炭化物が付着する。101～105は横走気味の縄文が施されている。101は無節の縄文。109～113・116は撲糸文の施されたもの。114は条痕と撲糸文がつけられていると思われる。115・117は集合条線文のもの。

IV群A類土器 (図III-107～114、図版37～40)

IV群A類土器は土器分布密度(図III-92)からわかるように、調査区北側の、1)Q、R、S-61～63周辺と、2)南西側の盛土地区(U～Y-54～59)の2箇所から比較的まとまりをもって出土している。1)を集中区I、2)を集中区IIとして遺物の記載をする。本群の土器は昭和60年B地区で出土した際の層位的分類に基づいて盛土1類から5類に細分することとする^註。

集中区I (図III-107・108-1～41、図版37)

盛土1類 (1～41)

縄文地に沈線で文様を描くもの、無文地に沈線で文様を描いた後縄文を所々に施すもの、無文地に沈線で文様を描くもの、口縁に貼付帶で文様がつけられるものなどがある。

1～7は沈線で文様を描いた後、縄文を所々に施す手法のものである。縄文は浅く施されている。文様は細い沈線で口縁にそって2～3条の平行線をめぐらすものが多い。1・2は波状口縁のもの。1は頸部がくびれて胴部が張り出す器形のもの。内外面に多量に炭化物が付着する。縄文がつけられる前に磨きがかけられているため沈線が潰れている所もある。内面にはヘラ刺りの痕跡が残る。3は口縁がやや外反するもので、弧線を繋ぐ文様が描かれている。8～10は縄文地に沈線で文様を描くものである。8は曲線と直線を組み合せた文様が描かれている。11～29・31-a・bは無文地に沈線で文様が描かれているもの。10～14・16～18は波状口縁のもの。文様は口縁にそって平行沈線を複数めぐらすものや、平行沈線を弧線でつなぐ文様が体部にまで及んでいるもの、区画文の描かれるもの等がある。16は口縁に幅の広い無文帯を設けている。無文帯から口唇上、内面にかけては磨かれている。焼成は良く黒褐色を呈する。炭化物が付着する。胎土には小砂利が多い。15・19・20・21は平縁のもの。15の口唇は角形で磨かれており、口縁が外反する大型の深形土器。比較的太い沈線で口縁部に3条横走する沈線を施している。体部には入組文的文様と縦方向に展開する文様が描かれている。内外面に炭化物が付着する。焼成は良く黒褐色を呈する。19・20は折り返し口縁のもの。19は口縁に幅の狭い無文帯が形成されている。その下位に細い沈線で3条平行線をめぐらしている。体部には曲線的文様と「コ」の字状の区画文が描かれている。焼成は良く黒褐色を呈する。炭化物が付着する。胎土には小砂利が多い。27は無文地のもので、頸部に太く浅い沈線が1条めぐっている。焼成は良く内面は赤褐色を呈する。28は波状口縁の頂部に貼付帶で「8」の字の文様を描き、その間を2・3条の細い沈線でつなぐ文様が描かれていると思われるもの。器面から口唇上にかけては磨かれている。焼成は非常に良い。29は比較的太い沈線で文様が描かれる。口唇に指頭と思われる圧痕がつけられている。胎土に砂が多い。31-a・bは浅鉢形土器と思われるもの。比較的太い沈線で口縁部には3条平行線をめぐらしている。体部には曲線文と弧線で口縁の沈線をつなぐ文様が描かれている。胎土には小砂利を多く含み灰黄色を呈する。32・33は浅くまばらに施された縄文地に太い沈線で文様が描かれている。34は浅く施された斜行縄文地の口縁部に細い沈線が無造作に施されている。38は斜行縄文、37は無節の縄文が施されている。35には横走する撲糸文が施されている。30は半截竹管状工具で文様を描いた後沈線で縁取りしている。盛土2類の櫛状工具により文様を描く手法と似ている。36は半截竹管状工具で文様が描かれている。39・40は壺形土器。39は無文の口縁部と肩部に細い沈線がめぐっている。40は細い沈線で同心円状の文様を描いているかと思われる。内外面に多量に炭化物が付着する。41は4箇所に緩やかな隆起部をもつ大型の深鉢形土器。底部は欠損している。胴部がわずかに張り出

2、3条の平行沈線

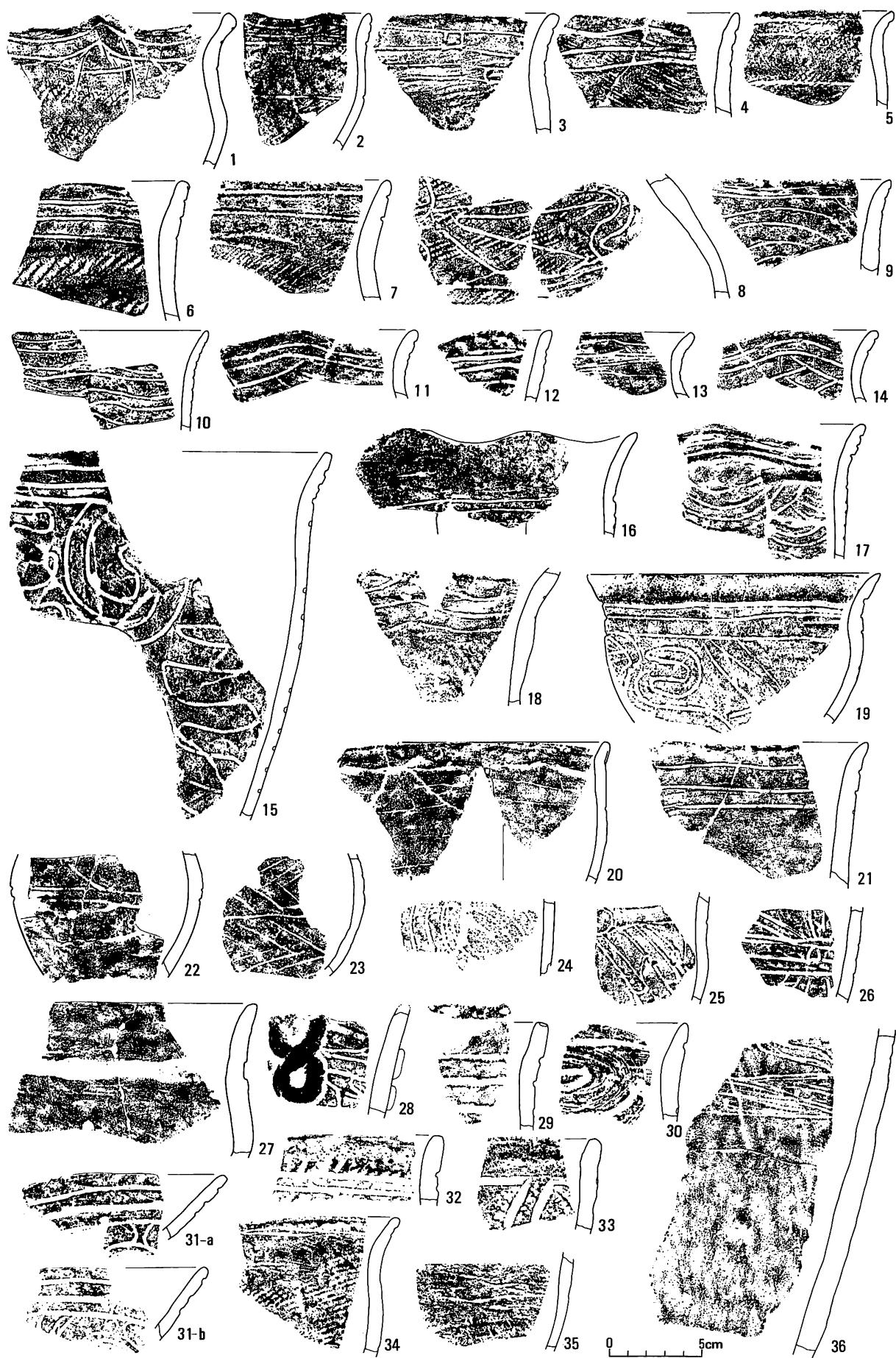
平行沈線

入組文

「8」の字文様

指頭の圧痕

太い沈線



図III-107 包含層出土のIV群A類土器（1）集中区 I

す。器壁は口縁に向って薄身になる。口唇の断面は角形で磨かれている。口縁の隆起部と隆起部の中間に対応する位置に縦に短く粘土紐を貼付している。頸部にも1条めぐらし幅の狭い口縁部を区画している。口縁部には細い沈線で横に細長い区画文を上下に描くもの、区画文が崩れて一筆書きの文様のようになっているもの等がある。口縁部に沈線文を施した後、口縁部を区画する低い貼付帶上から器面全体に太い原体による横走縄文が施されている。縄文施文後貼付帶周辺が部分的に磨かれている。焼成は良く胴上半は暗黄褐色、胴下半は茶褐色を呈している。口縁部内面と胴下半部には炭化物が付着する。

集中区II (図III 109~114-1~107、図版 38~40)

盛土1類 (図III-110・111-12~50)

縄文地に沈線で文様が描かれるもの、沈線で文様を描いた後縄文を施すもの、無文地に沈線で文様の描かれるものなどがある。器形には深鉢形、壺形がある。

12~16は沈線で文様を描いた後縄文を施すもの。12・13・15は平縁、14・16-a・bは波状口縁を呈する。文様は口縁に平行して数条沈線を施すものや平行沈線を鉤の手につなぐ文様などが描かれている。12は折り返し口縁の大型の深鉢土器。内外面に炭化物が付着する。縄文施文後磨かれている。13は半截竹管状工具による沈線文が施されている。16-a・bには2条並列する太く浅い沈線を横位に施し、その間を向きの違う短い弧線でつなぐ文様が描かれている。縄文は沈線間に部分的に施文されている。炭化物が付着し黄褐色を呈する。17~27は縄文施文後沈線で文様が描かれている。文様は口縁にそって数条平行する沈線がひかれるものや、弧線でつなぐもの、曲線的文様を描くものなどがある。17・20・24・25は波状口縁のもの、20は4箇所に山形隆起部を設け、胴部が張る中形の土器。隆起部に粘土で円形文を貼りつけその間を2条の沈線でつないでいる。円形文は沈線で縁取りされている。24は頂部とその両側に指頭による圧痕がつけられている。28~42・45・46は無文地に細い沈線で文様が描かれているもの。口縁にそって平行沈線がめぐるもの、入組文、区画文、弧線文などが描かれている。28~30・37・40は波状口縁のもの。28は口縁が外反する大型の深鉢形土器。口縁にそって2条沈線がめぐり頸部には無文帶を設けている。体部との境にも2条沈線がめぐり、弧線が加えられている。体部には横位に展開する入組文や区画文が描かれている。胎土には小砂利が多く器面はザラザラしている。炭化物が付着し黒褐色を呈する。内面にはヘラ削りの痕跡が残る。38・39は棒状工具で斜めの刻み目がつけられている。40は爪によると思われる刻みがつけられている。41は口唇上と口縁の内側に棒状工具で円形の刺突文が施されている。41には指頭の圧痕がつけられている。43は波状口縁をなすと思われ、口縁にそって貼付帶が何条かつけられているようである。貼付帶は細い沈線で縁取りされている。44は山形隆起部に貼付帶で文様が描かれている。部分的に細い沈線で縁取りされている。45・46は壺形土器。いずれも3本単位の細い沈線で文様が描かれている。45は灰褐色を呈し内外面は磨かれている。46は朱色の顔料が塗られている。47は折り返し口縁のもので器面には撲糸文が浅く施されている。48は網目状撲糸文が施されている。49は細い沈線で網目状の文様が描かれている。50-a~dは口縁が外反する大型深鉢形土器と思われる。口唇の断面は角形で指頭によると思われる圧痕がつけられている。文様は断片的にしかわからないが、幅の広い貼付帶で縦に蛇行する文様や円形の区画文などが細い沈線で縁取りがされている。沈線を施文後磨かれているところもある。内面も丁寧に磨かれている。胎土には小砂利が多く器面はザラザラする。黄橙色を呈する。

盛土2類 (図III-109-1・2、-111・112-51~67)

櫛状工具で文様を描き太い沈線で縁取りするもの、貼付帶で文様が描かれるもの、無文地に太い沈線で文様を描く深鉢形土器などがある。頸部のくびれの強いものが多い。波状口縁のものでは隆起部

横走縄文

太い沈線

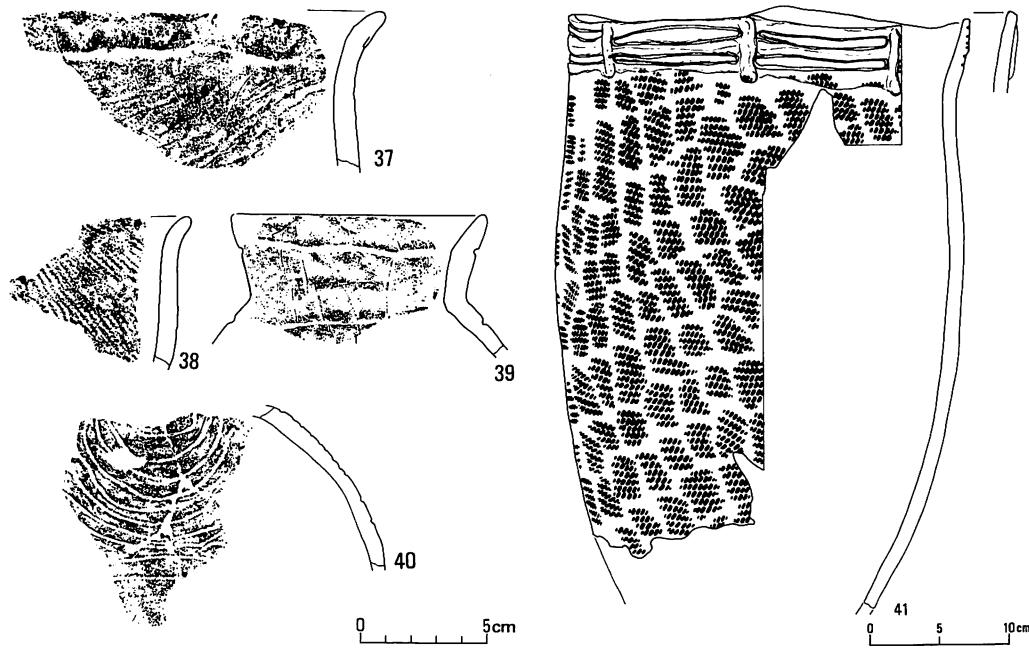
細い沈線

口縁の刻み目

指頭の圧痕

3本単位の沈線

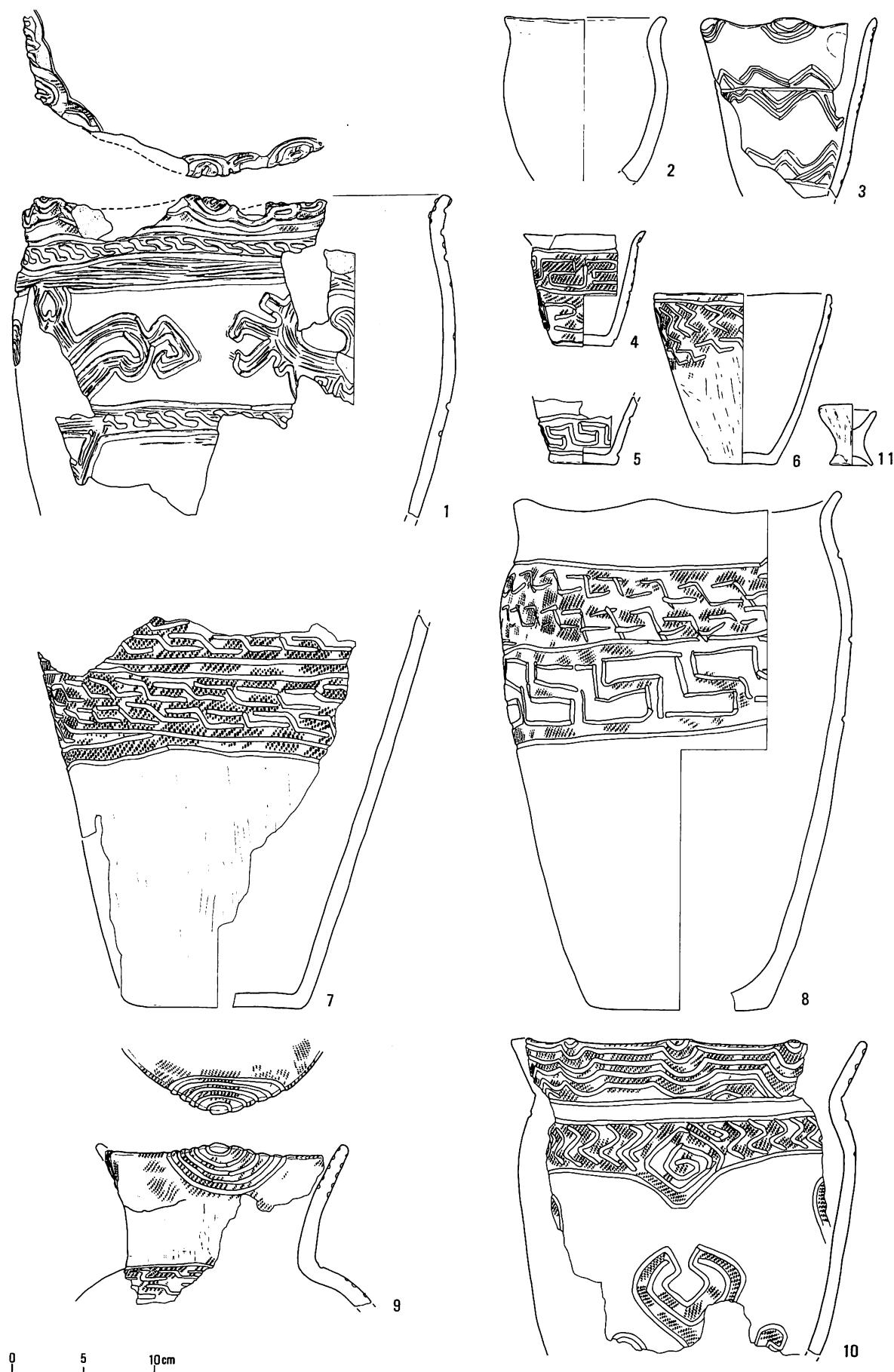
網目状撲糸文



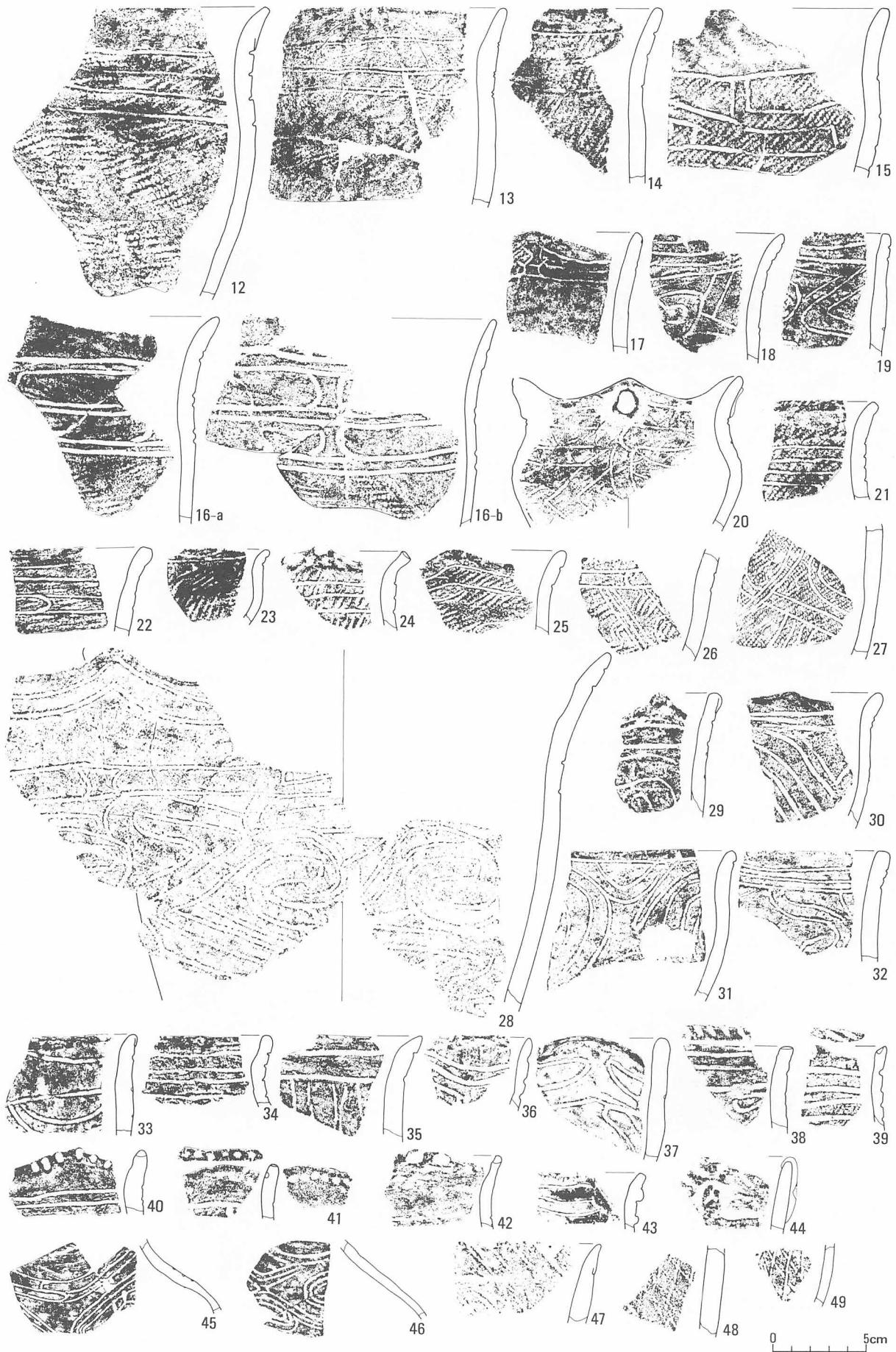
図III-108 包含層出土のIV群A類土器（2）集中区I

の内外面に貼付帯を弧状にめぐらすものがある。折り返し口縁のものが多い。

- 櫛状工具** 1・51～56は櫛状工具で文様を描き、それを太い沈線で縁取る文様が施されている。口縁部に貼付帯で文様がつけられているもの（54～57）が多い。1は口縁が緩やかな波状をなす大型深鉢形土器。頸部がくびれて胴部が張り出す。口縁は外反し隆起部を中心に内外面にわたって貼付帯で弧状の文様が施されている。太い沈線で縁取りされ、その部分にのみ縄文が施されている。体部の文様は上半部に限られる。櫛状工具により幅狭く帯状に条線文を施し上下を区画しているが、山形に張り出すところもある。この部分に間のびした「乙」字文を横環させ太い沈線で縁取りしている。区画された無文地には同様の手法で「カニのハサミ」状文様、弁状文、渦巻文を向い合せ、上下に組み合せた文様が施されている。器面には炭化物が付着し茶褐色を呈する。2は無文の小型深鉢形土器。胴が張り出し頸部がくびれている。内外面ともに磨かれている。胎土には小砂利が多く暗黄褐色を呈する。口縁部内面には炭化物が付着する。51は大型の深鉢形土器。折り返し口縁である。52・53は小型の鉢形土器。53の口縁は尖り気味で、体部には条線で格子稿を描き沈線で四角に縁取る文様が描かれている。
- 縁取り** 54～57は口縁の隆起部に貼付帯で弧状の文様が描かれている。54は胴下半が欠損している。頸部のくびれが強く口縁が外反する大型深鉢形土器。折り返し口縁で山形隆起部を中心に貼付帯で器内外面に弧状の文様を描き、太い沈線で縁取りしている。指頭によると思われる圧痕がつけられている。頸部と胴下半にそれぞれめぐらされた太い沈線で区画された中に、条線文を縁取る手法で区画文が描かれている。胎土に小砂利が多く灰褐色を呈する。55は折り返し口縁の下位に太い沈線が1条めぐっている。貼付帯が施された部分にのみ縄文が施されている。胎土に小砂利が多く灰白色を呈する。57は口縁の内側にめぐらされた貼付带上にだけ縄文が施されている。58・59は器面に縄文が施され、貼付帯による文様が描かれている。58は壺形土器かもしれない。内外面に赤色顔料が塗られている。条線による弧状の文様もつけられている。59は爪形の刺突文が部分的につけられている。62-a～cは条線で描かれた部分に、円形の刺突文が施されている。61は波状口縁をなす中型の深鉢形土器。器面調整は非常に難で胎土には小砂利が多い。文様は無文地に沈線で区画され、上段には崩れた「乙」字文、下段には鋸歯状文を2条横位に展開させている。63の口唇は角形である。無文地に櫛状工具で難に文
- 折り返し口縁**
- 貼付帯**
- 壺形土器**
- 刺突文**



図III-109 包含層出土のIV群A類土器（1）集中区II



図III-110 包含層出土のIV群A類土器（2）集中区II



図III-111 包含層出土のIV群A類土器（3）集中区II



図III-112 包含層出土のIV群A類土器（4）集中区II

様が描かれている。64は口縁が内傾するもので、無節の斜行縩文地に沈線が口縁部、胴部にそれぞれ2条ずつ施されている。65・66は器面に縩文のみが施されているもの。66は平縁の深鉢形土器。内面から口唇上にかけて磨かれている。器面にはLR原体による斜行気味の縩文が施されている。口縁部は磨きがかけられ、幅の狭い無文帯が形成されている。胴上半に半截竹管状工具で浅い蛇行する沈線文が不規則に描かれているが、器面を一周しない。器面には炭化物が多量に付着する。焼成は良く黒褐色を呈する。67-a・bは非常に焼成の良い薄手の精製鉢形土器である。波状口縁をなすかと思われる。器面には漆のようなものが塗られている。内外面ともに非常に丁寧に磨かれ光沢がある。器面は茶褐色を呈する。内面は黄橙色である。磨消縩文は太い沈線で縁取られている。縩文帯が狭いために沈線文が浮きでて見える。縩文は非常に細い原体によるものである。隆起部に対応して円形あるいは「8」の字と思われる文様が沈線で描かれている。

精製土器

「8」の字の文様

盛土3類 (図III-109-3~5、-112-68~77)

縩文地に沈線で文様が描かれるもの、無文地に沈線で文様が描かれるもの、磨消縩文が施されるものがある。頸部がくびれ胴部がやや張り出す深鉢形土器が多い。

3・5・68・69・71・72・75は無文地に沈線で文様が描かれるもの。3は波状口縁をなす小型の深鉢形土器。口縁の山形隆起部には弧状の文様が描かれている。胴上半部と底部付近にそれぞれ1条沈線が引かれ、不揃いな鋸歯状文が上下に配されている。内外面に多量の炭化物が付着し黒褐色を呈する。5は小型の深鉢形土器。胴上半は欠損している。破片は輪積みの位置で割れていた。太い沈線で区画された中に「雷文」を描いている。内外面に炭化物が付着し黒褐色を呈する。68は口唇が尖があり気味である。胴上半部に、2条の沈線で区画された中に波状文が描かれている。69には大柄な「雷文」が描かれている。71には沈線で区画された中に縦に蛇行する文様を横環させている。72は波状口縁にそって4条沈線をめぐらしている。75は波状口縁をなす大型の深鉢形土器。胴部がやや強く張り出し口縁が外反する器形のもの。頸部には太い沈線が引かれ無文帯を形成している。胴部中央と胴下間に2条ずつ並列して沈線が引かれ、2段の文様帯が区画されている。その中に大柄な雷文が描かれている。焼成は良く器面には多量の炭化物が付着している。内面は黄橙色を呈する。4・70・73・76は縩文地に沈線で文様が描かれるもの。4は小型の深鉢形土器。折り返し口縁の名残りがある。文様は器面全体に施されており、沈線で区画された上下に大柄な雷文が描かれている。胎土に小砂利が多く、内面に炭化物が付着する。70は平縁の大型深鉢形土器。口唇はやや丸味を帯びた角形で、磨かれている。頸部に1条沈線が引かれ、口縁部には無文帯が形成されている。文様は胴下半部までに限られ、太く雑な沈線で連続する弧線文や入組文的文様が描かれている。下半部は文様施文後磨かれている。内外面に多量に炭化物が付着し黒褐色を呈する。73・76は口縁が比較的強く外反する。44・47は磨消縩文により文様が描かれている。74は口縁が強く外反する深鉢形土器と思われるもの。口縁部には比較的幅広の無文帯が形成されている。磨消縩文による文様に加えて沈線による「乙」字文が横位に2段施されている。

沈線文

雷文

折り返し口縁

盛土4類 (図III-109-6~9、-113-78~86)

口縁部が比較的幅広となり口唇が角形になるものが多い。口縁部に無文帯が形成されるもの、縩文地に沈線で鋸歯状文が描かれるものがある。体部の文様は磨消縩文によるもの、縩文地に沈線で文様を描くものがある。

幅広の口縁部

8・78~80・83・85・86は体部に「乙」字文、「カニのハサミ」状文様などの磨消縩文が施される大型の深鉢形土器である。8は緩やかな波状口縁をなす大型深鉢土器、頸部がくびれて胴上半がやや張り出す。5箇所に山形隆起部をもつ。頸部に1条沈線がひかれて口縁部に無文帯を形成している。胴

磨消縩文



図III-113 包含層出土のIV群A類土器（5）集中区II

部の文様は上半部に限られ、2条の沈線で区画された上段には縄文地に沈線で雑な「乙」字文を2条横環させている。下段には磨消縄文で大柄な「乙」字文を描いている。器面は文様を施文後に磨かれている。胴上半には炭化物が付着する。焼成は良く茶褐色を呈する。78・85は口縁部にも文様がつけられ、78は口縁部が強く外反する。口唇の断面は角形である。口縁部には縄文地に太い沈線で鋸歯状文が描かれている。胎土に小砂利が多く灰黄褐色を呈する。85は縁部の内外面に沈線で連続する弧線文が描かれている。内側は文様の施されているところにのみ縄文が施されている。79・80は口縁部に幅の広い無文帯が設けられている。79の口唇の断面は角形である。口縁下に沈線で区画された縄文帯が設けられ、沈線で鋸歯状文が描かれている。内外面に炭化物が付着する。80は体部には「カニのハサミ」状文様と硬化した渦巻文が描かれている。口縁下に沈線による「く」の字の文様が縁飾り的に施されている。焼成は良く、内面は丁寧に磨かれ赤褐色を呈する。胴部に炭化物が付着する。83は底部付近の破片。入組文が描かれている。

鋸歯状文
弧線文
縁飾り

6・7・81・84は縄文地に沈線で文様が描かれている。6は平縁の中型深鉢形土器。口唇は角形で磨かれている。文様は胴部上半に限られる。口縁部に沈線が1条めぐっている。胴上半に縄文を施し、縦に蛇行する沈線と「乙」字文を横環させている。焼成は良く胎土には小砂利が多く混じる。内外面に炭化物が付着する。7は大型の深鉢形土器。胴上半から上は欠損している。底部から胴部にかけて直線的に立ち上がる器形のもの。胴部には2条一組の沈線で区画された縄文帯が設けられ、文様はその中に間のびした「乙」字文を2列横環させている。胴下半から底部にかけては文様文後磨かれている。焼成は非常に良く、胎土には小砂利が混じる。文様帯の部分は黒褐色、底部は黄橙色を呈する。81は灰白色を呈する。雷文が施されている。84は沈線で区画された口縁部の内外面に波状の文様が描きその部分にのみ縄文を施している。

連続する弧線文

9・86は壺形土器、9は4箇所の山形隆起部をもつ。口唇は角形で縄文が施されている。隆起部の内外面には沈線で弧状の文様を描き、その部分にのみ縄文が施されている。頸部はややくびれ1条太い沈線がひかれている。体部には縄文地に大柄な「乙」字文様を何段か横環させているようである。内外面ともに丁寧に磨かれ灰白色を呈する。盛土3類かもしれない。86は頸部が強くくびれる。口縁部は無文で内側にのみ沈線で連続する弧線が施され、その部分にのみ縄文が施されている。体部には磨消縄文により区画文が描かれている。胎土には小砂利が多く茶褐色を呈する。

盛土5類(図III-109-10、-113・114-87~107)

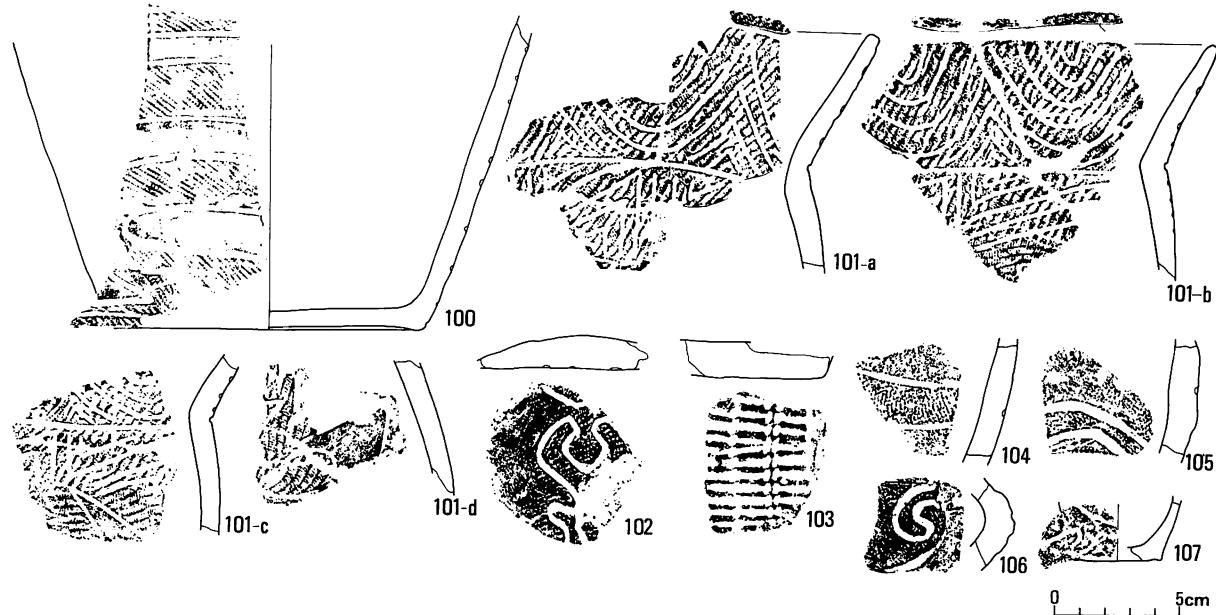
鉢形土器では口縁が直線的に開くもの、口唇の断面が角形のものが多い。口縁部は幅広で頸部には幅の狭い無文帯が形成され、沈線により文様が描かれるものがある。体部には縄文地に沈線で文様が描かれるもの、磨消縄文のものがある。

頸部に無文帯

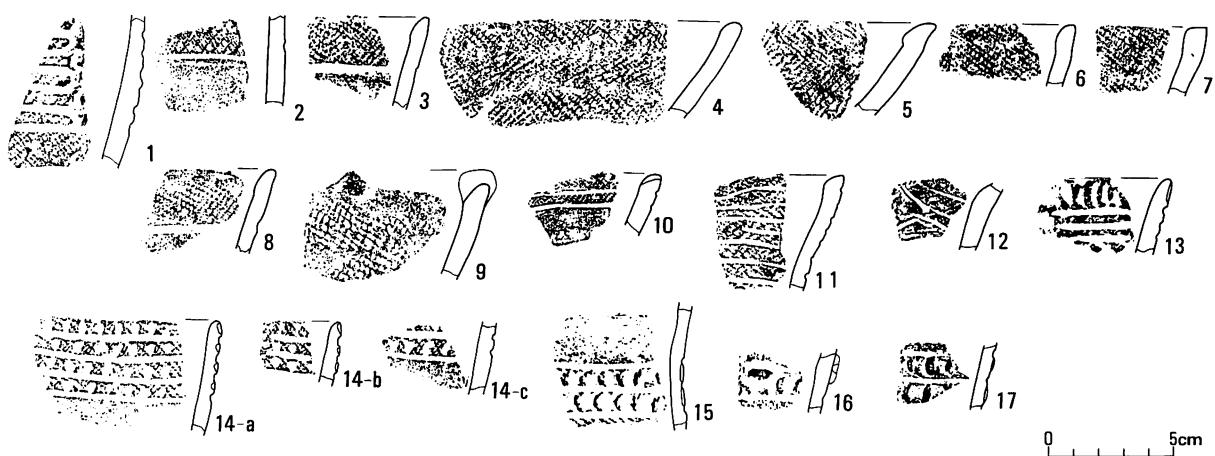
10・87~90は頸部に無文帯をもつ鉢形土器。口縁部には縄文地に連続する弧線、鋸歯状文、波状文を描くものがある。体部には磨消縄文により文様が描かれている。10は緩やかな波状口縁の大型深鉢形土器。胴部上半でやや張り出し頸部でくびれる器形のもの。口唇は角形で縄文が施されている。口縁部の隆起部に対応する位置で弧線を描く沈線が4条施されている。胴部には上下で向きを変えた「カニのハサミ」状文様が入り組む形で描かれている。胴上半の縄文帯には渦巻文と縦に蛇行する沈線文が施されている。胎土に小砂利が多くボロボロと崩れやすい。内外面、特に内面に多量に炭化物が付着し暗黄褐色を呈する。90は焼成が良く黒褐色を呈する土器。91・92・94~97は口縁部の破片。波状文や弧線文、鋸歯状文、渦巻文が描かれている。93-a・b、98~101-a~dは磨消縄文で文様が描かれている。93-a・bは口縁部の文様帯が区画されていないものである。100は非常に焼成が良い精製深鉢形土器である。底部はわずかにあげ底気味である。内外面ともに丁寧に磨かれ灰黄褐色を呈す

角形の口唇

精製土器



図III-114 包含層出土のIV群A類土器（6）集中区II



図III-115 IV群B・C類土器

0段多条の
原体

る。101-a～dは同一個体の破片。口縁が直線的に開く大型深鉢形土器。口縁部には0段多条のLR原体による斜行縄文地に細い沈線で連続する弧状の文様を描き、その間に山形の沈線を入り組ませている。体部には磨消縄文による文様に加えて沈線による鋸歯状文が描かれている。盛土5類土器の中でも比較的新しい段階のものかと思われる。

オオバコ回
転文

11は盃形のもの。内面は磨かれている。胎土には小砂利が多く黄褐色を呈する。102・103は底面に磨消縄文によるカニのハサミ状文様、簾状の圧痕が施されている。104・105はオオバコ回転文による磨消縄文風の文様が施されている。106は把手部分、107はミニチュア土器かと思われる。

註

1) 北海道埋蔵文化財センター（1986）『北埋調報33 建川1・新道4遺跡』

IV群B類・C類土器（図III-115-1～17）

1はIV群B類の手稻式、2～20はIV群C類に相当する。2～12は堂林式に相当するものである。4・手稻式
 5・9には羽状縄文が施されている。9は口縁部に突起がつけられている。10～12は沈線が施されている。10は横走する平行沈線が施されている。13～17は湯の里3式に相当するもの。13は口縁部に横走する平行沈線と爪形文が施されている。14 a～cは同一個体である。縄文地に横走する沈線が4条施され、沈線間には円形の刺突文が施されている。15～17は沈線で区画された間に、片側に粘土の盛りあがりがみられる爪形文が施されている。湯の里3式
爪形文

V群土器（図III-116～119-1～190、-120、図版31-3～6、32-1・2、41～44）

G地区からは札苅II群から尾白内I群に相当する深鉢、鉢、浅鉢、壺形土器が出土している。これらを1～6群に細分し各群の特徴をみるとこととする。

1群 札苅II群に相当するもの。

2群 札苅II群のうち函館市高丘町遺跡^{注1)}出土資料にほぼ相当するもの。高丘町遺跡

3群 聖山Iに相当するもの。

4群 聖山IIに相当するもの。

5群 湯の里6遺跡出土資料に相当するもの。

6群 尾白内I群に相当するもの。

これら各群の深鉢・鉢・浅鉢形土器については口縁部の文様要素、器形によりa～e類に分類した。

a類 頸部の無文帯に数条の沈線が施されるもの。

b類 頸部に無文帯を設けるもので、肩部に沈線が数条施されるもの。

c類 縄文地の口縁部に沈線が施されるもの。

d類 縄文だけのもの。

e類 無文のもの。

1群（図III-117-20～25）

深鉢形土器（20～23）

a類（20～22）

いずれも頸部がくびれ比較的肩が張るもの。頸部には細い沈線が3条施され上位の沈線には刺突文がつけられている。口縁は指頭の押捺により小波状になっている。20・22はLR原体による縦行縄文、21はRL原体による斜行縄文が施されており、内面に多量に炭化物が付着している。刺突文

d類（23） 口縁部に2個一対になると思われる半円形の突起がある。口縁には斜行縄文地に細い沈線が1条引かれている。

鉢形土器（24・25）

a類（24・25）

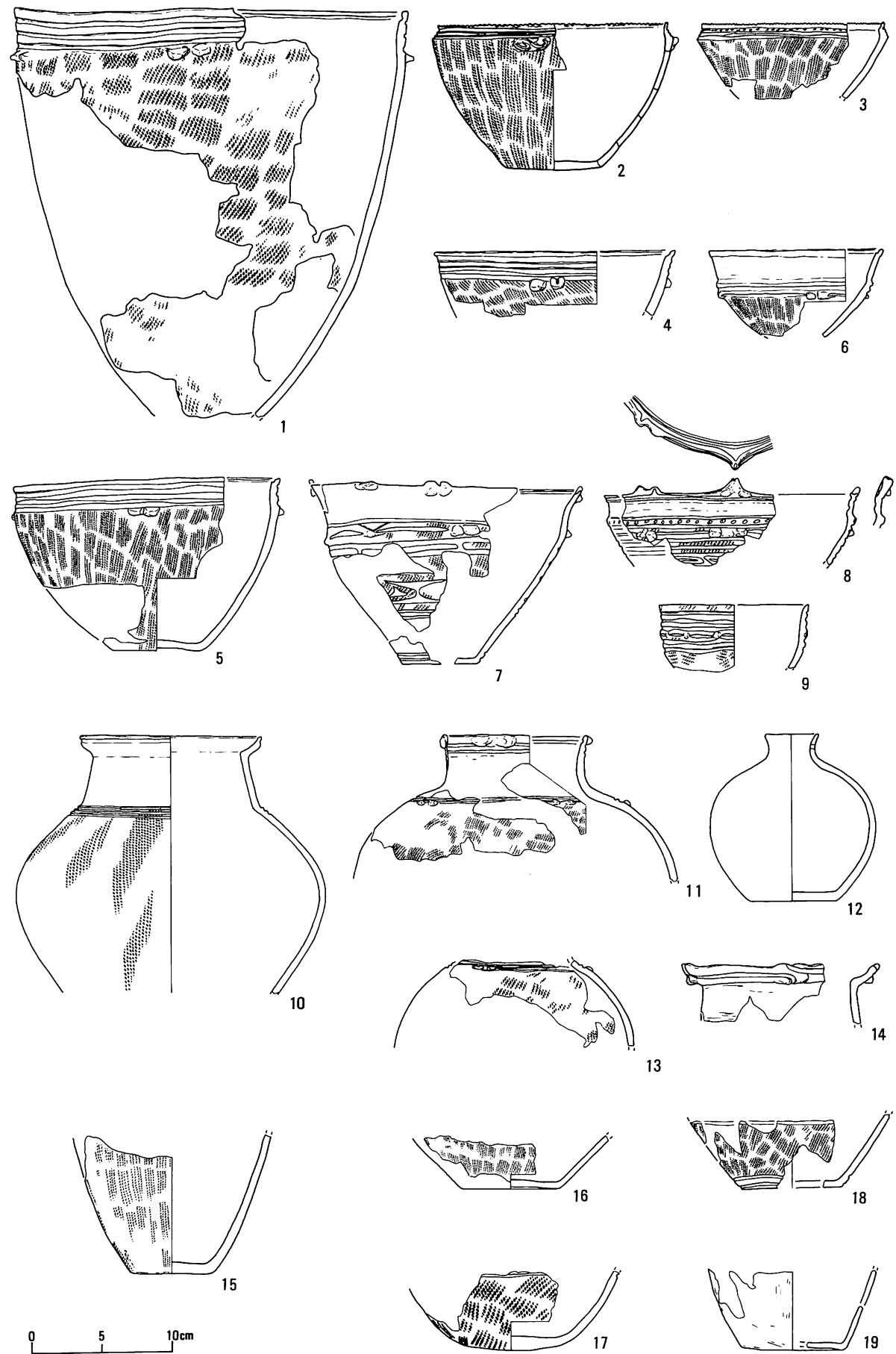
頸部の幅は狭く肩が強く張り出すもの。24は口唇に棒状工具で斜め方向に刻み目がつけられ小波状になっている。体部はLR原体による縦行縄文。25は内壁も逆「く」の字に強くくびれる。口縁は2個一対になると思われる小波状を呈する。口縁内側にも1条細い沈線がひかれている。頸部の真中の沈線に刺突文が施されている。器面調整は丁寧で、体部にはLR原体による斜行縄文が施されている。刺突文
棒状工具で
刻み目

2群（図III-116-2～6・10・13・15・16、-117・118-26～129）

深鉢形土器（15・26～55）

a類（26～40）

頸部にくびれをもち肩が丸味を帯びる器形のもので、口唇に細かい刻み目をつけるものや、頸部の



図III-116 包含層出土のV群土器（1）

沈線に刺突文を加えるものがある。

a類-1 (26・27)

頸部の幅は狭く細い沈線がひかれ、肩は比較的強く張り出す。いずれも口唇に細かい刻み目が施されている。体部にはLR原体による縦行縄文が施されている。26は上位の沈線に刺突文がめぐる。細い刻み目

a類-2 (28・29)

肩部があまり張り出さない器形のもの。いずれもLR原体による縦行縄文が施されている。口唇の内側が段をなすかのように成形されている。29は沈線の下位に2個一対の瘤状突起がつけられている。瘤状突起

a類-3 (30~33)

頸部の幅がやや広く肩が張らず、肩部から胴部にかけて丸味を帯びる器形のものである。頸部の沈線は細く比較的間隔をあけて施されている。30は内外面に炭化物が付着する。胎土には小砂利が多く内面にはヘラ削りの調整痕が残る。32は口唇に刻み目が施されている。33は上位の沈線に刺突文がつけられている。沈線下位の瘤状突起は貼り付けた粘土を爪状のもので刻んでいる。頸部の沈線

a類-4 (34~40)

肩はほとんど張らないか幾分丸味を帯びる器形のものである。頸部は幅広くなり体部との境目は段がつくような感じになるものもある。沈線はやや間隔をあけて施される。体部にはLR原体による縦行縄文が施されている。34-a・bは大型のもの、体部から口縁にかけてはやや薄くなっている。沈線の下位には2個一対になる低い瘤状突起がつけられ、他の部分は磨かれている。体部は黄橙色を呈し内面は磨かれている。炭化物が付着する。35は沈線施文後に磨がかれている。沈線の下位に瘤状突起がつけられている。36は内外面に多量に炭化物が付着する。37も大型のもの。体部には比較的太い原体により縄文が粗くつけられている。口唇の内側にも浅い沈線が1条施されている。内面は磨きがかけられている。38は幅広の沈線が重ねられている。内面には多量の炭化物が付着する。

b類 (41・42)

b類-1 (41) 肩が強く張り出し、内壁も逆「く」の字にくびれる器形のもの。上位の沈線に刺突文がつけられている。胎土は砂質で内面には炭化物が付着する。

b類-2 (42)

大型のもの。頸部の無文帯は幅が談く丁寧に磨かれている。口縁に2個一対のB状突起がつけられ、そこに三叉文に組合された沈線が配されている。胎土は茶褐色で内面には炭化物が付着している。B状突起

c類 (43~55)

c類-1 (43~45)

いずれも口縁の狭い範囲に細い沈線を2・3条めぐらし、LR原体による縦行縄文が施されるものである。43は口縁がやや内傾する。44・45には口唇に指頭でつけられたと思われる圧痕がある。指頭の圧痕

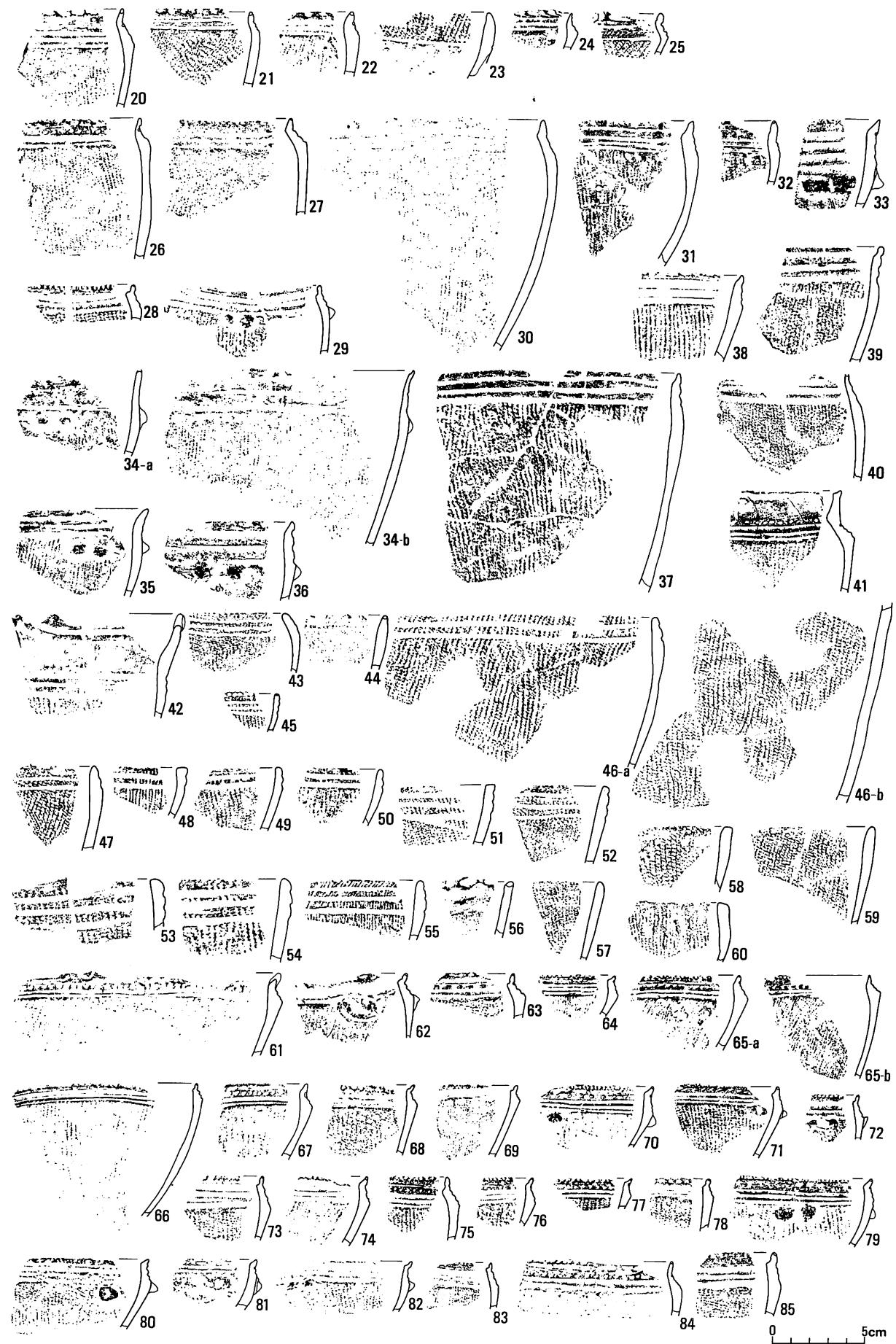
c類-2 (46-a・b・47)

比較的狭い範囲に太く浅い沈線が施されているもの。口縁はやや膨らみをもっている。46-a・bは大型のもの。口唇の断面が丸味を帯びた角形で内傾する。焼成は非常に良く茶褐色を呈する。内面は丁寧に磨きがかけられている。

c類-3 (48~52)

太く浅い沈線が口縁の狭い範囲に施されるもの。口縁はc類-2のようには肥厚させない。口唇の断面は角形に近く、体部にはLR原体による細かい縦行縄文が浅く施されている。48は灰白色を呈する土器で口唇上が磨かれ角形になるものである。

c類-4 (53~55)



図III-117 包含層出土のV群土器（2）

口縁部に太く浅い沈線が間隔をあけてやや広い範囲につけられるものである。口唇は丸味を帯びる。 浅い沈線 53・54 は LR 原体による縦行縄文が粗く施されている。53 にはヘラ削りの痕跡が残る。55 は口唇には斜行縄文が施されている。

d 類 (15・56~60)

57 は口唇直下の極狭い範囲が軽く磨がかれている。58・60 は口唇が角形に近く磨かれている。59 は口唇が膨らみをもつものである。15 は深鉢形になるかと思われる底部の破片。縦行縄文が施されている。一応ここに入れておく。

e 類 (56) 無文のもの。小型で器壁は薄い。口縁に指頭で圧痕がつけられている。

鉢形土器 (2~6・16・61~117)

a 類 (2~5・61~103)

a 類-1 (2・3・61~78)

頸部の幅が狭く肩が強く張り出す器形のもの。沈線は比較的細い。口唇には細かい刻み目、指頭による圧痕がつけられるもの、頸部の上位の沈線に刺突文をめぐらすものが多い。沈線の下位に突起をつけるものもある。体部には LR 原体による縦行縄文が施されるものが主で、斜行縄文のものもある。 細い沈線

2 は中型の鉢形土器。底面は磨かれ丸味を帯びている。口縁は指頭によると思われる圧痕が施されて小波状になっている。沈線の下位には粘土瘤を貼りつけ太い沈線で逆「S」字状に刻みを入れることで 2 個一対の突起を形成している。比較的太い LR 原体による縦行縄文が突起を貼りつけた後に施文されている。内外面ともに炭化物が付着し、部分的に黒褐色を呈する。底部の内面は赤褐色を呈する。ヘラ削りの痕跡が残る。3 は小型のもの。底部は欠損している。口唇は爪で刻まれたと思われる小波状になっている。沈線の上位に刺突文がめぐっている。体部には LR 原体による細かい縄文が斜行気味に施されている。肩の部分に粘土の剥れた痕跡がある。突起をつけていたと思われる。炭化物が大量に付着する。ヘラ削りの痕跡が残る。61 は口縁に 2 個一対になる突起がつけられている。内外面には炭化物が付着する。62・72 は 2 と同じ手法で 2 個一対の突起を形成している。70・71 は沈線施文後に瘤状突起がつけられている。71 の突起には刻み目がある。62・63 には口唇に指頭によると思われる圧痕がある。いずれも内外面に炭化物が付着する。77 には頸部の沈線に横方向に押しひきした刺突文がつけられている。 「S」字状の刻み 爪で刻む

a 類-2 (79~95)

頸部の幅は a 類-1 よりも幅広く、比較的細い沈線が施されている。肩がほとんど張り出さず幾分丸味を帯びるもの、口唇に細かい刻み目を施すもの、頸部の上位の沈線に刺突文が施されるものが多い。体部には LR 原体による縦行縄文がつけられている。

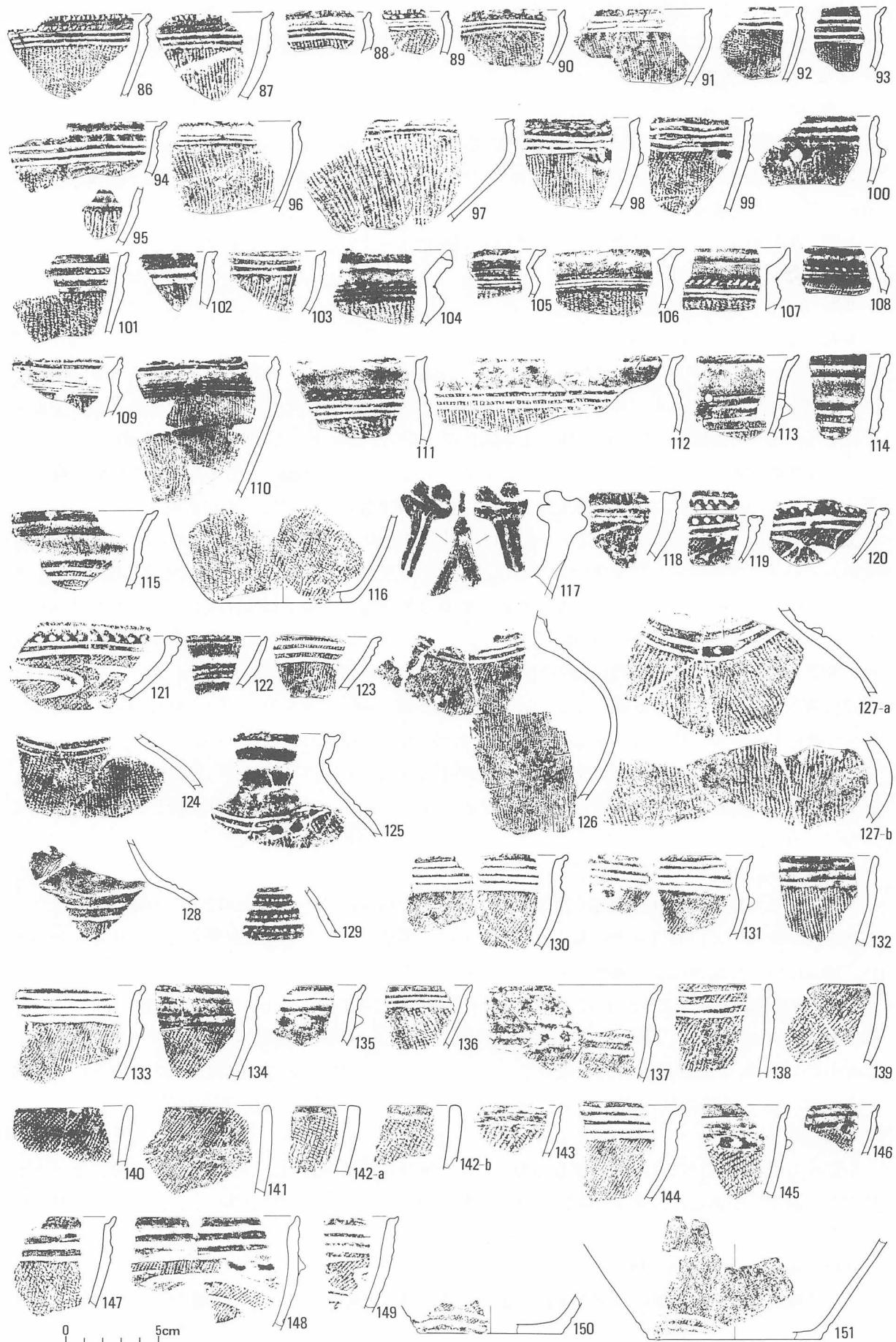
79・80 は沈線の下位に 2 個一対の突起がつけられている。79 は突起を貼り付けた後磨がかれている。80 の突起には細い沈線で三角形に刻みが入れられている。91~94 は体部から口縁にかけて器壁が薄くなるものである。91・93 は沈線施文後磨きがかけられている。93 は頸部の沈線が他のものと比べて細いもので、94 と同様にやや間隔をあけて施されている。95 は体部に条痕が施されている。

a 類-3 (96・97)

胴部から肩部にかけて丸味を帯びる器形のもの。96 は口唇に刻み目がつけられる。内面にはヘラ削りによる調整痕がある。内外面に炭化物が付着する。97 は胎土に小砂利が多い。沈線施文後に磨かれている。

a 類-4 (4・5・98~103)

頸部の幅は広くなり沈線は間隔をあけて施される。肩部は張り出さず丸味を帯びるか、胴部から口



図III-118 包含層出土のV群土器（3）

縁にかけて真すぐに立ち上がる器形のものである。

4は中型のもの。胴部から口縁にかけてほぼ真すぐに立ち上がる。頸部に幅広の沈線を浅く4条施している。沈線の下位には2個一対の突起がつけられている。突起の1個には爪状のものでの刻み目がある。体部にはRL原体による斜行縄文が施されている。焼成が非常に良く茶褐色を呈する。内面は非常に丁寧に磨かれている。炭化物が付着する。5は中型のもの。底面はわずかにあげ底気味で磨かれている。器面にはLR原体による細かい縦行縄文が施されている。沈線の下位には2個一対の突起がつけられ、その間は爪状のもので刻まれている。口唇内側にも細い沈線が1条施されている。内面は磨かれている。口縁部と内面には多量に炭化物が付着する。98は頸部の沈線に斜めの刺突文が加えられている。一番下位の沈線間には2個一対になる瘤状突起がつけられているが、沈線は突起を貼付後その両側に配されている。99は体部にはLR原体による縄文が不規則に施されている。100は内外面に多量に炭化物が付着する。口唇内側にも1条細い沈線が施されている。

幅広の沈線

b類 (6・104~110)

b類-1 (104~110)

頸部の無文帯は狭く肩部が強く張り出すもので、肩部には細い沈線が数条施され、上位の沈線には刺突文が加えられているものがある。内側も逆「く」の字にくびれる器形のものである。いずれも体部にはLR原体による縦行縄文が施されている。

104は口縁に2個一対になると思われる突起がつけられている。頸部は沈線施文後磨がかけられ上位の沈線には押しひきの刺突文がつけられている。口唇も磨かれ浅く段状に沈線が施されている。内外面に多量に炭化物が付着する。105・106は非常に丁寧に磨かれて光沢がある。109・110は口外帯のあるもので口縁に1条沈線がひかれている。いずれも口縁に2個一対になる突起がつけられている。胎土には小砂利が多く、内面に炭化物が付着する。110は口縁の突起にそって器の内外面に沈線が配されている。108は口唇に浅い沈線が施されている。

b類-2 (111)

頸部の幅が比較的広く肩部は丸味を帯びる。頸部の沈線には刺突文が加えられている。焼成が良く茶褐色を呈する。内外面に炭化物が付着する。

b類-3 (112)

中型のもの。肩部は丸味を帯びる。LR原体による縦行縄文が肩部にまで施され、そこに間隔をあけて幅広の浅い沈線が2条施されている。焼成は良く内面にヘラ削りによる調整痕が残る。

b類-4 (6・113~117・129)

6は小型のもの。頸部の無文帯はやや幅広となり、肩部には幅の広い浅い沈線が2条施され頸部に向って段状になっている。口唇内側にも浅く1条施されている。下位の沈線は2個一体の突起がつけられた後、その左右に配されたものである。体部にはLR原体による細かい縦行縄文が施されている。内外面に多量に炭化物が付着する。113は口唇内側に浅く段状に沈線が施されている。肩部の沈線は間隔をあけて施され、上位の沈線には把手をつけていたかと思われる。体部には縦行縄文が施されている。黒褐色を呈し内外面に炭化物が付着している。115は内面は磨かれている。116は鉢形土器の底部。縦行縄文が施されている。117は鉢形土器の把手部の破片。129は台付鉢の台の部分。無文地に細い棒状工具で刺突文が施されている。一応ここに入れておくこととする。

把手・台付鉢

浅鉢・皿形土器 (118~123)

118~121はいずれも口唇を肥厚させ、口唇上と表面側の口唇に円形の刻み目を施している。口唇上には沈線も1条加えられている。器面には磨消縄文により雲形文が描かれている。120・121には表裏

雲形文

面に赤色の顔料が塗られている。121は内壁にも1条沈線が施されている。122は無文のもので、胴部から口縁部にかけて段状になる。口唇は薄手である。口縁内側には浅く1条沈線が施されている。内外面に炭化物が付着する。123はLR原体による縦行縄文地の口縁部に沈線が3条施されている。

壺形土器 (10・13・124~128)

強く張り出す胴部

肩部に細い沈線を数条めぐらせるもので、胴部は強く張り出す器形のものである。体部にはLR原体による縦行縄文が施されているものと斜行縄文のものがある。

10は大型のもの。胴部が強く張り出し、頸部が内傾し口縁が「く」の字にくびれて外反する器形のもの。体部にはLR原体による縦行縄文が粗く施されている。頸部と肩部の境目部分に細い沈線が3条めぐっている。口縁は磨かれて浅い沈線が1条施されている。口唇内側も磨かれている。胎土に小砂利が多く、内外面に炭化物が付着する。灰黄色を呈する。13は肩部から胴半ばにかけてのもので全体の器形はわからない。胴部は球形で肩部に細い沈線が3条めぐっている。沈線の下位には2個一対の突起が4箇所に施されていると思われる。体部にはLR原体による斜行縄文が粗く施されている。内面に炭化物が付着する。胎土・色調は10と非常に良く似ている。124の縄文は非常に細かい。125は肩部の下位の沈線間に瘤状突起がつけられている。頸部から口縁にかけてはやや外反気味に立ち上がる。口唇には沈線がめぐらされ突起がつけられている。胎土に小砂利が多く灰褐色を呈する。126は胴部が強く張り出し丸味がある。肩部に浅い沈線が3条めぐっている。体部には細かいLR原体による縦行縄文が施されている。内面にヘラ削りの痕跡が残る。胎土には小砂利が多い。127-a・bは肩部に太い沈線が2条施されている。沈線間に2個一対の突起がつけられている。体部には比較的太いLR原体による縦行縄文が施されている。内壁には横方向の調整痕が残る。胎土は黄橙色で器面のところどころに炭化物が付着する。128は胎土に砂が多く、内面に炭化物が付着する。129は台付鉢の台の部分無文地に細い棒状工具で刺突文が施されている。一応ここに入れておくこととする。

3群 (図III-116-11・14・17~19、-118・119-130~158)

深鉢形土器 (17~19・130~142 a・b)

a類 (130~136)

沈線を重ねる

頸部の幅は広くなり、体部との境目は段がつく状態となる。沈線は太く幅の広いものが重ねられて施される。口縁内側にも1条浅く沈線が施されるものもある。体部にはLR原体による斜行縄文のもの、縦行縄文のもの、RL原体による斜行縄文が施されるものがある。

131・133・135は沈線の下位に瘤状突起がつけられているものである。131は内面にヘラ削りの調整痕が残されている。胎土には小砂利が多くボロボロとする。133は内面は丁寧に磨かれている。134は沈線施文後磨かれているため、沈線が微かに段状に観察できるもの。内面には炭化物が付着する。

b類 (137)

頸部の無文帶は幅広く、肩部には浅い幅の広い沈線が2条施されている。体部との境目は段状となる。上位の沈線間に2個一対の瘤状突起が沈線施文前につけられている。口縁内側にも浅い沈線が1条施されている。黒褐色を呈する土器で内面には炭化物が付着する。

c類 (138)

口唇は丸味を帯びた角形で丁寧に磨かれている。体部にはLR原体による斜行縄文が浅く施され、太い沈線が3条めぐらされている。

d類 (17~19・139~142-a・b)

いずれも体部にはLR原体による斜行縄文が施されている。

139は口縁がやや内傾するもので、薄身になっている。口唇上から内面にかけて磨かれている。141

は繩文施文後器面のところどころを磨いている。142-a・bは口唇は角形で磨かれている。内面にヘラ削りの痕跡がある。17、18、19は底部。17は底面がやや丸味を帯びている。浅鉢形土器かもしれない。18は焼成が良く茶褐色を呈する。LR原体による細かい斜行繩文が施されている。底部付近は磨かれ、細い沈線が2条ひかれている。胴下半にも沈線がひかれている。19は斜行繩文を施文後磨いている。鉢形土器かもしれないが一応ここに入れておく。

鉢形土器 (143~156)

a類 (143~151)

頸部の幅は広くなり、沈線は幅広のものを重ねて施すもの、やや間隔をあけて浅く施すものがある。肩部と体部の境目は段がつく状態となる。沈線の下位には2個一対の突起をつけるものがある。体部にはLR原体による斜行繩文が施されるもの、磨消繩文により入組文が施されるものがある。

a類-1 (143)

口唇内側が角ばらず滑らかになるものである。口唇は尖り気味である。口縁に浅い沈線が3条施されている。体部にはRL原体による斜行繩文が施されている。

a類-2 (147)

口唇内側が「く」の字状にくびれるものである。頸部の沈線は間隔をあけて施されている。

a類-3 (144~146)

胴部から口縁にかけて薄くなっているものである。体部にはLR原体による斜行繩文が施されている。145・146は沈線の下位に突起がつけられている。

a類-4 (148~151)

体部に磨消繩文により雲形文が施されているものである。

雲形文

148は厚手の土器で繩文施文後沈線の下位に突起がつけられている。内外面には炭化物が付着し、内面にヘラ削りの痕跡が残る。149は内面が丁寧に磨かれている。150・151は底部の破片。

b類 (152~156)

口縁部に口外帶が形成されているものである。頸部から肩部は段状になり、肩部の沈線は間隔をあけて施される。152は口縁にB状突起がつけられ沈線はその左右にひかれている。口縁内側にも1条浅い沈線がめぐっている。灰褐色を呈する土器で丁寧に磨かれている。炭化物が付着する。153にら肩部の沈線間にB状突起をつけている。これらの土器は焼成が良く、胎土・色調が良く似ている。

浅鉢・皿形土器 (157・158)

157は口縁に幅広の沈線が極く浅く3条・内面にも2条施されている。胎土に小砂利が多く灰黄色を呈する。158は小型の底部破片。浅い沈線が施されている。

壺形土器 (11・14)

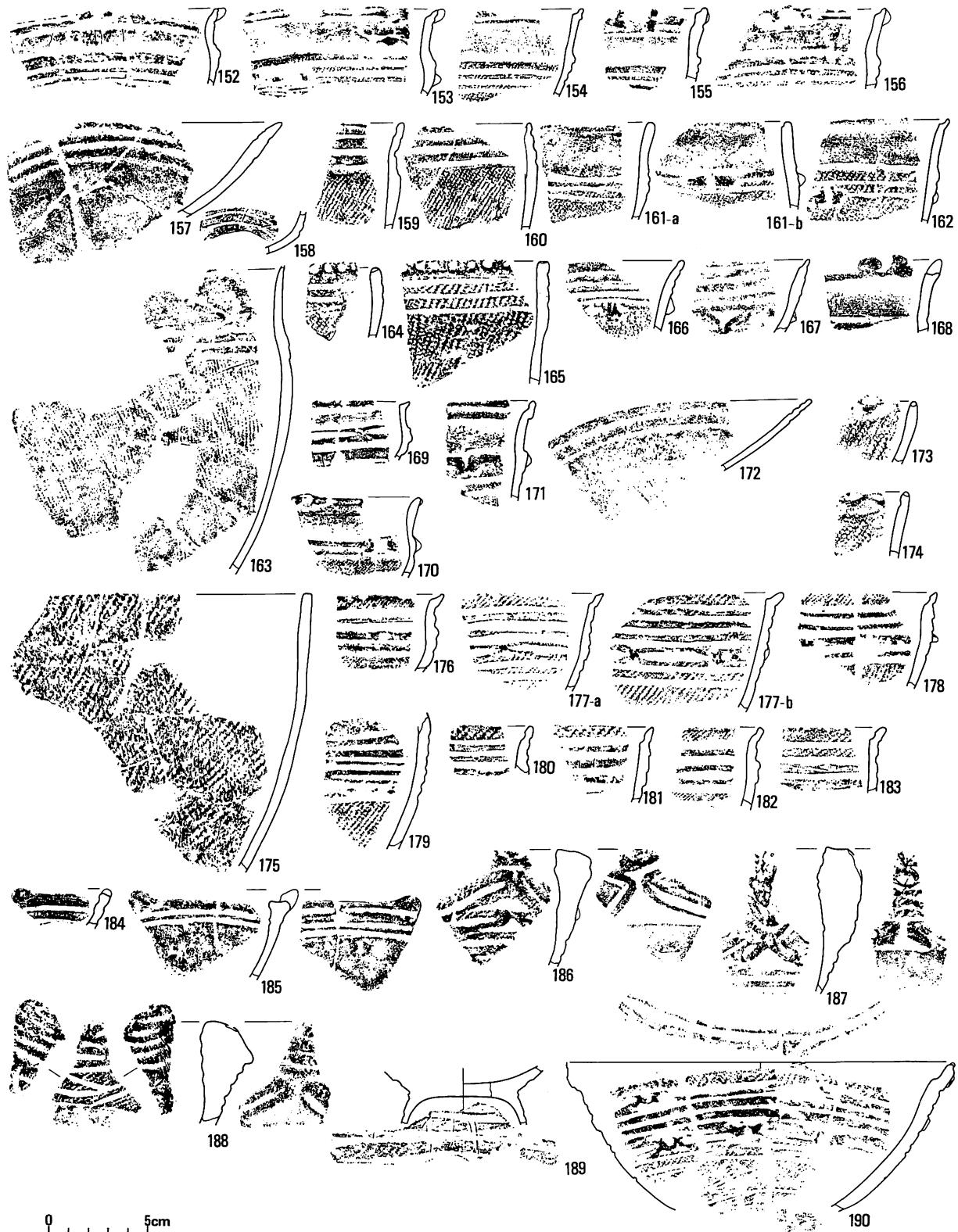
11は口縁部付近のもの。口縁にはB状突起が4箇所につけられ、浅い沈線が2条めぐっている。内側にも1条施されている。肩部には細い沈線が3条施され、その下位には2個一対の突起がつけられている。体部にはLR原体による斜行気味の繩文がつけられている。器面は丁寧に磨かれ赤褐色を呈する。焼成は非常に良い。14は灰白色を呈する土器。口縁は「く」の字にくびれB状突起が施されている。胎土に小砂利が多い。

4群 (図III-116-1・7・12、-119-159~172)

深鉢形土器 (1・159~165)

a類 (1・159・160)

頸部の幅は広く、幅広の沈線が間隔をあけて施される。体部もLR原体による斜行繩文が施される。



図III-119 包含層出土のV群土器（4）

1は大型の深鉢形土器。体部にはLR原体による斜行縄文が浅く施されている。口縁部は縄文施文後磨かれ幅広の沈線が3条間隔をあけて施されている。内面にも浅く1条施されている。沈線の下位には施文前に2個一对になる突起がつけられている。焼成は良く内面にはヘラ削りの痕跡が残る。体上半は炭化物が付着し黒褐色を、下半は黄褐色を呈する。胎土に小砂利が多い。159の頸部は「く」の字

状にくびれ、体部との境目は段状になる。口縁内側にも浅く1条沈線が施される。焼成は良く丁寧に磨かれ光沢がある。160は胎土に小砂利が多く灰黄色を呈する。

b類 (161-a・b~163)

体部にはLR原体による斜行縄文が施されている。肩部の沈線は太く間隔をあけて施され、体部との境は段状になるものがある。

161-a・bは口縁が丸味を帯びるもので、頸部には細く浅く沈線が1条つけられている。真中の沈線に2個一対の瘤状突起が沈線施文後につけられている。口縁内側にも細い沈線がひかれる。162・163は大型のもの。頸部から肩部にかけて微かに段がつく。下位の沈線にはB状突起がつけられ、その間を爪状のもので刻んでいる。163は胴部から口縁にかけて薄くなるもの。肩部の沈線間にB状突起がつけられている。体部の縄文は浅く施されており施文方向は不規則である。胎土には小砂利が多く茶褐色を呈する。

B状突起

c類 (164・165)

いずれも体部にはLR原体による斜行縄文が施されている。口唇には指頭と思われる圧痕がつけられている。胎土は橙色である。何か赤色の顔料を混ぜているのかもしれない。

赤色の顔料

164は口縁に極く浅く沈線が2条施されている。内面は磨かれている。165の縄文の原体は太く、粗く施文されている。内面には調整痕が残る。炭化物が付着する。

鉢形土器 (7・166~171)

a類 (166・167)

166は体部にLR原体による斜行縄文が粗く施されている。頸部の沈線下位にB状突起がつけられ爪で刻みがつけられている。焼成は非常に良い。167は灰黄色を呈する土器で磨滅が著しい。A状突起がつけられている。

A状突起

b類 (7・168~171)

b類-1 (168~170)

頸部から胴部にかけてが段状になり、沈線が間隔をあけて施されているもの。胎土が橙色を呈し、焼成は非常に良いものである。169は体部に縦行縄文が施されている。器面は内外面とも丁寧に磨かれている。沈線に突起がつけられている。

b類-2 (7・171)

7は中型のもの。口縁には2個一対の小さな半円形の突起がつけられている。内側には浅い沈線が1条施されている。この突起と、突起の間に対応すると思われる位置にA状突起とB状突起が交互につけられている。肩部の沈線間に沈線施文前に同様に突起がつけられている。体部はLR原体による斜行縄文を地文に、磨消縄文で工字文が描かれている。体上半は赤褐色、下半は黒褐色を呈する。内面にはヘラ削りの痕跡が残る。胎土に小砂利が多い。171は口外帯が設けられるもので頸部から胴部にかけて段状になる。肩部に粘土を貼り付けて厚みをもたせ、その部分に瘤状の突起をつけている。突起には沈線を三角形に入り組ませている。内面に炭化物が付着する。

半円形の突起

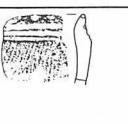
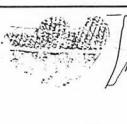
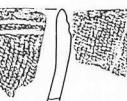
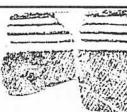
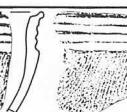
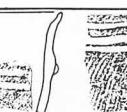
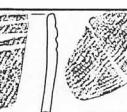
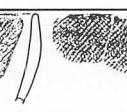
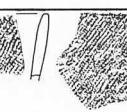
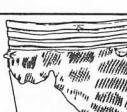
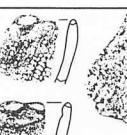
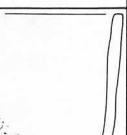
浅鉢・皿形土器 (172)

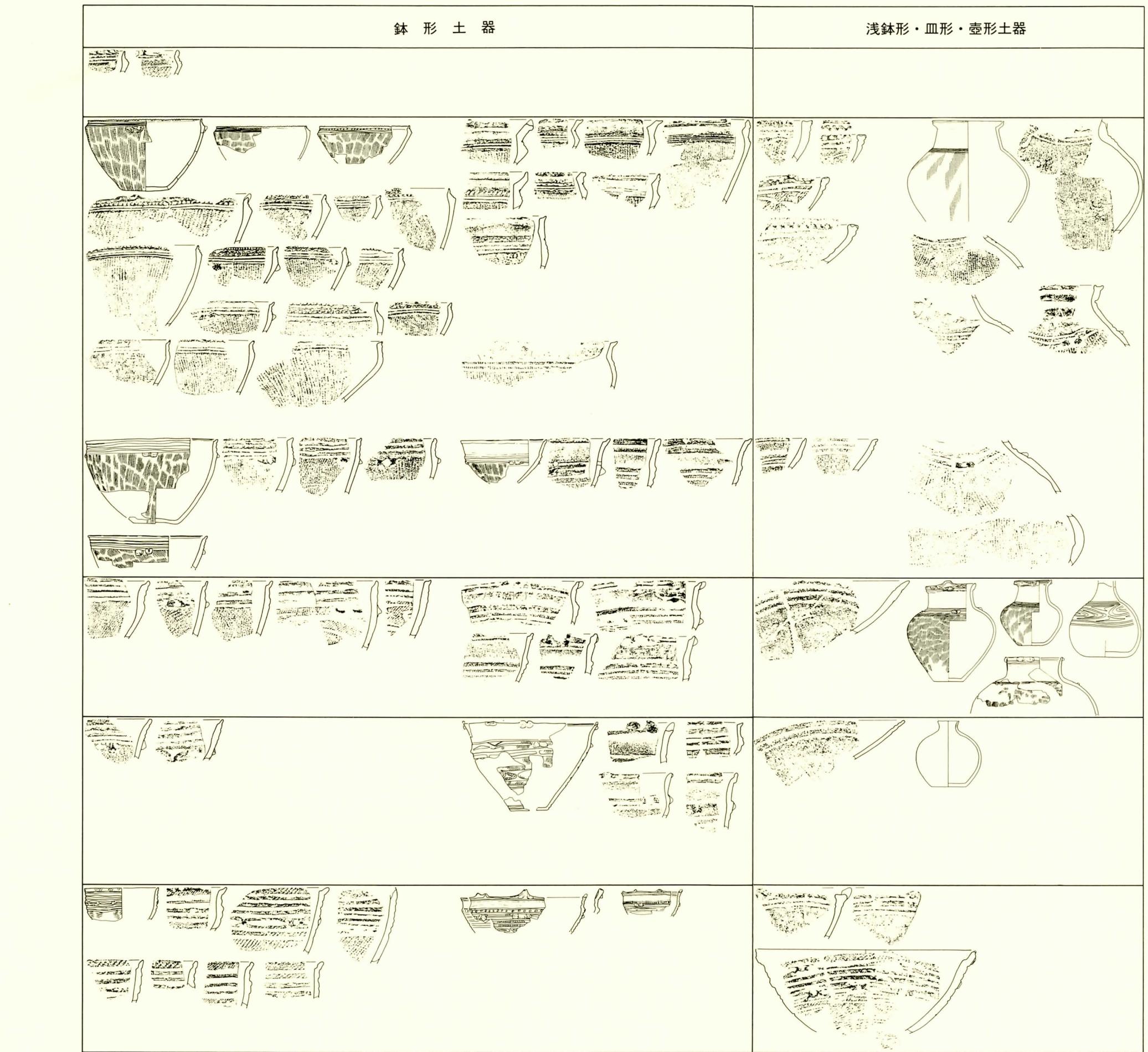
器壁は非常に薄く口縁に太く浅い沈線が2条、内側にも3条施されている。内外面とも磨かれている。胎土は164・165と同様に鮮やかな橙色で海綿骨針も混入する。炭化物が付着する。

海綿骨針

壺形土器 (12)

12は小型で無文のもの。細首のもので胴部が強く張り出し断面は球形に近い。首の部分には向い合わせに小さな穴が2個あけられている。紐のようなものを通して孔かもしれない。胎土は小砂利が多

		深鉢形土器									
1群											
2群											
群											
3群											
4群											
5・6群											



図III-120 G地区出土のV群土器

く164・165のように何か顔料を混ぜたかのように赤褐色を呈する。

顔料

5 群 (図III-116-8・9、-119-173-189)

深鉢形土器 (173-175)

d類 (173-175)

173・174は同一個体かと思われる。器面には細いLR原体による縄文が施されている。口縁には指頭の圧痕がある。175は大型の深鉢形土器である。口唇は角形で磨がかれている。器面には比較的太いLR原体による斜行縄文が粗く施文されている。内面は磨がかれている。胎土に小砂利が多く炭化物が付着する。

鉢形土器 (8・9・176-189)

a類 (9・176-183)

頸部の幅は広く沈線は間隔をあけて5-6条施され段状になるものが多い。胴部から口縁にかけてはほぼ真すぐに立ち上がる器形のものがある。体部にはLR原体による斜行縄文が施され、口縁にもつけかれている。口縁内側には沈線が1条施されている。9は小型のもの。口縁部には浅い沈線が雑に施されている。中ほどの沈線には沈線施文前に突起がつけられている。体部にはLR原体による横走気味の縄文が浅く施されている。胎土には小砂利が多く焼成はあまり良くない。内面にヘラ削りの痕跡が残る。灰褐色を呈する。177-a・b、178は頸部の沈線間に瘤状の突起がつけられている。177-a・bは内面が非常に丁寧に磨かれている。178は瘤状の突起を刻むように沈線を三角形に入り組ませている。179は黄褐色を呈し、胎土には小砂利が多い。

段状の沈線

b類 (8)

8は中型のもの。無文帶の幅は比較的狭く肩部は段状になる。口縁には山形の突起とB状突起が交互につけられているようである。口唇にやや厚みをもたせて沈線を1条ひいている。口唇直下に1条と、口縁の内側にも太い沈線が2条施され突起部では三角に入り組んでいる。肩部には棒状工具で刺突がつけられている。肩部のやや下位には沈線を施文前に2個一対の突起が、口縁の突起と対応する位置につけられている。体部には工字文が施されている。内外面に炭化物が付着し黒褐色を呈する。工字文焼成は良い。

工字文

186は突起部の破片。沈線によって文様が描かれている。内側にも突起にそって三叉文的な沈線が施されている。187・188は把手の部分。把手をめぐるように深い沈線が施されている。189は台付鉢の台の部分である。沈線で文様が描かれている。灰白色を呈する。186は炭化物が付着する。

浅鉢・皿形土器 (184・185)

185は口唇の形は受け口状で突起がつけられている。無文地に口縁部で浅い沈線が2条、内面にも2条施されている。内面は磨がかれている。胎土に小砂利が多く炭化物が付着する。

6 群 (図III-119-190)

浅鉢形土器 (190)

口縁に小さい突起がつけられている。口縁部には縄文がつけられている。頸部の無文帶には平行沈線が6・7条施され、上位の沈線と中ほどの沈線間には沈線施文前に低い突起がつけられている。口縁部の沈線は突起に沿って引かれており内面にも認められる。内面の沈線は段状になっている。体部には細いLR原体による斜行縄文地に細い沈線で大柄な山形の文様が描かれている。内面は磨がかれている。胎土は砂っぽく灰黄色を呈する。ところどころに炭化物が付着する。

(遠藤香澄)

註

1) 田原良信・前田正憲 (1982) 『高丘町遺跡発掘調査報告書』 函館市教育委員会

(2) 石器 (図III-121~129- 1~248)

石鏸 (1~89)

1~4は無茎凹基鏸であるが、3・4の基部の抉込みは浅い。5・6は無茎平基(三角)鏸。7~18は有茎凹基鏸である。このうち18はかえしの部分が二段になった独特のもので、この種のものは60年度B地区の調査でIV群A類土器に伴っており、またD地区からも1点出土している(図IV-177-16)。19~26は有茎平基、27~69は有茎凸基、70~85は尖基、86~89は円基鏸である。

ドリル (90~109)

90~100は棒状のもの。101・102はつまみ部を有するもの。103~109はつまみ状の頭部を有するが、素材である剥片の形状をほとんど変えずに機能部を作出しているものである。

ポイントもしくは両面加工のナイフ (110~120)

120は有柄のもので、このほかはすべて木葉形もしくは柳葉形を呈し、概して分厚いものが多い。

つまみ付ナイフ (121~136)

121・122は横形のもので、121は両面加工で外湾する刃部をもつ。123・124は斜形のものであるが、刃部の加工は顕著ではない。125~136は縦形のもので、125~133は周辺加工、134~136は片面加工のものである。

スクレイパー類 (137~180)

137~151はエンドスクレイパー。152~165は円形もしくは長円形を呈する両面もしくは半両面加工のもの。166~175は縦長の剥片を、178~180は横長の剥片をそれぞれ素材として周辺加工を施したもの。176・177は尖頭部をもつもの (convergent) である。

磨製石斧 (181~193)

181はのみ形を呈するもの。187は原石を磨いただけで、まだ刃部が作出されていない未成品である。189・190はペッキング、191は打欠きによる成・整形で、このほかは全体に磨きが施され、成・整形の方法は不明である。

たたき石 (194~207)

194~197は一端もしくは両端に、198・199・202は側縁に、200・201は両端と側縁に、204・205は両端と腹面に、203・206・207はほぼ全周縁にそれぞれ使用痕が認められる。

くぼみ石 (208~212)

208~210・212はくぼみの形状がほぼ円形・円錐状を呈するもので、211のそれは不定形で浅い皿状を呈するものである。

すり石 (213~231)

213~217はいわゆる北海道式石冠と称されているもの。218~220は両端に打欠きもしくはペッキングが施され一側縁をすっているもの。221~230は半円状扁平打製石器と称されているもの。231は扁平礫の側縁の一部を斜めにすっているものである。

砥石 (232~234)

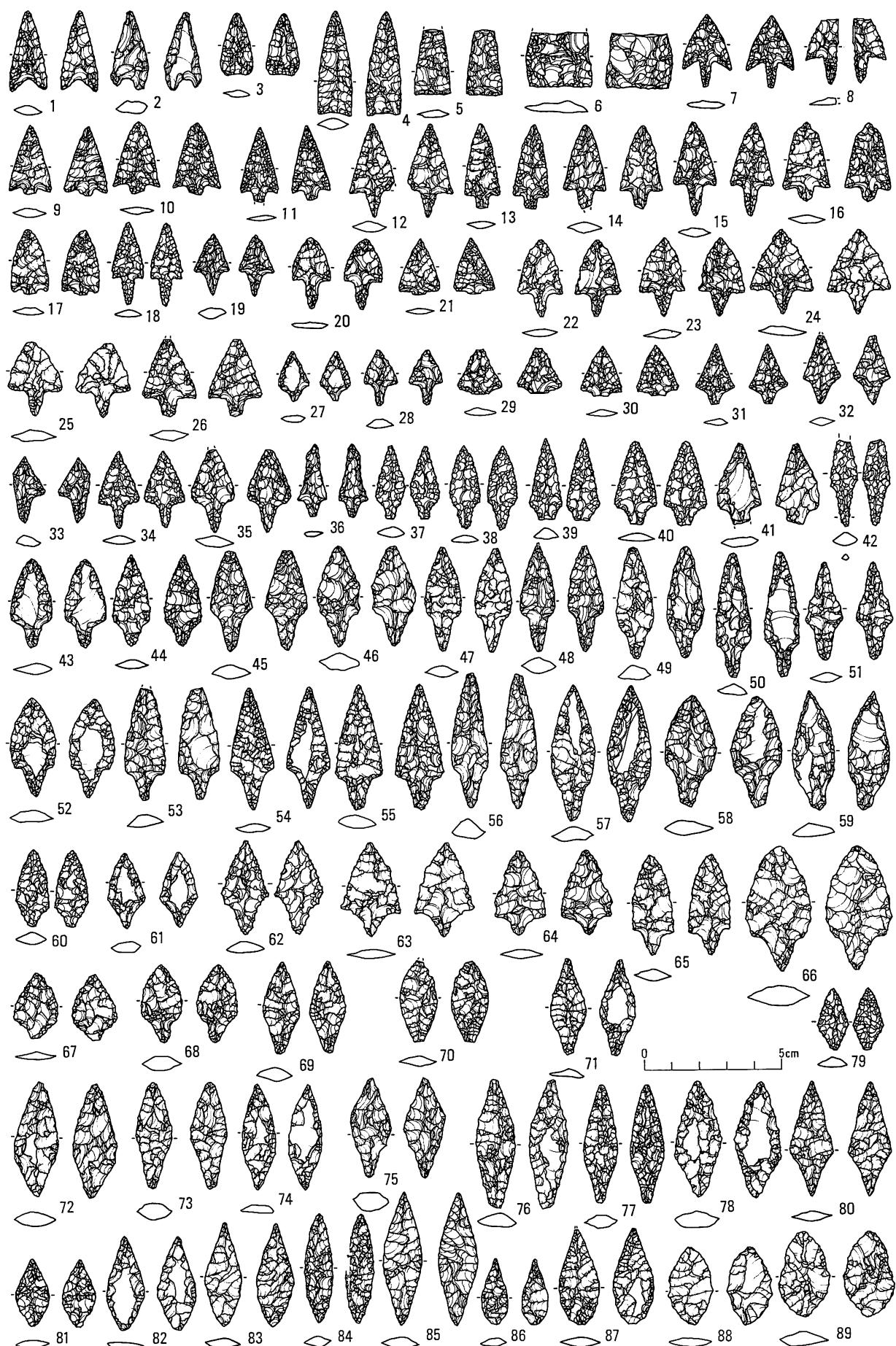
すべて欠損品か破片である。232は砥面が弓状に湾曲しており、234は有溝のものである。

石皿・台石 (235・236)

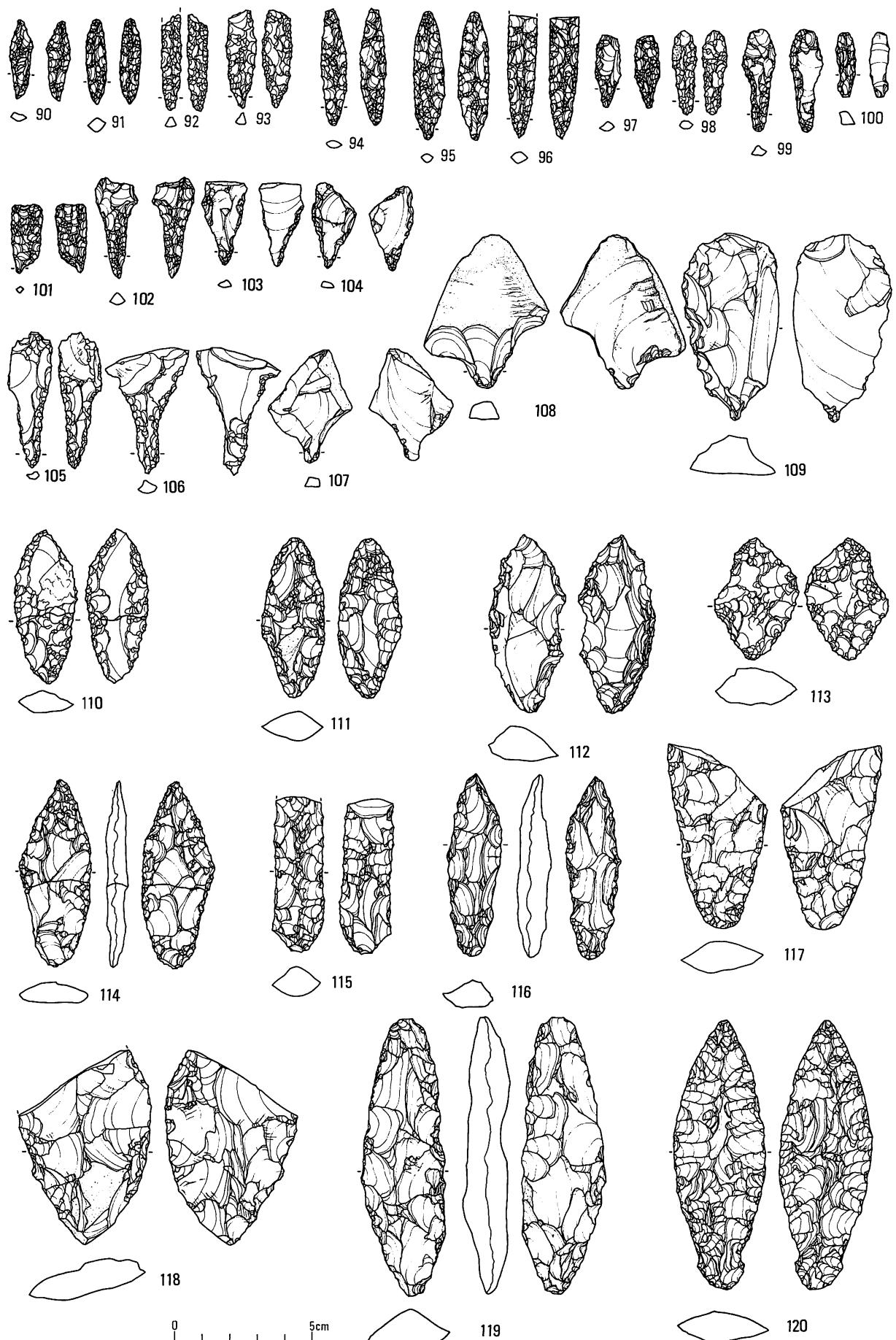
平盤状の大型の礫を利用しているが、半分以上欠損しているものや破片が多い。235・236は使用面がわずかにくぼんでいる。

石鋸 (237~239)

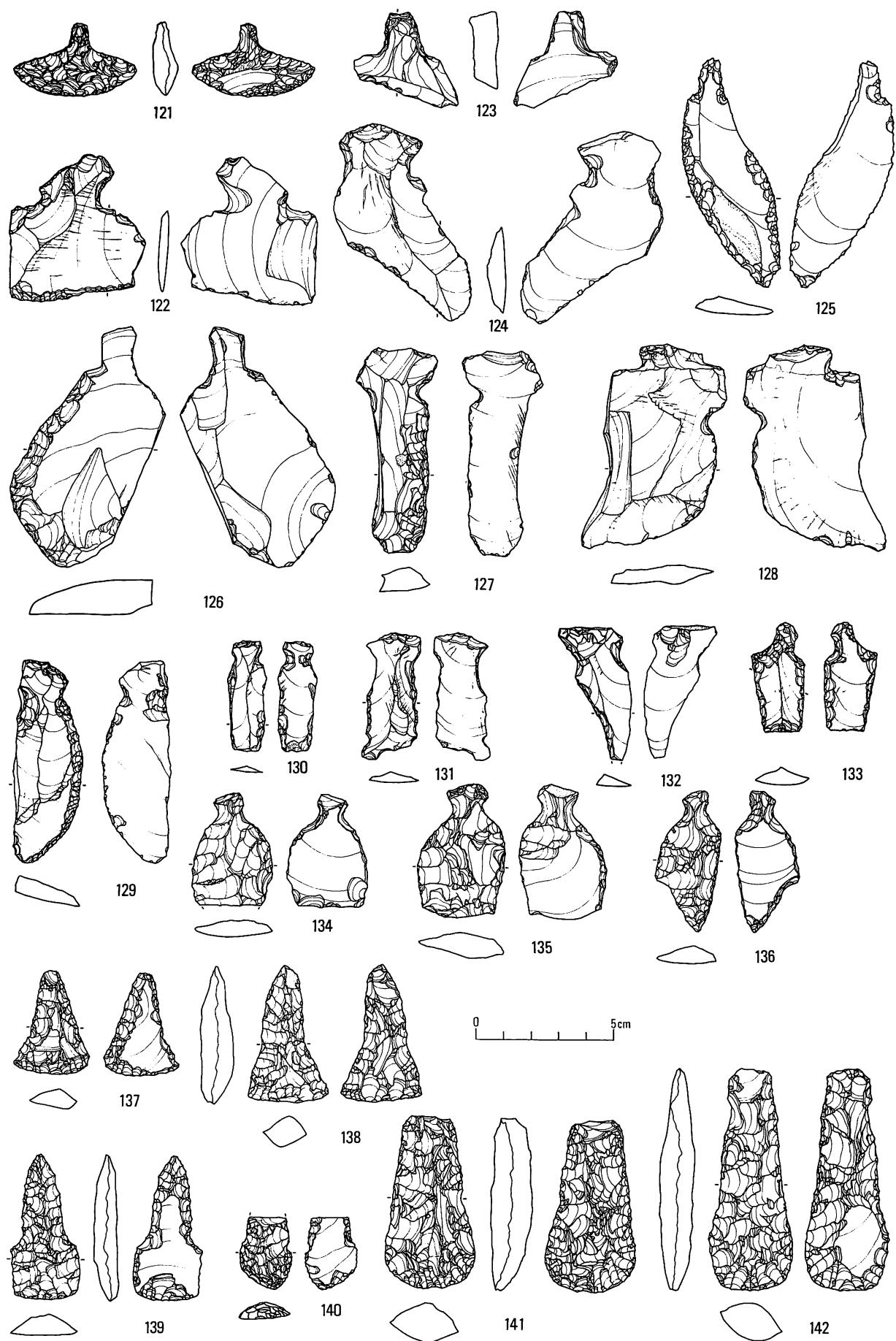
図示した3点だけで、237・238は両側縁が使用されている。237は使用部の断面がU字形を、238・



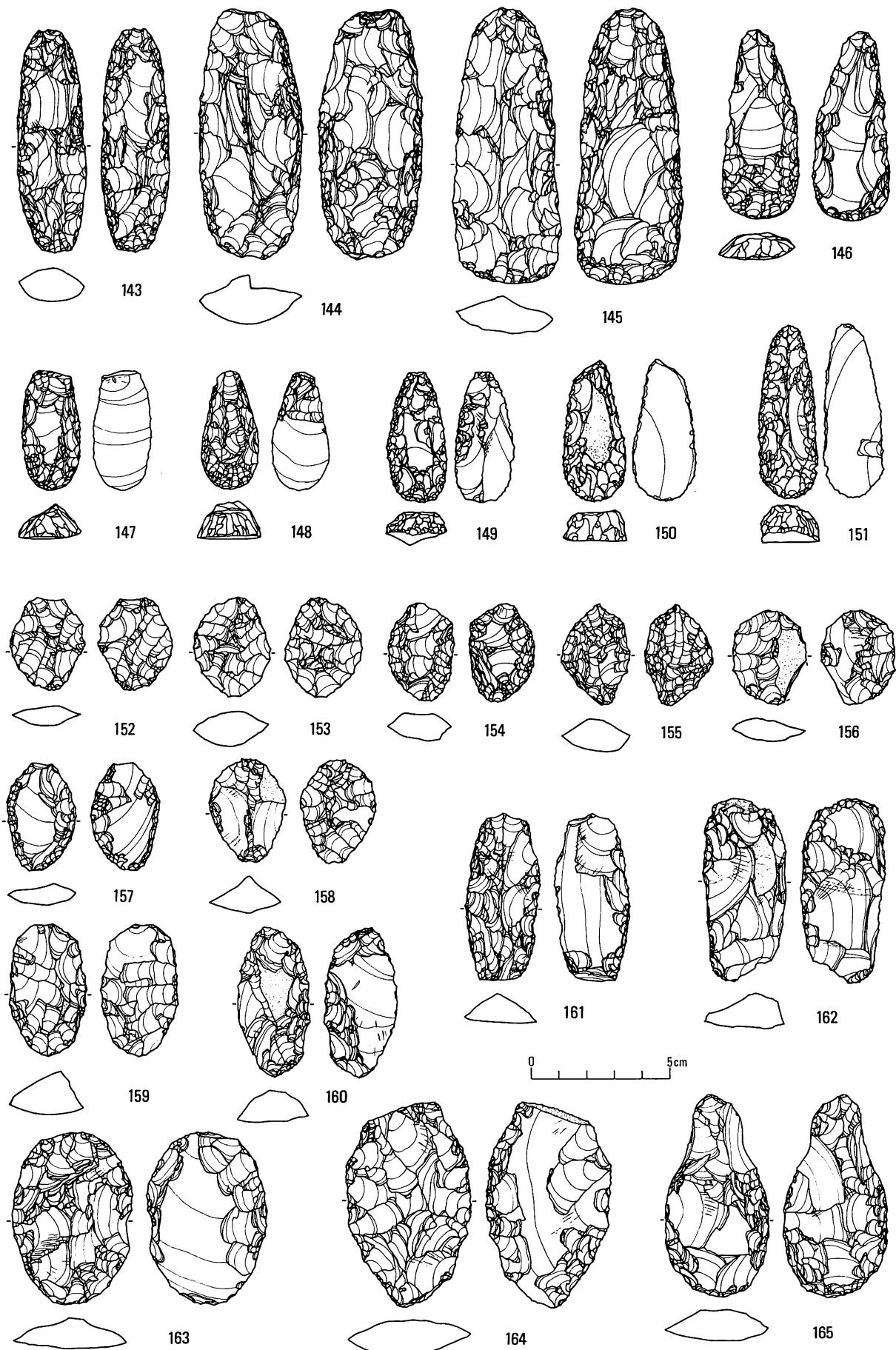
図III-121 包含層出土の石器（1）



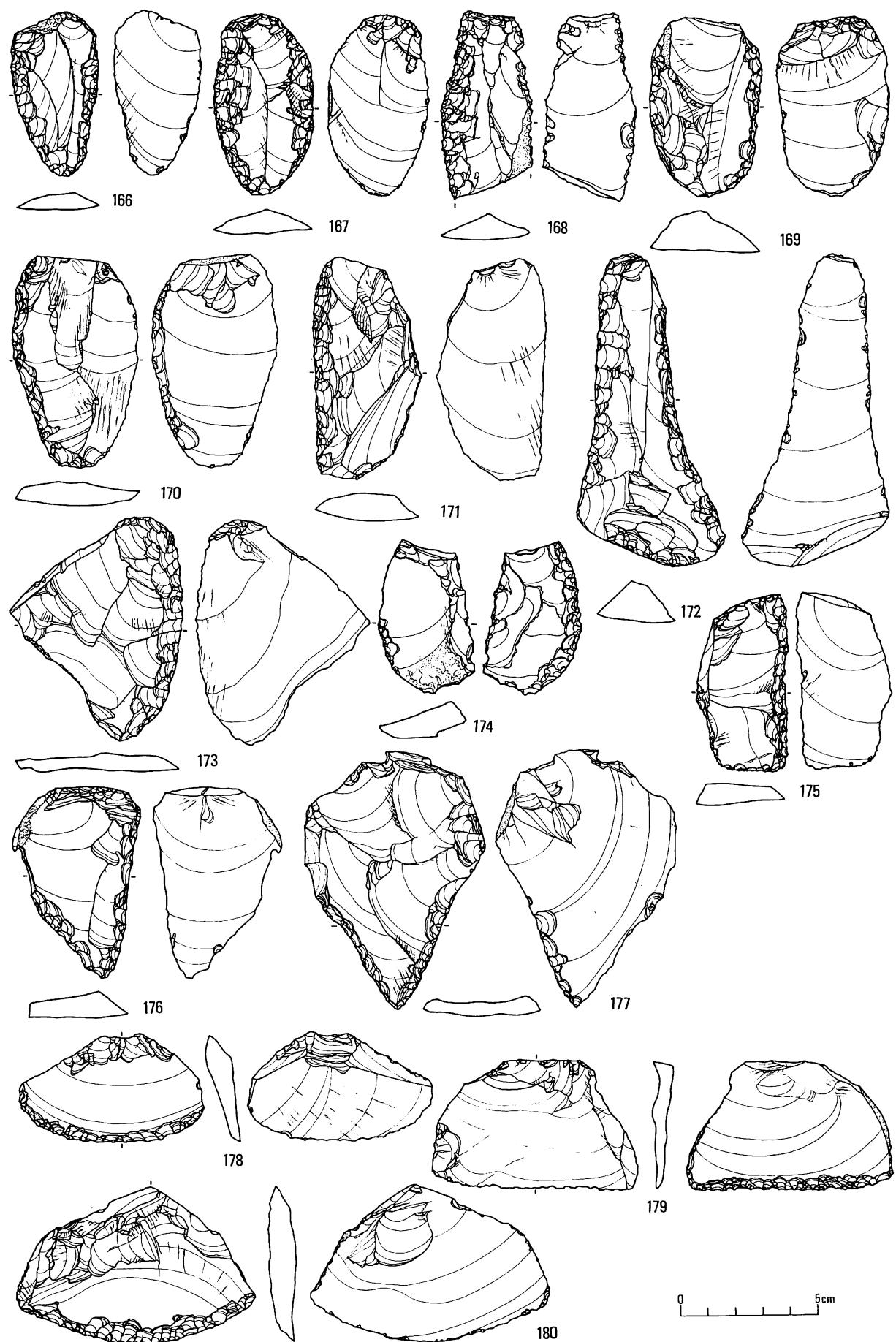
図III-122 包含層出土の石器（2）



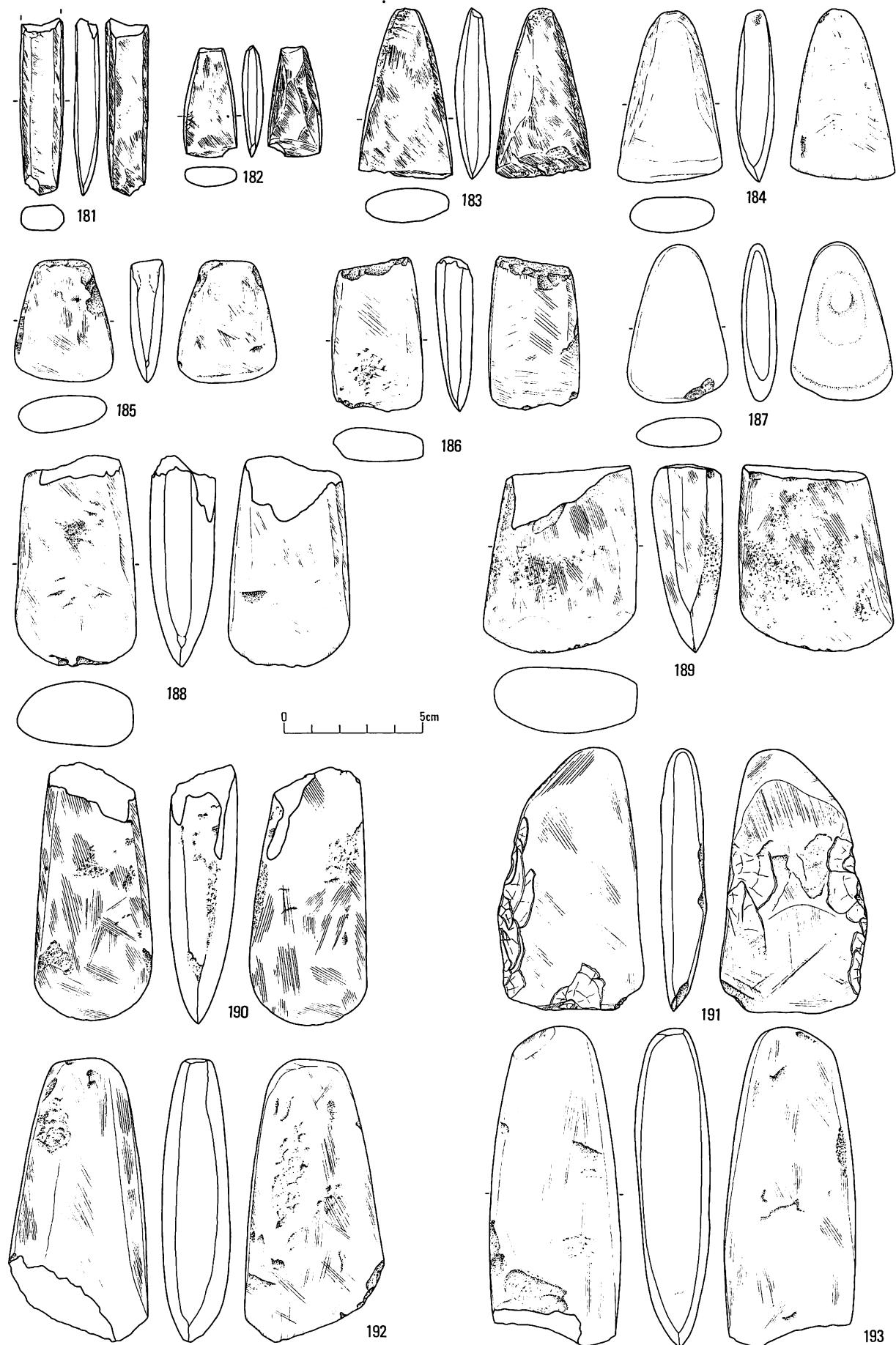
図III-123 包含層出土の石器（3）



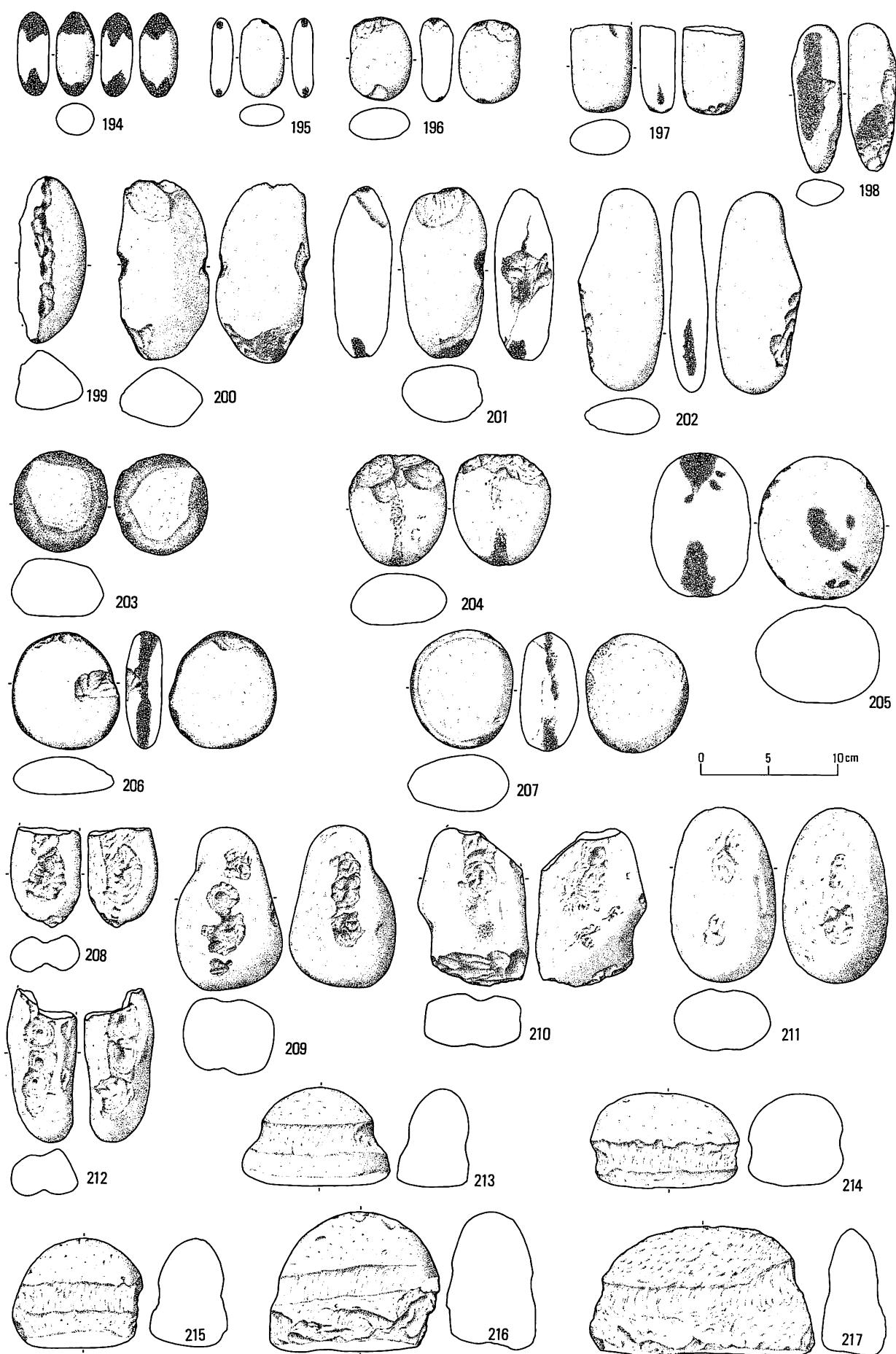
図III-124 包含層出土の石器（4）



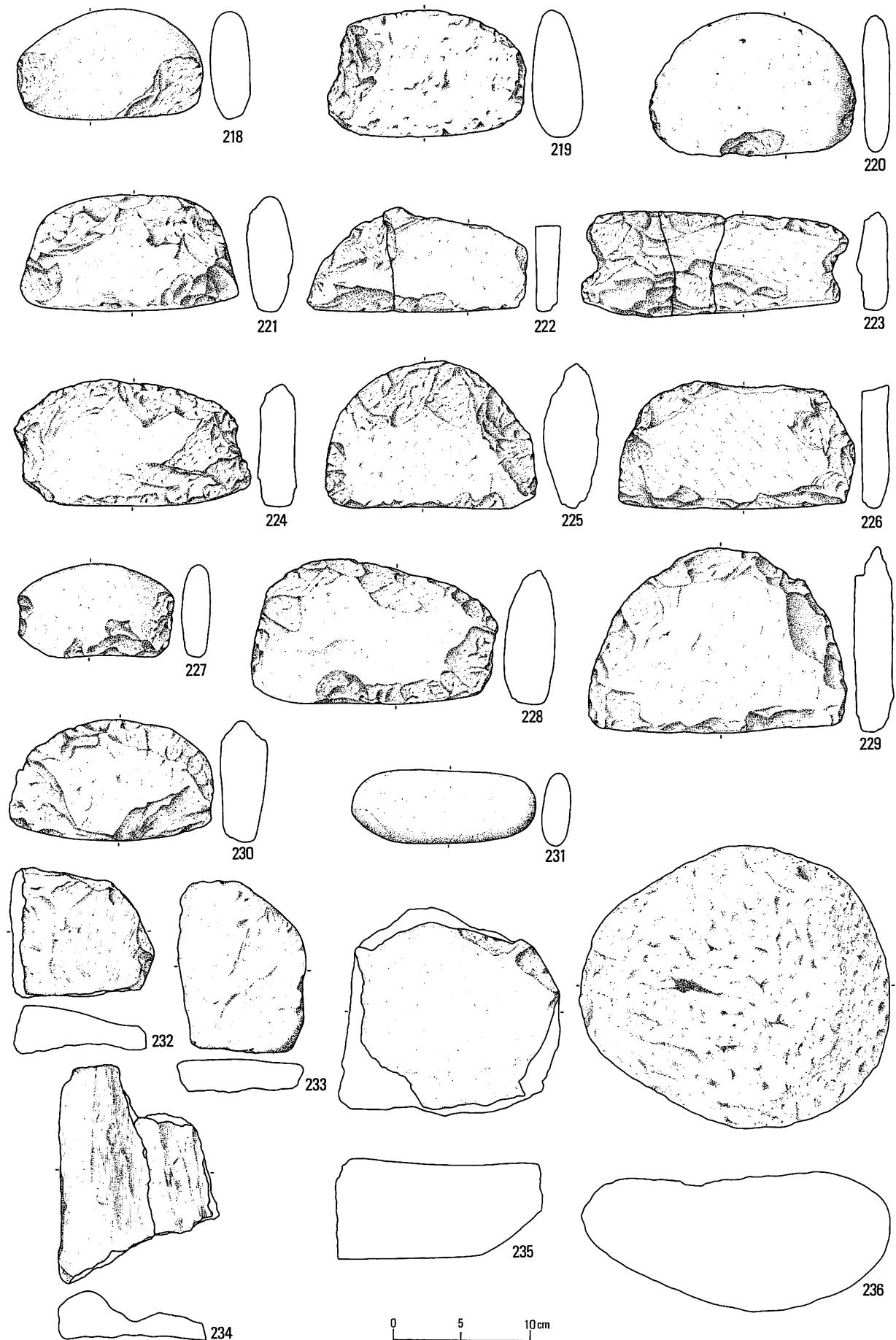
図III-125 包含層出土の石器（5）



図III-126 包含層出土の石器（6）



図III-127 包含層出土の石器（7）



図III-128 包含層出土の石器（8）

239は断面V字形を呈している。

石錐（240～243）

図示していない1点を含めてすべて打欠きによって製作されており、240～242は二箇所に、243は四箇所に施されている。

異形石器（244～248）

三日月形石器と称されているもので、245～248は外湾部に突起を有する。244～247の石材は黒曜石で、その原産地は赤井川と推定されている（2-IV藁科・東村報告参照）。

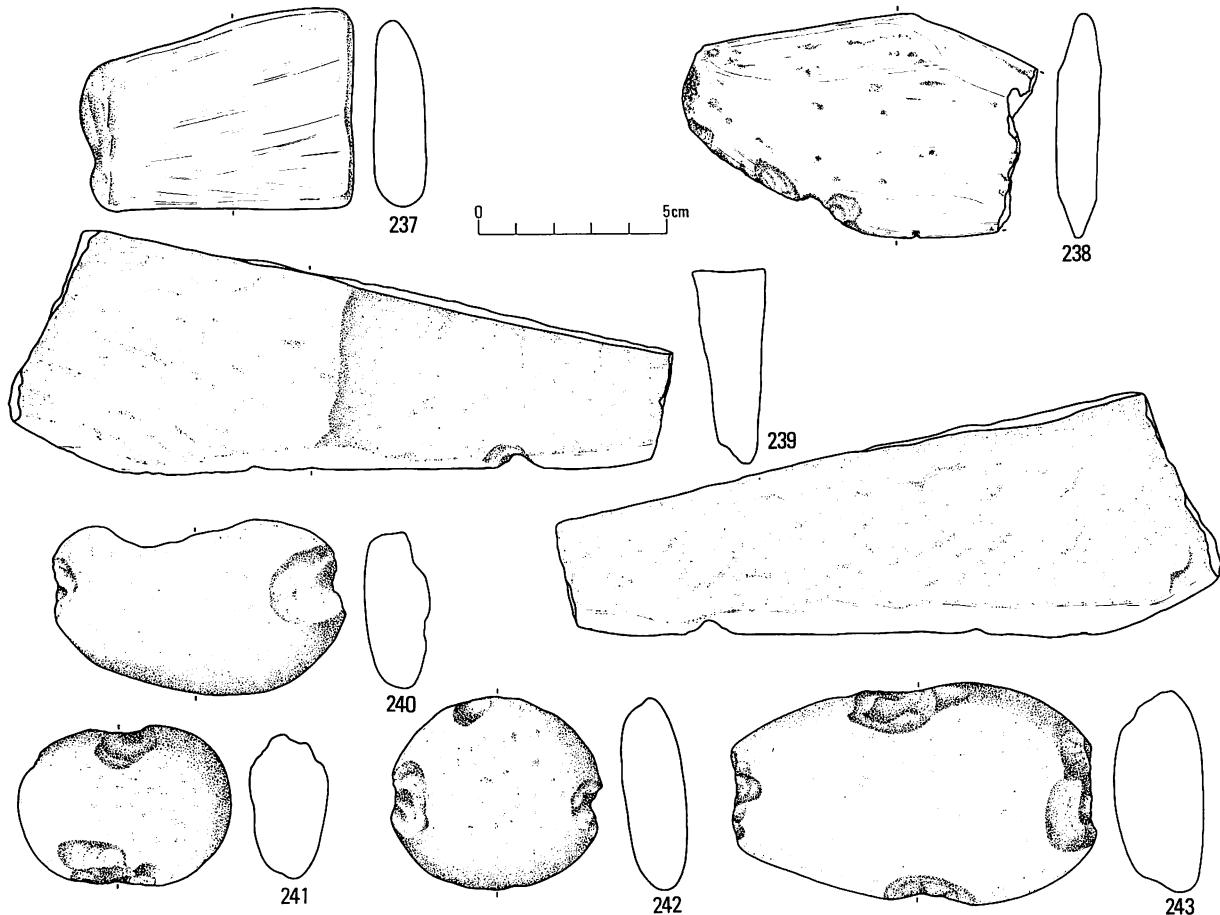
（3）石製品（図III-130-249～252）

249は石刀の柄部分であるが、磨滅が著しい。250はミニチュア石棒。251はひすいの垂飾品。252は有孔の石製品であるが、底面部が研磨されたうえに潰打痕があることから、無孔であれば石冠状のすり石と推されるものである。

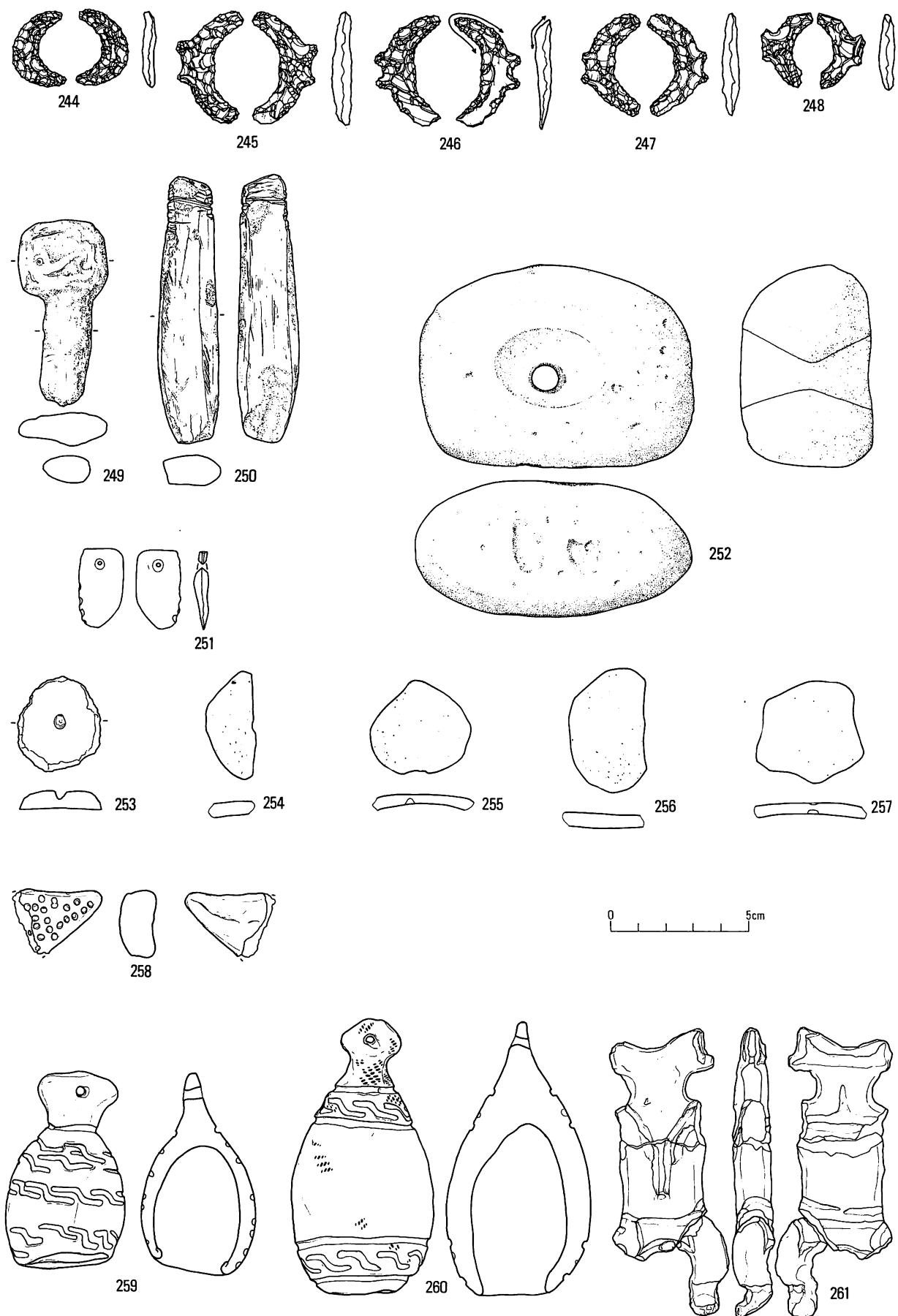
（4）土製品（図III-130-253～261）

253～257は円盤状土製品で、253はIII群、254～256はV群B類、257はV群C類の土器片を利用したものである。258は三角形土製品もしくは三角形土版と称されているもの一部で、刺突が施されている。類例は60年B地区（既報告）、D地区（図IV-186-223）からも出土している。259・260は鐸形土製品で、二点ともその文様からIV群A₂類土器に関連するものである。261は土偶で、三片が接合しており、頭胸部と胴部がG地区から、左脚足部がC地区から出土し、既に次のように報告したものである。『顔面（目・鼻・口）・乳房が剥落しており、下半身にはパンツ様の着衣が認められ、その下位には刺突によって陰部と推されるものが表現されている』。縄文時代晚期（V群C類）のものである。

（千葉英一）



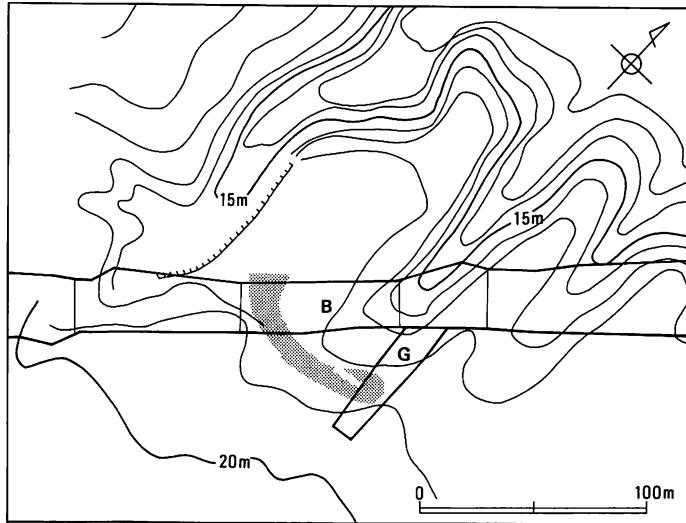
図III-129 包含層出土の石器（9）



4. まとめ

1. 盛土について (図III-131~134)

昭和60年度B地区の調査で南東側の標高約18.50mの平坦面から北西側の標高約17mの緩斜面に、弧を描いて調査区を横断する幅が23~25m、厚さ1.30m~1.50mの大規模な盛土が発見された。二次堆積層は20層以上あった。これはさらに調査区の南東側の畑作地に高まりのある地形となって肉眼でも観察でき、また調査区の北西側への広がりも土層断面から確認できた。盛土からは縄文時代後期前葉のIV群A類土器が層位的に出土



図III-131 盛土と周辺の地形

しており、盛土が大津式土器（盛土2類）の時期から白坂3式土器（盛土5類）の時期にかけての比較的短期間に、南東側平坦面から順次北西側緩斜面へ形成されていったのではないかと推定できた。また盛土の内側の部分（B地区平坦地区）は標高18mの平坦面になっており、近・現代の開拓、開墾の影響はほとんどない状態であるのに縄文時代の包含層が非常に薄いことがわかった（図III-134）。この地区からはIV群A類期に形成された大型の柱穴状土壙が多数発見された。これらの土壙の大部分は第IV層黄褐色ローム面を精査中に検出されたもので、覆土中に黒色土がほとんどみられない。後期中葉以降の土壙には自然堆積の黒色土が落込んでおり、その土を第II層の赤褐色火山灰が覆っていたことから、これらの土壙が掘り込まれた頃は既に黒色土が何らかの原因で排除され平坦面が形成されていたことがわかった。

今年度の調査ではまず盛土がG地区まで広がっているかどうかを確かめることが課題であった。このため盛土の広がりが予想される調査区南西部のUラインからYラインの間に発掘区境界線にそって長さ20m、幅50cmのトレンチを掘った（図III-133セクションa-b）。この結果、盛土の厚さは薄いがUラインからYライン間に幅15mの緩やかな山形をなす盛土が形成されていることがわかった。さらに調査区東側への広がりを調べるために2本のトレンチを掘ったところ、盛土は58ライン、59ライン周辺ではほとんどなくなり、G地区で発見された部分が盛土の末端部であることがわかった。また南西端には盛土の時期の住居跡（G H-9）が構築されていた（図III-133）。B地区との盛土のつながりを調べるために、両地区の間の現在は畑作地になっている範囲の標高を測ったところ、高い所で19.50m、低い所で18.50mあった。この結果盛土は南西から北西部の18.00mの平坦面に向って傾斜していることが確認できた。調査を開始した5月初旬農家が盛土を縦断するかのように北東から南西方向に種イモを植えるための深さ1m以上の溝を掘っているのに遭遇した。耕耘機で掘り上げられた土には遺物が多量に混っており、また、溝の側面からは黄褐色ロームや焼土の混じる土が厚く堆積していることが観察できた。耕作による攪乱もある程度考えられるが、周辺の耕作地の土の状態とは明らかに違っていた。

以上のことから盛土がB地区の北側にのびる舌状台地の基部から南東方向に向ってC地区の沢を大きく取り囲むように、発見された部分の長さ約80mの規模で弧状に形成されていることが確認された。幅は15m~25m、一番厚いところで1.3mあった。そしてG地区では当初予想していたほど大規

B地区平坦面

大型柱穴状土壙

火山灰

盛土の広がり

盛土の厚さ

盛土の時期の住居跡

弧状

模な盛土は形成されておらず末端部に相当すること。盛土の形成が盛土4類期のごく短い一時期である可能性が強いことがわかった(図III-131)。

盛土の堆積層

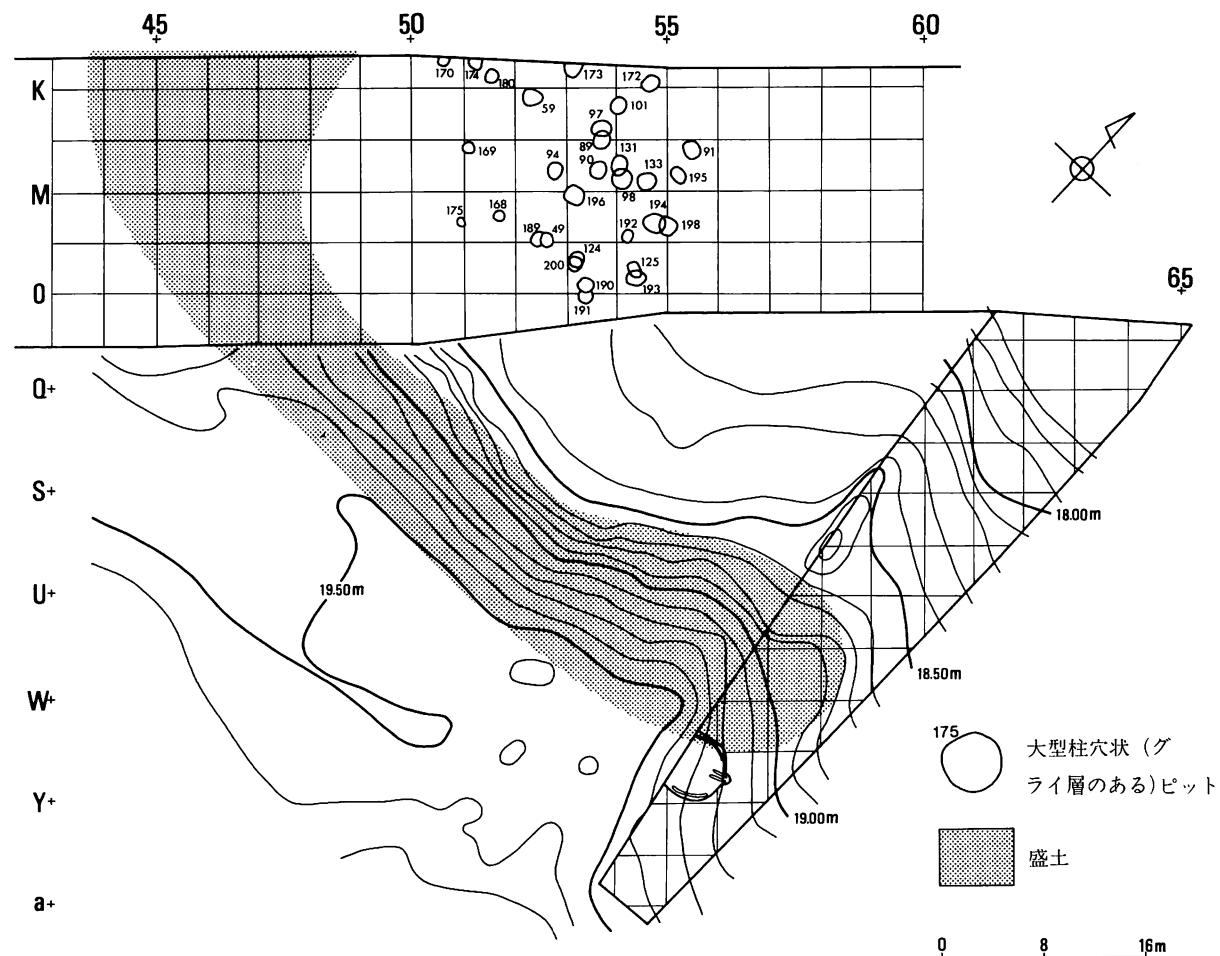
G地区の盛土の堆積層は非常に薄く、盛土3層から5層に分層される。G地区の基本層序とあわせて記載することとする(図III-133)。

1層：黒褐色土 表土層。耕作により攪乱をうけている。その際掘り上げられた遺物が多数出土している。

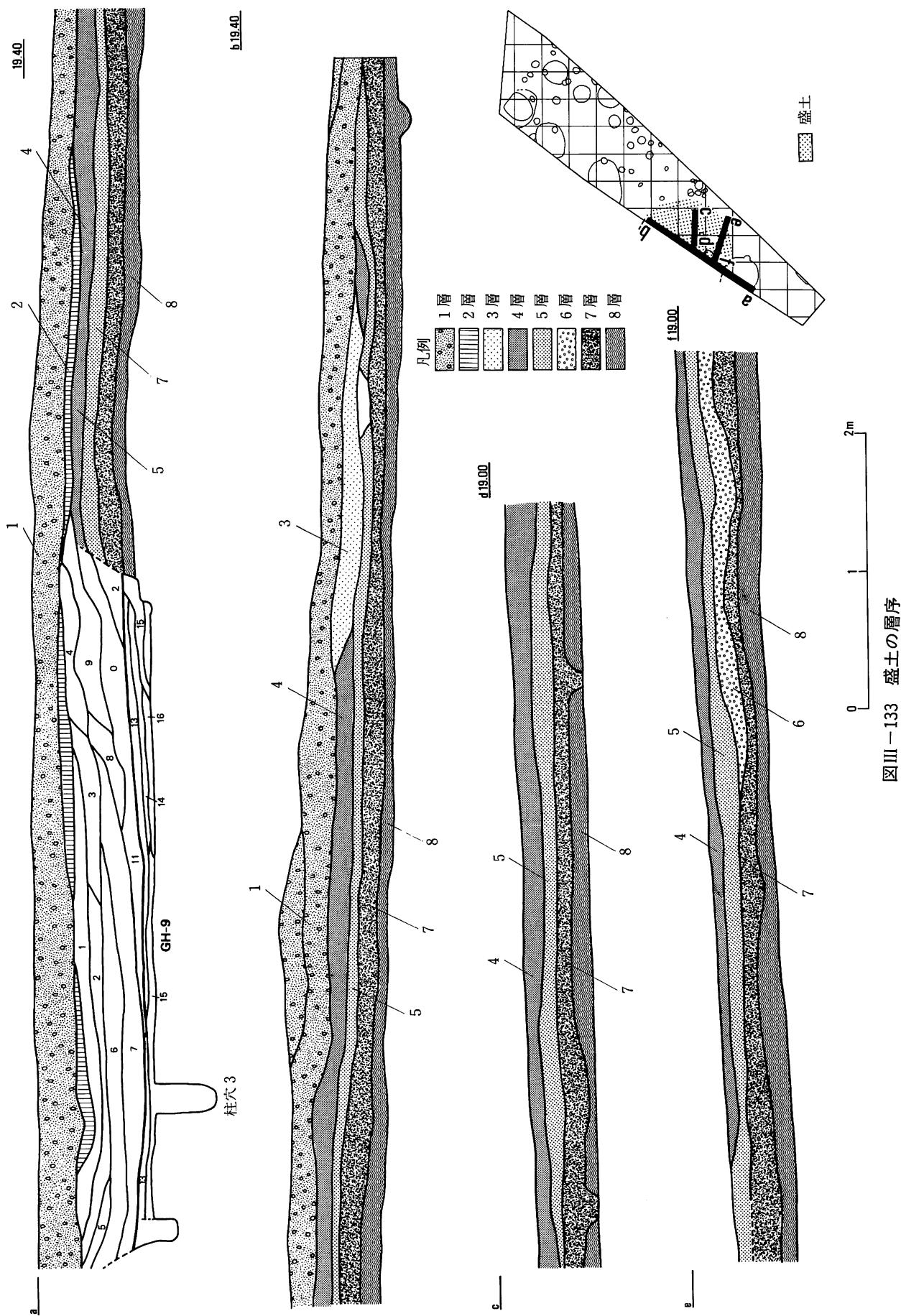
2層：赤褐色火山灰層。平均10~15cm位の層厚である。遺構など大きな窪みがあるところではレンズ状に堆積している。この層の直下からV群土器が出土する。

3層：黄褐色土 V-59区にのみみられるレンズ状に厚さ15cm、幅2m~3mで堆積する。一番新しい時期の盛土の堆積層で4層・5層を直接覆っている。

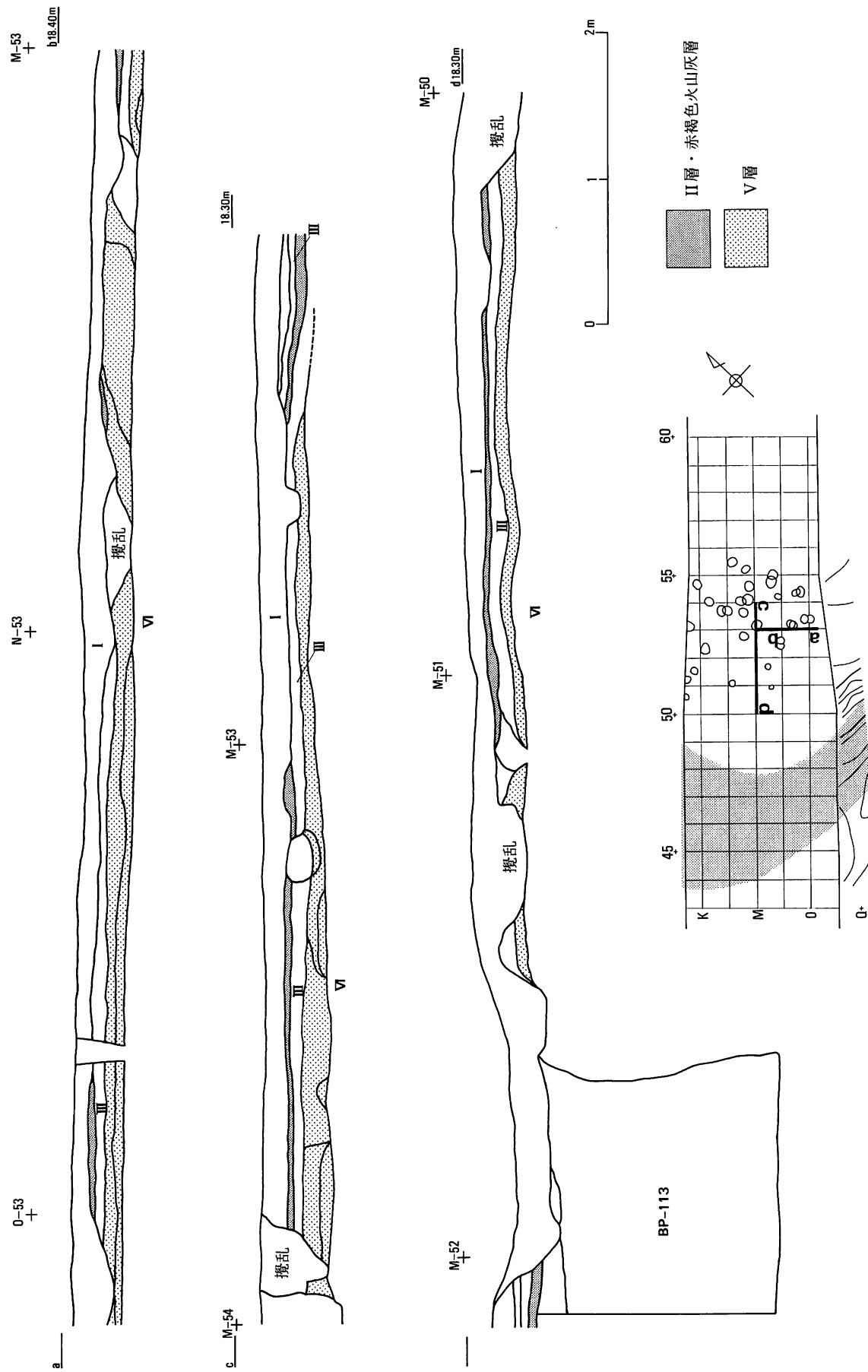
4層：暗黄褐色土 V-59区以外では1層あるいは2層のすぐ下位に堆積している。非常に細かいロームが混じる。焼土はところどころでブロック状に混入し、炭化物が多い。焼土中からは炭化したオニグルミの堅果が多数検出された。シカの末節骨(X-56区)を含む獸骨片が検出された。盛土の南東端W-58区周辺では形成されていない。発掘区境界に近いV-56、W-56区からはIV群A類土器が多数出土しているが、層位的に区別されるものはほとんどなかった。図III-109-8はW-56区から出土したもので、この層の上部から押しつぶされた状態でほぼ完形で出土したものである。GH-9、GP-25はこの層中から掘り込まれている。盛土4類土器の時期に形成された層であろう。



図III-132 盛土と大型柱穴状ピットの分布



図III-133 盛土の層序



図III-134 B地区平坦面地区の土層図

5層：黒褐色土 大きめの黄褐色ローム粒、炭化物が混じる。ところにより焼土が検出される。比較的黒味が強く粘性がある。遺物が多量に出土しているが層位的には把握できなかった。この層は盛土の末端部U-57、V-58区周辺では下位の7層と区別がつかなくなる。この層の下部が盛土が形成される以前の遺物包含層であろう。また調査区北側のC地区に隣接するO・P-61～63区周辺では5層下部に相当する土がほとんど観察できず、V群土器の包含層のすぐ下位が7層の前期の遺物包含層であった。B地区に形成された平坦面と関係があるのかもしれない。

6層：黒褐色土 W-56・57区盛土の南東端に堆積する。細かいローム粒が不均一に混じる。5層との区別はつきにくい。遺物は5層ほどは多くはないがIV群A類土器が出土する。

7層：茶褐色～暗黄褐色土 5・6層よりも黒味が少なく、黄褐色ロームの量が多い土である。ところにより5層下部との区別ができないところもある。繩文時代前期の遺物がわずかに出土する。

8層：暗黄褐色土 黄褐色ローム層との境目の漸移層である。粘性があり7層との区分が不明瞭なところがある。遺物を含まない。

G地区盛土3～6層から出土する土器は圧倒的にIV群A類土器が多い。盛土の形成時期を示すIV群A類土器が層位的に出土した層は唯一盛土4層で、この層の上面から盛土4類土器が出土している。また盛土を掘り込んでつくられている土壙(GP-25)に一括して投げ込まれていたIV群A類土器が、盛土4類に相当するものであることからも形成時期がわかる。前年度の調査ではB地区の南東側平坦面から順次緩斜面に向って盛土が形成されていったのではないかと予想したが、G地区では盛土4類期のごく短い時間に形成されたことが考えられる。なお盛土地区出土のIV群A類土器は集中区IIとして包含層の項で記載してある(図III-109～114)。

層位的出土

B・G地区的調査を通じて盛土の広がり、形成時期が明らかになったけれども、盛土がどの様な社会的背景で形成されたのか、その性格がどのようなものなのかは現時点でただちに明らかにはできない。また盛土と同じ時期に形成されたと思われる平坦面地区、そこに掘られた大型の柱穴状土壙は盛土の形成と何らかの有機的関係があることは充分考えられる。

盛土の形成時期

社会的背景

小樽市忍路土場遺跡¹¹⁾の調査で繩文時代後期中葉手稻式土器の包含層から、後期中葉の土器とともに木製品、漆・纖維製品、土・石製品が多量に出土した。これらの遺物に混じって大型の木柱や朽材が並んで出土しており、大きな構築物の存在の可能性が指摘されている。大規模な整地による平坦面の形成、盛土、大型柱穴状土壙群は忍路土場遺跡で予想されたような大型構築物との関連も考えられる。

忍路土場遺跡

2. 遺構について

繩文時代前期から晩期の住居跡、埋設土器、フラスコ状ピット、土壙、小ピット、焼土跡が多数検出されている。前期の遺構ではII群B₁類の時期のフラスコ状ピットが調査区北側の台地上につくられている。つづく繩文時代中期はこの台地上では活動が活発であったらしく、中期中葉前後の時期につぎつぎと住居がつくられている。III群A₂類(円筒上層B式)期の住居はC地区、D地区にかけて沢の縁辺に分布している。III群A₃類(見晴町式)期の住居跡は次の時期のIII群B類期の住居跡の外側を囲むようにB地区、D・E地区に広く分布している。III群B類期の住居はB₁類(榎林式)期とB₂類(大安在B式)期のものが検出されている。B₁類期のGH-6は60年度BH-9と良く似た形態のものである。床面から榎林式土器の新しい段階のものが出土しており、見晴町式土器は痕跡的にしか混入していない状況であった。榎林式の新しい段階のものはGH-6の例のように単独で出土するのかもしれない。今後の調査で裏づけられることを期待したい。III群B₂類期の住居はC地区からG地区

III群B類期の住居

大きな構築物

榎林式

- にかけては沢沿いに分布し、B地区では舌状台地の基部周辺に広範囲に分布している。この時期の住居は丸味の強い卵形を呈するものが多い。G H-5からは土器片で囲った炉や、黄褐色ロームを周辺に厚く貼りつけた特殊な炉が検出されている。竪穴中央部付近からは、断面がすり鉢形の水が浸透しないほど壁が堅く締ったピットが検出されている。この時期の住居にしばしばみられるピットである。
- 土器片炉
- その性格ははっきりとはしない。何らかの液体を溜める特別な機能をもつものかもしれない。壁面の堅く締った状態は化学変化をおこしているようにもみられる。今後注意する必要があるだろう。
- 特殊なピット
- 後期前葉IV群A類期の住居跡（G H-9）が盛土の末端部から発見されている。南東部に出入口部施設と思われる張り出し部をもつもので、この時期の住居跡としては道内で初めての検出例である。
- 出入口部施設
- 壁に直交するように掘り込まれた2本の並列する溝には、簡単な「前小屋」のようなものがつくられていたのかもしれない。調査区境界から発見されたG H-8は壁際の一部分しか調査できなかったが竪穴住居と考えられる。周溝が壁際をめぐり、小さなピットが周溝に穿たれている。掘り込み面が第III層上部であること、壁の大部分が黒色土中につくられており床面は黄褐色ロームをあまり掘り込んでいないことなどG H-9と共通の特徴をもち、また盛土の外側に位置していることからG H-9と同時期である可能性が高い。IV群A類期の住居群は盛土の外側を取りまくように分布するのかもしれない。またこの時期の土壌と確認できたG P-6、19は覆土の状態、遺物の出土状況から判断して墓である可能性が強い。G P-6にはIV群A類（盛土2類）の小型深鉢土器が埋納されていた。その土器の中にはメジロザメ属の一種の下顎歯が入っていた。新道4遺跡ではB地区の盛土中からも垂飾品と考えられるホホジロザメの歯や、アオザメの歯が検出されている。この時期にサメが捕獲され、歯が日常的に身近なものとして利用されていたことがうかがわれる。土器の中にサメの歯を意識的に入れて、土壌に埋める例は今までにないが、上磯町添山遺跡^{〔2〕}では包含層から出土した縄文時代晚期の鉢形（土器No.349）、壺形（土器No.309）など4個の土器中の土壌からアオザメ（？）の下顎歯、メジロザメ科の一種の歯が検出された例（4例）が報告されている。二次的な混入の可能性も考えられているが特異な出土状況であろう。
- 土器の中にサメの歯を入れる
- また墓壙に副葬品としてサメの歯が入れられている例は道南では、木古内町札苅遺跡の69号土壙墓（縄文晚期）^{〔3〕}、南茅部町ハマナス野遺跡第15号墳墓（縄文前期）^{〔4〕}で報告されている。サメの歯と墓壙との関連性は今後も注目されよう。
- 堂林式期の焼失家屋
- 後期後葉IV群C類（堂林式）期の住居跡は焼失家屋でC地区、D地区から発見されたものと一連のものとみなされる。
- 晩期の遺構
- 晩期の遺構は調査区北西側のC地区に隣接する地区に集中し、柱穴状、杭状の小ピットが狭い範囲から多数検出されている。焼土跡もこの地区に比較的多い。小ピットが集中する地区から発見された縄文時代晚期の埋設土器はこのようなピットに埋められていたものかもしれない。
- 土壙の中でその構築時期を明らかにできたものは少ないが住居跡との重複関係、土器の分布から考えて、縄文時代中期から後期にかけてのものが多くそうである。G P-1、2、3、4、11、16、32、33は覆土の状態が人為的な埋め戻しである可能性が強いものである。またG P-7、10、12、13、14、15、17、18は平面形が円形あるいは楕円形を呈するもので壁の立ち上がりが比較的真すぐな大型の柱穴状土壙である。B地区で発見された大型の柱穴状土壙と関係があるのかもしれない。

3. 土器について

- II群B類の土器
- II群B類、IV群A類、V群土器についてみていくこととする。
- 縄文時代前期のII群B₁類土器については1群として分類した円筒下層C式の古い段階のものと、

2・3群として分類した新しい段階のものとがありそうである。1群土器には器壁が厚く口唇が丸味を帯びる筒形の器形のものがあり、口縁部文様帶は幅が広い。体部には単節、複節の縄文が施されているものがある。多軸絡条体、網目状撚糸文が施されているものは原体を斜位に回転施文しているのが特徴的である。口縁部には太い原体での不整綾絡文や条線文がつけられている。低く幅広の隆帶がつけられているものでは隆帶上を縄で斜めに深く刻んでいる。円筒下層c式の新しい段階のものは2段階ほどに分けられそうで、GP-31の覆土中部と床面から層位的に比較的まとまって出土している。2群土器はGP-31の床面出土のものに類似するもので、サイベ沢I式に相当すると思われる。昭和60年度BP-157からも良好な資料が得られている。比較的薄手のものが多く口縁部文様帶は幅が広い。口唇は尖り気味で口縁は外反する器形のものがある。体部には撚り戻しの原体による縄文を施すものが多くみられ、この段階に特徴的かと考えられる。撚糸文・自縄自卷的原体による縄文が施されているものは粗く、不規則な方向に施文されているものが多い。原体の異なる縄文、撚糸文を重ねるものもある。口縁部には縄線文、綾絡文、絡条体圧痕文を施すものがある。体部の縄文を同じ原体を施文方向を変えて施すものもみられる。撚りの異なる2本一組の縄線文は古い要素のものかもしれない。3群はGP-31の覆土中部からまとまって出土した資料に相当するもので、胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる器形のものがある。口縁部はわずかに外反し、口唇の断面は尖り気味である。口縁部文様帶は幅が狭くなる。体部には2群の段階よりも整った撚糸文、自縄自卷的原体による縄文が施されている。口縁部文様は縄線文、綾絡文、結束第2種の結束部分の回転文、刺突文などが施されている。体部の地文に重ねて結束第1種羽状縄文を何段か重ねるものがこの段階から出現するようである。しかしGP-31の土器の中には図III-40-3、4のように、結束第1種羽状縄文と撚糸文を口縁部から順番に交互に施すものもみられる。地文の上に羽状縄文を重ねる場合と施文の意図が違うのかもしれない。口唇直下の極く狭い範囲に縄文を施すものがこの段階からみられる。

円筒下層d式のものは古い段階(II群B₂類:1群土器)のものが多い。口唇の断面は前段階のものが口縁部に向って薄くなり尖り気味であるのに対して、丸味を帯び厚味があるものがみとめられる。口縁部の文様帶は幅が狭く、前段階にひきつづき縄線文、綾絡文、結束第2種の回転文が施され、体部には撚糸文、自縄自卷的原体による縄文が施されている。整った網目状撚糸文(単軸絡条体第6類)のものもある。II群B類土器の分布をみると、大まかではあるが円筒下層c式期のものがGP-31周辺のQラインからTライン間に、円筒下層d式期の古い段階のものは盛土地区周辺にまとまりがみられる。

縄文時代後期前葉のIV群A類土器は調査区全域から出土しているが、ほぼ2箇所に集中区がある。集中区Iは調査区北東部Q～S区周辺にあり、昭和60年度の盛土地区(B地区)の調査により区分した大津式以前の盛土1類に相当する土器が出土した。盛土地区(集中区II)からは盛土1類から5類の各期のものが出土しているが、G地区からは盛土の形成時期である盛土4類に相当する良好な資料が出土している(図III-135)。

盛土1類土器としたものはトリサキ式に近似の資料である。無文地に沈線で文様を描くもの、縄文地に沈線で文様を描くもの、沈線を施した後ところどころに疎らに縄文を施すものなどがある。山形隆起部に粘土紐で「8」の字の文様を描くもの、指頭の圧痕や棒状工具による刻み目を施すものもある。集中区Iで集中的に出土した図III-108-41のような折り返し口縁の部分に短く粘土紐を貼付し沈線をその上に施すものは盛土1類の中でも古い段階のものであろう。盛土2～4類土器は大津式に相当するものである。盛土3類土器は磨消縄文、無文地に太い沈線で文様を描くものなどがあるが、文様要素として雷文が比較的多く用いられている。盛土4類土器はGP-25、GH-9から良好な資

原体の斜位回転

サイベ沢I式

撚り戻しの原体

施文の意図

II群B類土器の分布

IV群A類土器の分布

盛土1類

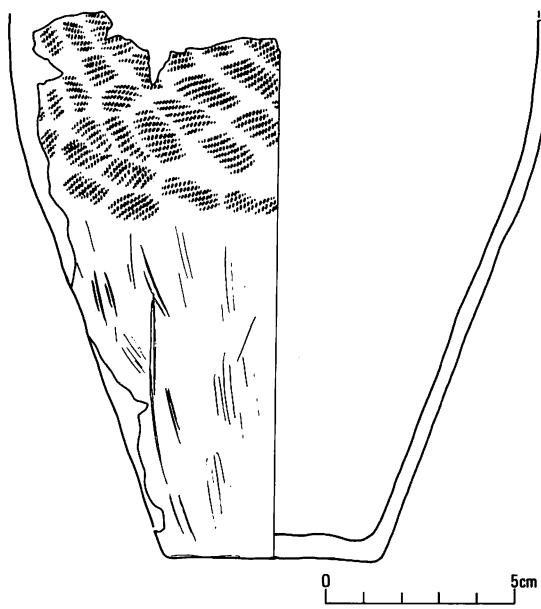
盛土2～4類

盛土4類

盛土5類	料が得られている。口縁部文様帶は幅広くなり、縄文を施して沈線で鋸歯状文や弧状の文様、流水文が施される。体部の文様は縄文地に沈線で「乙」字文や蛇行する沈線文をめぐらすものが多くみられ、磨消縄文のものでは大柄な入組文を描くものや「カニのハサミ」状の文様の描かれるものがある。深鉢形土器では文様が多帶化する傾向がある。盛土5類土器は大津式以降のものとみられ、白坂3式に対比されるものである。口縁部は幅広く直線的に開き、角形の口唇には縄文の施されるものが多くみられる。頸部には幅の狭い無文帶が形成されている。体部には磨消縄文による入組文、区画文が施されている。沈線による流水文はこの段階に多くみられるものである。0段多条のLR原体による細かい縄文の施されたもの(図III-114-101)は新しい段階のものであろう。またIV群A類土器はLR原体による縄文が一般的であるのに対してGH-9の床面から出土した図III-34-1、覆土から出土した図III-37-57、包含層出土の図III-114-100はRL原体による縄文が施されているものである。図III-34-1、図III-37-57はいずれも口縁部文様帶に磨消縄文による細長い区画文が描かれている。
流水文	RL原体による縄文
RL原体による縄文	RL原体による縄文の施文、口縁部に磨消縄文で文様を描くという手法はこれまで発見されたIV群A類土器にはほとんどみられないものである。盛土5類の中でも一番新しい段階のものといえるかもしれない。
晩期の土器 札苅II群	縄文時代晩期の土器は調査区北東部からまとまって出土している。札苅II群に相当するものから尾白内I群に相当するものまでが認められる。札苅II群に相当するものは2段階(1、2群)に分かれそうである。1群土器の深鉢形、鉢形土器は肩の張り出す器形のもので、口縁には棒状工具で斜めに刻み目がつけられるものと指頭の圧痕のつけられるものがあり小波状縁をなす。札苅II群の中でも古い段階のものであろう。2群土器は札苅II群に相当するもののうち函館市高丘町遺跡出土の資料に類似するもので、G地区から一番多く出土したである。深鉢形土器、鉢形土器の中で頸部の無文帶に数条沈線が施されるものでは、口唇に刻み目のあるものや上位の沈線に刺突文の施されるものが多い。肩が強く張り出す器形のものは比較的古い段階のものであろう。2群土器の新しい段階のものは頸部の沈線が幅広となり間隔をあけて数条施される。体部縄文はLR原体による縦行縄文が一般的であるが、RL原体による斜行縄文のものもみられる。
聖山I式	3群土器は聖山I式に相当する資料である。頸部の無文帶に沈線が施される深鉢形・鉢形土器では沈線は幅が広くなり間隔をあけて施されるもののがみられる。頸部に無文帶を形成するものでは肩部の沈線が太く、間隔をあけて施されていて、体部との境は段状になる傾向がある。壺形土器には埋設土器1~3の良好な資料が得られている。
聖山II式	4群土器は聖山II式に相当するものである。頸部をあらかじめ無文にした器面に沈線が施される深鉢形土器では沈線が幅広くなり、その下位に瘤状突起のうけられるものがみられる。頸部に無文帶を設けるものでは肩部の沈線間に、沈線施文後に突起のつけられるものが多い。
湯の里6式	5群・6群土器の資料は少ない。5群土器は湯の里6式に相当するもので鉢形土器では口唇に縄文の施されるものが多くみられる。沈線間には瘤状の突起がつけられ、突起間に沈線を三角形に入り組ませるものがある。6群土器は尾白内I式に相当するものである。G地区出土のもので文様構成のわかるものは浅鉢形土器1点のみである。
尾白内I式	(遠藤香澄)

註

- 註1) (財)北海道埋蔵文化財センター(1987)『小樽市忍路土場遺跡』(概報)
 註2) 石本省三ほか(1983)『添山一北海道南部に於ける縄文時代晩期遺跡の調査』上磯町教育委員会
 註3) 野村崇ほか(1976)『札苅一北海道上磯郡木古内町における縄文時代晩期土壙墓の調査一』北海道開拓記念館
 註4) 小笠原忠久(1983)『ハマナス野遺跡IX 北海道茅部郡南茅部町における縄文時代前・中期集落の調査』南茅部町教育委員会



図III-135 B地区盛土出土の土器

訂正・補遺 (図III-135)

J-47区の盛土22層から出土した深鉢形土器。底部から直線的に立ち上がり胴部が膨らむ器形のもの。胴上半は欠損している。体部にはLR原体による横走気味の縄文が疎らに荒く施されている。底部付近には縦方向の調整痕が残り、縄文施工後磨かれている。器面には炭化物が付着する。胎土に小砂利が多い。盛土2類に相当すると思われる。

(本資料は盛土地区出土の資料であるが、北埋調報43・P257でB P-71の遺構出土資料として誤って写真を掲載したもので、ここに訂正・補遺を行うものである。)

表III-3

包含層出土遺物一覧表

名 称	数 量	名 称	数 量	名 称	数 量
土 器 I群 B類	214	ス ク レ イ パ ー	462	U フ レ イ ク	110
II群 B類	13,063	楔 形 石 器	12	R フ レ イ ク	85
III群 A類	8,932	磨 製 石 斧	62	コ ア	175
III群 B類	7,420	礫	1	礫△	2,921
IV群 A類	31,714	す り 器	150	軽 燃	79
IV群 B類	15	た た き 石	273	焼 磕	9
IV群 C類	131	石 鋸	3	礫	30,740
V群	15,528	く ぼ み 石	29	土 製 品	24
土 器 計	77,017	砥	185	石 製 品	12
石 鐵	308	石 盆	12	石 器 等 計	66,007
ド リ ル	36	石 台	53		
ポイント・ナイフ	6	石 砧	5	総 計	143,024
つまみ付きナイフ	43	フ レ イ ク	30,211		

遺構遺物一覧表

名 称	分類	数 量		名 称	分類	数 量		名 称	分類	数 量	
		覆 土	床 面			覆 土	床 面			覆 土	床 面
土 器	I B	35	1	つまみ付きナイフ		6	1	R フ レ イ ク		19	3
	II B	2,988	179	ス ク レ イ パ ー		133	4	コ ア		27	1
	III A	2,404	323	磨 製 石 斧		8	2	礫△		6,868	73
	III B	2,796	240	す り 石		34	5	軽 燃		38	2
	IV A	5,174	326	た た き 石		40	8	焼 磕		1	0
	IV B	1	0	石 鋸		1	0	礫		6,970	267
	IV C	12	164	く ぼ み 石		10	0	土 製 品		2	0
	V	521	1	砥		11	1	石 製 品		11	2
土 器 計		13,931	1,234	石 台		8	2	石 器 等 計		18,200	599
石 鐵		40	10	石 砧		1	0			32,131	1,833
ド リ ル		5	0	フ レ イ ク		3,924	212	総 計			33,964
ポイント・ナイフ		4	0	U フ レ イ ク		39	6				

各遺構出土遺物一覧表

表III-5-(1)

遺 構 番 号	名 称	分類	数 量		遺 構 番 号	名 称	分類	数 量		遺 構 番 号	名 称	分類	数 量	
			覆 土	床 面				覆 土	床 面				覆 土	床 面
GH- 1	土 器	II B	16	1		計		288	11		V	6	0	
		III A	52	3		石 鐵		1	0		計	2,113	47	
		III B	73	5		つまみ付きナイフ		1	0		石 鐵	3	0	
		IV A	32	0		ス ク レ イ パ ー		1	0		つまみ付きナイフ	1	0	
		V	1	0		磨 製 石 斧		1	0		ス ク レ イ パ ー	9	0	
	ス ク レ イ パ ー	計	174	9		く ぼ み 石		1	0		磨 製 石 斧	1	0	
			1	2		フ レ イ ク		40	14		す り 石	3	1	
		砥	0	1		U フ レ イ ク		4	0		た た き 石	6	0	
		石				礫△		16	9		台	2	0	
		フ レ イ ク	48	3		礫		185	10		フ レ イ ク	305	7	
GH- 2	土 器	R フ レ イ ク	1	0		軽 燃		1	0		U フ レ イ ク	4	0	
		礫△	25	4		石 製 品		1	0		R フ レ イ ク	4	0	
		礫	163	11		石 製 品		0	2		コ	1	0	
		計	238	21		計		252	35		礫△	95	11	
			3	1	GH- 3	土 器	I B	1	0		礫	774	0	
	GH- 3	II B	22	9		II B	1,037	36			軽 燃	2	0	
		III A	142	0		III A	456	10			石 製 品	1	0	
		III B	71	1		III B	360	0			計	1,212	19	
		IV A	47	0		IV A	253	1						

表III-5-(2)

遺番	構号	名 称	分類	数 量		遺番	構号	名 称	分類	数 量		遺番	構号	名 称	分類	数 量	
				覆	土					覆	土					覆	土
GH- 4		土 器	II B	73	5			土 器	II B	25	1			土 器	I B	1	0
			III A	195	17				III A	48	237				II B	28	0
			III B	109	25				III B	10	0				III A	137	0
			IV A	124	9				IV A	51	0				III B	9	0
			IV C	5	164				IV C	1	0				IV A	1	0
			V	49	1				V	48	0				計	176	0
			計	555	221				計	183	238				すり	2	0
			石 錛	3	9				石 錛	1	0				石	10	0
			スクレイパー	17	0				ポイント・ナイフ	1	0				ク	1	0
			すり 石	5	3				スクレイパー	5	0				ク	11	0
GH- 5		土 器	た き 石	1	2			磨 製 石	斧 石	1	0			磨 製 石	礫△	39	0
			砥 台	2	0				斧 石	2	0				礫△	63	0
			フ レ イ ク	238	72				斧 石	1	0				計	185	0
			U フ レ イ ク	3	6				斧 石	2	0				フ レ イ ク	2	0
			R フ レ イ ク	1	3				斧 石	2	0				R フ レ イ ク	1	0
			礫△	51	19				斧 石	17	1				礫△	9	0
			礫	448	70				斧 石	119	3				計	42	0
			計	769	185				計	222	4				計	75	0
			石 錛	3	0				石	2	0				石	1	0
			ポイント・ナイフ	1	0				石	1	0				ド リ ル	1	0
GH- 6		土 器	つまみ付きナイフ	2	0			磨 製 石	斧 石	1	0			磨 製 石	ス ク レ イ パ ー	5	0
			スクレイパー	10	0				斧 石	2	0				磨 製 石	1	0
			磨 製 石	0	1				斧 石	24	0				斧 石	1	0
			すり 石	1	0				斧 石	3	1				斧 石	390	0
			た き 石	1	3				斧 石	17	0				ス ク レ イ パ ー	1	0
			フ レ イ ク	170	1				斧 石	2	0				磨 製 石	1	0
			U フ レ イ ク	5	0				斧 石	4	0				ス ク レ イ パ ー	24	0
			コ	1	0				斧 石	1	0				磨 製 石	1	0
			礫△	45	6				斧 石	1	0				磨 製 石	227	0
			軽 石	8	1				斧 石	0	0				計	652	0
			礫	491	0				斧 石	73	0				計	0	0
			計	738	18				計	3,817	364				ド リ ル	1	0
GH- 6		土 器	石 錛	8	1			石 錛	斧 石	16	0			石 錛	ス ク レ イ パ ー	5	0
			ド リ ル	1	0				斧 石	1	0				磨 製 石	1	0
			ポイント・ナイフ	2	0				斧 石	2	0				磨 製 石	1	0
			つまみ付きナイフ	0	1				斧 石	24	0				ス ク レ イ パ ー	390	0
			スクレイパー	37	2				斧 石	3	1				磨 製 石	1	0
			磨 製 石	2	1				斧 石	17	0				ス ク レ イ パ ー	24	0
			すり 石	12	0				斧 石	2	0				磨 製 石	1	0
			た き 石	5	3				斧 石	4	0				ス ク レ イ パ ー	0	0
			石くぼみ	1	0				斧 石	1	0				磨 製 石	0	0
			砥 台	2	0				斧 石	0	1				ス ク レ イ パ ー	0	0
			石	1	0				斧 石	1	0				磨 製 石	0	0
			フ レ イ ク	463	40				斧 石	56	0				ス ク レ イ パ ー	0	0
			U フ レ イ ク	15	0				斧 石	10	0				磨 製 石	0	0
			R フ レ イ ク	5	0				斧 石	46	0				ス ク レ イ パ ー	0	0
			コ	1	0				斧 石	116	0				磨 製 石	0	0
			礫△	120	13				斧 石	2	0				ス ク レ イ パ ー	0	0
			軽 石	0	1				斧 石	2	0				磨 製 石	0	0
			石製品	1,576	96				斧 石	3	0				ス ク レ イ パ ー	0	0
			計	2,256	159				斧 石	1	0				磨 製 石	0	0
			計	2,256	159				斧 石	4	0				ス ク レ イ パ ー	0	0
GH- 6			GP- 1	土 器	II B	11	0	GP- 2	土 器	II B	18	0	GP- 3	土 器	I B	1	0
			計	1,647	282	III A	8	0	計	61	0	計	2	0	II B	32	0
			石 錛	8	1	III A	41	0	石 錛	1	0	計	47	0	III A	47	0
			ド リ ル	1	0	IV A	2	0	石 錛	2	0	計	13	0	IV A	13	0
			ポイント・ナイフ	2	0	計	61	0	石 錛	1	0	計	1	0	V	1	0
			つまみ付きナイフ	0	1	計	56	0	石 錛	0	0	計	23	0	IV A	34	0
			スクレイパー	37	2	計	10	0	石 錛	1	0	計	37	0	V	8	0
			磨 製 石	2	1	計	46	0	石 錛	0	0	計	0	0	IV B	245	0
			すり 石	12	0	計	116	0	石 錛	0	0	計	0	0	III B	11	0
			た き 石	5	3	計	2	0	石 錛	0	0	計	0	0	III A	2	0
GH- 6			GP- 4	土 器	II B	25	1	GP- 5	土 器	II B	77	0	GP- 6	土 器	II B	41	0
			計	555	221	III A	48	0	計	183	238	IV A	102	0	III A	33	0
			石 錛	3	9	IV B	71	0	石 錛	1	0	計	3,817	364	IV B	227	0
			スクレイパー	17	0	IV C	2	0	石 錛	0	0	計	3,817	364	IV C	1	0
			すり 石	5	3	V	2	0	石 錛	0	0	計	3,817	364	V	0	0
			た き 石	1	2	計	119	3	石 錛	0	0	計	3,817	364	计	0	0
			磨 製 石	2	0	計	119	3	石 錛	0	0	計	3,817	364	计	0	0
			斧 石	0	0	計	119	3	石 錛	0	0	計	3,817	364	计	0	0
			軽 石	1	0	計	119	3	石 錛	0	0	計	3,817	364			

表III-5-(3)

遺番	構号	名 称	分類	数 量		遺番	構号	名 称	分類	数 量		遺番	構号	名 称	分類	数 量	
				覆 土	床 面					覆 土	床 面					覆 土	床 面
GP-10		土 製 品		20	0	GP-21		計		27	0	GP-30		土 器		9	0
				1	0					6	0					15	0
GP-11		土 器	II B III A	34	0			土 器	II B III A IV A V	6	0			土 器	II B III A III B	9	0
				12	0					6	0					11	0
GP-12		土 器	II B III A III B	16	0	GP-22		計		1	0			土 器	II B III A III B IV A V	1	0
				6	0					16	0					7	0
GP-13		土 器	II B III B IV A	2	0	GP-23		計		1	0			土 器	II B III A III B IV A V	1	0
				1	0					1	0					10	0
GP-14	15	土 器	II B III A IV A	3	0	GP-24		計		28	0			土 器	II B III A III B IV A V	2	0
				4	0					4	0					7	0
GP-15		計		16	0					30	0			土 器	II B III A III B IV A V	46	0
				0	0					3	0					1	0
GP-16		土 器	II B III A III B IV A V	10	0	GP-25		計		25	0			土 器	I B II B III A IV A V	56	0
				33	0					1	0					2	0
GP-17		土 器	II B III A III B IV A V	6	0	GP-26		計		1	0			土 器	II B III A III B IV A V	7	0
				19	0					1	0					46	0
GP-18		土 器	II B III A III B IV A V	23	0	GP-27		計		1	0			土 器	II B III A III B IV A V	1	0
				3	0					1	0					1	0
GP-19		土 器	II B III A III B IV A V	9	0	GP-28		計		71	0			土 器	II B III A III B IV A V	12	0
				4	0					1	0					119	0
GP-20		土 器	II B III A III B IV A V	30	0	GP-29		計		2	0			土 器	I B II B III A IV A V	2	0
				0	0					2	0					21	0
GP-21		土 器	II B III A IV A V	137	0	GP-30		計		14	0			土 器	I B II B III A III B	8	0
				80	0					14	0					37	0
GP-22		土 器	II B III A III B IV A V	132	0	GP-31		計		38	0			土 器	II B III A III B IV A V	1	0
				5	0					3	0					1	0
GP-23		土 器	II B III A III B IV A V	52	0	GP-32		計		25	0			土 器	I B II B III A IV A V	41	0
				8	0					1	0					56	0
GP-24		土 器	II B III A III B IV A V	59,925	0	GP-33		計		22	0			土 器	II B III A III B IV A V	35	0
				122	0					1	0					1	0
GP-25		土 器	II B III A III B IV A V	121	0	GP-34		計		6,168	0			土 器	II B III A III B IV A V	40	0
				5,925	0					0	0					32	0
GP-26		土 器	II B III A III B IV A V	122	0	GP-35		計		73	0			土 器	I B II B III A IV A V	53	0
				38	0					0	0					9	0
GP-27		土 器	II B III A III B IV A V	120	0	GP-36		計		122	0			土 器	I B II B III A IV A V	37	0
				38	0					0	0					1	0
GP-28		土 器	I B II B III A IV A V	121	0	GP-37		計		122	0			土 器	I B II B III A IV A V	53	0
				5,925	0					0	0					9	0
GP-29		土 器	I B II B III A IV A V	122	0	GP-38		計		122	0			土 器	I B II B III A IV A V	53	0
				3	0					0	0					1	0
GP-30		土 器	I B II B III A III B V	123	0	GP-39		計		123	0			土 器	I B II B III A IV A V	9	0
				3	0					0	0					1	0
GP-31		土 器	I B II B III A III B V	124	0	GP-40		計		124	0			土 器	I B II B III A IV A V	9	0
				3	0					0	0					2	0
GP-32		土 器	I B II B III A III B V	125	0	GP-41		計		125	0			土 器	I B II B III A IV A V	4	0
				3	0					0	0					0	0
GP-33		土 器	I B II B III A III B V	126	0	GP-42		計		126	0			土 器	I B II B III A IV A V	4	0
				3	0					0	0					0	0
GP-34		土 器	I B II B III A III B V	127	0	GP-43		計		127	0			土 器	I B II B III A IV A V	4	0
				3	0					0	0					0	0
GP-35		土 器	I B II B III A III B V	128	0	GP-44		計		128	0			土 器			

表III-5-(4)

遺構番号	名称	分類	数量		遺構番号	名称	分類	数量		遺構番号	名称	分類	数量	
			覆土	床面				覆土	床面				覆土	床面
GP-45		IV A	19	0	GSP-13	礫		2	0	GSP-47	礫		1	0
	計		48	0		計		2	0		計		2	0
	すり石		1	0	GSP-14	フレイク		1	0		土器	V	13	0
	フレイク		8	0		計		1	0				13	0
	礫△		3	0	GSP-15	土器	II B	1	0		礫△		1	0
	礫		36	0		計		1	0		礫		1	0
GP-46	計		48	0		フレイク		1	0		計		2	0
	土器	I B	1	0		計		1	0	GSP-48	土器	IV A	4	0
		II B	1	0	GSP-18	土器	II B	1	0		計		4	0
		III A	38	0		計		1	0	GSP-49	フレイク		1	0
		III B	8	0	GSP-23	礫		2	0		計		1	0
		IV A	8	0		計		2	0	GSP-50	土器	V	1	0
	計		56	0	GSP-24	礫△		1	0		計		1	0
	すり石		1	0		計		1	0	GSP-52	土器	V	5	0
	くぼみ石		2	0	GSP-25	土器	II B	1	0		計		5	0
	フレイク		6	0		礫		1	0		フレイク		3	0
GP-47	礫△		5	0	GSP-26	計		3	0		礫		1	0
	礫		17	0		礫		3	0		計		4	0
	計		31	0	GSP-27	計		1	0	GSP-54	土器	V A	4	0
	土器	IV A	1	0		礫△		1	0		V	16	0	
		V	6	0	GSP-29	計		4	0		計		20	0
GSP-1	計		7	0	GSP-30	土器	III B	1	0	GSP-55	土器	V	4	0
	フレイク		7	0		土器	V	1	0		計		4	0
	礫		4	0		計		3	0		礫		1	0
	計		11	0	GSP-31	フレイク		3	0		計		1	0
	土器	II B	7	0		礫△		4	0	GSP-56	土器	V A	3	0
GSP-2	III A	4	0			計		7	0		V	5	0	
	III B	15	0	GSP-33	フレイク		1	0		計		8	0	
	IV A	1	0		礫△		1	0		フレイク		6	0	
	計		27	0		計		2	0		計		6	0
	石器		1	0	GSP-34	土器	II B	1	0	GSP-57	土器	III B	4	0
GSP-3	スクレイパー		1	0		III A	1	0			IV A	1	0	
	フレイク		8	0		III B	1	0			V	10	0	
	礫△		1	0		計		3	0		計		15	0
	礫		3	0	GSP-35	土器	IV A	3	0		フレイク		8	0
	計		14	0		計		3	0		礫		6	0
GSP-4	土器	II A	1	0	GSP-36	土器	II B	1	0		計		14	0
		III B	6	0		III A	3	0	GSP-58	土器	V	7	0	
	計		7	0		計		7	0		計		7	0
	すり石		1	0	GSP-37	フレイク		1	0		フレイク		6	0
	たたき石		1	0		礫△		1	0		礫		2	0
GSP-5	フレイク		3	0		計		1	0	GSP-59	たたき石		1	0
	礫△		1	0	GSP-38	土器	V	2	0		フレイク		1	0
	礫		4	0		計		1	0		計		2	0
	石製品		1	0	GSP-60	土器	V	2	0		フレイク		6	0
	計		11	0		計		1	0		礫		2	0
GSP-6	土器	II B	1	0	GSP-61	土器	V	3	0		計		8	0
	計		1	0		計		4	0		たたき石		1	0
	フレイク		1	0	GSP-62	土器	V	1	0		フレイク		1	0
	礫△		5	0		計		1	0		計		2	0
	礫		4	0	GSP-63	土器	V	7	0		フレイク		3	0
GSP-7	計		10	0		計		10	0	GSP-64	土器	V	7	0
	土器	III A	2	0	GSP-39	土器	III A	1	0		計		7	0
		III B	1	0		計		1	0		フレイク		1	0
	計		4	0	GSP-40	フレイク		1	0		計		2	0
	フレイク		1	0		計		1	0		フレイク		3	0
GSP-8	礫		7	0	GSP-42	計		1	0	GSP-65	土器	III B	1	0
	計		8	0		フレイク		1	0		計		1	0
	土器	II B	1	0	GSP-43	土器	III B	23	0	GSP-66	土器	V	3	0
	計		1	0		計		23	0		計		2	0
	フレイク		5	0	GSP-44	台石		1	0		フレイク		7	0
GSP-9	計		10	0		フレイク		1	0		計		1	0
	土器	III A	2	0	GSP-45	計		1	0	GSP-67	土器	V	3	0
		III B	1	0		フレイク		1	0		計		1	0
	計		4	0		計		4	0		フレイク		1	0
	フレイク		1	0	GSP-46	台石		1	0	GSP-68	土器	V	3	0
GSP-10	計		1	0		フレイク		1	0		計		1	0
	礫		1	0		コア		1	0		フレイク		1	0
GSP-11	計		1	0	GSP-47	計		1	0		計		2	0
	土器	II B	2	0		フレイク		1	0		フレイク		3	0
	計		2	0		コア		3	0		計		3	0
	礫		1	0	GSP-48	計		5	0		フレイク		3	0
	計		1	0		フレイク		5	0		計		3	0
GSP-12	礫		1	0	GSP-49	計		4	0	GSP-69	土器	V	3	0
	計		1	0		フレイク		4	0		計		3	0

表III-5-(5)

遺構番号	名称	分類	数量		遺構番号	名称	分類	数量		遺構番号	名称	分類	数量	
			覆土	床面				覆土	床面				覆土	床面
GSP-66	礫		1	0	GF- 2	計		14	0	GF- 8	礫△		3	0
	計		1	0		土 器	III A	2	0		礫		59	0
GSP-68	土 器	III A	1	0	GF- 3	計		2	0	GF- 10	計		94	0
		IV A	1	0		フレイク		1	0		土 器	III B	2	0
GSP-71	計		2	0	GF- 3	礫△		2	0		計		2	0
	土 器	III A	1	0		礫		14	0		フレイク		3	0
GSP-72		IV A	1	0	GF- 3	計		17	0		礫		10	0
	計		2	0		土 器	IV A	1	0	GF- 11	計		13	0
GSP-73	磨製石斧		1	0	GF- 3	IV C		1	0		土 器	IV A	1	0
	計		1	0		V		2	0		計		1	0
GSP-75	土 器	V	17	0	GF- 4	計		4	0	GF- 11	土 器	II B	2	0
	計		17	0		フレイク		3	0		III B	5	0	
GSP-76	フレイク		1	0	GF- 4	礫△		3	0		計		7	0
	礫		1	0		礫		2	0		フレイク		1	0
GSP-77	計		2	0	GF- 6	計		8	0	GF- 12	礫		17	0
	土 器	IV A	1	0		土 器	II B	2	0		計		18	0
GSP-78		V	6	0	GF- 6	III A		2	0	GF- 12	フレイク		1	0
	計		7	0		III B		2	0		礫		9	0
GF- 1	土 器	III B	1	0	GF- 6	計		22	0	GF- 13	計		10	0
		V	7	0		フレイク		12	0		土 器	II B	5	0
GSP-79	計		8	0	GF- 6	礫△		6	0		計		5	0
	フレイク		1	0		礫		21	0		フレイク		1	0
GSP-80	計		1	0	GF- 6	計		39	0		礫		4	0
	土 器	IV A	4	0		土 器	III B	1	0		計		5	0
GSP-81		V	6	0	GF- 6	V		1	0	GF- 15	土 器	III A	1	0
	計		10	0		計		2	0		IV A	18	0	
GSP-82	石 鑑		1	0	GF- 7	すり石		1	0		計		19	0
	フレイク		4	0		フレイク		3	0		フレイク		5	0
GSP-83	計		5	0	GF- 7	礫		14	0		礫△		4	0
	土 器	III A	4	0		計		18	0		礫		11	0
GF- 1	計		4	0	GF- 7	スクリペイパー		19	0	GF- 19	計		20	0
	礫		14	0		フレイク		1	0		土 器	IV A	2	0
GF- 1	計		4	0	GF- 7	スクリペイパー		31	0		スクリペイパー		5	0
	礫		14	0		フレイク				GF- 19	計		32,131	1,833
	計		32,131	1,833							統 計		33,964	

遺構出土掲載石器等一覧

表III-6-(1)

遺構	図-番号	種類	層	重量	石材	遺構	図-番号	種別	層	重量	石材
GH- 1	4- 14	スクリペイパー	床	9.8	Sh.	GH- 4	13-122	たたき石	覆- 8	580.8	Mud.
	- 15	"	覆- 1	2.3	Sh.		-123	"	覆土	277.4	And.
GH- 2	6- 28	石 鑑	覆土	4.1	Sh.		-124	くぼみ石	覆- 1	471.8	Mud.
	- 29	つまみ付ナイフ	覆- 2	4.7	"		-125	"	覆土	248.3	"
GH- 3	- 30	スクリペイパー	覆土	16.2	"		-126	"	覆- 1	205.5	And.
	- 31	土 製 品	"	2.2	-		-127	"	覆- 11	215.4	"
GH- 4	- 32	磨製石斧	"	213.1	Gr.Mud.		-128	"	"	777.0	Sa.
	- 33	くぼみ石	覆土	125.2	Pum.		-129	石	覆- 6	680.0	And.
GH- 5	- 34	"	覆- 1	121.5	Mud.	GH- 4	18- 47	石 鑑	床	0.4	Sh.
	- 35	石 製 品	床	12.6kg	Aud.		- 48	"	覆土	0.6	"
GH- 6	13-108	石 鑑	覆土	0.7	Sh.		- 49	"	"	0.9	"
	-109	"	"	3.0	"		- 50	"	床	1.0	"
GH- 7	-110	"	覆- 14	2.8	"		- 51	"	覆土	0.7	"
	-111	スクリペイパー	覆土	11.5	"		- 52	"	"	2.6	"
GH- 8	-112	"	"	8.7	"		- 53	"	"	1.7	"
	-113	"	"	6.4	"		- 54	"	床	4.4	"
GH- 9	-114	つまみ付ナイフ	覆- 16	34.9	"		- 55	"	"	0.6	"
	-115	スクリペイパー	覆土	14.2	"		- 56	"	"	0.6	"
GH- 10	-116	"	覆土	45.8	"		- 57	"	"	3.6	"
	-117	"	覆土	31.6	"		- 58	"	"	-	"
GH- 11	-118	磨製石斧	"	9.2	Gr.Mud.		- 59	スクリペイパー	覆- 8	13.9	"
	-119	石 製 品	覆- 12	39.2	Sl.		- 60	"	覆土	16.8	"
GH- 12	-120	石 製 品	覆- 16	10.5	Mud.		- 61	"	覆- 2	63.0	"
	-121	すり石	床	950.0			- 62	"	覆土	15.1	"
GH- 13	-122	"	"	-			- 63	"	"	21.0	"

表III-6-(2)

遺構	図-番号	種別	層	重量	石材	遺構	図-番号	種別	層	重量	石材
GH-4	18-64	スクレイパー	覆土	17.6	Sh.		27-102	スクレイパー	床	25.2	Sh.
	-65	"	"	38.0	"		-103	"	覆土	15.3	"
	-66	"	"	21.5	"		-104	"	"	14.4	"
	-67	"	"	65.1	"		-105	"	"	24.1	"
	-68	"	"	24.6	"		-106	"	床	7.3	"
	-69	"	"	79.6	"		-107	"	覆土	9.1	"
	19-70	"	"	18.1	"		-108	"	"	20.1	"
	-71	"	"	12.0	"		-109	"	"	12.2	"
	-72	"	"	12.9	"		-110	"	"	14.6	"
	-73	"	"	19.0	"		28-111	"	"	10.7	"
	-74	"	"	5.0	"		-112	"	床	7.3	"
	-75	すり石	"	286.8	Sa.		-113	"	覆土	9.0	"
	-76	"	"	308.2	And.		-114	"	"	8.3	"
	-77	"	床	262.3	Mud.		-115	"	"	4.4	"
	-78	"	覆-11	85.0	"		-116	"	"	3.5	"
	-79	"	覆土	333.4	And.		-117	"	"	6.1	"
	-80	たたき石	"	330.6	Mud.		-118	"	"	3.3	"
	-81	"	床	313.3	And.		-119	"	"	3.0	"
	-82	ストンリタッチャー	覆土	335.2	"		-120	"	"	4.0	"
	-83	たたき石	床	630.0	"		-121	"	"	18.1	"
	-84	"	"	1,060.0	"		-122	"	"	36.6	"
	-85	砥石	覆土	186.1	Sa.		-123	"	"	17.7	"
	-86	台石	床	23.3kg	Mud.		-124	磨製石	斧	31.5	Gr.Mud.
GH-5	22-52	石	鎌	0.9	Sh.		-125	石	鋸	34.1	Mud.
	-53	"	"	0.6	"		-126	すり石	覆-6	559.6	Sa.
	-54	"	"	5.9	"		-127	"	覆土	420.6	And.
	-55	ポイント・ナイフ	"	8.0	"		-128	"	"	38.5	Mud.
	-56	つまみ付ナイフ	"	3.0	"		-129	"	覆-5	1,050.0	And.
	-57	"	"	6.3	"		-130	ストンリタッチャー	覆土	35.7	Mud.
	-58	スクレイパー	覆-1	8.0	"		-131	"	"	92.5	"
	-59	"	覆土	17.4	"		-132	たたき石	"	348.0	And.
	-60	"	"	15.0	"		-133	"	覆-4	252.6	"
	-61	"	"	27.2	"		-134	"	床	154.0	"
	-62	"	"	52.3	"		-135	"	"	300.2	Mud.
	-63	"	覆-2	19.5	"		29-136	すり石	覆-9	162.0	"
	-64	"	覆土	29.2	"		-137	たたき石	覆土	189.6	"
	-65	"	"	21.5	"		-138	"	覆土	193.0	"
	-66	"	"	12.5	"		-139	くぼみ石	覆土	199.3	"
	-67	磨製石	斧	89.9	Gr.Mud.		-140	"	"	309.8	And.
	-68	すり石	床	920.0	And.		-141	石	錘	342.0	"
	-69	たたき石	床	181.6	Sa.		-142	有孔石	覆土	8.1	Mud.
	-70	"	"	267.8	Mud.		-143	"	"	20.0	"
	-71	"	"	191.6	And.						
	-72	くぼみ石	覆土	20.0	Pum.						
GH-6	26-73	石	鎌	0.5	Sh.		GH-7	31-21	石	鎌	Sh.
	-74	"	"	1.3	"		-22	ポイント・ナイフ	"	4.8	"
	-75	"	"	1.2	"		-23	スクレイパー	"	5.4	"
	-76	"	床	1.5	"		-24	"	"	23.4	"
	-77	"	"	1.7	"		-25	"	"	16.9	"
	-78	"	覆土	2.6	"		-26	"	"	17.6	"
	-79	"	"	1.9	"		-27	"	"	21.2	"
	-80	"	"	2.0	"		-28	磨製石	斧	181.2	"
	-81	"	"	6.1	"		-29	たたき石	"	338.0	Ch.
	-82	ポイント・ナイフ	"	13.5	Ob.		-30	"	"	137.9	"
	-83	ドリル	"	17.7	Sh.		-31	台石	"	780.0	Mud.
	-84	つまみ付ナイフ	床	2.8	"						
	-85	スクレイパー	覆土	12.3	"						
	-86	"	"	38.5	"						
	-87	"	"	18.9	"						
	-88	"	"	18.4	"						
	-89	"	"	26.0	"						
	-90	"	"	37.7	"						
	-91	"	"	36.3	"						
	-92	"	"	60.1	"						
	-93	"	"	32.7	"						
	94	"	"	28.4	"						
	27-95	"	"	60.2	"						
	96	"	"	46.1	"						
	97	"	"	14.0	"						
	98	"	"	44.1	"						
	99	"	"	51.0	"						
	-100	"	"	11.0	"						
	-101	"	"	14.8	"						
GH-9	38-62	石	鎌	0.9	Sh.		GH-9	38-62	石	鎌	Sh.
	-63	"	"	0.5	"		-63	覆-9	0.5	"	
	-64	"	"	1.0	"		-64	覆-4	1.0	"	
	-65	"	"	1.4	"		-65	覆土	1.4	"	
	-66	"	"	1.4	"		-66	覆-2	1.4	"	
	-67	"	"	1.3	"		-67	覆土	1.3	"	
	-68	"	"	0.5	"		-68	"	0.5	"	
	-69	"	"	0.5	"		-69	覆-10	0.5	"	
	-70	"	"	0.7	"		-70	覆-2	0.7	"	
	-71	"	"	1.3	"		-71	覆-11	1.3	Aga.	
	-72	"	"	1.7	"		-72	覆-8	1.7	Sh.	
	-73	"	"	0.5	"		-73	覆-6	0.5	"	
	-74	"	"	0.6	"		-74	覆土	0.6	"	
	-75	"	"	1.2	"		-75	覆-9	1.2	"	
	-76	"	"	1.9	"		-76	覆土	1.9	"	
	-77	"	"	1.2	"		-77	"	1.2	"	
	-78	ドリル	"	1.3	"		-78	ドリル	"	1.3	"
	-79	つまみ付ナイフ	"	3.0	"		-79	つまみ付ナイフ	"	3.0	"
	-80	"	"	20.6	"		-80	"	"	20.6	"
	-81	スクレイパー	"	6.3	"		-81	スクレイパー	"	6.3	"

表III-6-(3)

遺構	図-番号	種別	層	重量	石材	遺構	図-番号	種別	層	重量	石材
GH- 9	38- 82	スクレイパー	覆土	16.3	Sh.		44- 61	スクレイパー	覆土	15.3	Sh.
	- 83	"	"	9.2	"		- 62	たたき石	覆-11	267.5	Mud.
	- 84	"	"	9.4	"		- 63	"	覆-12	675.0	Sa.
	- 85	"	"	9.0	"		- 64	くぼみ石	覆-13	188.0	Mud.
	- 86	"	覆-15	11.6	"		- 65	棍棒状石器	"	1,100.0	"
	- 87	"	覆土	2.2	"	GP- 6	45- 2	メジロサメ属1種下顎骨	覆- 1	(0.6)	Sh.
	- 88	"	覆-13	2.7	"		46- 46	ドリル	覆- 8	9.1	"
	- 89	"	覆土	40.9	"		- 47	スクレイパー	覆- 1	23.0	"
	- 90	"	覆- 2	14.9	"		- 48	"	"	22.2	"
	- 91	"	覆- 5	18.3	"		- 49	"	覆土	(8.7)	"
	- 92	"	覆土	79.9	"		- 50	"	"	27.3	"
	- 93	"	覆-10	22.3	"		- 51	"	覆- 1	(102.2)	And.
	- 94	"	覆- 9	7.6	"	GP-19	47- 20	スクレイパー	覆土	57.3	Sh.
	- 95	"	覆土	2.7	"		- 21	"	覆- 1	41.6	"
	- 96	"	"	11.2	"		- 22	"	覆- 2	12.8	"
	- 97	"	"	13.5	"		- 23	"	覆- 5	6.2	"
	- 98	"	"	23.6	"		- 24	"	覆土	5.1	"
	39- 99	"	"	4.7	"	GP-25	49- 46	スクレイパー	覆土	22.3	Sh.
	-100	"	"	6.5	"		- 47	たたき石	"	150.0	Mud.
	- 01	"	"	25.0	"		- 48	くぼみ石	"	224.1	"
	-102	"	覆-10	23.3	"	GP- 2	53- 12	ドリル	覆土	0.9	Sh.
	-103	"	覆土	11.8	"		- 13	スクレイパー	"	20.0	"
	-104	"	"	3.8	"		- 14	"	"	11.4	"
	-105	すり石	覆- 5	145.8	And.		- 15	すり石	"	1,100.0	And.
	-106	"	床	185.9	"	GP- 4	56- 11	すり石	覆- 3	567.0	And.
	-107	たたき石	覆土	74.4	Mud.		- 12	ストンリタッチャ	覆- 1	208.1	Mud.
	-108	"	"	217.7	And.	GP-32	58- 8	スクレイパー	覆土	18.5	Sh.
	-109	"	"	239.7	Mud.	GP-33	62- 8	すり石	覆- 2	326.4	And.
	-110	"	"	180.0	"	GP-10	63- 16	スクレイパー	覆土	32.5	Sh.
	-111	"	覆- 1	246.3	Sh.		- 17	土製品	覆土	11.9	"
	-112	"	覆- 2	445.2	And.	GP-46	70- 19	くぼみ石	覆土	222.9	Mud.
	-113	"	覆- 4	459.2	Mud.		- 20	"	"	418.8	"
	-114	"	覆土	382.6	Che.		- 21	すり石	"	162.2	"
	-115	"	覆- 3	175.4	And.	GP-34	72- 8	スクレイパー	覆土	37.8	Sh.
	-116	"	覆土	150.0	Mud.	GP- 9	74- 4	スクレイパー	覆土	36.0	Sh.
	-117	くぼみ石	"	260.1	"	GP-23	75- 4	スクレイパー	覆土	49.4	Sh.
	-118	"	覆- 2	141.0	Sda.		- 5	たたき石	"	558.8	And.
	-119	砥石	覆土	354.4	"	GP- 5	76- 22	スクレイパー	覆- 2	16.2	Sh.
	-120	石製品	"	4.4	Sh.		- 23	"	覆土	8.3	"
	-121	"	"	4.9	Od.	GSP- 1	83- 17	石鎌	覆土	2.2	Sh.
	-122	"	"	3.6	Jad.		- 18	スクレイパー	"	12.5	"
	-123	"	"	50.8	Mud.	- 2	- 19	たたき石	"	610.5	Mud.
	-124	"	"				- 20	すり石	"	970.0	"
GP-31	44- 55	石鎌	覆- 3	1.3	Sh.	GSP-2-GP-34	- 21	石製品	"	68.4	Si.
	- 56	"	覆土	0.5	"	GF- 6	86- 7	すり石	覆土	1,150.0	And.
	- 57	スクレイパー	"	55.7	"	GF-19	90- 2	スクレイパー	覆土	38.0	Sh.
	- 58	"	"	30.4	"		- 3	すり石	"	950.0	And.
	- 59	"	"	7.2	"						
	- 60	"	"	5.7	"						

I群B類掲載土器一覧

表III-7

図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘層	層	図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層
93- 1	R-61	III	93-12	Q-62	III	93-23	U-59	III	93-34	R-63	I	93-45	U-59	III中
- 2	U-60	I	-13	W-56	III下	-24	W-55	I	-35	T-60	III下	-46	U-59	III下
- 3	Q-63	III下	-14	S-61	I	-25	T-60	III下	-36	W-55	I	-47	X-57	III
- 4	R-60	III	-15	W-56	III	-26	Y-55	III下	-37	U-59	III下	-48	W-58	III上
- 5	R-60	III	-16	R-60	III	-27	Y-55	III下	-38	W-57	III	-49	W-57	III
- 6	Y-55	III下	-17	R-63	III	-28	T-60	III下	-49	V-56	III	-50	Y-54	III
- 7	U-59	III	-18	Q-61	III	-29	T-60	III	-40	W-56	III	-51	W-58	III上
- 8	S-60	III	-19	Q-63	III	-30	U-59	III中	-41	W-56	III下			
- 9	U-59	III	-20	R-63	III	-31	U-59	III	-42	T-60	III下			
-10	R-60	III	-21	W-58	III上	-32	P-61	III下	-43	W-57	III			
-11	R-63	III	-22	W-58	I	-33	U-59	III中	-44	W-56	III			

II群B類掲載土器一覧

表III-8-(1)

図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層
94- 1	U-57	III	94- 3	T-58	III	94- 5	W-55	III	94- 7	T-59	III上	94- 9	V-58	III
- 2	U-57	III下	- 4	T-58	III	- 6	S-59	III	- 8	V-57	III	-10	T-59	III中

表III-8-(2)

図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層
94- 11	T-60	III	94-45-b	S-58	III下	95- 76	T-58	III	96-109	W-58	III	96-141	Z-54	I
- 12	T-60	"	- 46	R-60	III	- 77	S-58	"	-110	S-60	"	-142	T-57	III中
- 13	U-58	III中	- 47	W-56	"	- 78	Q-60	III上	-111	W-56	"	-143	W-56	III
- 14	V-57	III	- 48	W-56	"	- 79	R-61	III	-112	W-56	"	-144	W-56	"
- 15	V-57	"	- 49	S-58	I	- 80	W-56	"	-113	X-57	"	-145	T-60	"
- 16	R-60	"	95- 50	S-59	III	- 81	Y-55	III下	-114	Q-63	III下	-146	W-56	"
- 17	S-61	"	- 51	S-59	"	- 82	T-61	"	-115	S-58	"	-147	Y-54	I
- 18	S-60	"	- 52	S-61	"	- 83	S-58	III	-116	S-59	"	-148	W-56	III
- 19	R-62	I	- 53	R-60	"	- 84	W-56	"	-117	W-56	III	-149	X-56	"
- 20	S-61	III	- 54	R-60	"	- 85	W-56	"	-118	Q-60	"	-150	Y-55	III中
- 21	S-60	"	- 55	V-58	"	- 86	R-59	III下	-119	S-58	"	-151	Y-54	I
- 22	U-60	"	-56-a	S-59	"	- 87	V-58	III	-120	T-58	"	-152	U-60	"
- 23	S-60	"	-56-b	S-59	"	- 88	W-56	"	-121	T-58	"	-153	Q-62	"
- 24	T-60	"	-56-c	S-59	"	- 89	W-56	"	-122	Z-54	I	-154	U-60	"
- 25	U-57	"	- 57	T-59	III上	- 90	W-56	"	-123	X-57	III	-155	U-60	III
- 26	T-60	"	- 58	T-59	III中	- 91	Y-54	"	-124	T-58	"	-156	X-55	"
- 27	T-60	"	- 59	T-59	"	- 92	U-60	"	-125	R-61	"	97-157	X-55	"
- 28	T-60	"	- 60	T-59	III上	- 93	S-58	III下	-126	R-60	"	-158	Y-54	I
- 29	V-59	"	- 61	S-61	"	- 94	W-56	III	-127	W-56	"	-159	Z-54	"
- 30	S-60	"	- 62	T-59	"	- 95	T-58	"	-128	R-59	III中	-160	X-55	III
- 31	S-59	"	- 63	R-62	II	- 96	U-60	"	-129	W-56	III	-161	Z-54	"
- 32	V-59	"	- 64	T-60	I	- 97	S-58	III下	-130	X-55	"	-162	T-59	"
- 33	S-59	"	- 65	Q-62	III	- 98	W-56	III	-131	R-60	"	-163	W-57	I
- 34	T-59	"	- 66	S-60	I	- 99	U-56	"	-132	V-56	"	-164	V-57	III
- 35	S-59	"	- 67	S-60	III	-100	U-59	I	-133-a	W-56	"	-165	Z-54	I
- 36	W-58	III上	-68-a	S-58	"	-101	U-59	III	-133-b	W-56	"	-166	W-58	III
- 37	S-59	III	-68-b	S-58	"	-102	T-58	"	-134	W-56	"	-167	a-54	I
- 38	R-60	II	-68-c	S-58	"	-103	W-56	"	-135	W-56	"	-168	T-59	"
- 39	R-61	III	- 69	W-56	"	-104	T-58	I	-136	W-56	"	-169	W-57	III
- 40	W-56	"	- 70	W-56	"	96-105	Q-61	III	-137	W-56	"	-170	R-59	III上
- 41	Y-56	"	- 71	W-56	"	-106-a	W-55	I	-338	W-56	"	-171	U-58	III下
- 42	T-60	"	- 72	V-59	"	-106-d	W-56	III	-139-a	Y-54	"	-172	U-58	"
- 43	T-60	"	- 73	S-58	"	-107-a	Z-55	I	-139-b	Y-54	"			
- 44	T-60	"	- 74	W-56	"	-107-b	Z-55	III	-139-c	Y-54	"			
-45-a	T-58	"	- 75	S-60	"	-108	W-56	"	-140	V-58	I			

III群A類掲載土器一覧

表III-9

図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層
98- 1	U-59	III	101- 29	U-59	III上	102-55-a	T-59	III中	102- 82	W-56	III	103-110	Y-54	III
- 2	R-61	"	- 30	T-61	III下	-55-b	T-59	"	- 83	W-56	"	-111	V-56	I
- 3	U-59	"	- 31	R-59	III上	- 56	Z-54	I	- 84	R-60	"	-112	U-58	III下
- 4	R-60	"	- 32	U-57	III	- 57	V-57	III	- 85	V-56	I	-113	W-57	III
- 5	U-59	I	- 33	S-59	III下	- 58	W-56	"	- 86	T-59	III上	-114	S-59	III上
- 6	W-56	III	- 34	U-59	III中	- 59	S-61	"	- 87	T-59	"	-115	U-57	III
- 7	R・S-61	"	- 35	T-61	III下	- 60	W-58	III上	- 88	T-61	III下	-116	S-59	III下
- 8	R-61	"	- 36	T-59	III上	- 61	S-58	III	- 89	W-57	III	-117	U-60	III
- 9	T-60	"	- 37	U-59	I	- 62	S-58	"	103- 90	S-59	I	-118	T-59	III中
- 10	R-61	"	- 38	W-56	III	- 63	S-59	I	- 91	S-59	III	-119	V-57	III
- 11	Y-55	"	- 39	V-57	"	- 64	P-62	"	- 92	Q-61	III下	-120-a	T-59	III上
99- 12	Y-55	III下	- 40	U-59	"	- 65	W-55	III	- 93	S-59	"	-120-b	T-59	"
- 13	Q・R-61	III	- 41	V-58	III中	- 66	R-60	"	- 94	S-59	III	-121	W-57	III
100- 14	V-57	III上	- 42	X-56	III	- 67	S-61	I	- 95	W-56	"	-122	S-59	"
- 15	a-63	I	- 43	R-61	"	- 68	W-58	III	- 96	W-57	"	-123	Z-54	I
- 16	V-58	"	- 44	Q-61	"	- 69	S-59	"	- 97	W-55	"	-124	W-57	III
- 17	R-60	III	- 45	R-61	III上	- 70	V-57	"	- 98	V-57	I	-125	Q-61	I
- 18	T-59	III下	- 46	T-57	III	- 71	Q-61	"	- 99	T-60	III	-126	S-59	III
- 19	U-59	I	- 47	W-55	I	- 72	S-59	"	-100	V-58	"	-127-a	S-60	"
- 20	T-58	III上	- 48	S-59	III	- 73	W-56	"	-101	W-58	III上	-127-b	S-61	"
- 21	V-59	II上	- 49	S-58	"	- 74	T-58	III上	-102	R-60	III	-127-c	S-61	"
- 22	R-61	III	- 50	R-60	"	- 75	S-59	III	-103	W-55	"	-128-a	Q-61	"
- 23	V-56	"	-51-a	V-58	"	- 76	T-60	"	-104	S-59	III下	-128-b	Q-61	I
- 24	Q-59	I	-51-b	V-58	"	- 77	Q-63	III下	-105	U-57	III	-128-c	Q-61	III
- 25	T-59	III上	-52-a	T-60	III下	- 78	X-56	III	-106	R-61	III下	-129	S-59	"
- 26	Q-60	III下	-52-b	T-60	"	- 79	X-55	"	-107	S-59	III	-130	P-62	"
- 27	U-59	III上	102- 53	P-61	"	- 80	S-58	III下	-108	U-60	"			
101- 28	S-59	III	- 54	R-61	III	- 81	W-56	III	-109	R-61	"			

III群B類掲載土器一覧

図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層
104- 1	Q・R-61, V-57	III	104- 25	U-59	I	105- 46	Q-62	III下	105- 70	U-59	III上	106- 94	V-57	III
- 2	R-61	"	- 26	Q-62	III	- 47	R-61	III上	- 71	S-59	III	- 95	V-56	III下
- 3	R-61	"	- 27	R-60	"	- 48	U-56	III	- 72	S-62	I	- 96	S-61	III中
- 4	Q-61	"	-28-a	R-61	"	- 49	R-60	"	- 73	Z-54	III	- 97	T-59	III上
- 5	Q-62	"	-28-b	R-61	III上	- 50	Q-63	III下	- 74	V-58	"	- 98	R-62	I
- 6	S-61	"	-28-c	R-61	"	- 51	R-61	III上	- 75	R-61	"	- 99	Q-63	III下
- 7	R-61	"	- 29	P-62	III	- 52	R-63	I	- 76	S-61	I	-100	R-60	III
- 8	Q-62	"	- 30	T-60	I下	- 53	U-58	III下	- 77	R-61	III	-101	V-57	"
- 9	T-59	III上	- 31	R-61	I	- 54	R-60	III	- 78	S-61	"	-102	S-59	"
- 10	Q-61	III	105- 32	R-61	III	- 55	T-61	"	- 79	R-62	I	-103	W-57	"
- 11	W-55	I	- 33	R-61	"	- 56	Q-62	"	- 80	Q-62	"	-104	W-57	III下
- 12	R-61	III	- 34	Q-61	"	- 57	W-57	"	- 81	O-62	III上	-105	Q-61	III
- 13	V-57	"	- 35	V-56	"	- 58	P-62	"	- 82	R-63	III	-106	S-59	"
- 14	T-61	"	- 36	R-61	III上	- 59	R-61	"	- 83	O-61	"	-107	R-59	III上
- 15	Q-61	"	- 37	S-58	III	- 60	R-61	III上	- 84	V-57	"	-108	Q-63	III下
- 16	R-62	I	-38-a	P-63	III下	- 61	U-57	III	- 85	S-58	I	-109	R-61	III上
- 17	R-61	"	-38-b	P-63	"	- 62	Q-63	"	- 86	X-56	III	-110	Q-62	III下
- 18	S-62	III	- 39	S-59	III	- 63	S-62	I	- 87	Q-62	I	-111	S-62	III
- 19	Q-62	I	- 40	R-61	III上	- 64	R-62	"	- 88	P-62	III上	-112	S-61	III上
- 20	R-60	III	- 41	Q-63	III下	- 65	不明	"	- 89	U-58	I	-113	S-58	III
- 21	Q-61	I	- 42	R-60	III	- 66	X-56	III	- 90	U-58	"	-114	S-61	I
- 22	R-61	III	- 43	R-61	"	- 67	R-61	"	- 91	Q-60	III	-115	S-61	"
- 23	T-61	"	- 44	R-61	III上	- 68	U-59	I	106- 92	R-62	I	-116	不明	"
- 24	U-57	"	- 45	S-61	III	- 69	X-55	III	- 93	W-57	III	-117	R-62	III下

表III-11

図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層
107- 1	R-62	III	107- 10	R-61	III	107- 19	R-62	III	107- 28	R-61	I	107- 36	S-61	III中
- 2	R-61	III	- 11	Q-63	III下	- 20	Q-61	"	- 29	R-61	"	108- 37	R-62	I
- 3	S-59	"	- 12	Q-62	III	- 21	R-62	"	- 30	R-61	III	- 38	Q-61	III
- 4	R-62	"	- 13	Q-62	"	- 22	R-61	III下	-31-a	Q-62	"	- 39	Q-60	"
- 5	S-61	III上	- 14	R-63	I	- 23	Q-61	I	-31-b	Q-61	"	- 40	R-58	III上
- 6	S-61	"	- 15	Q-62	III下	- 24	S-59	III上	- 32	S-59	I	- 41	R-61	I
- 7	Q-61	III	- 16	Q-62	"	- 25	Q-62	III	- 33	Q-63	"			
- 8	S-58	II	- 17	Q-63	I	- 26	Q-62	"	- 34	S-62	"			
- 9	S-62	III	- 18	S-58	III下	- 27	R-62	I	- 35	S-60	III			

表III-12

図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層
109- 1	W-56	III	110- 24	V-57	III	110- 48	W-56	III下	112-67-a	U-57	III	113- 90	Z-55	III
- 2	W-57	"	- 25	V-57	III上	- 49	V-57	III	-67-b	V-56	"	- 91	X-56	"
- 3	X-55	"	- 26	V-56	III	111-50-a	R-62	"	- 68	X-55	"	- 92	X-55	"
- 4	W-56	"	- 27	X-56	I	-50-b	R-62	"	- 69	V-57	"	-93-a	V-58	"
- 5	Y-56	"	- 28	V-56	III	-50-c	R-62	"	- 70	V-56	"	-93-b	V-58	"
- 6	V-58	"	- 29	U-58	I	-50-d	R-62	I	- 71	X-56	"	- 94	W-57	"
- 7	S・T-58	"	- 30	V-57	III	- 51	U-57	III	- 72	X-57	"	- 95	W-58	I
- 8	W-56	"	- 31	V-56	"	- 52	R-60	"	- 73	X-56	"	- 96	X-55	III
- 9	X-56	"	- 32	X-56	"	- 53	V-57	"	- 74	X-55	"	- 97	X-55	"
- 10	Y-56	"	- 33	W-57	"	- 54	Y-56	"	- 75	Y-56	"	- 98	X-56	"
- 11	W-56	"	- 34	V-58	I	- 55	V-56	"	- 76	X-57	"	- 99	X-55	"
110- 12	V-56	"	- 35	U-58	"	- 56	W-57	"	- 77	V-56	"	114-100	W-55	"
- 13	V-56	"	- 36	V-56	III	- 57	Z-55	"	113- 78	W-56	"	-101-a	S-61	III上
- 14	V-57	III下	- 37	W-56	"	- 58	W-57, X-55	"	- 79	V-58	"	-101-b	V-58	I
- 15	W-56	III	- 38	W-57	"	- 59	W-56	"	- 80	Y-55	"	-101-c	V-58	"
-16-a	X-57	"	- 39	V-56	"	- 60	U-57	III上	- 81	X-56	"	-101-d	V-58	"
-16-b	V-57	"	- 40	W-56	"	- 61	W-57	III	- 82	V-56	I	-102	Z-54	III
- 17	W-57	"	- 41	W-57	"	- 62-a	W-58	III上	- 83	X-55	III	-103	T-58	"
- 18	U-57	"	- 42	V-56	"	- 62-b	W-58	"	- 84	a-54	"	-104	T-58	I
- 19	V-57	"	- 43	V-58	I	- 63-c	V-57	III	- 85	W-55	"	-105	X-56	III
- 20	V-57	"	- 44	X-56	III	- 63	T-58	"	- 86	W-56	"	-106	W-56	"
- 21	Z-57	"	- 45	W-55	"	- 64	Y-56	"	- 87	W-55	"	-107	W-56	"
- 22	V-54	"	- 46	U-60	"	- 65	V-56	"	- 88	X-56	"			
- 23	V-56	"	- 47	X-55	"	112- 66	Y-56	"	- 89	W-56	"			

表III-13

図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層
115- 1	U-60	I	115- 5	Q-61	I	115- 9	Q-62	I	115- 13	Q-63	III下	115- 15	Q-62	III下
- 2	V-58	"	- 6	P-63	III	- 10	P-62	III	-14-a	P-61	III上	- 16	P-61	III
- 3	R-61	"	- 7	P-61	"	- 11	P-60	"	-14-b	P-61	III	- 17	O-61	"
- 4	P-61	III	- 8	Q-62	"	- 12	P-61	"	-14-c	P-61	III上			

V群掲載土器一覧

表III-14

図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層	図-番号	発掘区	層
116- 1	R-60	III	117- 39	Q-63	III	117- 76	Q-62	I	118-115	T-59	III上	119-154	O-64	III
- 2	P-62	"	- 40	O-63	I	- 77	R-63	"	-116	P-61	"	-155	Q-61	"
- 3	O-61	III上	- 41	Q-62	III	- 78	P-62	"	-117	O-63	"	-156	O-64	"
- 4	S-59	III	- 42	Q-62	"	- 79	Q-60	III上	-118	Q-62	I	-157	P-63	I
- 5	O-61	III上	- 43	P-62	III中	- 80	Q-62	I	-119	O-63	III	-158	P-63	"
- 6	T-59	III	- 44	R-61	III	- 81	Q-61	"	-120	O-62	I	-159	P-63	III上
- 7	U-59、V-58	"	- 45	R-62	I	- 82	R-60	III上	-121	P-62	"	-160	P-64	I
- 8	R-60	"	-46-a	O-61	III上	- 83	P-63	I	-122	Q-62	III	-161-a	V-58	"
- 9	P-63	I	-46-b	O-61	"	- 84	O-61	III	-123	P-61	"	-161-b	O-62	"
- 10	P-62	III	- 47	P-64	III	- 85	P-62	I	-124	R-61	"	-162	S-59	III
- 11	O-64	"	- 48	P-64	"	118- 86	Q-62	III	-125	O-61	I	-163	U-59	"
- 12	T-59	"	- 49	R-60	I	- 87	P-62	III上	-126	P-62	III	-164	O-61	"
- 13	S-58	"	- 50	P-63	III	- 88	P-61	"	-127	R-61	III直上	-165	U-58	III上
- 14	P-62	I	- 51	R-61	I	- 89	R-61	I	-128	T-59	III上	-166	O-63	III
- 15	S-60	III上	- 52	Q-62	"	- 90	Q-62	"	-129	O-62	I	-167	P-63	"
- 16	V-58	I	- 53	Q-62	III	- 91	Q-63	III	-130	S-60	III	-168	Q-62	"
- 17	P-63	"	- 54	Q-62	"	- 92	P-62	III中	-131	U-59	I	-169	Q-60	"
- 18	P-64	"	- 55	P-62	III中	- 93	S-61	I	-132	P-64	"	-170	V-58	"
- 19	P-63	III	- 56	O-64	III	- 94	U-69	"	-133	U-59	"	-171	P-63	I
117- 20	P-62	III上	- 57	P-62	I	- 95	Q-52	III	-134	T-59	III上	-172	R-61	III上
- 21	P-63	III	- 58	P-63	III	- 96	P-60	III上	-135	O-62	III	-173	O-64	III
- 22	O-64	"	- 59	S-59	"	- 97	O-62	III	-136	Q-62	"	-174	O-64	"
- 23	O-64	"	- 60	P-64	"	- 98	T-68	"	-137	P-63	"	-175	R-62	"
- 24	P-63	I	- 61	O-62	III上	- 09	Q-50	II	-138	S-61	III上	-176	O-65	"
- 25	Q-62	I	- 62	P-62	"	-100	O-61	III上	-139	O-62	I	-177-a	O-63	I
- 26	P-63	III	- 63	Q-62	III	-101	R-61	"	-140	O-63	"	-177-b	O-63	"
- 27	Q-62	"	- 64	Q-63	"	-102	R-63	I	-141	O-64	"	-178	P-62	"
- 28	O-62	I	-65-a	O-62	I	-103	P-64	III	-142	P-64	"	-179	P-64	"
- 29	P-62	III下	-65-b	O-61	III上	-104	O-62	I	-143	P-63	III	-180	P-63	"
- 30	Q-62	III	- 66	O-62	"	-105	Q-63	III	-144	U-59	I	-181	V-57	"
- 31	Q-62	"	- 67	P-62	I	-106	P-62	III上	-145	T-61	III	-182	O-65	III
- 32	P-63	"	- 68	S-61	"	-107	O-62	"	-146	O-63	III下	-183	P-63	"
- 33	O-61	"	- 69	R-62	III	-108	Q-62	I	-147	V-58	I下	-184	S-61	III上
-34-a	P-62	"	- 70	Q-60	III上	-119	Q-62	III	-148	S-59	III	-185	Q-62	III
-34-b	P-62	"	- 71	Q-61	III	-110	Q-62	"	-149	R-61	III上	-186	O-64	"
- 35	P-63	"	- 72	P-61	"	-111	P-64	"	-150	P-63	III	-187	Q-63	I
- 36	Q-63	I	- 73	P-63	"	-112	O-61	III上	-151	Q-63	III下	-188	P-63	"
- 37	P-63	III	- 74	O-63	I	-113	T-69	"	119-152	P-64	III	-189	P-63	"
- 38	V-58	II直下	- 75	Q-62	III	-114	U-59	"	-153	O-64	III	-190	P-64	III

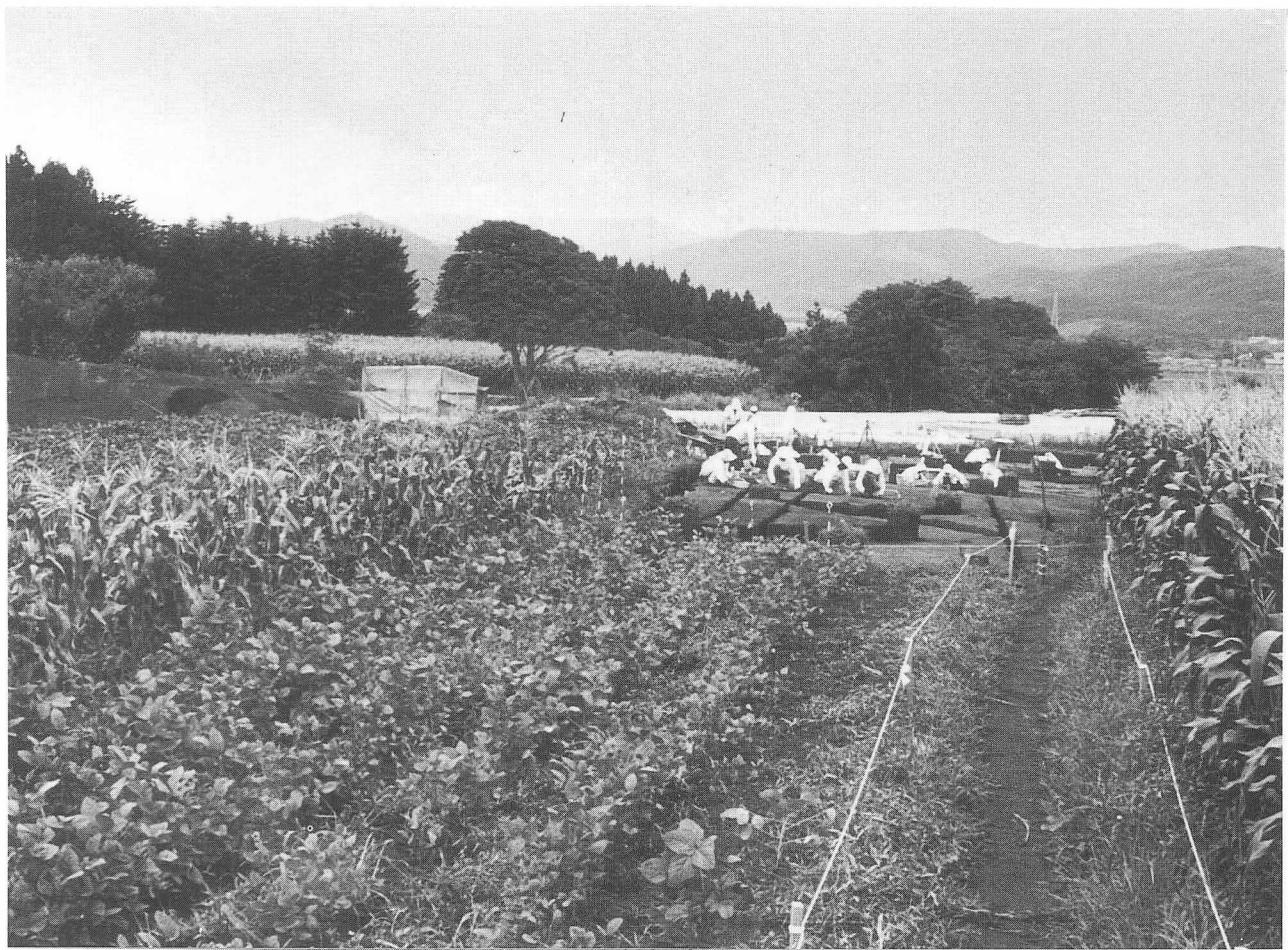
包含層出土掲載石器等一覧

表III-15-(1)

番号	種別	出土区	層	重量(g)	石材	番号	種別	出土区	層	重量(g)	石材	番号	種別	出土区	層	重量(g)	石材
1	石 鏽	X-55	III	1.0	Sh.	31	石 鏽	P-62	I	0.6	Aga.	61	石 鏽	O-61	III	1.6	Sh.
2	"	U-58	III	1.4	Che.	32	"	S-60	I	0.7	Sh.	62	"	P-64	IV	1.8	Che.
3	"	S-61	III	0.6	Sh.	33	"	U-57	III	0.5	Ob.	63	"	W-57	III	1.8	Sh.
4	"	Q-62	III	1.7	"	34	"	O-65	I	0.8	Sh.	64	"	S-58	I	1.5	"
5	"	R-61	III	0.9	"	35	"	O-61	III	1.3	"	65	"	V-56	III	2.1	"
6	"	Q-61	I	2.1	"	36	"	V-57	III	0.7	"	66	"	W-58	III	6.2	"
7	"	W-56	III	0.7	"	37	"	P-63	I	0.9	"	67	"	Q-59	I	0.9	Ob.
8	"	W-56	III	0.4	Ob.	38	"	P-63	III	0.7	"	68	"	O-61	III	1.7	Sh.
9	"	U-58	III	0.8	Sh.	39	"	O-64	III	1.1	"	69	"	S-58	III	1.6	"
10	"	V-58	III	0.9	"	40	"	O-64	III	1.3	"	70	"	X-55	III	1.1	"
11	"	V-57	III	0.6	"	41	"	T-60	I	1.7	Ob.	71	"	X-57	III	1.3	"
12	"	P-63	III	1.4	"	42	"	P-63	III	1.3	Aga.	72	"	Q-61	III	3.2	"
13	"	V-58	I	0.8	"	43	"	R-60	III	1.5	Sh.	73	"	R-60	III	2.5	"
14	"	V-56	III	1.2	"	44	"	U-59	III	1.2	"	74	"	S-59	III	1.6	"
15	"	W-58	I	1.1	"	45	"	R-62	III	1.8	"	75	"	Q-61	I	3.0	"
16	"	W-57	III	1.3	"	46	"	P-63	III	2.5	Aga.	76	"	S-59	III	3.3	"
17	"	V-57	I	0.9	Che.	47	"	P-61	III	1.7	Sh.	77	"	T-61	III	1.9	"
18	"	O-63	搅乱	0.6	Sh.	48	"	Q-61	III	2.0	"	78	"	P-62	III	3.6	"
19	"	V-58	I	0.6	"	49	"	S-60	III	2.9	"	79	"	O-63	III	0.5	"
20	"	X-55	III	0.6	"	50	"	Q-61	III	2.0	"	80	"	T-60	I	1.9	Ob.
21	"	P-61	III	0.5	Aga.	51	"	S-60	I	1.1	"	81	"	Z-54	I	0.6	Sh.
22	"	V-57	I	0.9	Sh.	52	"	S-59	III	2.4	"	82	"	T-60	I	1.0	Ob.
23	"	U-57	III	1.0	"	53	"	T-57	III	2.6	"	83	"	S-61	III	1.5	Sh.
24	"	V-57	III	1.7	"	54	"	P-62	III	1.7	"	84	"	W-58	I	1.2	"
25	"	Y-56	III	1.5	"	55	"	T-58	III	2.7	Ob.	85	"	Q-60	III	2.5	"
26	"	X-55	III	1.5	"	56	"	Q-59	I	3.4	Sh.	86	"	W-57	III	0.5	"
27	"	P-60	III	0.5	"	57	"	P-62	I	3.6	"	87	"	W-56	III	1.5	"
28	"	T-58	I	0.5	"	58	"	Q-62	III	3.1	"	88	"	Z-55	I	1.4	Sh.
29	"	U-58	I	0.7	Ob.	59	"	W-56	III	2.9	"	89	"	X-56	III	2.7	"
30	"	V-56	III	0.6	"	60	"	P-63	III	1.3	"	90	ドリル	W-56	I	0.9	"

表III-15-(2)

番号	種別	出土区	層	重量(g)	石材	番号	種別	出土区	層	重量(g)	石材	番号	種別	出土区	層	重量(g)	石材
91	ドリル	R-61	I	1.3	Sh.	148	エンド・スクレイバー	R-61	I	10.8	Sh.	205	たたき石	O-61	III	950.0	And.
92	"	O-64	III	1.6	"	149	"	O-62	I	10.3	"	206	"	U-59	I	249.5	Sa.
93	"	O-65	III	2.6	"	150	"	O-64	I	13.9	"	207	"	V-58	I	313.4	"
94	"	S-59	III	1.5	"	151	"	O-64	III	16.4	"	208	くぼみ石	W-56	III	110.0	"
95	"	Y-55	III	4.7	"	152		W-56	III	5.7	"	209	"	T-59	III	529.8	Mud.
96	"	W-57	III	3.4	"	153	"	Y-55	III	9.3	"	210	"	V-59	III	442.4	"
97	"	Q-63	I	0.8	"	154	"	X-56	III	8.0	"	211	"	Q-61	I	549.4	And.
98	"	P-64	III	1.4	Aga.	155	"	U-56	III	9.3	"	212	"	U-59	III	174.7	Mud.
99	"	Q-63	III	2.0	Sh.	156	"	P-61	III	6.0	"	213	すり石	X-57	III	517.4	And.
100	"	Q-62	I	0.9	Aga.	157	"	O-61	III	6.8	"	214	"	X-56	III	690.0	"
101	"	S-62	I	1.5	Sh.	158	"	X-56	III	9.5	"	215	"	P-63	III	525.4	"
102	"	P-62	I	2.6	"	159	"	X-56	III	16.7	"	216	"	R-60	III	1,110.0	"
103	"	O-62	III	2.9	"	160	"	R-60	III	13.5	"	217	"	W-56	III	1,100.0	Gn.
104	"	U-56	III	2.3	"	161	"	R-61	III	17.6	"	218	"	W-56	III	457.0	And.
105	"	O-65	III	3.7	"	162	"	R-60	III	27.2	Ob.	219	"	O-61	III	750.0	"
106	"	O-63	III	5.6	"	163	"	R-62	III	28.6	Sh.	220	"	T-61	III	397.6	"
107	"	Q-62	III	9.4	"	164	"	V-56	III	46.4	"	221	"	Q-61	III	660.0	"
108	"	W-56	III	32.1	"	165	"	S-60	III	28.6	"	222	"	T-58-61	III	301.4	"
109	"	U-58	III	29.8	"	166	"	S-61	III	14.7	"	223	"	T-58	I	432.2	Mud.
110	ポイント・ナイフ	P-63	I	7.9	"	167	"	U-58	III	23.7	"	224	"	Q-61	III	541.8	And.
111	"	R-60	III	11.6	"	168	"	O-64	III	22.5	"	225	"	R-60	III	880.0	Gn.
112	"	P-62	I	20.6	"	169	"	U-60	III	41.3	"	226	"	R-61	III	531.0	And.
113	"	O-64	III	13.4	Aga.	170	"	Q-60	III	39.8	"	227	"	W-57	III	241.7	Sa.
114	"	U-V-58	III	10.9	Ob.	171	"	S-59	III	33.6	"	228	"	S-61	III	940.0	And.
115	"	Q-63	III	13.7	Sh.	172	"	V-59	III	79.3	"	229	"	Q-61	I	940.0	"
116	"	S-60	I	12.7	"	173	"	Q-61	III	30.7	"	230	"	Q-61	III	561.0	"
117	"	S-61	III	23.2	"	174	"	P-64	I	24.3	"	231	"	Q-61	III	255.9	Sa.
118	"	T-58	III	36.7	"	175	"	O-61	III	20.2	"	232	砥石	O-61	III	341.8	"
119	"	S-58	I	38.6	"	176	"	R-62	III	30.3	"	233	"	V-56	III	300.8	"
120	"	W-56	III	31.2	"	177	"	R-61	I	48.1	"	234	"	X-55	III	420.6	And.
121	つまみ付ナイフ	X-55	III	5.2	"	178	"	Q-61	III	20.0	"	235	石皿・台石	Q-61	III	—	"
122	"	Q-62	III	14.9	"	179	"	Q-62	III	22.9	"	236	"	R-63	III	—	"
123	"	U-59	III	10.0	"	180	"	P-63	III	48.6	"	237	石鋸	W-57	III	65.4	Sa.
124	"	T-61	III	16.7	"	181	石斧	O-63	搅乱	18.9	Gr.Mud.	238	"	P-64	I	76.1	Tu.
125	"	P-63	III	12.9	"	182	"	O-65	III	9.9	"	239	"	U-58	III	188.0	And.
126	"	S-60	I	47.7	"	183	"	P-64	III	37.5	"	240	石錐	Q-62	搅乱	79.1	"
127	"	S-59	I	15.1	"	184	"	Q-63	I	41.9	Mud.	241	"	Z-54	I	57.9	"
128	"	S-58	III	26.1	"	185	"	S-61	III	29.5	Sa.	242	"	P-63	III	69.9	"
129	"	W-56	III	16.4	"	186	"	S-60	III	38.9	Gr.Mud.	243	"	V-57	III	193.4	Sa.
130	"	W-56	III	2.6	"	187	"	R-60	I	32.9	Mud.	244	三日月形石器	S-59	III	1.7	Ob.
131	"	S-58	III	4.3	"	188	"	S-60	I	121.9	"	245	"	V-56	III	3.7	"
132	"	R-61	I	6.6	"	189	"	R-61	III	149.1	Gr.Mud.	246	"	V-59	III	2.9	"
133	"	S-61	III	3.9	"	190	"	Q-63	I	156.2	Schi.	247	"	U-59	III	2.6	"
134	"	W-57	III	7.7	"	191	"	U-60	III	121.2	Mud.	248	"	V-59	III	0.9	Sh.
135	"	V-57	III	12.8	"	192	"	T-61	III	197.1	Sa.	249	石刀	P-63	III	24.3	Sl.
136	"	S-61	III	6.9	"	193	"	V-56	III	221.1	"	250	石棒	P-63	III	34.5	"
137	エンド・スクレイバー	W-56	I	4.6	"	194	たたき石	Q-62	III	53.4	Sh.	251	垂飾品	V-57	III	2.6	Jad.
138	"	P-61	III	10.7	"	195	"	Z-54	III	34.9	Mud.	252	有孔石製品	S-61	III	296.9	Sa.
139	"	W-56	III	8.5	"	196	"	P-61	III	91.7	Aga.	253	土製品	O-63	I	7.7	—
140	"	R-62	I	3.0	"	197	"	S-59	I	117.2	Sa.	254	円盤状土製品	S-61	I	4.1	—
141	"	R-62	III	28.3	"	198	"	Q-62	III	90.9	Sh.	255	"	S-61	III	6.7	—
142	"	R-61	I	25.5	"	199	"	Y-56	III	313.6	Sa.	256	"	S-60	I	8.6	—
143	"	U-59	I	26.3	"	200	"	V-56	III	457.2	Mud.	257	"	R-61	III	9.2	—
144	"	X-56	III	59.1	"	201	"	Y-54	III	450.0	And.	258	土製品	U-57	III	7.4	—
145	"	T-58	III	57.6	"	202	"	S-58	III	330.0	Sa.	259	鐸型土製品	Y-56	III	41.4	—
146	"	P-62	I	18.6	"	203	"	Y-56	III	292.3	And.	260	"	X-56	III	107.8	—
147	"	Q-63	I	10.4	"	204	"	W-57	III	286.6	Sa.	261	土偶	P-63	III	38.2	—



1 G 地区 遠 景



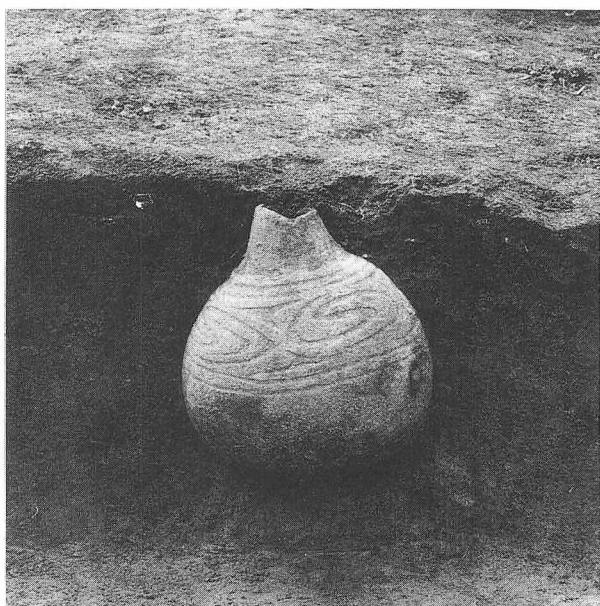
2 G 地区 調査状況



1 埋設土器 1 出土状況



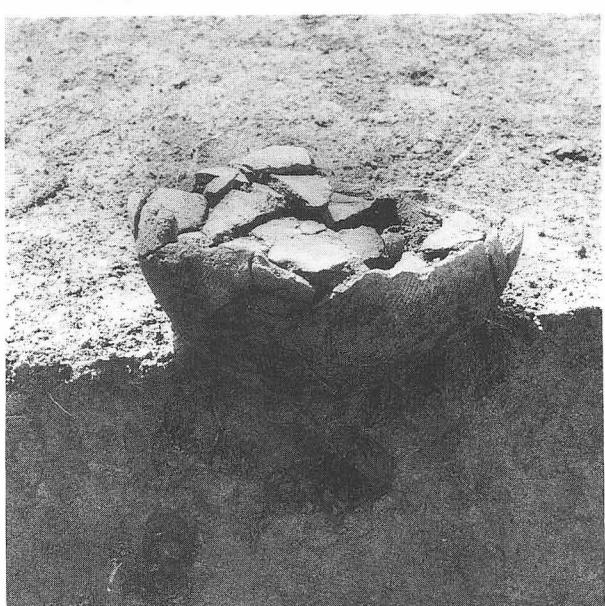
2 埋設土器 1



3 埋設土器 2 出土状況



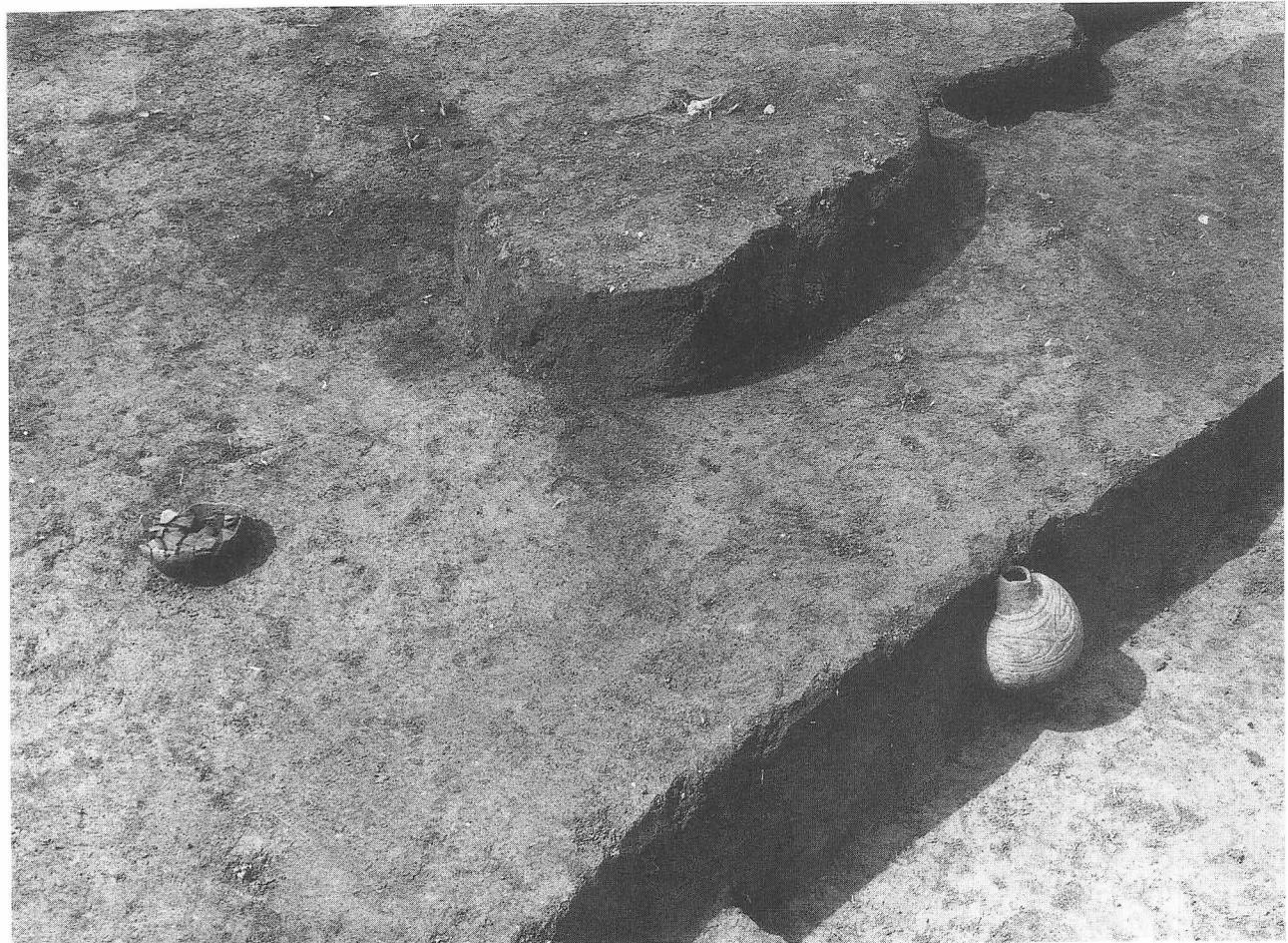
4 埋設土器 2



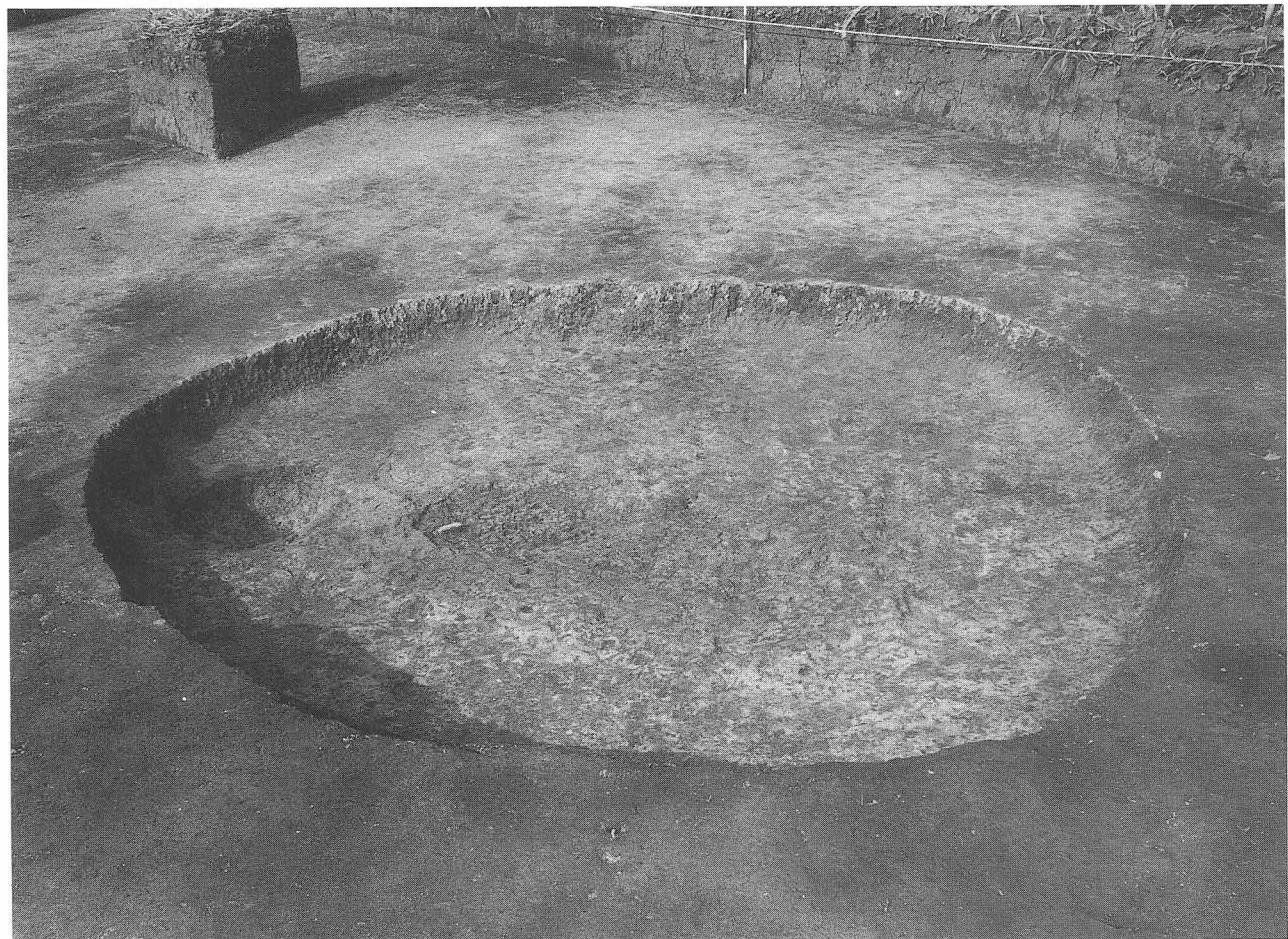
5 埋設土器 3 出土状況



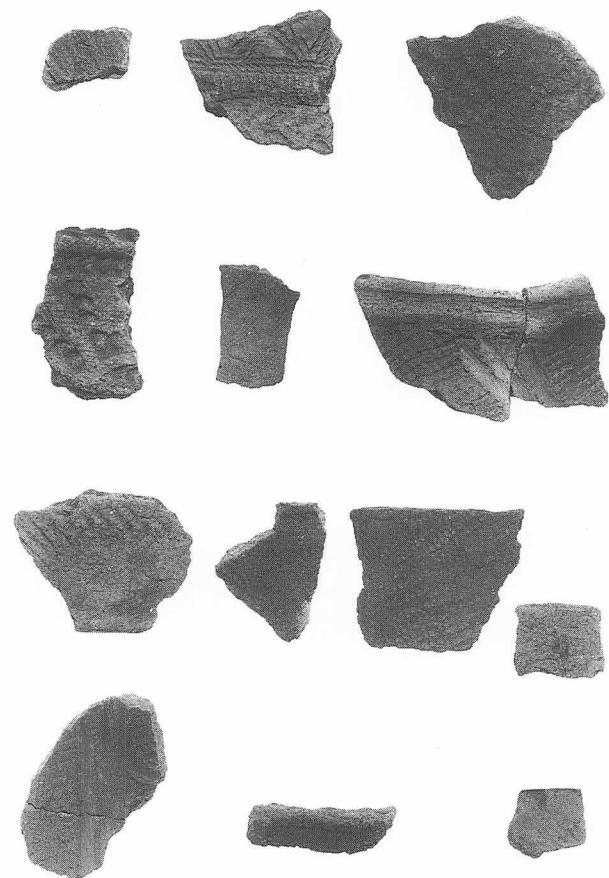
6 埋設土器 3



1 埋設土器出土状況



2 GH-1 の完掘



1 GH-1 出土の土器



2 GH-2 出土の石棒



3 GH-2 の完掘



1

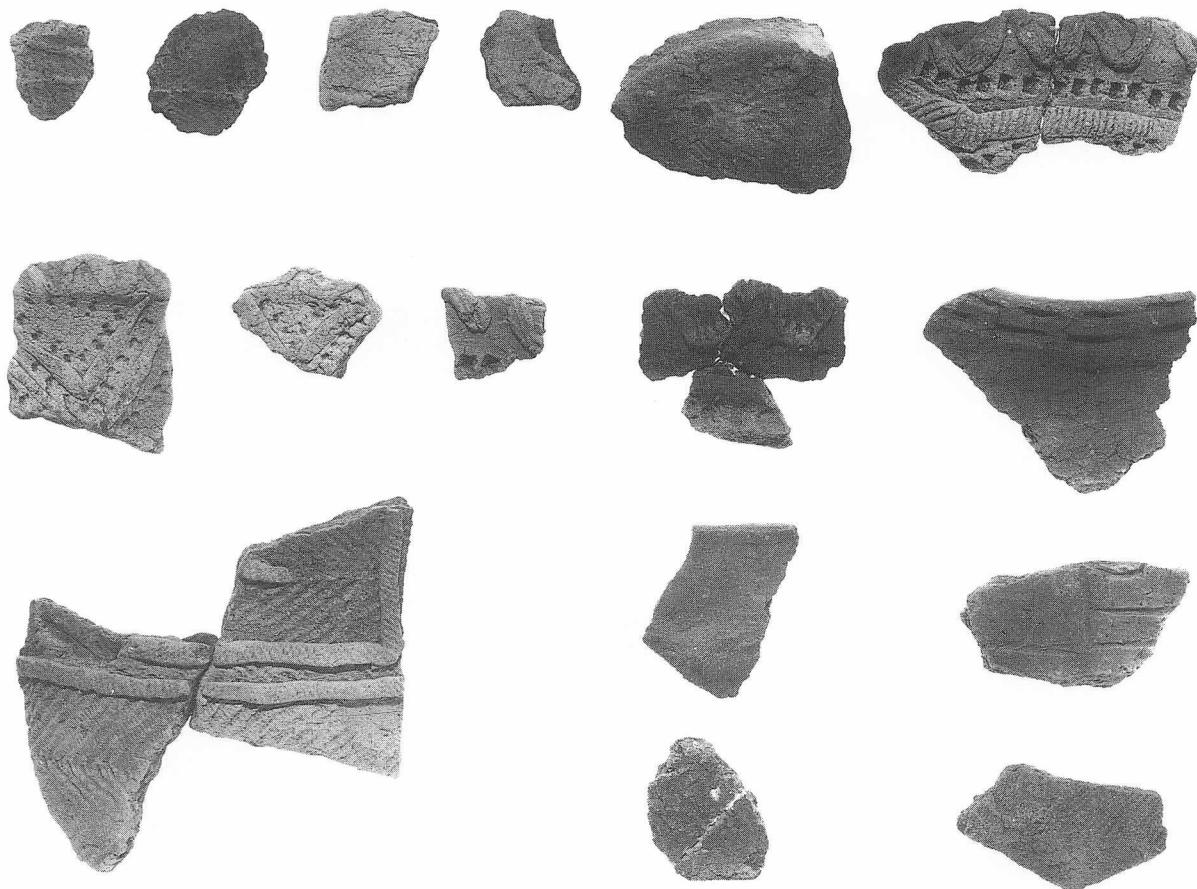


2

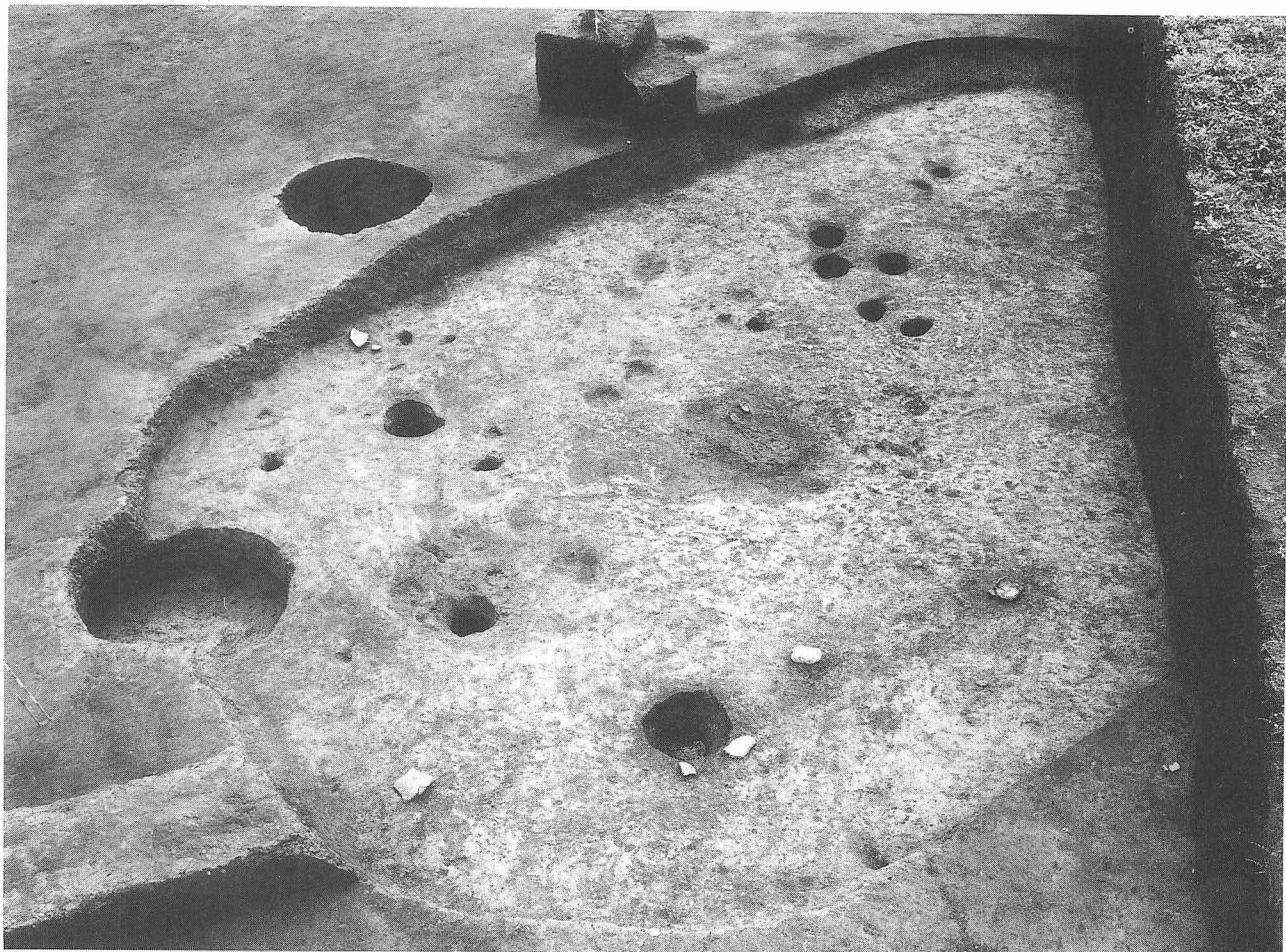
1 GH-2 出土のⅢ群 A₂ 類土器

2 GH-2 出土のⅢ群 A₂ 類土器

3 GH-2 出土のⅣ群 A 類土器



4 GH-2 出土の土器



1 G H-3 の完掘



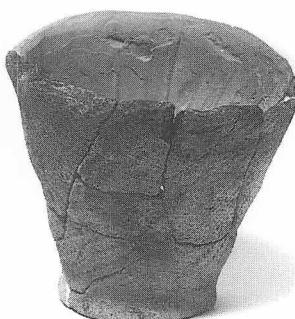
2 G H-3 出土のIII群 A₃ 類土器

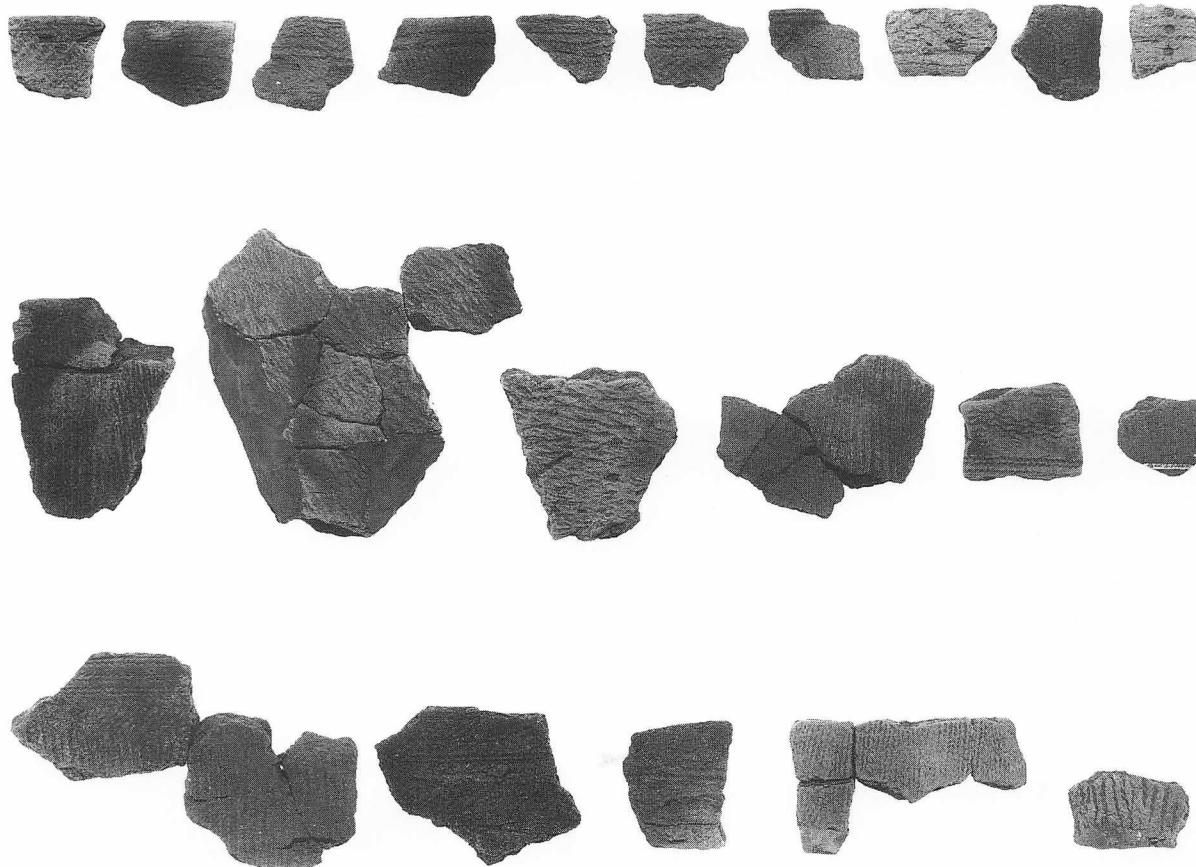


3 G H-3 出土のIII群 A₃ 類土器

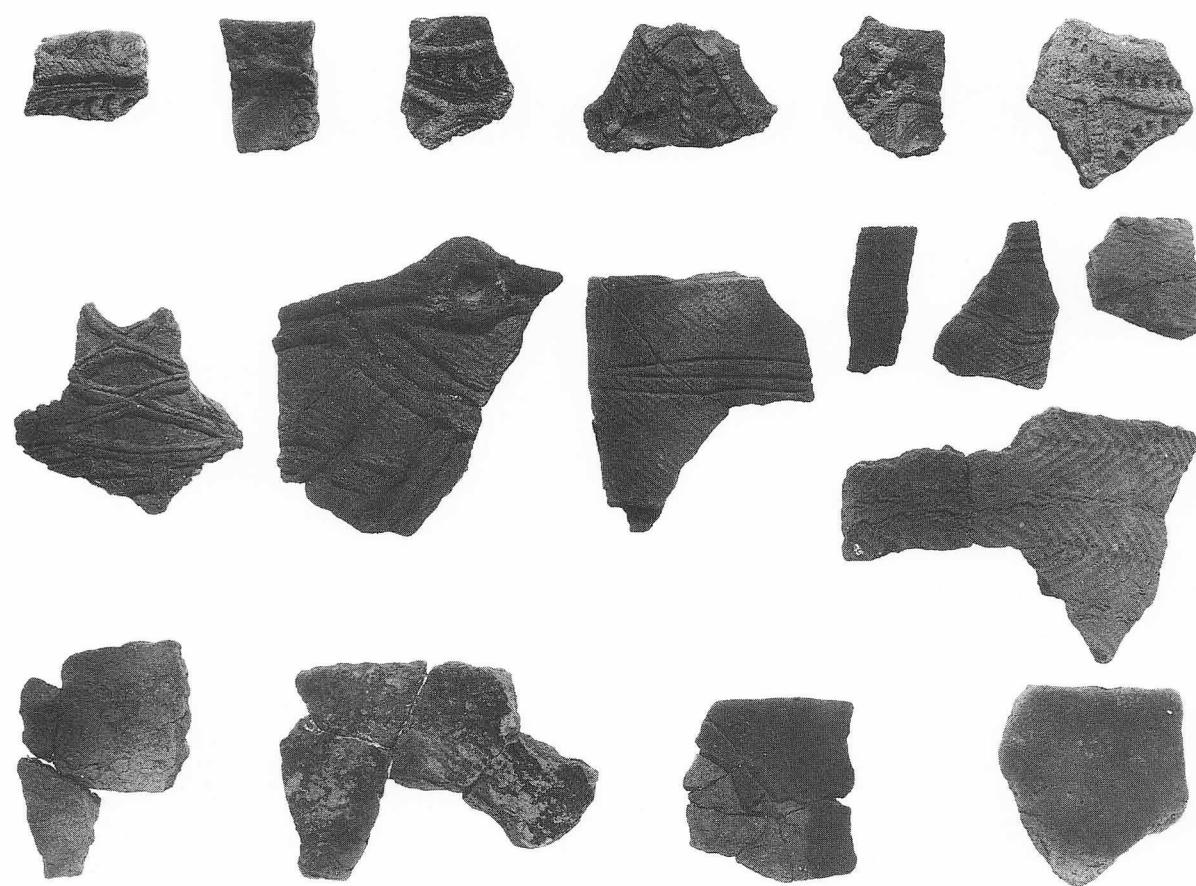


360 4 G H-3 床面の出土のIII群 A₃ 類土器 5 G H-3 出土のIII群 A 類土器 6 G H-3 出土のIII群 A 類土器



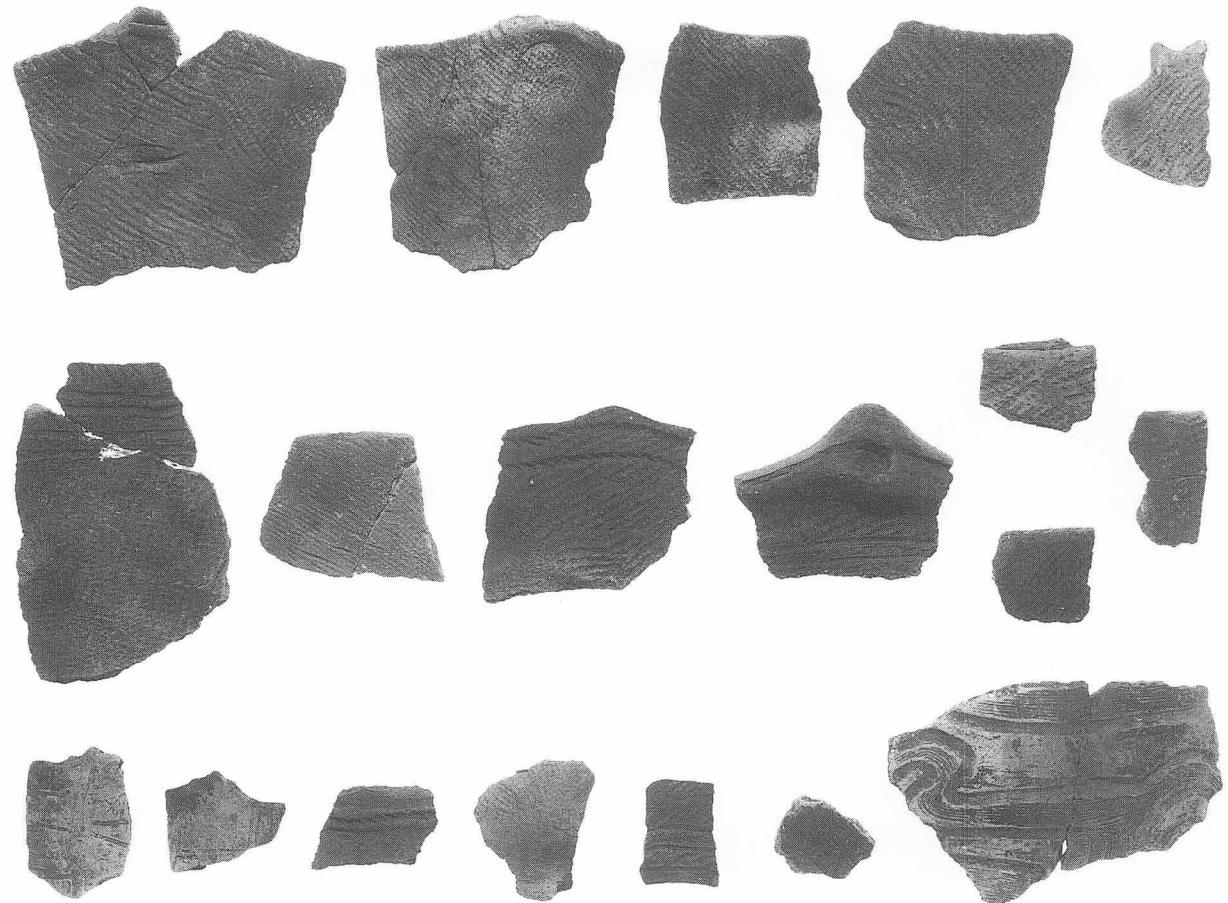


1 G H-3 出土の土器(1)



2 G H-3 出土の土器(2)

図版 8



1 GH-3 出土の土器(3)



2 GH-4 の完掘



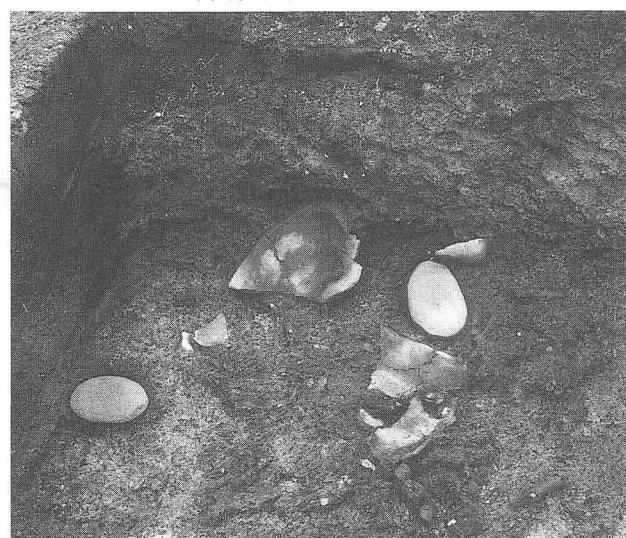
1 GH-4 床面炭化材・遺物出土状況



2 GH-4 床面炭化材出土状況



3 GH-4 床面土器出土状況



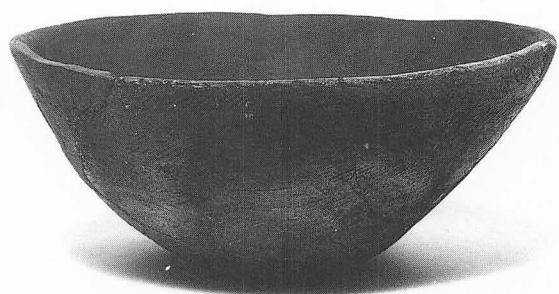
4 GH-4 床面遺物出土状況



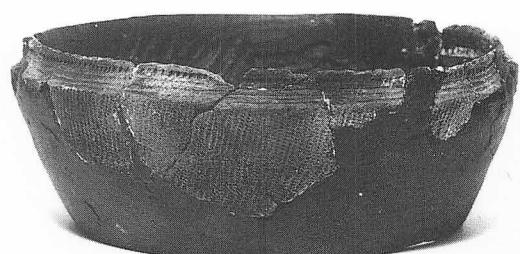
5 GH-4 床面出土のⅣ群C類土器



1



2

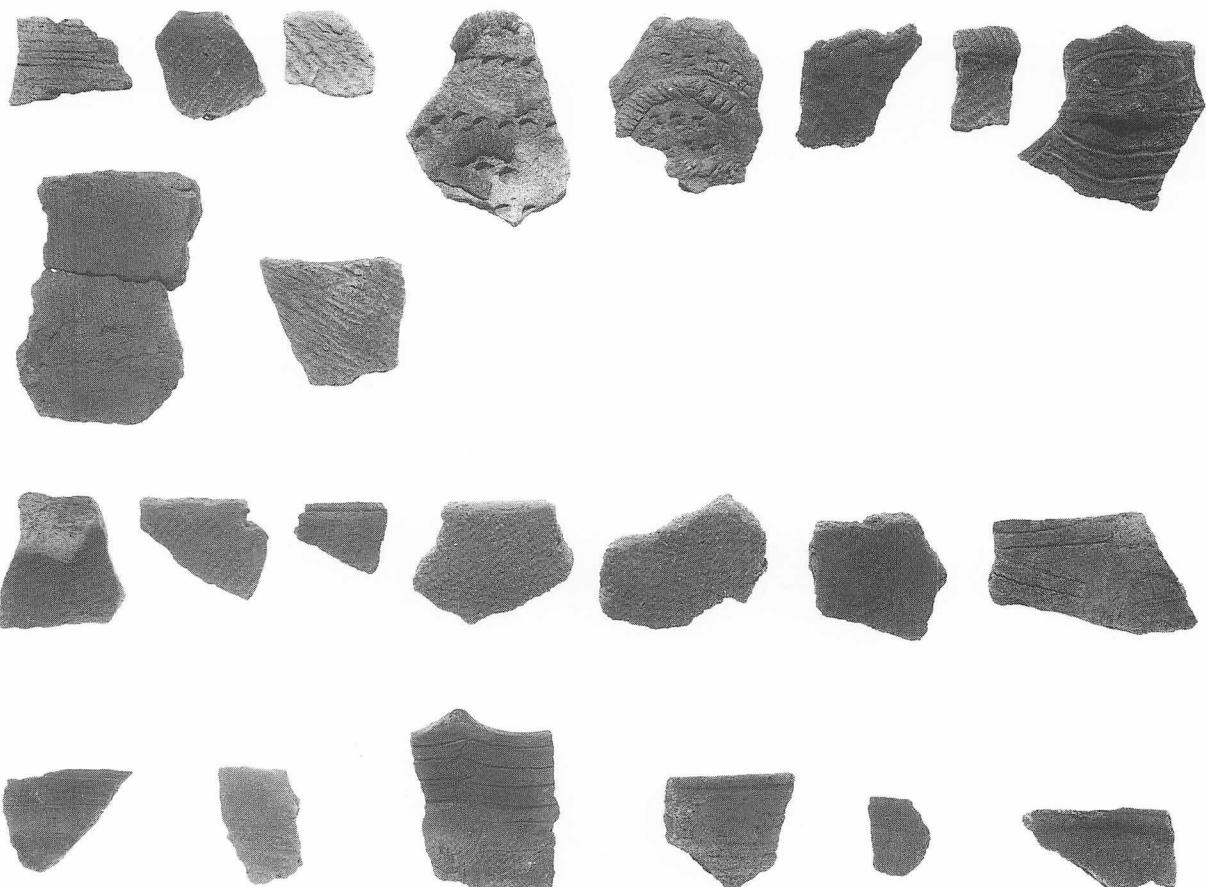


3

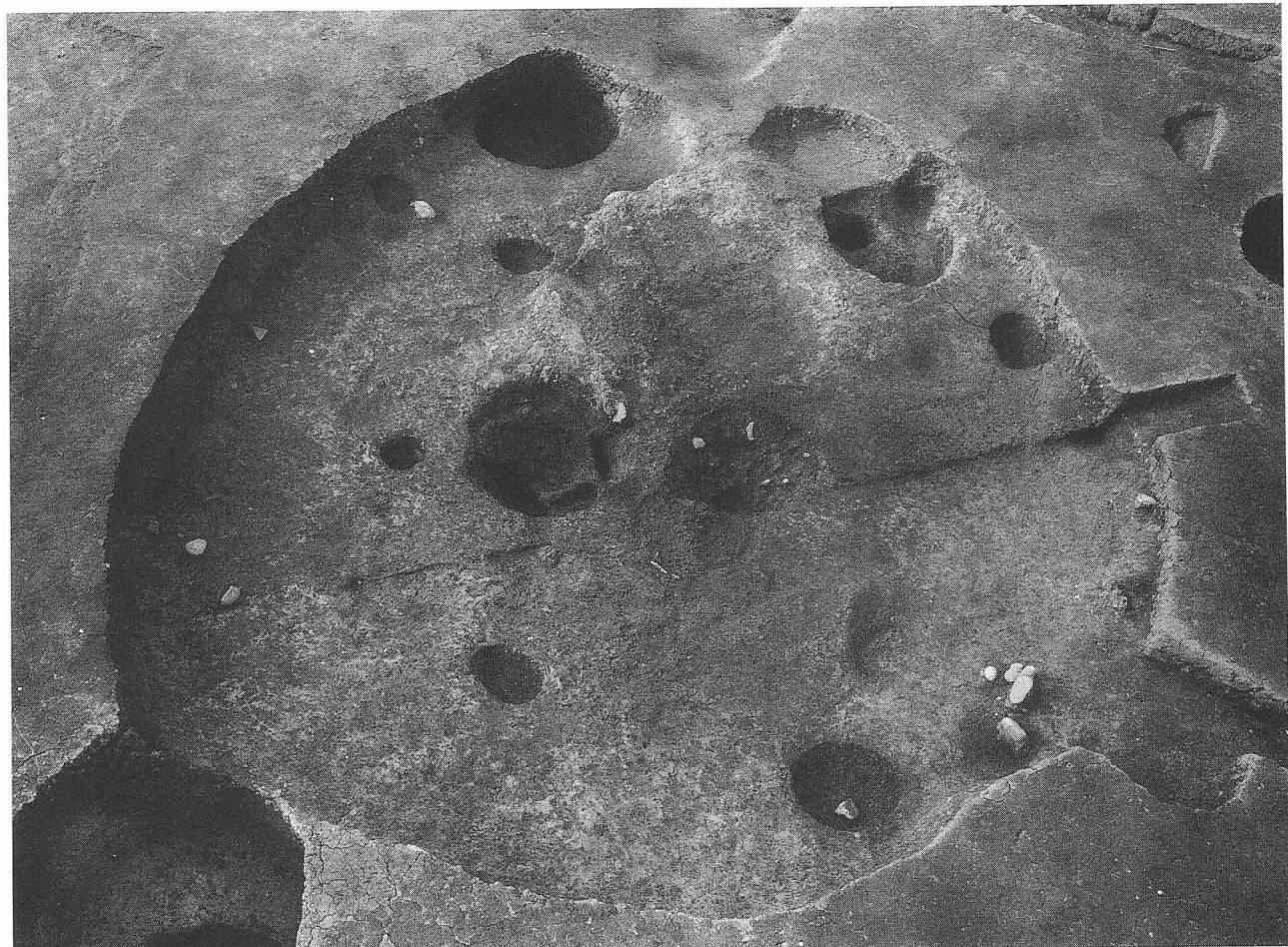
1 GH-4 床面出土のIV群C類土器

2 GH-4 床面出土のIV群C類土器

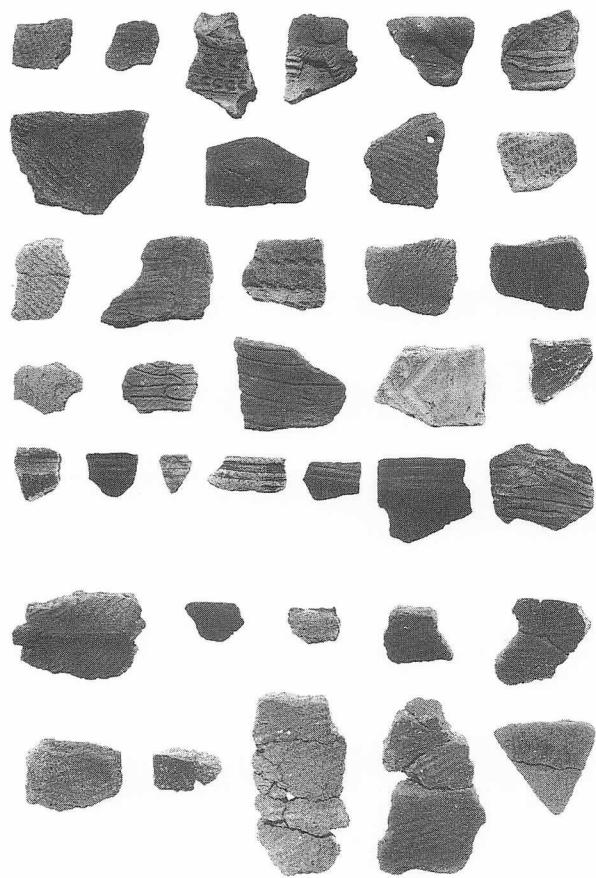
3 GH-4 覆土出土のV群B類土器



4 GH-4 出土の土器

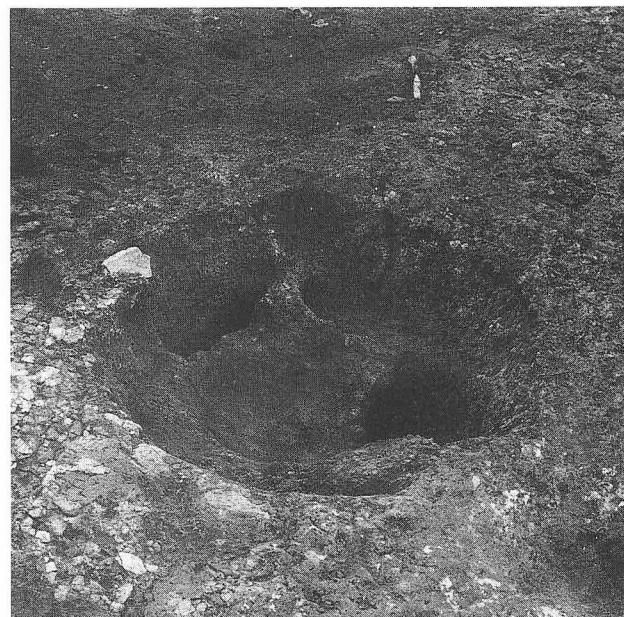


1 GH-5 の完掘



2 GH-5 出土の土器

3 GH-5・P-1 と床面に貼られた
黄褐色ロームの検出状況





1 GH-6・7 の完掘



2 GH-6 床面遺物出土状況



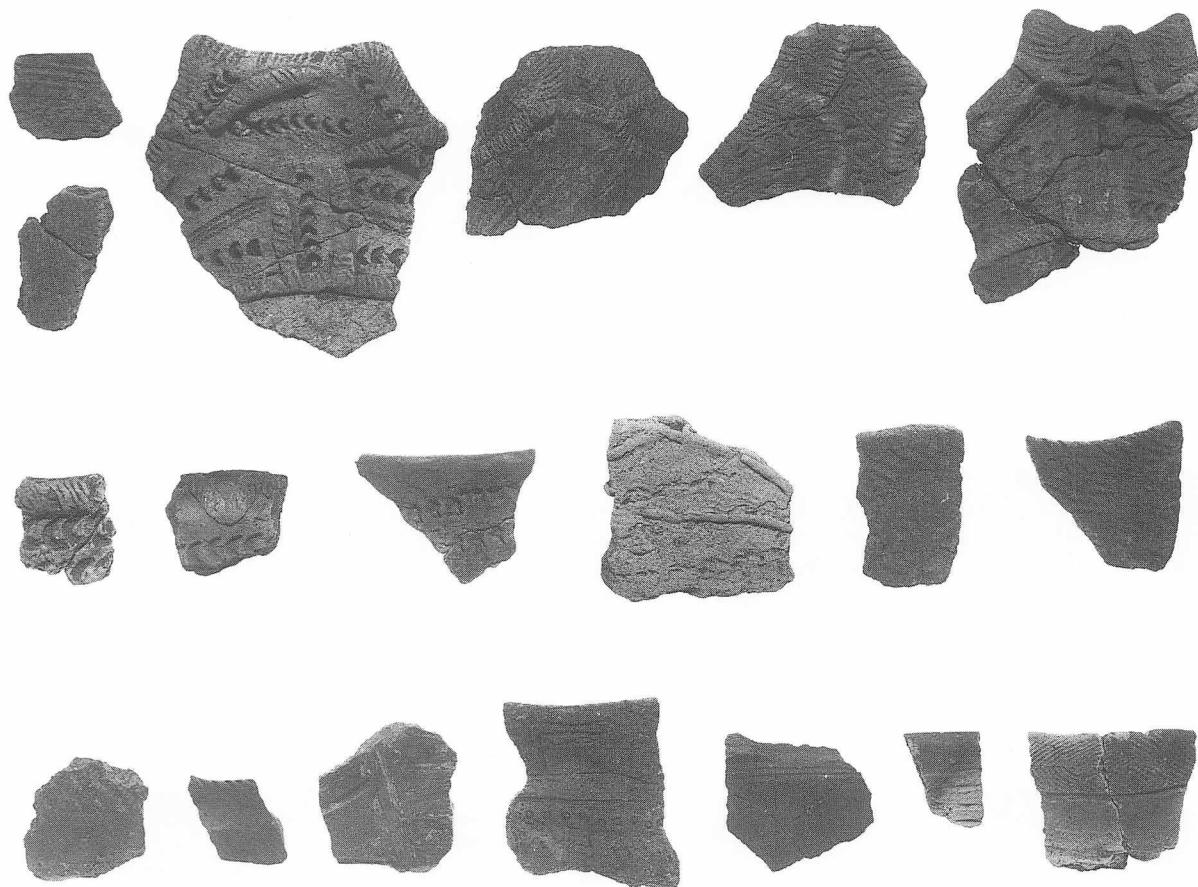
3 GH-7 床面遺物出土状況



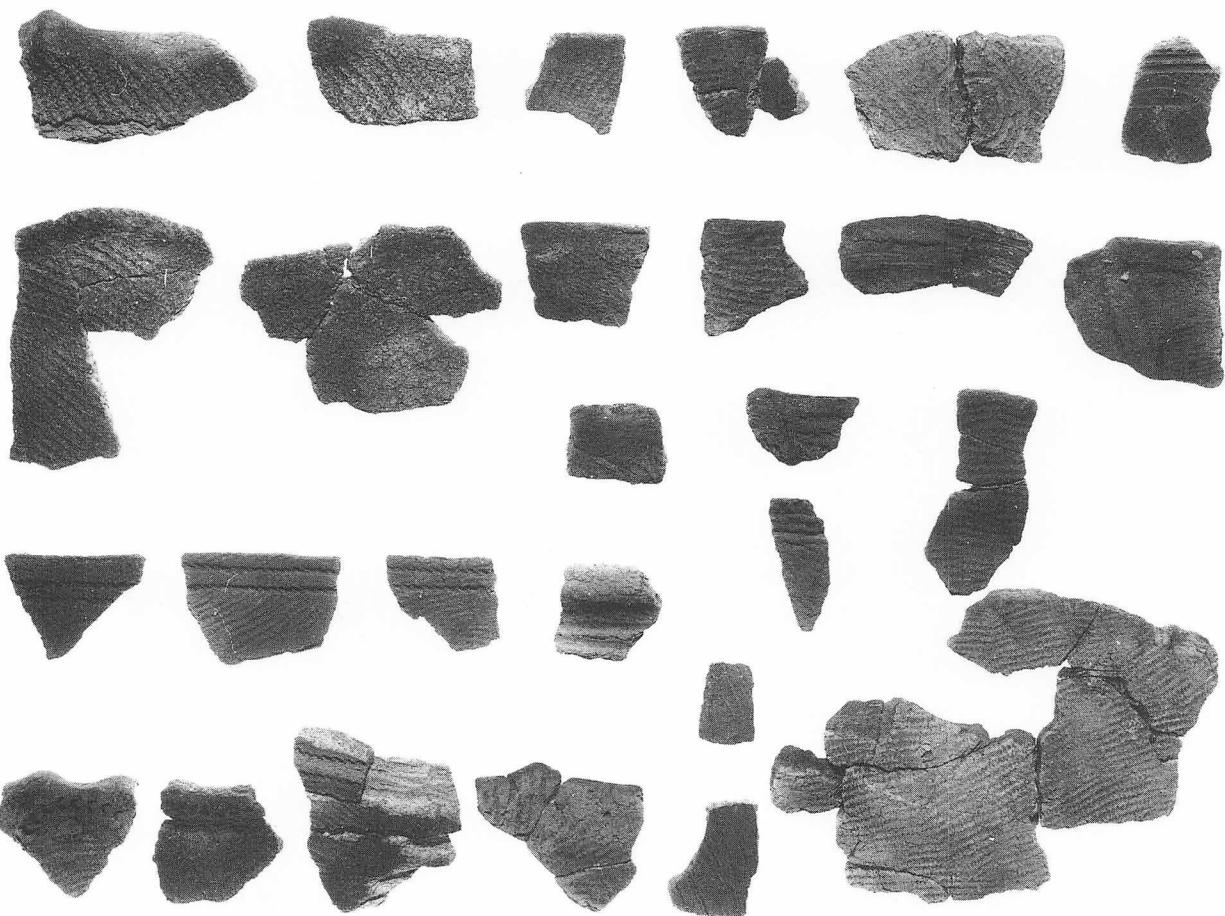
1 GH-6 床面出土のIII群 B₁ 類土器



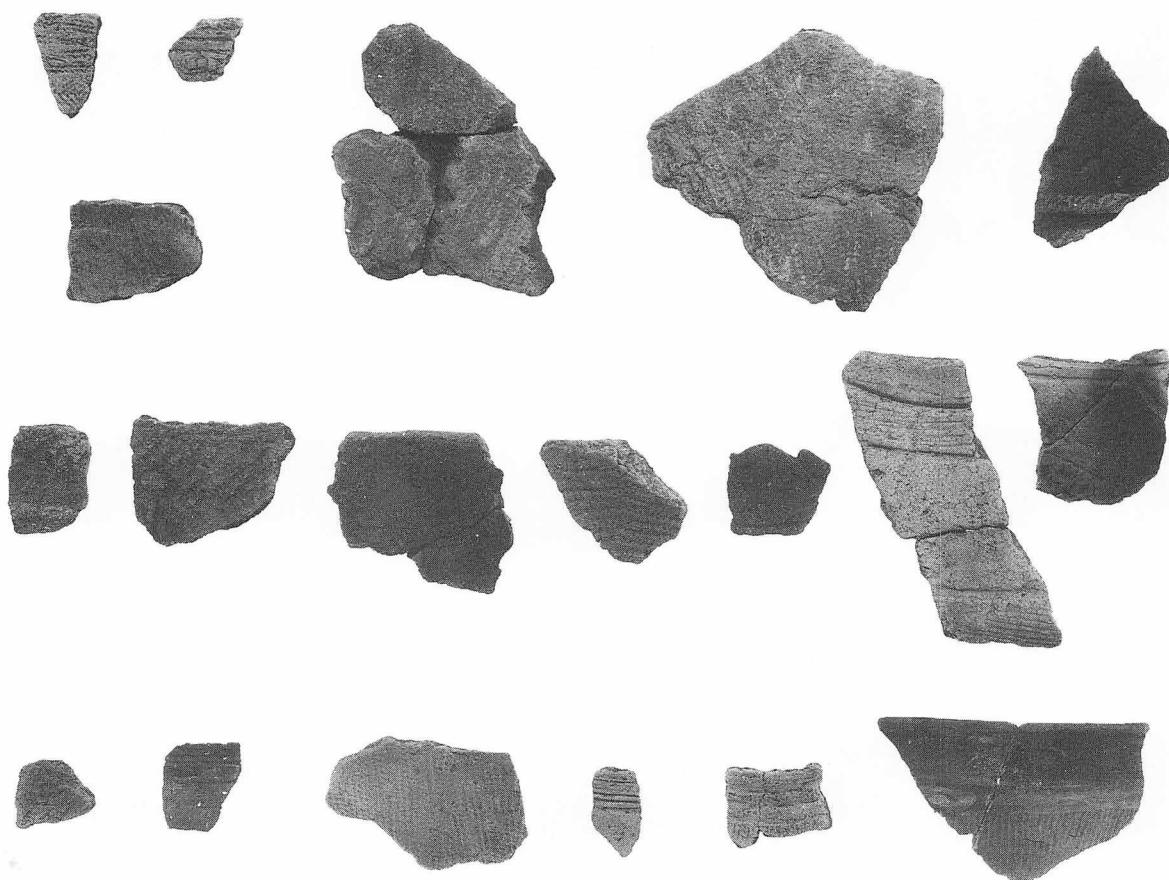
2 GH-6 出土のIII群 B₁ 類土器



3 GH-6 出土の土器(1)



1 GH-6 出土の土器(2)



2 GH-7 出土の土器



1 GH-9 出入口施設



2 GH-9 の完掘



1 G H-9 覆土遺物出土状況



2 G H-9 上位の床面土器出土状況



3 G H-9 下位の床面土器出土状況



4 G H-9 の炉



370 5 G H-9 の炉と床面遺物出土状況



6 G H-9 炉出土のIV群A類土器



1 GH-9 上位の床面出土のⅣ群A類土器



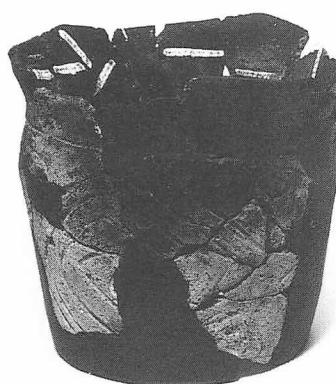
2 GH-9 下位の床面出土のⅣ群A類土器



3 GH-9 覆土出土のⅣ群A類土器



4 GH-9 下位の床面出土のⅥ群A類土器



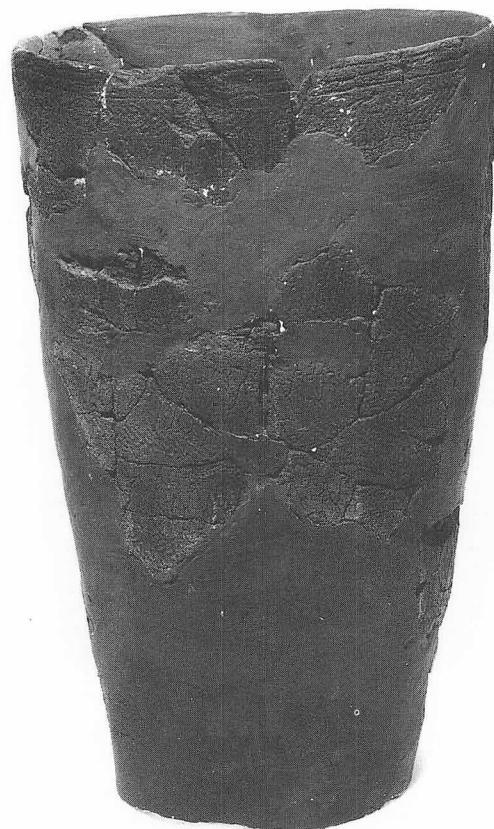
5 GH-9 覆土出土のⅣ群A類土器



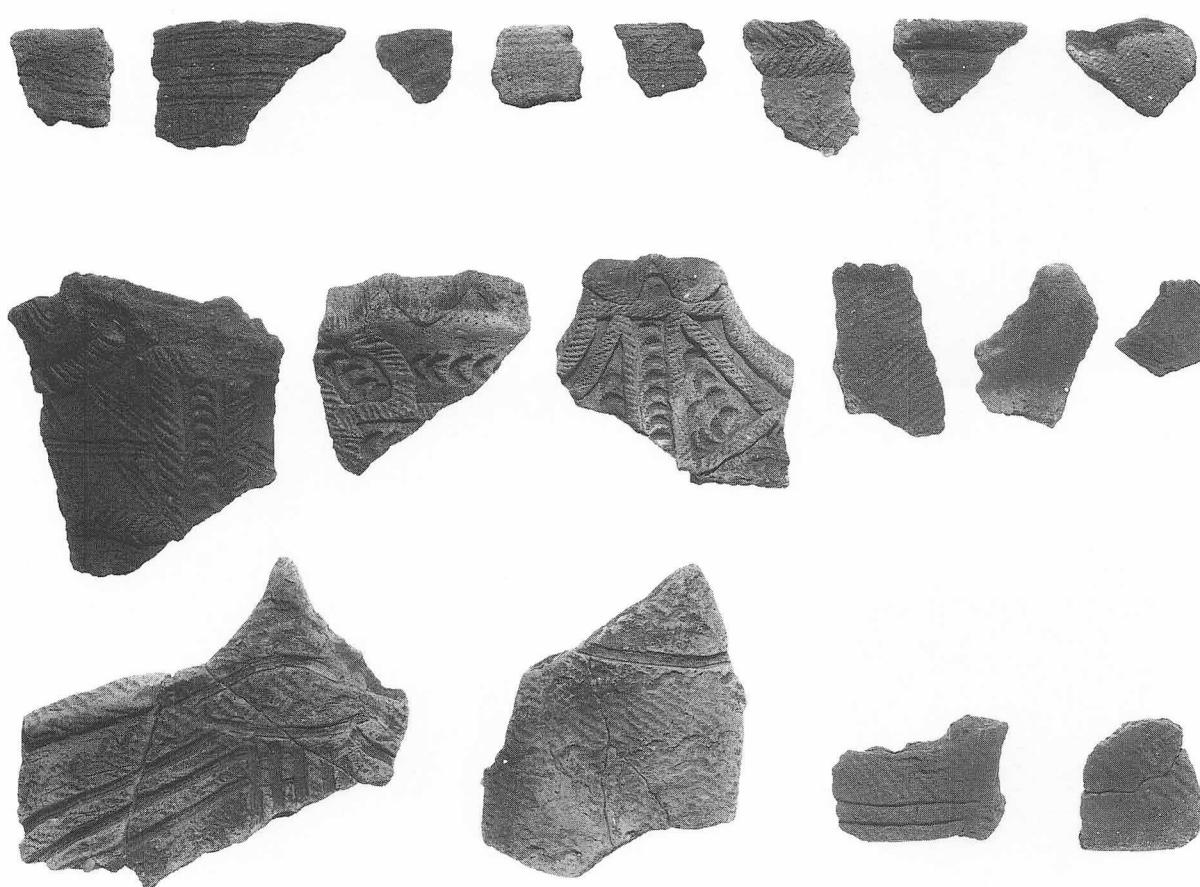
6 GH-9 覆土出土のⅣ群A類土器



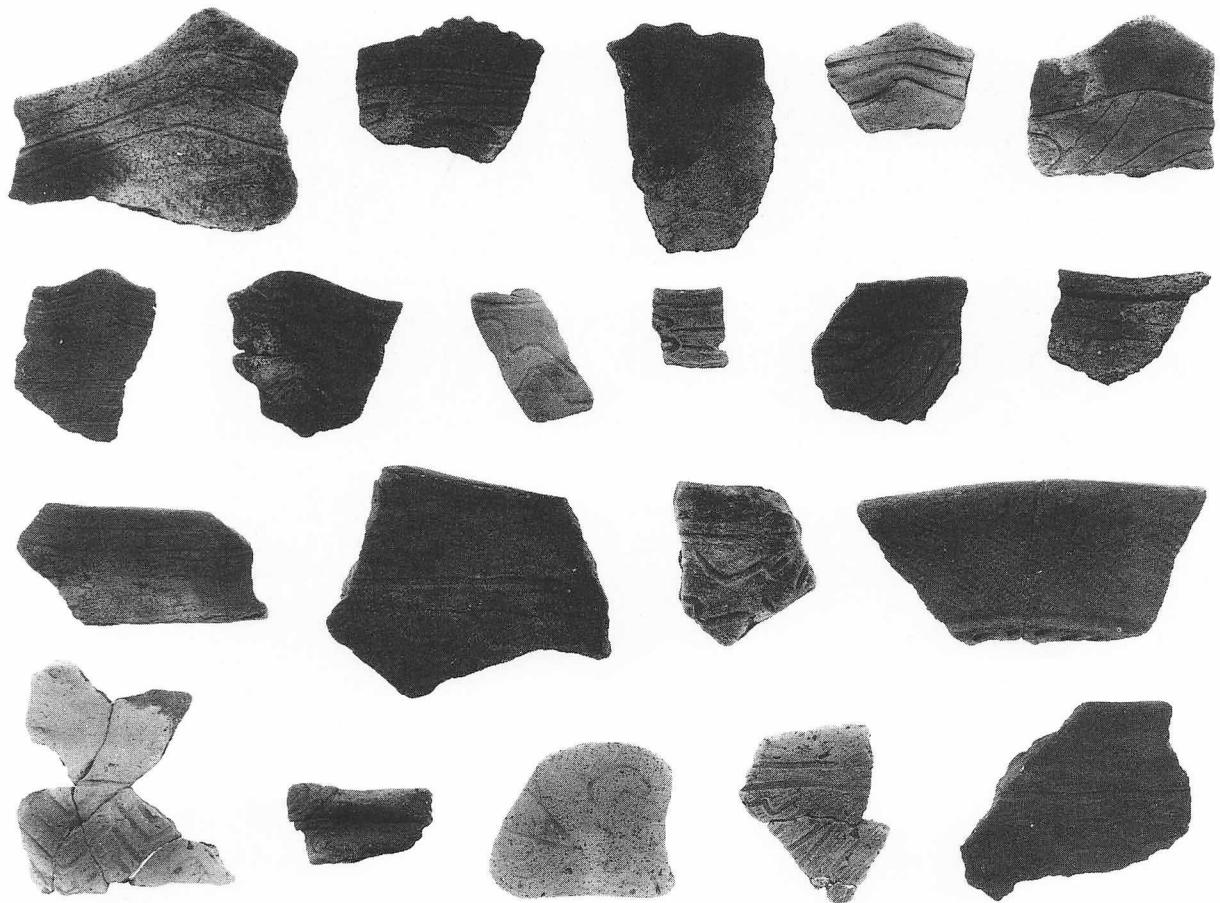
1 GH-9 覆土出土のIV群A類土器



2 GH-9 覆土出土のII群B₂類土器



3 GH-9 出土の土器(1)



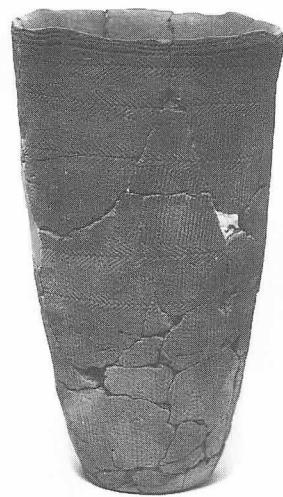
1 G H-9 出土の土器(2)



2 G H-9 出土の土器(3)



1 GP-31 覆土
7層土器出土状況



2 GP-31 覆土7層出土のII群B₁類土器



3 GP-31 覆土7層出土のII群B₁類土器



4 GP-31 覆土7層出土のII群B₁類土器



5 GP-31 覆土7層出土のII群B₁類土器



1 GP-31 床面遺物出土状況



2

- 2 GP-31 床面出土の棍棒状石器
3 GP-31 床面出土のII群 B₁ 類土器
4 GP-31 覆土3層出土のII群 B₁ 類土器
5 GP-31 床面出土のII群 B₁ 類土器



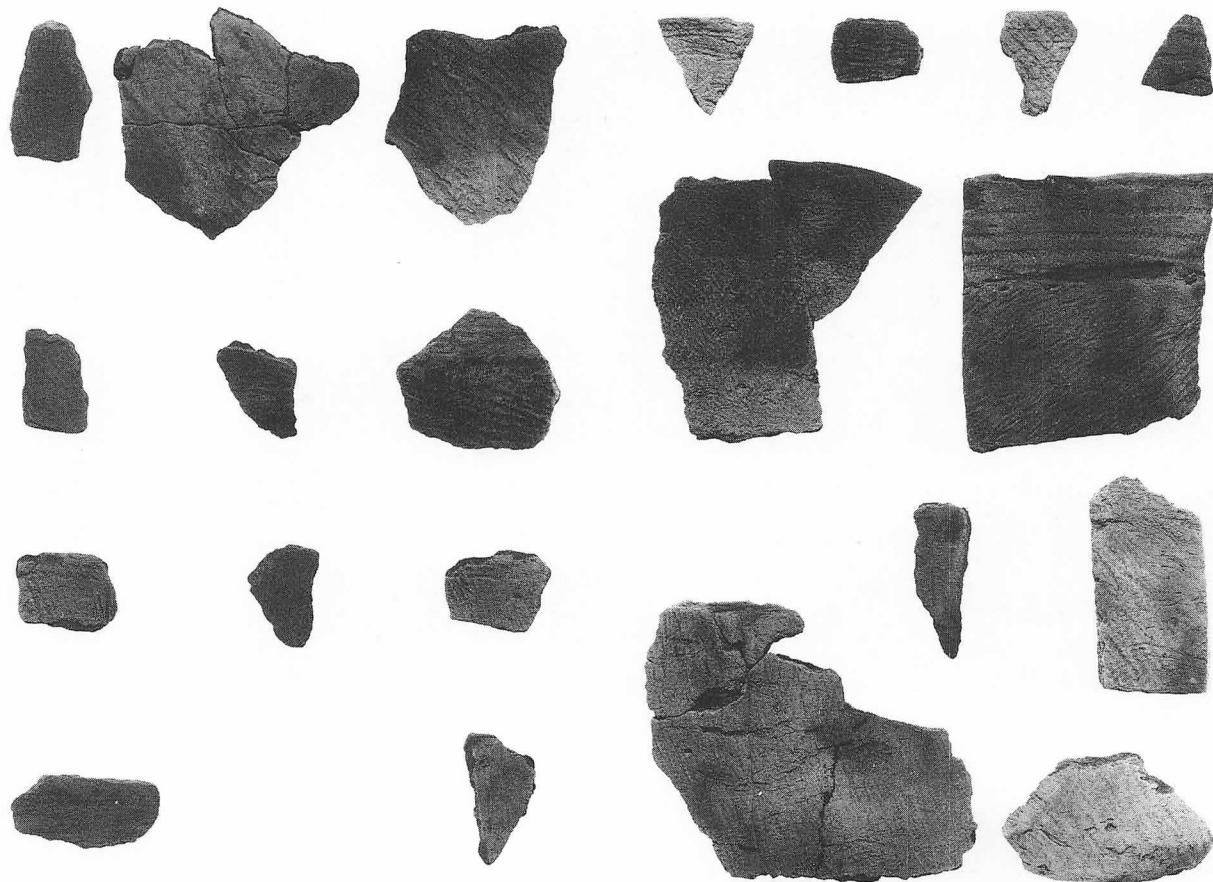
3



4

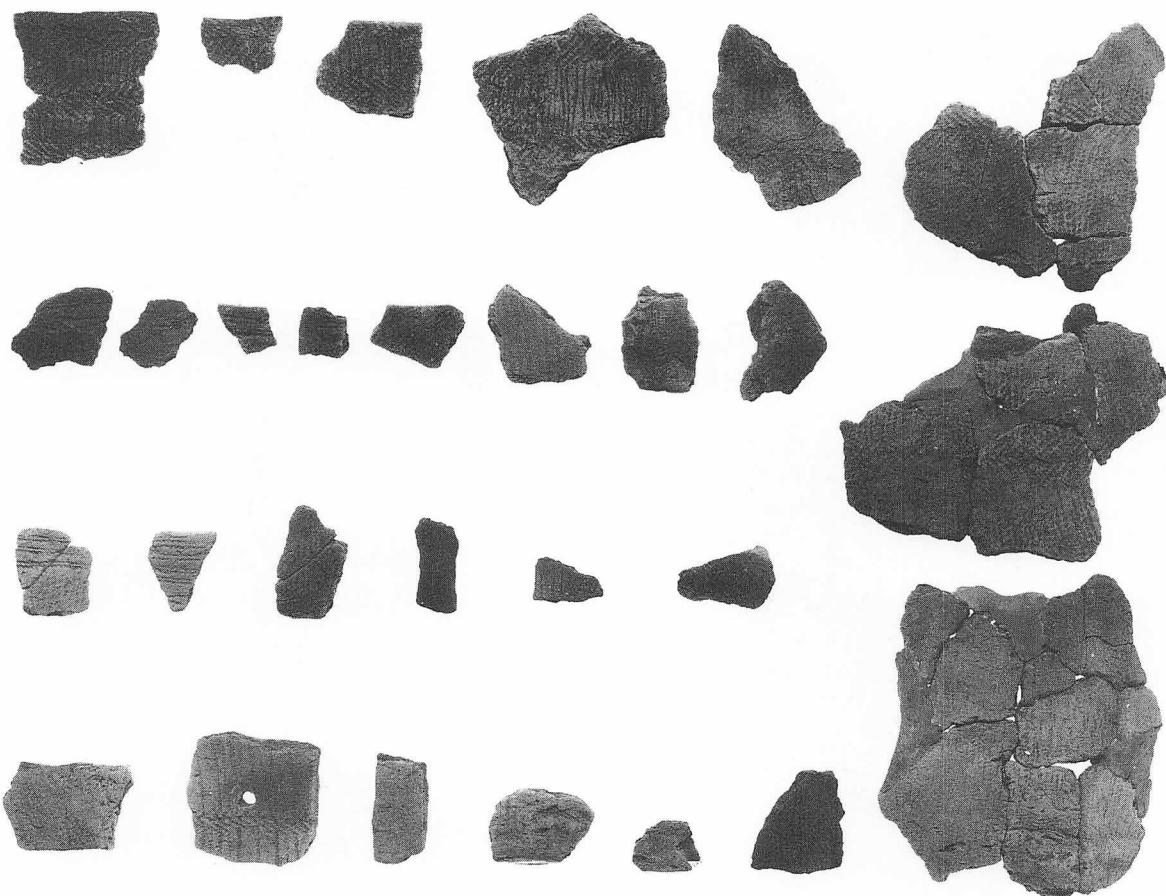


5



1 GP-31 覆土1～4層出土のII群B₁類土器

2 GP-31 覆土6・7・11・12層出土のII群B₁類土器



3 GP-31 覆土13層・床面出土のII群B₁類土器



1 GP-25 覆土上部一括土器（1～3）出土状況



2 GP-25 一括土器 1



3 GP-25 一括土器 2



4 GP-25 一括土器 3



1

- 1 GP-25 覆土一括土器 4 出土状況
2 GP-25 一括土器 4
3 GP-25 覆土出土の II 群 B₂ 類土器



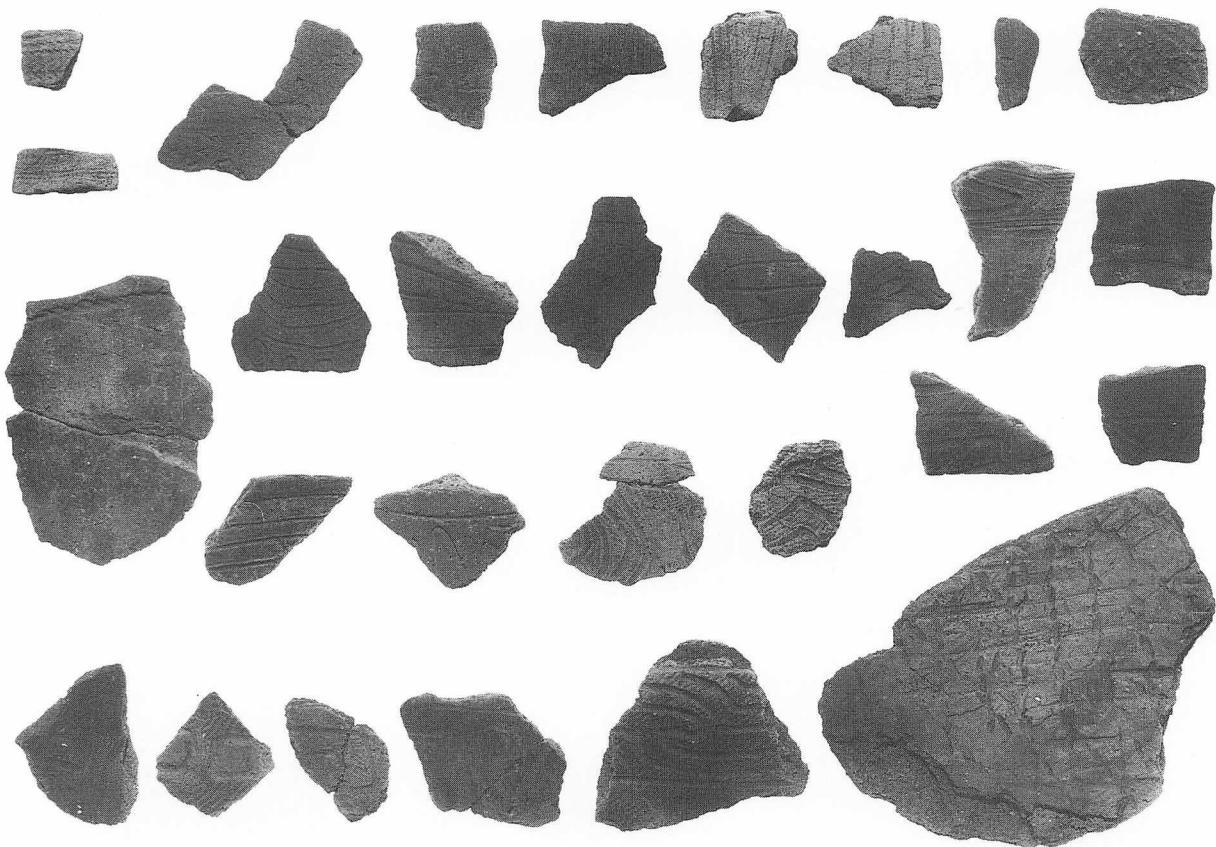
2



3



1 GP-25 出土のIV群A類土器



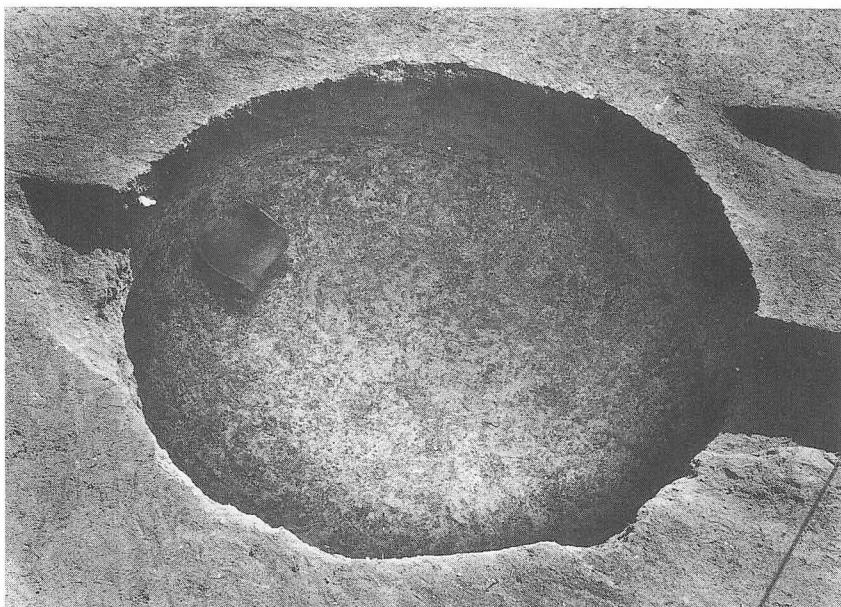
2 GP-25 出土の土器



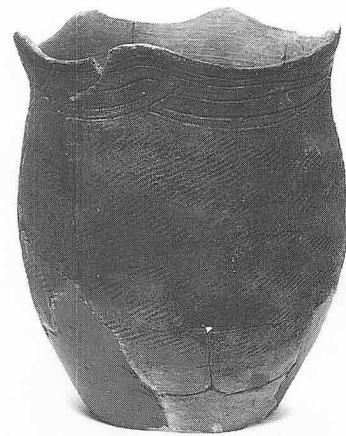
1 GP-6 遺物出土状況



2 GP-6 出土のIV群A類土器



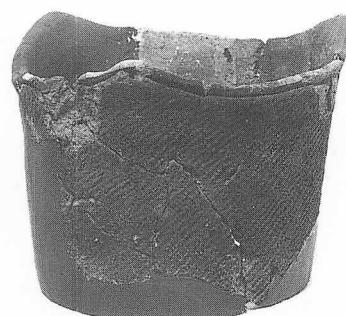
3 GP-19の完掘



4 GP-19
床面出土のIV群A類土器



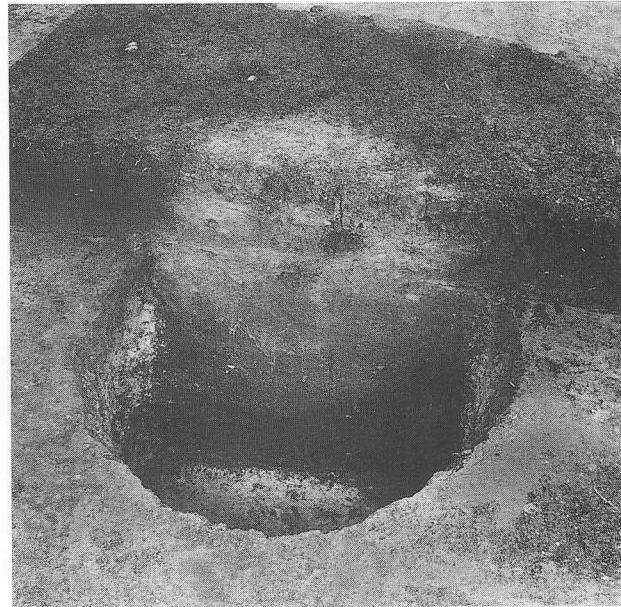
380 5 GP-10の完掘



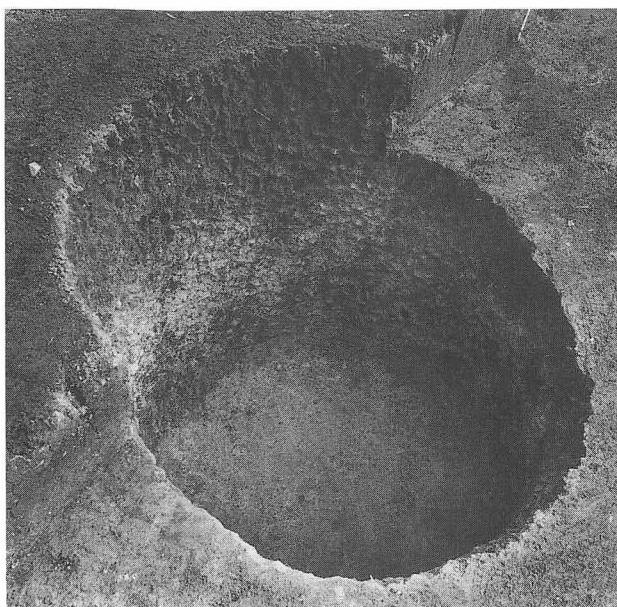
6 GP-10 出土のIII群B類土器



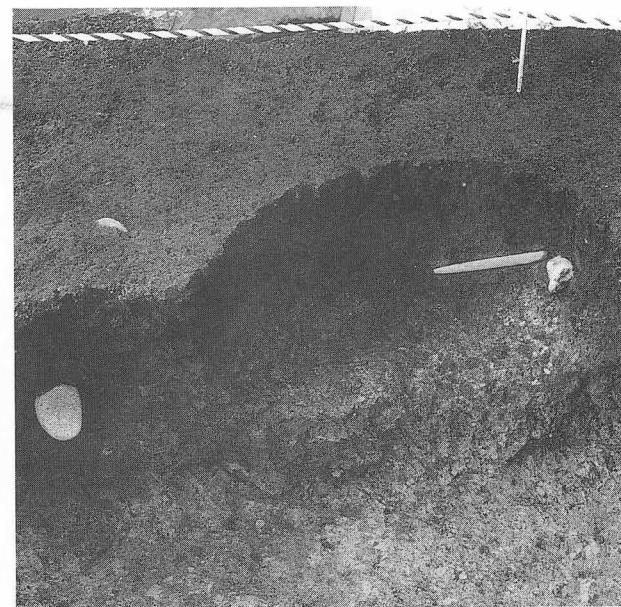
1 GP-2 遺構検出状況



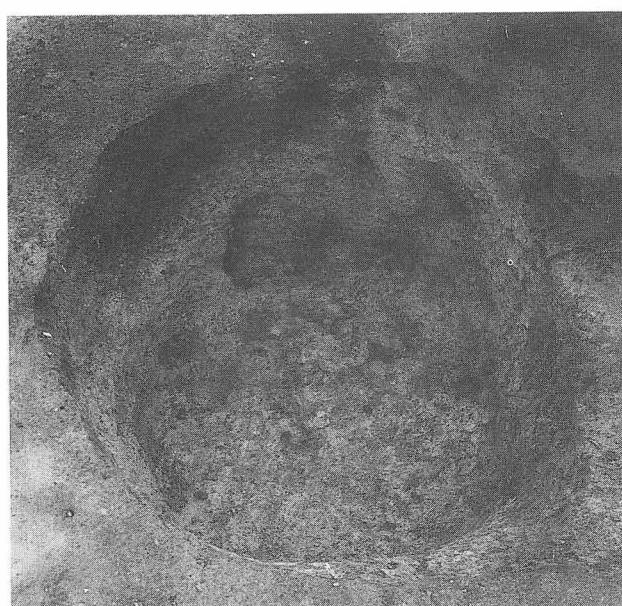
2 GP-3 覆土の堆積状態



3 GP-3 の完掘



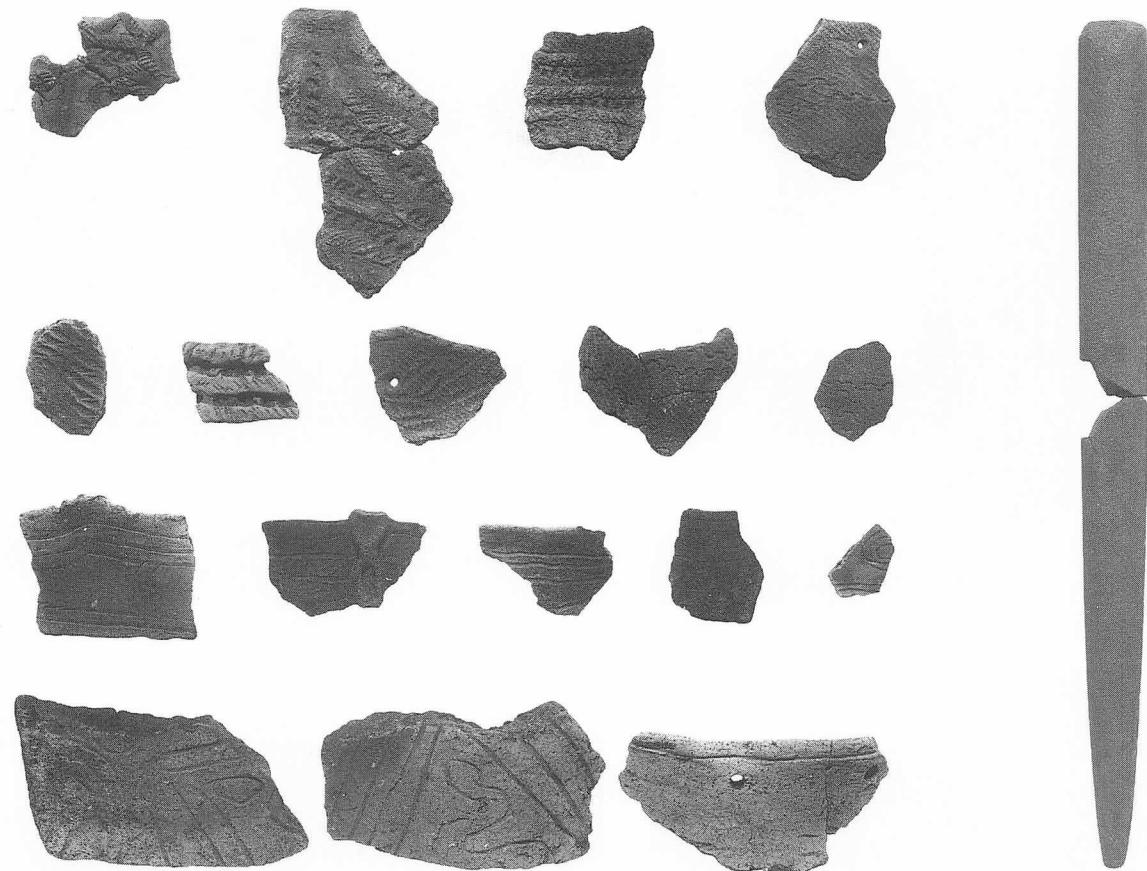
4 GP-34 遺物出土状況



5 GP-29 の完掘



6 盛土地区遺物出土状況

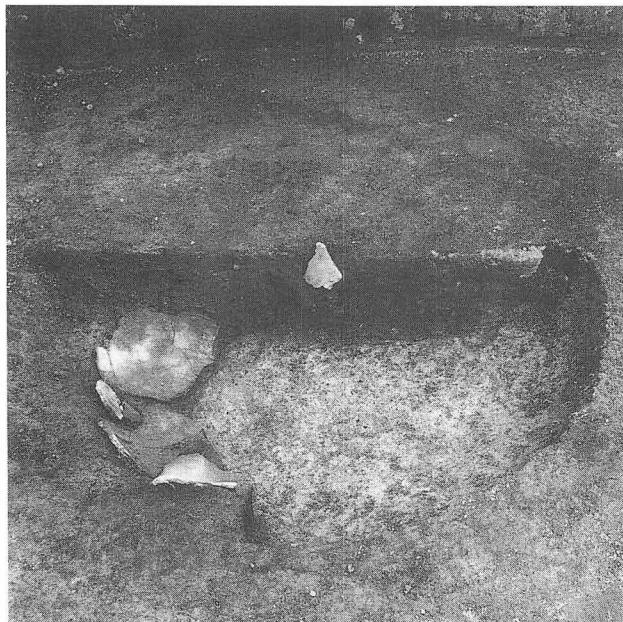


1

2



3



4

- 1 GP-6 出土の土器
- 2 GP-34・GSP-2 出土の石刀
- 3 GP-9 出土のⅢ群 B₂ 類土器
- 4 GP-9 遺物出土状況



1 II群 B₂ 類土器



2 III群 A₂ 類土器



3 III群 A₂ 類土器



4 III群 A₂ 類土器



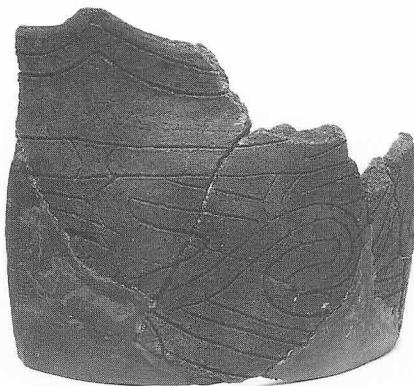
5 III群 A₃ 類土器



1 IV群A類（盛土1類）土器



2 IV群A類（盛土4類）土器



3 IV群A類（盛土1類）土器



4 IV群A類（盛土2類）土器



5 IV群A類（盛土3類）土器



6 IV群A類（盛土3類）土器



1 IV群A類（盛土4類）土器



2 IV群A類（盛土5類）土器



3 V群B類土器



4 V群B類土器



5 V群B類土器



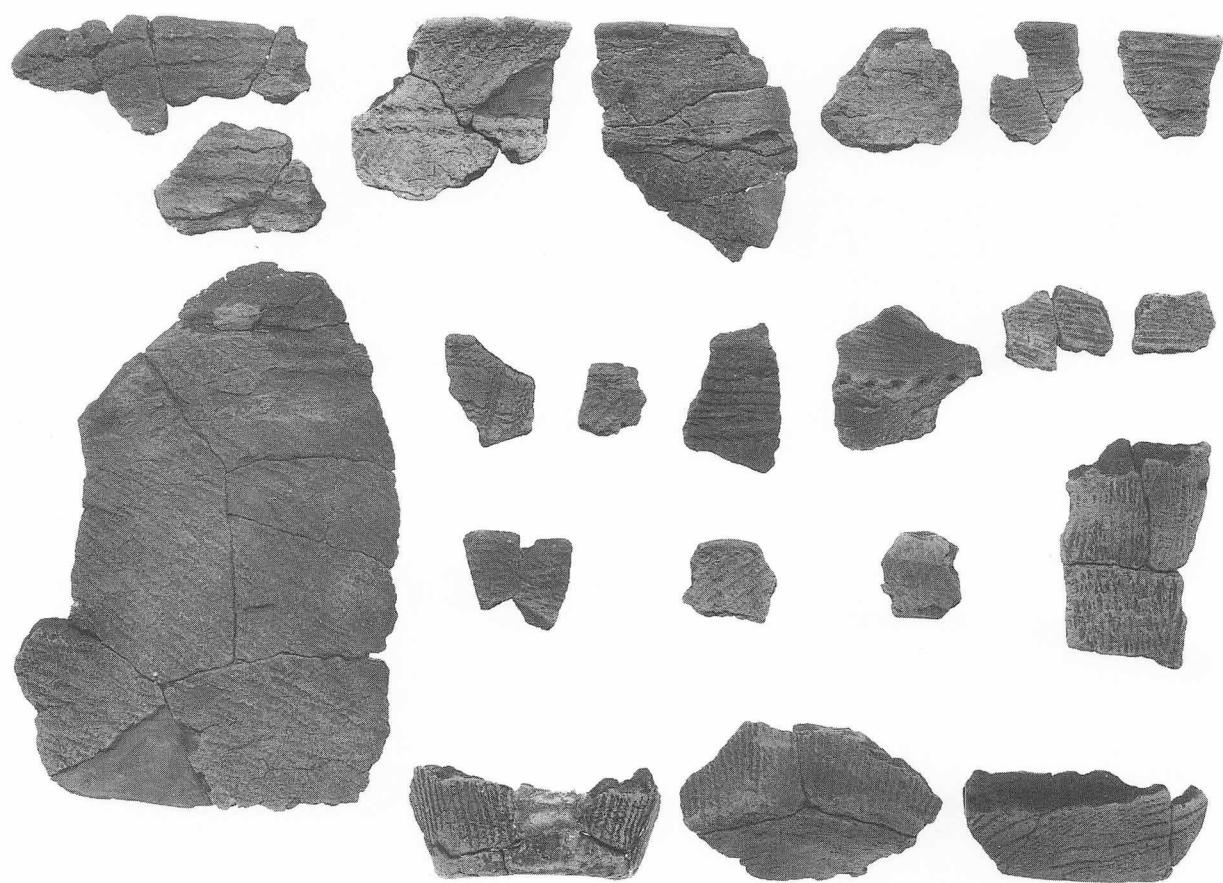
6 V群C類土器



1 V群C類土器



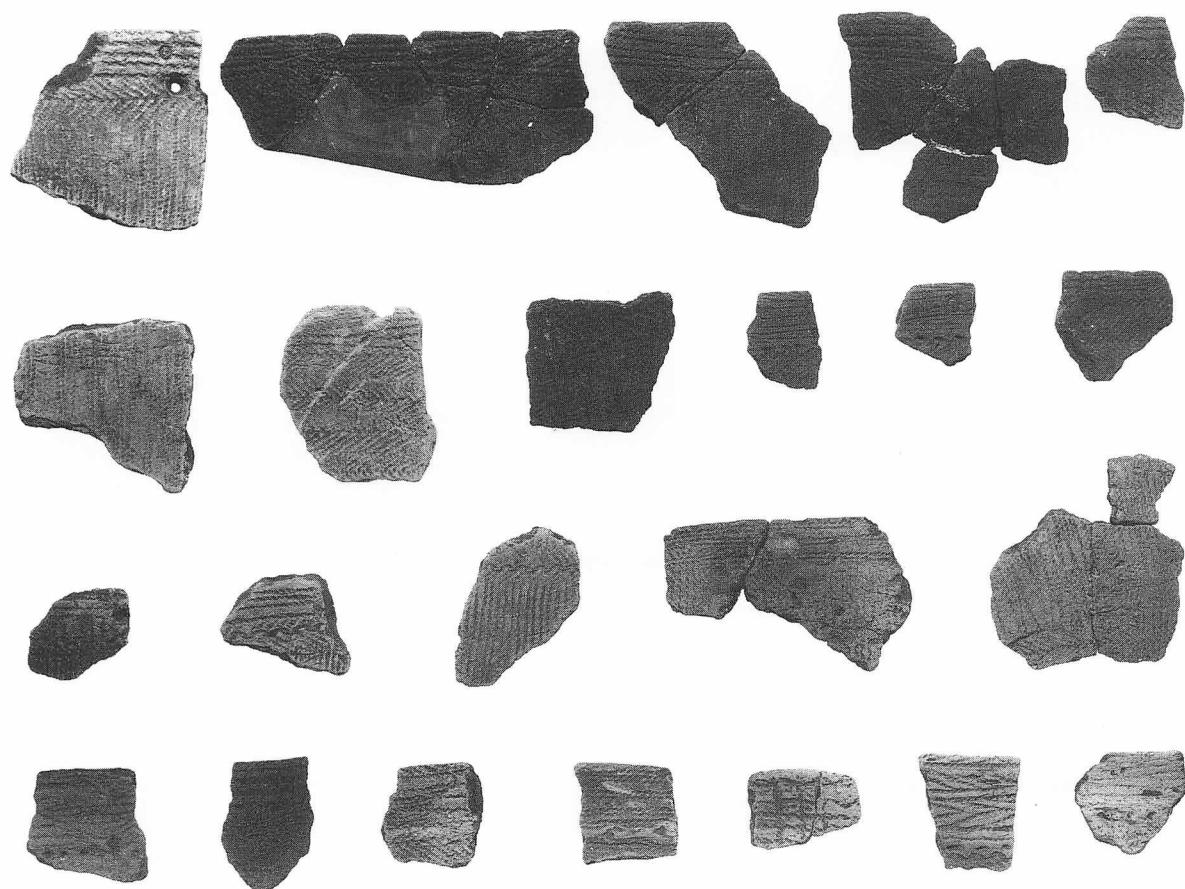
2 V群B類土器



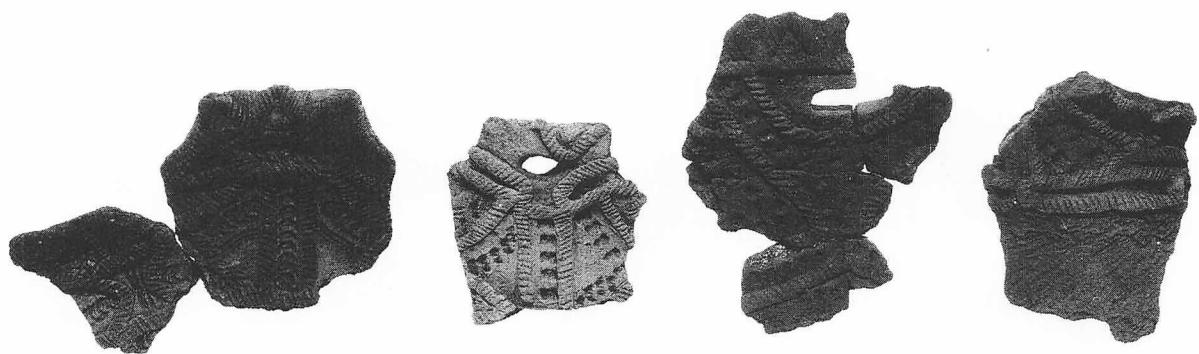
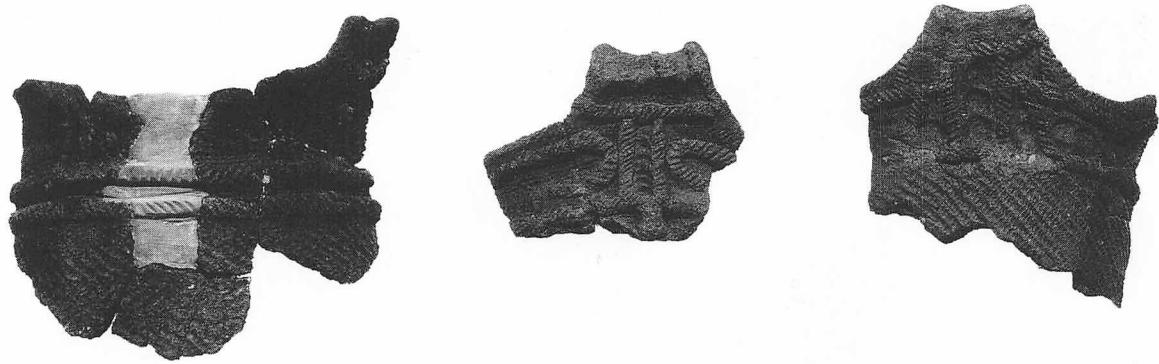
3 II群B類土器(1)



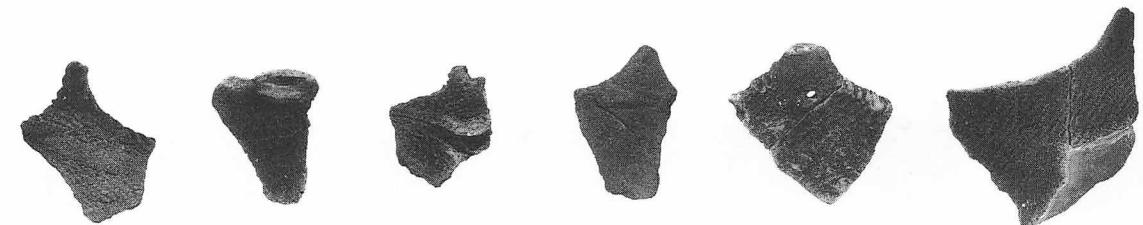
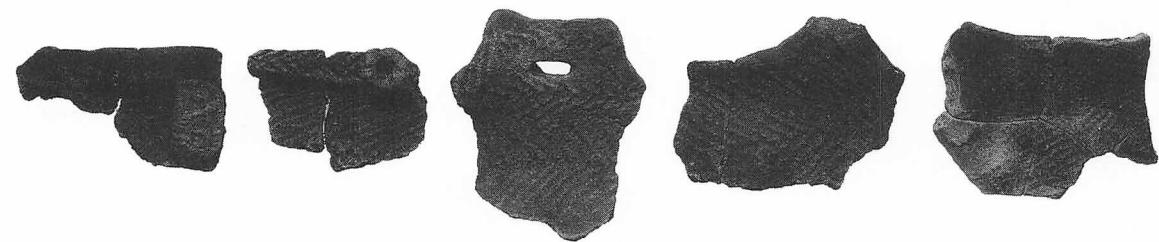
1 II群B類土器(2)



2 II群B類土器(3)



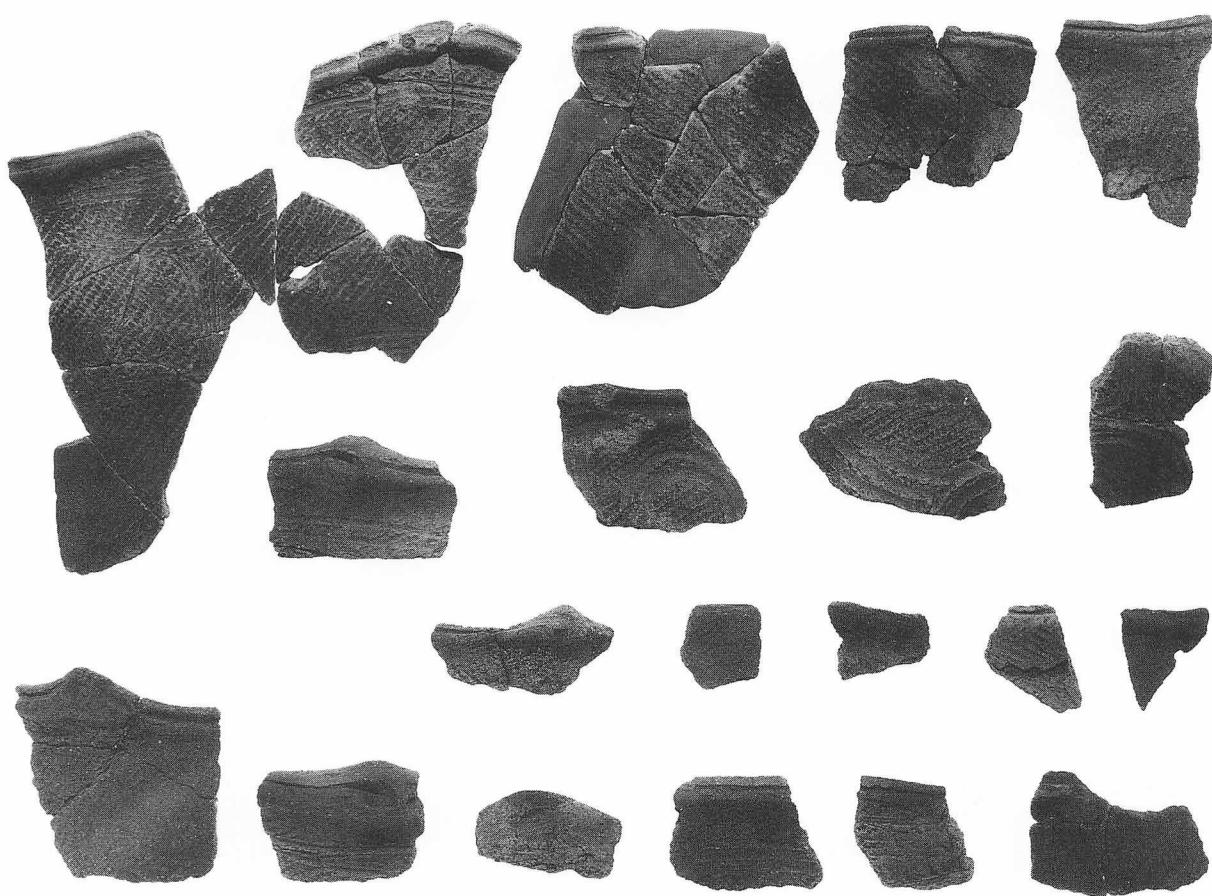
1 III群A類土器(1)



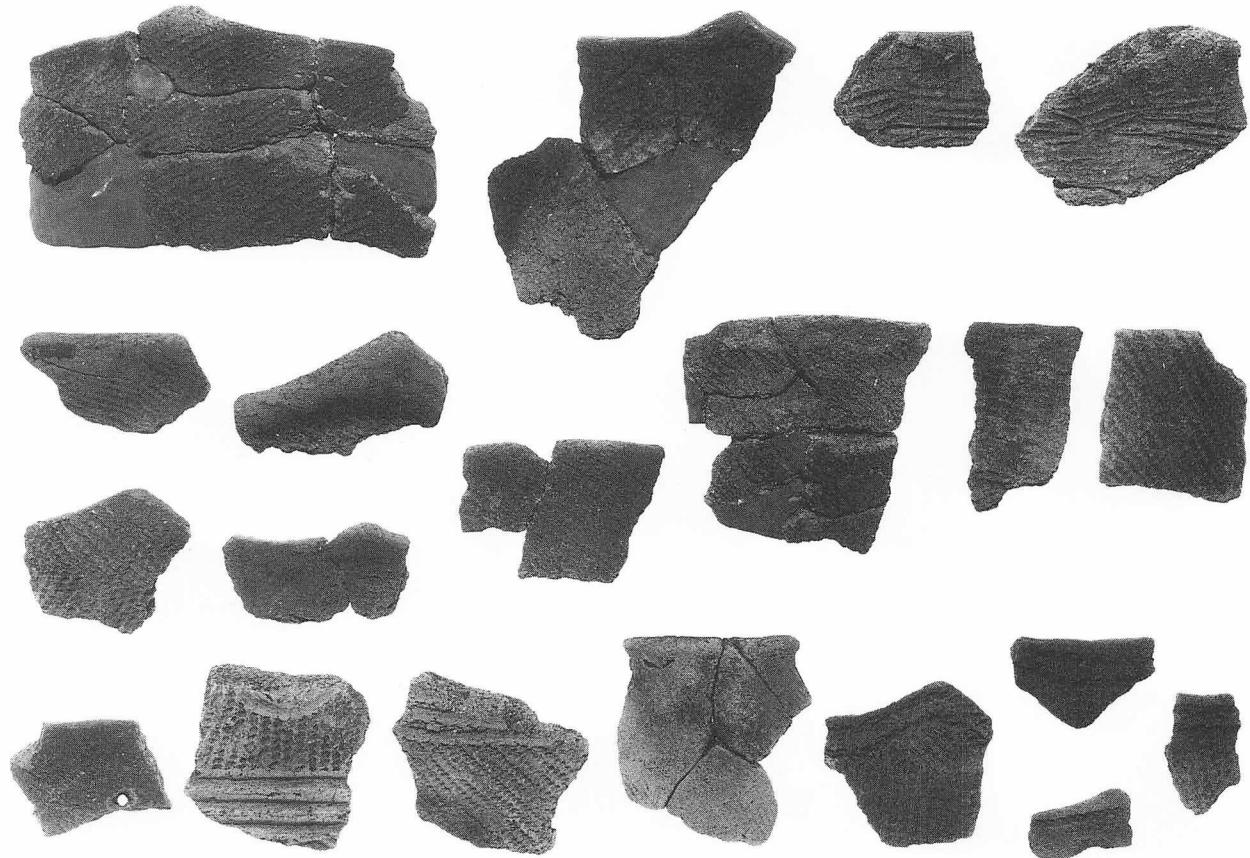
2 III群A類土器(2)



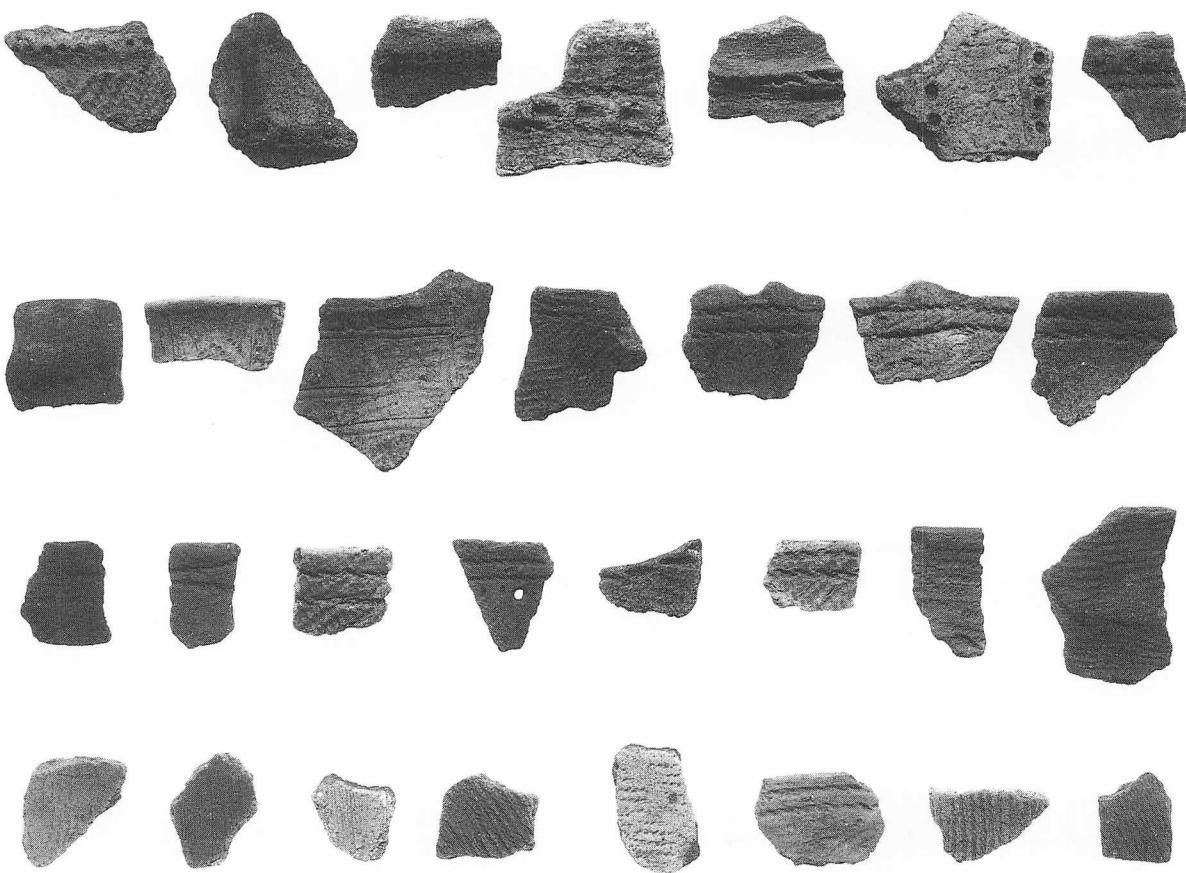
1 III群A類土器(3)



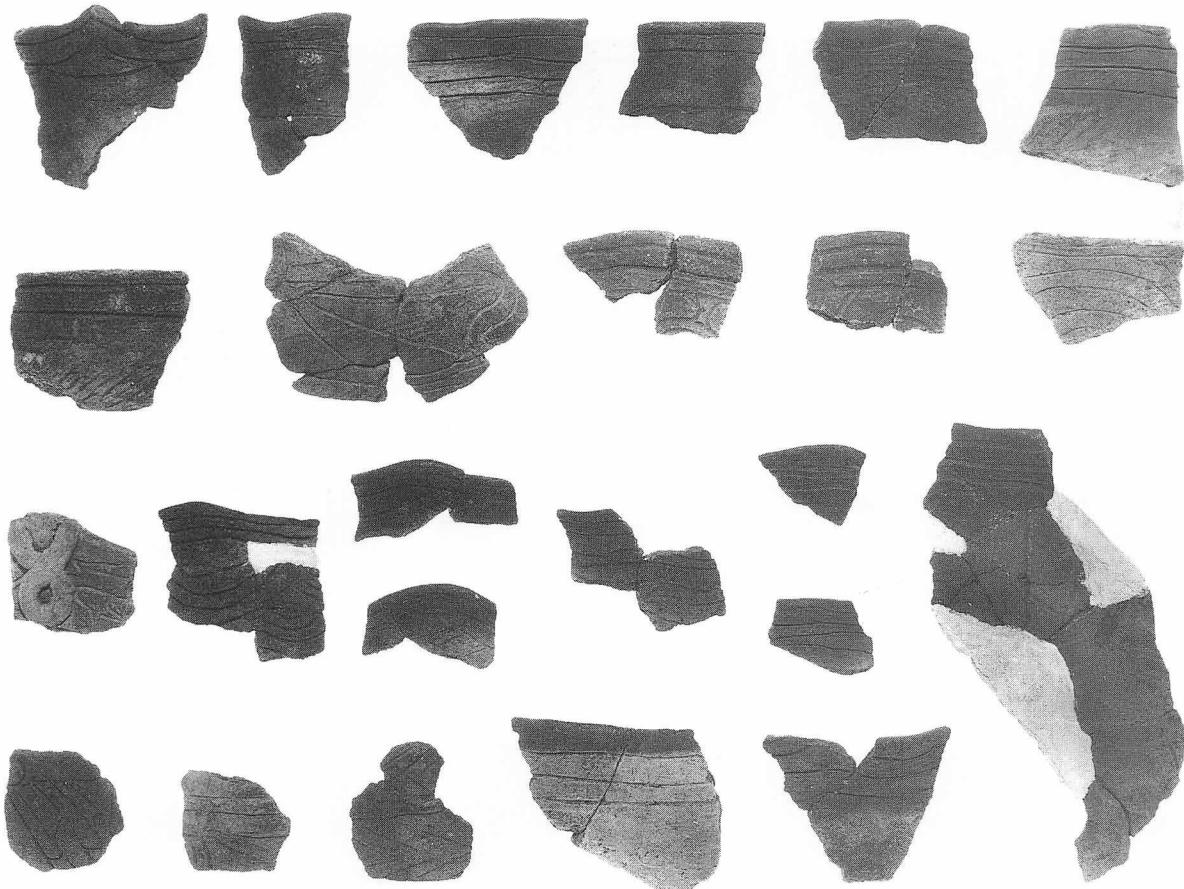
2 III群B類土器(1)



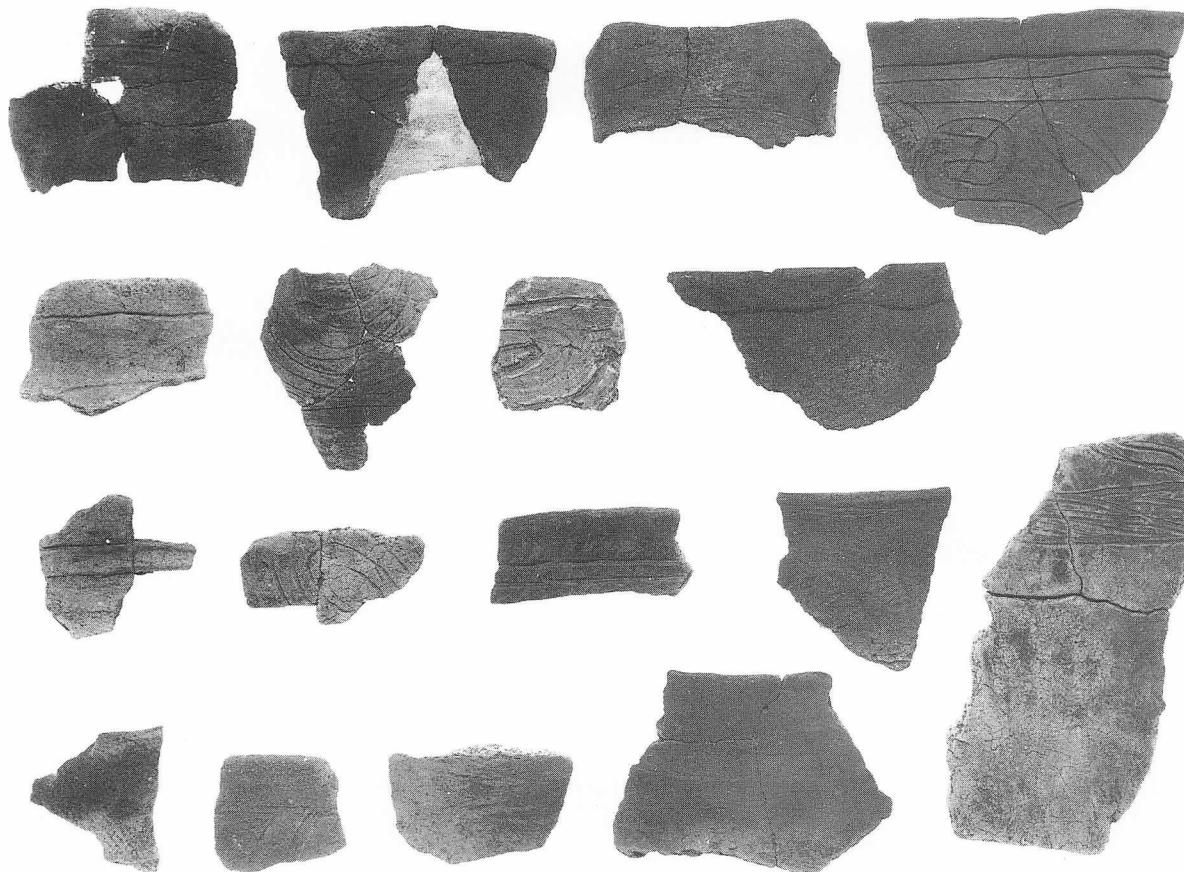
1 III群B類土器(2)



2 III群B類土器(3)



1 IV群A類（盛土1類）土器 集中区I(1)



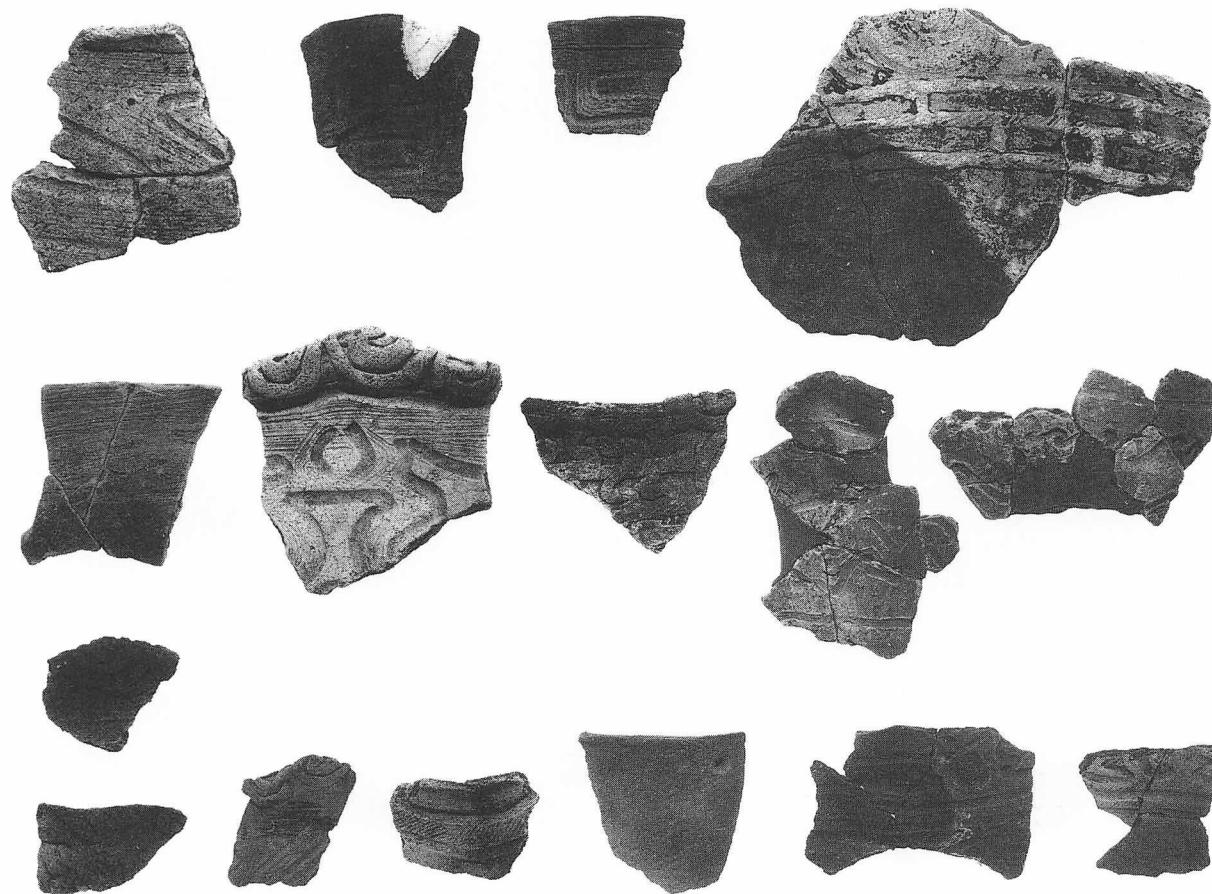
2 IV群A類（盛土1類）土器 集中区I(2)



1 IV群A類（盛土1類）土器 集中区II(1)



2 IV群A類（盛土1類）土器 集中区II(2)



1 IV群A類（盛土2類）土器 集中区II(3)



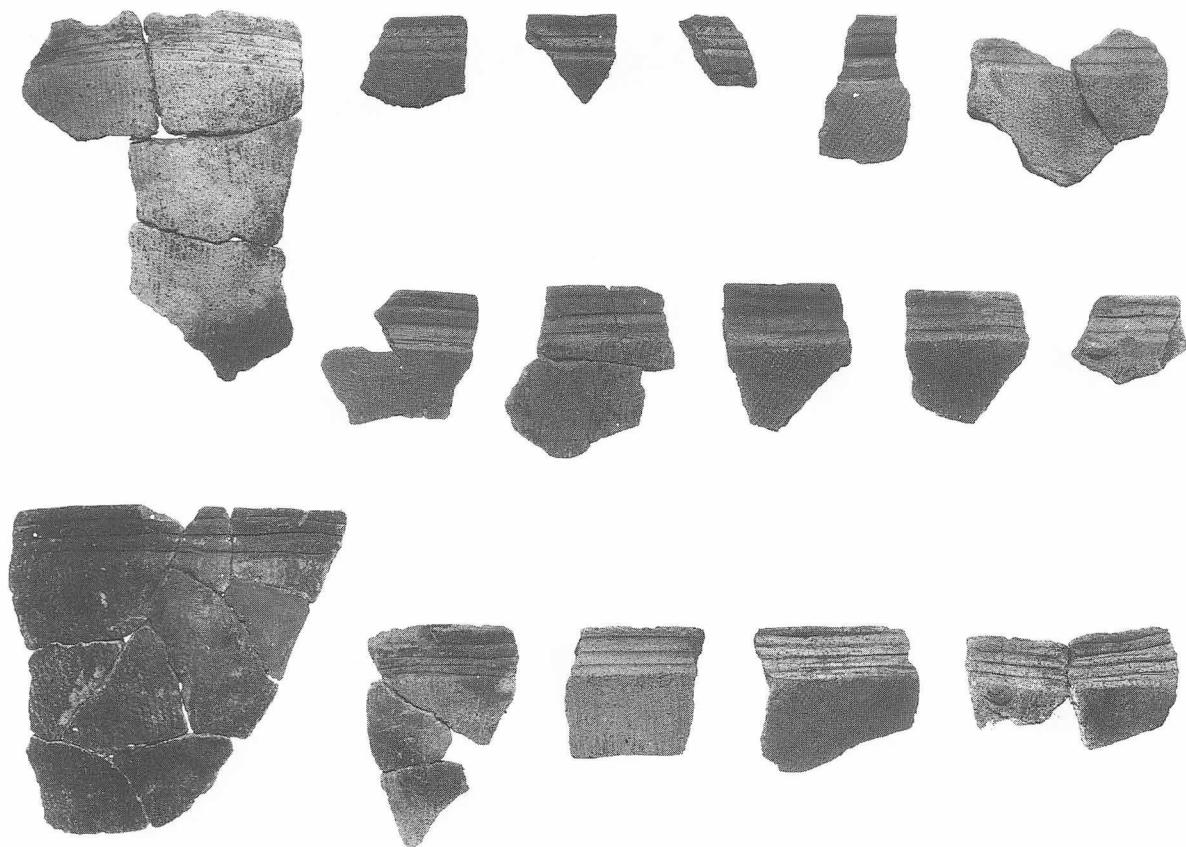
2 IV群A類（盛土2・3類）土器 集中区II(4)



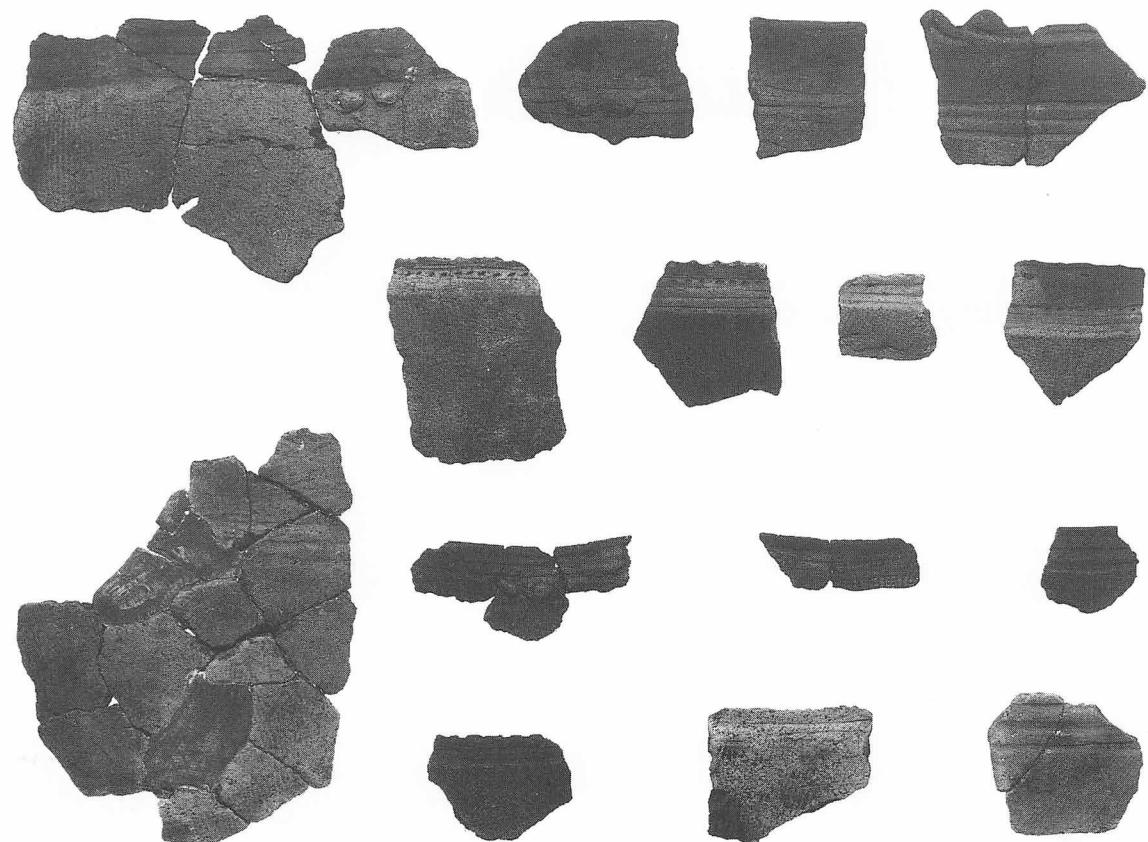
1 IV群A類（盛土2・3・4類）土器 集中区II(5)



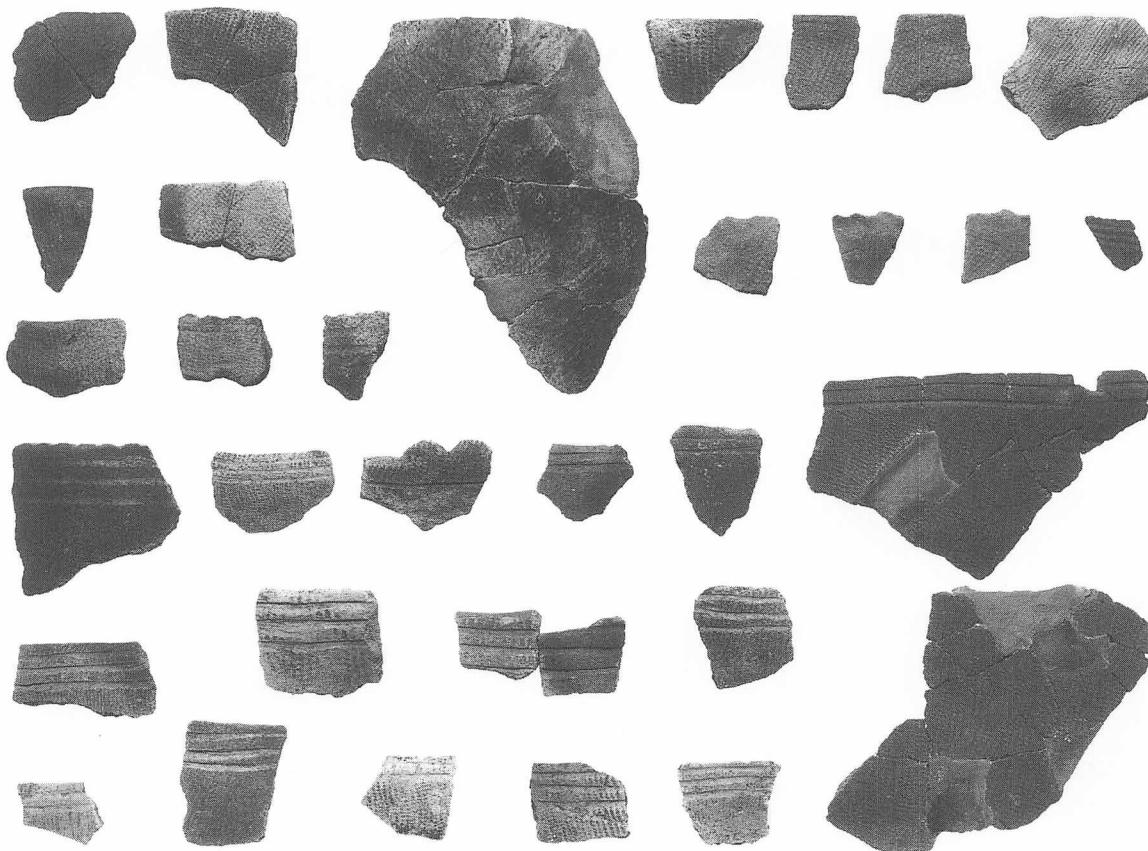
2 IV群A類（盛土5類ほか）土器 集中区II(6)



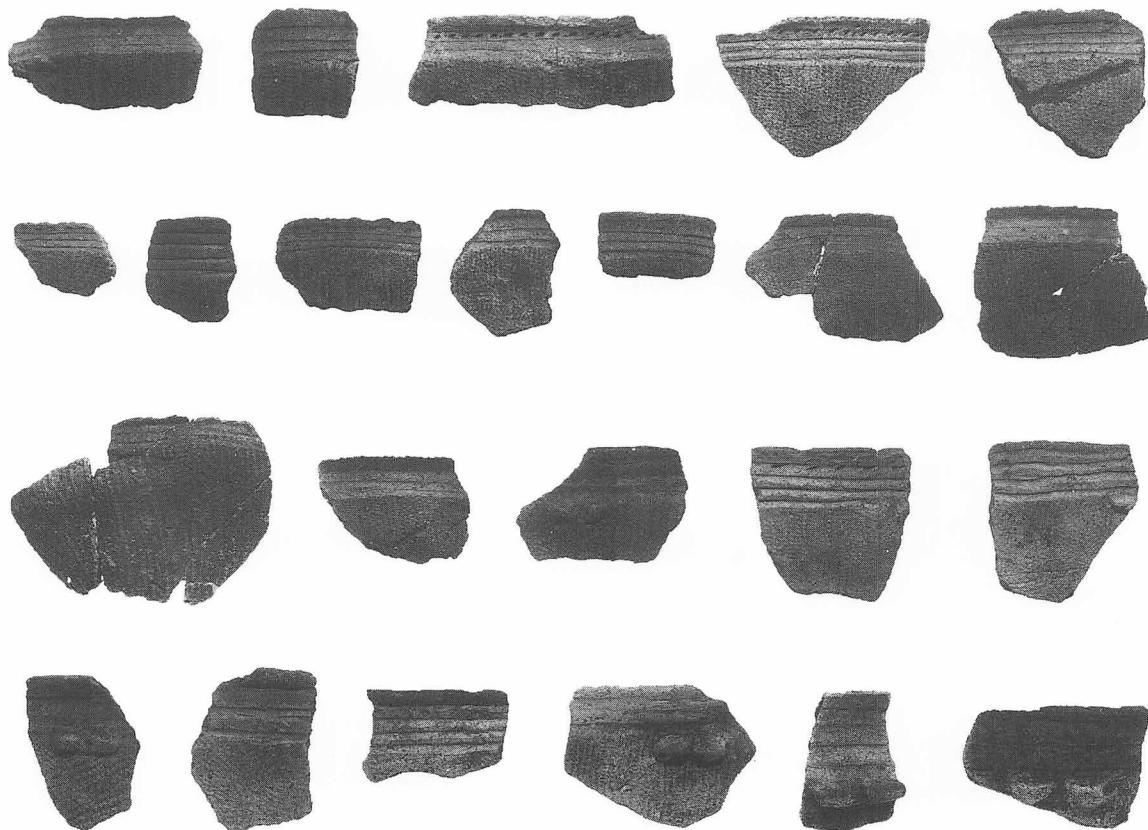
1 V群土器(1) 深鉢形土器



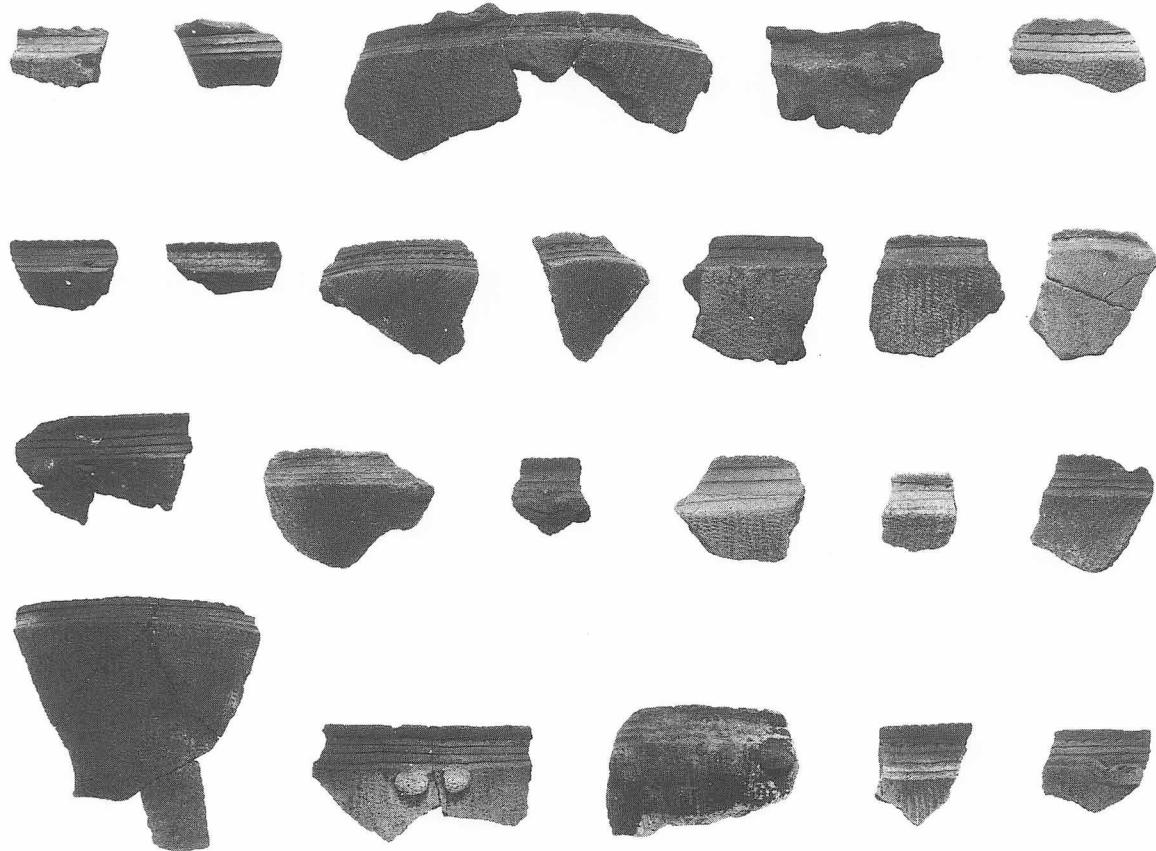
2 V群土器(2) 深鉢形土器



1 V群土器(3) 鉢形土器



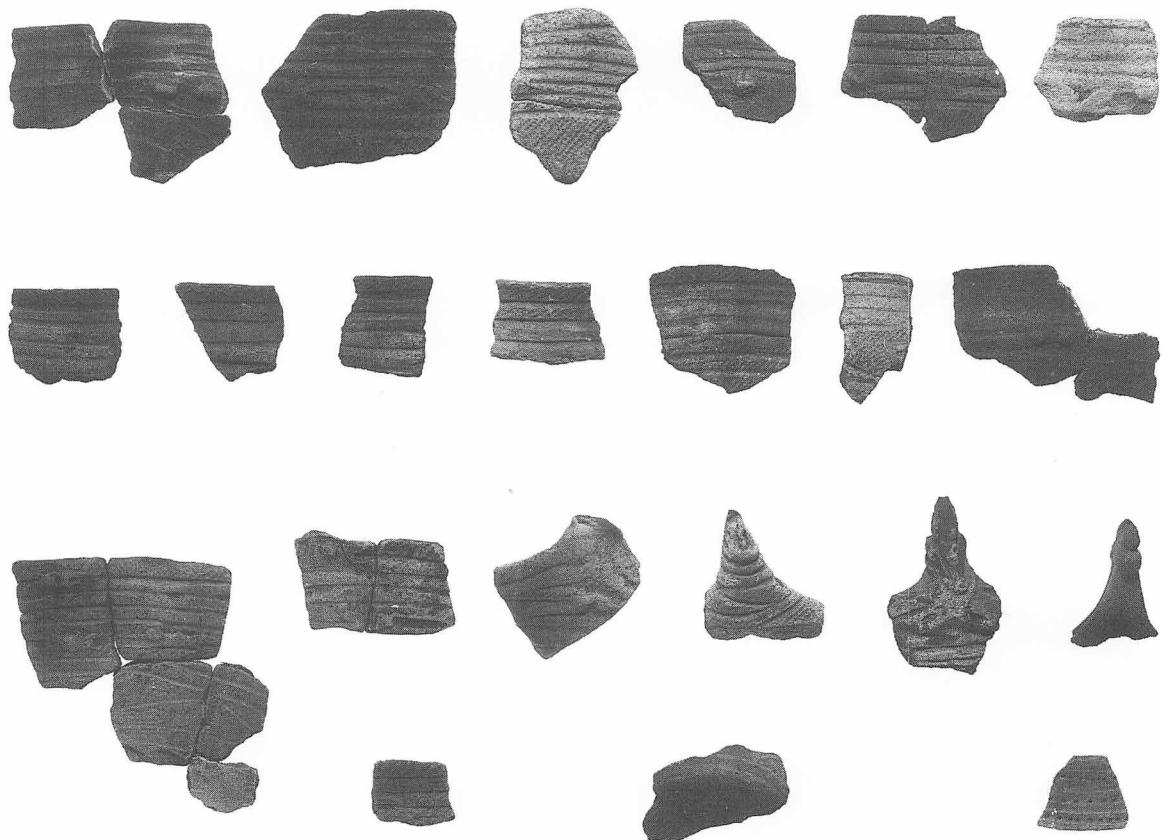
2 V群土器(4) 鉢形土器



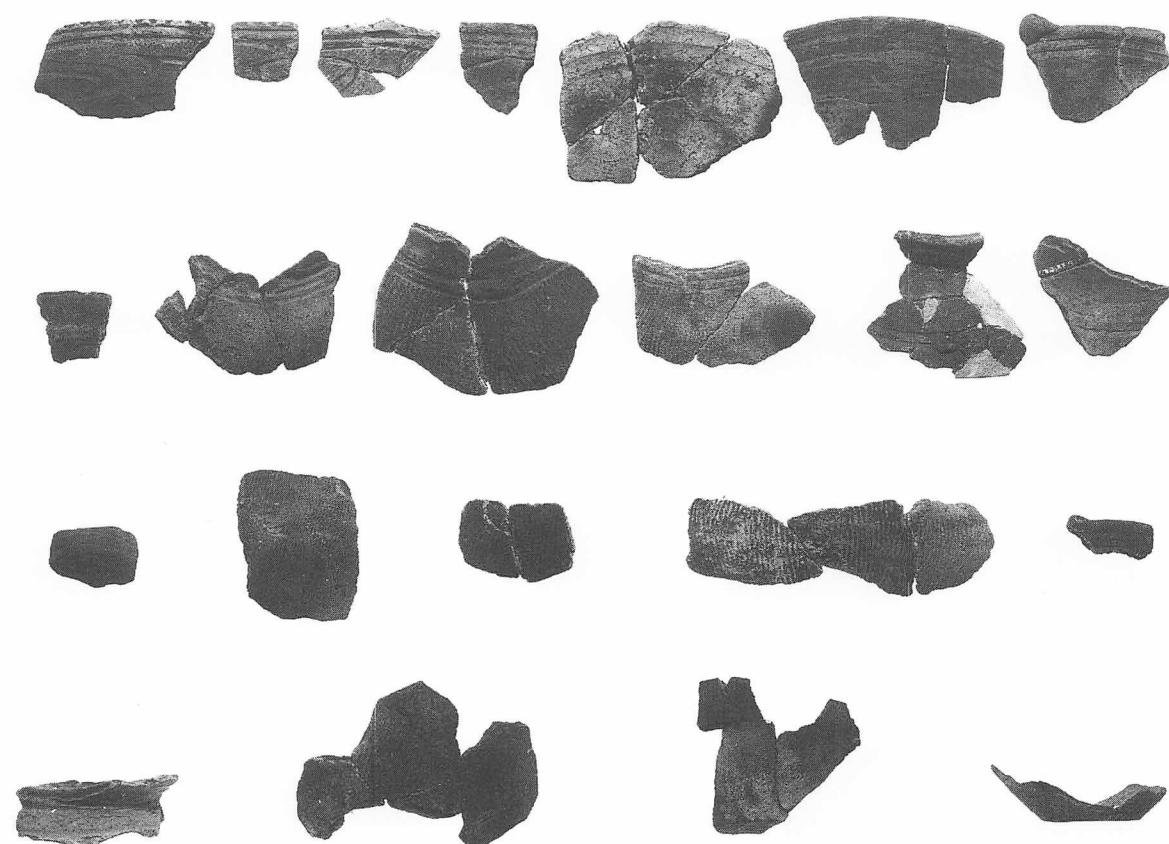
1 V群土器(5) 鉢形土器



2 V群土器(6) 鉢形土器



1 V群土器(7) 鉢・深鉢形土器



2 V群土器(8) 皿形・壺形土形

(財) 北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第52集

木古内町 新道4遺跡

—津軽海峡線(北海道方)建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書(5)—

昭和63年3月31日 発行

編集・発行 財団法人北海道埋蔵文化財センター

〒064 札幌市中央区南26条西11丁目

TEL (011) 561-3131

印 刷 高 速 印 刷 セ ン タ 一

〒006 札幌市西区曙2条5丁目2-48

TEL (011) 683-2231

